中越（なかこし）遺跡

発掘調査報告書

1990

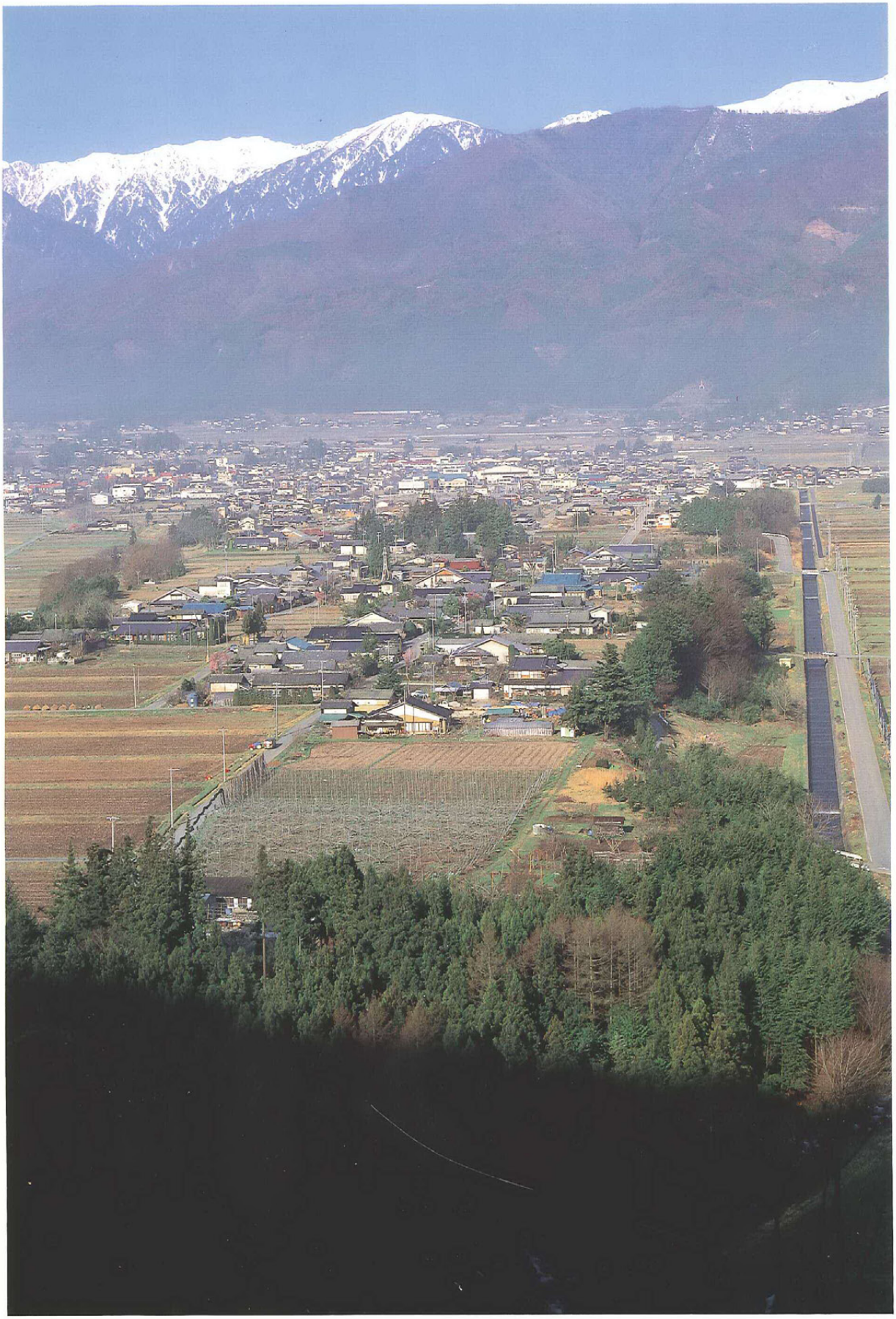
宮田村教育委員会

中越（なかこし）遺跡

発掘調査報告書

1990

宮田村教育委員会



13

1 号住居址出土土器

1

107号住居址出土土器

2

107号住居址出土土器

1、6号住居址　75、40号住居址　16、79号住居址出土土器

104号住居址出土岩偶・石器セット

石匙各種

序

中越遺跡は、大正末年に鳥居龍蔵・八幡一郎両氏により「先史及原史時代の上伊那」に紹介されて以来、縄文時代の大遺跡として広く知られ、後に編年研究の進展によって、その資料は、縄文時代中期に位置づけられて来ました。ところが、昭和20年代末に、縄文時代前期の遺物の出土する地点が確認されて再び注目を集め、その内容を明らかにするための発掘調査が昭和31年に実施されました。熱意あふれる地元研究者による、本村では初めての組織的な発掘調査でした。

その後、昭和40年代に入り、遺跡内に住宅が建ち始め、それにより遺跡が破壊されることを恐れた宮田村教育委員会は、昭和43年と44年に大規模な発掘調査を実施しました。その結果、50軒を超える縄文時代前期初頭から中葉の大集落址の存在を明らかにし得たわけですが、遺憾ながらこれ等の調査の正式報告書は、諸般の事情により未刊のまま今日にいたってしまいました。中越遺跡が、中部高地における縄文時代前期初頭の標式遺跡とされ、昭和31年の調査で１号住居址から出土した尖底土器をもって「中越式」との型式名が設定されながら、調査結果が報告書という形では公表されてこなかったわけで、その点を指摘する声が各方面から聞かれる事態となり、調査を企画した側として、焦燥を感じつづけていたのも偽らざるところでした。一方、昭和50年代初めから遺跡を含む一帯に土地区画整理事業が策定され、並行して遺跡保存の方途として国史跡指定も論議されるようになり、その大前提である報告書の刊行が、重ねて望まれていたのであります。

ここに、ようやくその報告書の刊行をみるにいたったわけですが、調査をお願いした諸先生にはすでに故人となられた方も多く、また調査結果そのものにも年月を経て風化してしまった点が多多あり、その点も遺憾とする次第であります。ただ、この間に実施された範囲確認調査や個人住宅建設に伴う調査の結果を含め、昭和31年の第１次調査から昭和59年の第14次調査までの全てを本書に盛り込むことにより、遺跡の全体像をより正確に示すことができたのは、予定になかった成果といえましょう。

報告書刊行の遅れたことをお詫びすると共に、本書が、「中越式土器」を理解する上での基礎資料となり、さらには中越遺跡の国史跡指定に資するものとなるならば、望外の幸せと思います。

1990年３月31日

長野県上伊那郡宮田村教育委員会

教育長　　林　　金茂

発刊によせて

日本列島における人類の歴史は旧石器時代文化にはじまり、10万年をはるかに越える古さに溯る。やがて約１万年前、ちょうど寒冷な氷河時代が終り、地球が温暖な気候に方向転換しはじめた頃に合わせるかのように、世界各地で技術的、文化的な新しい動きが次々に興った。いわば人類史における最初の一大革命であり、日本列島もこのうねりに乗じて旧石器文化から縄文文化へと大きく発展をとげたのである。つまり、土器作りの開始、弓矢の使用、犬の飼育あるいは丸木舟による外洋航海などを加えて、独特な縄文文化が形成されていったのである。

とくに、土器の製作使用は縄文文化の重要な基礎となった。煮炊き料理の普及によって、食生活は安定し、もはや毎日の食物を求めて遊動する必要がなくなり、それだけ安定的な村の営みを保障してくれたのである。土器自体の図体も長い道中を運搬するには厄介であり、定住生活を象徴するものでもあった。その一方で、長年月に亘って耐え得るだけの竪穴住居が掘られるようになり、石斧で切り倒した樹木を柱や桁梁に利用した。それだけ住居の建設には手間暇かかるものとなったが、旧石器時代の遊動生活とは異なって半永久的な住居であり、労力と時間の投資に充分見合うものであった。こうして住環境が整えられると、ますます腰を据えてその土地の地理や植物や動物あるいは気候に適応した各々の生活様式が確立していった。オラがクニの自らなる形成であり、オクニコトバが交された。

縄文土器には、そうした土地柄が写し出されている。土地毎に歌い継がれる民謡のように、一定の地域に連帯する縄文人集団の共通の意識が土器様式として土器のかたちや文様に表現されているのである。伊那谷の縄文時代では、とくに前期の中越式土器様式や中期の唐草文土器様式などの独自な様式を発達させており、断固としてその主体性を主張していた。

中越遺跡は、いわば中越式を学界に知らしめた由来地であり、標式遺跡である。その名に違わず、膨大な量の土器が発見され、その全貌を現わすとともに、自らの独自性を明らかにした。まず第一に、器面に文様を施さず、無地のままに仕上げる点に特色をもつ。そこには、東日本一帯における羽状縄文で器面を飾るという流儀に左右されず、むしろはっきりと対抗した強い意志がある。第二に、中越式土器様式は、丸底形態の深鉢を主体としながらも、浅鉢風の類や壺まで保有する点が注目される。とにかく、深鉢以外の形態がその頃の他地域の土器様式には殆んどみられなかったのである。まさに、中越式の個性的特色というにとどまらず、縄文土器全体の歴史の中において、最も先進的であったことを示しているのである。伊那谷縄文文化の面目躍如たるものがある。

中越式土器様式は、伊那谷から諏訪方面に亘って行われたが、中越遺跡はその当時にあって、最も中心的な村であったと考えられる。遺跡に残された105軒以上の竪穴住居は、少なくとも三世代に亘って幾度となく建て替えられ、拡張された歴史を物語り、その安定した村の繁栄ぶりが窺われる。

このたびの本報告書の出版は、縄文時代に伊那谷あり、そして宮田村に中越遺跡ありきを世に問うものである。昭和31年以来昭和59年までの14次にわたる発掘調査が積み重ねられて来たことを知るとき、改めて宮田村と宮田村教育委員会の地道な努力に敬意を表するものである。

1990年３月31日

国学院大学教授　　小林　達雄

例　言

1　本書は、昭和31年11月に始められた第１次調査以降、昭和59年７月の第14次調査にいたるまでの、中越遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査結果の一部は、これまでに概報の形で発表されたり、「上伊那誌」や「宮田村誌」の中に資料として紹介されてもいるが、数字等に相違点がある。本書を作成するにあたり、遺物はすべて再整理しており、一読して頂ければわかるように記録には風化してしまった部分もあるのだが、これをもって正式な調査報告としたい。基本的には発掘調査の結果を公開することに重点をおいてある。

3　遺物や調査資料は何回か整理が試みられてきた。いずれもそれぞれの調査にかかわった人々によるものであり、特に、第４次調査までは、遺構図が友野良一によって整理され、遺物が遮那藤麻呂を中心として復元、実測、図化された経過があり、第５次調査以降第９次調査までは、丸山やよい等によって現場実測図などの資料が系統的に整理されてもいる。その成果の上に本書は成り立っているわけだが、それ等の作業経過を本書に記録することはできなかった。また、1970年の長野県考古学会主催のシンポジウム「中越遺跡をめぐる諸問題」にあたり整理され、発表された調査結果や、今日まで受けた各方面からの御教示も、多くが本書に生かされたとは言い難い。

4　発掘調査が、報告書の形で保存・公開することを目的として実施されるものである以上、本来ならば本書は、発掘に尽力して頂いた方の総意でまとめられるべきなのだが、あらためてそれをすることは、多大な労力と時間を強いるものであり、時間的制約と、特に第４次調査までは、そのような方策をとってもなお不明な部分が残ると判断し、村教育委員会が主体となり、調査者の意見をまとめる形で作業を進めてきた。

5　本書の構成については、編集者の案を、調査にたずさわった主要な方々にはかり決定した。また内容についてもそこで検討されているが、最終的責任は編者にある。

6　報告書は以下のようにして作成された。

(1)　本文の執筆は、遺構部分を本田秀明（第２章第１節）、樋口昇一（第２章第２節）、赤羽義洋（第２章第３・４節）、友野良一（第２章第７～11節）にお願いし、他は小池孝がとりまとめた。樋口、友野の校閲を経ている。なお、第２章第12節は「中越遺跡第14次調査報告書」の中の「遺構と遺物」を一部小池が手を加えて再録したものであり、図もそのまま使用してある。

(2)　遺構図は宮田村総合福祉センターに保管されていた図をもとに小池が作図し、遺物実測図は土器・石器共に実測・トレスを小池がおこない、拓影図は小池の指導のもとに林美弥子、浦野美咲子が作成した。

(3)　写真図版は、遺物を木下平八郎が撮影・編集し、遺構は友野・木下が収集したものを小池が編集した。後者には、必要から状態の悪いものも掲載してある。

7　図や写真図版中の遺物の縮小率は以下のように統一し、縮小率は記載してない。一部統一しきれなかったところもある。また、完形土器の写真は任意に縮めてある。

遺構図―住居址実測図と遺物出土状態図…1/60、土壙・集石・集礫遺構実測図…1/40か1/20

遺物実測図―土器…¼、土器拓影…⅓、石鏃など…⅔、打製石斧・叩石など…¼、石皿…⅙、土製品・ミニチュア土器…½

写真図版―土器片…½、石鏃など⅔、打製石斧・叩石など…⅓、土製品…1/1

図中の遺物には、節ごとに土器と石器、土製品にわけて一連番号を付してあり、節を離れて組んだ写真図版中の遺物にも、それと同じ番号を付してある。

8　遺物の出土地点は、遺物に残されていた注記に従った。第３・４次調査で得た遺物の中には注記に統一性を欠くものがあり、結果として判読した部分がある。

9　報告書作成にあたり、遺物整理の段階で、林美弥子、田中浩征、下平博行、浜田琢也、宮下有希（以上宮田村）、新井健、建石紀美子（以上伊那市）、横田愛子（飯島町）各氏の協力を得た。また、出土石器の石質について平出考古博物館鳥羽嘉彦学芸員に御教示頂き、遺跡付近の地質について赤穂中学校寺平宏教諭にその研究結果に依ることを快諾頂いた。記して感謝したい。

10　付章を設け、林茂樹氏に中越遺跡保存運動について、まとめて頂いた。

11　本書の編集は、小池孝があたり、友野良一が総括した。

12　出土遺物と調査記録、実測図類は、宮田村教育委員会が保管している。

中越遺跡発掘調査報告書目次

序

発刊によせて

例言

第１章　遺跡の概観と調査の経過 …… 1

第１節　遺跡の立地と範囲 …… 1

Ⅰ．自然環境 …… 1

Ⅱ．地質・土層 …… 4

Ⅲ．歴史的環境 …… 7

Ⅳ．時期区分と広がり …… 9

第２節　遺物の分類 …… 10

Ⅰ．土　器 …… 10

Ⅱ．石　器 …… 15

第３節　発掘調査と報告書作成の経過 …… 17

Ⅰ．調査の経果 …… 17

Ⅱ．報告書作成の経過 …… 18

Ⅲ．地区設定 …… 18

第２章　発掘調査名説 …… 19

第１節　第１・２次調査 …… 21

Ⅰ．調査の経過 …… 21

Ⅱ．遺構と遺物 …… 23

１）１号住居址　２）２号住居址　３）３号住居址　４）４号住居址　５）５号住居址

６）遺構に伴わない遺物

第２節　第３・４次調査 …… 46

Ⅰ．調査の経過 …… 46

Ⅱ．遺構と遺物 …… 48

1．住居址 …… 48
1）6号住居址　2）7号住居址　3）8号住居址　4）9・31号住居址　5）10号住居址
6）11・27・28号住居址　7）12号住居址　8）13号住居址　9）14・23号住居址　10）15号住居址
11）16号住居址　12）17・49号住居址　13）18・32・33号住居址　14）19号住居址　15）20号住居址
16）21号住居址　17）22号住居址　18）24号住居址　19）25・26号住居址　20）29号住居址
21）30号住居址　22）34号住居址　23）35号住居址　24）36号住居址　25）37号住居址
26）38号住居址　27）39号住居址　28）40・41・45・46号住居址　29）42号住居址　30）44号住居址
31）47・48号住居址　32）50・51・52号住居址
2．竪　穴 …… 71
1）イ号竪穴　2）ロ号竪穴
第3節　第5次調査 …… 172
Ⅰ．調査の経過 …… 172
Ⅱ．遺構と遺物 …… 173
1．住居址 …… 173
1）53・54号住居址　2）55号住居址　3）56号住居址
2．土　壙 …… 178
第4節　第6次調査 …… 190
Ⅰ．はじめに …… 190
Ⅱ．役場庁舎予定地の調査 …… 190
1．調査の経過 …… 190
2．遺構と遺物 …… 193
1）57号住居址
Ⅲ．第3地区の調査 …… 199
1．調査の経過 …… 199
2．遺　構 …… 200
1）1号遺構　2）2号遺構　3）3号遺構　4）4号遺構　5）5号遺構　6）6号遺構
7）7号遺構　8）8号遺構　9）9号遺構　10）10号遺構　11）11号遺構　12）12号遺構
13）13号遺構　14）14号遺構　15）15号遺構　16）16号遺構　17）17号遺構　18）18号遺構
19）19号遺構　20）20号遺構　21）21号遺構　22）22号遺構　23）23号遺構　24）24号遺構
25）25号遺構　26）26号遺構　27）27号遺構　28）28号遺構　29）29号遺構　30）30号遺構
31）31号遺構　32）32号遺構　33）33号遺構　34）34号遺構　35）35号遺構　36土壙およびピット
3．遺　物 …… 209
1）縄文中期　2）縄文後期
4．遺構の所属時期と変遷 …… 211

第５節　第７次調査 …… 228
Ⅰ．調査の経過 …… 228
Ⅱ．遺構と遺物言 …… 229
1）43号住居址　2）58号住居址　3）59号住居址
第６節　第８次調査 …… 235
Ⅰ．調査の経過 …… 235
Ⅱ．遺構と遺物 …… 235
1）１号土壙　2）２号土壙　3）３号土壙とピット群　4）１・２号集石
第７節　第９次調査 …… 239
Ⅰ．調査の経過 …… 239
Ⅱ．遺構と遺物 …… 240
1）60号住居址　2）61号住居址　3）62号住居址　4）63・64号住居址
第８節　第10調査 …… 250
Ⅰ．調査の経過 …… 250
Ⅱ．遺構と遺物 …… 250
1．縄文前期の遺構と遺物 …… 250
2．縄文中期の遺構と遺物 …… 252
3．縄文後期の遺構と遺物 …… 253
4．弥生前期の遺構と遺物 …… 253
5．古墳時代以降の遺物 …… 253
6．時期不明の遺構 ……
第９節　第11次調査 …… 269
Ⅰ．調査の経過 …… 269
Ⅱ．遺構と遺物 …… 270
1）１号土壙　2）２号土壙　3）３号土壙　4）４号土壙と配石　5）遺構外出土石器
第10節　第12次調査 …… 272
Ⅰ．調査の経過 …… 272
Ⅱ．遺構と遺物 …… 273
1）１号貯蔵址　2）２号貯蔵址　3）１号土壙　4）遺構外の遺物
第11節　第13次調査 …… 277
Ⅰ．調査の経過 …… 277
Ⅱ．遺構と遺物 …… 278
1）97号住居址　2）土壙

第12節　第14次調査 …… 281
Ⅰ．調査の経過 …… 281
Ⅱ．遺構と遺物言 …… 281
1．住居址 …… 281
1）76号住居址　2）79号住居址　3）102号住居址　4）98号住居址　5）99号住居址
6）100号住居址　7）101・103号住居址　8）104号住居址　9）105号住居址
10）106号住居址　11）107号住居址
2．方形柱列 …… 290
第13節　採集品 …… 322
第３章　中越遺跡における諸問題 …… 323
第１節　遺構について …… 323
Ⅰ．縄文前期の住居址と方形柱列 …… 323
1．住居址 …… 323
2．方形柱列 …… 325
Ⅱ．縄文中期の土壙 …… 325
Ⅲ．縄文後期の集礫遺構群 …… 326
第２節　遺物について …… 327
Ⅰ．縄文前期の遺物 …… 327
1．Ⅰ期の土器 …… 327
(1)Ⅰ群土器の変遷　(2)Ⅲ群土器　(3)Ⅰ群土器成立の過程とその時期
2．Ⅱ期の土器 …… 330
(1)Ⅰ群土器　(2)Ⅲ群土器
3．Ⅰ期Ⅰ群G、Ⅱ期Ⅰ群DとⅡ群土器 …… 332
4．縄文前期の石器 …… 333
(1)石鏃　(2)石匙　(3)石錐　(4)打製石錘　(5)スクレパー　(6)打製石斧・横刃型
石器　(7)磨製石斧　(8)叩石　(9)礫端叩石　(10)石皿
5．縄文前期の遺物の出土状態の変化 …… 336
Ⅱ．縄文後期の遺物 …… 336
1．土器の変遷 …… 336
2．石器 …… 337

第3節　中越式土器と中越期の細分 …… 338
1．中越遺跡出土器研究の経過 …… 338
2．阿久遺跡出土のいわゆる「中越式土器」 …… 339
3．中越式土器 …… 339
4．中越期の再区分 …… 340

第4章　まとめ …… 341

付章　遺跡保護の経過と今後の課題 …… 343
第1節　遺跡保護施策の経過 …… 343
I．最初の学術発掘―昭和30年代 …… 343
II．記録保存事業の進展と遺跡の顕彰―昭和40年代― …… 343
1．記録保存事業の盛行 …… 343
2．中越遺跡の顕彰 …… 344
1)中越式土器　2)シンポジウム開催
III．開発への対応と遺跡保存運動の展開―昭和50年代― …… 345
1．開発事業への対応 …… 345
2．都市計画区画整理事業と遺跡範囲確認調査 …… 345
3．遺跡保存運動の展開と対応 …… 346
IV．発掘報告書作成と史跡指定への道のり―昭和60年代… 347
第2節　今後の課題 …… 348

表1．縄文前期の住居址一覧表 …… 349
表2．出土地別石器集計表 …… 350
表3．石器一覧表 …… 353

中越遺跡関係文献 …… 381
引用文献 …… 381

挿 図 目 次

図１　中越遺跡付近地形図（１：５万）……2
図２　中越遺跡付近地形図（１：１万）……3
図３　地質断面（図５－Ａ）……4
図４　宮田村周辺地域の地質……4
図５　宮田地域段丘面区分図……5
図６　中越面土層柱状図……6
図７　中越遺跡周辺の遺跡分布図……7
図８　Ⅰ期Ⅰ群土器分類模式図……10
図９　中越遺跡調査地点図…折込み……10・11
図10　座標軸設定模式図……20
図11　第１次調査トレンチ設定概念図……
図12　１・２次調査遺構全体図……23
図13　１号住居址出土土器拓影……24
図14　土製品実測図……25
図15　１・２号住居址出土土器実測図……28
図16　２号住居址出土土器実測図……29
図17　２号住居址出土土器実測図……30
図18　２号住居址出土土器実測図……31
図19　４・５号住居址、遺構外、中央グランド
　出土土器実測図……32
図20　２号住居址出土土器拓影……33
図21　２号住居址出土土器拓影……34
図22　２号住居址出土土器拓影……35
図23　２号住居址出土土器拓影……36
図24　２号住居址出土土器拓影……37
図25　２号住居址出土土器拓影……38
図26　２号住居址出土土器拓影……39
図27　２号住居址出土土器拓影……40
図28　トレンチ出土土器拓影……41
図29　トレンチ出土土器拓影……42
図30　５号住居址・第２次調査トレンチ出土、
　出土地点不明土器拓影……43
図31　１・２・４・５号住居址出土石器実測図……44
図32　５・１・２号住居址、第１次調査トレンチ
　出土石器実測図……45
図33　２・３・４号住居址、第１次調査トレンチ
　出土石器実測図……46
図34　第３・４次調査全体図…折込み……48・49
図35　６号住居址実測図……49
図36　７号住居址実測図……50
図37　８号住居址実測図……51
図38　９・30号住居址実測図……52
図39　31号住居址実測図……53
図40　10号住居址実測図……54
図41　10号住居址出土石器実測図……55
図42　11・27・28号住居址実測図……56
図43　12号住居址実測図……57
図44　13号住居址実測図……58
図45　14・23号住居址実測図……59
図46　15号住居址実測図……60
図47　16・29号住居址実測図……61
図48　17・49号住居址実測図……62
図49　18・32・33号住居址実測図……63
図50　22号住居址実測図……64
図51　24号住居址実測図……64
図52　25・26号住居址実測図……65
図53　34号住居址実測図……66
図54　35号住居址実測図……66
図55　37号住居址実測図……67
図56　38号住居址実測図……68
図57　39号住居址実測図……68
図58　44号住居址実測図……70
図59　47・48号住居址実測図……71
図60　イ号竪穴実測図……73
図61　口号竪穴実測図……73
図62　土製品実測図……73
図63　６号住居址出土土器実測図……74
図64　６号住居址出土土器実測図……75
図65　６・７・８・９号住居址出土土器実測図……76
図66　９・10号住居址出土土器実測図……77
図67　10・11・12号住居址出土土器実測図……78
図68　13・14・16・18号住居址出土土器実測図……79
図69　23・26号住居址出土土器実測図……80
図70　37号住居址出土土器実測図……81
図71　37号住居址出土土器実測図……82
図72　40・41・42・44号住居址出土土器実測図……83
図73　46・47号住居址出土土器実測図……84
図74　48・50号住居址、遺構外出土土器実測図……85
図75　６号住居址出土土器拓影……86
図76　６号住居址出土土器拓影……87

図77　6号住居址出土土器拓影……88
図78　7号住居址出土土器拓影……89
図79　8・9号住居址出土土器拓影……90
図80　9号住居址出土土器拓影……91
図81　9号住居址出土土器拓影……92
図82　10号住居址出土土器拓影……93
図83　10号住居址出土土器拓影……94
図84　11号住居址出土土器拓影……95
図85　11号住居址出土土器拓影……96
図86　12号住居址出土土器拓影……97
図87　12号住居址出土土器拓影……98
図88　13号住居址出土土器拓影……99
図89　13・14・23号住居址出土土器拓影…… 100
図90　14・23号住居址出土土器拓影…… 101
図91　14・23号住居址出土土器拓影…… 102
図92　14・23号住居址出土土器拓影…… 103
図93　14・23・15号住居址出土土器拓影…… 104
図94　16・17号住居址出土土器拓影…… 105
図95　17号住居址出土土器拓影…… 106
図96　17・18号住居址出土土器拓影…… 107
図97　18号住居址出土土器拓影…… 108
図98　33・19・20号住居址出土土器拓影…… 109
図99　21・22・24・34号住居址出土土器拓影…… 110
図100 35・36・37号住居址出土土器拓影…… 111
図101 38・39・40・42・44号住居址出土土器拓影…… 112
図102 47号住居址出土土器拓影…… 113
図103 48号住居址出土土器拓影…… 114
図104 48・50号住居址、ロ号竪穴出土土器拓影…… 115
図105 17トレンチ出土土器拓影…… 116
図106 17トレンチ出土土器拓影…… 117
図107 17トレンチ出土土器拓影…… 118
図108 17トレンチ出土土器拓影…… 119
図109 17トレンチ出土土器拓影…… 120
図110 6号住居址出土石器実測図…… 121
図111 6号住居址出土石器実測図…… 122
図112 6・7号住居址出土石器実測図…… 123
図113 7・8号住居址出土石器実測図…… 124
図114 8・9号住居址出土石器実測図…… 125
図115 9号住居址出土石器実測図…… 126
図116 9号住居址出土石器実測図…… 127
図117 9号住居址出土石器実測図…… 128
図118 10号住居址出土石器実測図…… 129
図119 10号住居址出土石器実測図…… 130
図120 10号住居址出土石器実測図…… 131
図121 11号住居址出土石器実測図…… 132
図122 11・12号住居址出土石器実測図…… 133
図123 12号住居址出土石器実測図…… 134
図124 12・13号住居址出土石器実測図…… 135
図125 13号住居址出土石器実測図…… 136
図126 14・23号住居址出土石器実測図…… 137
図127 14号住居址出土石器実測図…… 138
図128 14・17号住居址出土石器実測図…… 139
図129 17号住居址出土石器実測図…… 140
図130 17・18号住居址出土石器実測図…… 141
図131 18号住居址出土石器実測図…… 142
図132 19・23・24・35・37号住居址出土石器実測図…… 143
図133 37号住居址出土石器実測図…… 144
図134 37・38・42・47号住居址出土石器実測図…… 145
図135 47・48号住居址出土石器実測図…… 146
図136 48・50号住居址、17トレンチ出土石器実測図…… 147
図137 17トレンチ出土石器実測図…… 148
図138 17トレンチ出土石器実測図…… 149
図139 17トレンチ出土石器実測図…… 150
図140 17トレンチ出土石器実測図…… 151
図141 17トレンチ出土石器実測図…… 152
図142 17トレンチ出土石器実測図…… 153
図143 17トレンチ出土石器実測図…… 154
図144 6号住居址出土石器実測図…… 155
図145 7号8・9号住居址出土石器実測図…… 156
図146 9号住居址出土石器実測図…… 157
図147 10号住居址出土石器実測図…… 158
図148 10号住居址出土石器実測図…… 159
図149 11・12号住居址出土石器実測図…… 160
図150 12号住居址出土石器実測図…… 161
図151 13・14・23号住居址出土石器実測図…… 162
図152 14・23・15・16・17号住居址出土石器実測図…… 163
図153 17・18号住居址出土石器実測図…… 164
図154 18号住居址出土石器実測図…… 165
図155 18・23・24号住居址出土石器実測図…… 166
図156 26・31・34・35・36号住居址出土石器実測図…… 167

図157 37・41・42・44・45号住居址出土石器実測図…… 168
図158 45・47・48号住居址出土石器実測図…… 169
図159 48号住居址、トレンチ出土石器実測図…… 170
図160 トレンチ出土石器実測図…… 171
図161 トレンチ出土石器実測図…… 172
図162 第5次調査全体図…… 173
図163 53号住居址実測図…… 175
図164 53号住居址出土土器実測図…… 176
図165 土製品実測図…… 176
図166 54号住居址実測図…… 176
図167 55号住居址実測図…… 177
図168 56号住居址実測図…… 178
図169 土壙実測図…… 179
図170 53号住居址出土土器拓影…… 180
図171 53・54・55・56号住居址出土土器拓影…… 181
図172 1号土壙、グリット出土土器拓影…… 182
図173 グリッド出土土器拓影…… 183
図174 グリット出土土器拓影…… 184
図175 グリット出土土器拓影…… 184
図176 53号住居址出土石器実測図…… 186
図177 53・55号住居址出土石器実測図…… 187
図178 55号住居址、1号土壙、遺構外出土石器実測図…… 188
図179 遺構外、53号住居址出土石器実測図…… 189
図180 53・55号住居址、遺構外出土石器実測図…… 190
図181 第6次調査役場庁舎予定地全体図…… 192
図182 57号住居址実測図…… 193
図183 57号住居址遺物出土状態…… 194
図184 土器3出土状態…… 195
図185 57号住居址、遺構外出土土器実測図…… 196
図186 57号住居址、遺構外出土土器拓影…… 197
図187 57号住居址、遺構外出土石器実測図…… 198
図188 57号住居址、遺構外出土石器実測図…… 199
図189 第6次調査第3地区全体…… 200
図190 集礫集中地点全体図…… 202
図191 6号遺構実測図…… 203
図192 13号遺構実測図…… 203
図193 16・18・21・22号遺構実測図…… 205
図194 23号遺構実測図…… 207
図195 24・25・26号遺構実測図…… 208
図196 ピット全体図…… 209
図197 土製品実測図…… 212
図198 出土土器実測図(1)…… 214
図199 出土土器実測図(2)…… 215
図200 出土土器実測図(3)…… 216
図201 出土土器実測図(4)…… 217
図202 出土土器実測図(5)…… 218
図203 出土土器実測図(6)…… 219
図204 1・2・4・5・6・7号遺構出土土器拓影…… 220
図205 8・9・13・14号遺構出土土器拓影…… 221
図206 15・16・17・18・28号遺構出土土器拓影…… 222
図207 グリット出土土器拓影(1)…… 223
図208 グリット出土土器拓影(2)…… 224
図209 出土石器実測図(1)…… 225
図210 出土石器実測図(2)…… 226
図211 出土石器実測図(3)…… 227
図212 出土石器実測図(4)…… 228
図213 第7次調査全体図…… 229
図214 43号住居址実測図…… 230
図215 43号住居址グリット出土土器拓影…… 231
図216 43号住居址出土石器実測図…… 232
図217 58号住居址実測図…… 233
図218 59号住居址実測図…… 233
図219 59号住居址出土土器実測図…… 234
図220 58・59号住居址、グリット出土石器実測図…… 235
図221 第8次調査全体図…… 237
図222 1号土壙実測図…… 237
図223 2号土壙実測図…… 237
図224 3号土壙、ピット群実測図…… 237
図225 1・2号集石実測図…… 237
図226 出土土器拓影…… 239
図227 出土石器実測図…… 239
図228 第9次調査全体図…… 240
図229 60号住居址実測図…… 241
図230 61号住居址実測図…… 242
図231 61号住居址遺物出土状態…… 243
図232 60・61号住居址出土土器拓影…… 243
図233 62・63・64号住居址実測図…… 244
図234 62・63・64号住居址遺物出土状態…… 245
図235 62・63・64号住居址、遺構外出土土器拓影…… 246
図236 61・62・63号住居址出土土器実測図…… 247

図237 61・62・63号住居址、遺構外出土石器実測図…… 248
図238 60・61・62・63号住居址、遺構外出土石器実測図…… 249
図239 縄文前期の遺物分布図…… 251
図240 土製品実測図…… 251
図241 縄文中期の遺物分布図…… 252
図242 1～4号土壙実測図…… 253
図243 出土土器実測図(1)…… 254
図244 溝址実測図…… 254
図245 出土土器実測図(2)…… 255
図246 出土土器実測図(3)…… 246
図247 出土土器実測図(4)…… 257
図248 出土土器実測図(5)…… 258
図249 出土土器実測図(6)…… 259
図250 出土土器実測図(7)…… 260
図251 出土土器実測図(8)…… 261
図252 出土土器拓影(1) …… 262
図253 出土土器拓影(2) …… 263
図254 出土土器拓影(3) …… 264
図255 出土土器拓影(4) …… 265
図256 出土土器実影図(1)…… 266
図257 出土土器実測図(2)…… 267
図258 出土土器実測図(3)…… 268
図259 第11次調査全体図、遺物出土状態…… 269
図260 1号土壙実測図…… 269
図261 2号土壙実測図…… 269
図262 3号土壙実測図…… 269
図263 4号土壙、配石実測図…… 269
図264 出土土器拓影…… 271
図265 出土石器実測図…… 271
図266 第12次調査全体図…… 272
図267 7月調査出土土器拓影…… 273
図268 1号貯蔵址実測図…… 273
図269 2号貯蔵址実測図…… 273
図270 1号土壙実測図…… 274
図271 出土石器実測図…… 274
図272 1・2号貯蔵址、1号土壙出土土器拓影…… 275
図273 グリット出土土器拓影…… 276
図274 第13次調査全体図…… 277
図275 97号住居址略測図…… 279
図276 97号住居址出土土器実測図、拓影…… 279
図277 97号住居址出土石器実測図…… 279
図278 第14次調査全体図…… 280
図279 76号住居址実測図…… 282
図280 79・102号住居址実測図 …… 283
図281 98号住居址実測図…… 284
図282 99号住居址実測図…… 285
図283 100号住居址実測図 …… 286
図284 101・103号住居址実測図…… 288
図285 104号住居址実測図 …… 289
図286 104号住居址遺物出土状態（部分）…… 290
図287 岩偶黒色顔料付着状況…… 290
図288 105号住居址実測図 …… 291
図289 106号住居址実測図 …… 292
図290 107号住居址・方形柱別実測図 …… 292
図291 土製品実測図…… 293
図292 107・104号住居址出土土器実測図…… 294
図293 101・79号住居址出土土器実測図 …… 295
図294 79・100号住居址出土土器実測図 …… 296
図295 98号住居址出土土器実測図…… 297
図296 98・99号住居址出土土器実測図…… 298
図297 76号住居址出土土器拓影…… 299
図298 79号住居址出土土器拓影…… 300
図299 98号住居址出土土器拓影…… 301
図300 98号住居址出土土器拓影…… 302
図301 99・100号住居址出土土器拓影 …… 303
図302 100号住居址出土土器拓影 …… 304
図303 101・103号住居址出土土器拓影…… 305
図304 102・104・105・106・107号住居址出土土器拓影 …… 306
図305 76号住居址出土石器実測図…… 307
図306 79号住居址出土石器実測図…… 308
図307 79号住居址出土石器実測図…… 309
図308 98号住居址出土石器実測図…… 310
図309 98・99号住居址出土石器実測図…… 311
図310 100号住居址出土石器実測図 …… 312
図311 100号住居址出土石器実測図 …… 313
図312 101号住居址出土石器実測図 …… 314
図313 104号住居址出土石器実測図 …… 315
図314 105・106・107・79・100・104号住居址出土石器実測図…… 316
図315 76・79号住居址出土石器実測図…… 317

図316 79・98・99号住居址出土石器実測図…… 318
図317 100号住居址出土石器実測図 …… 319
図318 100(2)・101・104・105号住居址出土石器実測図… 320
図319 99・79・100・105号住居址出土石器実測図…… 321
図320 採集土器実測・拓影図…… 322
図321 採集土偶実測図…… 322

写真図版目次

図版１　遺跡　遺跡遠望－中央の畑地帯－(東方より　昭和44年撮影)

図版２　遺構　１号住居址　２号住居址

図版３　遺構　第３次調査全景(航空写真)

図版４　遺構　６号住居址　８号住居址　９号住居址

図版５　遺構　31号住居址　10・11・18号住居址　10号住居址

図版６　遺構　11・27・28号住居址　12・24・25・26号住居址　14・23号住居址

図版７　遺構　８号住居址炉　９号住居址炉　６号住居址遺物出土状態　23号住居址遺物出土状態

図版８　遺構　13・47・48号住居址　17・49号住居址

図版９　遺構　35号住居址　37号住居址　37号住居址遺物出土状態

図版10　遺構　38号住居址　44号住居址礫出土状態　44号住居址

図版11　遺構　53・54号住居址　53号住居址土層(東西)　53号住居址土層(南北)

図版12　遺構　57号住居址　57号住居址土層　第７次調査全景

図版13　遺構　43号住居址　58号住居址　59号住居址

図版14　遺構　79・102号住居址　98・100号住居址

図版15　遺構　104号住居址　105号住居址　107号住居址・方形柱列

図版16　遺構　第６次調査３区全景　上部集礫遺構群(５号から８号遺構にかけて、南西より)　13・14号遺構（14号の立石を起こし、13号の外側の環状組石をはずした状態)

図版17　遺構　13号遺構　16号遺構　下部集礫遺構群(西より)　下部集礫遺構群(14号から28号遺構にかけて、西より)

図版18　遺構　23号遺構　24号遺構　土壙およびピット(東より)

図版19　遺物　23号住居址出土土器

図版20　遺物　６号住居址出土土器

図版21　遺物　57号住居址出土土器

図版22　遺物　２号住居址出土土器

図版23　遺物　２号住居址出土土器

図版24　遺物　12、６号住居址　30、２号住居址出土土器

図版25　遺物　22・31・32、２号住居址　35、４号住居址　４、６号住居址　17、８号住居址出土土器

図版26　遺物　28・30・33、10号住居址　68・69、37号住居址　79、44号住居址　41、旧中学校校庭出土土器

図版27　遺物　41(左上)、41号住居址　２～４、57号住居址　40・41(右)、59号住居址　72、62号住居址出土土器

図版28　遺物　２号住居址出土土器

図版29　遺物　２号住居址出土土器

図版30　遺物　２号住居址出土土器

図版31　遺物　２号住居址出土土器

図版32　遺物　２号住居址出土土器

図版33　遺物　２号住居址出土土器

図版34　遺物　２号住居址出土土器

図版35　遺物　２・４・５号住居址、第１次調査トレンチ出土土器

図版36　遺物　第１次調査トレンチ出土土器

図版37　遺物　６号住居址出土土器

図版38　遺物　６号住居址出土土器

図版39　遺物　６・７号住居址出土土器

図版40　遺物　8・9号住居址出土土器
図版41　遺物　9号住居址出土土器
図版42　遺物　10号住居址出土土器
図版43　遺物　10号住居址出土土器
図版44　遺物　11号住居址出土土器
図版45　遺物　11号住居址出土土器
図版46　遺物　12号住居址、同上層出土土器
図版47　遺物　13号住居址出土土器
図版48　遺物　13号住居址出土土器
図版49　遺物　14号住居址上層出土土器
図版50　遺物　14・23号住居址上層、23号住居址出土土器
図版51　遺物　16・17号住居址出土土器
図版52　遺物　17号住居址出土土器
図版53　遺物　18号住居址出土土器
図版54　遺物　26・35・37号住居址出土土器
図版55　遺物　37号住居址出土土器
図版56　遺物　47号住居址出土土器
図版57　遺物　48・50号住居址、ロ号竪穴出土土器
図版58　遺物　第17トレンチ1・2区出土土器
図版59　遺物　第17トレンチ2区出土土器
図版60　遺物　第17トレンチ3・4・5区出土土器
図版61　遺物　53・55・56号住居址出土土器
図版62　遺物　第5次調査グリッド出土土器
図版63　遺物　57・43・59号住居址出土土器
図版64　遺物　58・59号住居址出土土器
図版65　遺物　61・62号住居址出土土器
図版66　遺物　62・63号住居址出土土器
図版67　遺物　第10次調査出土縄文前期土器
図版68　遺物　76・79号住居址出土土器
図版69　遺物　98号住居址出土土器
図版70　遺物　98号住居址出土土器
図版71　遺物　99号住居址出土土器
図版72　遺物　100号住居址出土土器
図版73　遺物　101・102・103号住居址出土土器
図版74　遺物　104号住居址出土土器
図版75　遺物　55・58、2号住居址　15・79号住居址　33・116、98号住居址出土土器部分
図版76　遺物　16・102・112・162・174、2号住居址　389、10号住居址出土土器部分
図版77　遺物　18・110、2号住居址　20、9号住居址　1161、48号住居址　29、5号住居址　236、第1次調査トレンチ出土土器部分
図版78　遺物　2号住居址出土石器

図版79　遺物　6号住居址出土石器
図版80　遺物　9号住居址出土石器
図版81　遺物　9・10号住居址出土石器
図版82　遺物　10号住居址出土石器
図版83　遺物　11・12号住居址出土石器
図版84　遺物　12号住居址出土石器
図版85　遺物　13・14号住居址出土石器
図版86　遺物　17号住居址出土石器
図版87　遺物　18号住居址出土石器
図版88　遺物　18・37号住居址出土石器
図版89　遺物　第4次調査　第17トレンチ出土石器
図版90　遺物　第4次調査　第17トレンチ出土石器
図版91　遺物　第4次調査　第17トレンチ出土石器
図版92　遺物　出土地点不明石器
図版93　遺物　出土地点不明石器
図版94　遺物　出土地点不明石器
図版95　遺物　43号住居址出土石器
図版96　遺物　第6次調査　第3地区出土土器
図版97　遺物　第6次調査　第3地区出土土器
図版98　遺物　第6次調査　第3地区出土石器
図版99　遺物　第6次調査　第3地区出土石器
図版100　遺物　第6次調査　第3地区出土土製品

第１章　遺跡の概観と調査の経過

第１節　遺跡の立地と範囲

Ⅰ．自然環境（図１・２）

諏訪湖から南流する天竜川の両岸は、数段を数える典型的な河岸段丘が発達することで知られている。さらにこの段丘上には、東西に並列する赤石・木曽両山脈の水を集めて天竜川へと流下する河川によって寸断される「田切地形」が随所でみられるが、もちろんそれは一様に展開しているわけではなく、それぞれの河川の大きさや位置等により、場所によって地形は異なる。そのうち、木曽山脈から東流し、宮田村と駒ヶ根市の境界を形成する太田切川の下流には、所によっては天竜川を東方の山地際まで押しやるほどの、広大な扇状地が発達している。中越遺跡は、この扇状地の北側の扇側部に位置している。この扇状地の上には、太田切川の他にも小河川が多く、それ等は扇状地面を開析しつつ谷口から天竜川に向かって方射状に広がっており、扇央部以下では侵食面が明瞭になるとともに下流ほど広がっていることから、その間に長峯状の台地を残す形となっている。また扇側には、背後の山地からの小河川によって形成された小規模な新期扇状地が連なっている。深い侵食面を作って流れる太田切川の北には、順に小田切川、大沢川、堂沢川があり、小田切川の侵食面は上流まで達して数mの段差をもつが、大沢川の侵食は小規模で、侵食面が明瞭となるのは中流域以下である。そして、大沢川・堂沢川の北西、扇側が山地と接するところには、山地からの長坂沢、押手沢、寺沢、日影沢などの沢による小規模な扇状地が連なっているのである。中越遺跡が位置するのは、小田切川と大沢川と間の台地上である。そこはまた、大沢川の侵食面が台地との２～３mの段差を形成し始める部分にあたり、天竜川の河岸からは約１kmを測る。

遺跡の範囲となる台地上は、南側にあるＡＶ40(遺跡面に設定されたグリッドの呼称。以下、本書では遺跡内の位置を示すのに全てこの表示を用いてある。図９参照。)で終わる一段低い面と、広い高燥面で構成されているが、後者はさらに２つに分けられる。すなわち、旧中学校用地造成時に大規模な改変がおこなわれているため一部明確でない部分もあるが、役場南から中央グランドを横断してＢＩ29からＢＨ43を通りＢＡ52へ抜ける線以北の、台地北縁まで達する最も高い面と、残りの南側やや低い面である。この二者の間は、28列以東では浅い溝状を呈している。グランド付近に以前湧水があったということであり、そこからの流路の跡かと考えられる。これも現在は枯れてしまっているが、台地北崖下にも豊富な湧水があり、この二者を生活用水としてこの地に集落が営まれたものであろう。付近の土中には全体に拳大から人頭大の礫が多く、所によっては集中もしており、表土下が砂層・礫層となる地点もある。

一方この地は、台地東側の中越集落からみて西方にあるとして「西原」、さらに町地区との間にあるところから「中原」と呼ばれている一帯であり、昭和24年に西方の台地中央に中学校が独立移転してきた後も、昭和40年代初めまでは、一面の桑畑であった。そして、考古学に興味をもつ人達に、遺物採集の適地として注目されてもいたのである。つまり、繰り返し耕作の手が加えられることによって上層の遺物は移動させられ、地表面に露出[(1)]した遺物はかなり収集されてきたわけで、遺物の保存状態は決して良くはない。

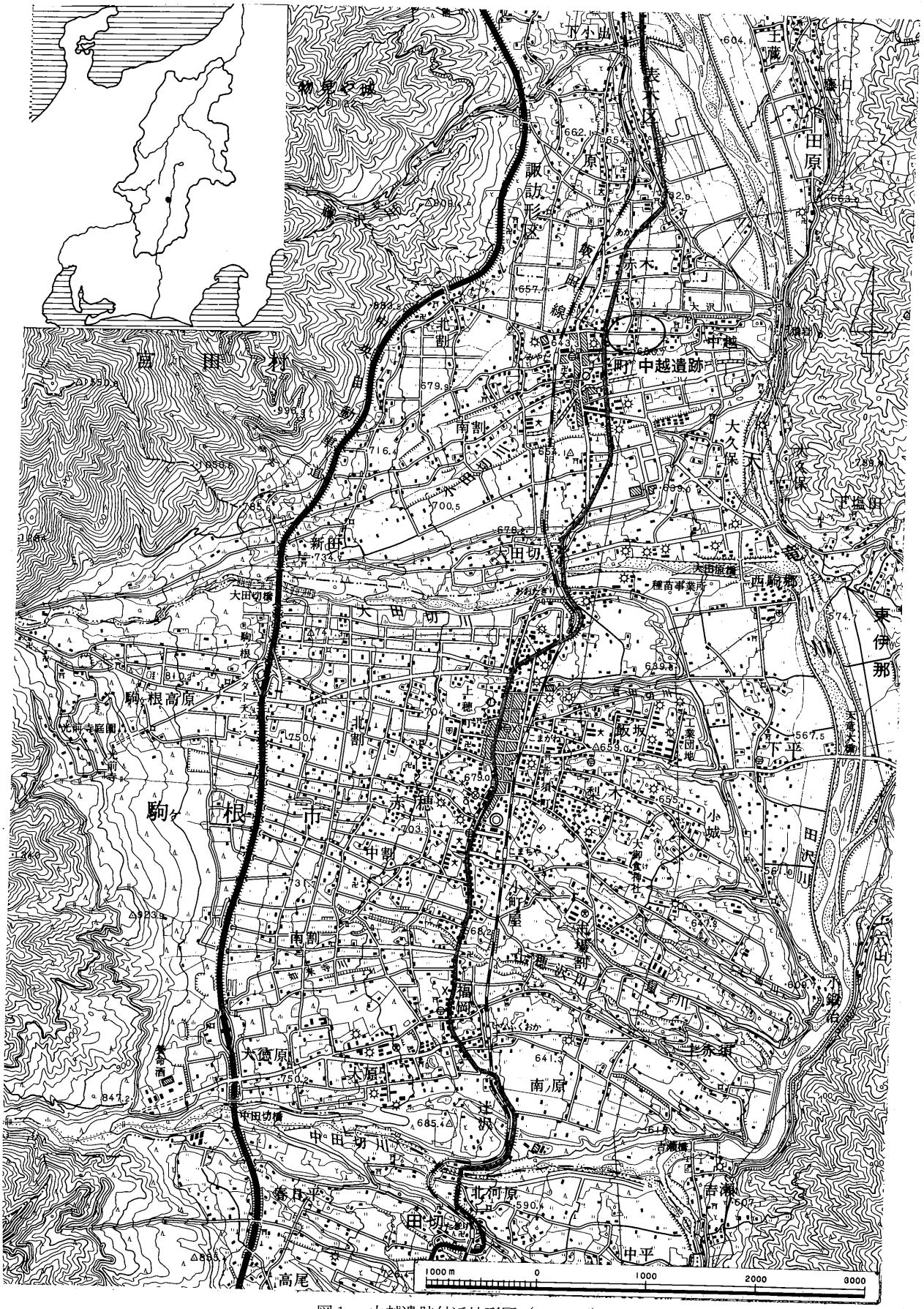


図1　中越遺跡付近地形図（1：5万）

図2　中越遺跡付近地形図（1：1万）

II．地質・土層（図3～6）

中越遺跡の位置が、西方の木曽山脈からもたらされた太田切川堆積物により形成された扇状地の上であることは先述したが、現在の天竜川の本流は、遺跡付近ではこの扇状地に押される形で東方山地へ乗り上げ、基盤岩を削り込んで流れており、現在の流路より西側、つまり扇状地の下には、厚い本流系の礫が堆積していることも知られている（図3）。この礫は、本流の上流および三峯川上流の中央構造線以東から運ばれたもので、砂岩、粘板岩、花崗岩、チャート、緑色岩、安山岩などで構成されている。一方、天竜川の広大な河原の上に形成された扇状地は、西方山地の地質が領家帯に属し、領家花崗岩や領家変成岩類からなっている（図4）ことから、必然的にそれ等の礫、つまり花崗岩類、閃緑岩、雲母片岩、黒雲母片麻岩などで構成されている。遺跡付近の土壌中には礫が多いが、その礫の種類も同様であることは言をまたない。この二種の礫群の不整合面は、つつじが丘工業団地造成時に削り取られた露頭（図5の5地点）で地表下8mを測る。

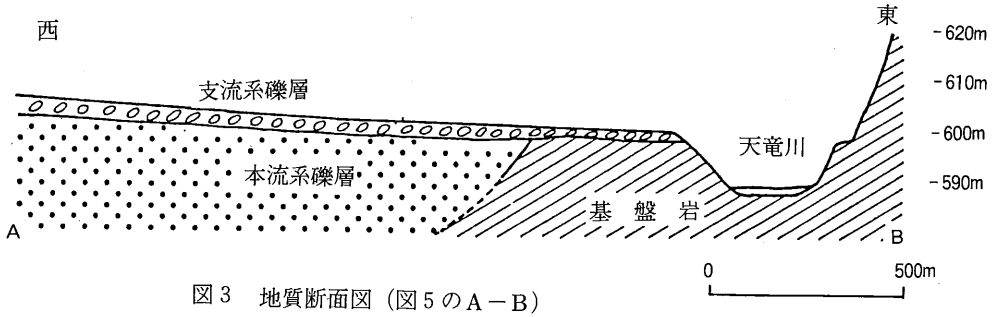


図3　地質断面図（図5のA－B）
―寺平他「長野県上伊那郡宮田村地域の第四系」1989より―

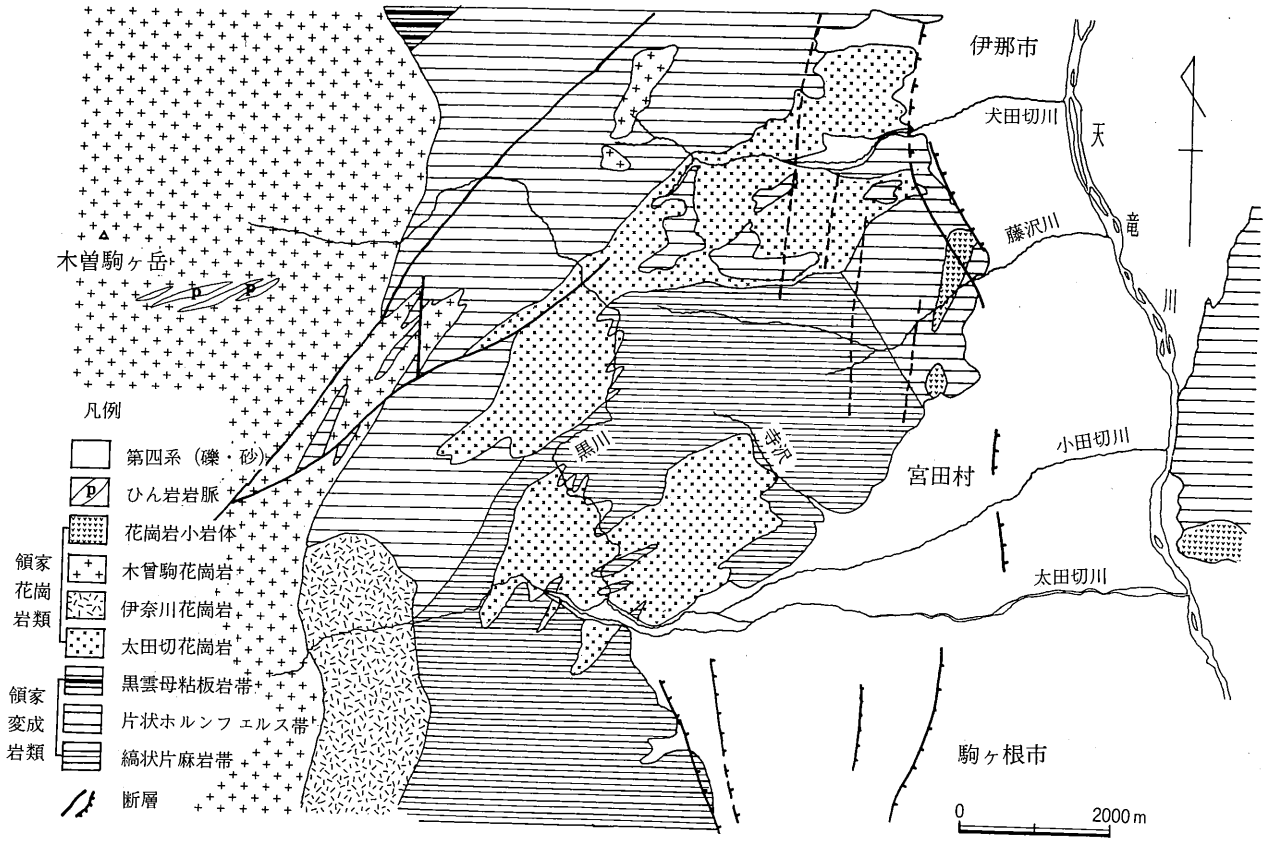


図4　宮田村周辺地域の地質－中部建設協会「天竜川上流域地質図－1984より）

太田切川以北の扇状地面は、生成時期や比高差を考えあわせて、太田切川と小田切川にはさまれた大原面、小田切川と大沢川にはさまれた細長い面とその北方の赤木を中心とした同比高面をあわせた中越面、そのさらに北方の伊那市諏訪形まで広がる諏訪形面、各河川の河床面と崖錐性の新期扇状地とに分けられている。(図5)。そして、主として被覆する各種のテフラの相違によって、太田切扇状地の形成の終期をおよそ10万年前と推定し、太田切川北側全域にわたった下刻作用が順次終わり、各段丘面が形成されたのは、諏訪形面が最も早く約5～6万年前、大原面が約3～4万年前、中越面がおよそ2万年前、中越面の中央部を開析する大沢川面が約1万年前であり、崖錐性の新期扇状地はそれよりさらに新しい時期まで堆積作用が継続していたであろうとされている〔寺平他1989〕。その分析の際作成された中越面の柱状図が図6である。しかし、過去の中越遺跡での発掘調査では、柱状図のⅠ層を表土あるいは耕作土と黒色土に分け、Ⅲ層の上層を赤褐色土あるいは「ソフトローム」、下層以下を「ローム」と呼んでいる例が多い。すなわち、Ⅰ層が表土あるいは耕作土、Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が黒褐色土、Ⅳ層が赤褐色土あるいはソフトローム、Ⅴ層がロームとなる。第2章が後者の分類で記述されているので、以下それにより土壌部分を概観しておきたい。

ローム上面までは60～90cmを測る。黒褐色土と赤褐色土の厚さは共に20cm前後で、土壌部分の深い所は、特に黒色土が厚い。また、黒色土のない地点もある。南側の低位段丘面は黒色土が深い。住居址等の遺構は黒褐色土中もしくは赤褐色土上面で検出されている。従って赤褐色土以下まで掘られた地点はごく少ない。また、深く掘られた住居址の付近では、黒色土も深くなっていることが観察されている。ただ第6次以降の調査地点は、第10次調査を除き、既存の建築物の跡地や、多くが水田として耕作されたことがある

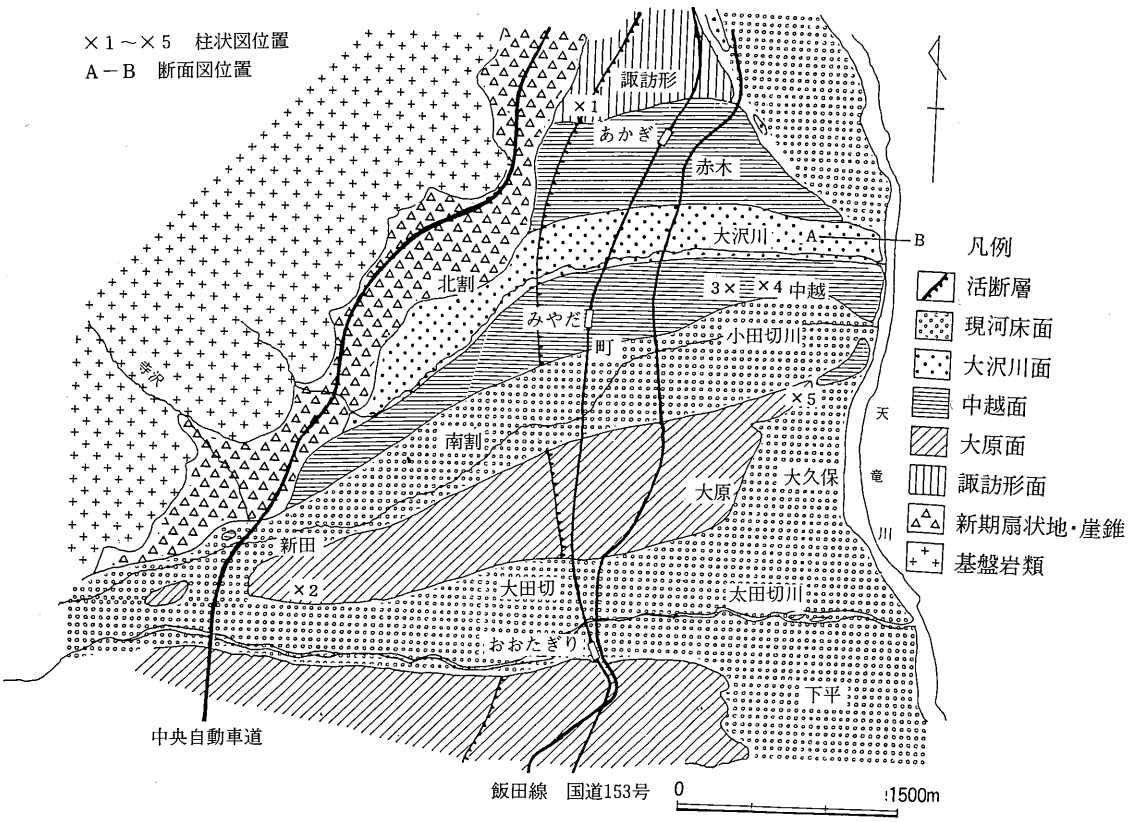
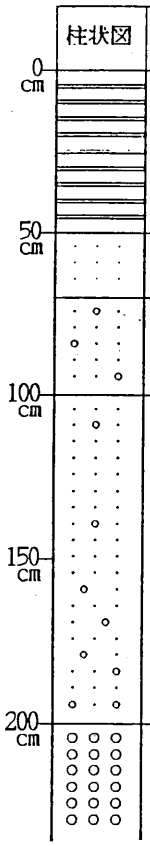


図5　宮田地域段丘面区分図
―寺平他「長野県上伊那郡宮田村地域の第四系」1989より―



柱状図	特徴	サンプルNo	主な鉱物		火山ガラス bw	火山ガラス pm	その他
	黒土	168	bi≫ho, mu, au	qz≧fl	●	・	
		169	bi≫ho, mu, au, hy (ga)	qz>fl	●	・	br
		170	bi≫mu, au, ho (ga)	qz≧fl	●	・	br
		171	bi≫mu, au, ho, hy (ga)	qz≧fl	・		br
		172	bi≫mu, au, ho, hy (ga)	qz≧fl	・		br
	黒褐色土 円～亜円礫（1～3cm）点在	173	bi≫mu, ho, au (ga)	qz≧fl	・		
		174	bi≫mu, ho (ga)	qz≧fl	・		br
	黒褐色～黄褐色土 円～亜円礫（1～2cm）点在 黄褐色～灰褐色土	175	bi≫mu, ho	qz>fl	・		
		176	bi≫mu, ho	qz>fl	・		
		177	bi≫mu, ho	qz>fl	・		
	円礫（花崗岩9cm） 灰褐色土 亜円礫点在（2～3cm）	533	bi≫mu, ho	qz>fl	・	・	
		178	bi≫mu, ho	qz>fl	・	・	
		534	bi≫mu, ho	qz>fl	・	・	
		179	bi≫mu, ho	qz≧fl	・	・	
		535	bi≫mu, ho	qz>fl	●	・	
		180	bi≫mu, ho	qz≧fl	・	・	
		536	bi≫mu, ho	qz>fl	●	・	
		181	bi≫mu, ho	qz>fl	●	・	
		537	bi≫mu, ho	qz>fl	●	・	
		182	bi≫mu, ho	qz>fl	●		
	礫層 花崗岩，黒雲母片麻岩，ホルンフェルス						

凡例
鉱物：bi黒雲母、ho角閃石、mu白雲母、au普通輝石、hyしそ輝石、gaざくろ石
qz石英、fl長石 （ ）はごくわずか含まれるもの
火山ガラス：bwバルブ型火山ガラス、pm軽石型火山ガラス、br褐色ガラス
ガラスの含有量 ●1～10% ・1%以下

図6 中越面土層柱状図
—寺平他「長野県上伊那郡宮田村地域の第四系」1989より—

場所であり、表土下がローム面となる部分があるなど、土壌部分の保存状態は良くない。遺物は、表土にわずかある他、黒色土から黒褐色土にかけて出土しており、特に黒色土下層から黒褐色土上層にかけて多い。しかし大部分の遺物は、遺構埋土中に中央が深くレンズ状に落ち込んだ状態でみつかっている。遺構のない部分での層位と遺物の出土状態の記録が少ないので断定できないが、包含層下面は黒褐色土のうちに求められよう。なお、本書では、土色による分類やその名称は統一されておらず、各土層の名称は、調査者が目視によって観察し、命名したものをそのまま用いてある。調査時期や、極端な場合は調査者によって異なっている可能性もうかがえたが、統一することは不可能であり、そのまま使用した。

III. 歴史的環境（図7）

現在までの発掘調査の成果によれば、太田切川左岸一帯で遺跡立地の条件を満たしている地域は6地区あり、それ等は性格から以下の3種にわけられる。①—山麓に連なる小扇状地の上で、宮田村新田・南割の西方から北割にかけての山際の地域（A地区）、②—扇状地上の現在は河川による侵食をまぬがれている台地上で、伊那市諏訪形の南部（B地区）、宮田村南割から田中・町・中越（C地区）、宮田村駒ヶ原から大原（D地区）の3箇所がこれにあたる。③—河川の侵食面のうち天竜川に近い末端の微高地で、宮田村中越下から伊那市下牧（E地区）、宮田村大久保（F地区）の2箇所である。以下各期の様相を見てみるが、核集落の集中する範囲に含まれる現在の町地区が資料的空白区になっており、特に古墳時代以降の様相を知る上でネックとなっている。

先土器時代の遺物は皆無に近く、C地区ほぼ中央（中越遺跡）の資料の中に、その可能性のあるものが存在する程度である。

縄文時代に入り、その草創期から早期には、まずC地区ほぼ中央の大沢川の侵食面が明瞭となり始める付近の北縁に最初の痕跡をみせ（向山遺跡）、そこを核としてC地区西方へ展開するとともに、A地区やD地区西方の北縁にも広がり始める。前期にはC地区ほぼ中央の北縁に大規模な集落が展開する（中越遺跡）。D地区でも拡大し、北縁で散見されるとともに、その南東端にも小集落が進出する。中期にはA、

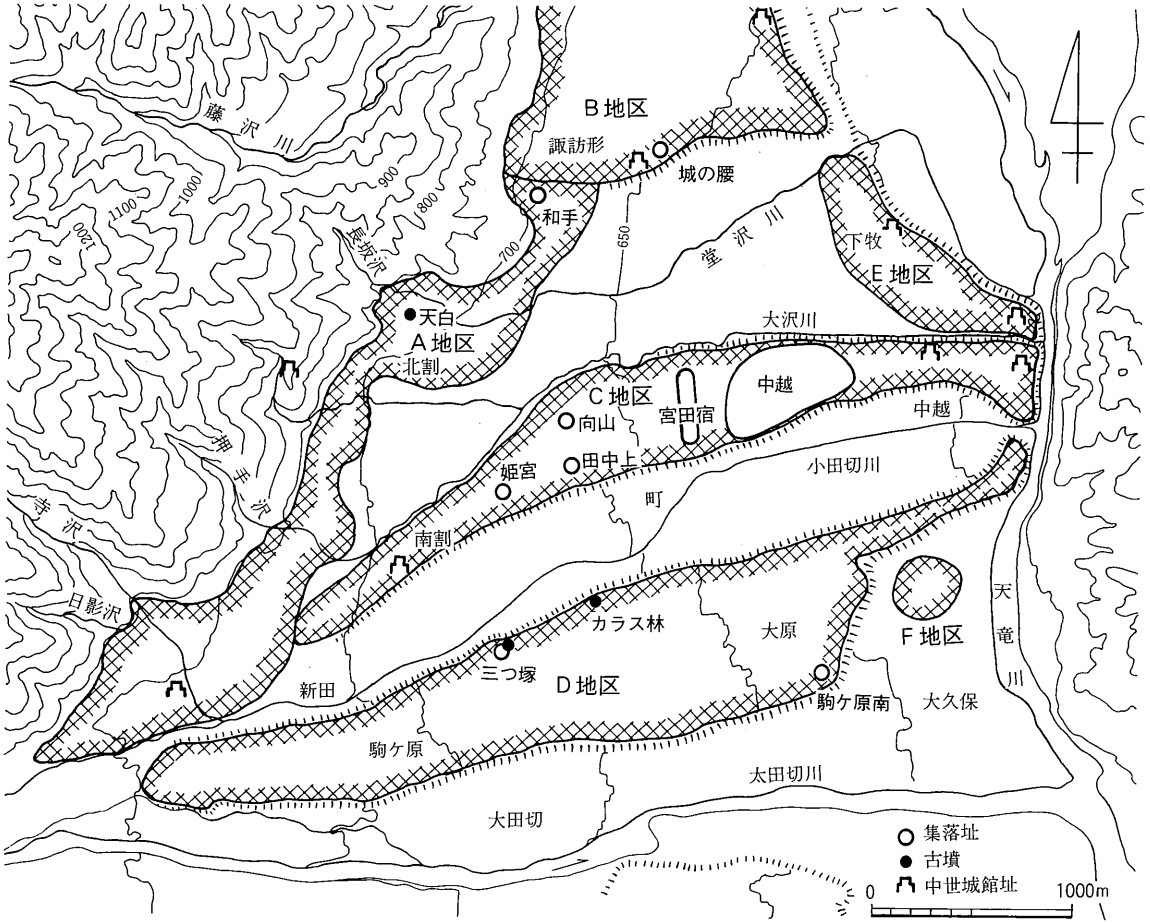


図7　中越遺跡周辺の遺跡分布

B、C、D地区の広範囲に集落が展開するが、中でも核となる大集落が2つみられる。1つはC地区中央東寄りの南縁（中越遺跡）である。一方、D地区には太田切川に臨む崖上を除く台地縁辺に連続的に痕跡が見られるのだが、特に北縁の西方（三つ塚遺跡以西）では台地のより内側まで遺跡が広まっており、部分的な調査の結果をあわせると、もう1つの核となる相当大規模な集落があったと考えられる。後期になるとC地区とD地区西方だけに縮小する。C地区の中央南縁の低位面の遺構（中越遺跡）は墓域の一部と考えられ、やはり核集落の一部であろうが、それ以外は痕跡的で全体像をうかがうことはできない。晩期にはA・C地区とD地区西方にわずかな遺物の出土する地点が散見されるのみである。

弥生時代に入ってもこの傾向は続き、中期まではC地区中央東寄りとD地区東端に痕跡があるだけなのだが、後期に入って再び遺跡数が増加し、その規模も大きくなる。A・B・C・D地区に広がり、B地区南縁（城の腰遺跡）、C地区中央西寄り（姫宮遺跡）に大規模な集落が営まれ、D地区南東端（駒ヶ原南遺跡）、A地区北端（和手遺跡）にも集落がみられる。これ等の集落は、いずれも適度な比高差をもつ低湿地を見おろす高燥台地を選定して営まれている。

古墳時代には、全地区に痕跡が残る。A地区はその北半に限られ、特に北割集落のある長坂沢の小扇状地上は、以後連続的に居住地として利用されることになる。B地区は前代に続き核集落が継続して存在している。また、C地区は中央南縁、D地区は西側北縁と東縁にあり、さらにE地区で天竜川に臨み、F地区でD地区直下の微高地にそれぞれ初めての痕跡を残している。古墳はA地区中央とD地区西半の北縁にある。古墳が築造者の生活処点を見おろすとすれば、D地区の古墳の築造者の居住地はC地区のうちにもとめられる。そこでは、ほぼ中央に集落がある（田中上遺跡）ことは確認されているものの、全体像はつかみ得ていない。

奈良時代にはE・F地区でその痕跡を見出すことができない、平安時代に入るとD地区も東半北縁のみとなる。このような停滞もしくは漸減傾向は平安時代中期まで続くが、後期になるとE・F地区を除く全域で爆発的に増加し、その広がりは縄文時代中期と酷似するまでになる。

中世以降は資料が乏しく推測にならざるを得ないわけだが、まずはじめに、D地区で生活の痕跡を見出せなくなる。そして、中世の中頃に異変があり、C地区でこれまで常に核集落が存在していた中央部に痕跡がみられなくなり、それにかわるように東方端部に集落が出現するらしい。またこれも長く集落立地の適地とされていたA地区長坂沢の扇状地には、この時期以降の遺物はみつかっていない。これに中世城館跡を重ねてみると、中世後半は、A・C地区接合部を中心に両区の西方部、B地区南側、C地区東端の3地点に核集落があったと思われる。D地区は人力の入らぬ地帯となったかもしれない。なお、E地区には鎌倉時代初頭に築造された経塚があるが、築造者やそれをささえた被支配者層の様相を知る資料はない。近世以降については概観することは難しいが、宮田宿が制定され、付近に散在していた民家を集めて町並みが作られてからは、現在まで、C地区中央部がこの付近での中核であったことは言をまたない。

このように見てくると、太田切川左岸一帯では、縄文時代から現在にいたるまで、中越遺跡が含まれるC地区中央部が常に中核の位置を占め続けていたことがわかる。人為的に設けられた宮田宿がそこにあるのはまさに象徴的である。それ以外に大規模な集落としては、D地区北縁に縄文中期の大集落が、B地区南縁に弥生時代後期から中世まで続く中核集落が営まれており、さらにA地区の長坂沢扇状地は、奈良時代から中世前半まで、規模は大きくないものの安定的居住域であったことがうかがえる。そして中越遺跡では、縄文前期と中期の中核集落、縄文後期の墓域が発見されているということになる。

IV　時期区分と広がり

ごく少ない遺物は除き、出土土器から中越遺跡の遺構と遺物を7期に区分した。各期の編年上の位置と分布域は次のようである。IV期以降の広がりには、まだ不明な点が多い。遺跡内の地点は図9によられたい。

○Ⅰ期：縄文時代前期初頭中越式期である。大規模な集落と方形柱列が確認されている。遺物は、台地北縁にそい、ＢＱ17付近を中心とした南北180m、東西340mの範囲から出土しており、集落規模もほぼそれと同様と考えられ、極めて大きい。さらに、調査されていないＥ大区（国道153号線以西）へ広がる可能性も否定できない。しかし、集落と方形柱列との位置関係も含め、その内部構造は明らかでない。

○Ⅱ期：縄文時代前期中葉神ノ木式期から有尾式期で主体は前者である。遺物の出土は、Ⅰ期の分布域の中央西寄りに凝集するように、南北140m、東西140mの範囲からである。しかし、その出土状態をみると、住居址埋土を含めた包含層の、上層により多い状態でⅠ期の遺物と混じっているのが実態であり、集落の具体像を特定するのは困難である。いずれにせよ退嬰傾向にあるのはまちがいない。

○Ⅲ期：縄文時代中期初頭梨久保式期である。遺跡東寄りのＢＬ44地点の調査で土壙に伴いまとまった量が出土している他、ＢＱ43・ＢＩ36・ＢＩ39・ＢＨ35などの台地中央部にも散在しているが、住居址はみつかっていない。ＢＡ31・ＢＴ03・ＢＴ14などにもわずかある。

○Ⅳ期：縄文時代中期中葉新道式期から藤内式期である。台地の南側ＢＣ32付近を中心とした南北100m、東西280mの範囲で遺物出土が確認されている。南側はＡＰ00―ＢＣ60で切れる上面台地の南縁までは広がらないようにも見えるが、東西はもっと広がる。ＢＨ22で藤内期の住居址が発掘されている他は、遺構は未確認である。遺物量からみても、Ⅴ期ほどではない規模の集落が考えられる。

○Ⅴ期：縄文時代中期中葉最末から末葉、井戸尻Ⅲ式期から曽利式期である。Ⅳ期と同じ地域から遺物が多量に出土している他、中央から東にかけては台地のより内側、北縁に近くまで少量ながら散在している。さらに遺物出土状態からみて、東西と南側は確認されている範囲よりも確実に広がるのだが、その範囲を具体的に示す資料はない。ただ、現在までに縄文時代中期の遺跡の範囲として南側が上面台地南縁まで、東西はＡ大区西縁（国道153号線付近）から東方へ650mまでが考えられており、過去の様々な調査の集積に基いたものとして参考になろう。むしろ45から55列の南縁で中期の土器が多かったという表面採集の結果も聞いている。遺物量から大規模な集落が想定され、それは上面台地南側に帯状に連なるとみて良いだろう。

○Ⅵ期：縄文時代後期堀之内式併行期から曽谷・安行式併行期にかけてである。規模の大きい墓域が確認されている。その地点は台地南側の低位面のＡＮ・Ｏ―18・19で、石棺墓とピット群、それをおおう集石・配石・立石を含む環状積石墓の一部が発掘されている。上面台地縁辺からも少量の遺物が出土していることから、分布域は下面台地を中心に上面台地の肩にかけてと思われる。東西の広がりを知る資料はない。ＢＤ38（第10次調査97坑）またはＢＧ36（同98坑）で1軒住居址を確認したとの記録もあるが、その存否は不明としておきたい。[2]

○Ⅶ：弥生時代前期で、ＢＩ36に土壙がある。他には遺構、遺物はない。

註1　向山雅重「矢の根石」『山ぶどう』1970

2　「中越遺跡範囲確認調査報告書」1979、『宮田村誌　上巻』1982に記述されているが、前者の遺物出土数一覧表をみても、後期の遺物はない。

第2節　遺物の分類

Ⅰ　土器の分類

土器の分類は、基本的には従来の型式設定に従った。時期区分すれば右のようになる。内容的には、Ⅰ・Ⅱ期とⅥ期以外は、いずれも粗いサンプリング資料の域を出るものではない。一方量的にみると、Ⅰ・Ⅱ期が最も多く、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期も比較的多い他は、Ⅲ期に少しまとまった量がある程度である。従って分類もⅠ・Ⅱ期が最も詳しく、Ⅳ～Ⅵ期でもある程度の類別を試みたが、他は略してある。

一方、遺跡出土の一時期の土器が、複数系統の土器群から成り立っている場合、阿久遺跡で試みられた群別を優先する方法は便利である。Ⅰ・Ⅱ期およびⅤ期の土器の分類ではその方法をとった。

中越遺跡の時期区分

Ⅰ期：縄文前期初頭中越式
Ⅱ期：縄文前期中葉神ノ木・有尾式
Ⅲ期：縄文中期初頭梨久保式
Ⅳ期：縄文中期中葉新道～藤内式
Ⅴ期：縄文中期末葉井戸尻Ⅲ～曽利式
Ⅵ期：縄文後期堀之内～曽谷・安行式
Ⅶ期：弥生前期末
Ⅷ期：弥生末～古墳時代
Ⅸ期：平安時代後期
Ⅹ期：中・近世

1．Ⅰ・Ⅱ期

3群ある。Ⅰ群は諏訪・伊那地方を中心として分布する在地系、Ⅱ群は関東系、Ⅲ群は東海・関西系である。Ⅰ群が全体の8割、Ⅲ群が2割弱を占め、Ⅱ群はごくわずかである。

Ⅰ群はⅠ期とⅡ期にわけられる。Ⅱ群・Ⅲ群もまた、それぞれ2～3期にわけられ、Ⅰ群土器との対応は、おおむね従来とかわりはない。しかし、個個についてⅠ群との関係を明確にし得ないため、Ⅱ・Ⅲ群土器をⅠ群土器の2期区分に対応して分けることは、不可能である。そこでここでは、Ⅰ・Ⅱ期の土器を、Ⅰ期Ⅰ群、Ⅱ期Ⅰ群、Ⅱ群、三群にわけて細分類してある。なお、以下の記述で、ことわらないものは胎土に繊維を含んでいない。

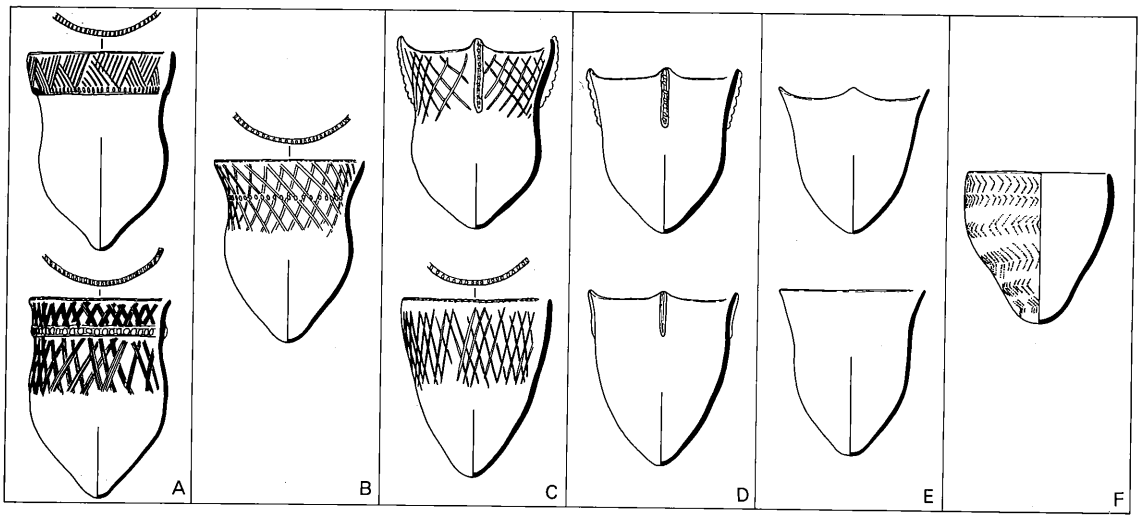


図8　Ⅰ期Ⅰ群土器分類模式図

図9　中越遺跡調査地点図

○Ⅰ期Ⅰ群（図８）

A：頸部がゆるくくびれる平口線の尖底土器。やや薄手で胎土は精選されており、少量の細雲母・石英と白色砂粒を含む。器面は凹凸があるもののなめらかで、外面は頸部以上は横位、以下は縦位のナデ、内面は多くが明瞭な痕跡を残す丁寧な横位ナデが施されている。焼成は良く、色調がにぶい黄橙色から浅黄色と白味をおびるのも本群の特色である。口縁には肥厚して見える縁帯部を作る。下縁に隆帯を貼付するか、下方外面に粘土を貼付したり、屈曲した下縁部に丸味をもった粘土帯をのせたものである。口唇端部は平らで強く外反するか、丸味をもって直立から内湾する。胴部最大径はやや下位にあり、底部は端部近くで一旦くびれ、乳房状を呈する。

縁帯部は、櫛歯状工具による数条の沈線の粗い斜格子目文や、３～４㎝ごとに山形に向きのかわる斜走沈線で埋める。まれに無文もある。縁帯部の胴上半部にも斜格子目文を施すものがあるが、縁帯部よりも粗い。口唇にヘラによる刻み、縁帯部下縁にもヘラや指頭による刻みを付す。

B：Aを特徴づけた縁帯部がなくなる。頸部がくびれる平口線の尖底土器。中厚手で、胎土は精選されたものと粗い二者があり、中粒の雲母・石英・長石を含む。積み上げ痕は消されているが、外面縦位、内面横位のナデによる器面調整は粗く、内面に成形時の指頭痕を明瞭に残すものもある。口唇端部は平らで強く外反するか丸味をもつ。頸部のくびれはやや弱くなり、胴部最大径も上にあがる。底部形態を知る資料はないが、底端近くのくびれは残っている。

口縁から頸部にかけて、沈線による粗い斜格子目文を施す。沈線は櫛歯状工具による数条から半截竹管による２条、ヘラ状工具による１条まであるが、後二者が多い。口唇に刻み、頸部に斜格子目文に重ねてヘラ状工具による列点文をめぐらす。

C：頸部がくびれる尖底土器。中厚手で胎土には雲母・石英・長石の中粒を多く含んで精選されておらず、器面調整も粗く積み上げ痕を明瞭に残す。全体形はBと同様であるが、外反する口縁部が、４個の波状あるいは山状突起となる点を特徴としており、まれに平縁もある。刻みが付される例もある口唇端部は丸く、その処理は雑である。

A・Bと異なり、波頂や山頂からは刻目をもつ隆帯を垂下しており、Dにも見られる。平縁には隆帯が付かず、その中に全体形が砲弾形のものもある。隆帯と隆帯の間は単沈線の場合が多い斜格子目文で埋める。

D：全体形、胎土等はCと同様だが、頸部のくびれがより弱くなり、文様が隆帯のみとなって斜格子目文が消失するのが特徴といえる。隆帯には、太い棒状の粘土紐を貼付する例と稜のない断面三角形のつまみ上げたような二者が、また刻目を付すものとないものの二者があり、いずれも後者の方が後出的である。

E：全体形、胎土等はDと同様で、全く無文となる一群。口縁は波状、山状突起、平縁がある。

F：丸底といっていい底からゆるく開き、口縁部でやや内湾することの多い平口縁の尖底土器。胎土、整形はDと同様で、全面に無節や結束第１種の縄文を付すが、整然としたものではない。

G：繊維を含む粗雑な作りの厚手の土器。粗い縄文を付す例もある。Ⅱ期にもあり区別は難しい。

H：中厚手で、口唇直下と頸部に１～２条の刺突文を付すもの。全体形は不明だが、頸部のややくびれる尖底土器らしい。Ⅲ群を模倣したものと考えられる。あるいはⅡ期に入るかもしれない。

○II期I群

A：平底の深鉢で、縄文を地文とし、櫛歯状工具による文様を付す一群。中厚手で胎土に雲母・石英・長石を含む。器壁は均等で、内面は横位のナデ痕が顕著である。口縁には波状と平口縁がある。前者は頸部で軽くくびれ、口唇部でやや立ちあがるが、後者はくびれがなく、開口したのちゆるく立上がる。

櫛歯状工具は口縁部文様帯に用いられる。口縁にそった連続刺突文、菱形やループ状、波状の条線文、その脇の連続刺突文などである。櫛歯状連続刺突文の代りに爪形文を付す例、底部近くに櫛歯状連続刺突文や爪形文を付す例もある。口縁部文様帯の幅は、平口縁では狭く、波状口縁ではかなり広い。特に前者では有段口縁をつくる場合も多い。胴部以下は縄文となる。その縄文はループ、束、付加条など多種多様で、横位に段を形づくって施文される。口縁部との間に無文帯が入る例もある。神ノ木式に相当する。

B：平底の深鉢で、縄文を地文とし、列点状刺突文を付す土器。中厚手で雲母・石英・長石を含むものはそれが細粒化し、多くの灰白色砂粒とわずかな輝石を含むものがある。全体形を知る資料は少ないが、折り返し口縁となる平口縁と、円味をおびた波状口縁とがある。前者は折り返し部が、後者はAの波状口縁のものよりも広い範囲がそれぞれ口縁部文様帯となり、列点状刺突文を主とし、単沈線、平行沈線が施される。胴部以下は縄文となるが、粗雑な原体を雑然ところがしてある。羽状縄文もあるらしい。整形は粗く、焼成も良くはない。有尾式にあたる。

C：平底の深鉢で縄文が全面に施文される。波状口縁と平口縁があり、それぞれの形態や調整はAに似るが、折り返し状の縁帯部をもったり、波状口縁の中に胴部の屈曲の強いものがある。縄文はループ・束・無節・単節など多種である。波状口縁で頸部を無文帯とする例がある。

D：胎土に繊維を含む土器。粗雑な作りの不定方向の縄文を粗く施す一群と、胎土に石英を含み、内面の横位ナデ痕が顕著で、羽状縄文を横位に整然と施文する二者がある。

E：厚手の尖底土器。頸部は直線的に開口し、直立気味の肥厚した縁帯部へとつづく、丸味をもつ胴部は上方に最大径をおき、底部は丸底気味となるらしい。胎土は雲母・石英・長石を多く含み、精選されていない。縁帯部は爪形文、半截竹管や竹管による刺突文、粗い櫛歯状連続刺突文などで埋め、頸部下端も同一施文具で刻む。構成はIII群Dと同様であり、模倣品と考えられる。

○II群

A：胎土に繊維を含み、内面は極めてなめらかな土器。口縁に半截竹管による沈線文やボタン状貼付文をつけ、胴部に十数段のループをもつ例の多い縄文を施す。関山I式である。

B：胎土に繊維を含み、調整はAほど良くない。口縁部の沈線文は退化し、胴部の縄文には正反合や組紐が多くなる。Aの退化形で、関山II式である。

C：胎土に繊維を含み、粗い斜縄文を地文とし半截竹管文を施すが、それは沈線文、波状文、平行沈線間刺突などの簡単なものに限られる。黒浜式である。

○III群

A：平口縁で頸部のくびれる尖底土器。器壁は薄く、細雲母・石英・長石を含む胎土は精選され、焼成も良い。外面は滑らかだが成形時の凹凸を残し、内面には指頭痕が残されている。口縁部に折り返し状の縁帯部をもつ。無文である。

B：頸部のくびれる尖底土器。器壁は薄く、細雲母・石英・長石を含む胎土は精選されているが、焼成はあまり良くないものがある。波状口縁と平口縁があり、前者は4個の波頂部から刻みをもつ短い隆帯

を垂下させる。隆帯はつまみ上げと内面からの押し出しによる。下縁に薄く粘土を重ねて縁帯部をつくる。胴部の最大径は下方にあり、底部は収束したのち突出する乳房状となる。縁帯下部に刻目、口唇に刻み、口唇直下に刺突文を連ねるなどの他、縁帯部とその下の胴上半を細線文で埋めるものがある。施文具は全て同一で、半截竹管が多い。清水ノ上Ⅰ式である。

C：最大径が胴下端にある頸部の細い壺形尖底土器。薄手で細雲母・石英・長石を含む胎土は精選されている。口縁はロート状に開口し、胴部は下端近くの最大径まで直線的に広がり、そこから丸味をもって急速に収束し、わずかに突出する尖底にいたる。頸部に粘土を貼付して口縁部と胴部をわけ、口縁部は1対の分厚い隆帯を垂下させた後に細線文で埋め、胴上半部は縦位の区画を向きの変わる斜走沈線で埋める。頸部には連続刺突文をめぐらす。これ等の施文具は全て半截竹管である。

D：砲弾形や頸部のくびれる尖底土器で深鉢と浅鉢がある。薄手で胎土に細雲母・白色の小粒を含み、焼成は普通である。深鉢には平口縁と波状口縁がある。いずれも頸部は直線的に開口し、直立からやや内傾する折り返し口縁状に肥厚した縁帯部へつづく。胴部以下は、頸部からそのまま砲弾形に収束して突出する尖底部となるものと胴部上方に最大径をおく丸味をもつ例とがある。後者は成形時に頸部下端を胴部上端の外側に重ねるようにしている。浅鉢は縁帯部から直接尖底部にいたる。

縁帯部は、板状工具先端による刺突文、貝殻文、爪形文などで埋め、波状口縁の場合は波頂から刻みのある隆帯を垂下する。縁帯部の下縁と頸部には爪形文やオサエなどによる同一の刻みを付す。清水ノ上Ⅱ式の要素である。

2．Ⅲ期

口縁は直線的に開口したのち端部で「く」の字状に屈曲し、胴部は上方に最大径をもち、底部は台形に張り出す深鉢。口縁部を太目の多截竹管を使った浅い沈線や半隆起線で横位・縦位に区画し、その中を格子目状や縦位の沈線で埋める。口唇部を中心に竹管内面による連続爪形文を多用する。胴部は、S字状の痕跡を残す自条自縛の原体を多用した縄文を地文とし、上半に太目の多截竹管による下に開いた弧線を連ねる。性格づけから梨久保式の範疇に含まれる。

3．Ⅳ期

A：キャリパー形口縁の深鉢で、胎土に雲母・石英・長石を含む。隆帯で横帯区画した間を三角形状に区画する。隆帯の縁に先端三角に整形した工具による結節沈線を施す。新道式。

B：平縁で筒状となるであろう深鉢。胎土に雲母・石英・長石を多く含み、焼成が良くない。隆帯により、横帯区画した間を楕円状に区画する。隆帯の縁を結節沈線でなぞる。狢沢式。

C：平縁で筒状となる深鉢。厚手で胎土に灰色砂粒を多く含む。隆帯で、横帯区画した間を楕円状に区画する。隆帯の縁に幅広の工具による細かい結節沈線でなぞるいわゆるキャタピラ文を付す。サンショウウオ文を付すものがある。藤内Ⅰ式。

4．Ⅴ期

土器は3群にわけられる。Ⅰ群は諏訪湖盆から上・下伊那、中信地方に分布する唐草文系、Ⅱ群は八ヶ岳東麓から山梨県に分布の中心をもつ曽利系、Ⅲ群は南関東に分布の中心をもつ加曽利E系である。

○Ⅰ群

A：キャリパー状の長い口縁に、丸味をもった胴部の付くいわゆる蒸し器で、口縁部は隆帯で飾り、頸部は無文で胴上半に櫛形文を付す。隆帯が断面の丸く太いもの（A_1）と断面三角形で細く低いもの（A_2）とがあり、後者には、頸部のくびれの弱く、波状口縁がラッパ状に開口するものも含まれる。

B：キャリパー状あるいはラッパ状に開口する深鉢で、後者には頸部が一旦ふくらむ例がある。口縁は無文で、ふくらむ頸部には粘土紐を斜格子目状に貼付するものが多く、胴部の地文に縦位の沈線を施すもの（B_1）と縄文を施すもの（B_2）とがある。B_1はII群Bに非常に似るが、隆帯の脇に結節沈線、胴部に斜位や横位の沈線が組込まれたり、花崗岩系の混和材が用いられている点が異なる。

C：底の小さい樽形を基本とし、隆帯で腕骨文・渦巻文を描いて間を斜走する沈線で埋めたり、渦巻文を施さずに綾杉状沈線で埋める、いわゆる唐草文土器である。

D：外反する低い無文の口縁部をもつ樽形の深鉢。胴部は沈線または沈線で縁どられた低い隆帯によって縦位に区画され、その間に縄の結節部を縦位にころがして施文する手法が好んで用いられる。

○II群

A：筒状あるいは樽状、時には口縁部がキャリパー状を呈する胴部最大径がやや下位にある深鉢で、口縁部は無文、胴部は縦位の沈線や斜方向にころがす縄文を地文とし、刻みをもつ隆帯を付すものである。

B：キャリパー状もしくは直口の口縁部に最大径がやや上位にくる胴部がつく深鉢。口縁部は無文で頸部には波状隆帯を貼付したり刻みをもつ隆帯による狭い文様帯があり、胴部にはJ状、裏J状、縦位の隆帯を垂下して間を沈線で埋めている。

○III群

A：キャリパー状の口縁に隆帯によるS字状渦巻文を施し、ゆるくくびれて底部にいたる胴部は、縄文を地文として縦位の沈線を垂下する。

B：内湾する口縁部は、沈線や沈線で縁どられた低い隆帯によって円形や渦巻状に区画され、胴部は同様の手法によって縦位に区画される。I群Dと似ており、区画の間は縄の結節部を縦位にころがして埋めている。

5．VI期

主要な器形として深鉢、鉢、浅鉢、注口土器がある。それぞれの器種毎に形態に主眼をおき分類したが、過半数を占める粗製土器は除いてある。

○深鉢

A：口縁はアサガオ状に開いて端部内面が肥厚し、樽状の胴部は中位に最大径がある。頸部に刻目をもつ細い隆帯をめぐらし、それに重ねて8字状貼付文を付す。胴部は頸部に用いたのと同一の隆帯で縦位に区画され、間に縦位に流れる磨消縄文を施す。

B：筒形で小さな底部から口縁に向かって直線的に開口する。口縁部に刻目のある隆帯をめぐらし、8字状貼付文を重ねる例もある。胴上半に磨消縄文帯が横位に構成されている。

C：口縁部は直線的に開口し、頸部がゆるくくびれる。口縁部に刻目のある隆帯をめぐらし、8字状貼付文を重ねる例もある。胴上半には磨消縄文帯が口縁と平行に構成されている。

D：口縁は直線的に開口し、端部でゆるく「く」字状に内屈する。口縁から頸部に縄文を地文とする横位の文様帯を作り出し、横位に平行する沈線の区画の間に、ヘラ状工具による短線や短い弧線モチーフが施される。口縁は波状が多いらしく、波頂部に多様の突起を付す。胴部以下を知る資料はないが、頸部でくびれ、最大径を上方におく胴部につながると思われる。

E：口縁部は丸味をもち、端部で立ち上がるか内屈しながら大きな波状を呈する。頸部でゆるやかに屈曲するものと思われ、口唇を刻む例が多く、口縁部・胴部にはヘラ状工具による羽状沈線が施される。

F：頸部から開口したのち口縁端部で内屈する。頸部でくびれ、胴部の最大径は上位におく。内屈する

口縁部は弧状の沈線によって区画され、縄文を地文とするものとしないものとがある。それ以下は胴部にいたるまで羽状沈線が施されるが、口縁部下端は無文となる。

G：頸部でくびれ、口縁部が直線的に開口する平縁の土器。口縁部の下半は無文帯となり、その上半と胴部は羽状沈線で埋められている。

○鉢

深鉢Aのつぶれた形で、口縁部はアサガオ状に開き、胴部は上位に最大頸をおいて小さな底部にいたる。胴部に沈線で縁どられる逆位の波頭状になることの多い横位の磨消縄文が施される。

○浅鉢

A：口縁は丸味をもって内湾する。口縁部に彫りの深い沈線による渦巻状の装飾を付す。

B：口縁が「く」字状に内屈する。内面上方に横位の深目の沈線による文様帯を付す。

C：口縁が内屈あるいは端部で直立する。その端部が文様帯となり、横走する弧状の沈線によって区画されることが多く、縄文を地文とするものとしないものとがある。深鉢Fと系統を一にし、その胴部以下を取り去って小さ目の底部を直接つけた形といっていい。

○注口土器

注口部のみの破片は多いが、全体形を知る資料は限られ、2種類を指摘できる。

A：口縁部と体部に幅広で浅くなめらかな沈線を横位に引くもの。口縁がやや内湾しながら立ち上がり、体部が丸くなるものと、口縁が外湾しながら立ち上がり、体部も肩を鋭角的に作出するものとがある。沈線は上にボタン状の貼付をするか刺突を配して分割されている。

B：口縁は開口して端部で「く」字状にゆるく内屈し、体部は肩部の丸味をもった算盤玉状を呈する。口縁の屈曲部と体部の肩には、横走する沈線で弧状に区画して縄文を地文とし、低い瘤状の貼付が付く例もある。深鉢F、浅鉢Cと系統を一にする。

II．石器の分類

定形石器の定義と分類および計測基準・図化方法等は、阿久遺跡のそれ〔笹沢他1982〕に従った。現在、石器は形態によって分類されている。とすれば、形態上の特徴の抽出基準を動かすことは、遺跡間の比較を不可能にすることに他ならず、まず、他遺跡でおこなわれたのと同じ基準で分類することが、中越遺跡の石器の特徴をつかむ第一歩と考えたからである。阿久遺跡からは中越式期を含む縄文前期の遺物が大量に出土しており、しかもそこでの分類が十二ノ后遺跡〔樋口・宮沢他1976〕のそれを踏襲したものである点から、用いるのに最も適していると判断した。この分類で抽出し得ない部分については後にふれたい。ただ、石鏃などでの細部については、多分に感覚的なところがあり、どこで線を引くかは他遺跡と異なるかもしれない。また、次のように石器名称の一部を改め、分類も変えてある。

凹石→叩石、先端研磨石器→礫端叩石、有抉顕磨石器→打製石錘

以下、主要な石器について、分類基準を示しておく。

1．石　鏃

茎の有無、基部形態、側辺形態、先端の鋭さによって分類してある。

まず、茎の有無によって有茎と無茎にわけ、基部形態により凹基、平基、円基、尖基に大分類した上で、そのうち凹基について抉りの深さ（全体の⅓以上と深い、¼以上⅓未満と中程度、¼以下と浅い）逆刺の形状（鋭い、鈍い、円い）の組み合わせにより、深くて鋭い(A)、深くて鈍い(B)、深くて円い(C)、中

程度で鋭い(D)、中程度で鈍い(E)、中程度で円い(F)、浅く鋭い(G)、浅く鈍い(H)、浅く円い(I)と9細分し、全体について、側辺の形態から五角形(I)、内湾(II)、直(III)、外湾し最大幅下端(VI)、外湾し最大幅下方(V)に、また先端の鋭さにより鋭い(a)、ふつう(b)、鈍い(c)、円い(d)、平ら(e)とそれぞれ5分類し、これらを組み合わせて表現した。抉入刺突具の扱いも同様である。

2．石　匙

つまみと片面加工の刃部を持つ。まず両者の関係から縦型(A)、横型(B)、斜型(C)にわけ、つまみの大きさから、抉りを入れただけの大型(I)、中型(II)、小型(III)、極小型(IV)に、刃部の形態から外湾(a)、直(b)、内湾(c)に類別し、これ等を組み合わせて型式分類とした。

3．石　錐

一部あるいは全体を棒状に加工してあるもので、全体形からつまみを有するもの(A)、棒状のもの(B)に分け、二次加工の種類を両面加工(I)と片面加工(II)に区別し、両者を組み合わせて分類した。

4．打製石錘

不定形な素材に1対の抉入のみを加工してあるもの。「有抉顕磨石器」と呼ばれていた。

5．スクレパー

掻器、削器類に二次加工のある不定形な石器を含んでいる。刃部の形態と素材により分類した。

刃部の形態から舌状または拇指状(A)、外湾(B)、直(C)、内湾(D)に区別し、その加工方法から片面加工(I)と両面加工(II)に二分し、素材から剝片(a)、石核(b)、原石(c)に分け、これらを組み合わせて型式分類とした。

6．打製石斧

全体形と法量・刃部形態によって分類した。全体形から撥形(A)、短冊形(B)、分銅形(C)にわけ、法量は斧身長が13cm以上(I)、10cm以上13cm未満(II)、10cm未満(III)とし、刃部形態から直刃(a)、円刃(b)、偏刃(c)にわけ、以上を組み合わせた。

7．横刃型石器

硬砂岩、緑泥片岩、輝緑岩などの主として剝片を素材として縁辺に片面加工の剝離痕のあるもの。形態としては不定形で、量も少なく、細分はしてない。

8．磨製石斧

量が少ないこと、破損品が多いことから細分はしてない。ただ、わかるものについては、定角・乳棒状・部分磨製（打剝面を多く残すもの）の区別をしてある。

9．叩　石

叩石と凹石や磨石等と呼ばれているものを含む。複数の作業の痕跡を残す多機能石器である。石器面に残されていた変形の中では面をなす叩きが最も多く、総称として「叩石」を用いた。

石材から、叩き、凹み、磨りの範囲を面として明瞭に区別することが出来、その観察から、それ等は全て使用痕であるとの結論に達した。そこで、素材となる扁平な円礫を、平面形によって棒状(A)、長円形(B)、円形(C)にわけ、観察された使用痕、凹み(a)、磨り(b)、叩き(c)を並記して分類した。

10．礫端叩石

石器の属性は「先端研磨石器」と仮称した際の定義とかわらず、棒状の礫の端部に平坦な面が形成されているもので、棒状の転石をそのまま使った石器である。平坦面も含め、石器に観察される傷は全て使用痕で、それ等には、仮称の根処となった礫端にみられる長軸と斜交する平坦面を形成する叩き(a)、先端

近くの自然面の稜の部分にみられる軸線と直交方向の線状痕(b)、胴部にみられる対をなす例の多い凹み(c)の3種がある。性格や素材に叩石との共通点が多く、やはり多機能石器とすることが出来る。分類では、観察された使用痕を並記するにとどめた。

11. 石　皿

板状の大礫を用い、その平坦面に磨面がみとめられるものである。

12. 敲打器

叩石、礫端叩石と異なる敲打の痕のみられるものを一括した。礫の端部に小剝離の集中するものと、塊状の礫の稜に敲打痕の集中するものがあるが、いずれも量が少なく、細分はしてない。

第3節　発掘調査と報告書作成の経過

Ⅰ　調査の経過

中越遺跡では、昭和31年11月から昭和59年8月までに、14次にわたる調査が実施されている。また、現在も遺跡のある台地上の土地区画整理事業に伴い、緊急発掘調査が継続中でもある。本報告書は、第1次から第14次までの調査の結果と、現在村教育委員会が保管している若干の資料をまとめたものである。各調査は性格を異にしており、第1次、第3・4次、第5次、第2・6～9・11～14次、第10次の5種にわけられよう。

第1次調査は、中越遺跡に縄文前期の部分があることに注目した地元研究者によって、その内容を知るべく初めて実施されたもので、縄文前期初頭の尖底土器がこの時すでに採集されている。第3～第4次調査は、最も多くの住居址が発掘され、現有する資料の過半数が得られたが、大規模な集落址の全体像をつかもうとしてかなり性急に調査が進められたことや、検出した遺構と遺物の整理をするのに充分な体制を整えることができなかったこともあって、その成果は、現在までのところ参加した研究者個個に蓄積されたにとどまっている。第5次調査は第4次までの調査の不充分な点を少しでも解明する目的をもって学術調査として実施されている。第2・6～9・11～14次調査は、個人住宅や公共施設建設に伴う事前の緊急調査で、おおむね小規模である。そのうち第2次調査は第3次調査に踏み切る契機でもあった。第10次調査は範囲確認調査であり、遺跡の立地する台地上の広範囲にグリットを設定して資料を集めている。村および村教育委員会は、第2次調査の途中からかかわりをもち、第3次調査以降14次調査まで主体となって調査を進めてきた。

遺物への注記や原図類を整理する中で、過去に公表された資料と若干異なる部分も出てきたので、調査時期を中心に検出遺構も含めて以下に整理しておきたい。遺構の所属時期はことわらない限り縄文前期である。なお、それぞれの調査経過については、第2章各節の始めに詳しくふれてある。

中越遺跡発掘調査の経過[1]

第1次調査
- （第1・2次）昭和31年11月　第1～5トレンチを設定し、1号住居址を完掘し、2号住居址の一部を発掘。
- （第3次）昭和32年3月　2・4号住居址を完掘し、3号住居址の大部分を発掘。

第2次調査（第3次）昭和40年11月　3号住居址の未掘部分と5・6号住居址の一部を発掘。

第3次調査　昭和43年9月　第1～12トレンチを設定し、6・8～12・25～28・31・33号住居址、7・13・14・18・23・32号住居址の大部分、15～17・19～22・24・29・30号住居址の一部およびイ号竪穴を発掘。

第4次調査　昭和44年7月　第13～21トレンチを設定し、13・17・35・37・47号住居址、44・48号住居址の大部分、34・36・38～40号住居址の一部およびロ号竪穴を発掘し、41～43・45・46・49～52号住居址の存在を確認。

第5次調査　昭和51年8月　53・54・55号住居址の半分、56号住居址の一部、1号土壙を発掘。

第6次調査　昭和52年4月　57号住居址、縄文後期の土壙墓と石棺墓、その上の集石・配石・立石を含む積石が径100mの環状に連なると推定される環状積石墓の一部――ピット約100基、石棺墓1基を含めた集礫遺構35基――を発掘。(2)

第7次調査　昭和52年6月　43号住居址、58・59号住居址の一部を発掘。

第8次調査　昭和52年11月　土壙3基、集石2基とピット群を発掘。

第9次調査　昭和53年11月　62・64号住居址、60・61・63号住居址の半分を発掘。

第10次調査　昭和53年11月　40軒弱の住居址(3)（うち約10軒が縄文中期）、弥生時代1基を含む数基の土壙、時期不明の溝址を確認。

第11次調査　昭和55年5月　土壙4基、配石を発掘。(4)

第12次調査　昭和56年7月　遺構なし。

昭和56年8月(5)　縄文中期の1・2号貯蔵址（倉庫址）と土壙1基を発掘。(2)

第13次調査　昭和56年9月　縄文中期の97号住居址と土壙1基を発掘

第14次調査　昭和59年7月　76・79・98～100・102・104・105・107号住居址、101・103・106号住居址の半分、方形柱列の一部を発掘。

以上の調査によって検出された主要な遺構は、縄文前期の住居址105軒弱(完掘30、部分発掘41、確認30強)、竪穴2基、土壙5基、方形柱列1もしくは2基。縄文中期の住居址10軒強（完掘1、確認約10)、貯蔵址2基、土壙2基。縄文後期の積石石棺墓1基、土壙墓とそれをおおう環状積石墓の一部（ピット100、集礫遺構34)。弥生時代の土壙1基である。住居址は合計約115軒を数えるわけだが、完掘されたのは31軒にすぎない。

II　報告書作成の経過

過去の調査結果は、第1次調査が経過を中心に『伊那路』に概報告され〔藤沢1957・3・9〕、第3・4次調査はそれぞれ概報にまとめられていた〔村教育委員会1969・1970〕だけであった。

昭和50年ころから、第4次調査までの正報告書を作成しようという動きはあった（昭和51年の第5次調査は、正報告書作成を前提として実施されたのである)。しかし、後に中越遺跡だけでも前記のような調査の必要が継続的に発生し、村内のほ場整備に伴う大規模な発掘調査、それに加えて宮田村誌刊行という大事業が重なり、その間、第10次調査の結果が「中越遺跡範囲確認調査報告書」(1979）としてまとめられ、「宮田村誌」(1982)に概括的な成果と代表的な調査結果の一部が掲載されたものの、報告書作りは、遅遅として進展しない状態に陥ってしまったのである。

そこで村教育委員会としては、昭和60年10月より、新たに専従する職員を配置し、報告書作りに取組んだ。報告書は第1次から第14次までの調査結果を盛り込むこととし、整理は、宮田村総合福祉センターに保管されている遺構図（原図・トレス図・概報掲載図）と遺物をもとにして、復元も含めて新たに図をおこすことから出発した。遺構図の整理、遺物の整理・実測・採拓・図版作りが、調査にたずさわらなかった者の手になっているわけで、報告書の形で保存するために発掘するという埋蔵文化財調査の基本からみて、また、昭和45年に長野県考古学会主催の「中越遺跡をめぐる諸問題」と題するシンポジウムが開催され、その中で第3・4次調査団の報告に対して全国的視点から様々な問題について指摘、追求された（そ

の内容を報告するものはない。当日、藤森栄一会長が宿舎で倒れるという突発事故があった点も一因である）という経過からみても、異常ともいえることであるが、第4次までの調査で団長をお願いした藤沢宗平先生はじめ、第3・4次調査の顧問であった八幡一郎・藤森栄一両先生、調査のまとめの主役でもあった小松虔・遮那藤麻呂調査員までが他界してしまった現在、止むを得ぬことと御理解頂きたい。ただ、平成元年3月21日に、過去の調査にかかわった主要な方達にお集まり頂き、編集方針について了解を得ており、遺構の一部について、調査にあたった方に記述をお願いしてもある。

III　地区設定（図10）

現在、中越遺跡には、遺跡の範囲の大部分に1辺10mのグリッドが設定されている。役場北側を東西に走る中越北線上に引かれた基準線をもとに、南北が基準線から南へ130mと北へ170m、東西が国道153号線から東へ570mの範囲である。そしてグリッドは、南から北へA・B・C・……・Y・Z・Z－1・Z－2・Z－3・Z－4、西から東へ0・10・20・30・……・550・560（『宮田村誌』本文中および遺構分布図）あるいは0・1・2・3・……・55・56（『宮田村誌』住居址一覧表）と呼ばれ、さらにそれぞれのグリッドは、1辺2mの小グリッドにも分けられている。このグリッドの初見は第9次調査だが、第10次調査の調査坑、第13次調査のグリッドは、これとは無関係に設定されており、第9次調査と第14次調査では小グリッドの呼称が異なり、さらに第11・12次調査では基準線だけは使用されているものの、1辺2mで設定したグリッドは、それぞれ独自の呼び方をしている。このように設定された地区割りには、遺跡地の全面をおおうものでなかったとともに、その呼称も厳密には統一されていなかったというのが実情である。

そこで報告書[6]では、次のように地区設定をして調査地点を表記することにした。すなわち、既定の1辺10mのグリッドを遺跡全面に広げた上で、

①南北250m、東西1000mを大区とする。呼称は現AOグリッド南西隅を起点とし、南東をA区、北東をB区、さらにその北をC区とし、南西をD区、北西をE区、その北をF区とする。

②大区を1辺10mの中区にわける。呼称は、南北は南からA・B・C・……・X・Y[7]、東西は西から00・01・02・……・98・99とする。

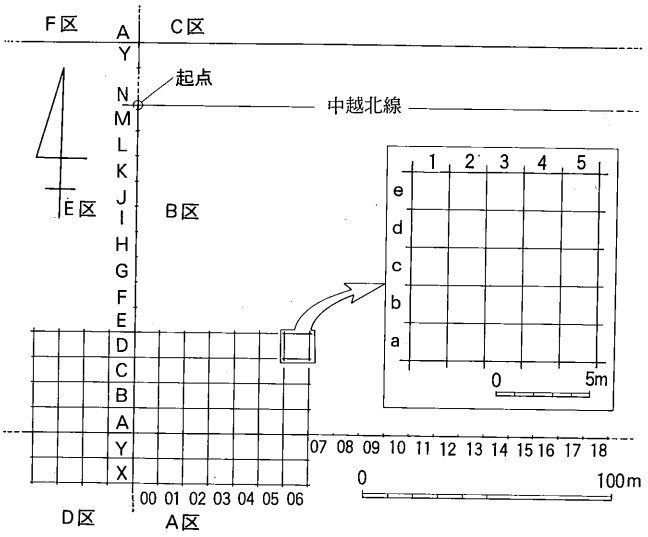


図10　座標軸設定模式図

③中区を1辺2mの小区にわける。呼称は、南北は南からａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ、東西は西から１・２・３・４・５とする。

表記は、中区は大区との組み合わせで例えばＢＮ12、ＣＡ24のように表わし、小区を示す必要のある場合は、ＢＮ12―ａ３のように表わすことにする。

第８次調査以前の調査区はそれぞれ全く異なる形で設定されているわけで、この地区設定も本書では、おおよその調査地点や範囲を示す手段でしかないことは言をまたないが、過去において遺跡地区の広範囲にグリッドを設定した事実があり、しかもそれが充分に機能し得なかったことを確認した上で、以上のように地区設定をした。

註１　第２次調査までのカッコ内は調査時の呼称、日付は開始月である。また第11次調査以降の調査回数は遺物や現場記録に従った。

２　検出遺構の性格は調査者の記録（『宮田村誌』）に従った。

３　『中越遺跡範囲確認調査報告書』によれば、64から95号まで番号を付された住居址（欠番71・72・80）と番号の付されなかった11軒の計40軒の住居址が確認されたことになるが、現場記録等をみると、実数はこれを若干下回るらしい。

４　『宮田村誌』には、昭和56年８月調査での検出遺構が第11次調査のものとして記載されている。

５　『宮田村誌』にはこの調査は記載されていないが、検出遺構は、昭和56年８月の調査結果として記されている。

６　第６次調査地点、第10次調査のいくつかの調査坑は、従来の地区設定では位置を表記し得ない。

７　従来そこまでは広がらないともされている国道153号線以西に大区を設定したのは、第10次調査でＥ大区に調査坑が穿たれていることにもよるが、後世の構造物である国道が遺跡の範囲を区切るものとなるのがあまりに不自然であり、以西に広がる可能性を残したいがためである。

第２章　発掘調査各説

第１節　第１・２次調査

Ⅰ　調査の経過

調査は昭和31年11月10・11・23～25日（前半第１次、後半第２次）、32年３月22～28日（第３次）、40年11月29日～12月２日（第３次）に実施された（カッコ内は調査時の呼称）。本書では前二者をまとめて第１次、後者を第２次としてある。前二者が継続的な調査であったことにもよるが、後者に続く昭和43年のそれが、後に第３次調査として整理されているためである。

第１次調査は、昭和28年４月、宮田中学校グランド（現中央グランド）造成時に、BM12付近にみつかった破壊された住居址から、尖底土器を採集してこれに注目した太田保〔小出保1955〕が呼びかけ、伊那考古研究会が主体となって実施したもので、藤沢宗平を発掘指導者とし、上伊那郷土研究会員、小松虔、樋口昇一、伊那北・赤穂・伊那弥生ケ丘各高校の生徒等が参加している。調査が具体化した背景には、当時『信濃史料』の調査に来村して太田採集の資料を見た、樋口・小林政三の強いすすめもあった。調査地点はグランド北側道路に接する畑の、昭和29年に太田・本田秀明が予備調査をした場所であるBN12で、昭和31年には、南北方向に平行する第１・２トレンチ、その北方に第３トレンチを設定し、後に、第１・２トレンチをつなぐように第４・５トレンチ、第２トレンチ拡張区を設け、１号住居址を完掘、２号住居址の一部を発掘し、翌年、２・４号住居址を完掘し、３号住居址の大部分を検出している（図11・12）。

第２次調査は住宅建設に伴う緊急調査で、太田保によって始められ、後に宮田村と村教育委員会の手に移り、藤沢・小松・友野良一の指導の下に宮田中学校生徒の協力を得て実施されている。第１次調査地点の東端にあたり、３号住居址の未掘部分と新たに５・６号住居址の一部を検出している。

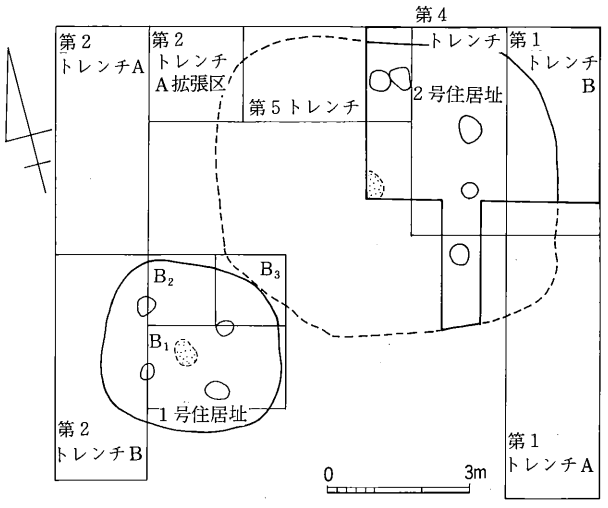


図11　第１次調査トレンチ設定概念図

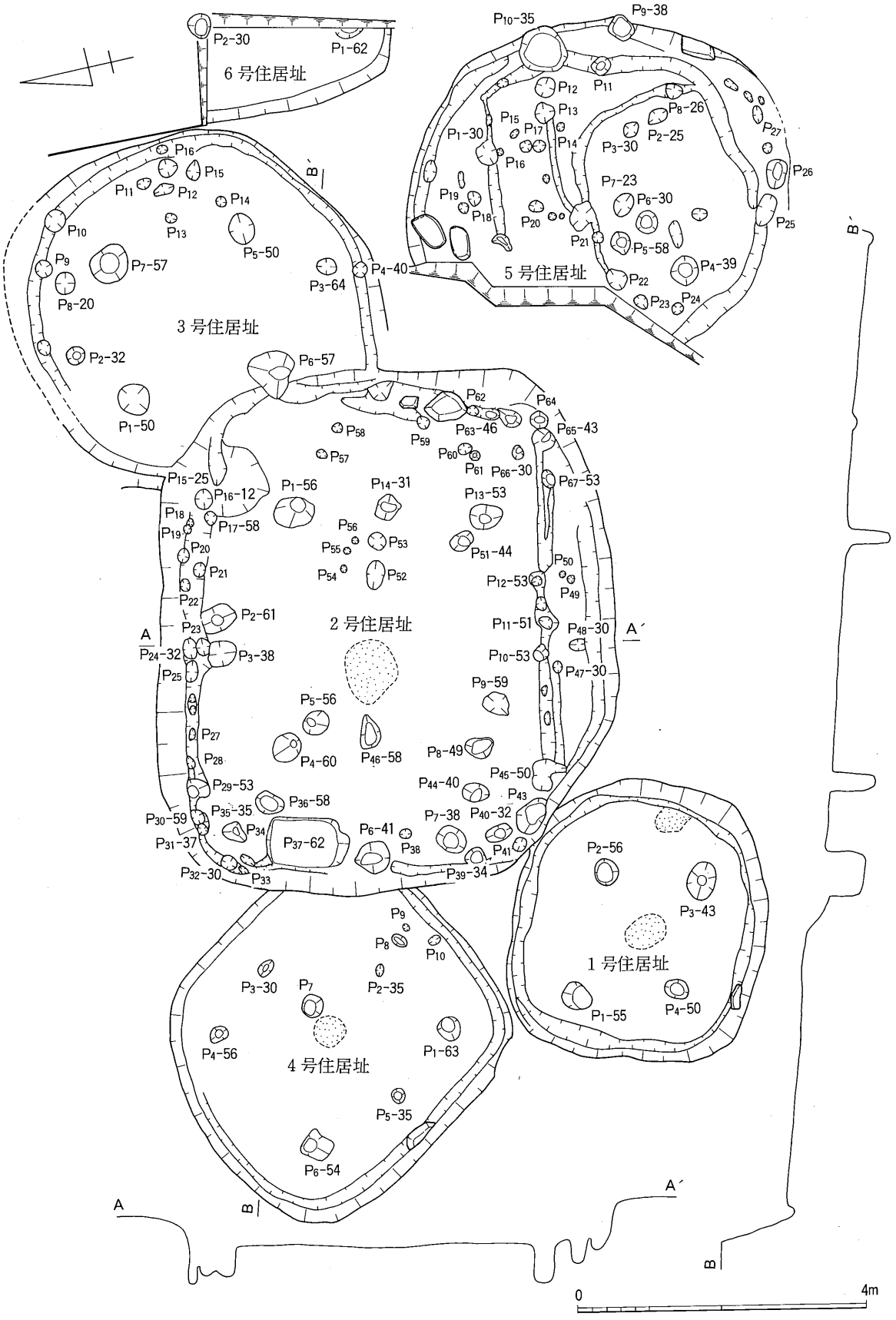


図12　第１・２次調査遺構全体図

第１次調査の結果は概要が報告されている〔藤沢1957〕が、第２次調査については公表されておらず、宮田村誌にも記されておらず、出土遺物も長い時間の経過の中で散逸もしくは混在しているようで、特に３号住居址出土の全ての土器と、１・４号住居址出土の土器片は散逸もしくは２号住居址出土遺物の中に混入しており、第１次調査の石器も相当量が保存されていないように見うけられる。しかし、あらためて分けたり捜すことも不可能であり、現有する遺物に従った。また、この調査で検出した遺構を現地形上に示す図はない。(1)

II　遺構と遺物

1）　1号住居址

北東隅のわずかを２号住居址（以下「住居址」は「住」とする）に切られている。平面形はN70°Wに長軸をおく4.0×3.6mの円形に近い隅丸方形を呈する。埋土は上から黒褐色土・褐色土で、中層に礫が多数入り込み、床上４cm位の黒色土中に多量の炭化材が交差するように横たわっていた。炭化材の大きなものは径５cm、長さ１mはあり、南側に多く、北西隅では壁にたおれかかった状態にもなっており、焼失住居と考えられる。また、壁下の２箇所に焼けた骨片があり、大きなもので17cmを測った。床面は非常に堅く、中央に地床炉、壁下に周溝を設けている。主柱穴はP_1～P_4の４本である。

特記すべき遺物の出土状態として、西壁下からＩ期Ｉ群Ｃの完形土器（13）が、中央から東寄りにあたる第２トレンチB拡張区の発掘時に、礫の下から完形と胴部以下の２点のＩ期Ｉ群土器（後に現場より持去られる）が出土した他、西壁下の周溝から床面にかけて、小形の石器と黒曜石片がかたまって出土している。しかし現在は、13の深鉢の他は、Ｉ期Ｉ群土器（１～12）の破片数十点と石鏃(1)・打製石錘・叩石（24）各１点，石匙（２・３）３点，スクレパー(4)２点が残っているだけである。

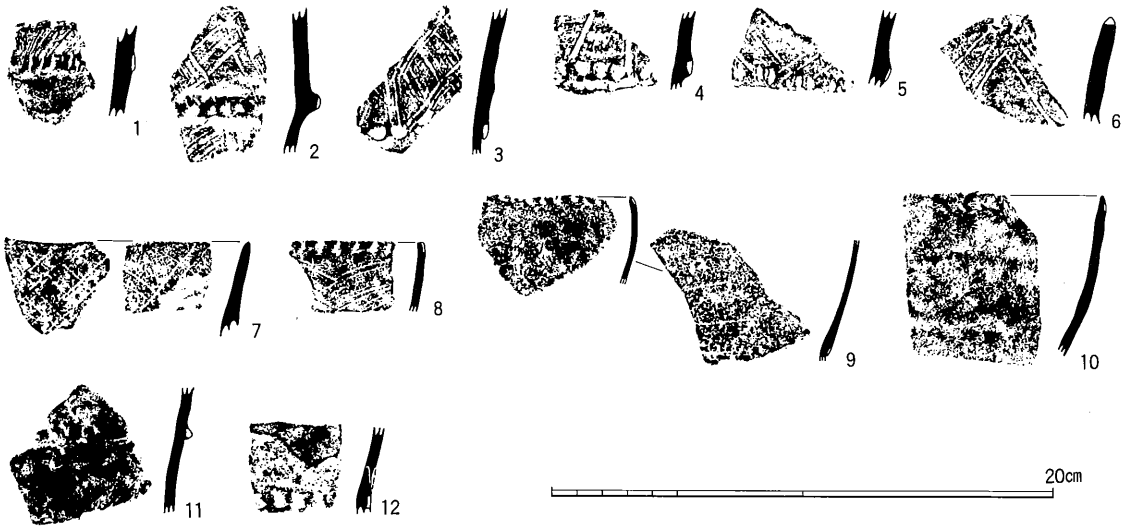


図13　１号住居址出土土器拓影

2）　2号住居址

４号住の東側と１号住の北東隅、３号住の南西隅をいずれも切っている。掘りあがったところでは、平面形はN80°Wに長軸をおく7.2×6.4mの南壁のふくらむ隅丸長方形を呈し、本遺跡では大型住居である。

埋土は、南・西壁下で特に厚く中央部で10cm位に薄くなる黄褐色土の上に、中央部の厚くなる赤褐色土、その上に同様の黒色土が入りこんでいる。周溝がわずかに切れるものの壁下を全周し、南壁下では張り出す部分の内側にさらに2本の周溝が直線的にある。床面は非常に堅く、図でみる限り、南の張出部は少し高い。中央西寄りに地床炉がある。柱穴と考えられるピットは多い。埋土の詳しい観察結果が残されていないので誤りがあるかもしれないが、次のような2回の建て替えを考えてみた。つまり、最も古いのがP_1・P_5・P_9・P_{13}を4主柱とし、南の張り出し部の形で床面をわずかに残している隅丸方形に近いかと思われる住居で、次はP_1・P_4・P_8・P_{13}を4主柱とし、南は内側の並列する溝のうち外側を周溝とする隅丸長方形の住居、最も新しいのが、前の住居を少し掘りさげ、P_1・$P_{36}$$P_{44}$・$P_{13}$の4本柱に南は最も内側の溝を周溝として，他は掘りあがった状態となる住居、という推定である。少しずつ北方へずれるとともに床面をさげながら隅丸方形から隅丸長方形へと建て替えた結果とみたわけで、最も新しい住居址の短辺は5.7m前後となる。さらに周溝上には多くの深いピットがあるが、上屋構造に関係する柱穴もあろう。例えば、P_{45}・P_{10}・P_{12}・P_{65}、P_{45}・P_{11}・P_{67}・P_{17}・P_3・P_{29}あるいはP_{30}・P_6・P_{43}などは、それぞれセットととらえることもできよう。

遺物は、中央部の広い範囲の赤褐色土中の地表下70～90cmより、炭化物（菱の実）・木炭・骨片・焼土粒とともに、層をなして多量に出土した。さらに土器は、赤褐色土中や黒色土下部にも多く、上位にII期(縄文施文の土器)、下位あるいは壁寄りにI期（無文土器）が多く、黄褐色土から出土する遺物はごく少なかった。

大量の2号住出土遺物のうち、土器は、最も多いのがII期I群で、III群も多い。II期I群ではA（15・16・46～88)、C（17・18・21～23・89～91・98～107・114・119～128・137～142・・147・148)、E（29・180～194）と大量のA・Cの胴部片、III群ではD（28・30～33・197～202）およびDの胴部と考えられる無文土器が大部分である。出土状態からみて、神ノ木式期の一括廃棄土器を含んでいるのだろうが、それを抽出することはできない。さらに、経過でふれたように過去の整理過程で遺物が混じっている可能性があり、また保存されている遺物を実見すると、無文土器や小破片は除かれているようにも見え、これ等が2号住居址から出土した全てであるとは断定できない。石器には、石鏃（5～8）6点、石匙（9～13）32点、石錐4点、打製石錘1点、スクレパー(14) 5点、横刃型石器(35)・磨製石斧(36)各1点、叩石(25～31) 7点、礫端叩石（32～34）3点がある（図版78)。しかしこれも、「石鏃274点、石匙72点、石錐6点、石斧3点が出土」したとの記述〔林1965〕がある一方、第1次調査では「発掘によって117点、表面採集で237点の石鏃を採集」したとの記録〔太田未刊〕もあり、実数は不明とせざるをえない。石鏃50～100点、石匙50点位は出土したのではないかとも思われる。他に土製品としてII期I群Eのミニチュア土器(図14—1）と土製円板（2・3）がある。(2)

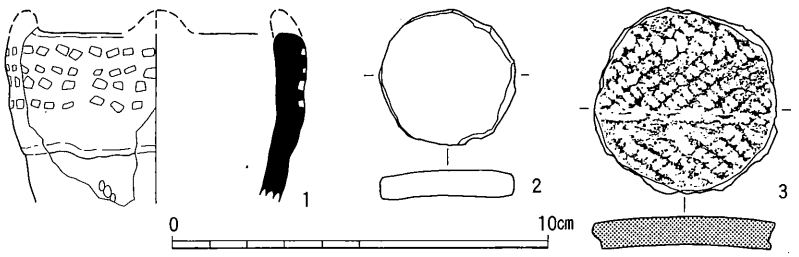


図14　土製品実測図

3） 3号住居址

2号住に東隅を切られる。平面形は南北に軸線をおく4.6×4.6mの円味をもった隅丸方形で、床面は堅く、図示してないが中央北寄りに地床炉が確認されている。主柱穴はP_1・P_5・P_6・P_7の4本で、P_2・P_3も上屋構造にかかわるものであろう。周溝が壁下をめぐる。2号住北東隅を拡張するように発掘されているためか、埋土等についての記録はない。遺物も「土器尖底部が出土し無文が多いようで1号住居址出土土器に似る」〔藤沢1957〕とあるものの、土器は保存されておらず、礫端叩石1点（37）を残すのみである。

4） 4号住居址

2号住に東隅を切られる。平面形はN30°Wに長軸をおく4.4×4.0mの北西壁が円い隅丸方形で、1号住と同一トレンチ内に位置しながら、2号住の壁清掃時までみつけられていない。床面は非常に堅く、中央に地床炉がある。北東側を除き、壁下に周溝がめぐる。主柱穴はP_1・P_4・P_6で東側に検出されなかった1本を想定し、4主柱としたい。P_3・P_5は支柱穴であろう。遺物は、無文土器が多い〔藤沢1957〕とされているが、2点の縄文施文の土器（34・35）と石匙・石錐（15）各2点以外には残されていない。

5） 5号住居址

3号住の南に検出されたが、南側は道路下にかかるため、西側は日程のためか調査されていない。調査当時から切り合いもしくは建て替えがあると考えられていたようだが、明確な記録はない。周溝でいえば、北側は壁下に、南はP_{25}に接する円味をもった幅広の周溝、P_8からP_{21}・P_{22}にかけての隅丸方形の周溝、P_1を通り東西に直線を描く周溝などが、それぞれ別個の住居址に伴うものとして指摘できよう。P_1・P_2・P_4は前者の、P_3・P_5は中者の柱穴となろう。北壁にもたれるようにある石は、石皿とされている。床面状態、炉の有無に関する記録はない。残されている遺物はごく少なく、III群B（40）の他は隆帯を垂下する縄文施文の土器（268）と石鏃（17）・石匙が各1点，スクレパー（17・18）2点がある程度である。

6） 遺構に伴わない遺物

第1次調査のトレンチ、第2次調査の遺構外出土遺物と、中学校校庭造成時に採集された土器をとりあげる他、注記のない遺物にもふれておきたい。

第1次調査のトレンチ出土とされている遺物は、調査経過から1・2・4号住の埋土上層のものを多く含んでいると考えられる。土器は小破片が残されていないようで、I期I群（36・219～227）は少なく、II期I群A（228～235）、C（236～240・246～249・252）およびAとCの胴部（241～245・250・251）、底部（37～39）が多い。III群（257～263）のうち258は第3次調査で10号住から出土した33の胴部である。II群の中に関山式（264・265）III群の中に羽島下層II式（266・267）が2点づつある。石器は、石鏃4点、石匙（20～23）15点、スクレパー2点、叩石（38）1点、礫端叩石（39～41）3点がある。やはり全てではなさそうである。

第2次調査でも上層から出土したとみられる遺物がある。土器はII期I群(269～285)が多い。269は58・235と同一個体であろう。石器は、石鏃2点、石匙5点、打製石斧・横刃型石器各1点、叩石10点、礫端叩石4点と少量の黒曜石の剝片類である。

41・42は中学校校庭造成時に太田が採集した土器で、41はI期I群E、42はI期I群の底部である。

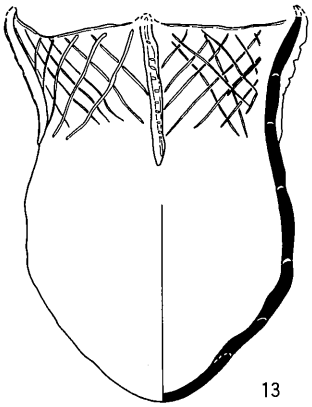
注記のない遺物がある。286～294は第1次調査で得られた土器と思われる。石鏃222点、石匙9点、石錐16点、打製石錘3点、スクレパー13点、打製石斧・横刃型石器各2点、磨製石斧5点、叩石21点、礫端叩石18点を数える大量の石器（図版92・93・94）は、第1次調査で出土した石器には写真〔藤沢1970〕で見

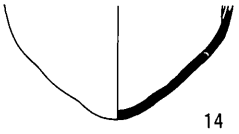
る限り注記が施されていることから、その際実施して得た表面採集品（他の器種は記録がないが、先述したように表採で237点の石鏃を得たとの記録がある）を含んでいるとみたい。

註1　第3次調査で6号住が再調査されており、理論上は可能なのだが、重複して調査された部分をもとに作図すると、すでに公表されている図〔藤沢1970〕を大幅に変更することになり、どちらをとることもできず、断念せざるを得なかった。

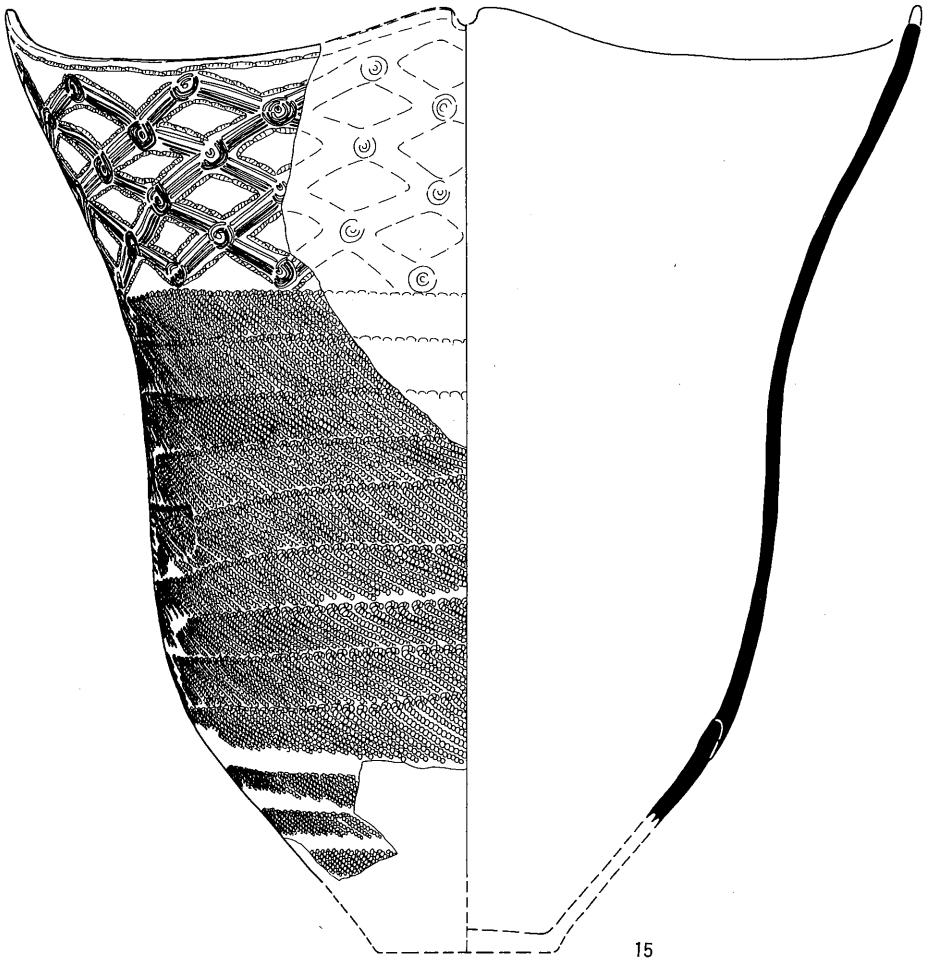
2　現に、今日までに公表されている調査記録の中に、3号住および4号住から主として出土した土器群に16・17・31・32等を含むとの記述〔林茂樹「上伊那誌」P100、1965〕があり、31・32は3号住から出土したというデータ〔吉村進〕もある。しかし、これも31・32が明らかにII期I群に伴うことがわかっている現在、2号住床面近くから、「条の長い縄文施文土器や、薄手尖底の爪形文施文土器が出土した。」〔太田未刊〕との記述にも首肯すべきものがあり、結局遺物は注記に従って扱う以外に方途がなかったのである。

1号住居址





2号住居址(1)



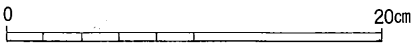


図15　1・2号住居址出土土器実測図

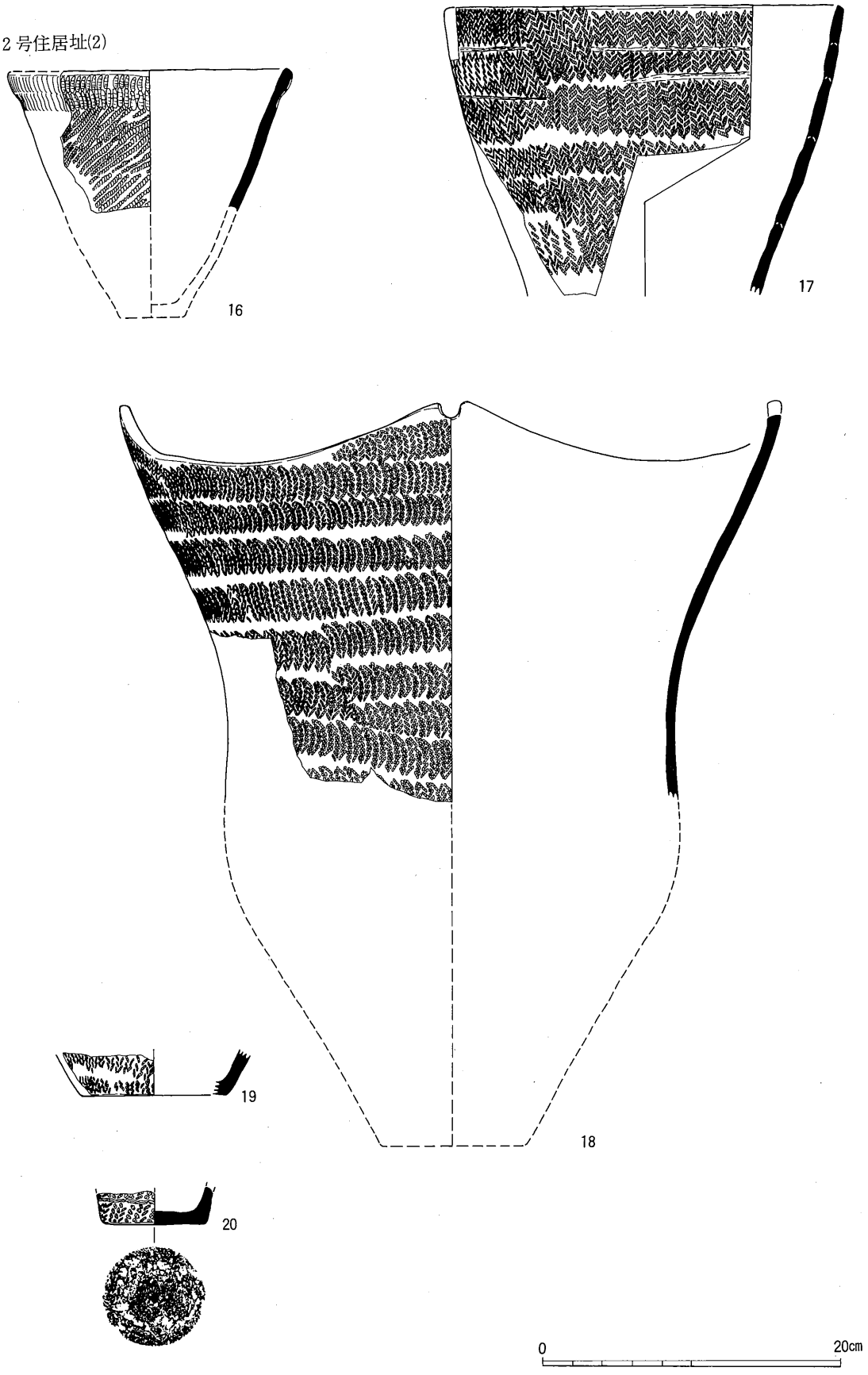


図16　2号住居址出土土器実測図

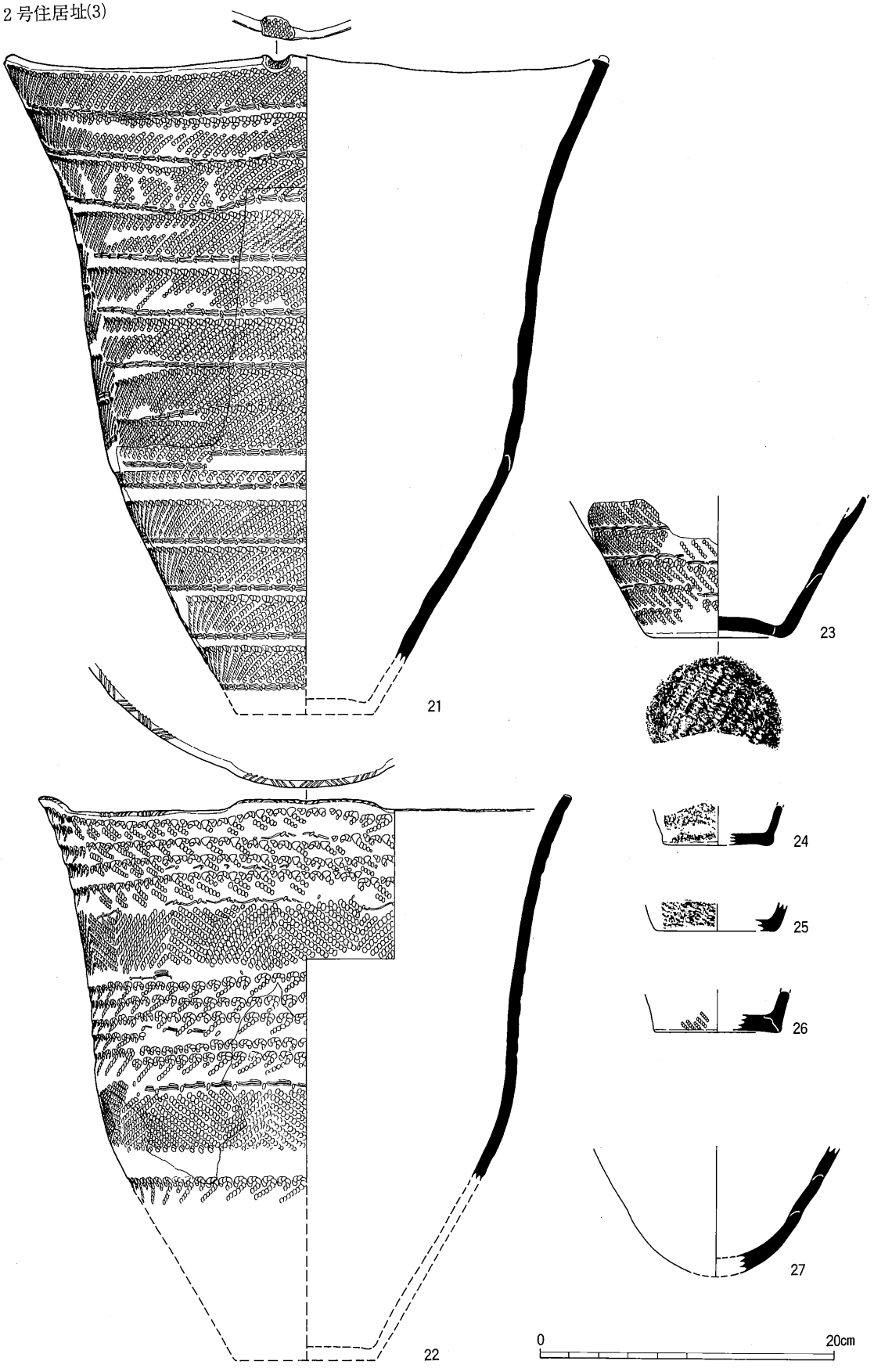


図17　2号住居址出土土器実測図

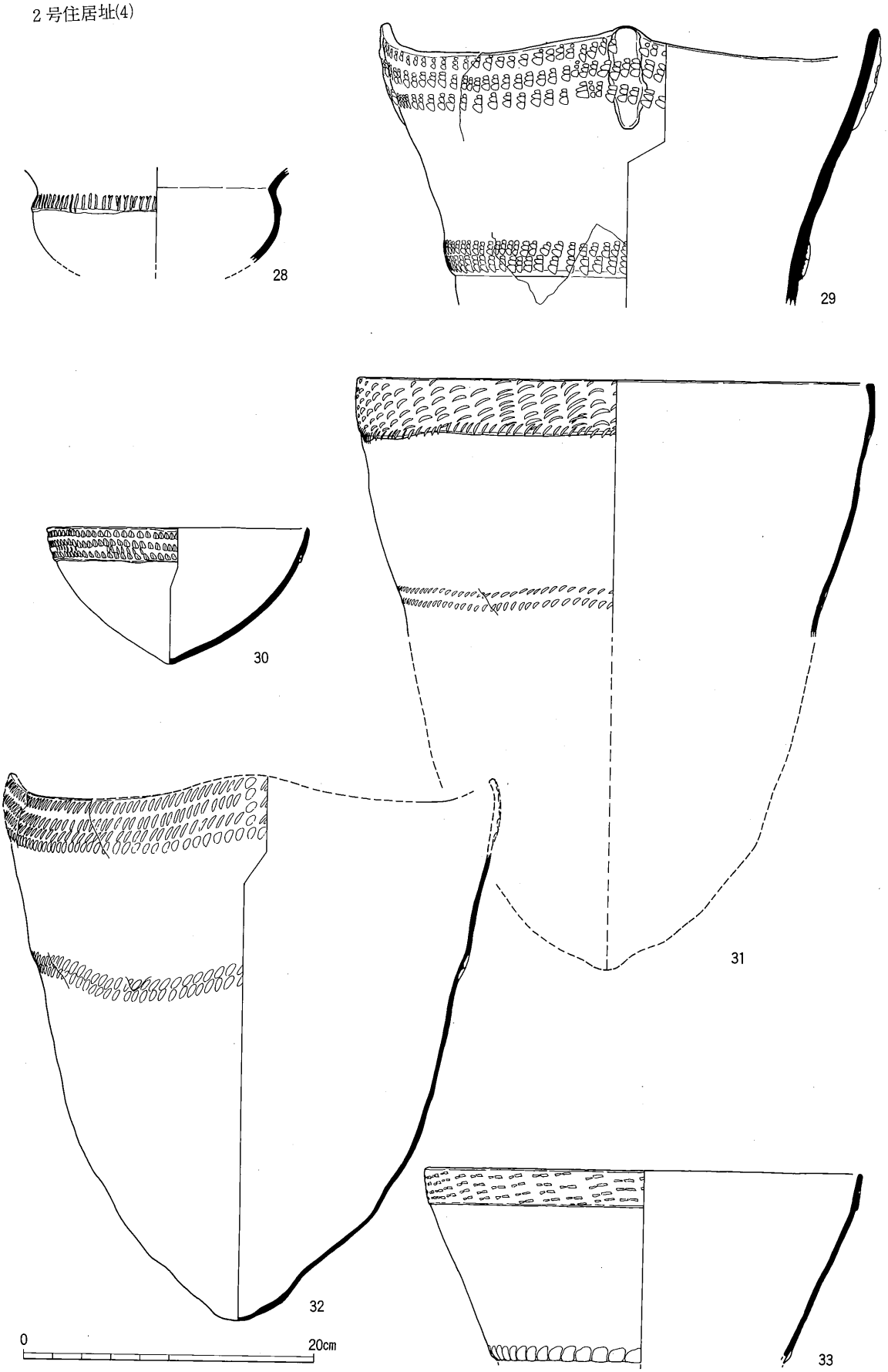


図18　2号住居址出土土器実測図

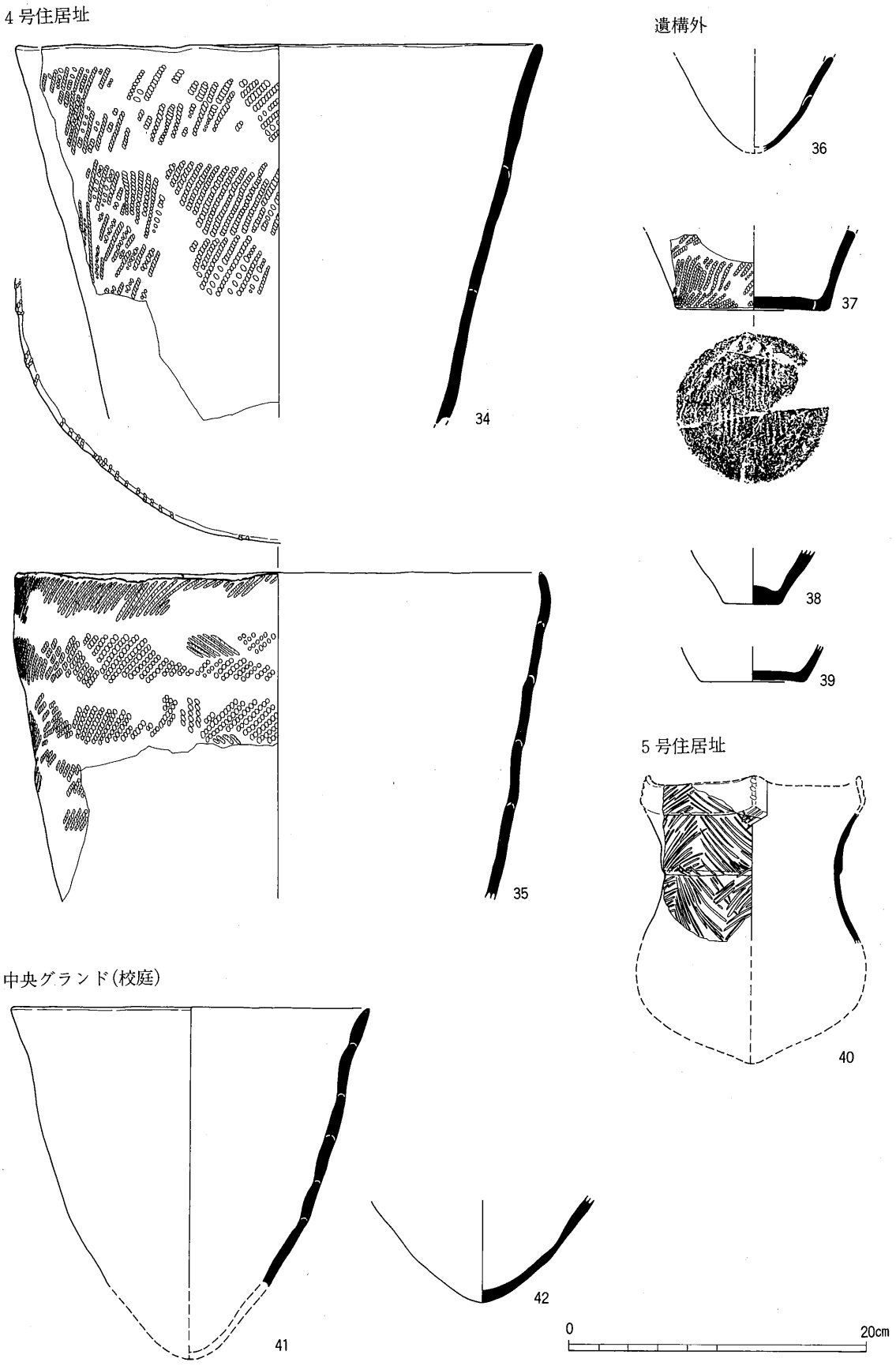


図19　4号住居址、遺構外、5号住居址、中央グランド出土土器実測図

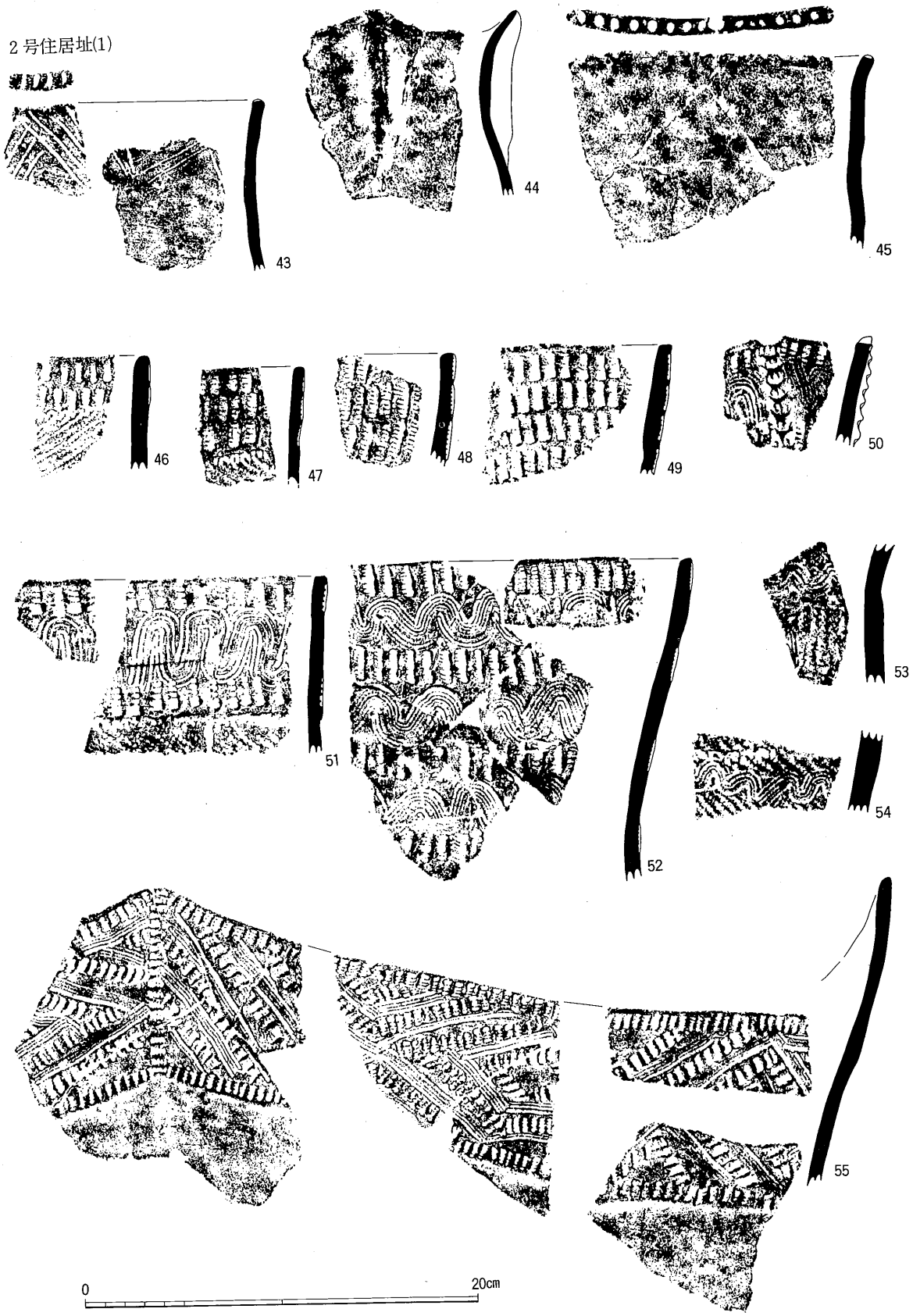


図20　2号住居址出土土器拓影

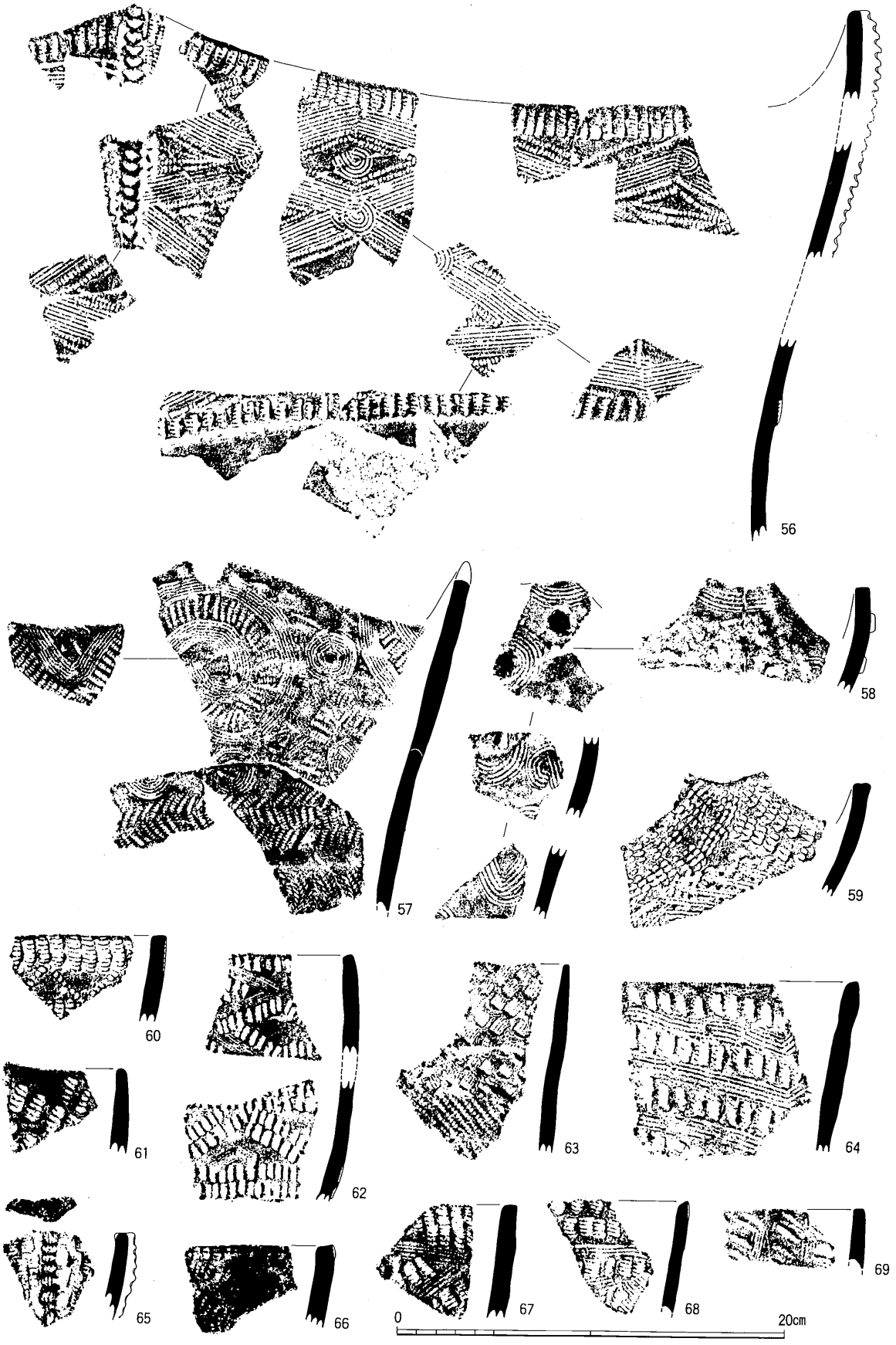


図21　2 号住居址出土土器拓影

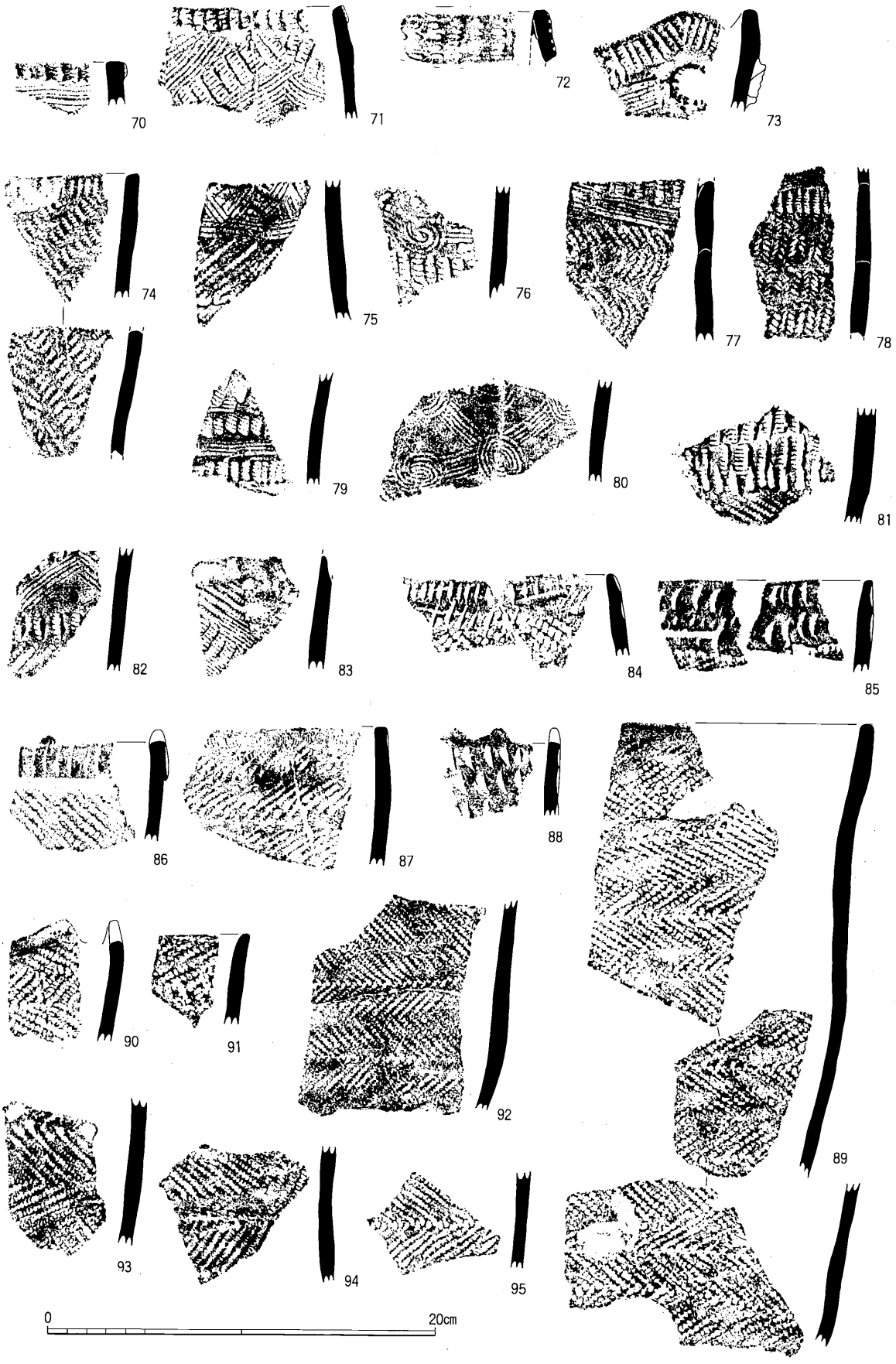


図22　2号住居址出土土器拓影

2号住居址(4)

図23　2号住居址出土土器拓影

2 号住居址(5)

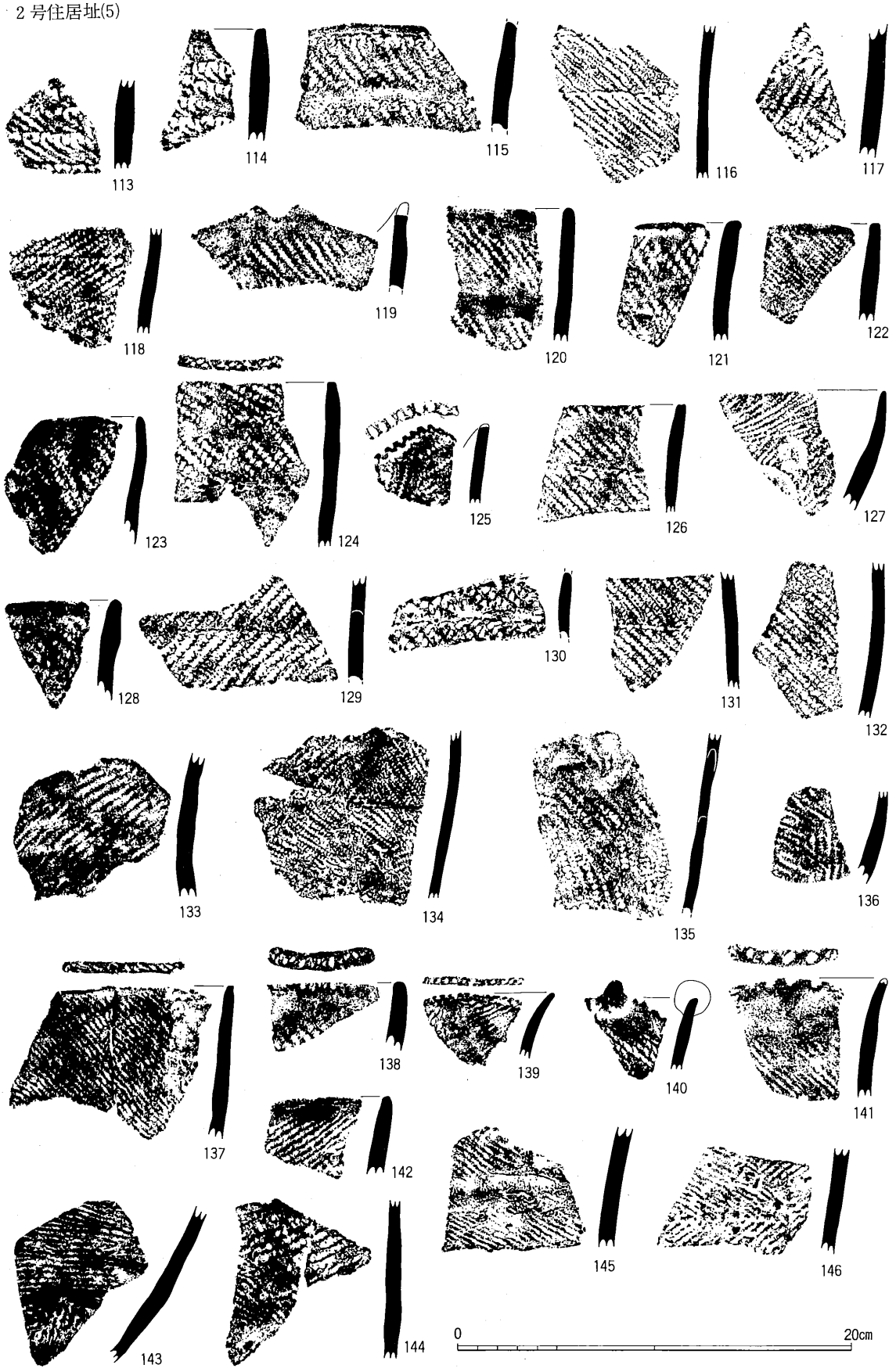


図24　2 号住居址出土土器拓影

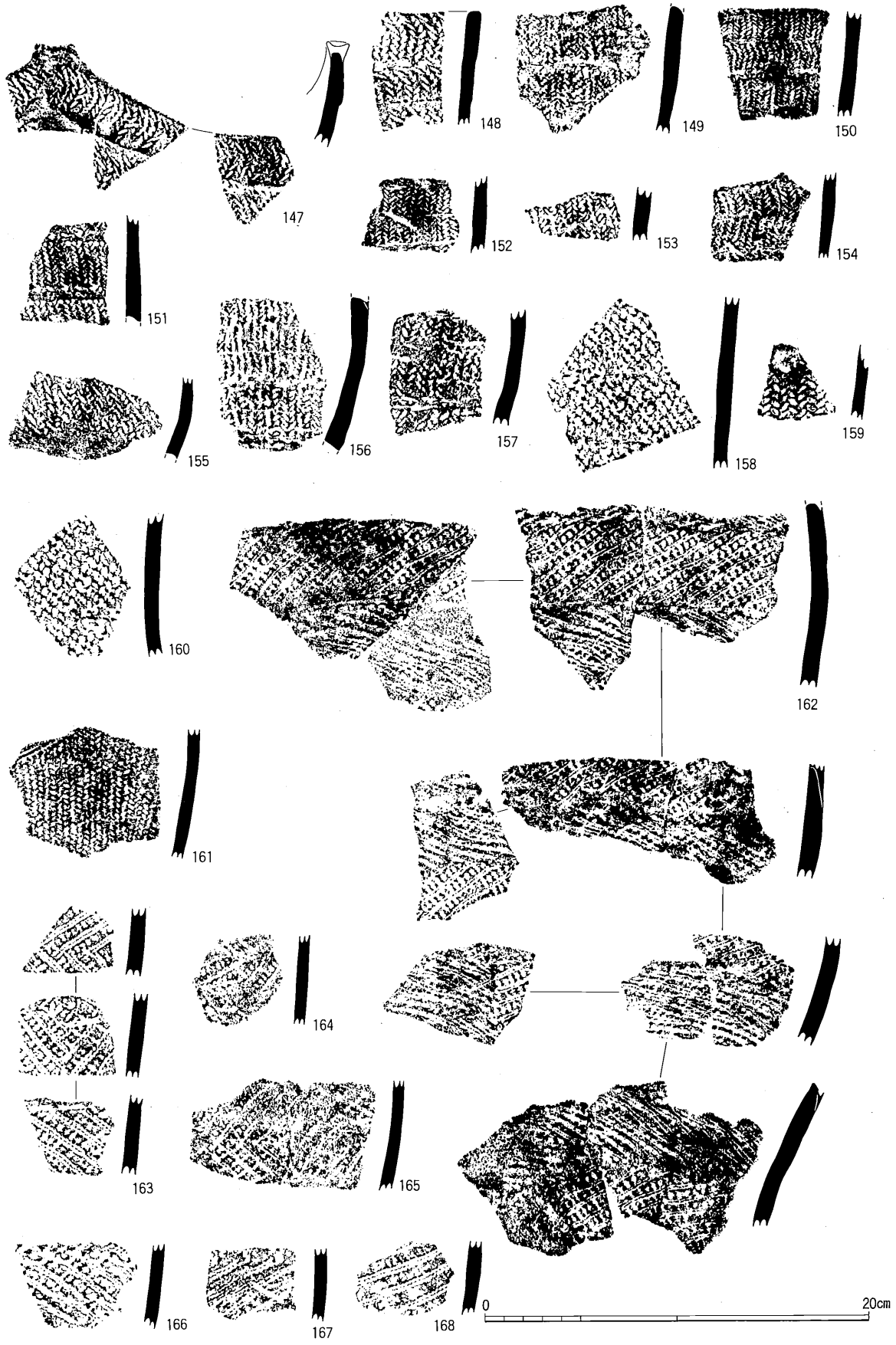


図25　2 号住居址出土土器拓影

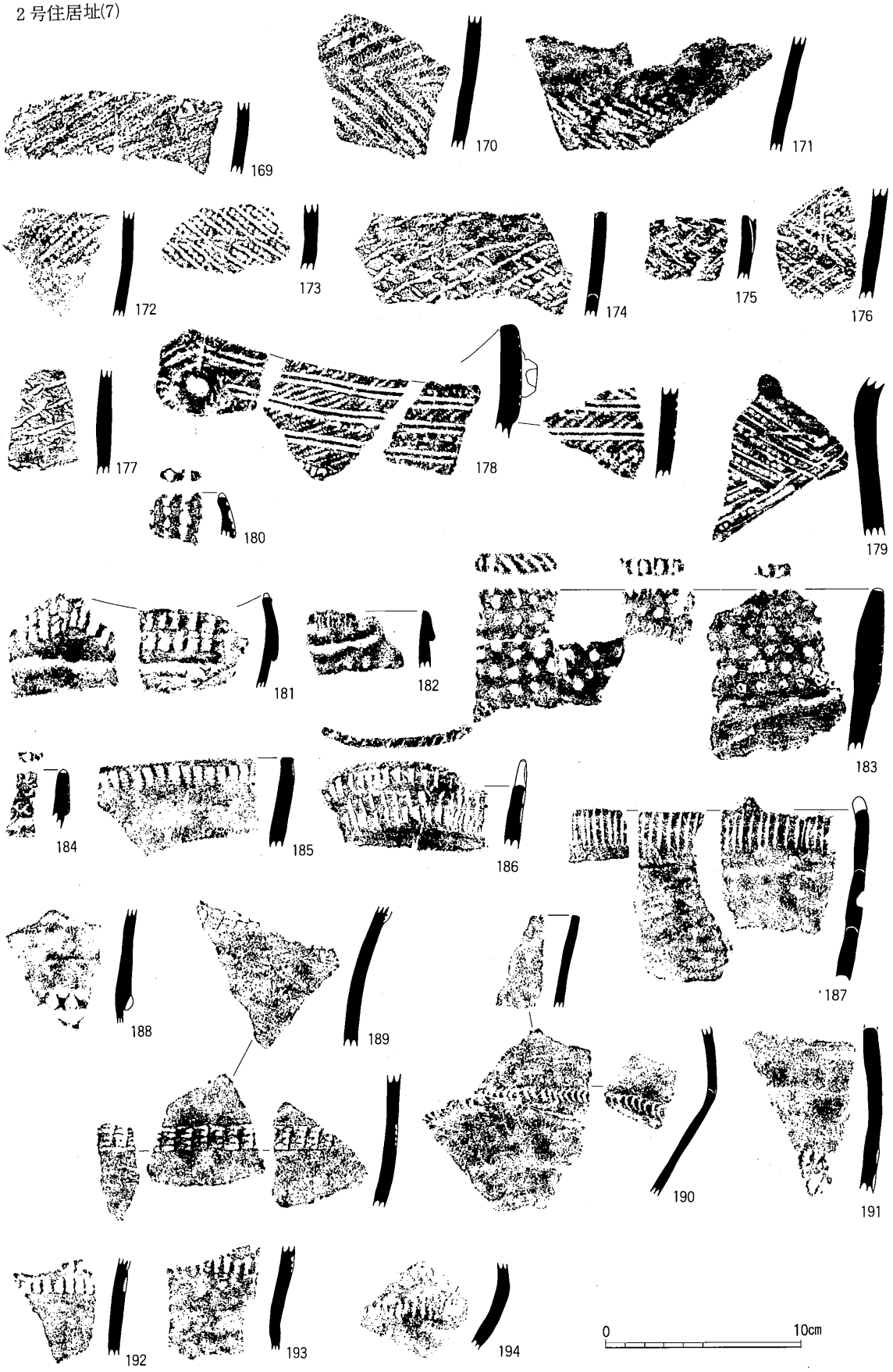


図26　2 号住居址出土土器拓影

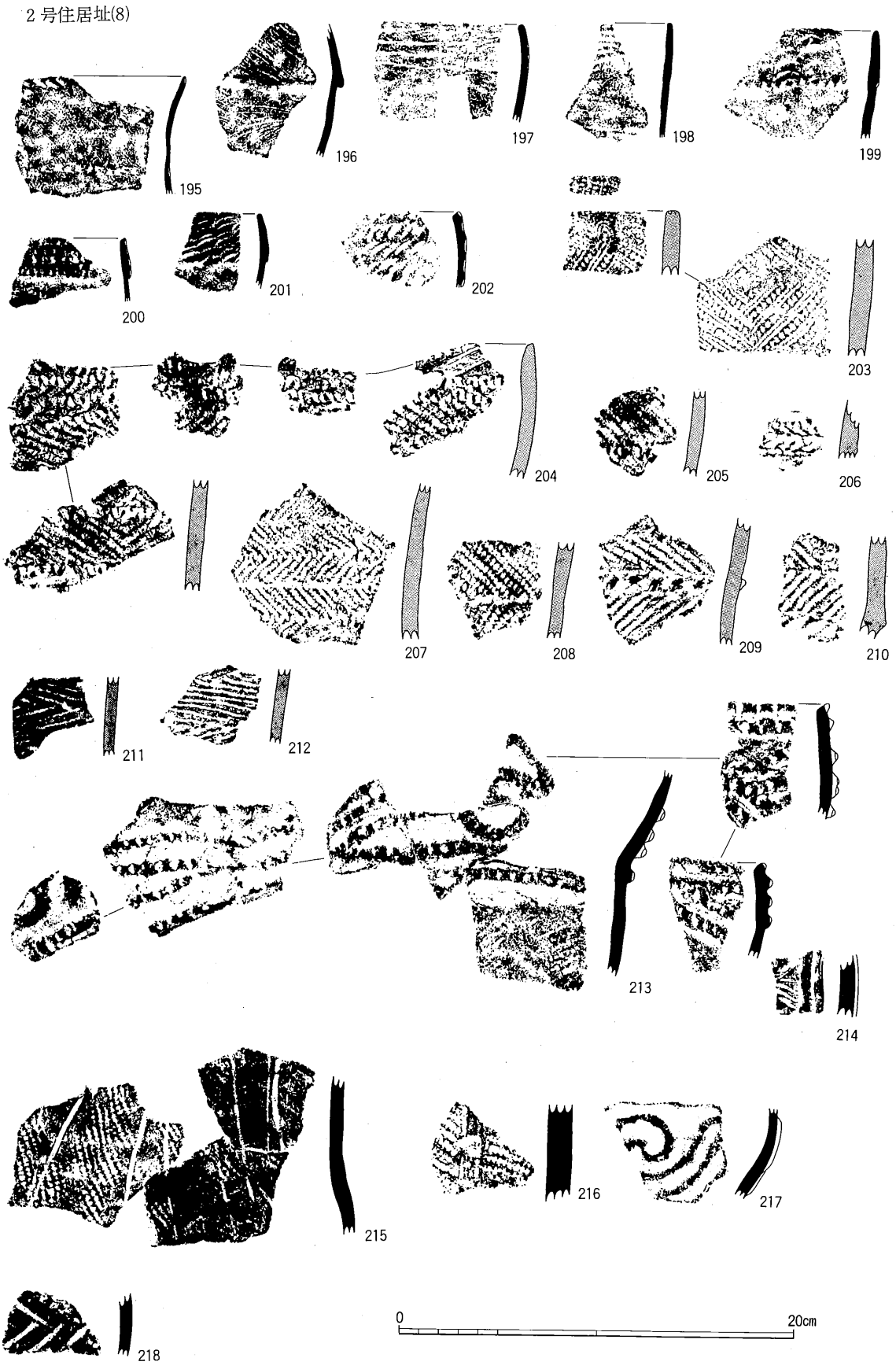


図27　2号住居址出土土器拓影

第１次調査トレンチ(1)

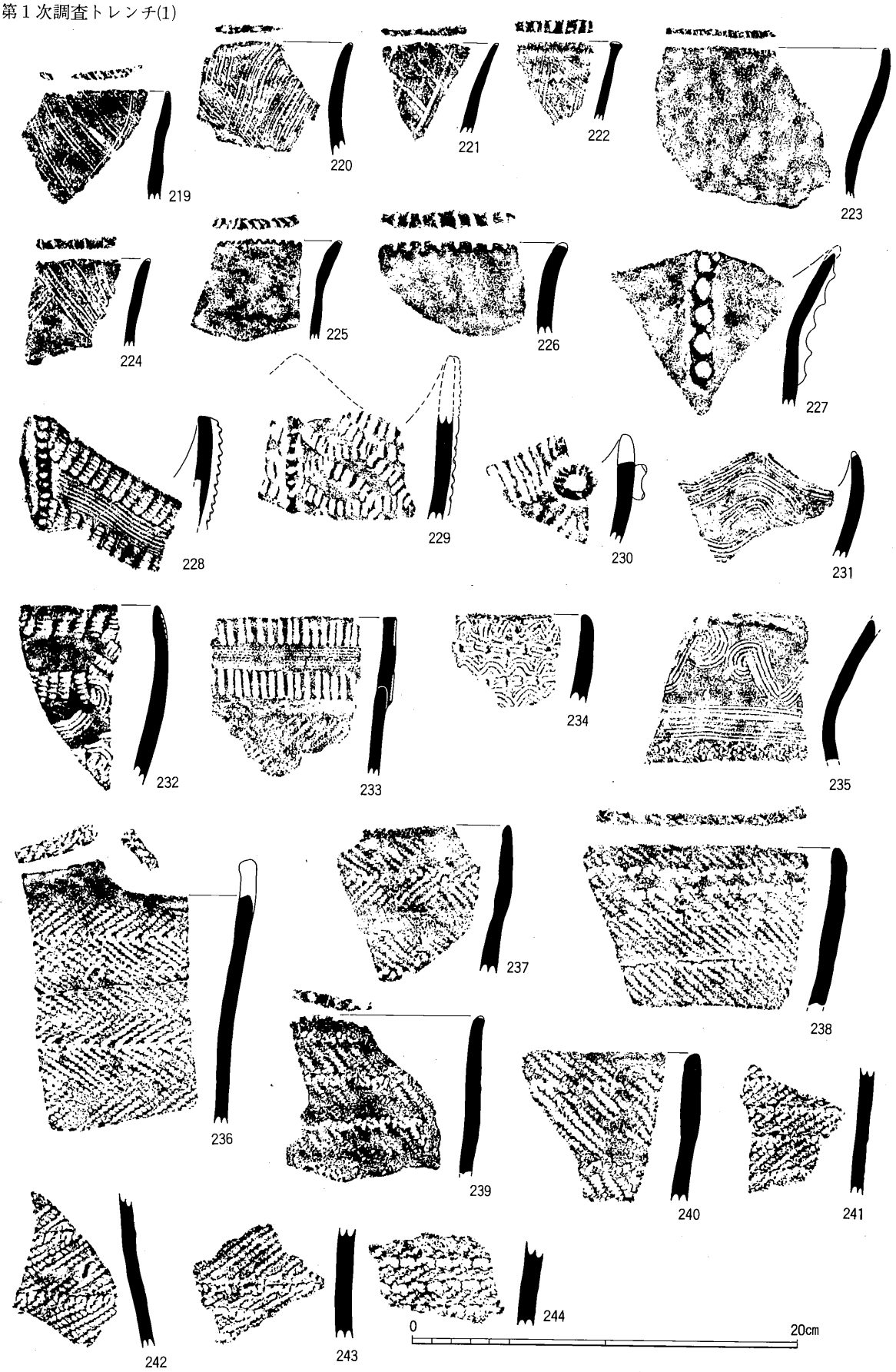


図28　トレンチ出土土器拓影

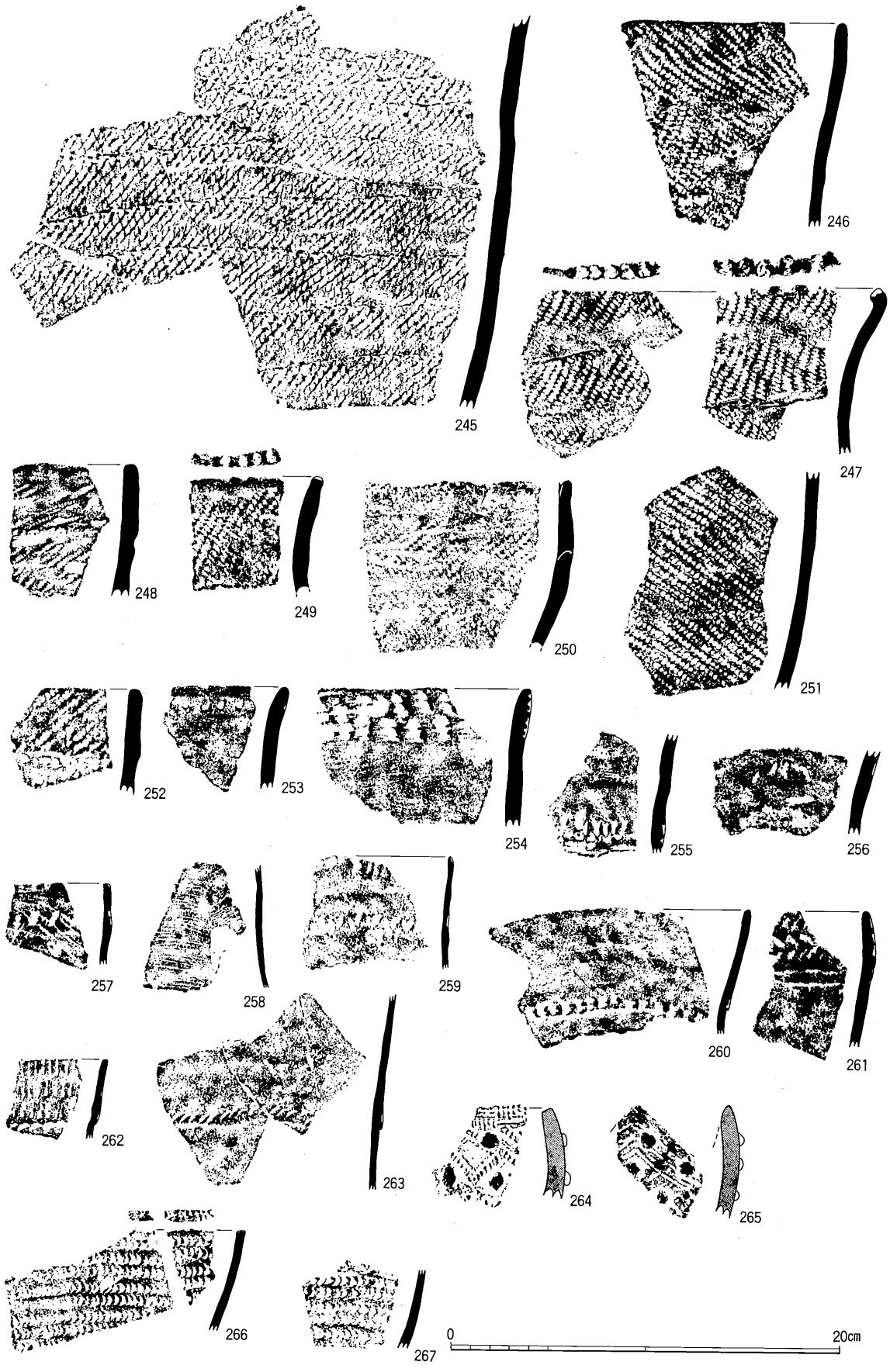


図29　トレンチ出土土器拓影

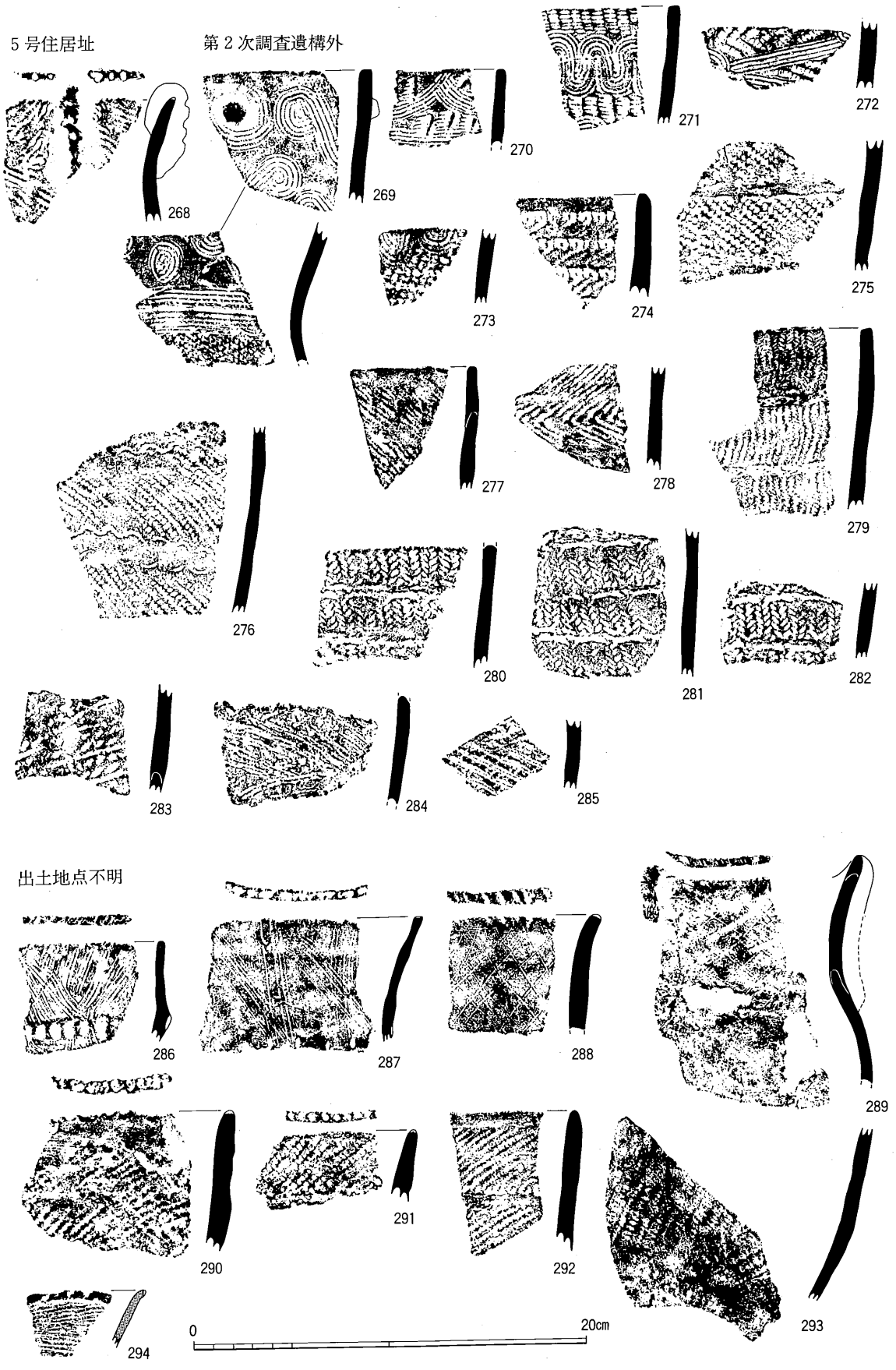


図30　5号住居址・第2次調査遺構外出土、出土地点不明土器拓影

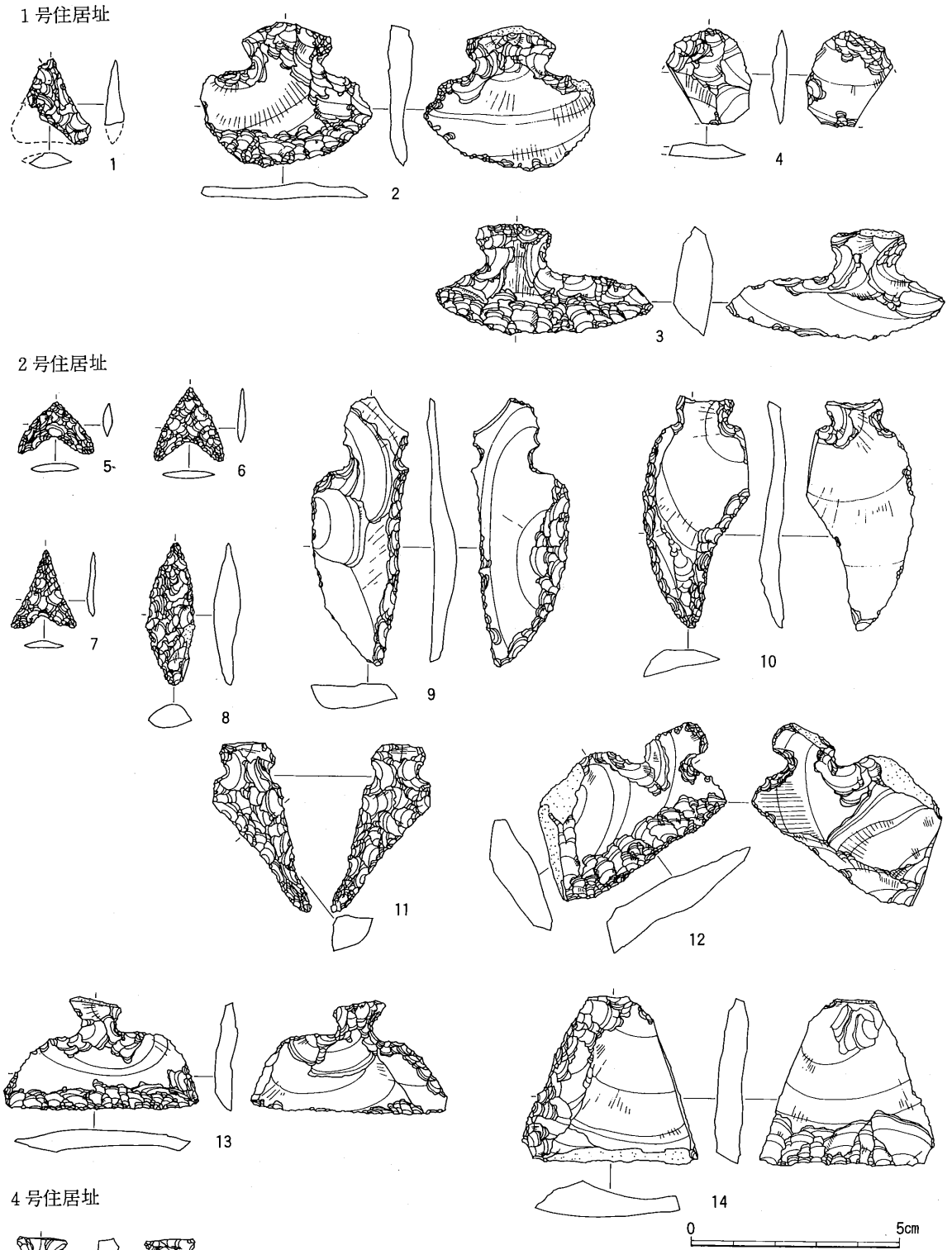


図31　1・2・4・5号住居址出土石器実測図

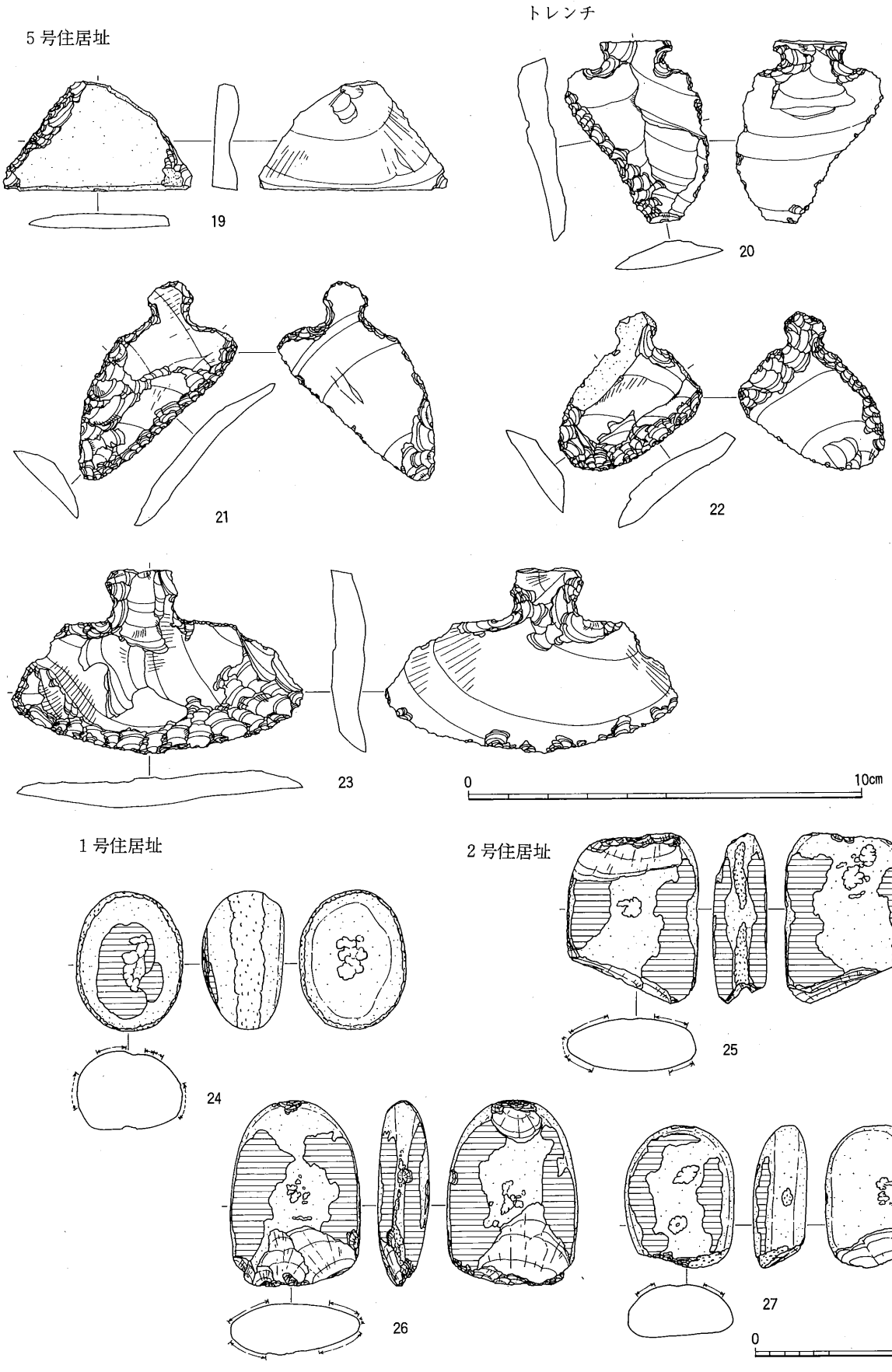


図32　5・1・2号住居址、第1次調査トレンチ出土石器実測図

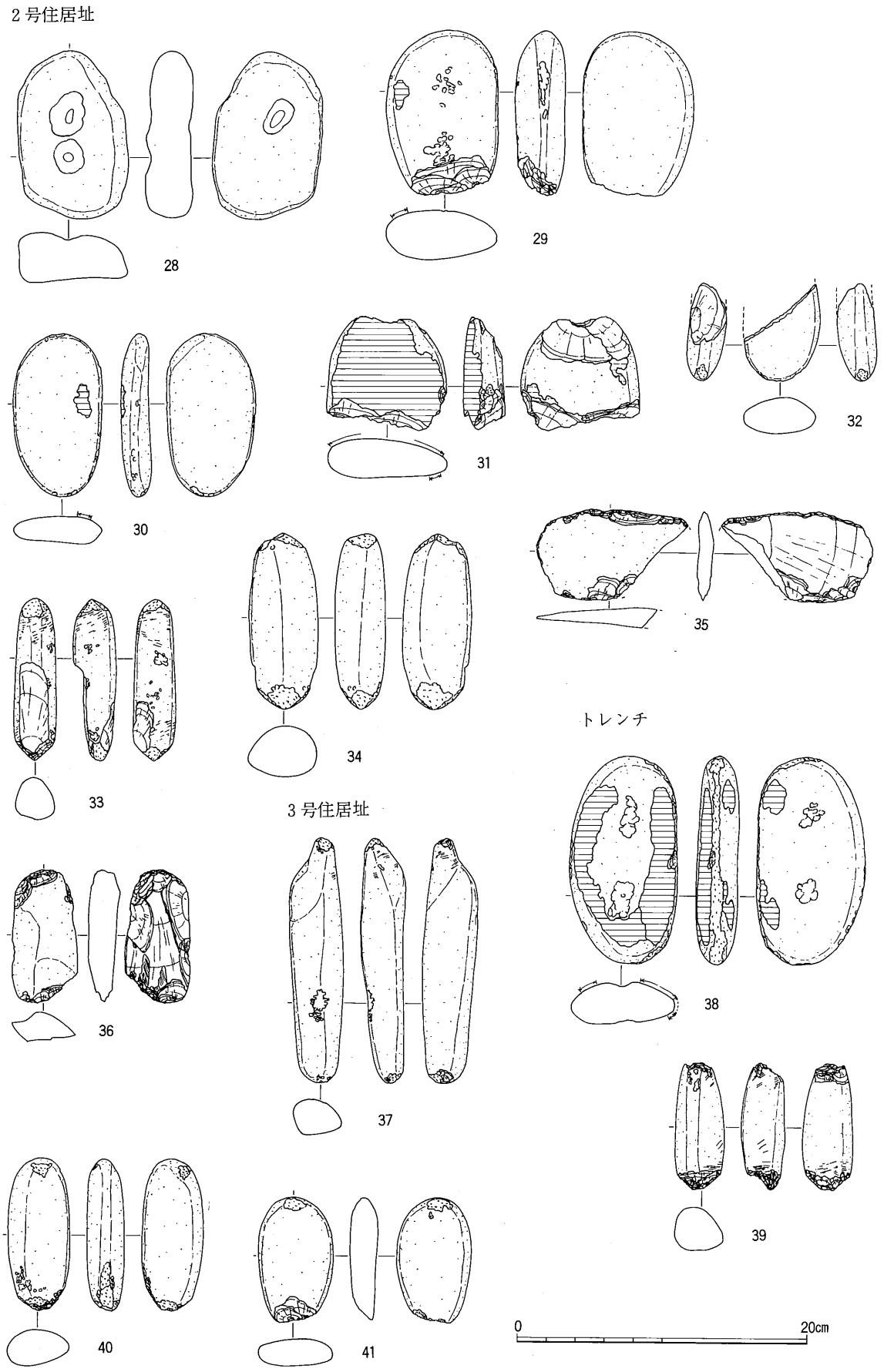


図33　2・3号住居址第1次調査トレンチ出土石器実測図

第2節　第3・4次調査

Ⅰ　調査の経過

第2次調査以後、遺跡地はもちろん、その周辺部まで次第に住宅建設や各種開発関係工事が進展しはじめた。そこで村当局は、遺跡の破壊のみでなく、正確な遺跡範囲確認のための発掘調査さえ不可能になることを憂慮し、長期的展望に立った発掘調査を逐次実施することに踏み切った。その結果、

第3次調査　　昭和43年9月1日～9月12日

第4次調査　　昭和44年7月28日～11月25日（7月28～8月4日、同20日、11月22日～同25日）

の2次にわたる調査を行なった。

第3次の調査地点は、第2次に東接するＢＮ～ＢＲ―10～12、ＢＱ13・14の範囲内で、ここに幅2m、長さ20～30mのトレンチを東西方向に12本設定した。各トレンチとも住居址らしい落ち込みが多くみられ、土器の出土も少なくなかったので、一部を拡張した結果、縄文前期の住居址28軒（完掘・未掘あわせて）と方形柱列の一部らしい（整理段階で確認）竪穴1基が調査され、本遺跡のもつ重大性が更に学界に波紋を投げた。

第4次調査は、第3次の結果を踏まえ、より遺跡の範囲を確実に把握するため、遺跡全域にトレンチを設定した。遺跡東端確認のために、第3次調査に東接するＢＮ～ＢＸ～13～16の範囲内に、13～17・19・20トレンチを、台地北縁との関係を知るべくＢＸ・Ｙ―05・06に18・21の2本のトレンチを設定し、更にＢＯ・Ｐ―09に数個のピットを掘ってみた。調査日程のやりくりに苦慮しながらも、第3次同様、縄文前期の住居址19軒と竪穴1基を確認し、第3次で未掘であった2軒の住居址も完掘した。東側へは密度が薄くなるがまだ遺構が続くこと、北は台地縁辺まで同時期の遺構が存在するなど、本遺跡[(1)]が予想以上に広範囲に及ぶことが更に確認された点、大きな意義があった。しかし、第4次調査は範囲確認を主目的としたため、一部前回の未掘住居址の完掘はあったものの、多くはトレンチ内のみの調査に終っている点と、切り合い関係を知るための精密な資料作成が、スケジュールと担当者の交替などのため不十分だったのが残念であった。なお、第3・4次調査は、ともに国・県の補助事業として同様の組織のもとに実施されたので、本稿では継続した調査として取扱った。調査組織は以下のようである。

◇　**宮田村中越遺跡緊急発掘調査委員会**（氏名のあとの数字は在任年度）

顧　　問　唐木　愛男（宮田村長）　43・44　　小田切行雄（長野県議会議員）　43・44

白島　政種（宮田村議会議長）　43・44

委員長　馬場　一人（宮田村教育委員会委員長）　43　　向山　雅重（同　左）　44

副委員長　平沢　一男（　〃　文化財保護審議会委員長）　43・44

委　員　向山　雅重（県文化財専門委員）　43　　新谷　和美（宮田村教育委員）　44

田中　敞一（宮田村教育委員）　43　　篠田　徳登（宮田村文化財審議委員）　43・44

宮木　芳弥（　同　上　）　43・44　　田中　義蔵（　同　上　）　43・44

小木曽　清（　同　上　）　44　　平沢　茂（　同　上　）　43・44

小田切良彦（宮田村文化財審議委員）43・44　有賀　強三（宮田村小学校長）　43
友野　良一（　同　上　）43・44　伊藤　脩一（同　上）　44
太田　保（　同　上　）43・44　堀　知哉（宮田中学校長）　43・44
春日　幸男（地主代表）　43　細田　義徳（宮田村教育長）　43・44
保科今朝人（同上）　44

◇　**宮田村中越遺跡緊急発掘調査団**

顧　問　八幡　一郎（上智大学教授・長野県文化財専門委員・日本考古学協会会長）　43・44
藤森　栄一（長野県考古学会会長）　43・44
団　長　藤沢　宗平（松本深志高校教諭）　43・44
調査員
樋口　昇一（松本県ヶ丘高校教諭）　43・44　戸前　博之（長野県埋文緊急調査員）　43
小松　虔（松本市立博物館主事）　43・44　下平　秀夫（同　上）　43
武藤　雄六（富士見町教委主事）　43・44　遮那藤麻呂（同　上）　43・44
代田敬一郎（松本深志高校教諭）　44　佐藤　甦信（同　上）　43
会田　進（岡谷蚕糸博物館主事）　44　木下平八郎（同　上）　43・44
佐藤　攻（長野県埋文緊急調査員）　43・44
調査補助員
根津　清志（長野県考古学会員）　43・44　中村　芳夫（宮田中学校教諭）　43
御子柴泰正（同　上）　43・44　福沢　信（同　上）　44
長瀬　康明（東春近小学校教諭）　43・44　清水　時雄（宮田村土木課長）　43・44
小川　守人（長野県考古学会員）　43　山田　年（長野県考古学会員）　43
本田　秀明（岡谷南部中学校教諭）　43・44　小池　政美（国学院大学学生）　44
長　隆（宮田小学校教諭）　43
事務局　加藤　勝美（宮田村教育委員会）　43・44
指導・助言　林　茂樹（長野県教育委員会社会教育課主事）　43・44

注1　調査全体図（図34）は、第4次調査の昭和44年度分の概報作成時の原図をもとに、それに現在の地形図を重ねたものであるが、調査担当者の個人的記録や概報の記述には、次のような図と異なる部分がある。すなわち、①第15トレンチと第16トレンチの間は離れており、②第21トレンチは第18トレンチの拡張部から約1.5m離れていて、③43号住居址は第21トレンチの中央部に位置し、④第5トレンチは設定されたものの調査されておらず、⑤第11・12トレンチは、第10トレンチとほぼ同じ長さであった、などである。また、43号住の位置は、第7次調査の結果、図とはずれる事実が確認されてもいる。しかし、ここでは新たな誤謬の生ずる可能性もあり、修正はしていない。

図34　第３・４次調査全体図

II　遺構と遺物

1　住居址

1）　6号住居址（図35）

第1トレンチ8～10区に検出され、第2次調査時の3・5号住にごく近い。平面形はN80°Wに長軸をとる、5.0×4.1mの隅丸長方形である。埋土は床上7cmほどが炭化物・灰の混じる黒色土で、焼失住居と考えられる。床面は堅くない。柱穴はP_1～P_4の4本で、ほぼ中央に小さな地床炉がある。壁下には周溝がめぐるが、つながらない。また、南側をのぞく三方の柱穴と壁の間に浅い溝があるのだが、特に西と東は明確で、拡張の結果とも考えられよう。土器の出土状態をみると、上層に縄文施文の、下層に無文の土器がそれぞれ多く、一方、住居址埋土中からは、ほとんど無文土器であった。土器のうち、2が倒立状態で床から浮いて、12が同じ状態で東北よりの床面近くから検出された。また17は、一部が北西隅を調査した第2次調査で得られていることから、住居址西半よりの出土と考えられる。

遺物は非常に多い。土器は、上層ではII期I群（101～122）が多いが、埋土ではI期I群Dが主体となる。完形（1・2）、略完形（3・4）、大破片（5）のほか、口縁部の一部（6～8）や胴部以下（9～11）、さらに1880点もある無文胴部片、94点の無文口縁部（145～149）は、胴部にI期I群A～Cをわずかに含み、同Eもあるだろうが、大部分は同Dであろう。2は斜格子目文を痕跡的に残している。I期I群A（129～139）・同B・同C（140～144）と判別できる例はそれぞれ15点・6点・7点しかなく、斜格子目文ある破片も100点に満たない。他に、II期I群（150～188）が370点、III群（12～14・189～196）が約200点あり、繊維土器のうち13点がII群（197～200）で、うち128のみ珍らしい表裏縄文例である。石器は、石

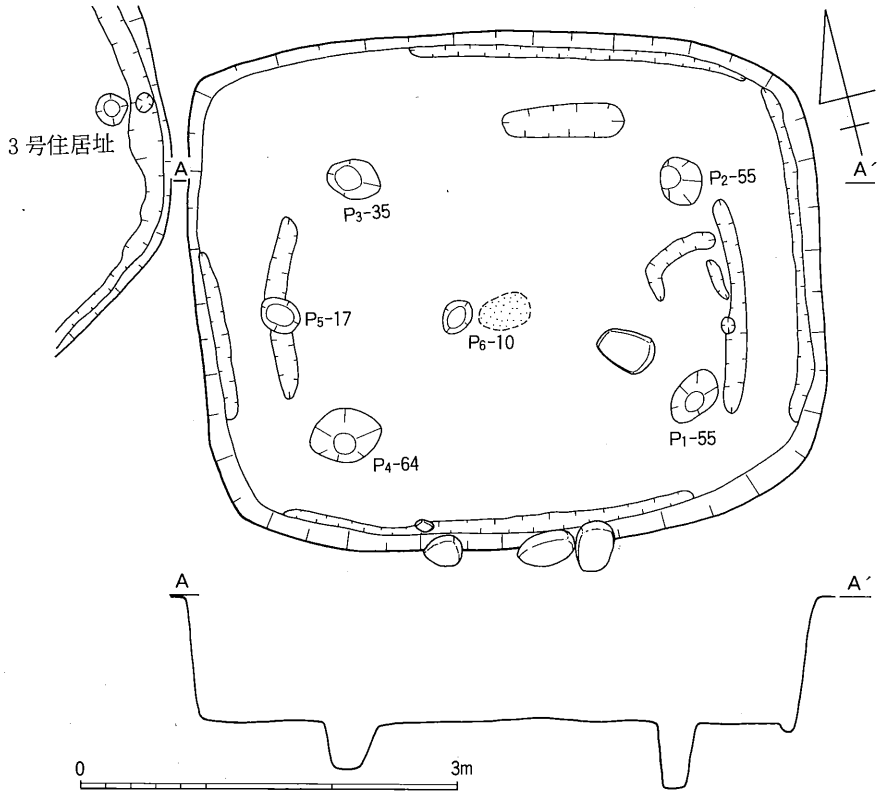


図35　6号住居址実測図

鏃（1～16）16点、石匙（17～21）5点、石錐（22～26）6点、打製石錘（27・28）2点、スクレパー（29～41）19点、打製石斧（878・879）2点、小形磨製石斧（890）1点、叩石（880～883・889）5点、礫端叩石（885・886・888）（884は上層）3点の他、黒曜石の剝片288点・屑片377点・石核122点・両極打法痕あるもの38点などが出土した。

2） 7号住居址（図36）

第1トレンチ5～7区、6号住と8号住の間に検出されたが、北東端は未調査である。平面形はN20°Wに長軸をおく、60×4.4mの不正長円形を呈する。床面は堅くないが平坦である。主柱穴はP_1～P_3と未調査部に1個の4本であろう。炉は未検出、周溝も西壁下に一部しかない。中央北寄りの浅く大きなピット（1.6×1.5m）は、11号住にも類例があるが、性格は不明である。位置的・検出状態から考えて、炉の焼土部分などを取り除いた結果とか貯蔵施設との解釈もある。西壁近くから一個体分の土器が出土、日誌にも記述されているが見当らない。8号住で目立つ遺物の出土が記録されていないことから、17が該当するかも知れない。

遺物はごく少ない。土器はすべて破片で、70%をI期I群が占め、中でもD・E（15・16・214・215）と無文胴部が目につき、A～C（205～213）は少ない。他は、II期I群（216～232）が20%弱とIII群（233～237）がわずかで、238はIV期である。石器は石鏃（42～51）10点、石匙（52・53）2点、石錐（54～59）6点、打製石錘（60～62）3点、スクレパー（63～68）8点、叩石（892～894）3点の他、黒曜石の剝片109点・屑片179点・石核68点・両極打法痕あるもの20点などがある。剝片の中に接合例があり注意される。なお打製石斧（891）1点は本址上層にあたる第1トレンチ出土品である。

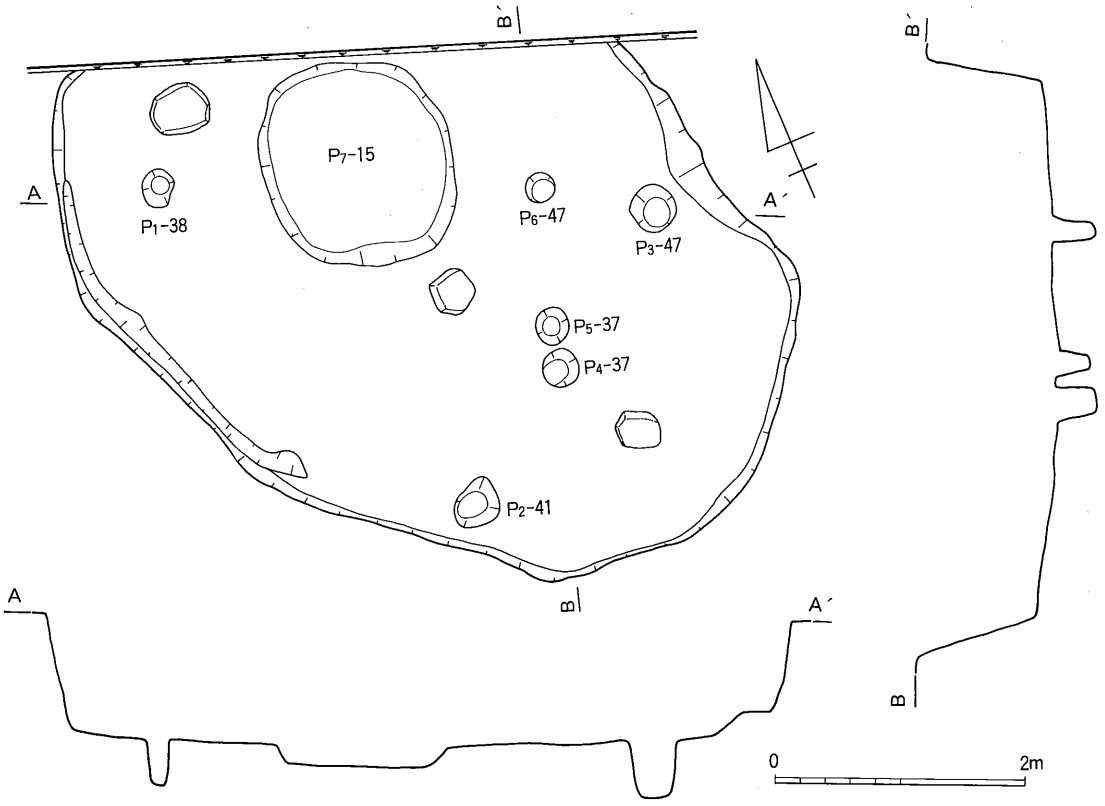


図36　7号住居址実測図

3） 8号住居址（図37）

第1トレンチ1～3区、7号住の西側に検出された。平面形はN30°Eに長軸をとる4.5×3.9mの南隅のやや丸い長方形である。埋土は上層が黒色土、下層が褐色土で、床は全面に堅い。痕跡的な炉址らしい部分が平石を埋めこんだ中央部に認められた。主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_7とP_1・P_2・P_4・P_5の2種が考えられ、建て替えが想定できる。周溝は壁下を全周するが、北・東隅の周溝上にあるP_8・P_9は上屋構造に、また南西壁下中央のP_{14}・P_{15}はその両側のみに周溝がなく、P_{13}・P_{11}も含めて入口施設にそれぞれ関連している遺構と考えたい。

遺物は少ない、土器は約350点で、7号住出土の可能性あるⅠ期Ⅰ群Dの17以外は小破片である。70%強のⅠ期Ⅰ群（239～241）の中でも無文胴部が340点と多く、斜格子目文41点、D・Eの口縁部11点などかある。Ⅱ期Ⅰ群（242～269）は20%強の120点、Ⅲ群（270～274）20点、Ⅱ群（275）は1点のみである。石器は、石鏃（69～81）13点、石匙（82・83）2点、石錐（84～89）6点、スクレパー（90～95）8点、磨製石斧（900）・叩石（896）・礫端叩石（899）が各1点ずつと、黒曜石の剝片115点・屑片265点・石核44点などがある。なお、打製石斧（895）1点と礫端叩石（897・898）2点は本址上層・第1トレンチ出土品である。

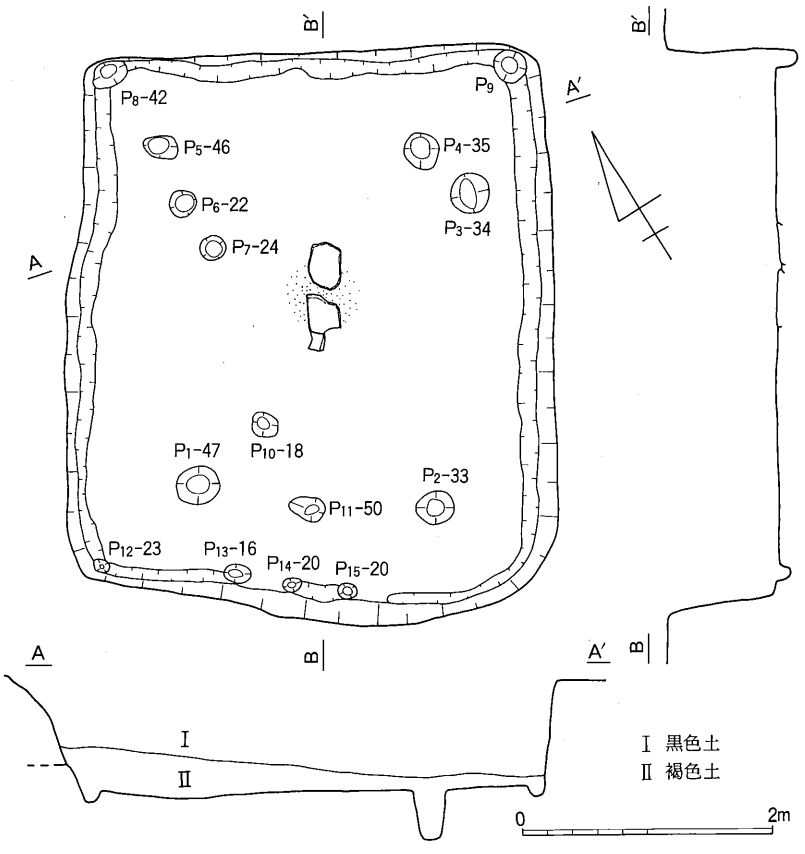


図37　8号住居址実測図

4） 9・31号住居址（図38・39）

第3トレンチ3・4区で検出され、9号住が新しく、31号住と全く重なりその上部にある。

9号住は、表土下の厚さ10cmの黒褐色土の下にあらわれたソフトローム上層で、黒褐色土の落ち込みとして検出された。平面形は長軸がN30°Eをとる5.3×4.5mの隅丸方形を呈する。[1] 周壁はやや傾斜して立ちあがり、床面は31号住の埋土部分は貼床して堅いが、他は南西隅と北東壁近くで一部堅い部分があるくらいで軟らかい。柱穴はP_1～P_4の4本を考えたい。いずれも内側へ傾いて穿たれている点が目につく。この他対角線上にあるP_8もP_6を含めて上屋構造を考える上で注意すべきであろう。炉は本遺跡検出縄文前期住居址の中で唯一の石囲炉で、中央やや北寄りに、南東を開いて3個の礫を方形に配してある。炉址は本来こうした形態であったのが、住居廃棄後石のみ取り去られたのだろうか、そうした観点からの調査が十分でないのが残念である。炉の南北にはなれて平石が1個ずつある。周溝はない。北隅にわずかな張出部があるが性格はわからない。また、北東壁の破線部分と重なって住居外に径約2mの円形のピットがあり、中心部に残った厚さ10cmほどの褐色土の中より、多量の炭化果実が検出され、貯蔵用と考えたいとの記録はあるが、その所属も含めて詳細な観察がなく、不明確な点惜しまれる。遺物の出土状態は埋土の上層に多く、黒曜石の剝片もかなりの量なのに対し、下層は極度に減少する。北壁付近に人頭大から拳大の礫群が

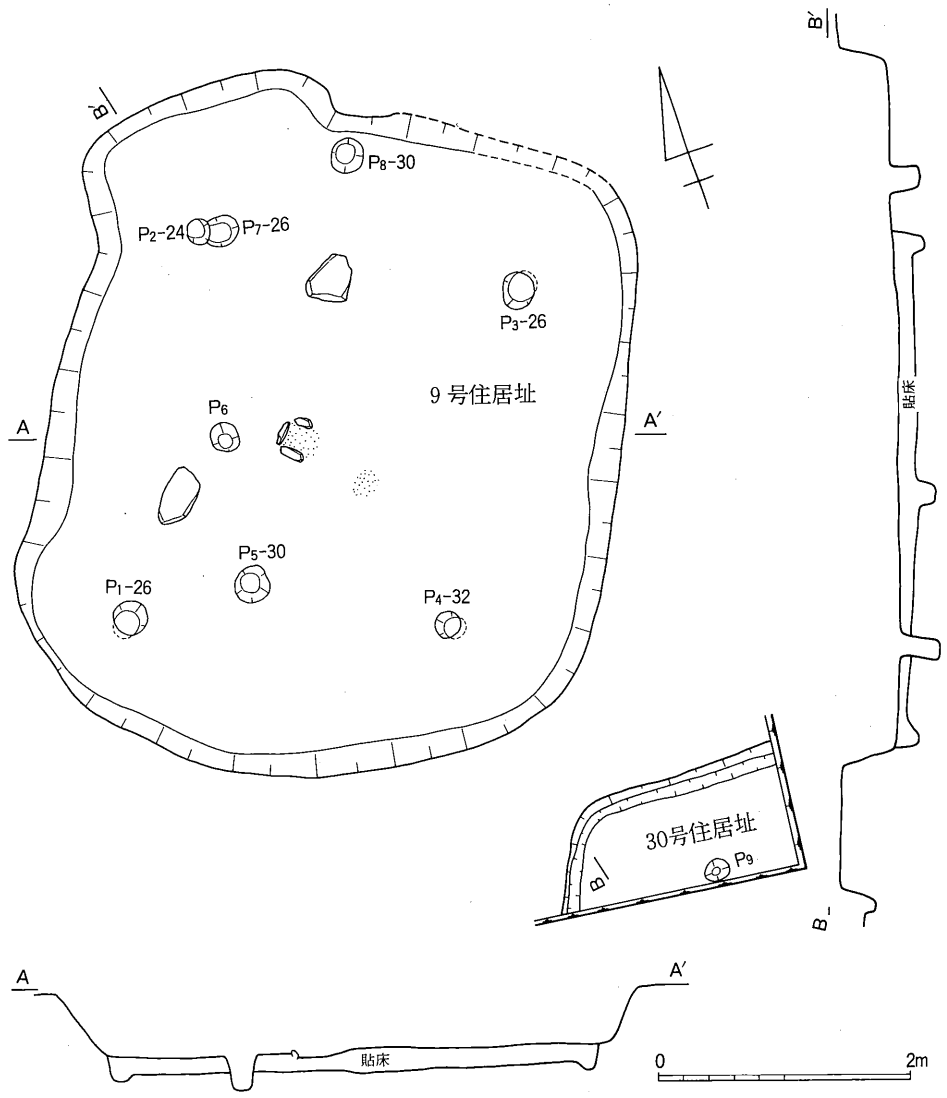


図38　9・30号住居址実測図

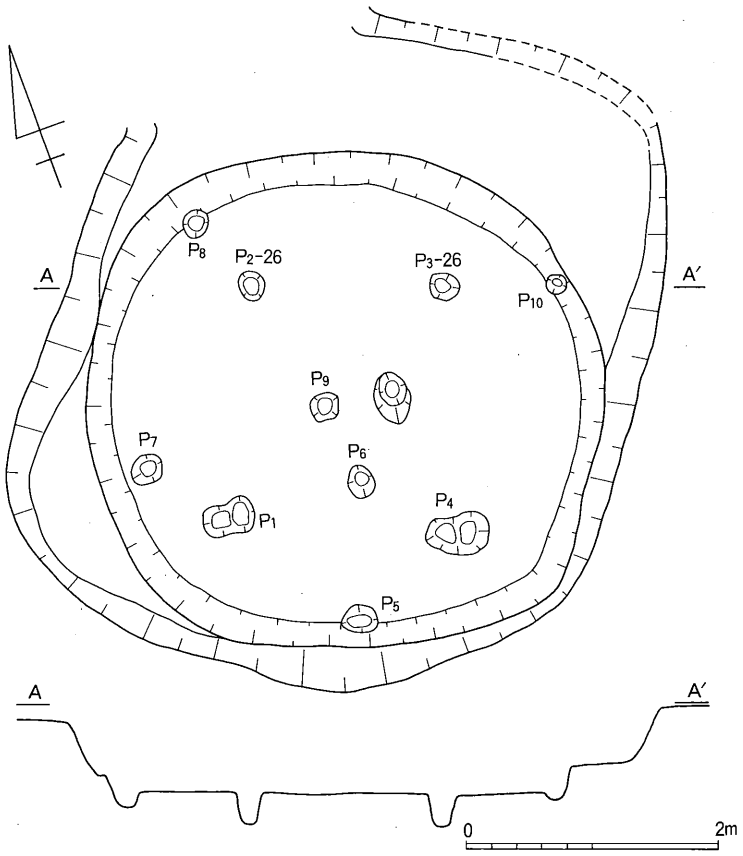


図39　31号住居址実測図

あり、その周囲から多量の黒曜石の剝片・屑片が出土したので、石器製作址的性格を想定したが、類例は多くない。なお、P_4内から玦状耳飾（181）が出土している。

遺物は非常に多いが、図化した土器は少なく、Ⅰ期Ⅰ群のDかE（21）、II期Ⅰ群A（19）とⅠ期Ⅰ群であろう小型の浅鉢（18）とII群Aの底部（20）しかない。破片は大多数がⅠ期Ⅰ群の無文胴部で、約1900点を数え、他に斜格子目文が110点、同D・Eの口縁部64点、II期Ⅰ群（303～345）370点、III群（346～362）360点、繊維土器のうちII群は5点（363～367）で、Ⅰ期Ⅰ群GかII期Ⅰ群Eの比較的大きな破片（368～370）が13点ある。Ⅰ期の新しい部分が主体であろう。石器も多く、とくに石鏃（96～142）の51点は今回調査した住居址中最多である。石匙（144～152）9点、石錐（153～163）12点、打製石錘（164～170）7点、スクレパー（171～180）17点、横刃型石器（903・918）3点、叩石（904～910）7点、礫端叩石（911～917）8点、打製石斧（901）・石槍（902）・玦状耳飾（181）が各1点ずつある。他に黒曜石の剝片444点・屑片272点・石核136点・両極打法痕あるもの45点、不明102点があり、小形石器の多いこと、黒曜石の剝片が多く屑片を大きく上回っている点が上述した本址の石器製作址的性格の根拠ともなろう。

31号住は9号住の中央から南側に広がる貼床の下から検出された。平面形はN20°Eに長軸がある4.1×3.9mの円に近い隅丸方形で、床面は非常に堅い。主柱穴はP_1～P_4で、P_1・P_4の形態やP_7・P_8・P_{10}のあり方から建て替えが考えられる。壁下を全周する幅広の周溝は西側が若干深い。埋土は15cm前後と薄く、遺物もごくわずかである。Ⅰ期Ⅰ群のA・B6点、無文胴部と底部各1点、III群Bの3点と、他に土製円板（図62—5）1点がある。

5） 10号住居址（図40・41）

第4トレンチ8～10区で検出された。ローム層直上で明らかとなった平面形は、N10°Wに長軸をおく5.3×5.0mの円に近い隅丸方形を呈する。埋土は、壁下に黄色土があり、その上は西側のみに黄褐色土がみられ、さらに褐色土・黒色土が中央に厚くレンズ状に入りこんでいる。中央付近の2箇所に、床面よりわずかに浮いて焼土が薄くある。床面は北西部が堅いほかは軟らか気味である。周溝はないが、北端部に浅い溝があって、なんらかの施設が考えられる。配置よく並んだP_1～P_4の4本が主柱穴であろう。そのうち、P_4（土層図と平面図で深さを異にするが）にはほぼ中央に床面上では立石状となる礫が埋められていた。ピットが柱穴としては不適格なほど大きいので、あるいはピット東側に柱を連てた際の「詰石」との考えもできるが、興味ある遺構といえる。なお、住居址の北・南壁外に各3箇のピットが規則的に並ぶが本址と関連する屋外施設かどうか、本遺跡では類例がないので今後注意したい。記録には、落ち込みを検出した時点で埋土に多くの遺物があり、セクションベルト取りはずしの際には、黒色土・褐色土に遺物が多く

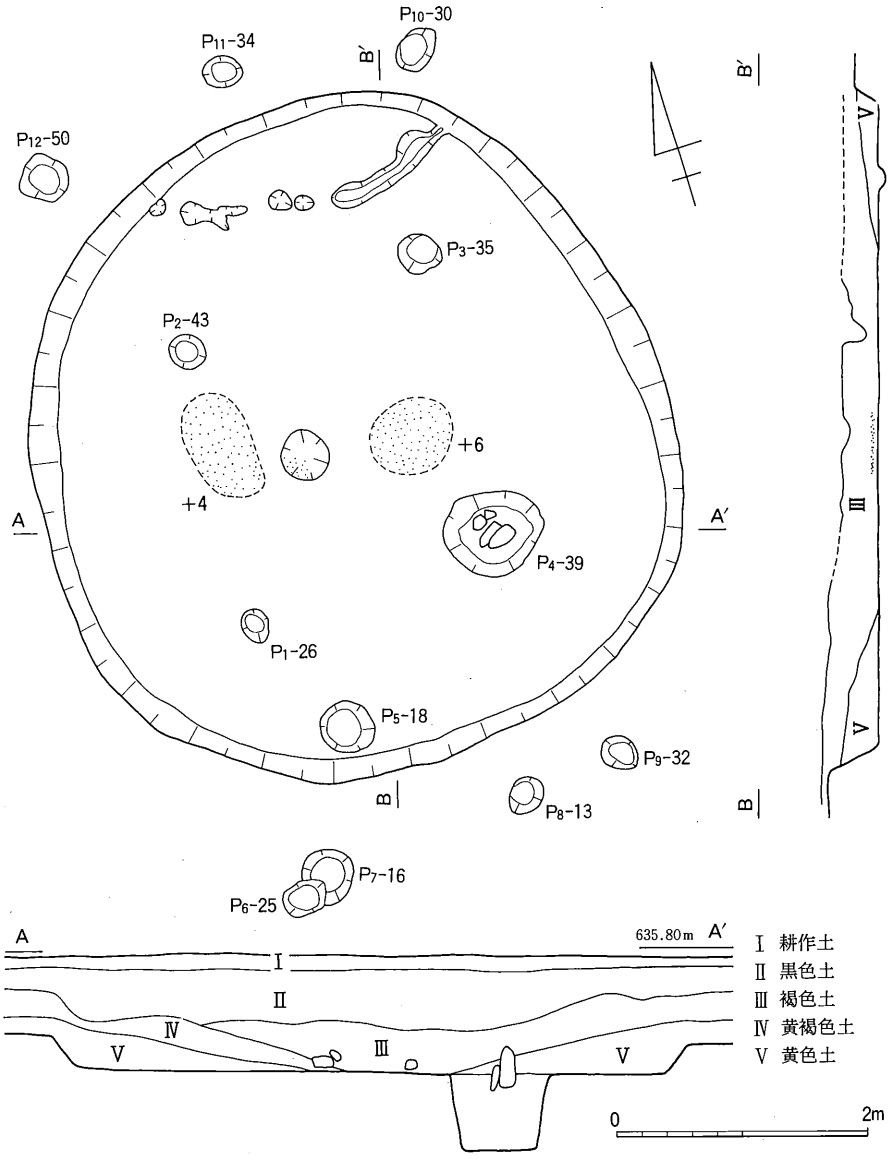


図40　10号住居址実測図

て下部の黄色土・黄褐色土中にはほとんど見当らなく、一方、周囲の拡張部分では、黒色土層中に遺物がほとんどなくてローム直上に多かったなどとあり、これらから住居址内部では黒色土下部から黄褐色土に遺物が集中していたと考えられる。なお、床面出土遺物はない。

遺物は全般的に多い。土器では、図化できたⅠ期Ⅰ群B（22・23）とⅠ期Ⅰ群の胴から底部（24～27）、Ⅲ群A（29～32）・B（33）などがある。28は他に例をみない形態だが、Ⅲ群Aの要素を取り入れたⅠ期Ⅰ群であり、太い隆帯をつけている。また、33の一部は第1次調査のトレンチからも出土している。破片はⅠ期Ⅰ群の無文胴部が1022点と多いが、同A（371～375）の18点、同B（376）の11点、斜格子目文（377～382）の171点も目につく。Ⅱ期Ⅰ群（388～424）は185点と少ないが、B（391～397）がまとまった量ある。Ⅲ群（427～442）の272点には、斜行沈線を地文とする例が半数近い。図化例はⅠ期Ⅰ群Bのまとまった資料としてよいだろう。石器は多く、とくに石鏃（182～233）の50点は9号住と共に最多量である。石匙（238・240～242）5点、石錐（243～247）5点、打製石錘（248・249）2点、スクレパー（250～262）22点、磨製石斧（942～943）2点、叩石（919～931）12点、礫端叩石（932～941）7点と、黒曜石の剝片182点・屑片412点・石核121点・原石16点・両極打法痕あるもの33点がある。263は縁辺に擦痕のある石核で、他に土製円板（同62―4）や特記すべき例品として、先土器時代の尖頭器の一部と考えられる小破片（図41）がある。

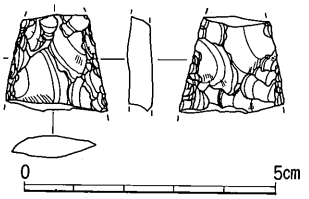


図41　10号住居址出土尖頭器実測図

6）　11・27・28号住居址（図42）

第6～第7トレンチにかかる9～10区に重複して検出された。表土、褐色の砂層、ソフトロームと続く土層のうち、地表下80cmのソフトローム面で落ち込みが認められたが、その時点では切り合い関係をつかみきれていない。調査記録によれば、P_8からP_7への溝を北東壁下の周溝とする南西側に広がる住居址を想定してそれを最も古く、次に28号住となる南北に長軸をもつ長方形の掘り込みをつくり、さらにP_8からP_7南側への溝に平行して北東側にある掘り込み（平面図）、もしくは周溝（BB̄エレベーション）を南西縁とする27号住が築かれ、それらを切って北側に11号住が築かれたと想定し、4軒の住居址案を示している。しかし、概報では27・28号住の2軒が「11号住と重複して」いるとしか記されておらず、一部には、11号住以外を住居址とすること自体疑問とする意見もあった。調査記録の想定根拠となるべき資料が残されていないので、本稿では実測図や写真、遺物出土の状態などを勘案して3軒として記述したい。

11号住の平面形は、N20°Eに軸線をもつ4.4×4.4mの円に近い隅丸方形である。床面は堅く固められている。北東側をのぞく壁下に周溝がめぐるほか、内側にN30°Eを軸線とする1辺3mの隅丸方形が想定される溝がある。拡張を考えるべきかもしれない。柱穴はP_1～P_4の4本と考えたが、P_3は位置的にやや疑問も残る。炉は検出されていないが、中央に、7号住に類例のあった1辺1.1mの浅い隅丸方形ピットがある。

27・28号住のうち、27号住としてP_9の南西側に直線的に走る周溝もしくは落ち込みを南西限として、11号住部分のほとんどを内に取り込む北東方向に長軸をもつ長方形を、一方、28号住としては、P_8とP_6かP_7を柱穴とし、南北に軸線のある長方形をそれぞれ想定した。この想定によれば、11号より後出的となるが、両者の床面の間にAA'エレベーションに見られる程度の比高差があったことが写真で確認できるほかは、詳細な記録がなく、その前後関係を決定するためには不明な点が多い。なお、実測図のBB'エレベーションには明らかに誤りがあり、平面図にも疑問点があるが、修正できなかったので概報の図をそのまゝ掲載

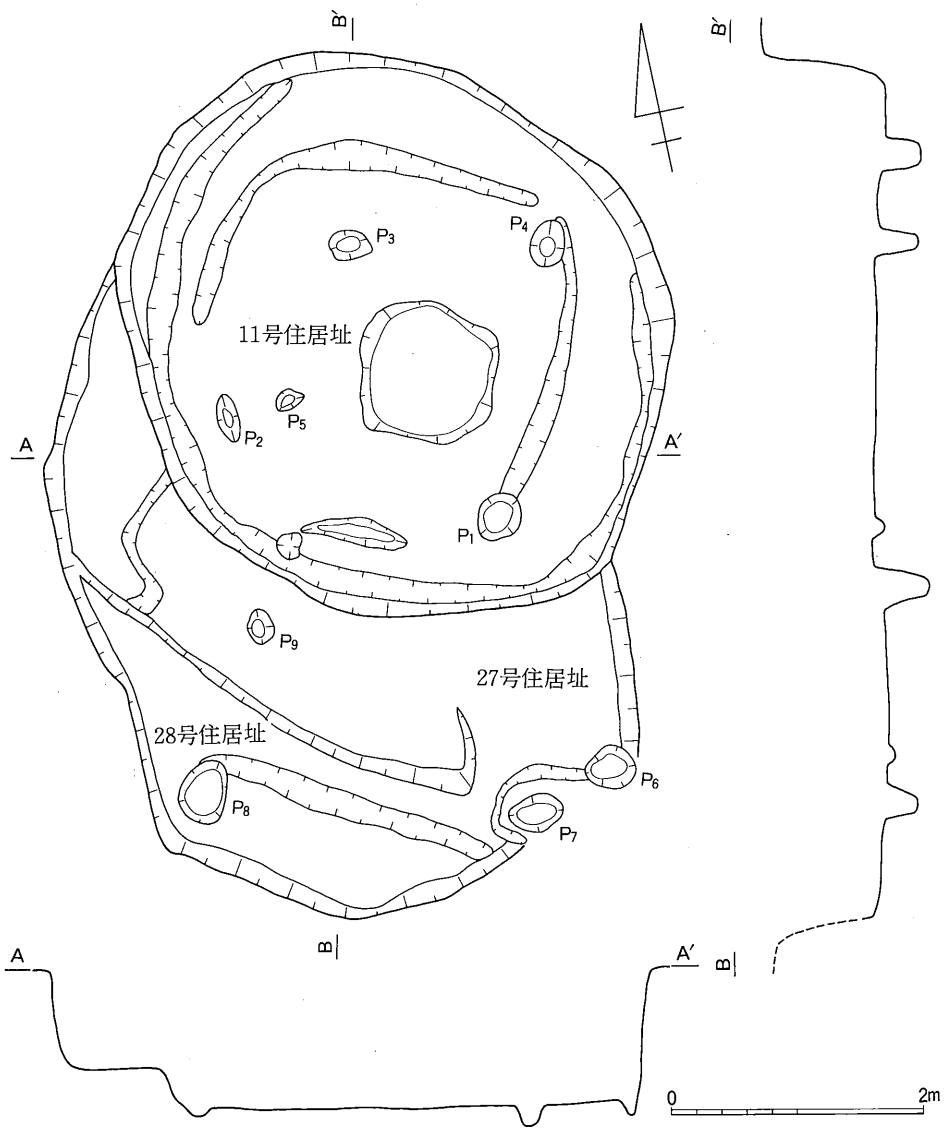


図42　11・27・28号住居址実測図

した点を付記したい。

遺物は多いが全てが一括されている。土器で図化例はⅠ期Ⅰ群C（34）と同胴部以下（35～38）、Ⅱ期Ⅰ群C（40）とⅢ群胴部（39）がある。他はⅠ期Ⅰ群の無文胴部片が1081点で大半を占めるが、同B（452～457）の30点、同A（449～451）10点、同C（458･459）8点、斜格子目文（460～476）205点は、比率としては高い方である。Ⅱ期Ⅰ群（479～498）は151点と少なく、Ⅲ群（499～507）が240点ある。509はⅡ群、501～512はⅠ群の繊維土器である。なお40は、胎土に輝石と灰白色粒子を含んでおり、在地系でも遺跡付近の製作とは考えられない特殊な土器である。石器は、石鏃（264～291）29点、石錐（292～294）3点、打製石錘（295）1点、スクレパー（296～303）14点、横刃型石器（946）1点、叩石（947～949）4点、礫端叩石（950）2点、玦状耳飾（304）1点のほか、黒曜石の剝片134点・屑片393点・石核78点などがある。なお、打製石斧（945）と叩石（948）は住居址上層出土品である。

7） 12号住居址（図43）

第8トレンチ3～5区で検出され、26号住に切られている。付近は表土につづき褐色土となるが、表土からほぼ40～50cmあたりを中心にレンズ状に人頭大の礫が雑然と混在していた。14・25・26号住居にも同じ状態の遺構がある。しかし、これらの礫群と12号住や26号住との関連は十分把握できてない。平面形は東西に長軸線をおく3.9×3.8mの丸味をおびた隅丸方形で、埋土は褐色土である。床面は堅く踏み固められており、柱穴はP_1～P_4で、中央西寄りに地床炉がある。周溝はない。P_1の東の平石は他住居址例のような据えられたものではない。調査時には当初、25・26号住を含めて12号住と一本化しており、平面形が確定した後も、26号住を「A号」、25号住を「B号」と呼んでいた記録がある。そのため出土遺物も3軒分が一括されており、25・26号住出土と区分できたのは数点にすぎない。

遺物量は3軒分のためか多い。上層ではⅠ期Ⅰ群DかEの大破片（514）があるものの、量的には26号住上層と比べてII期（515～526）の比率が高くて半数に近い。住居址出土と明示されている土器は、Ⅰ期Ⅰ群DかEの大破片（41）の他は無文胴部が1010点と多く、同D・E口縁部（542～547）も65点と少なくない。同A～Cの斜格子目文（530～541）141点は率としては低い。またII期Ⅰ群（552～581）が450点とやや多く、III群（582～589）213点のうち半数が斜走沈線を地文とし、D（587･588）が2点ある。Ⅰ群の繊維土器（593～598）の20点は、他の住居址と比較すると非常に多い。石器は石鏃（305～339）33点、石匙（340～343）4点、石錐（344・345）2点、打製石錘（346～348）3点、スクレパー（349～361）15点、打製石斧（951）1点、叩石（952～961・965・966）12点、礫端叩石（962～964・967・968）5点の他、黒曜石の剝片120点・屑片220点・石核76点などが出土している。

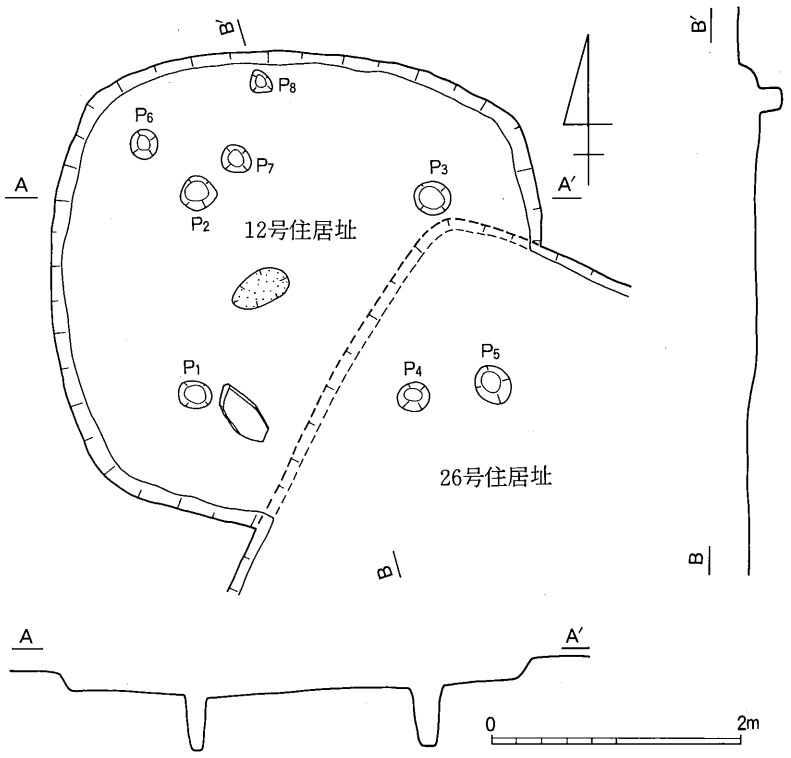


図43　12号住居址実測図

8） 13号住居址（図44）

第9トレンチ2・3区で検出され、26号住を南でわずか切り、北東部で47号住とも重なる。26号住を切る南壁は、エレベーションからは破線あたりに求められるが、東側の状況をみると、もっと広がって円味をもつかもしれない。一方、47号住との関係は、概報では「床面が一部破壊され」ているとして、47号住の周溝とピットの一部が調査されているので、47号住の方が新しくみえるが、その際、47号住の周溝と重なる炉がピットの形で明確に記録されていることと、出土遺物の様相が47号住の古さを示唆していることから、ここでは、13号住が47号住の埋土下層に床を作っていたと解釈しておきたい。

平面形はN20°Eに長軸をおく、4.3×3.7mの長方形を想定した。床面は堅いが、柱穴はP_4とP_3かP_2が考えられるほかは不明である。中央北寄りに炉があり、8号住と同様に内部に平石を据える。住居址埋土で遺物が多量に出土し、その際はII期I群が多かったとの記録がある。

遺物は中量で、土器はI群ではII期の大破片（43～45・609・622）が目につき、破片（610～638）360点も比率としては高い。43は結束第1種で粗く器面を埋め、古い印象を受けるが、その一部は12号住、中でも12号Aと呼ばれた26号住からも出土している。その他はI期I群の無文胴部片600点、斜格子目文（599～605）80点、同D・Eの口縁部（606・607）18点がある。なお608は縄文地文の上に斜格子目文をつける例として注意しているが、第13トレンチからも同種土器が出土しており、出土地点を訂正する可能性がある。また、III群（46・637～640）106点のうち図化したD（46）の一部は、12号住や6号住からも出土している。石器は石鏃（362～372・374～381）19点、抉入刺突具（373）1点、石匙（382～385）4点、石錐（386・387）2点、打製石錘（388）1点、スクレパー（389～393）13点、打製石斧（969）1点、横刃

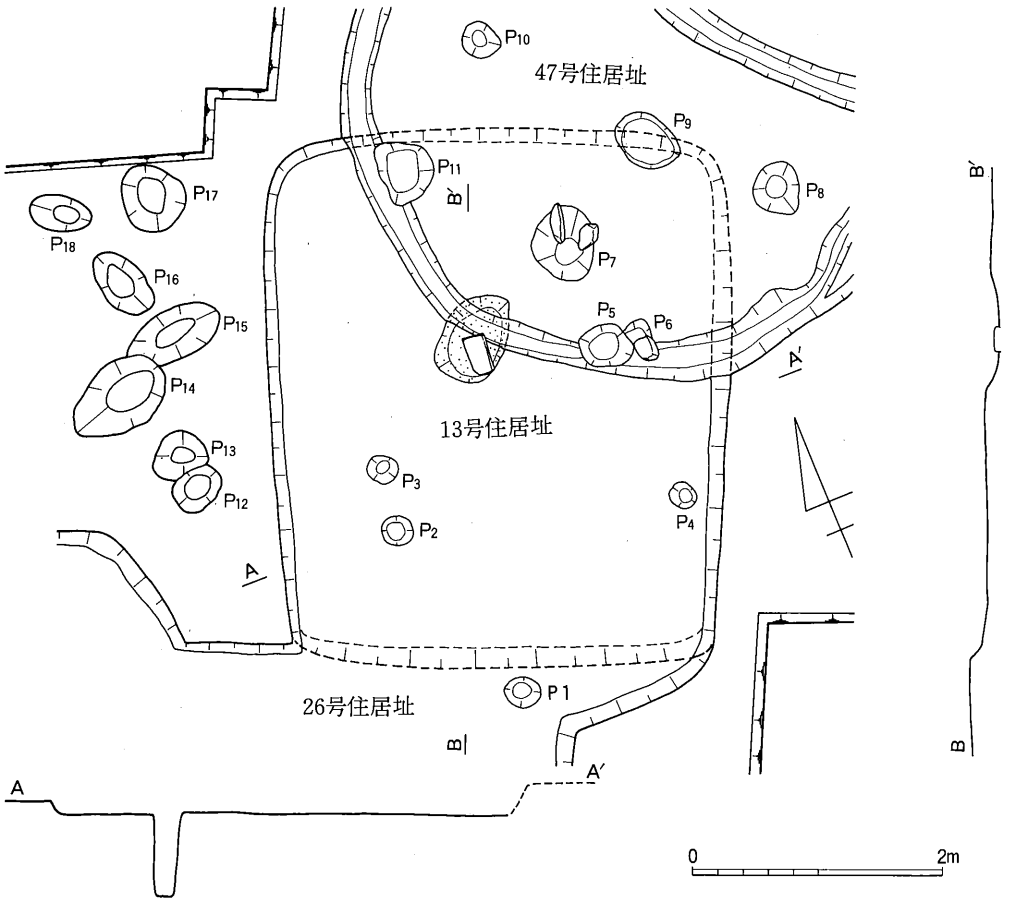


図44　13号住居址実測図

型石器１点、叩石（970・971）３点、礫端叩石（972・973）２点のほか、黒曜石の剝片123点・屑片223点・石核78点・両極打法痕のあるもの15点などが出土している。

9）　14・23号住居址（図45）

第10トレンチ中央と第11トレンチ東寄りに落ち込みが認められ、両トレンチ間を拡張して調査したが、14号住の東側、23号住の南側を残して完掘できなかった。14号住付近で、住居址の平面形が確認される前に、上層部分で黒色土が中央に深くレンズ状に入り込んでいたが、地表下45cmくらいのこの黒土上層から下の茶褐色土にかけて、人頭大の礫が多量に混入する、12・25・26号住と同じ現象がみられた。と同時に、黒色土中よりⅠ・Ⅱ期の遺物が混じり合って多量に出土した。遺構検出面より上に濃密な遺物包含層があったわけで、こうした状況が両址を完掘できなかった一因でもあった。

23号住を南西部で切る14号住は、埋土の中央には先述したレンズ状の黒色土が入り込み、その下部は茶褐色土となる。平面形はN10°Eに長軸をもつ5.8×推定4.5mの隅丸長方形となろう。主柱穴はP_1・P_2と未掘部に２本の４本が考えられ、西壁下のみに周溝が確認されている。中央部のP_4は炉址の痕跡か。その北西に平石が据えられている。下層の茶褐色土中の遺物は極度に少なかったと記録されている。一方、23号住の平面形は、径約3.5mの円形または円味をおびた隅丸方形が想定される。周溝はない。床面は非常に堅く、P_7～P_9と未掘部の１本を加えた４本が主柱穴となろう。P_{10}はその位置からみて炉址の可能性も考えられる。東壁外にあるP_{11}・P_{12}は本址に付属するかどうか不明である。

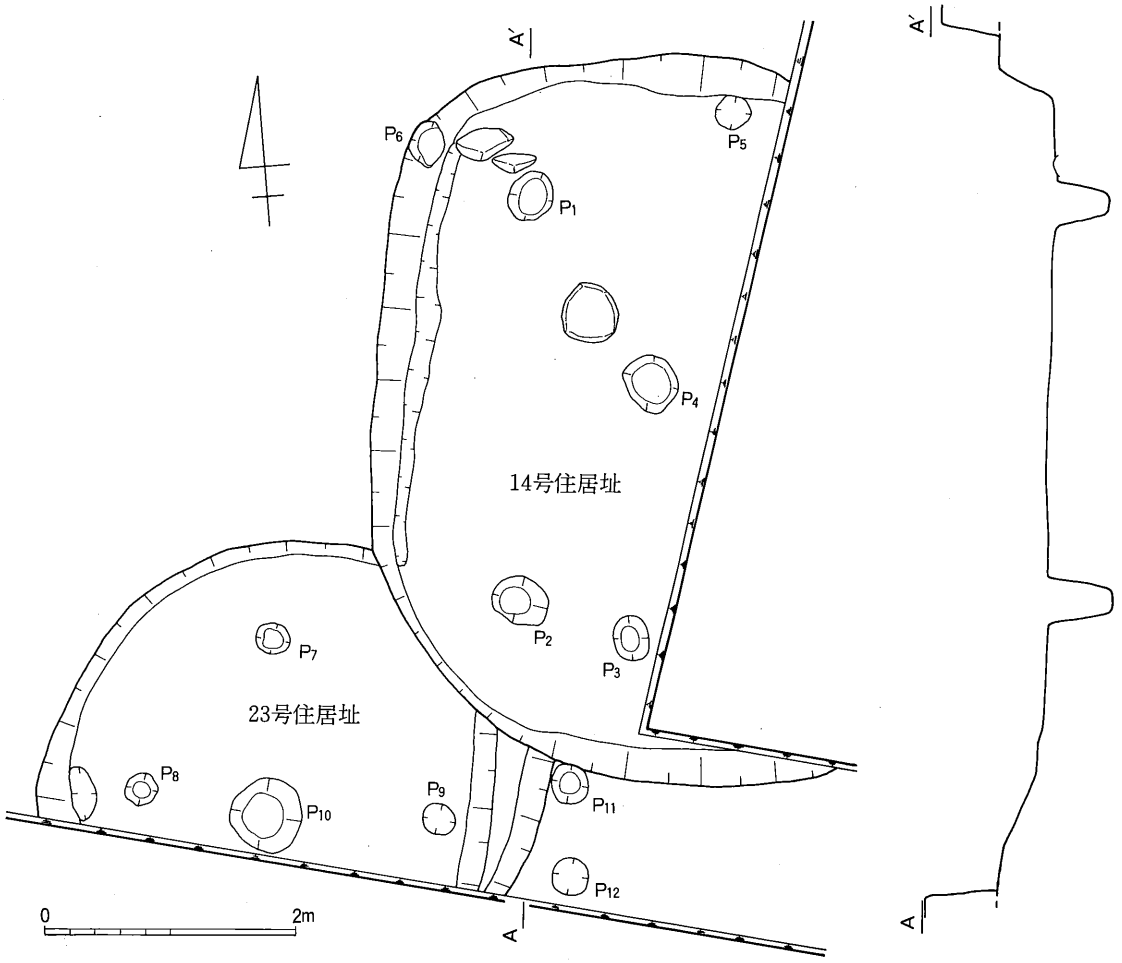


図45　14・23号住居址実測図

14・23号住付近の上層出土遺物は極めて多いが、住居址埋土からは中量か少なめである。23号住埋土にはⅠ期Ⅰ群C（53）・D（54）・E（55）の底を欠く略完形品や大破片（56・57）があり、14号住では埋土よりも上層にII期Ⅰ群が多いこと、23号住では埋土の方が上層よりⅠ期Ⅰ群D・Eの比率が高いこと（ただし、比較すればII期Ⅰ群も多くなる）などが目につく。しかし、上層の包含層には、Ⅰ期Ⅰ群D・E75点、同斜格子目文175点、無文胴部2260点と、II期Ⅰ群1260点があり、23号住埋土の半完形土器以外は、住居址の所属時期を知る手がかりとはなり得ないだろう。14号住からはⅠ期Ⅰ群Cの完形のミニチュア土器（図62—1）が、23号住居址からは底面が方形で丸底となると思われるIII群（60）が出土している。石器も出土地点に不明確な点があるが、14号住埋土から石鏃（423～449）27点、石匙（450～454）5点、打製石錘（455）1点、スクレパー（456～462）11点、礫端叩石（983・984）2点と黒曜石の剝片85点・屑片184点、石核27点が、一方、23号住埋土からは石鏃（528～532）7点、スクレパー2点、磨製石斧（1031）1点、叩石（1079）1点と黒曜石の剝片14点、屑片38点、石核8点が出土し、さらに両住居址の上層（第10・11トレンチを含めて）からは、石鏃（395～413）50点、石匙（414）9点、石錐（415～417）8点、打製石錘1点、スクレパー（418～421）33点、叩石（975～979）12点、礫端叩石（980～982）5点と黒曜石の剝片170点・屑片554点・石核109点が出土したとまとめておきたい。なお、「14・23号住」と注記された遺物は上層に含めた。また、土器79は23号住出土とされていたが、新たに接合した部分から、第14トレンチの44号住出土と訂正した。

10） 15号住居址（図46）

第2トレンチ5・6区、16・29号住の東側にある。褐色土中に堅い床面らしい広がりを認め、炉址らしい部分（P_5）もあり、平石やピットも検出したので一応住居としたが、日程の関係で継続調査はできなかった。実測図も不十分であるがそのまゝ使用してある。P_1は遺構の一部であろう。トレンチも含めて数点の土器（832～835）と叩石（985）・礫端叩石（986）各1点のみが出土した。

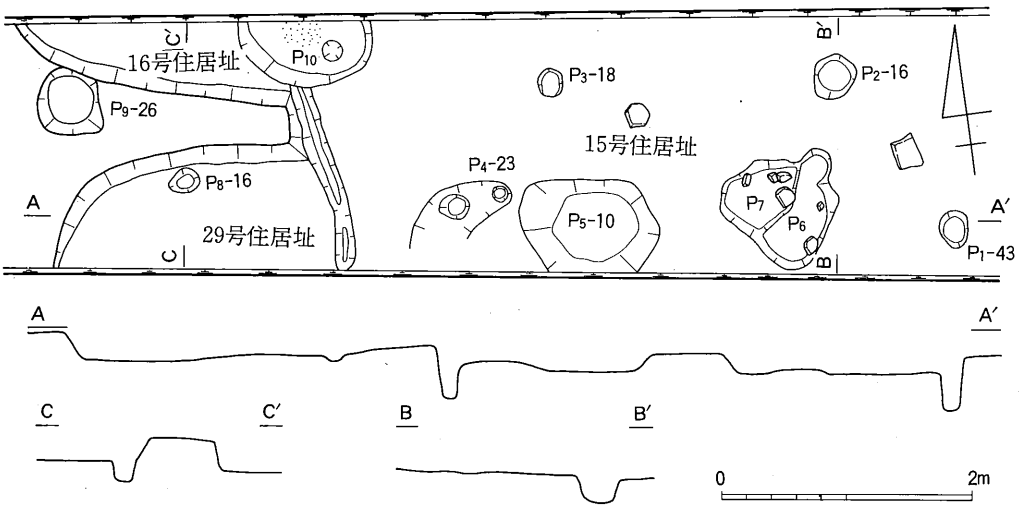


図46　15号住居址実測図

11） 16号住居址（図47）

第2・3トレンチの6～8区で29号住の北に接し検出された。住居址北壁と南壁のみを検出しただけで中心部は未掘のため付属遺構はわからないが、推定4.6×4mの隅丸方形であろう。遺物はトレンチも含めてⅠ期（48・836～842）とII期（843～848）の土器がごく少量と叩石（987）1点のみが出土した。

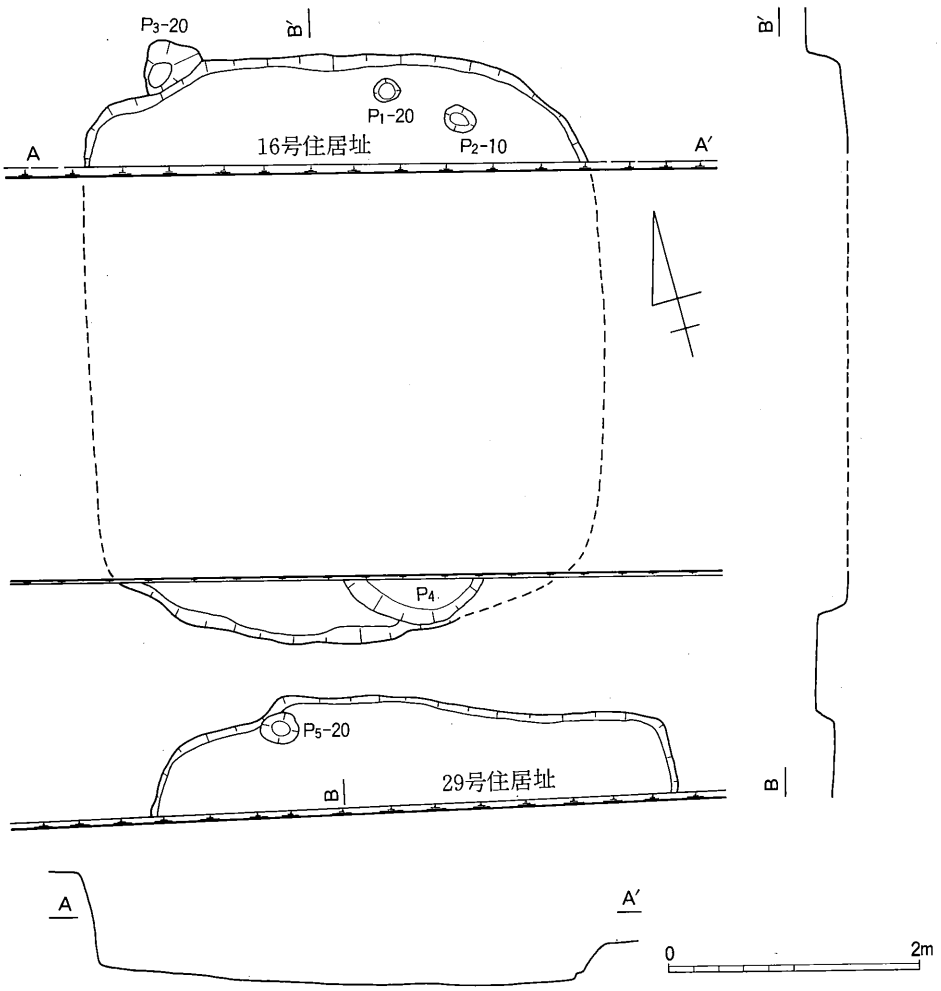


図47　16・29号住居址実測図

12)　17・49号住居址（図48）

第3次調査の際、第3トレンチ12・13区で一部検出され、第4次調査で継続調査した。第4次調査ではまず17号住埋土部を4等分し、南東区から逆時計回りに1～4区に分け、掘りさげたところ、3区の床上25cm付近に貼床が検出された。そこで西側から北側に重なる49号住を想定して調査を進めたのだが、後者は、日時の関係で確認調査段階に終った。

17号住は、平面形はN70°Wに長軸をおく、4.5×4.3mの円に近い隅丸方形で、北東隅に張出部がある。柱穴は極端な長方形に配されたP_1・P_2・P_3・P_5の4本であろう。P_6は炉址とみたい。周溝はなく、周壁や床面の状態はあまり良くない。平石が2個床面に据えられている。49号住は南壁のごく一部と、床面が17号住北東部張出部付近まで広がること、先述した17号住の埋土中の貼床から、17号住より新しいことを確認したのみにとどまり、詳細は不明である。

遺物は非常に多いが、両址を一括して取り上げているので区分できない。土器はI期が多く、I群ではA（850～854）78点、D・E（863～868）92点、斜格子目文104点、無文胴部片1644点で、D・Eで口唇部に刻みを付す例が28点と目につく。また、G（894～899）も28点ある。II期I群（869～880）は234点と少ない。器形や施文に古い要素をもつ869は「プランが大体判明したころ」3区から出土しており、49号住所属とみたい。II群(892・893)が5点、III群(881～891)281点だが、中にDが6点ある。石器は石鏃(463～469)13点、石匙（470～480）11点、石錐（481）・打製石錘（482・484）各2点、スクレパー（485～487）9点、

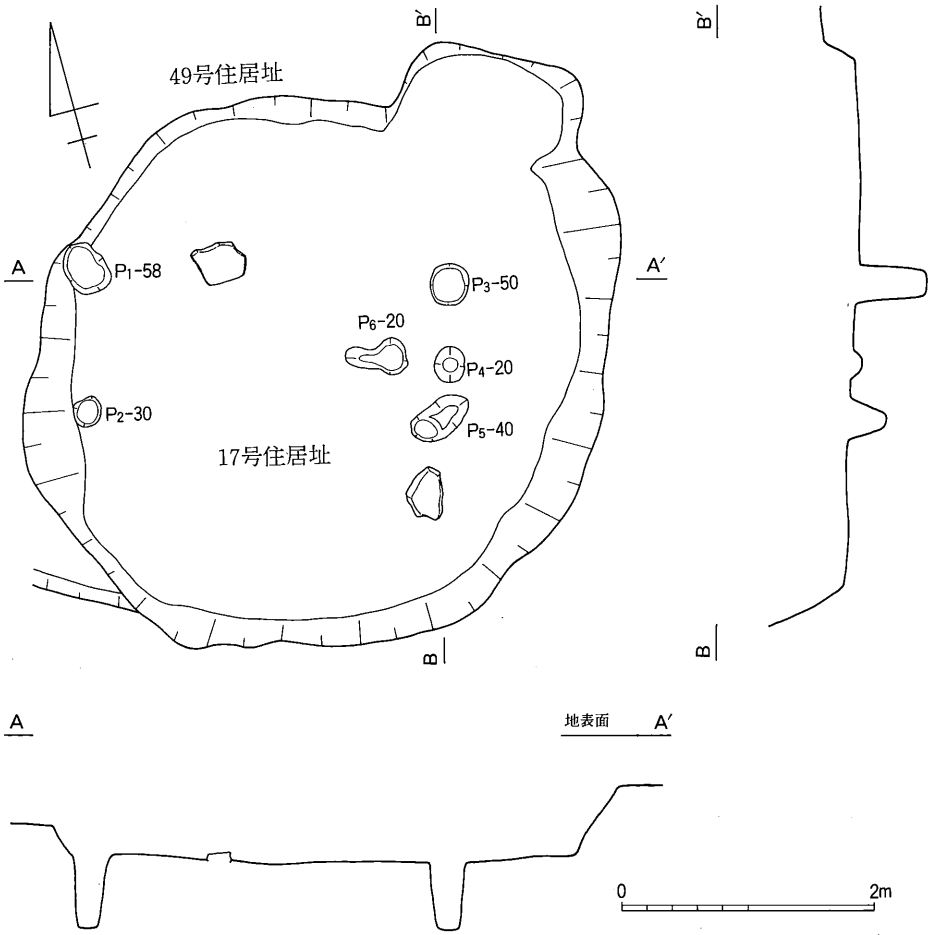


図48　17・49号住居址実測図

打製石斧（988～990）4点、叩石（992～996・1000）10点、礫端叩石（997～999）3点、粗大石匙（991）1点、黒曜石の剝片130点・屑片247点・石核47点・両極打法痕のあるもの23点などがある。上層の地表下50cmからミニチユア土器（図62－3）が、埋土から土製円坂（6）が出土している。打製石斧4点と粗大石匙1点の出土がやや特異である。打製石錘483は第17トレンチから出土したものである。

13）18・32・33号住居址（図49）

検出時に、埋土の南から東側にかけて褐色土が広範囲に、また北側には黒色土が深くそれぞれ確認されたものの、床面精査段階で3軒の切り合い関係をほぼ把握したのみで、それ以上の広がりや前後関係を十分に知ることはできなかった。遺物が一括されているのも検討できなかった一因である。

18号住は、N10°Eにおく5.0×4.8mの円形に近い平面形を考えたい。床面は堅くなく、主柱穴はP_2・P_3・P_4・P_{10}の4本を想定したが、柱穴らしいピットは多い。北西と南東の壁下に周溝があるほか、内側にも北を除く三方に直線に近い溝がある。これを周溝としてP_3・P_4・P_{16}を柱穴とする平面形が円味をおびた方形住居（東西3.7m）をもう一軒考えると、前述した円形の18号住は拡張とも解釈できる。しかし、いずれも炉がなく、詳細はつかめない。南に重なる33号住は、N5°Eに長軸をおく5.2×3.9mの、南壁中央に張出部をもつ長方形プランを想定したい。床面は堅くなく、柱穴はP_6・P_7（またはP_8）・P_{15}・P_{17}の4本で西壁下に周溝がめぐる。P_8は上層構造と関連したものかもしれない。炉も存在しない。32号住は、P_{13}が柱穴らしい以外詳細は不明である。なお概報には、33号住の平面形を、南西隅は掘りすぎているとして

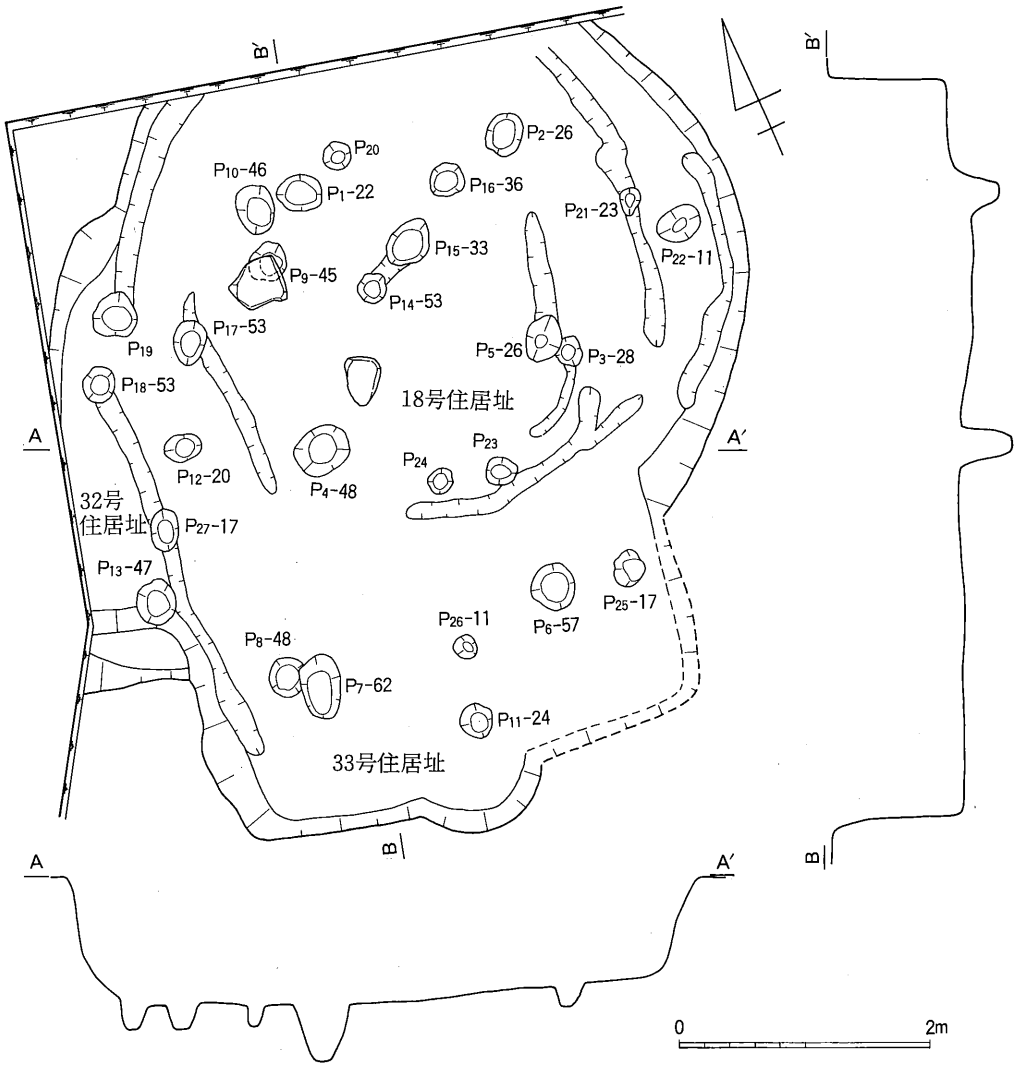


図49　18・32・33号住居址実測図

「円形」と判断した図と「隅丸方形」とする記録があるが、ここでは西壁下の周溝が直線的な所から長方形をとった。また同じ概報では、32号住の主体部は、より西側にあると記されているが、図にはP_{19}の西に壁に見える立ち上がりがあり疑問がのこる。

遺物は多いが、3軒分が一括されている。ただ、33号住がトレンチ調査で確認されていたので、959～966は分離できた。土器は大破片のⅠ期Ⅰ群C（49･50）とⅢ群C（52）のほかは全て破片で、各期が揃っている。Ⅰ期Ⅰ群はD・E（909～911）が31点と多く、斜格子目文（901～908）96点、無文胴部919点がある。繊維を含むⅠ群（954～958）も19点と目につく。Ⅱ期Ⅰ群（912～944）は318点で、923・926～932など、縄文原体が太く、施文･調整ともに粗雑なものがある。Ⅲ群（945～950）120点のうち斜走沈線が50点にみられるのに対し、Ⅱ群（951～953）はCで新しい。33号住出土と見なした959は表裏に粗い斜格子目がある。石器は、石鏃（491～503）15点、石匙（504～510）7点、石錐（512～517）6点、打製石錘（518～520）3点、スクレパー（511･520～526）18点、打製石斧（1001･1002）2点、叩石（1003～1012）10点、礫端叩石（1013～1026）14点を数え、叩石類とくに礫端叩石の多さが指摘できる。他に黒曜石の剝片141点･屑片281点・石核73点・両極打法痕を残すもの17点がある。

14） 19号住居址

第6トレンチ6・7区で検出され、床の一部が調査されたのみで、全体像はつかめない。出土土器は、I群でみると上層でI期74点、II期(967～980)55点、埋土でI期8点、II期3点である。石器は石匙(527)1点のみである。

15） 20号住居址

第6トレンチ1～3区で検出されたが、19号住同様その存在を確認したのみである。I群土器では、上層でI期（983）30点、II期（984～992・994・995）46点、埋土でI期35点、II期（993）9点があり、石器は出土していない。

16） 21号住居址

第8トレンチ7区で検出したが、これも確認程度で終った。I群土器では、上層でI期（1000）75点、II期（1001～1003）32点、埋土でI期（999）28点、II期（1004）2点があり、I期が多い。石器はない。

17） 22号住居址（図50）

第8トレンチ12・13区で検出されたが、周溝と柱穴らしいピット、床面が確認されたのみで全体像はつかめていない。I群土器では、上層でI期（1009・1010）37点、II期11点だが、埋土では41点全てがI期（1011）である。石器はない。

18） 24号住居址（図51）

12号住の北に接し、第9トレンチ4・5区で検出されたが、南東隅の一部のみの調査であった。しかし平面形が円味をもつこと、柱穴1本、二重の周溝が確認された。壁下に周溝ある住居の拡張と解釈した。内側の周溝が浅く、壁下のそれは壁上から50cmと深い。遺物はごく少なく、I群土器のI期(1015～1018)53点、II期(1021～1024)42点、III群(1019・1020)9点、それに石匙(528)・叩石(1032)・礫端叩石(1033)各1点と若干の剝片類が出土している。南に接する大ピットについては、イ号竪穴の項で述べる。

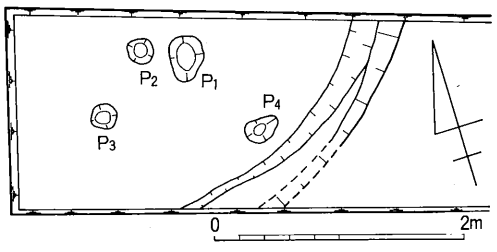


図50　22号住居址実測図

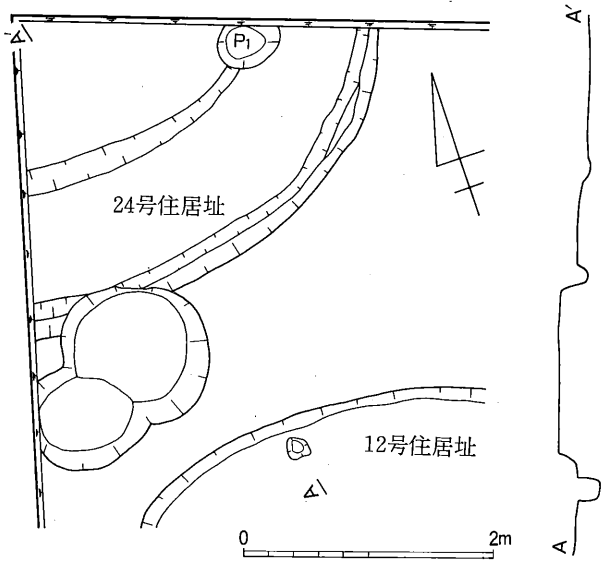


図51　24号住居址実測図

19) 25・26号住居址（図52）

第７・８トレンチの２～３区で検出され、25号住を26号住が切っているが、26号住はさらに12号住も切り、13号住に切られている。調査時には、この両址は初め12号住と同一視していたが、後に26号住部分を「A号」25号住部分を「B号」と区別した。一帯の土壌には多量の礫が混入しており、遺構検出面以下は礫層といって良い状態で、本遺跡にあっては特異な部分であった。

25号住は、N80°Wに長軸をおく円味をおびた隅丸方形を呈し、長辺3.5m、短辺は推定2.8mを測る。埋土には床面にいたるまで人頭大の礫が多量に混在しており、床面の状態も悪い。柱穴・炉・周溝などは検出されていない。26号住は、N30°Eに長軸をもつ5.0×3.9mの長方形を呈する。埋土・床面の状態は25号

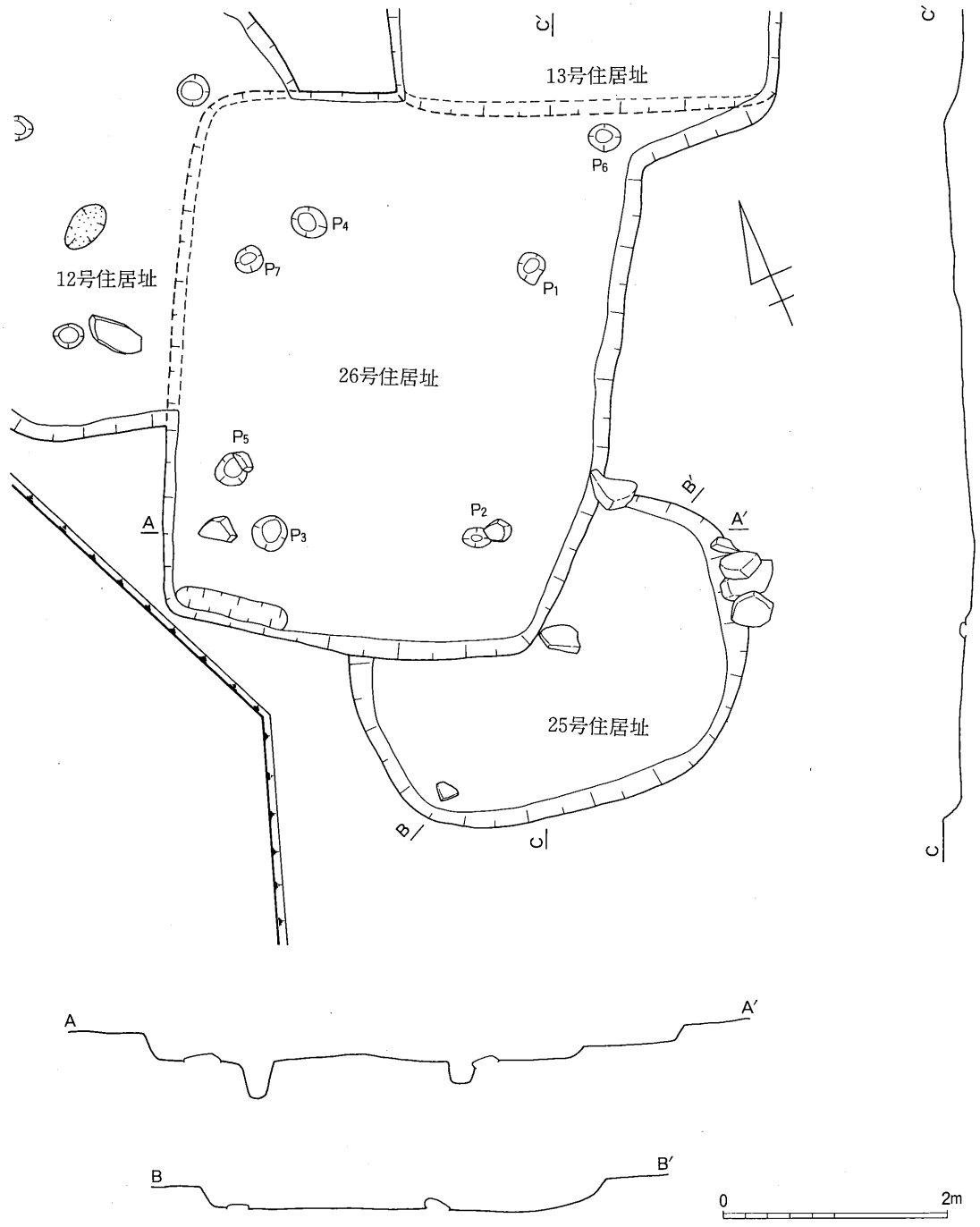


図52　25・26号住居址実測図

住とほぼ同様である。柱穴はP_1～P_4の４本で、南西壁下の西隅に溝がある。炉は未検出としておきたい。

25・26号住出土と分類された遺物はない。たしかに両址からの遺物出土量は少なかったようだが、先に述べた経過からみて、遺物も12号住に一括されているのであろう。ただ、土器.61と石鏃・打製石斧(1034)・磨製石斧（1037）・スクレパー各１点と叩石・礫端叩石（1035・1036）各２点が第８トレンチの該当区から出土していることから26号住に、また12号住の石器とした中で石鏃1点・叩石２点、礫端叩石１点が、注記からみて25号住に所属するものとみられる。

20） 29号住居址（47）

第２トレンチ６～８区、16号住の南に検出された。トレンチ内の調査で、方形の平面形をとる住居という以外、遺物も特定できない。

21） 30号住居址（図38）

９号住の調査の際、その南東にごく一部が検出されたのみである。平面形は方形に近く、周溝と柱穴１本が確認された。遺物はない。

22） 34号住居址（図53）

第13トレンチ４・５区で検出され、トレンチ内だけ調査した。平面形が北東方向に軸線をおく隅丸方形であろうと推定できる。床面は堅くなく、南壁下から黒曜石の剝片類が多く出土した。埋土出土遺物は区分してないが、トレンチ内の土器には、Ⅰ群土器では、Ⅰ期81点、Ⅱ期（1025～1032）48点がある。なお、608の土器も本址出土品であろう。石器は13トレンチ出土だが打製石斧（1039）と横刃型石器（1040）各１点がある。

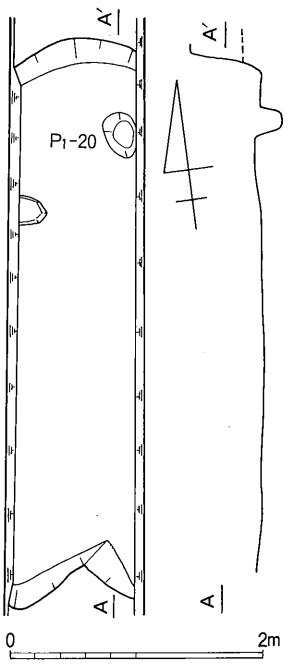


図53　34号住居址実測図

23） 35号住居址（図54）

第15トレンチ13・14区、今回調査範囲の東北端に単独に離れて検出された。平面形はN80°Wに長軸をおく4.2×3.5mの東側の突出する卵形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く、７個のピットも８～16cmと浅く、主柱穴と特定できるものはない。炉も検出できなかった。床面はあまり堅くない。遺物は少なく、Ⅰ

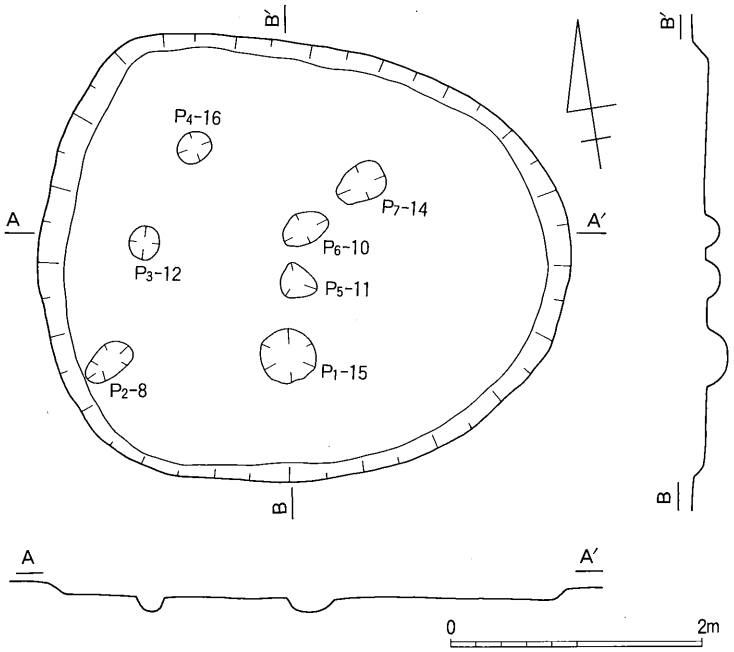


図54　35号住居址実測図

群土器はⅠ期のA（1033～1037）16点、D・E11点、G（1044・1045）7点と斜格子目文（1038～1040）128点、無文胴部片280点、およびII期25点であり、Ⅰ期Ⅰ群Aが主体である。これにBを主体とするIII群（1041～1043）が伴う。石器は、石鏃（534～542）10点、スクレパー（543）6点、叩石（1041・1042）2点、礫端叩石（1043～1046）4点と、黒曜石の剝片28点・屑片122点・石核15点などがある。

24） 36号住居址

第17トレンチ8・9区に床面らしき部分と、南壁らしい10～15cmの掘り込み、数個の小ピットを確認したのみである。遺物は少なく、土器はⅠ期Ⅰ群（1046）118点、II期Ⅰ群（1047～1060）78点、III群（1061・1062）13点がある。石器は石鏃（808・809）2点、石錐（810）・スクレパー・打製石斧（1047）各1点と、黒曜石の剝片類47点がトレンチの該当区から出土している。

25） 37号住居址（図55）

台地北縁に離れて設定された第18トレンチ8～10区に検出された。西・東側を拡張して完掘した。平面形はN10°Eに軸線をおく5.0×4.9mの、北西側は円形に近い円味をもった隅丸方形を呈する。床面は非常に堅い。柱穴はP_1・P_3・P_4・P_5の4本で、壁下を幅広の周溝がめぐる。図示してないが、中央西寄りに浅いピットがあり、炉址（？）との記録が残っている。埋土は、床上を壁下に厚く中央部で薄い炭の多量に混入する黒色土が覆い、その上に茶褐色土、さらに炭混入黒色土があり、最上部中央に黒色土がレンズ状に入っている。床上には炭化材が非常に多く、骨片と焼土・灰も検出され、焼失住居と判断できた。図上の棒状でない炭は床に立った状態で検出され、中に断面角形らしい例もあった。その位置からみて周壁に関係する柱とみてよいだろう。遺物の出土状態をみると、主として柱より内側の範囲で多量の土器がつ

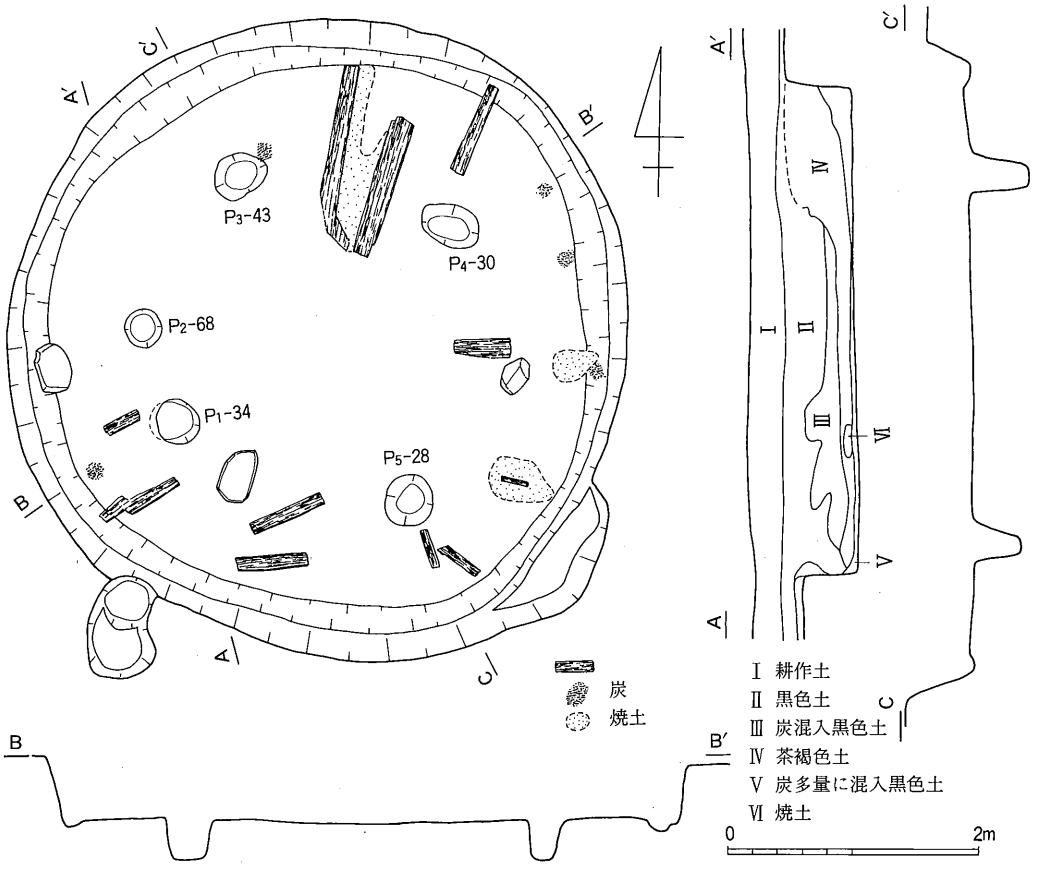


図55　37号住居址実測図

ぶれて発見されており、層位的には黒色土下層から褐色土（III・IV層）、わけても後者に多かった。

遺物は非常に多い。約1900点の土器は、Ⅰ期Ⅰ群Eが90%以上を占め、64～70に図化した以外、無文口縁部（1069・1070）16点、同胴部片1772点を数える。Ⅰ期Ⅰ群D（62・63）5点はいずれも新しい傾向を示す。他は同A～C（1063～1068）14点、II期Ⅰ群（1072・1073）12点とIII群（73・74）54点がある。72はやや特殊で、胎土や器形からⅠ期Ⅰ群Aの胴部以下と思われるが、破損後であろうが口縁から頸部を打ち欠きによって取り去り、1対の大きな波状となるように成形し、補修もして再利用した例である。石器には石鏃（544～563）21点、石匙（564～572）9点、石錐（573・574）2点、打製石錘（575～578）4点、スクレパー（579～583）6点、礫端叩石（1049・1050）2点がある。住居址上層のトレンチから1点（1048）出土してはいるが、確実に住居址に伴う叩石が1点もないのがやや不可解である。他に黒曜石の剝片84点・屑片182点・石核34点・両極打法痕のあるもの13点がある。

26） 38号住居址（図56）

調査区域の東南端、第20トレンチ2・3区に検出されたが、トレンチ内の住居東側だけを確認した。南北に軸線をもつ南壁の張り出す隅丸方形を想定すると、規模は南北で約4mとなろう。床面上にある深いピットのうち、P_1・P_3・P_4・P_5の4個はほぼ等間隔に並ぶが、他住居址例の柱穴配置からみると建て替えも考えられる。壁下に周溝がめぐり、ここにも平石が2個床面上に置かれている。埋土出土の土器はなく、トレンチ調査で、Ⅰ期Ⅰ群（1074）21点、II期Ⅰ群8点が出土している。石器には石匙（584）・スクレパー（585）各1点がある。

27） 39号住居址（図57）

38号住の北、第20トレンチ6・7区に検出され、ここもトレンチ内での確認のみである。浅い掘り込みで、平面形は方形となろう。床面の7個のピットのうち、主柱穴と特定できるものはなく、ただ、P_4周辺にわずか焼土らしい痕跡があり炉址との推測もできる。埋土出土遺物はなく、トレンチ内からⅠ期Ⅰ群A（1075～1081）13点、G（1091・1092）4点、斜格子目文（1082～1085）33点、無文70点とII期Ⅰ群（1086～1090）13点の土器が出土しており、Ⅰ期Ⅰ群Aが目につく。石器はない。

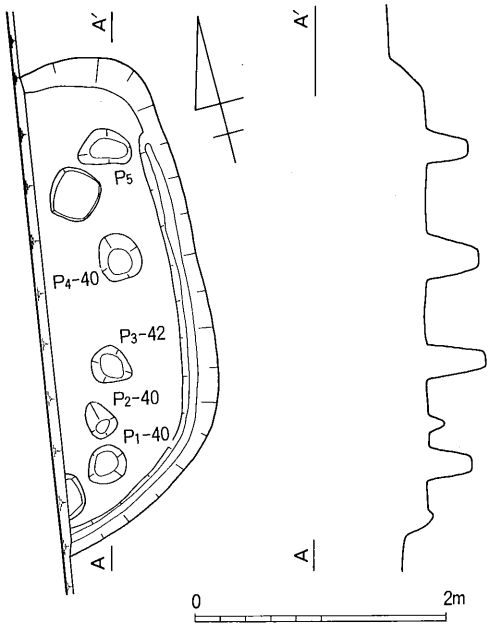


図56　38号住居址実測図

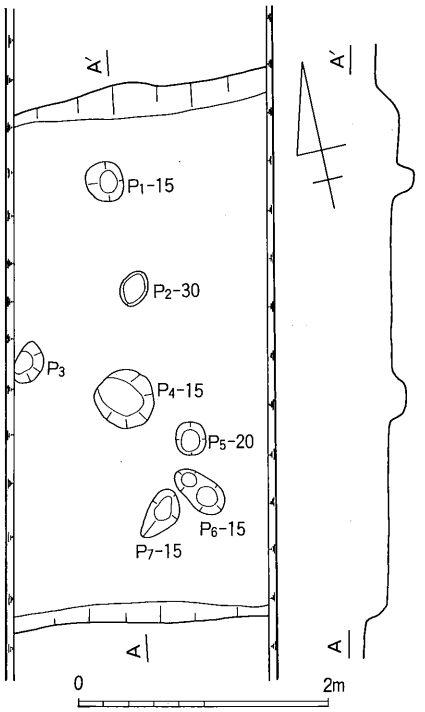


図57　39号住居址実測図

28) 40・41・45・46号住居址

住居密集地域の北側にあたる、第17トレンチに検出された重複する住居址群である。しかし、40号住で床面と周溝の一部を調査したものの、45・46号住はその存在を確認し、41号住は遺物の出土状態から想定したのみで、日時の関係からそれ以上の調査はできなかった。

第17トレンチ1～5区の黒(褐)色土があまりに深かったため、約1m掘り下げたところでトレンチ東縁にサブトレンチを入れたところ、1区で床面らしい堅い部分を確認した(40号住)。ところが、この堅い部分の上10cm前後からIII群C（75）の土器が出土した。それまでには、上層からII期I群土器が多量に出土しており、当時、III群CとII期I群土器との間には明らかに時期差があると考えていたので、このII期I群土器を伴う新しい遺構を想定し、41号住とした。しかし、1・2区で貼床が検出され、西側の拡張部分の1区で40号住床面より高い位置にローム面があるものの、いずれも床面と認定した記録はない。一方、1区と2区の境付近で、40号住北縁になると思われる周溝がみつかったあと、その北方のサブトレンチ4区において、住居址が切り合い、壁の立ち上りの下部が残っていた。そこで2～5区の間には2軒の住居址（南から45・46号住）が存在すると結論づけた。日時に追われた調査で、相当大胆な想定であり、再調査すれば異なる結果のでる可能性は強い。なお、40号住の周溝は弧を描いている。

遺物は非常に多いが、40号住の一部を除き、それ等はトレンチの区ごとに一括される形で整理されている。そこで、1区出土遺物を41号住の、3区出土遺物を45号住の、4区出土遺物を46号住のそれぞれ埋土出土遺物の一部であると規定し、以下に記しておくことにする。しかし、「17T」とのみ注記された遺物も多く、特に石器は定形石器の60%、黒曜石の剝片類の70%がそれであることから、それさえも量的には必ずしも実数を反映したものではない。

1区出土遺物：I群土器は、I期ではF（76）のほか、A（1208～1213）8点、Bが1点、D・Eの口縁部13点、斜格子目文29点、無文胴部234点が、II期ではA（1214・1215）29点、B（1216～1218）7点、Cと縄文施文胴部片311点がある。II群土器（1238～1241）は8点でCが大半、III群土器（1234～1237）54点の中にDが2点ある。主体はII期で、中でもII群がCである点とII期I群にBが一定量ある点などが注意される。石器には、石鏃（631～677）46点が多く、石匙（678・679）2点、打製石錘（680）・スクレパー（681）・磨製石斧（1052）・礫端叩石（1051）各1点と黒曜石の剝片35点・屑片97点・石核29点などが出土している。

3区出土遺物：I群土器は、I期のAとGが各1点、D・Eの口縁部6点、斜格子目文（1298）13点、無文胴部89点と、II期のA（1299～1301）11点、B（1302・1303）2点、C（1304～1306）と縄文施文の胴部片（1307～1323）117点がある。II群土器は4点で、うち2点（1326）がC、III群土器は13点で、うちにD（1325）が2点ある。II期I群Bの比率が1区より低いといえよう。石器には、石鏃（757～766）10点、石匙（768）・打製石錘（767）・磨製石斧各1点、スクレパー（769・770）・叩石（1058）各2点と若干の黒曜石の剝片類がある。

4区出土遺物：I群土器は、I期ではHの大破片（81)のほか、A・B（1329）各1点、D・Eの口縁部21点、斜格子目文（1330）11点、無文胴部片163点が、II期ではA（1331～1335）14点、B（1337）1点、Cと縄文施文胴部片（1337～1369）201点があり、II群土器（1375・1376）は3点、III群土器（1370～1374）が34点を数える。II期I群に結束第一種が目につく。石器には石鏃（771～781）11点、石匙（782）・石錐（783）各1点、打製石錘（783～789）7点、スクレパー（790）4点、礫端叩石（1061）1点と、黒曜石の剝片58点・屑片117点・石核24点などがある。40号住出土遺物としては、先述したIII群C（75）の土器の

ほか、Ⅰ期Ⅰ群（1093・1094）31点、Ⅱ期Ⅰ群25点、Ⅲ群５点の土器片がある。

全体としては、前期初頭から中葉でも、より中葉が多い土器群と考えられ、調査区中最も新しい。南方（１区側）がより新しい傾向もあるが、それが下層の住居址の時期差とは一概に断定もできない。

29） 42号住居址

第20トレンチ最北に39号住に接して検出されたが、床面状の部分を確認したのみである。トレンチ該当区も含めて遺物はごく少ない。土器ではⅠ期Ⅰ群（77・1096）51点、Ⅱ期Ⅰ群（1097～1101）９点、Ⅲ群（1102～1104）９点や、石器では石鏃３点、スクレパー（586）・磨製石斧各１点、叩石（1053・1054）２点がある。

30） 43号住居址

37号住の西、第21トレンチの西端に黒土の落ち込みを認め、一部床面も確認したので住居址と認定し、ナンバーをつけたが日程の関係で未調査のまま終った。その後第７次で再調査してあるので、ここでは触れない。

31） 44号住居址（図58）

第14トレンチ４～６区に検出され、西に拡張して住居址西側のみを調査した。埋土上層には人頭大からさらに大きめの礫が多数混在している。12・14・25（26）号住と同じ現象である。平面形は北東方向に軸線をおく、長径4.2mほどの不整長円形を想定できる。壁はゆるく立ち上がり、床面は堅くなく、中央がやや凹んでおり、床面上のピットはP_1～P_3があるが、主柱穴と断定できるものでない。中央に平石とその西に接して炭化物があるが、床面との関係が不明で炉址といい切れない。南壁近くの落ち込む礫の間から78の土器が出土した。

遺物は量的には少なく。図化できた土器に、Ⅰ期Ⅰ群A（78）、同B（79）と底部（80）がある。他は同

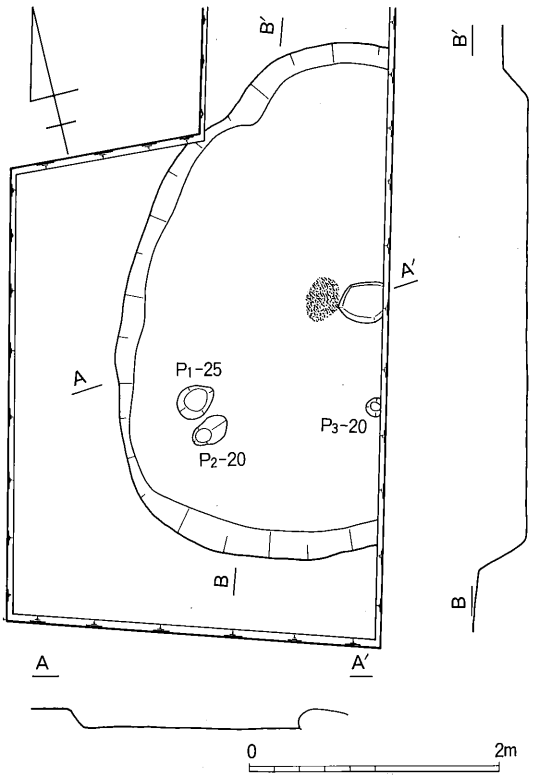


図58　44号住居址実測図

A（1105・1106）11点、同B（1107）5点、D・Eの口縁部4点、斜格子目文（1108～1113）42点、無文胴部片236点と、II期I群（1114～1117）30点、III群（1118・1119）13点、II群1点であり、I期I群A・Bが多い。石器は該当するトレンチ区から、石鏃4点、打製石錘・スクレパー各1点、叩石（1055～1057）3点が出土した。ほかにミニチュア土器（図62－3）がある。なお、土器79は23号住出土として整理されてきたが、第14トレンチ5区出土土器片が接合した点から、本址の所属と訂正した。

32） 47・48号住居址（図59）

第4次調査で、13号住の北壁を確認する際検出され、拡張して調査した。床面は13号→47号→48号の順に低くなっており、47号住を48号住が切り、13号住は47号埋土に切り込んでいると判断した。この根拠は出土遺物からの帰納であり、調査記録にはその点に触れた部分はない。また、48号住は北・東両壁が未調査であり、床面施設についても日時の関係で精査できなかった。

47号住は、N10°Wに長軸をおく、4.8×4.4mのほぼ円形で、部分的に多角形となる。床面は堅く、壁下を幅広で深い周溝がめぐるが、北側には壁外に張り出してピット状になる部分がある。柱穴はP_1～P_4の4

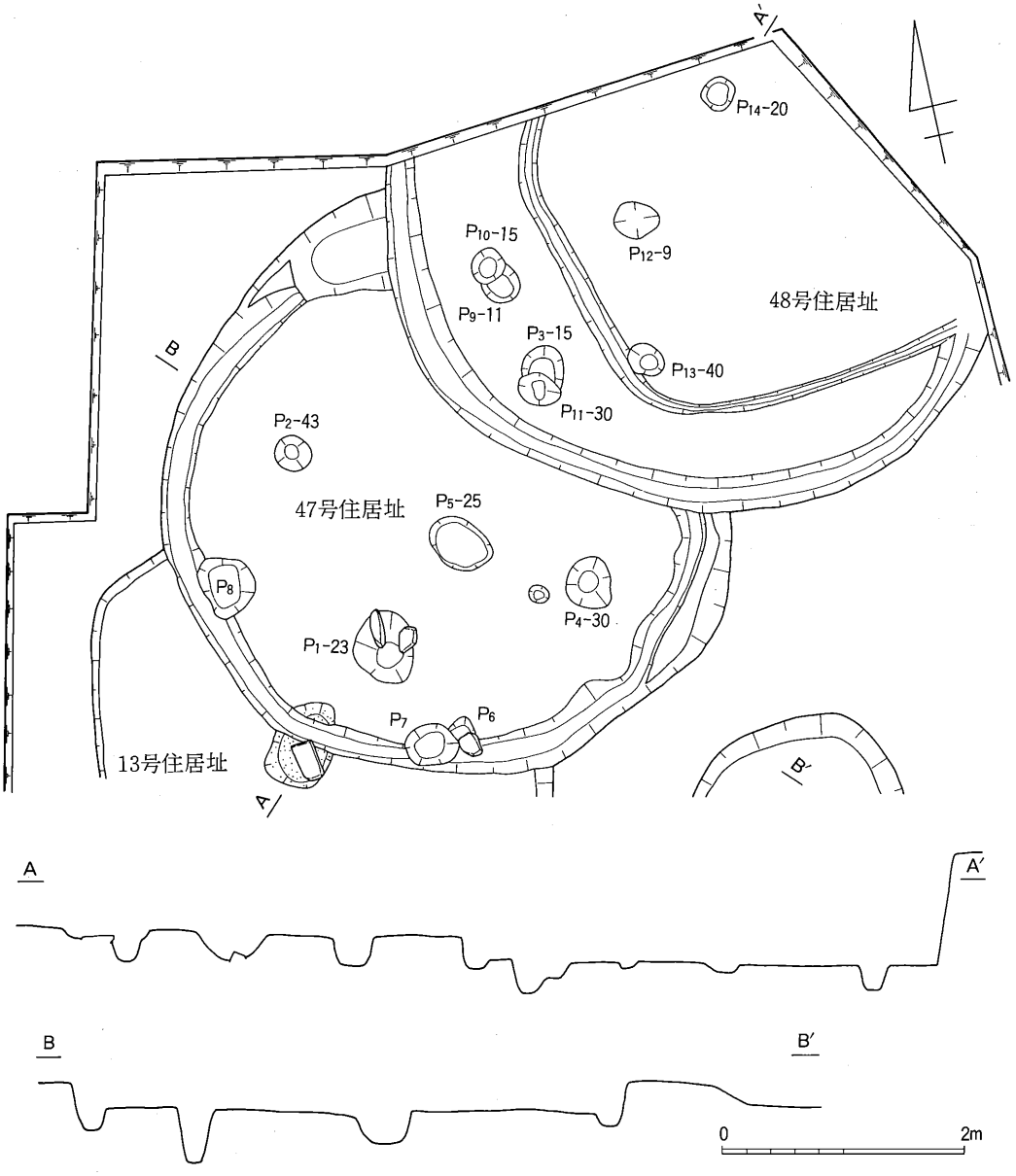


図59　47・48号住居址実測図

本で、P_5は深すぎるが位置的にみて炉の可能性が高い。48号住は、幅広で深い周溝が壁下にめぐる円に近い住居と、幅狭く浅い隅丸方形を画く周溝のある小さめの住居の2軒からなると考えられるが、両者の関連を示す記録がないのが惜しまれる。本址もまた、25・26号住などのように、埋土には中央で床に接する人頭大の礫が多く入りこんでいた。床面は堅いが、柱穴らしいP_{13}以外はP_{12}・P_{14}とも浅く他の施設は検出できなかった。

47号住の遺物は中量で、土器にはⅠ期Ⅰ群が多く、82（A）・83（B）に図化した以外、A（1120）6点、B（1121～1124）4点、D・Eの口縁部（1131～1133）13点、斜格子目文（1125～1130）58点、無文胴部片543点のほか、II期Ⅰ群（1134～1149）58点、III群（84・1150～1155）があり、13号住埋土出土土器群より明らかに古い様相を示している。石器は石鏃（587～597）13点、石匙・石錐（598）各1点、打製石錘（599・600）3点、スクレパー（601・602）10点、磨製石斧・叩石（1062）各1点、礫端叩石（1064・1065）2点と、黒曜石の剝片210点、屑片235点、石核120点、両極打法痕のあるもの27点がある。叩石（1063）・礫端叩石（1066）各1点は第9トレンチ出土品で本住居址上層としたい。一方、48号住は出土遺物が多い。土器では、Ⅰ期Ⅰ群のFの大破片（85）のほかAが2点、Bが4点、D・Eの口縁部（1157～1160）41点、斜格子目文56点、無文胴部776点と底部（86・87）が、II期Ⅰ群ではA（1161～1166）40点、Cと縄文施文胴部片（1167～1189）301点と底部（88～90）6点、さらにIII群（1190・1191）100点、II群2点が出土しており、土器群としては47号住のそれより新しい。繊維土器は無文（91）と縄文（1192・1193）がある。石器は石鏃（603～610）8点、石匙（611・612）2点、石錐（613～615）3点、スクレパー（616～626）18点、磨製石斧（1074）1点、叩石（1067～1071）5点、礫端叩石（1072・1073）2点と、黒曜石の剝片127点・屑片126点・石核44点などがある。

33） 50・51・52号住居址

第2から第4トレンチの西側で、道路までの間に2×1mほどの試掘坑を8箇所設け、道路寄りに2軒（50・51号住）、17号住の北西に1軒（52号住）の計3軒を床面などの在り方から確認した。しかし、日程上拡張して調査できずに終った。出土遺物としては、50号住からII期Ⅰ群Cの大破片（92）とⅠ期Ⅰ群（1194～1203）58点、III期（1204～1206）25点が出土している。しかし、51・52号住からは「新しい遺物が出土した」と記録されているのみで詳細は不明である。石器は石鏃（627）・石錐（628）各1点、スクレパー（629・630）5点がある。

2 竪穴

1） イ号竪穴（図60）

12号住の西にある切り合う2つの大きなピットである。調査時には特別の記録はない。一方、24号住の南にも切り合う2つの大きなピットがある。このP_1の埋土は、炭の混入する黒色土、P_2のそれは黒褐色土であり、P_1の方が新しい。並べてみるとこの2組のピットは相似ており、未調査の西方に同様の2組を想定し、図のように4本（6本も想定できるが）からなる方形柱列の一部とする考えにいたたった。調査当時は全く予想していなかったが、後に諏訪郡阿久遺跡で明確となった方形柱列が、ほぼ同時期の本遺跡にあっても不思議ではない。なお、12号住の遺物中に、「西ピット」と注記された無文胴部片9点、II期Ⅰ群A2点、同胴部3点があり、本址所属としてよいだろう。

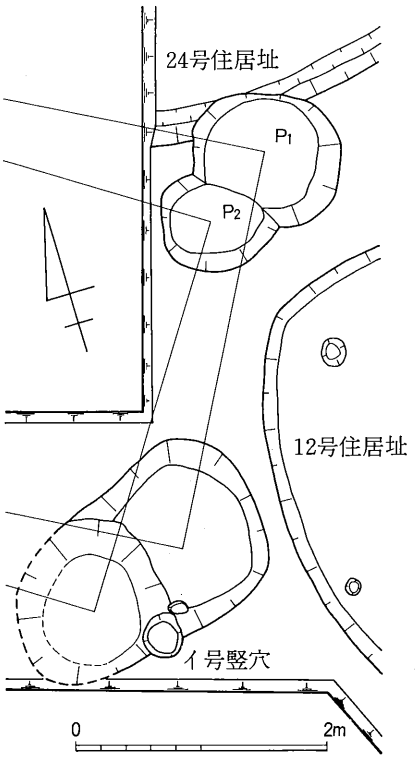


図60　イ号竪穴実測図

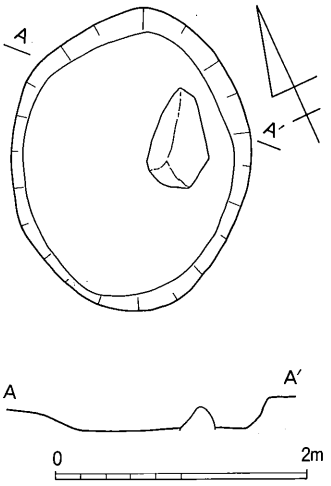


図61　ロ号竪穴実測図

2）　ロ号竪穴（図61）

第４次調査で13号住の東側に検出された。N30°Eに長軸をおく2.4×1.9mの長円形で、検出面からの掘り込みは浅い。竪穴内東寄りの大礫は、床下に食いこんだ状態にあり、据えられてもいない。遺物はⅠ群土器であろう破片（1207）１点のみである。

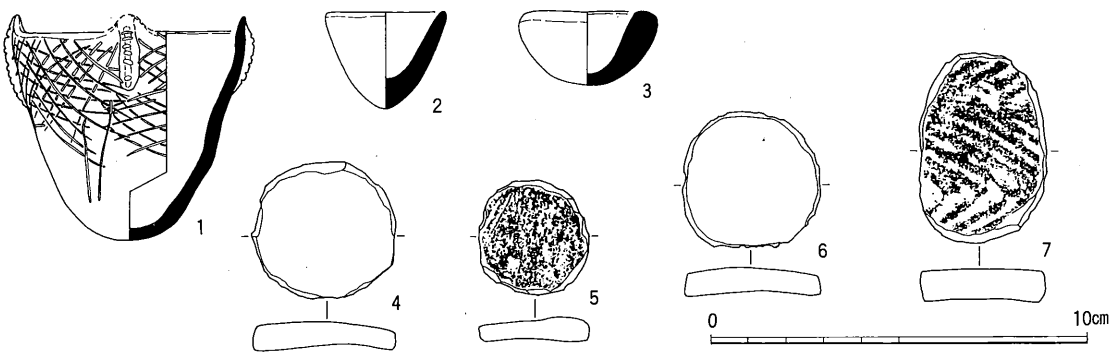


図62　土製品実測図

註１　土色が表現されていないため、記録の文章をそのまま使用した。黄褐色土上面に近いわずかに土壌化した部分であろう。こうした土層の観察がトレンチ調査のため十分でなく、面的調査へ切りかえた際に訂正された場合も数件ある。

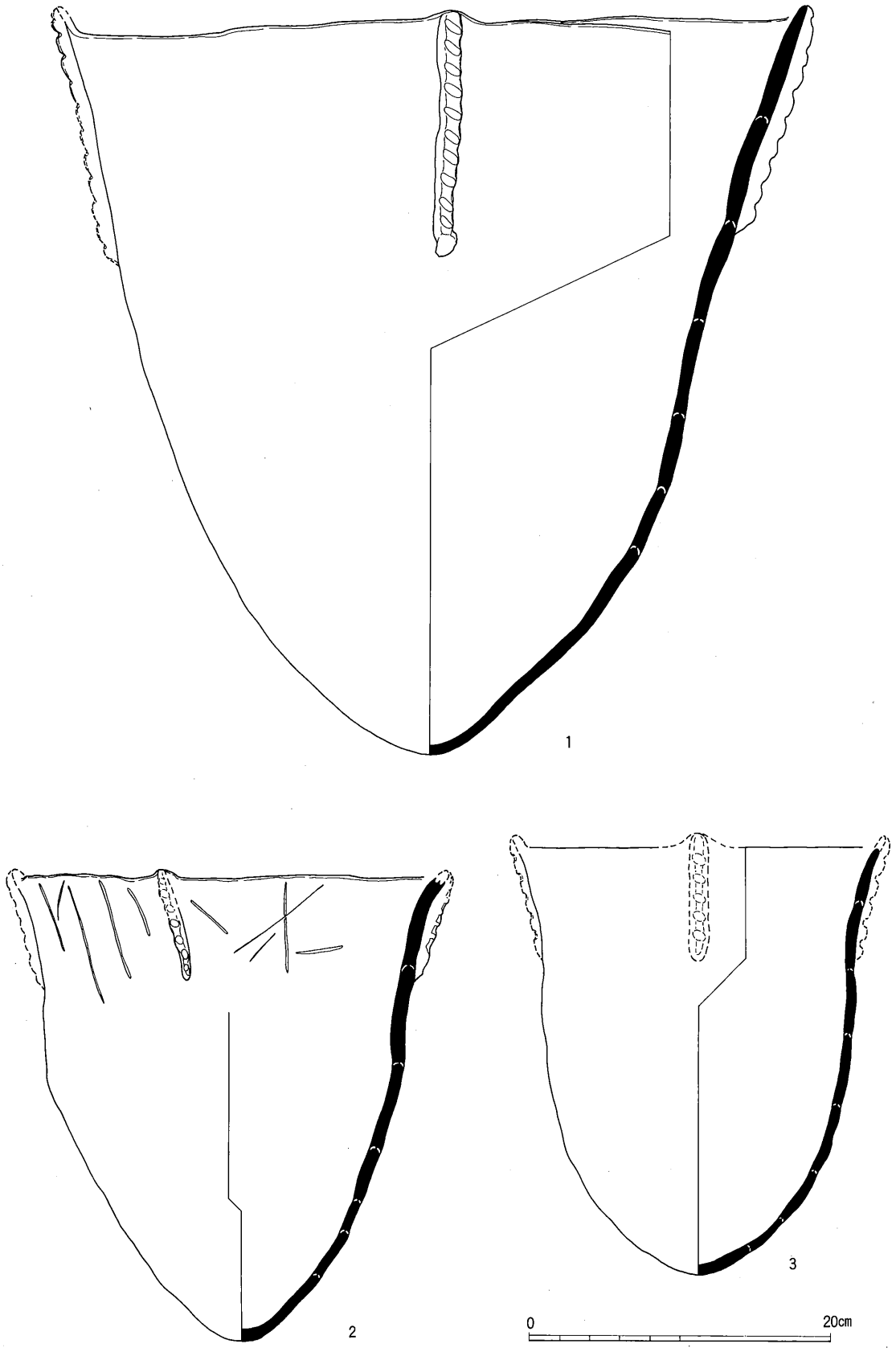


図63　6 号住居址出土土器実測図

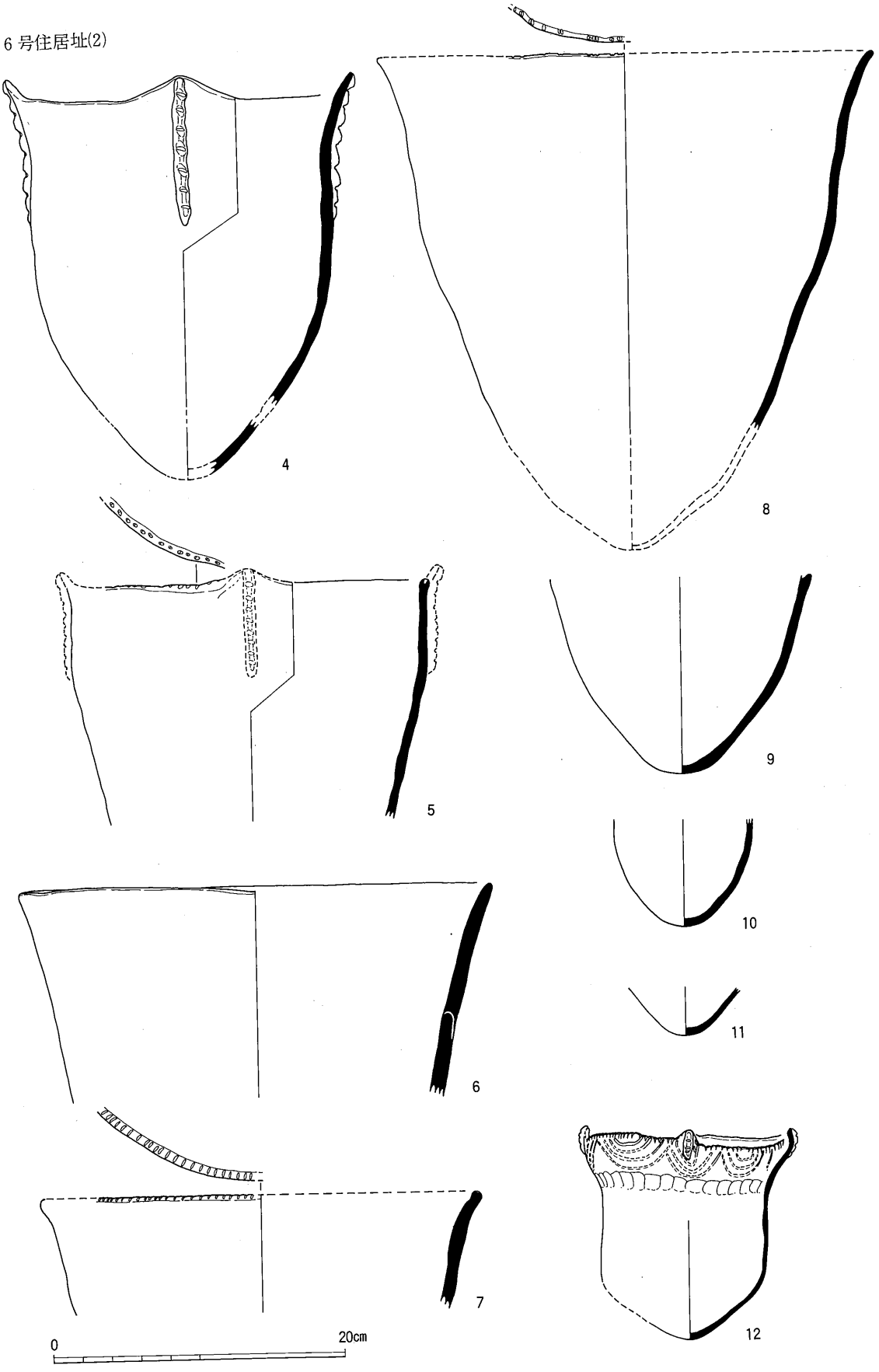
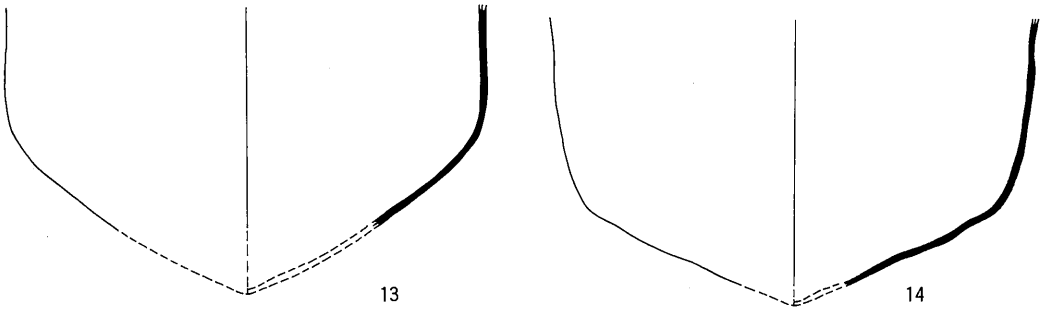
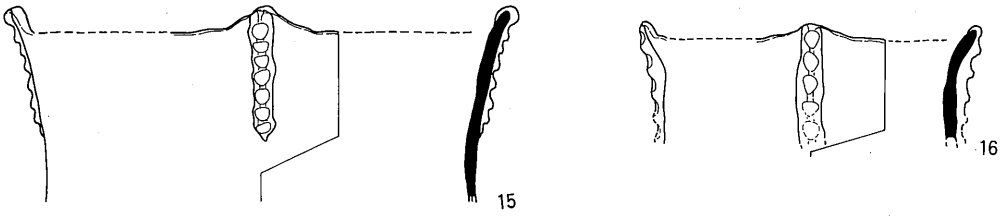


図64　6 号住居址出土土器実測図

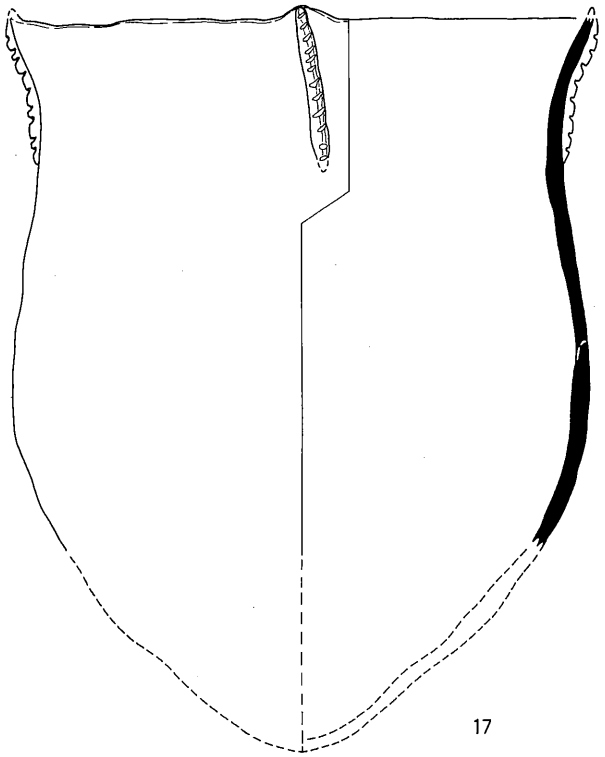
6 号住居址(3)



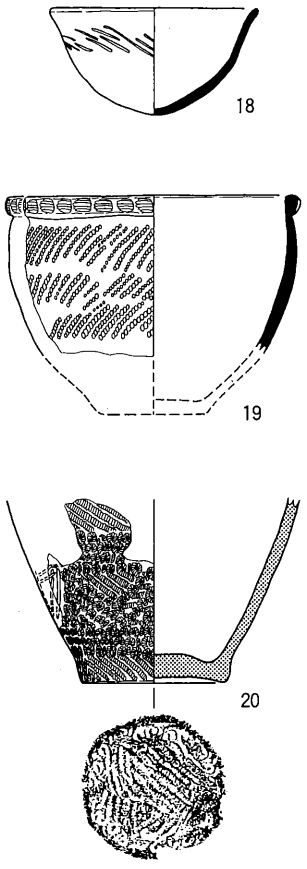
7 号住居址



8 号住居址



9 号住居址(1)



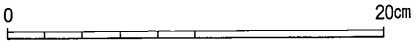


図65　6・7・8・9 号住居址出土土器実測図

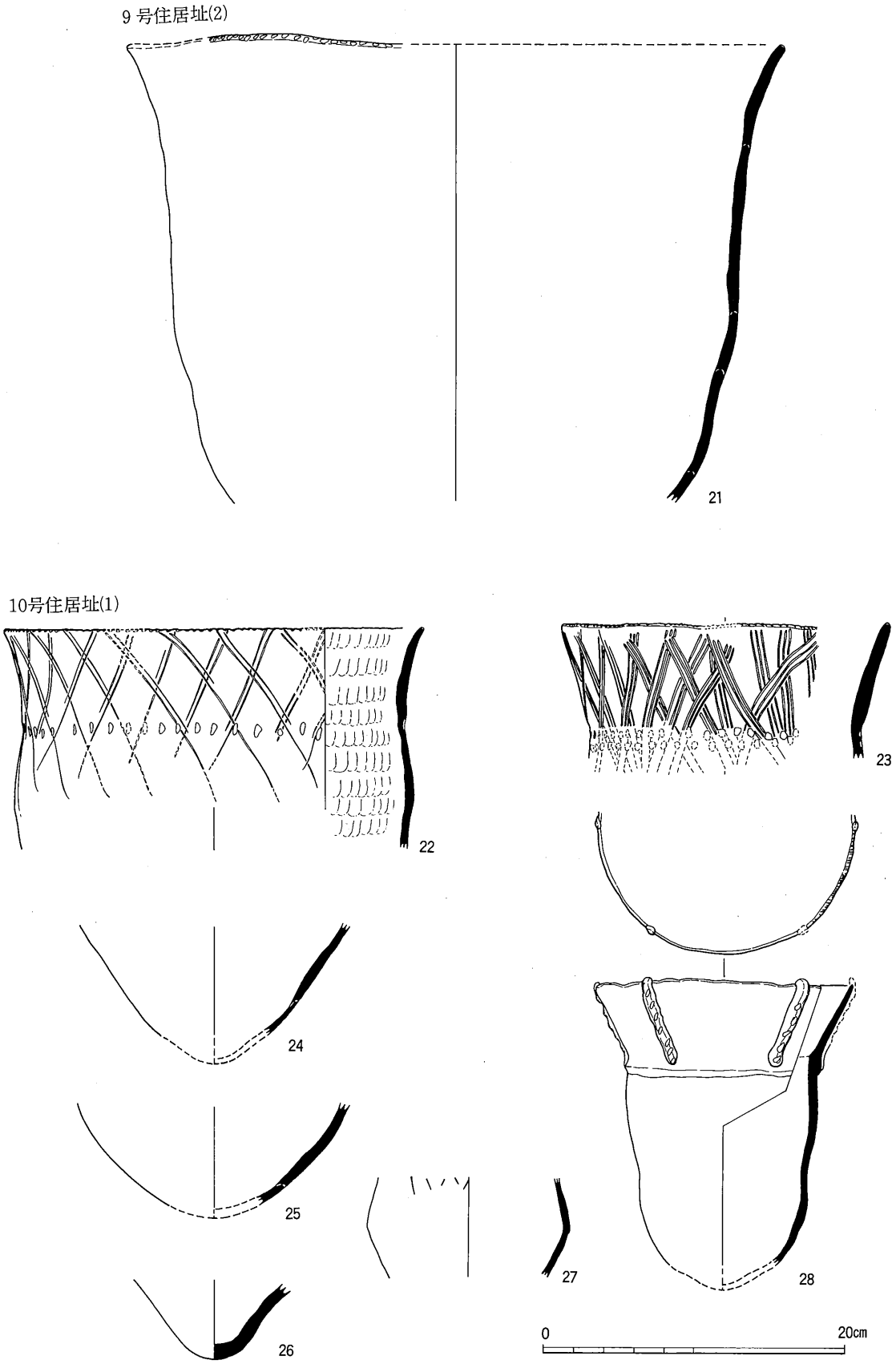


図66　9・10号住居址出土土器実測図

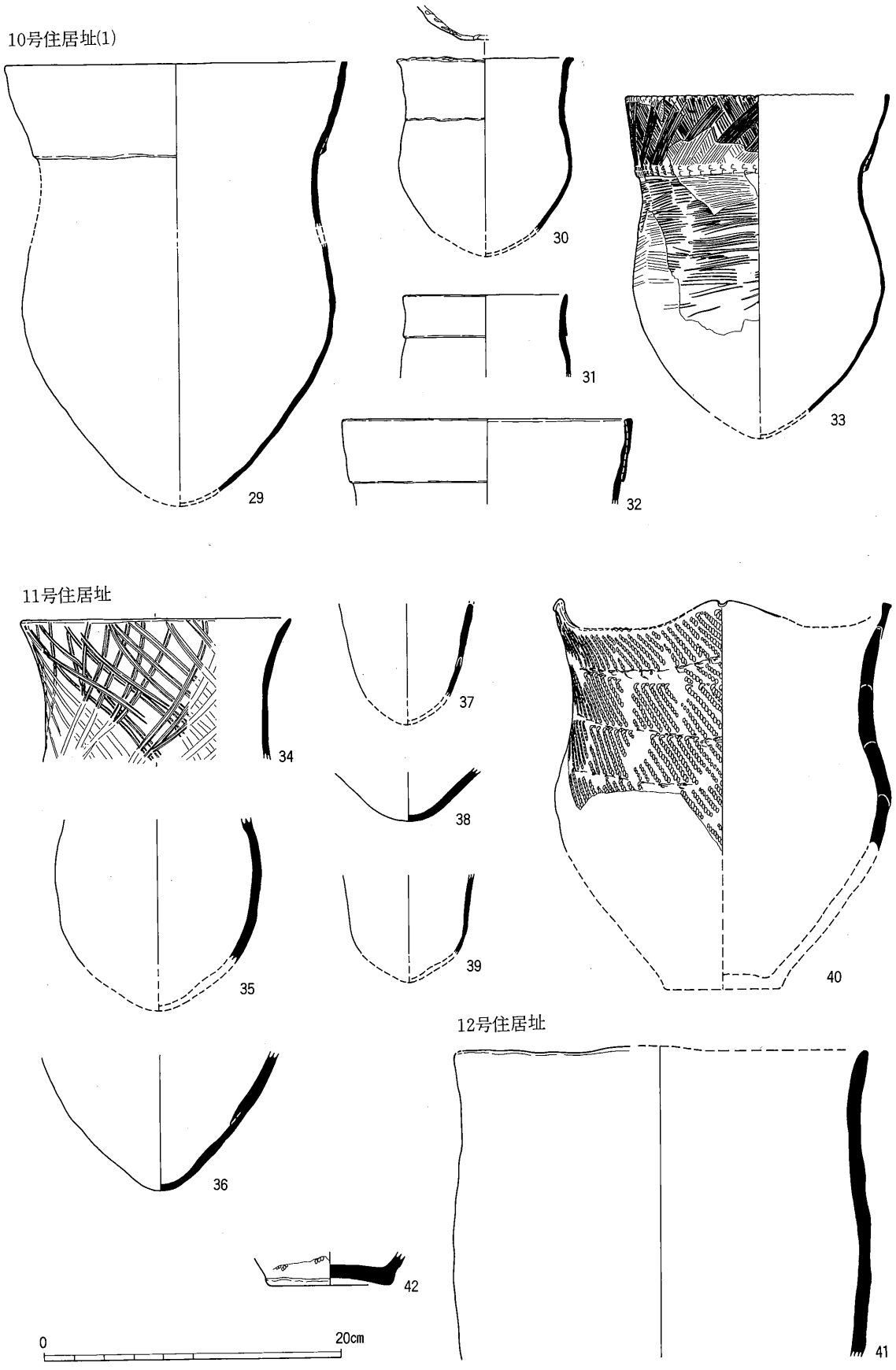
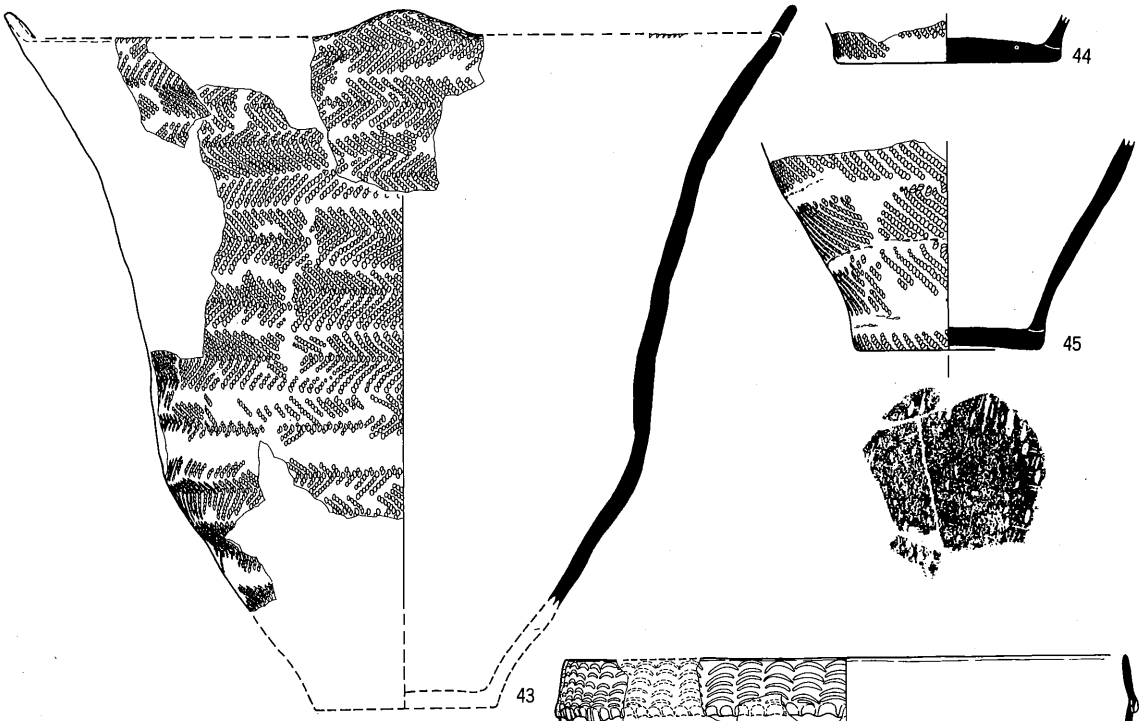
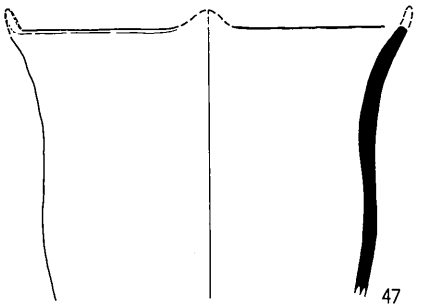


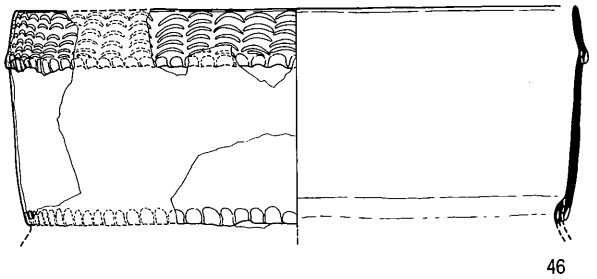
図67　10・11・12号住居址出土土器実測図

13号住居址

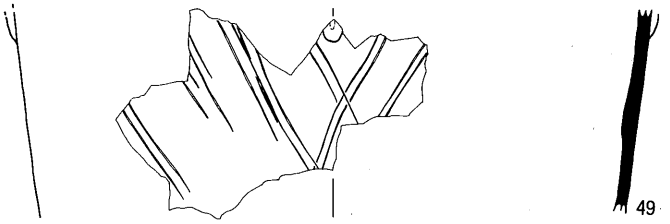


14号住居址





18号住居址



16号住居址上層

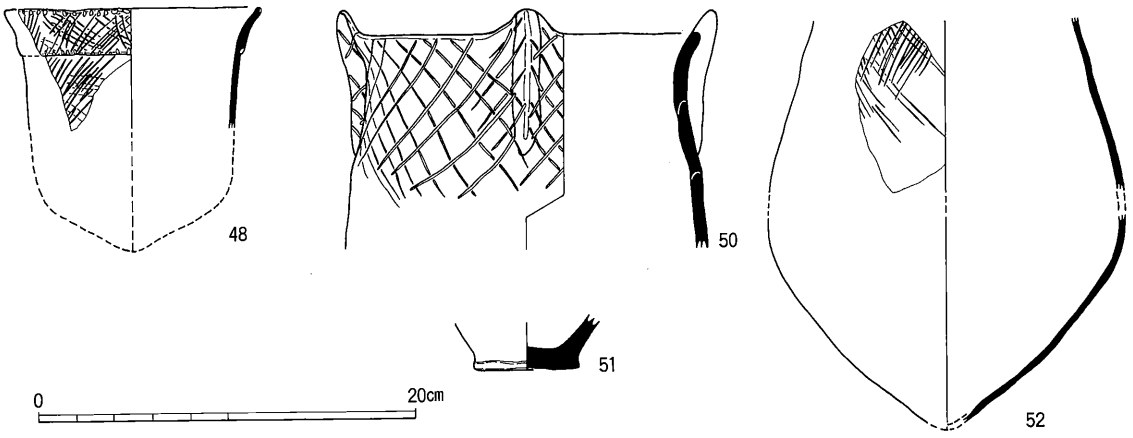


図68　13・14・16・18号住居址出土土器実測図

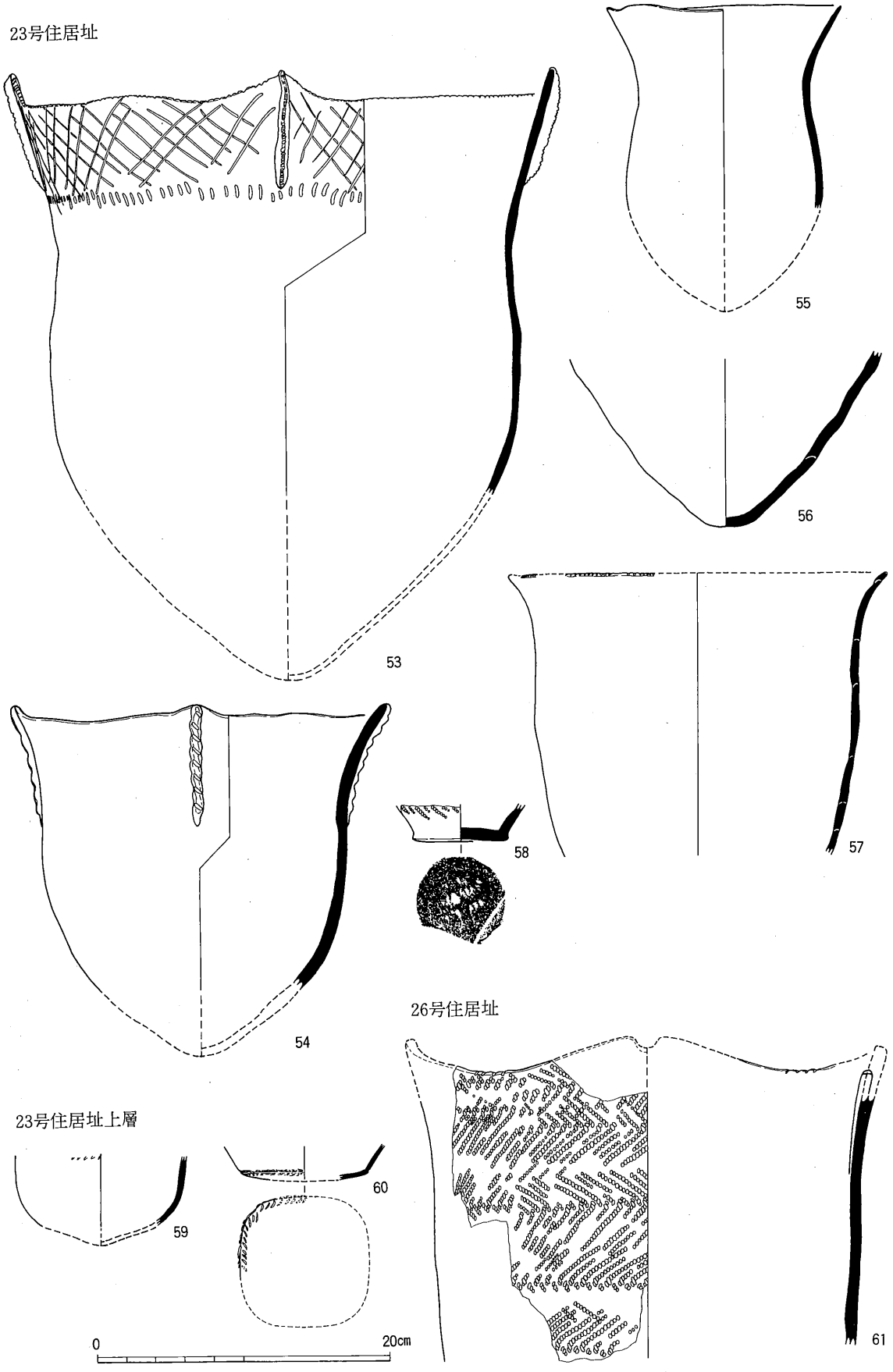


図69　23・26号住居址出土土器実測図

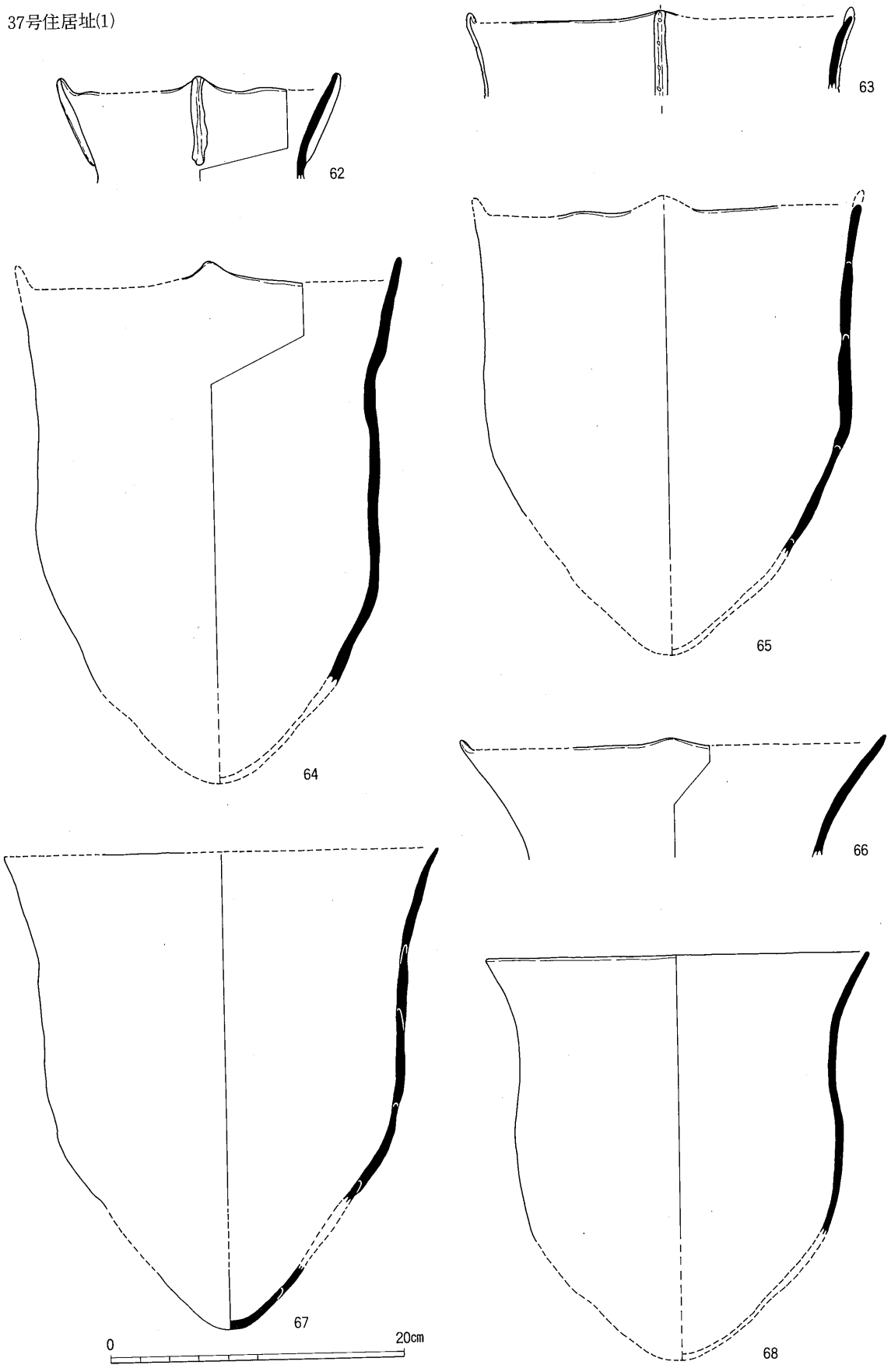


図70　37号住居址出土土器実測図

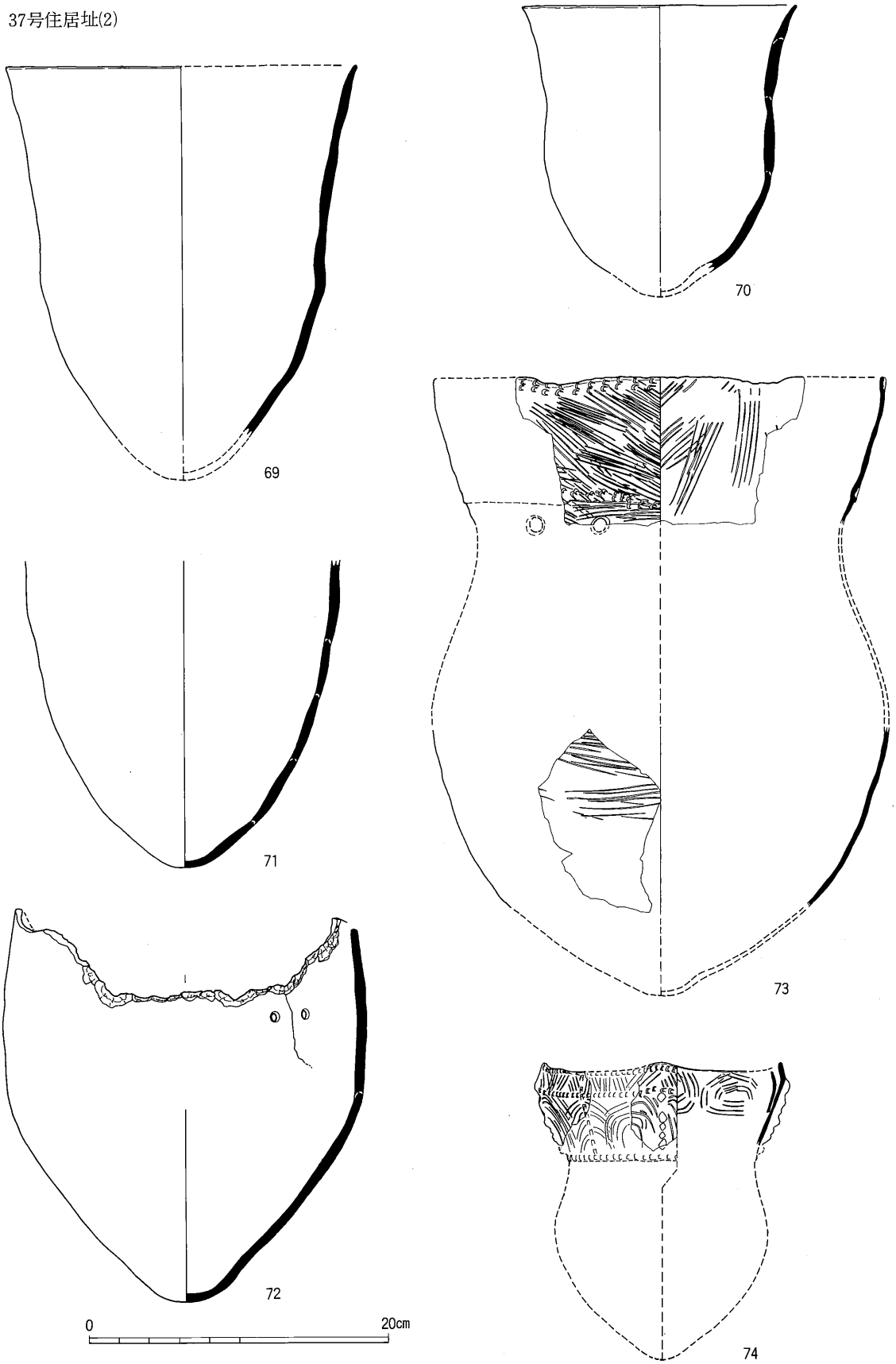
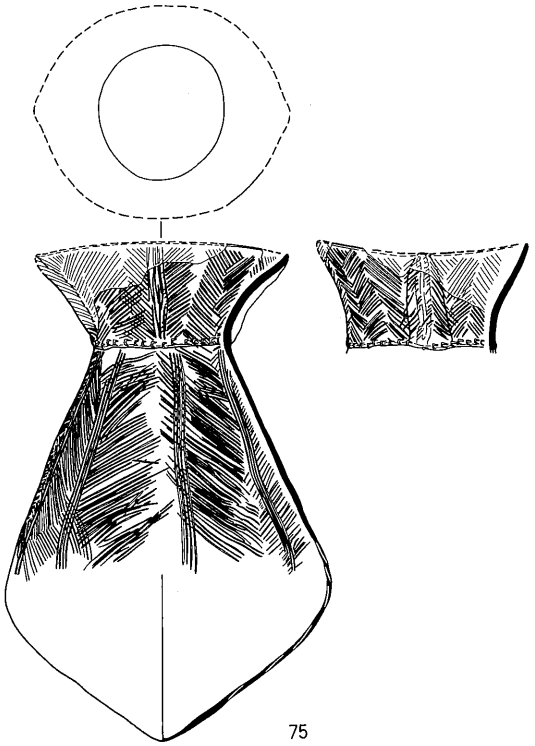
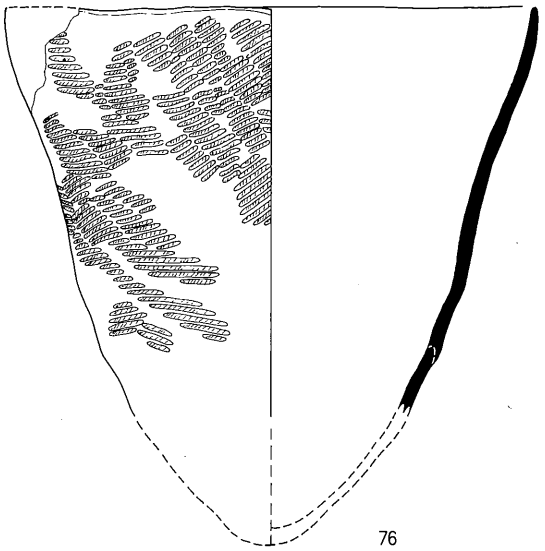


図71　37号住居址出土土器実測図

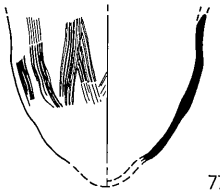
40号住居址



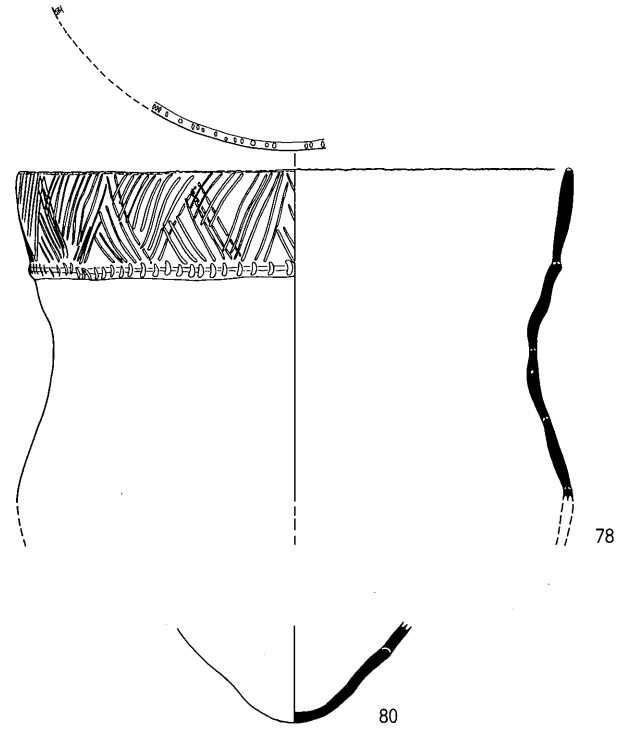
41号住居址



42号住居址



44号住居址



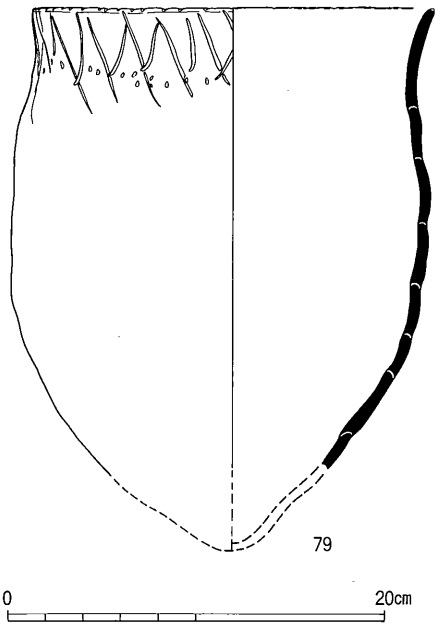


図72　40・41・42・44号住居址出土土器実測図

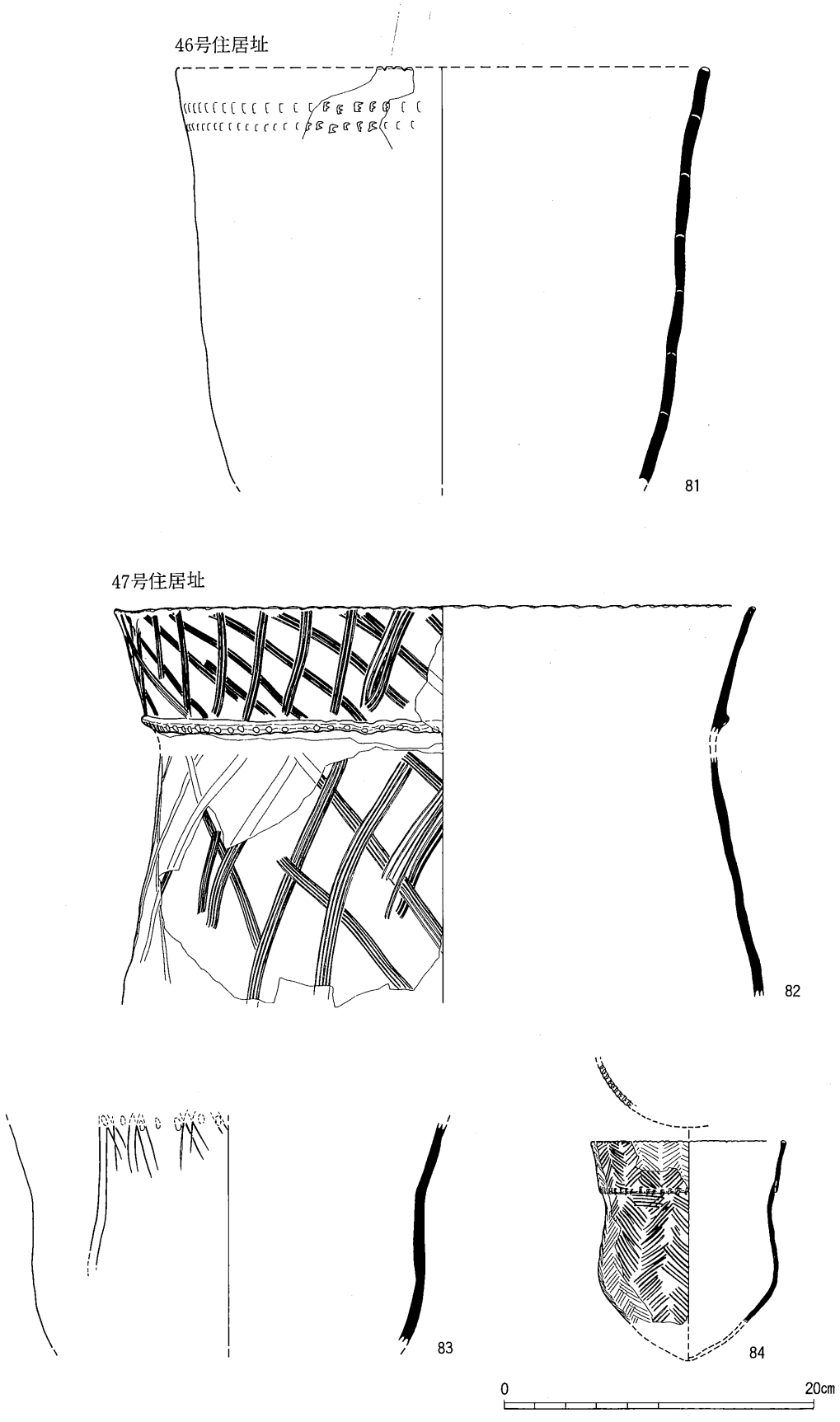


図73　46・47号住居址出土土器実測図

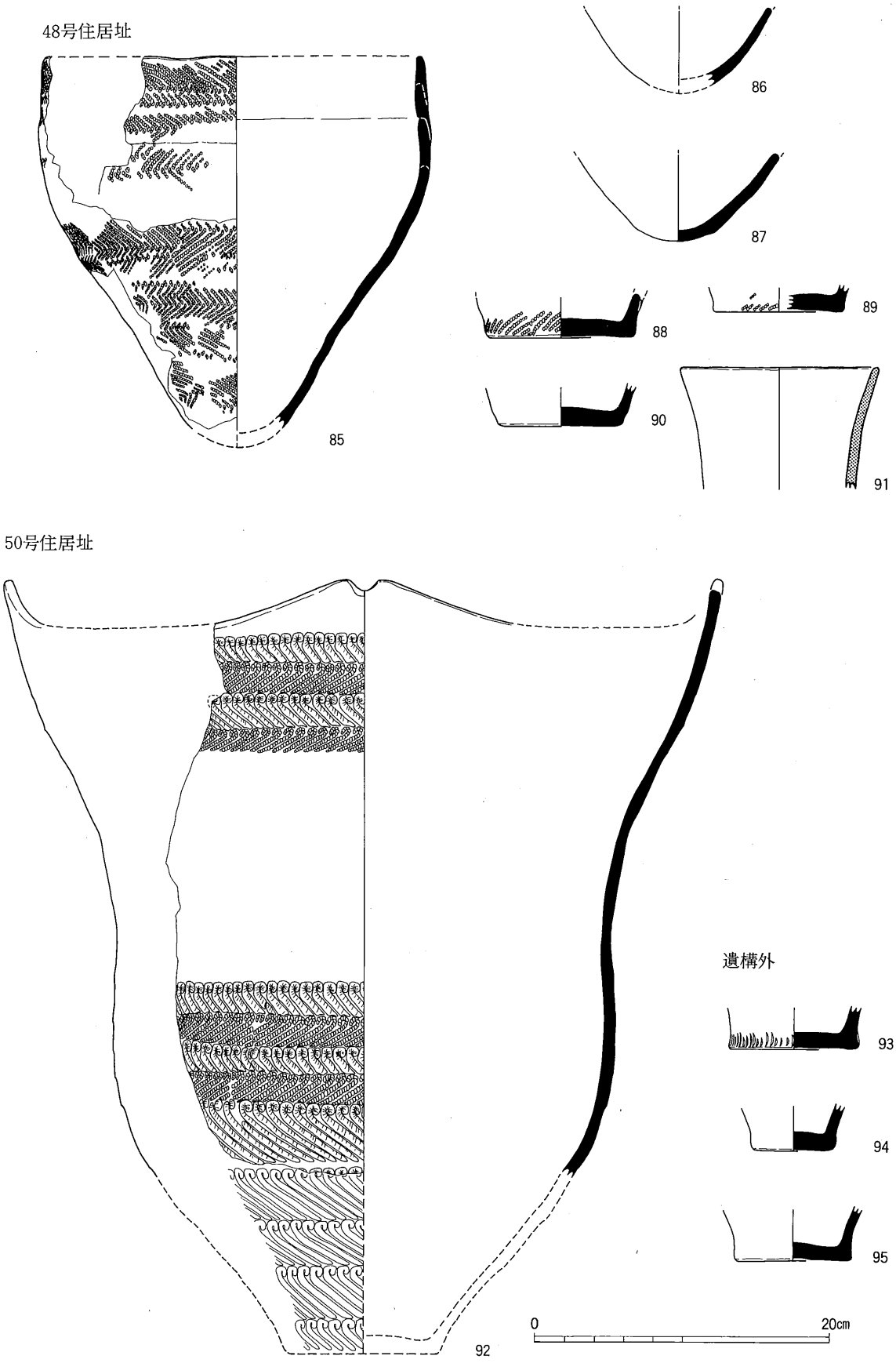


図74　48・50号住居址、遺構外出土土器実測図

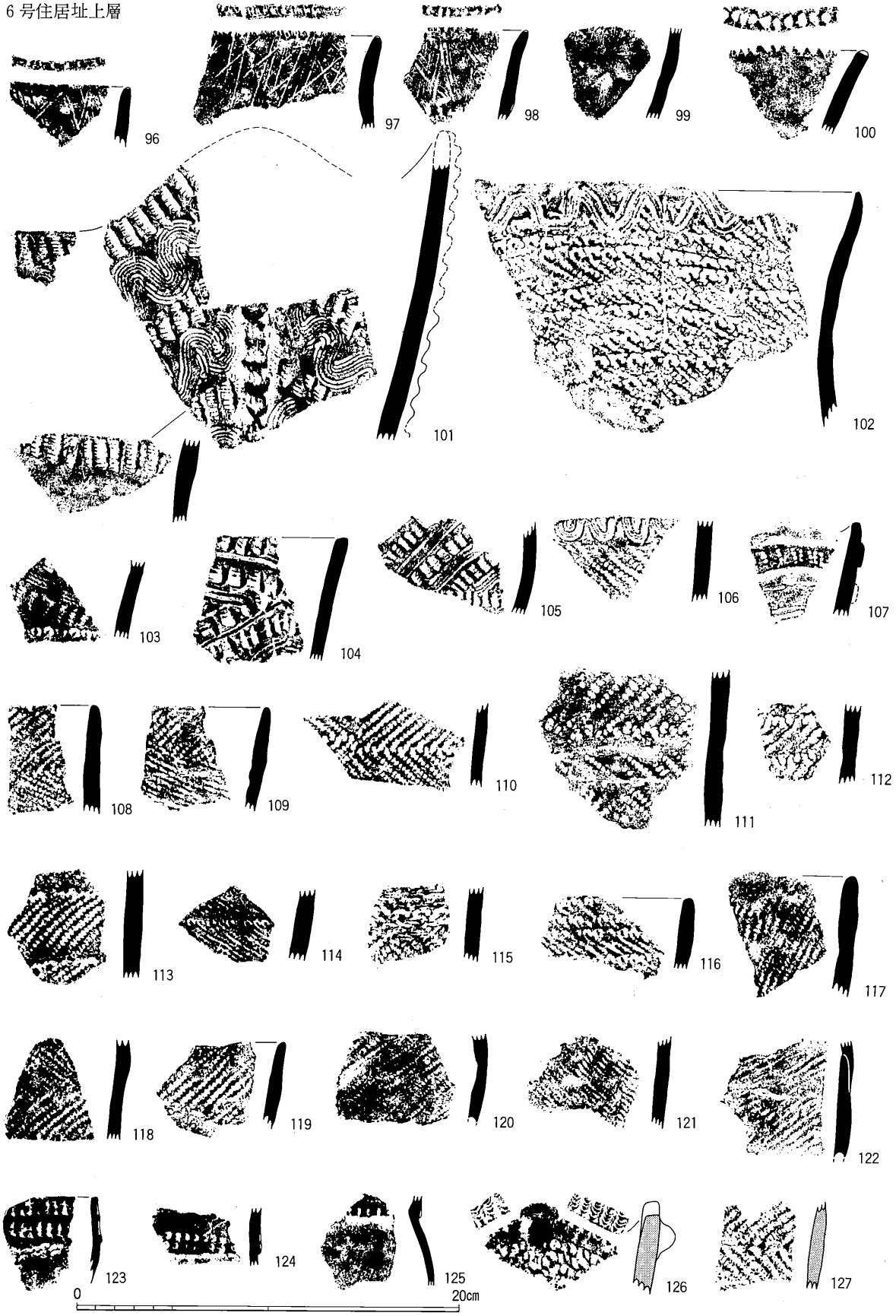


図75　6 号住居址出土土器拓影

6 号住居址(1)

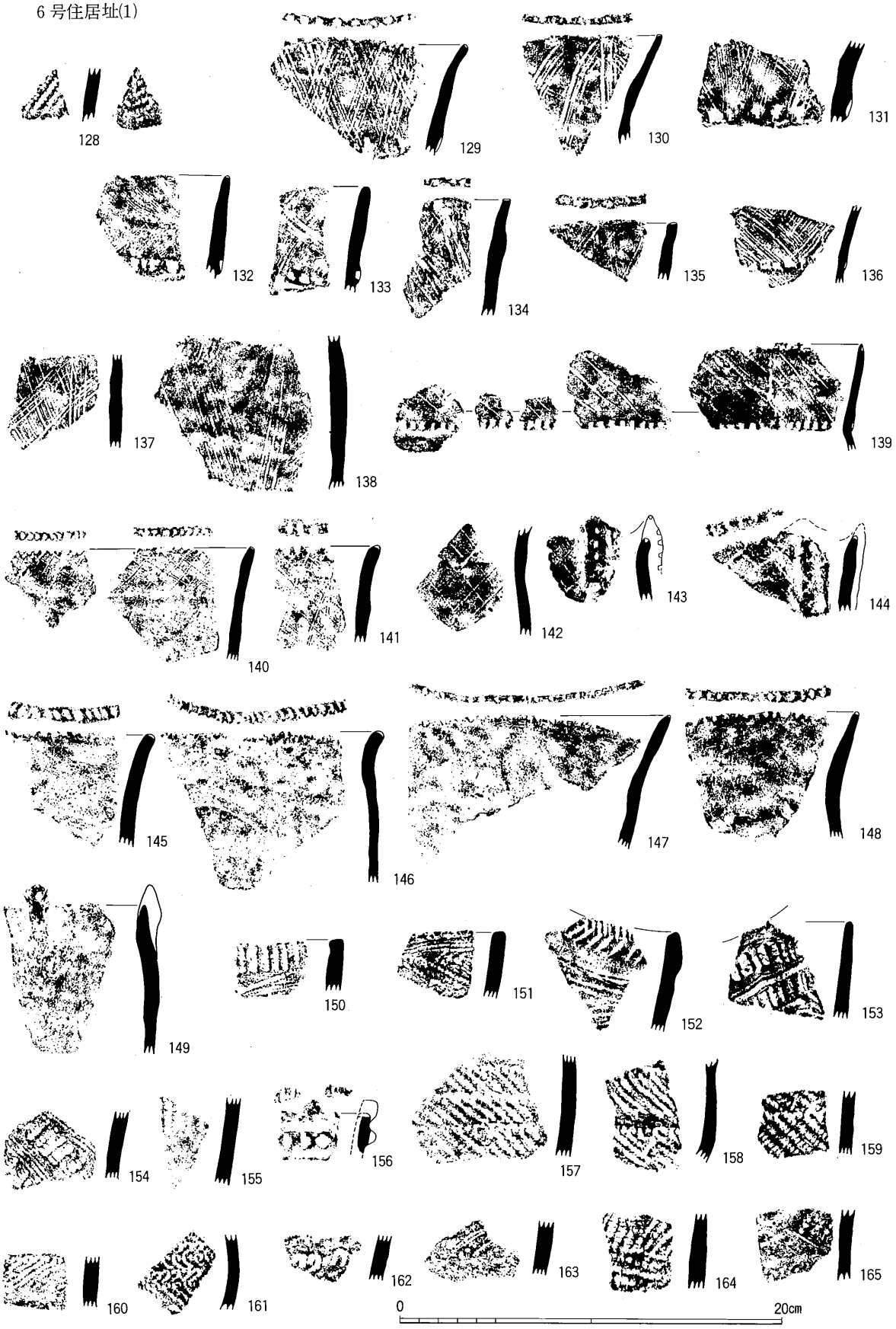


図76　6 号住居址出土土器拓影

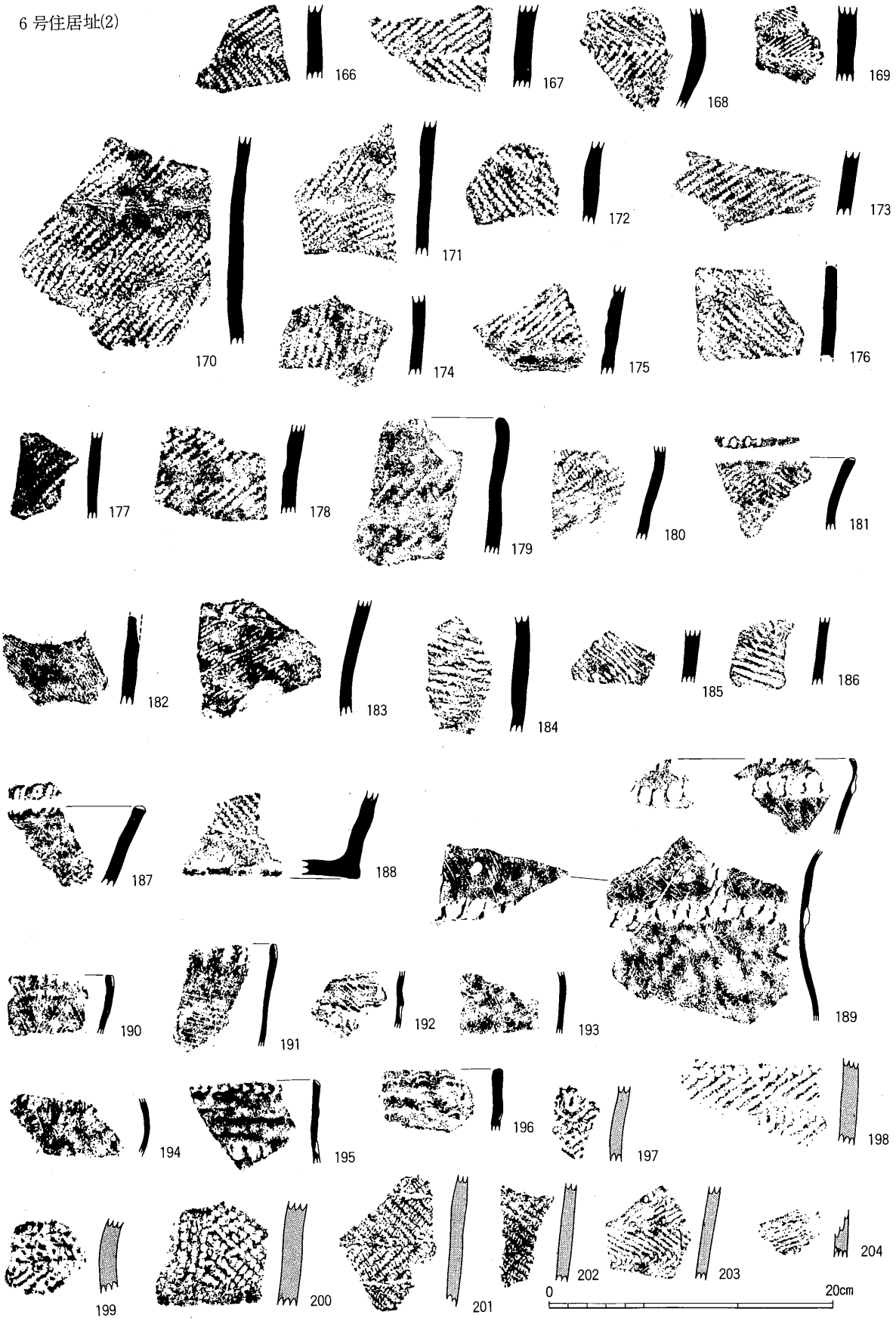


図77　6 号住居址出土土器拓影

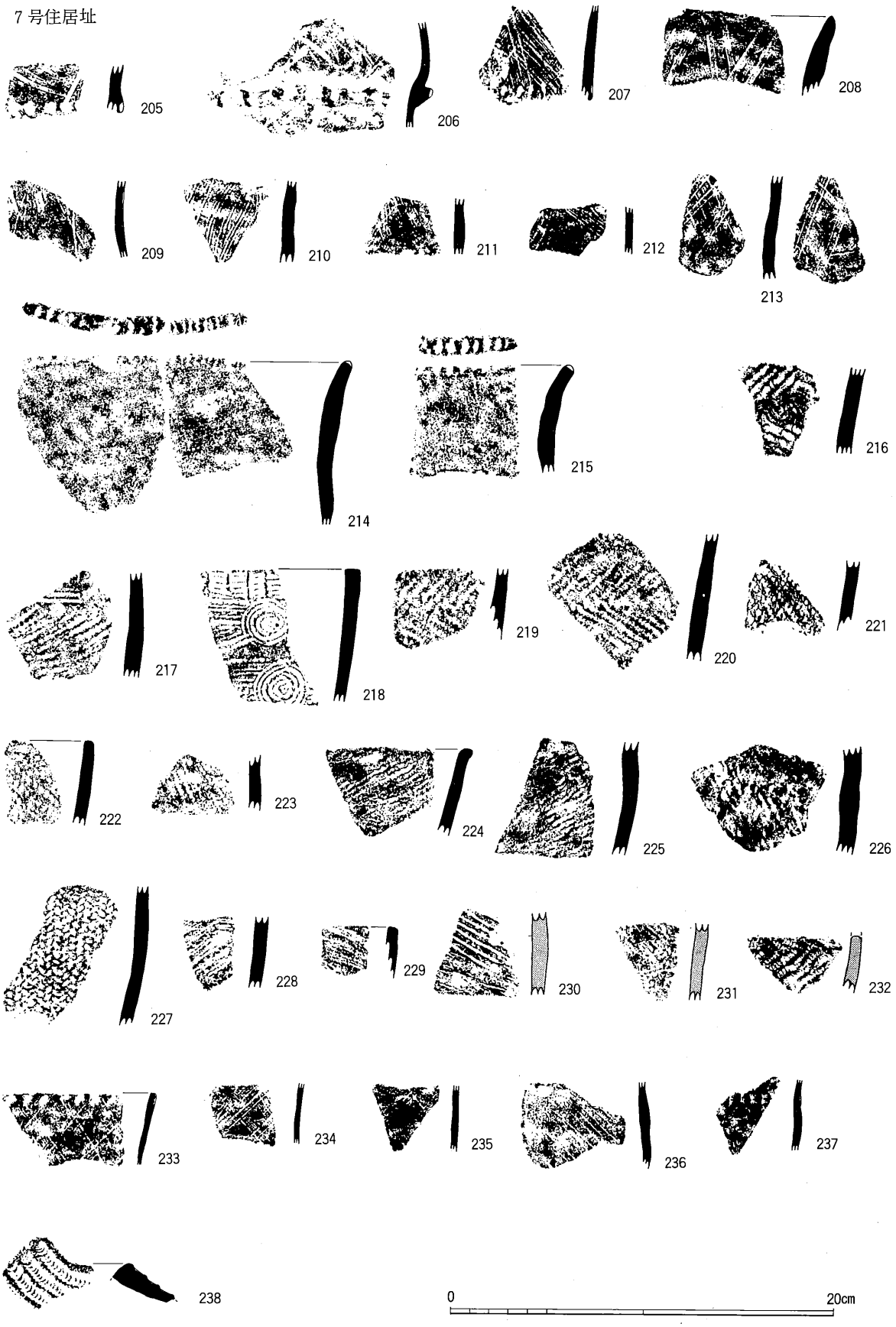
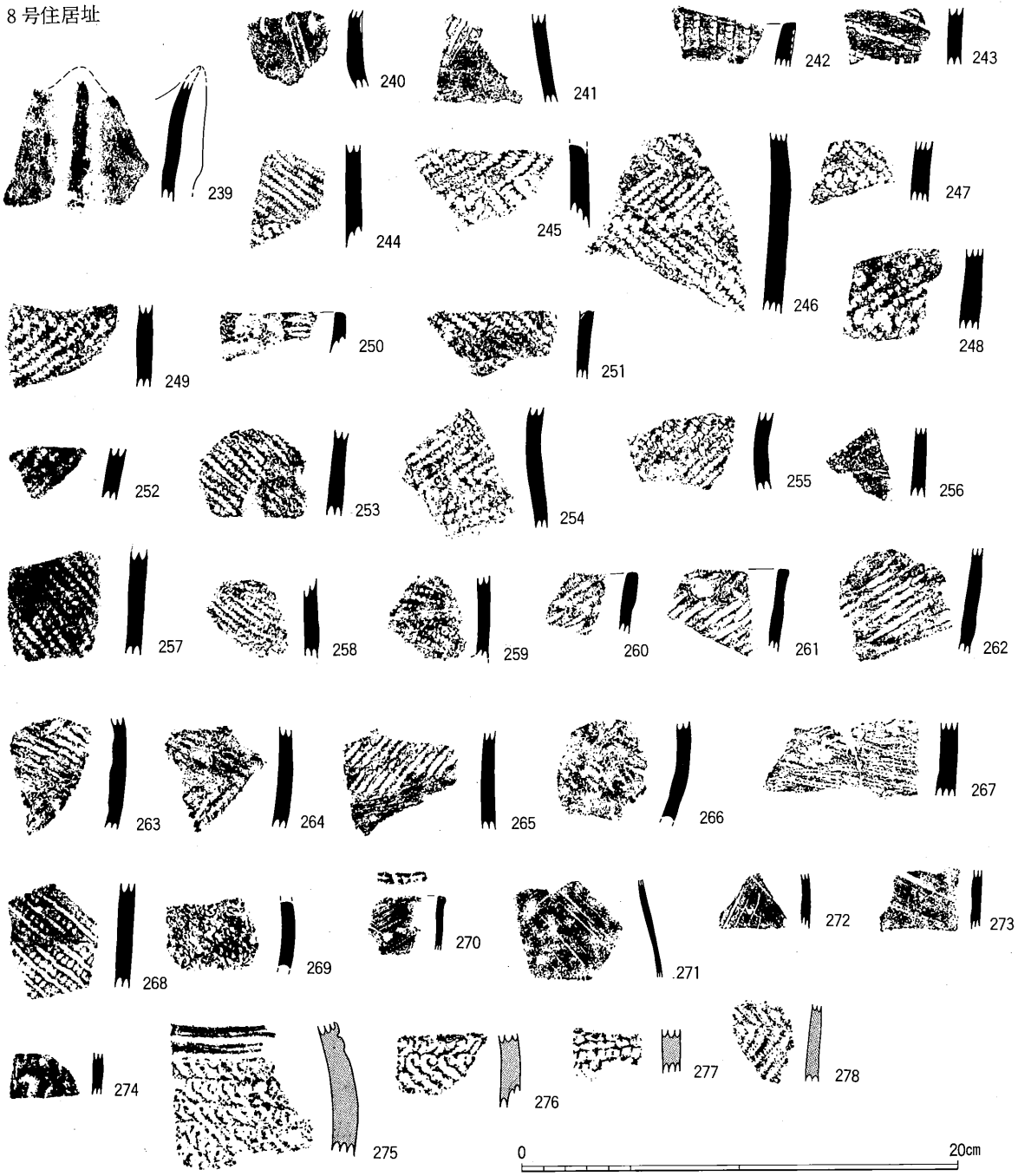


図78　7号住居址出土土器拓影

8号住居址



9号住居址上層

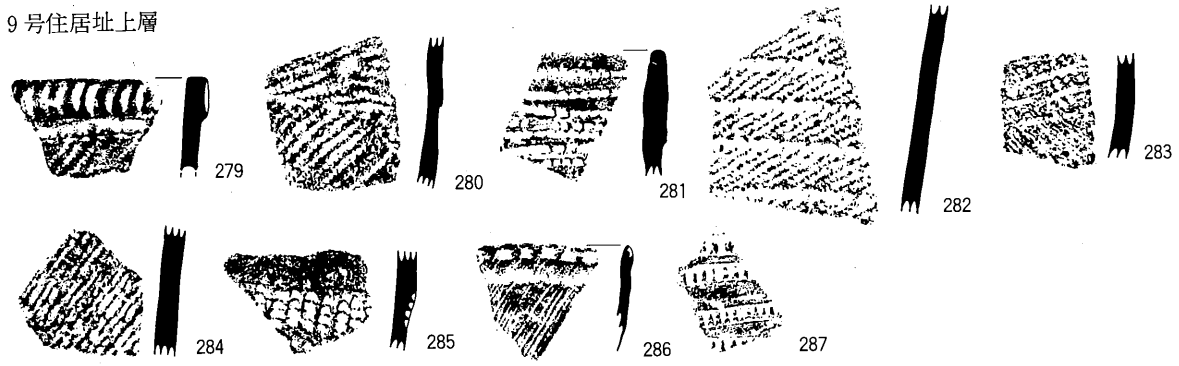


図79　8号・9号住居址出土土器拓影

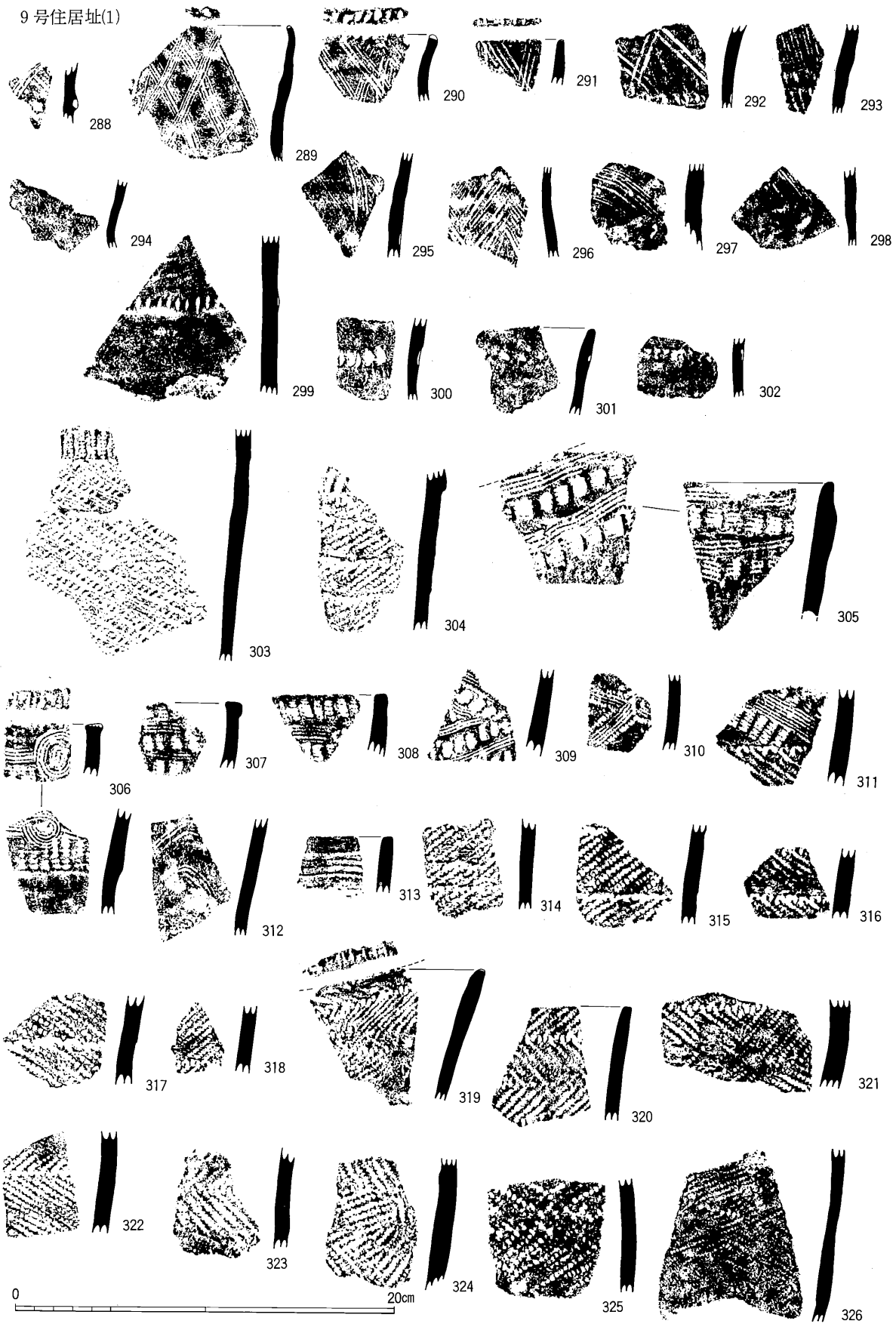


図80　9号住居址出土土器拓影

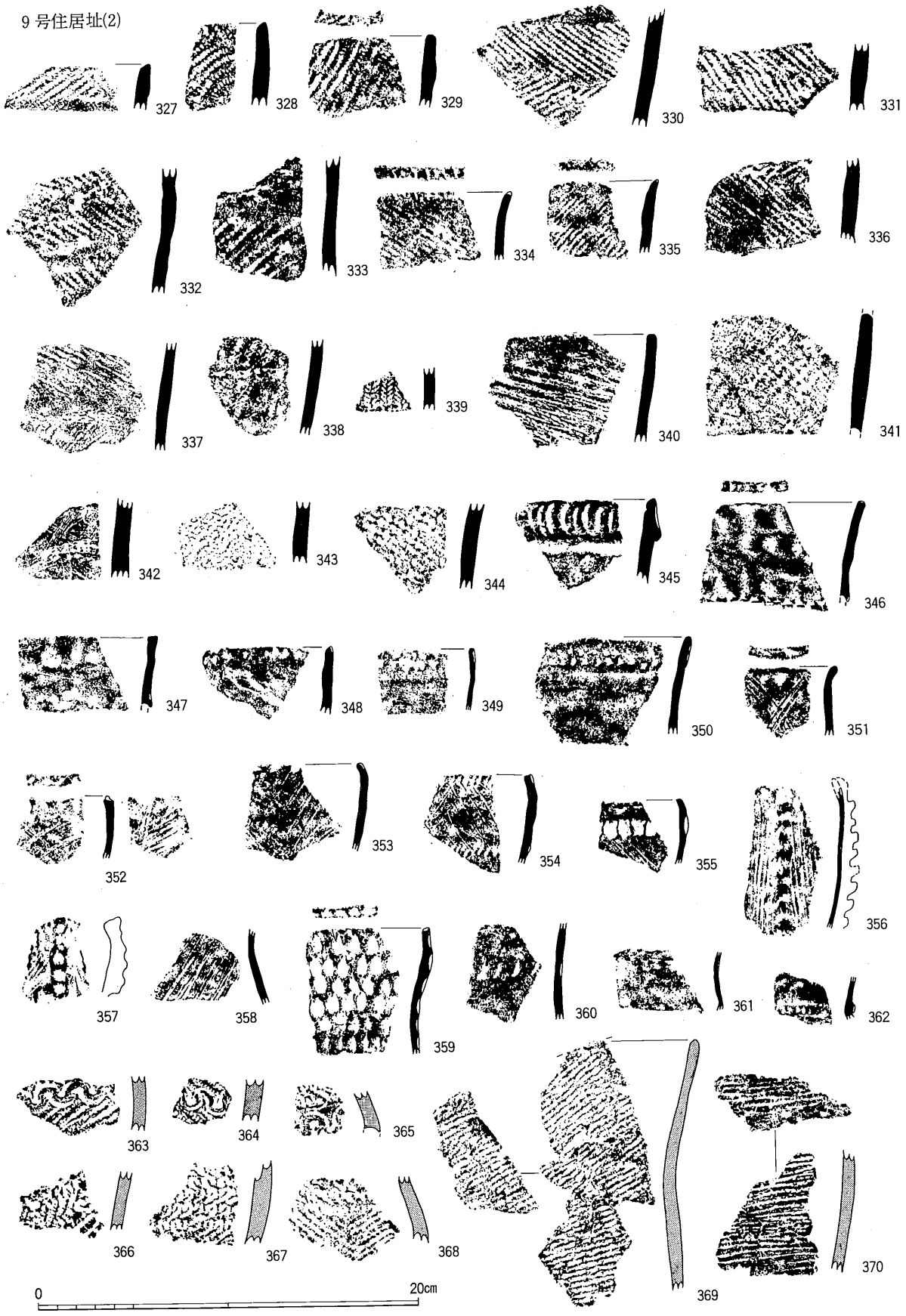


図81　9 号住居址出土土器拓影

10号住居址(1)

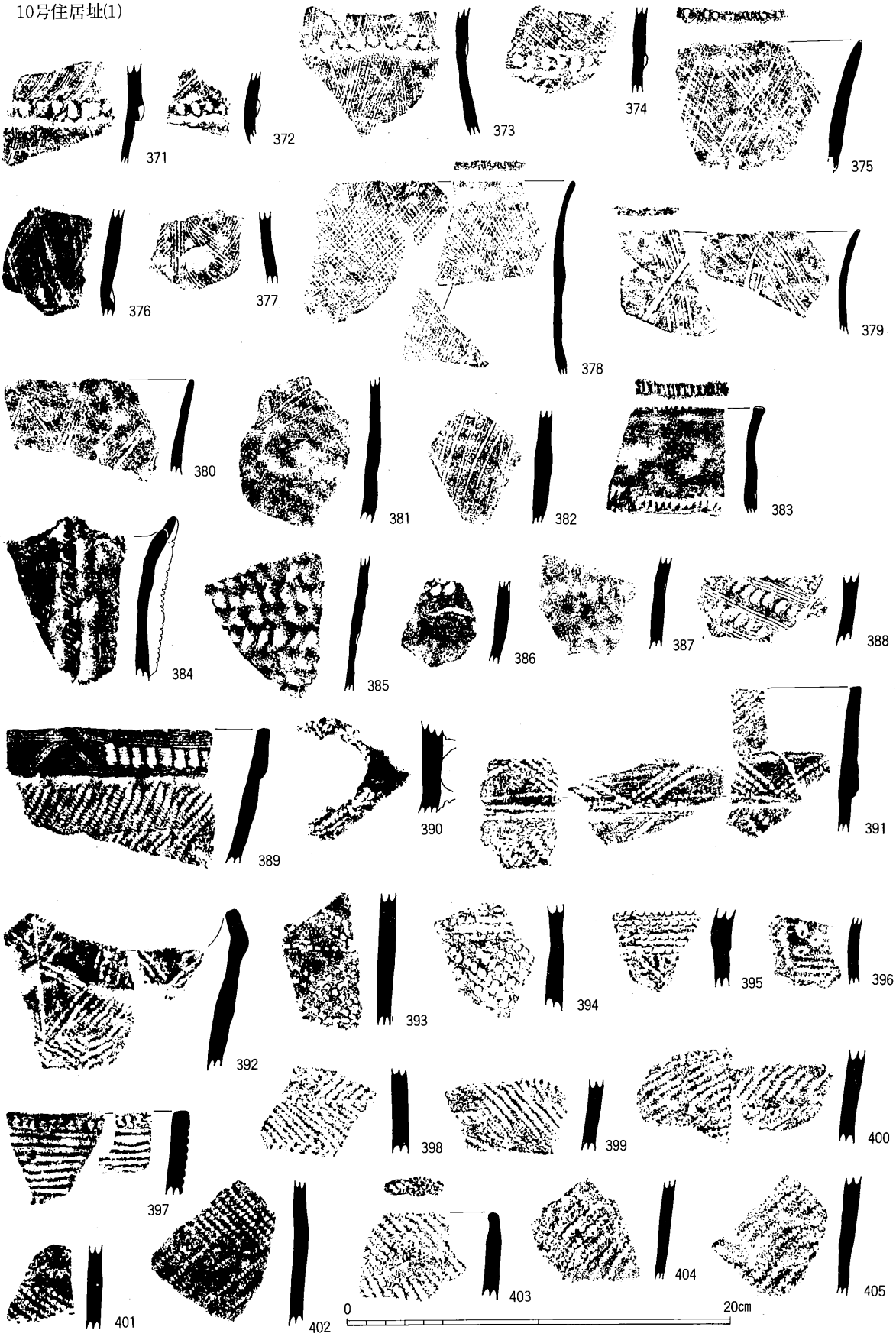


図82　10号住居址出土土器拓影

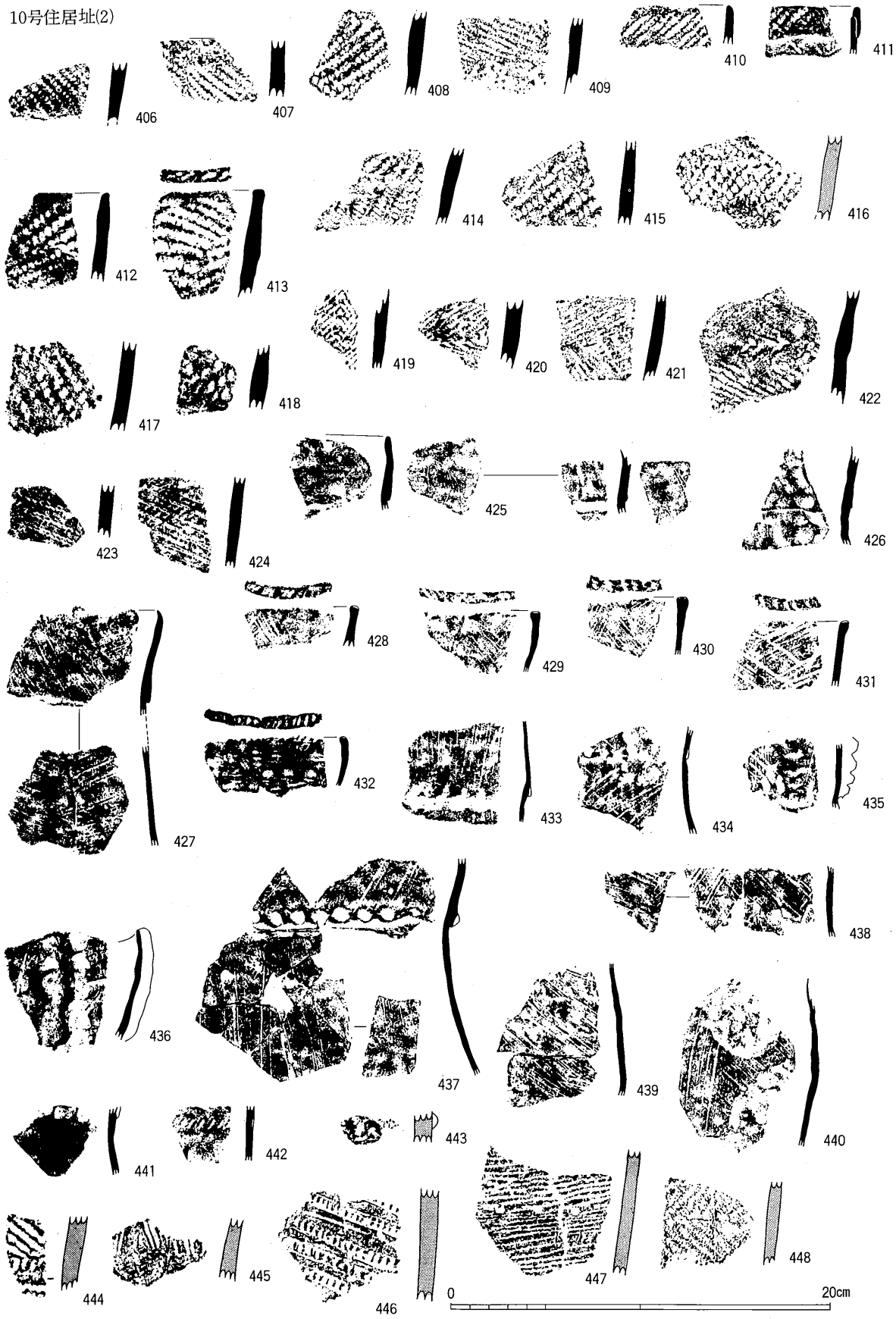


図83　10号住居址出土土器拓影

11号住居址(1)

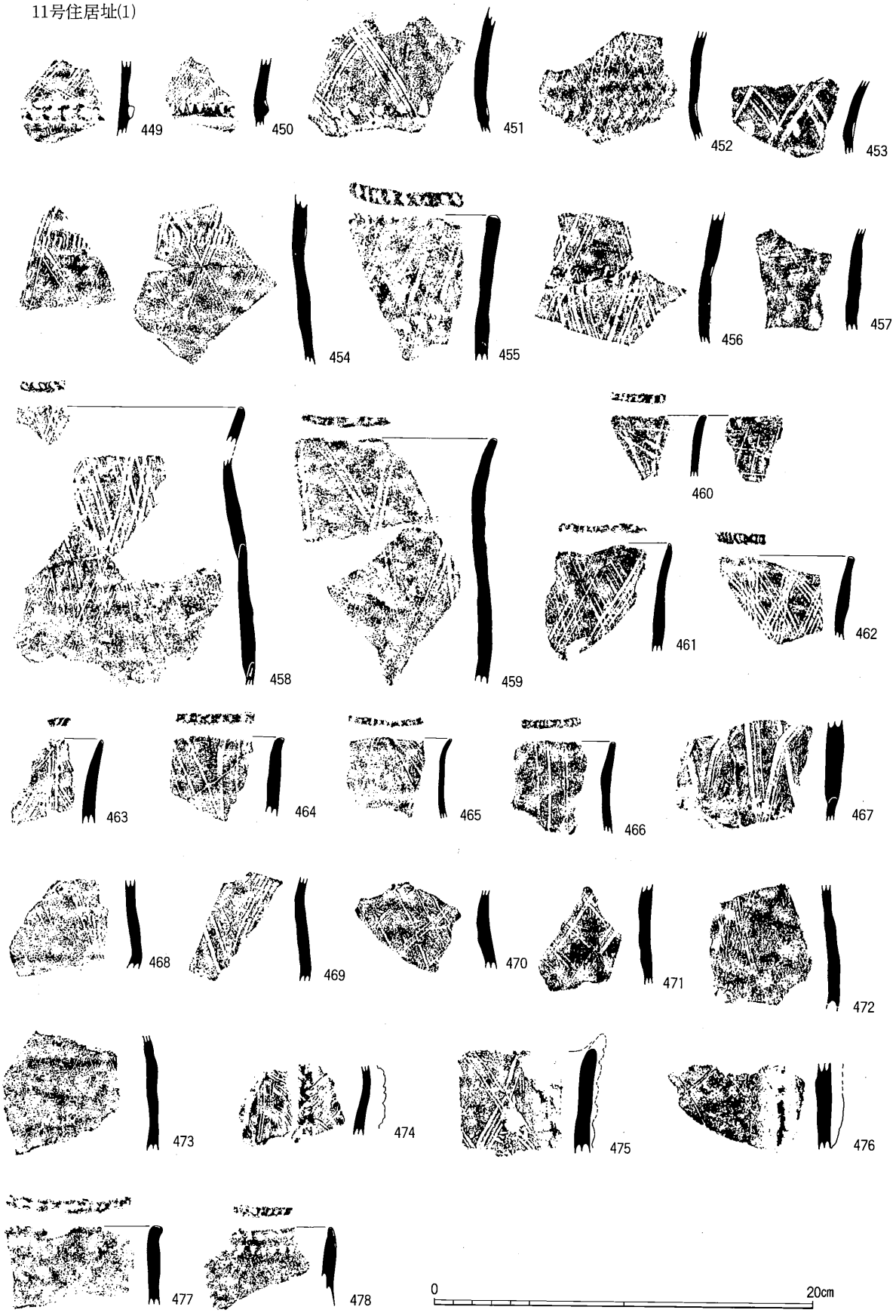


図84　11号住居址出土土器拓影

11号住居址(2)

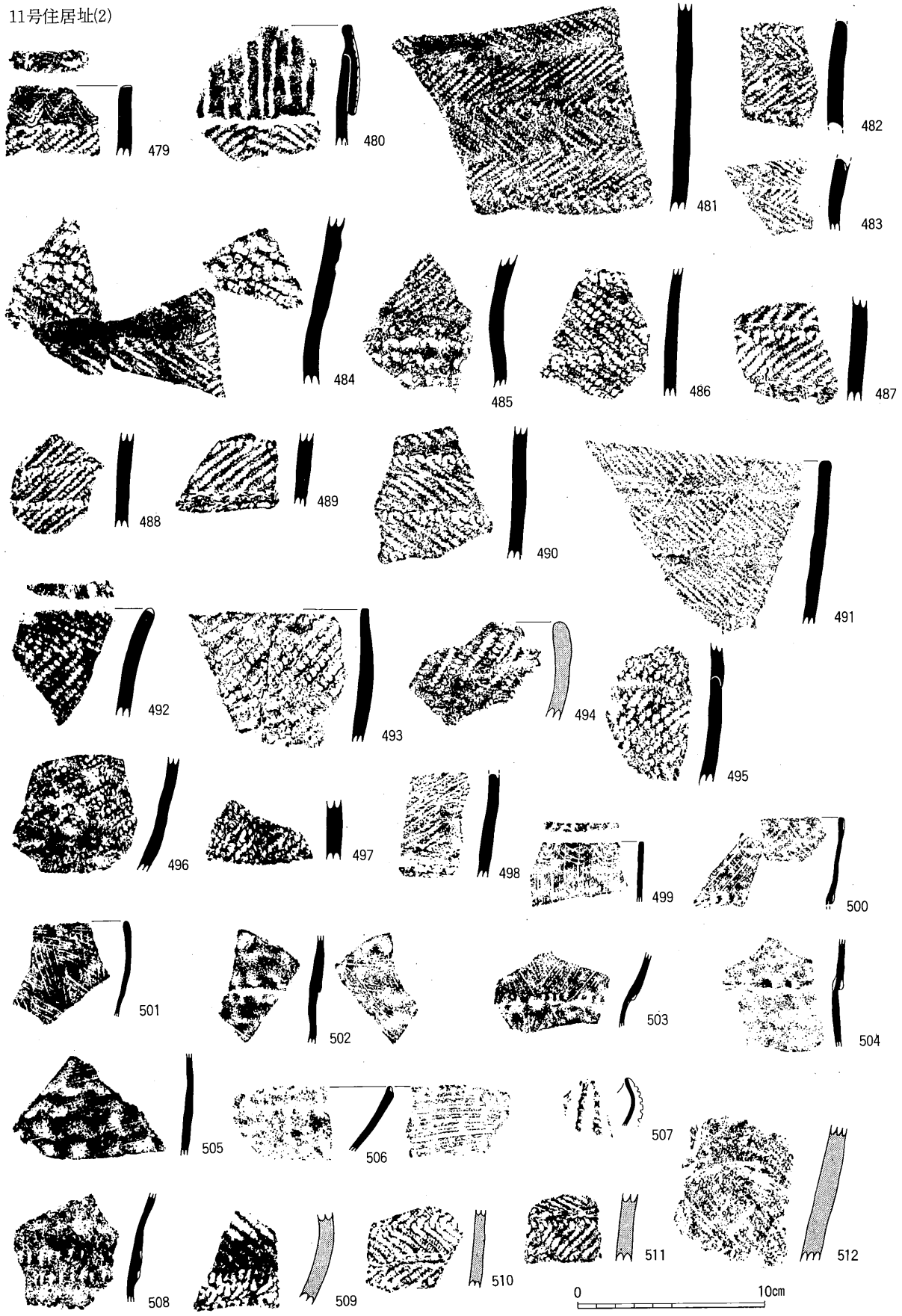
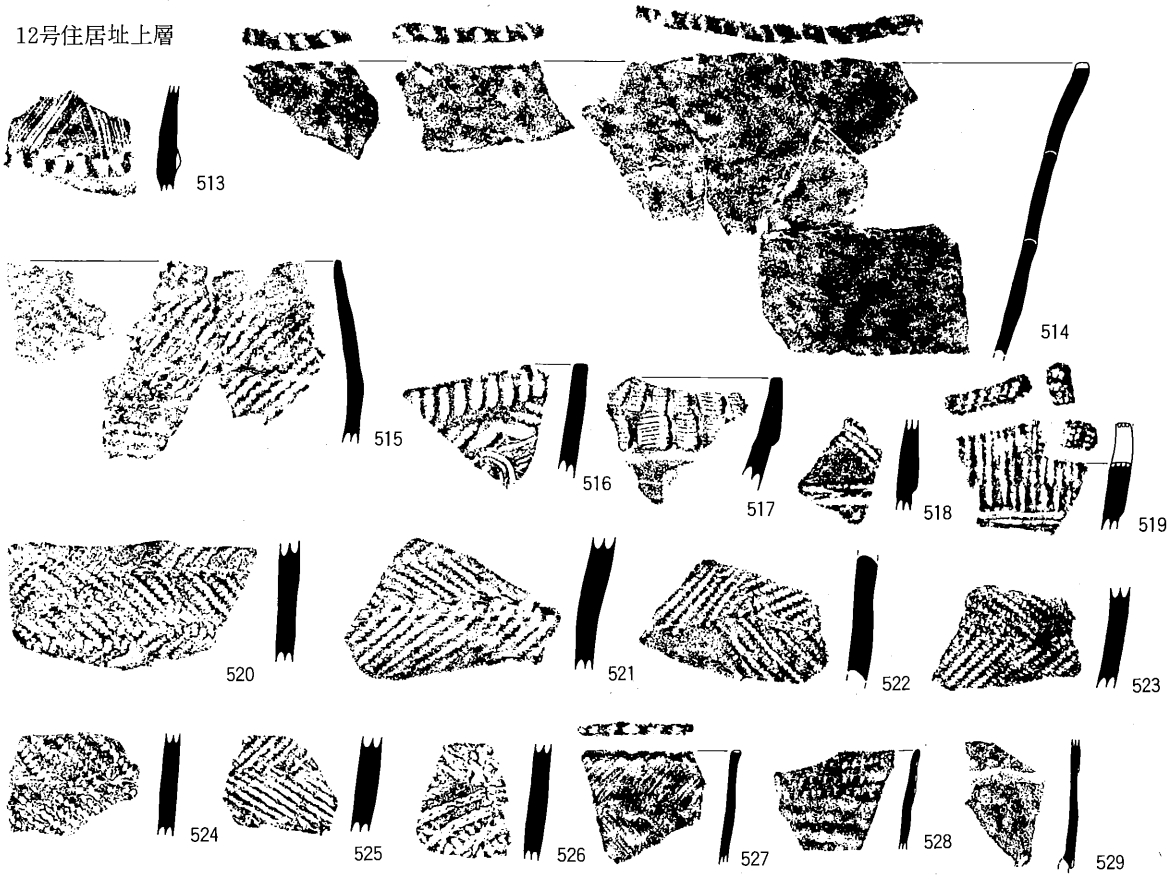


図85　11号住居址出土土器拓影

12号住居址上層



12号住居址(1)

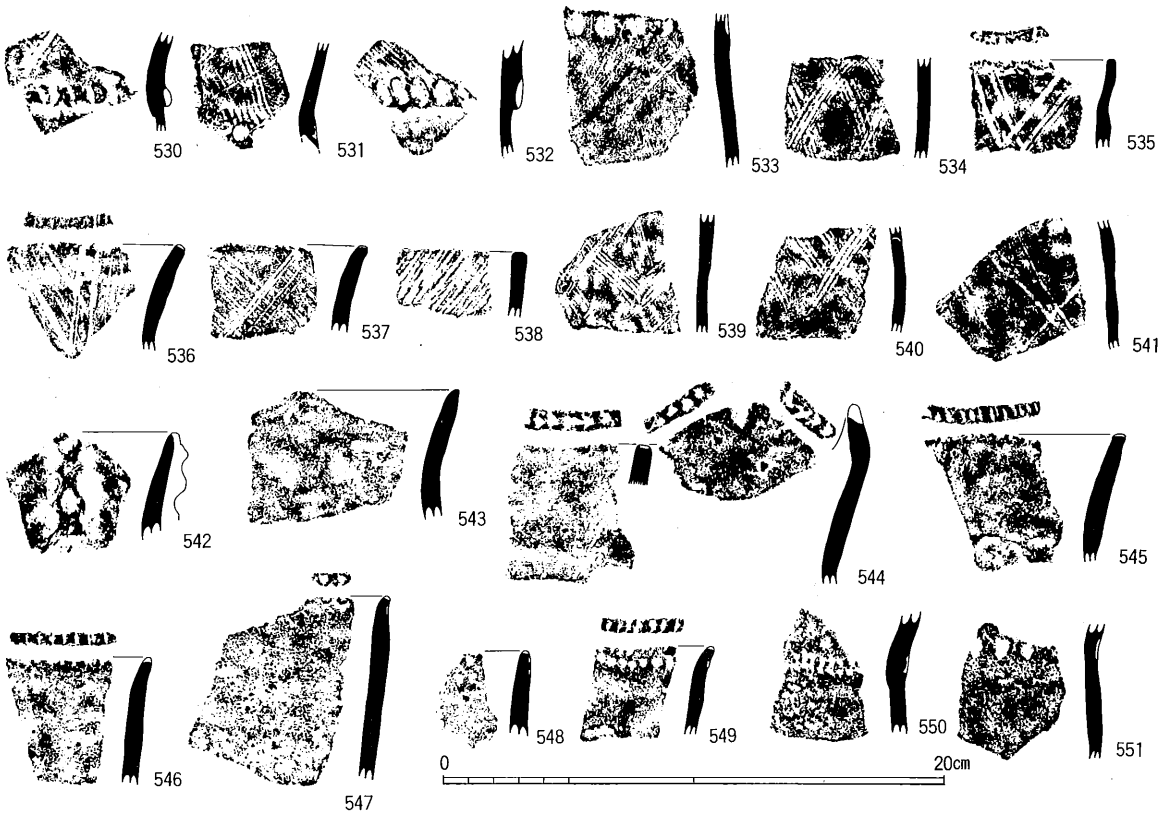


図86　12号住居址出土土器拓影

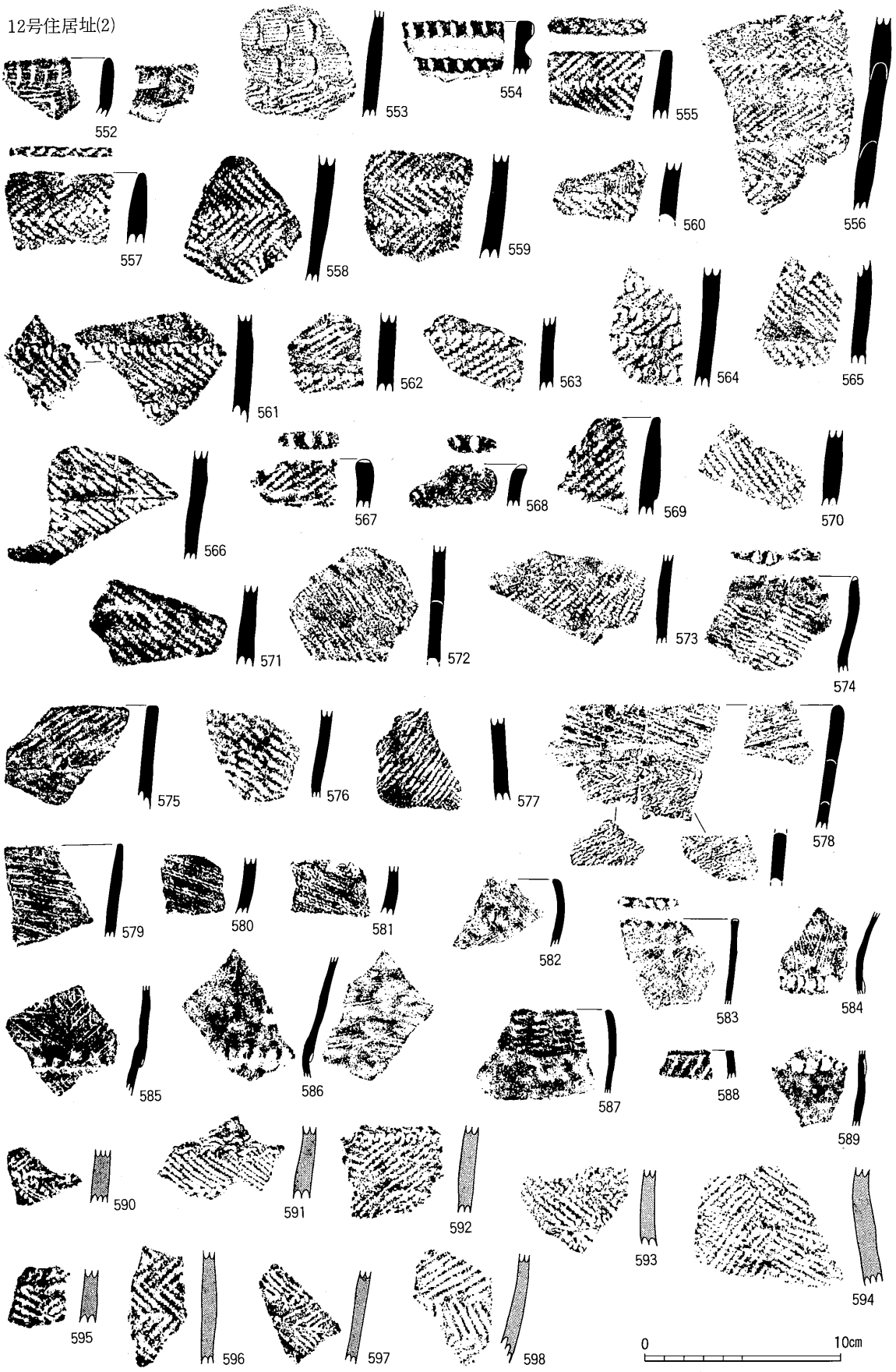


図87　12号住居址出土土器拓影

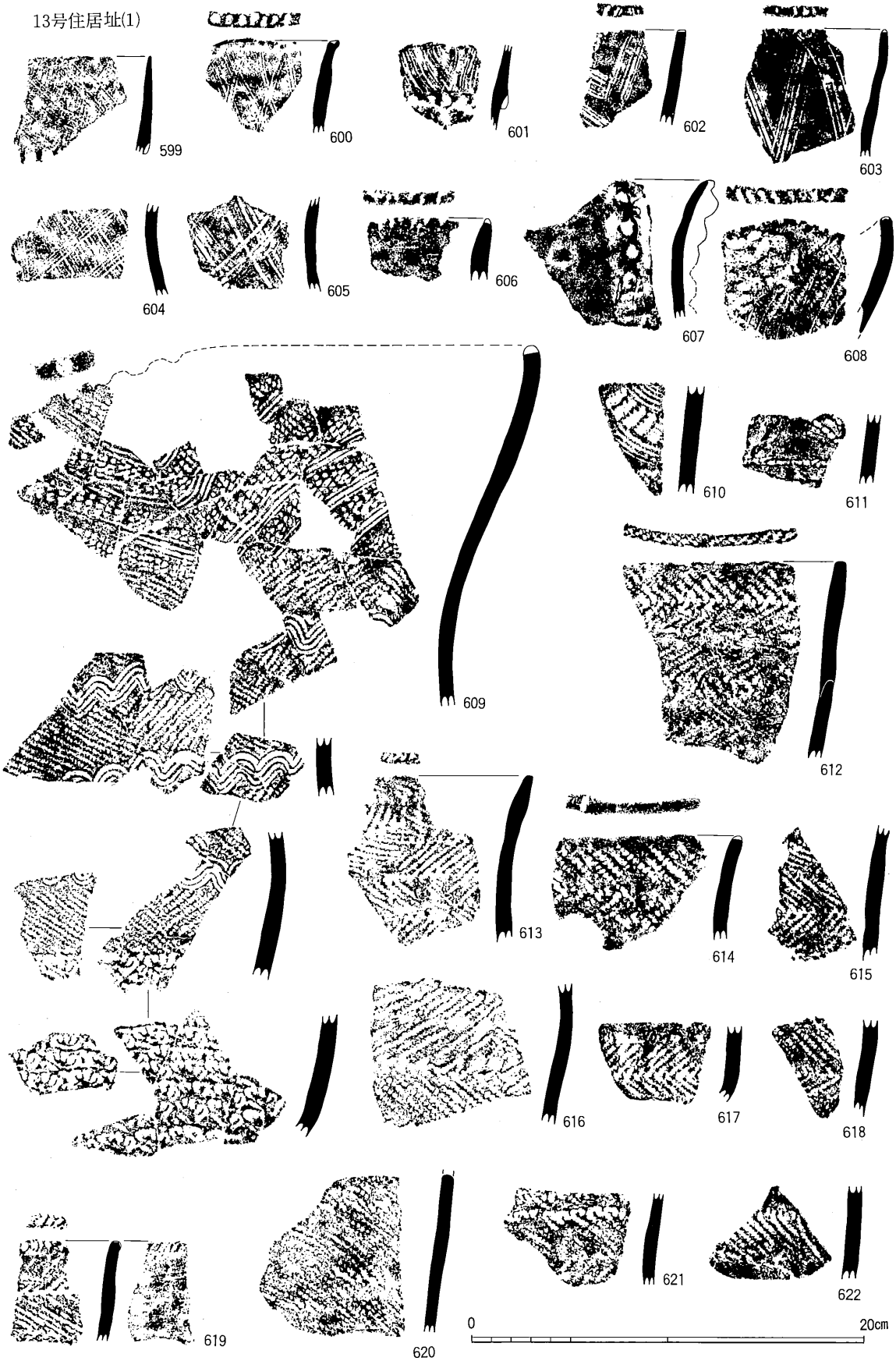
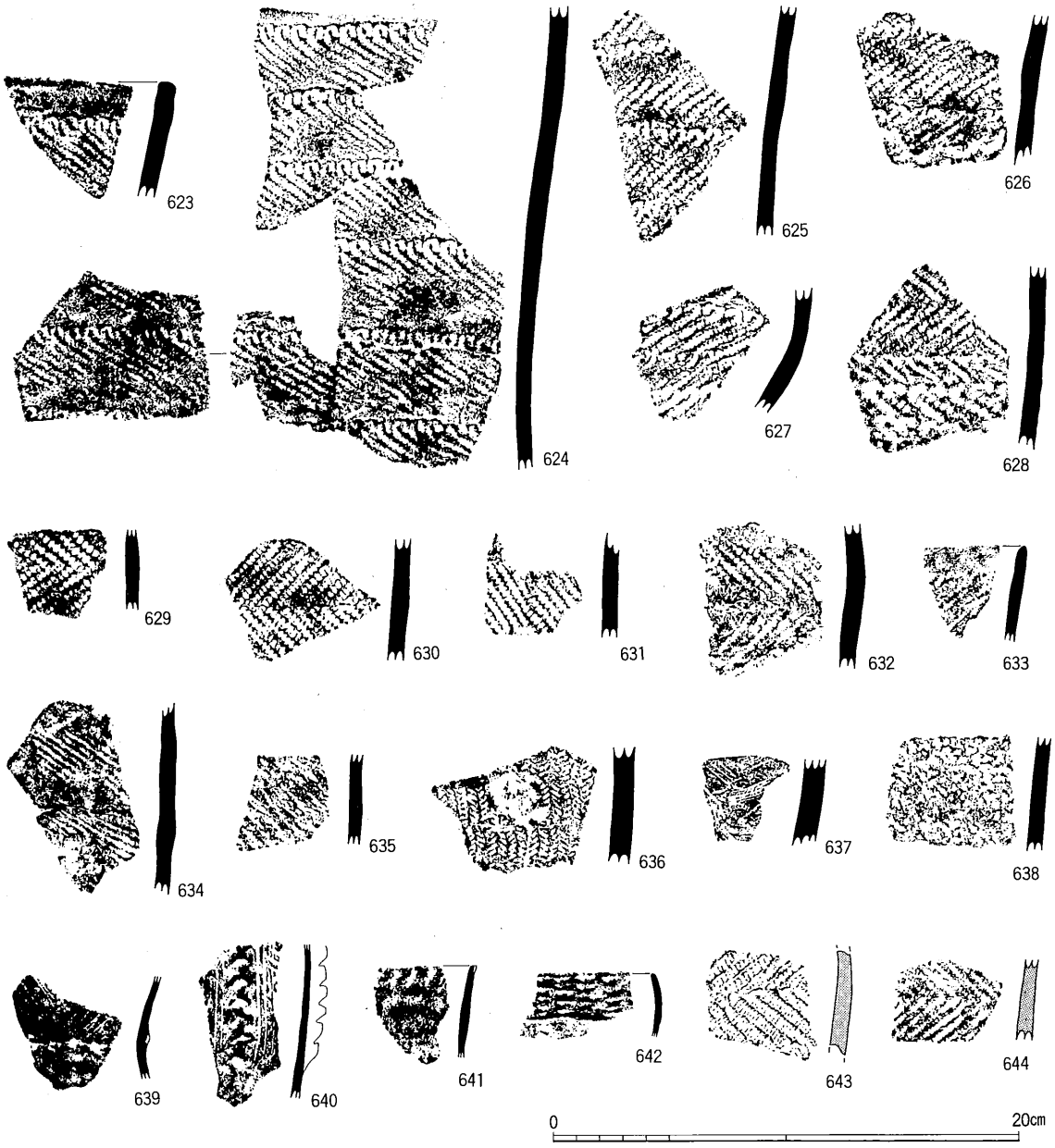


図88　13号住居址出土土器拓影

13号住居址(2)



14・23号住居址上層(1)

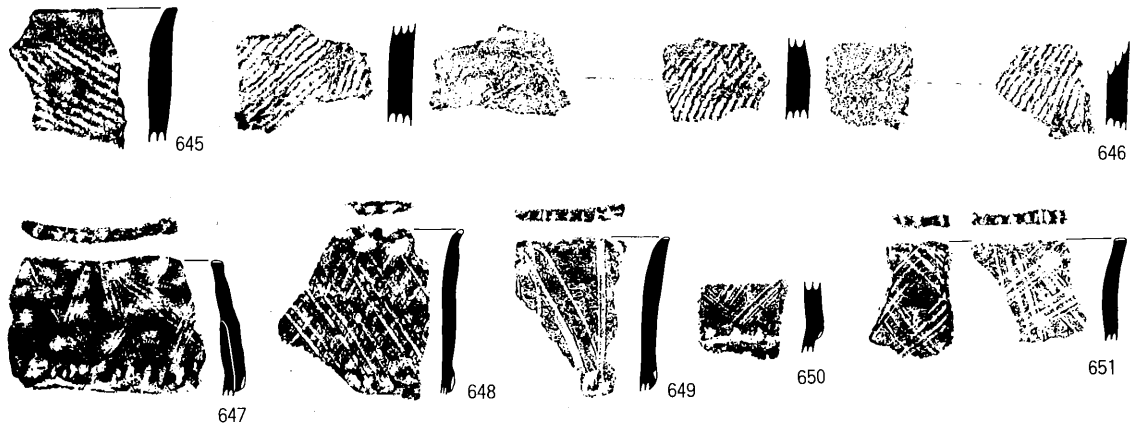


図89　13・14・23号住居址出土土器拓影

14・23号住居址上層(2)

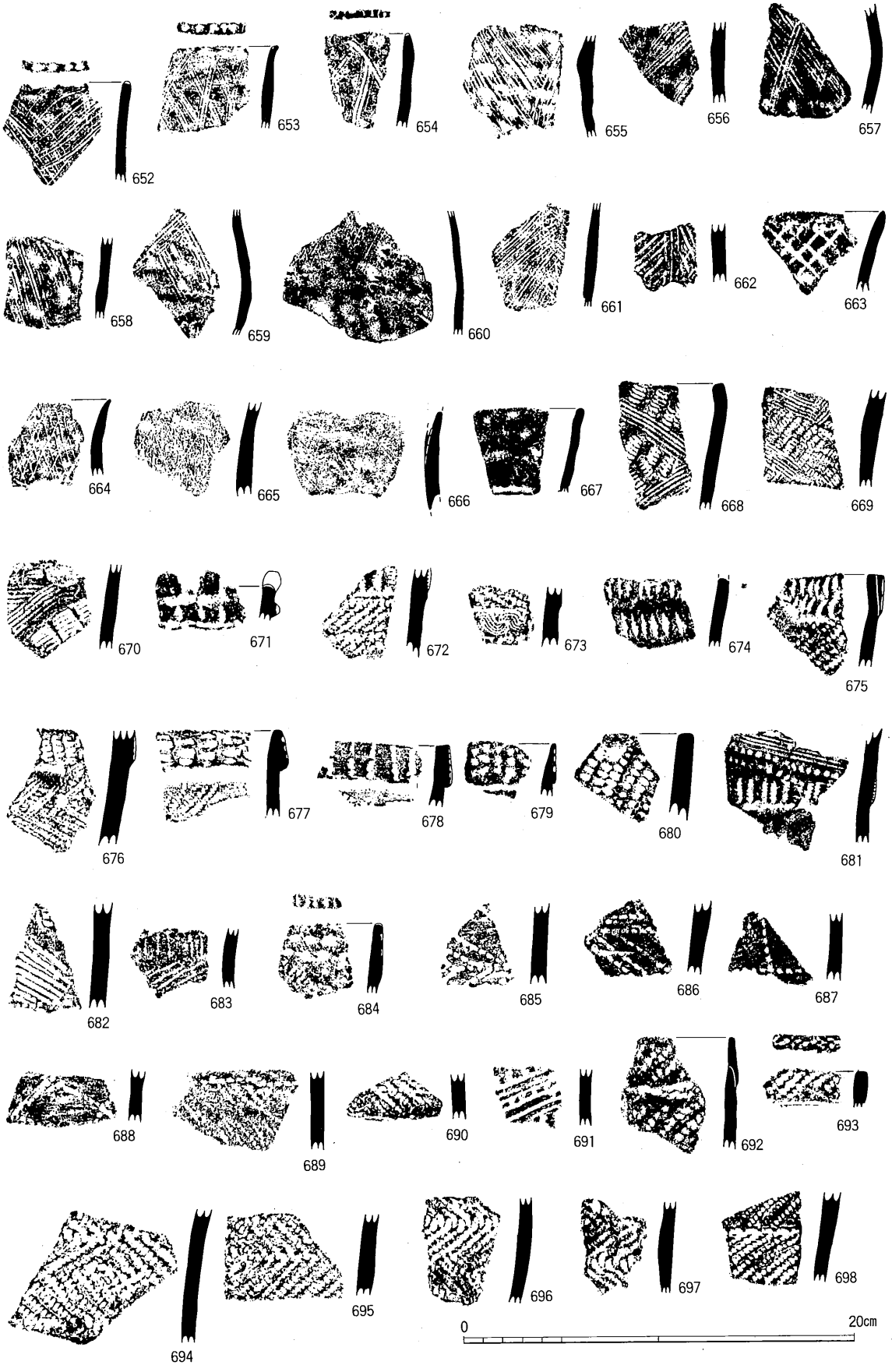


図90　14・23号住居址出土土器拓影

14・23号住居址上層(3)

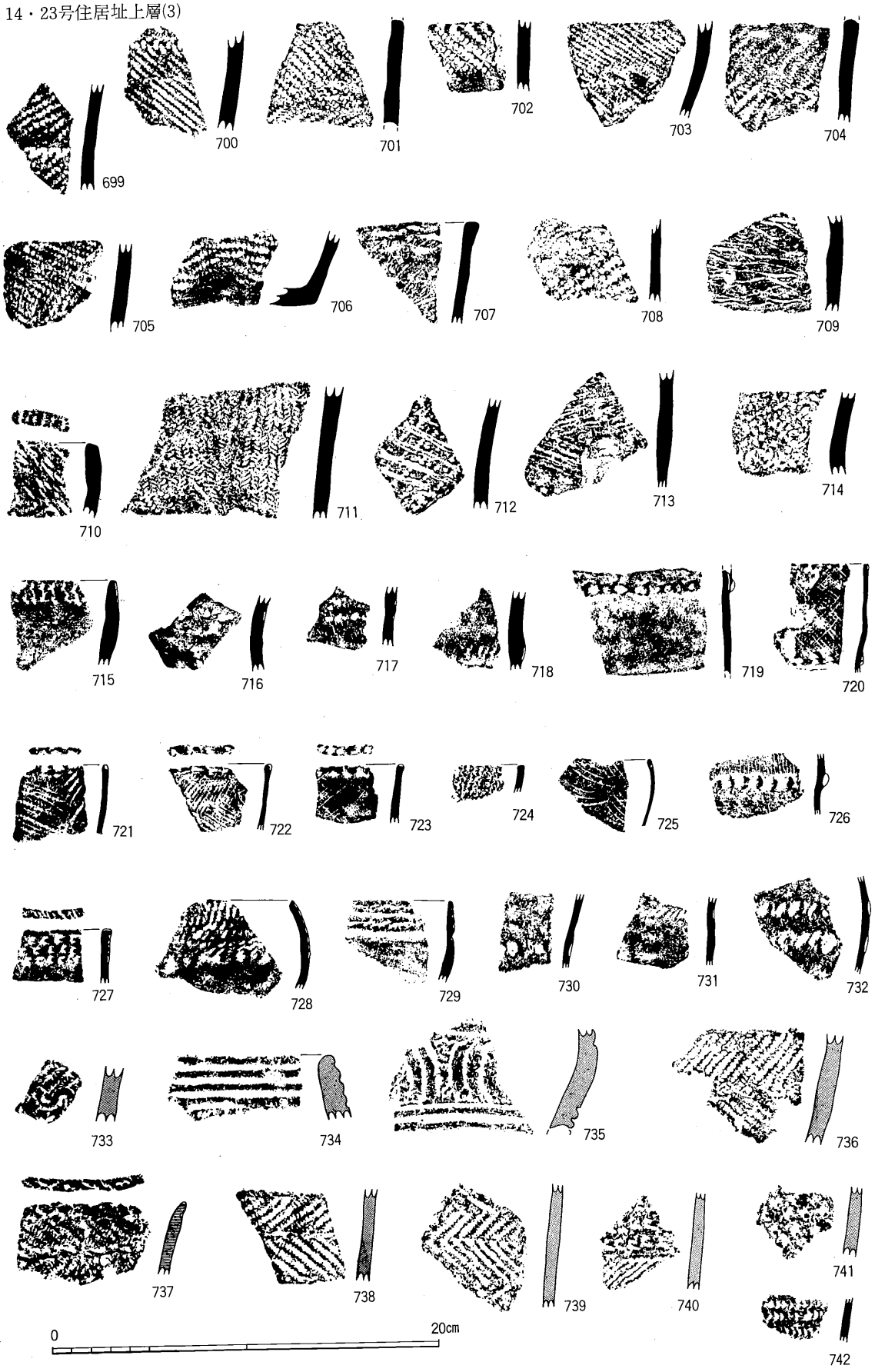


図91　14・23号住居址出土土器拓影

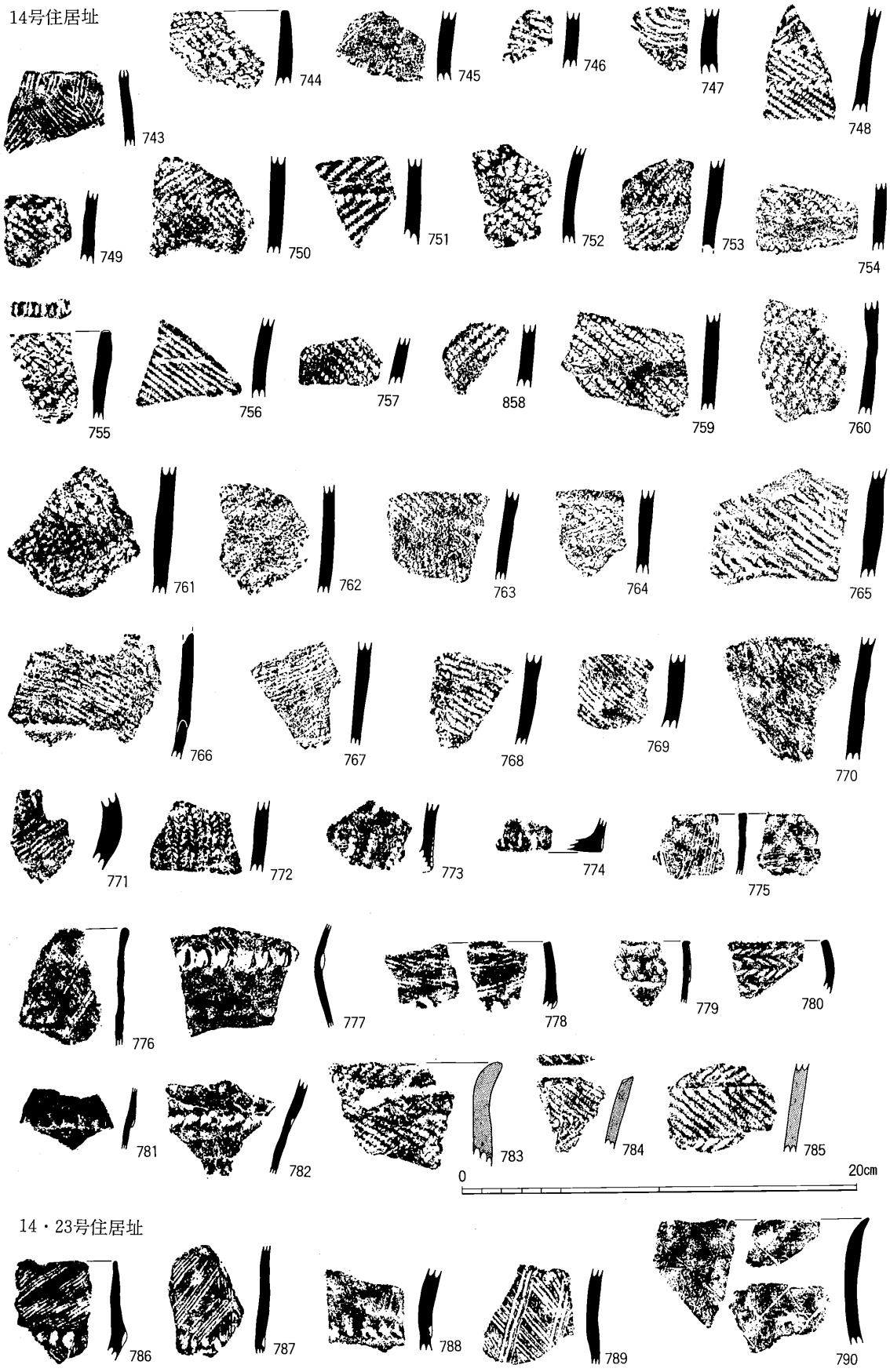


図92　14・23号住居址出土土器拓影

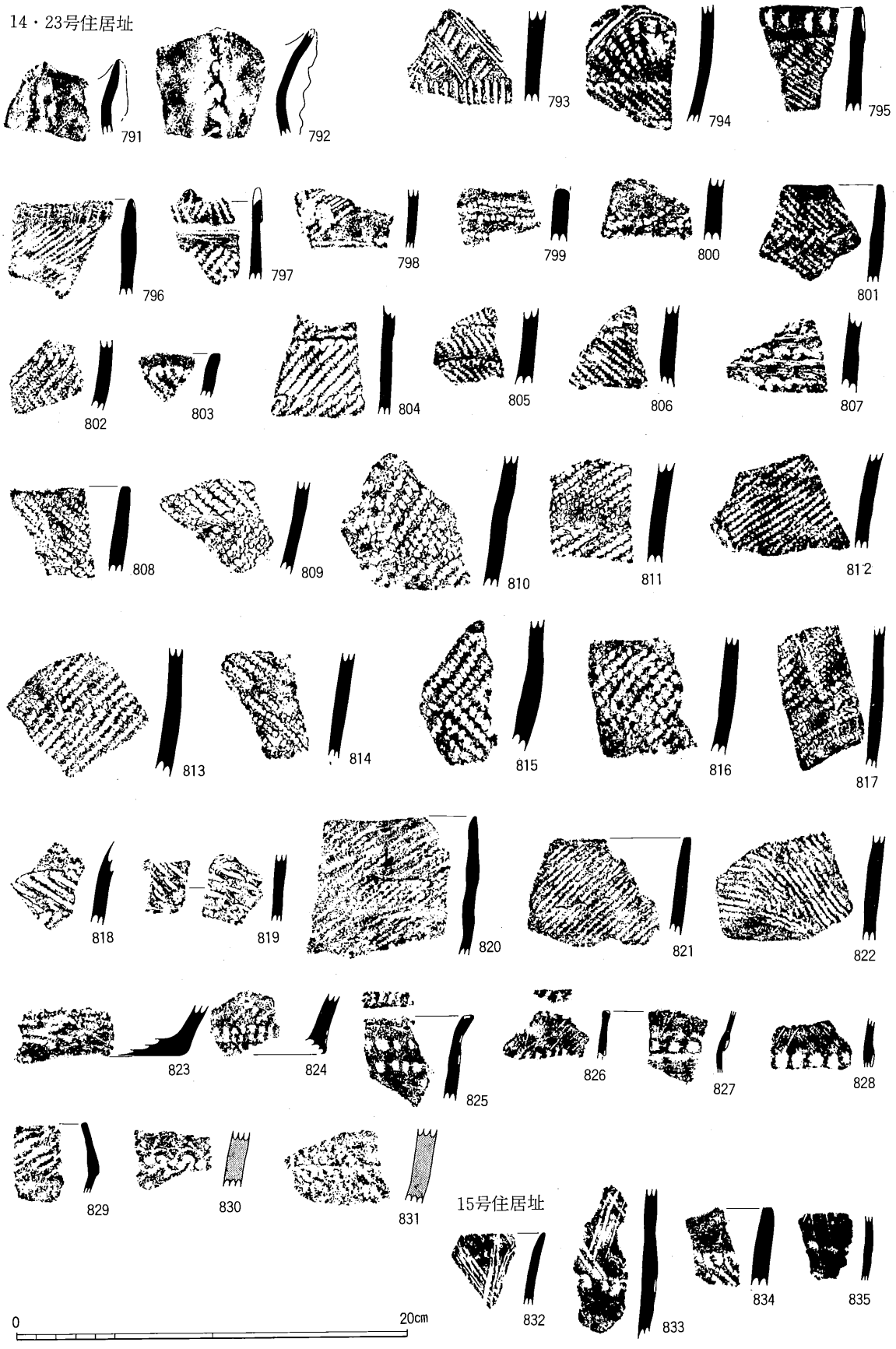
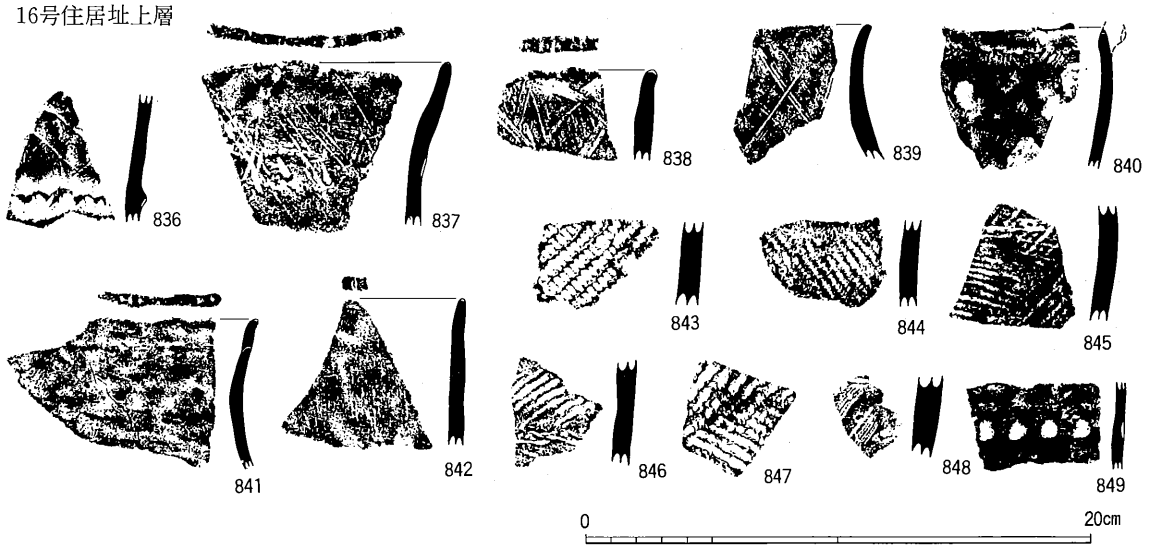


図93　14・23・15号住居址出土土器拓影

16号住居址上層



17号住居址(1)

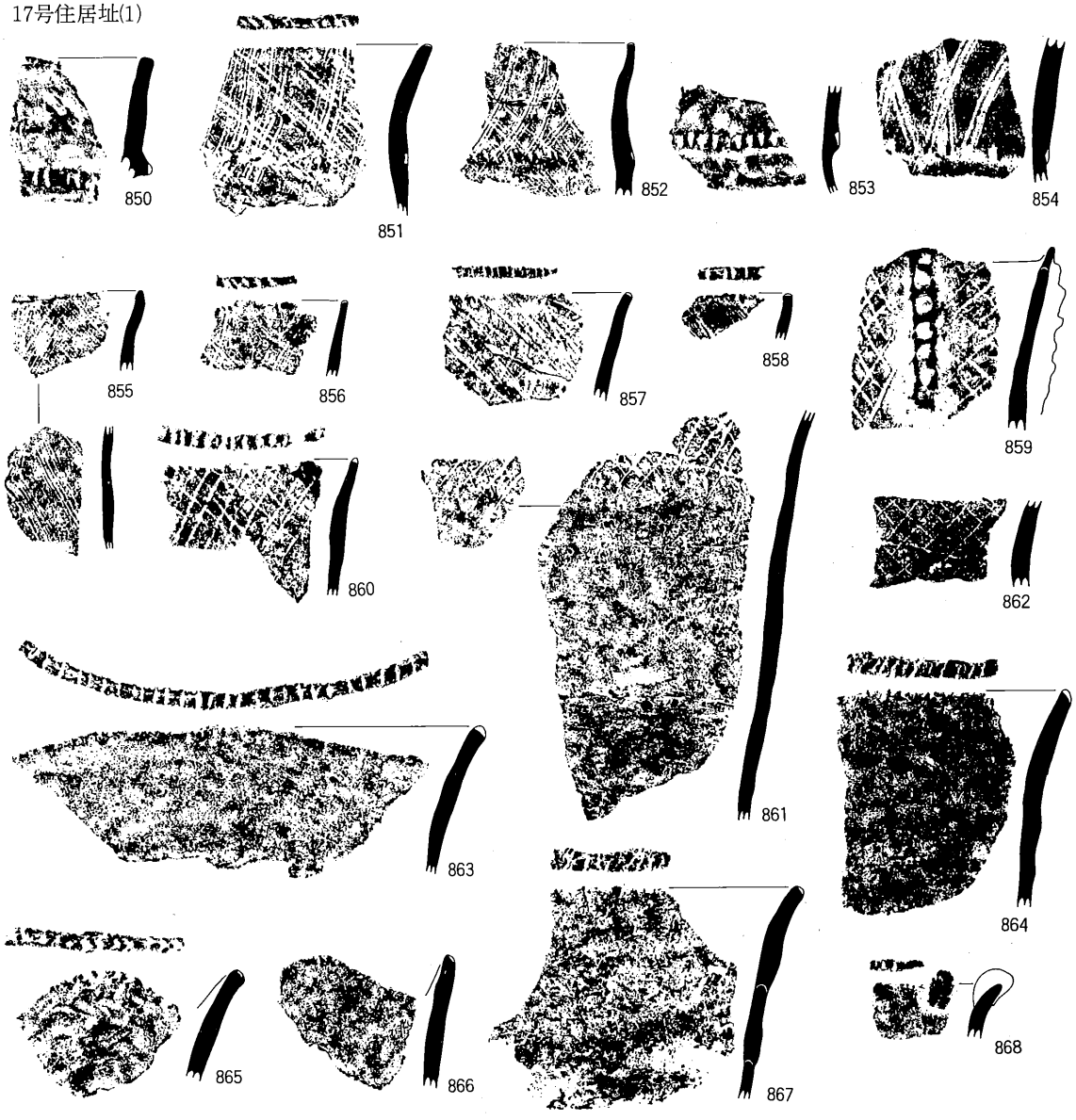


図94　16・17号住居址出土土器拓影

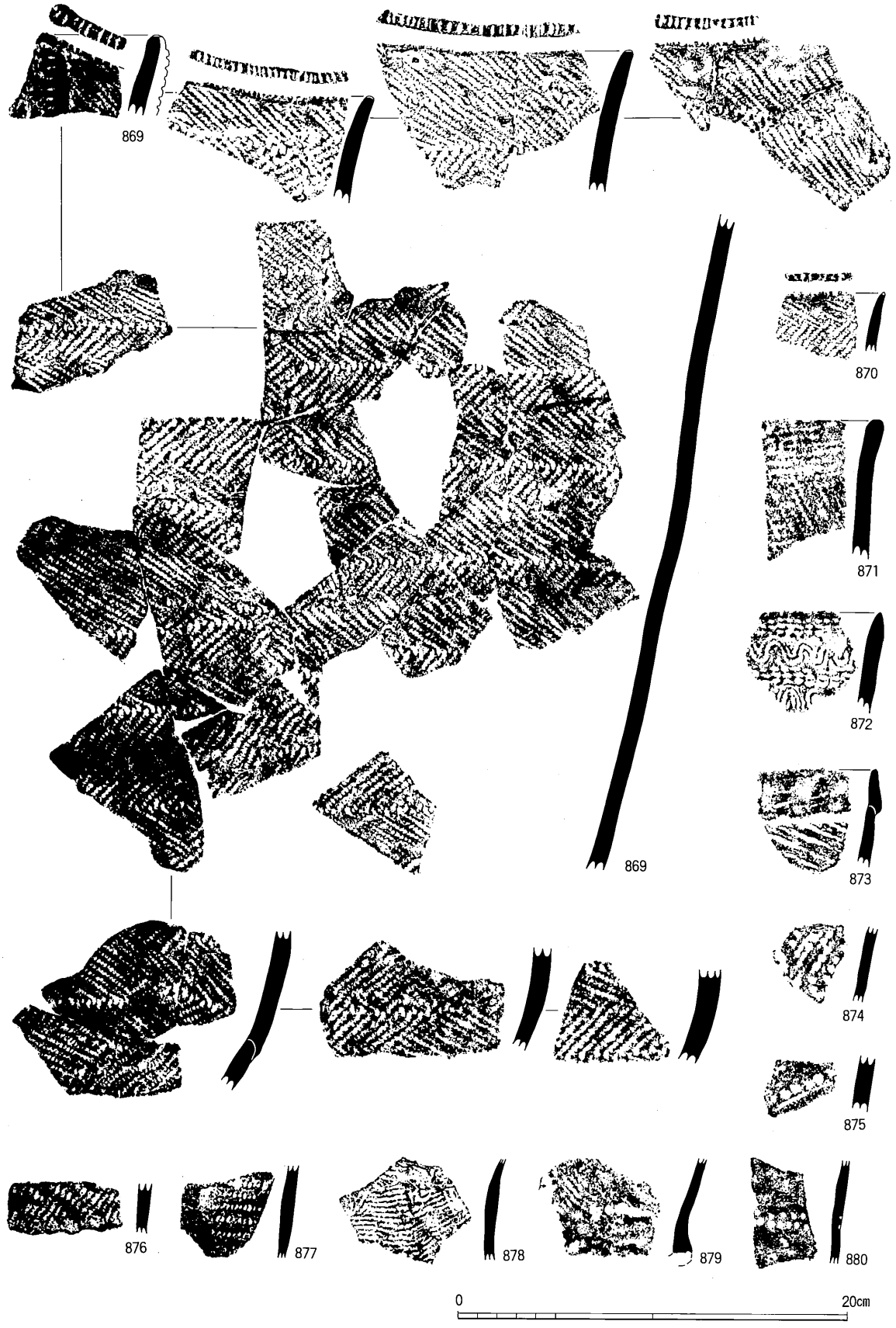


図95　17号住居址出土土器拓影

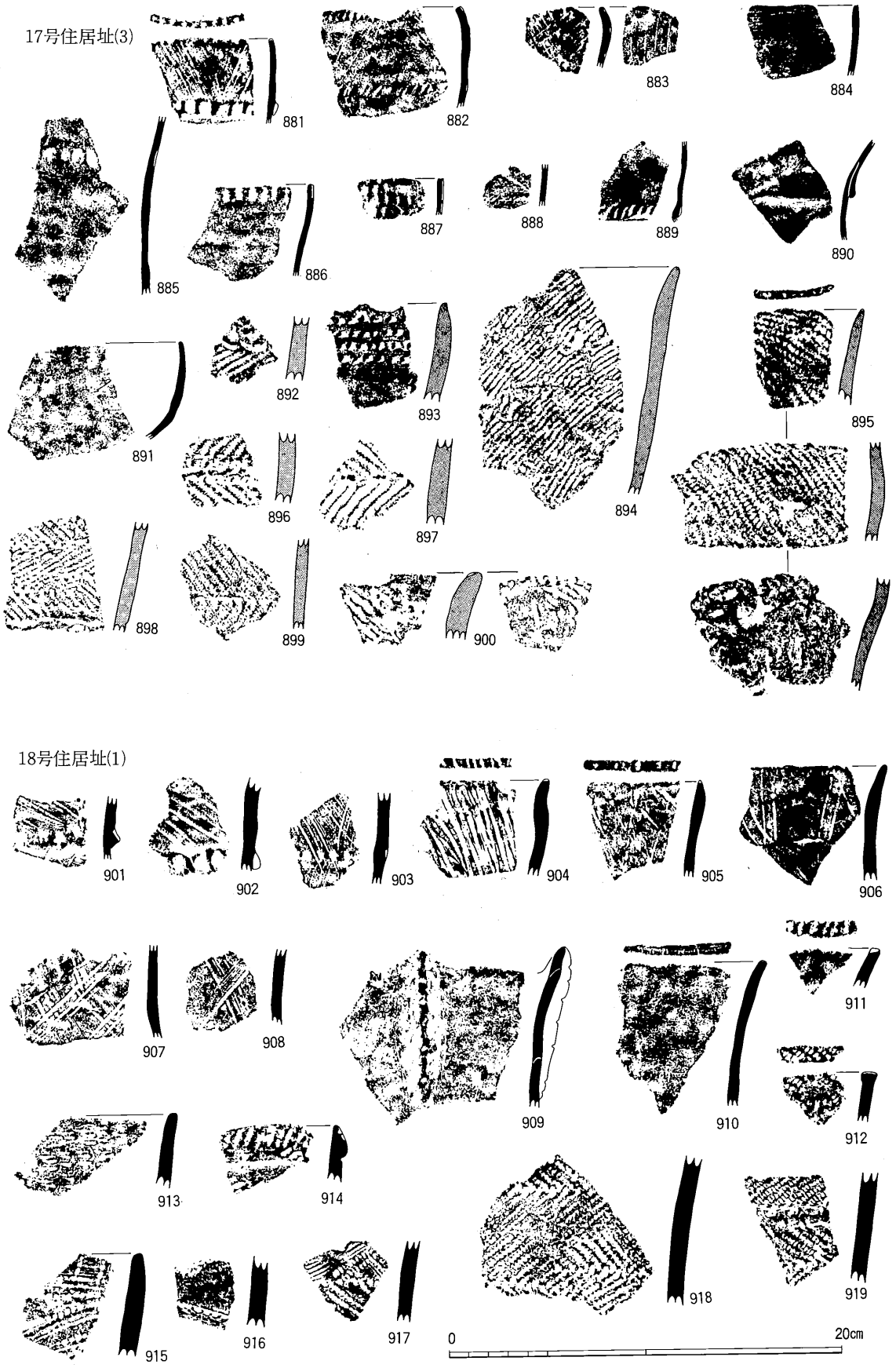


図96　17・18号住居址出土土器拓影

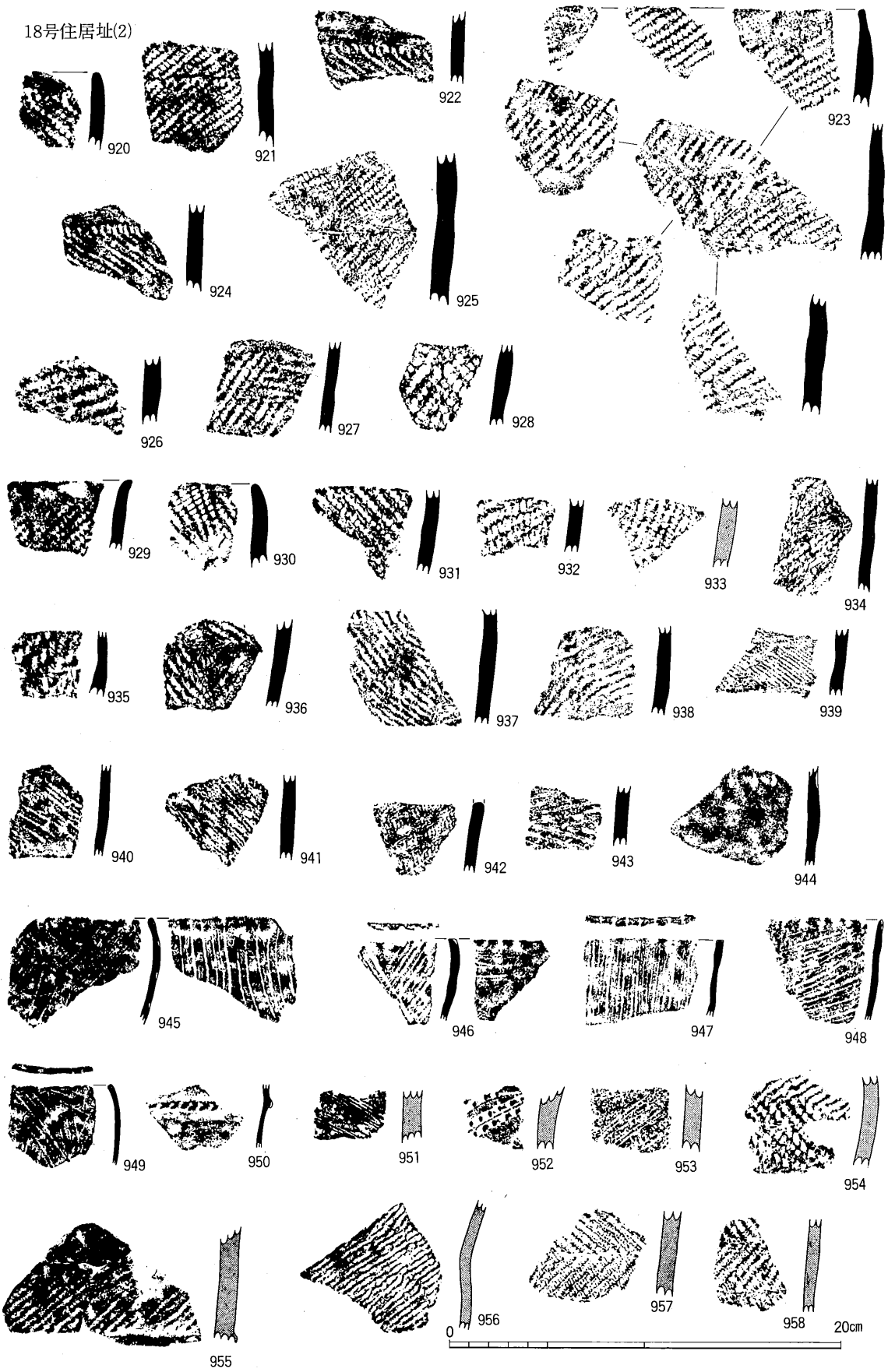
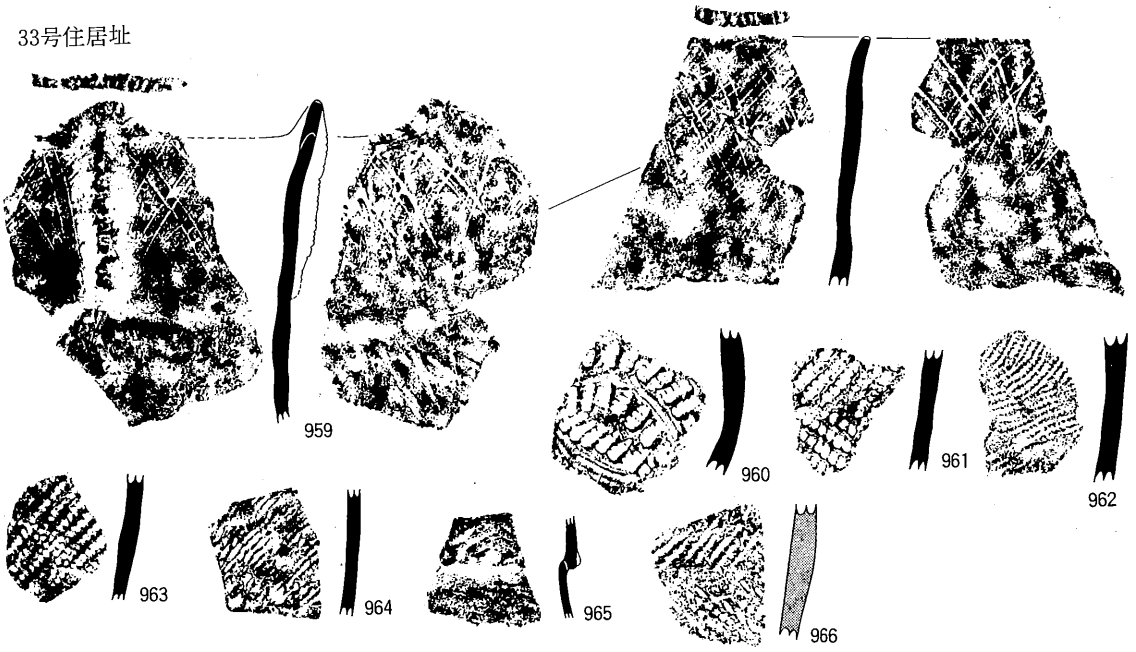
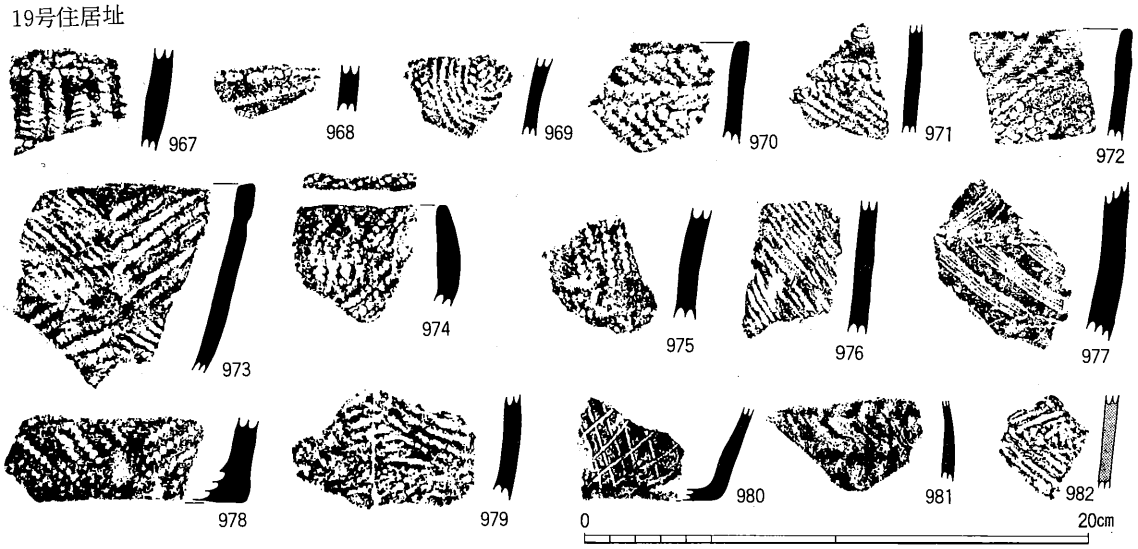


図97　18号住居址出土土器拓影

33号住居址



19号住居址



20号住居址

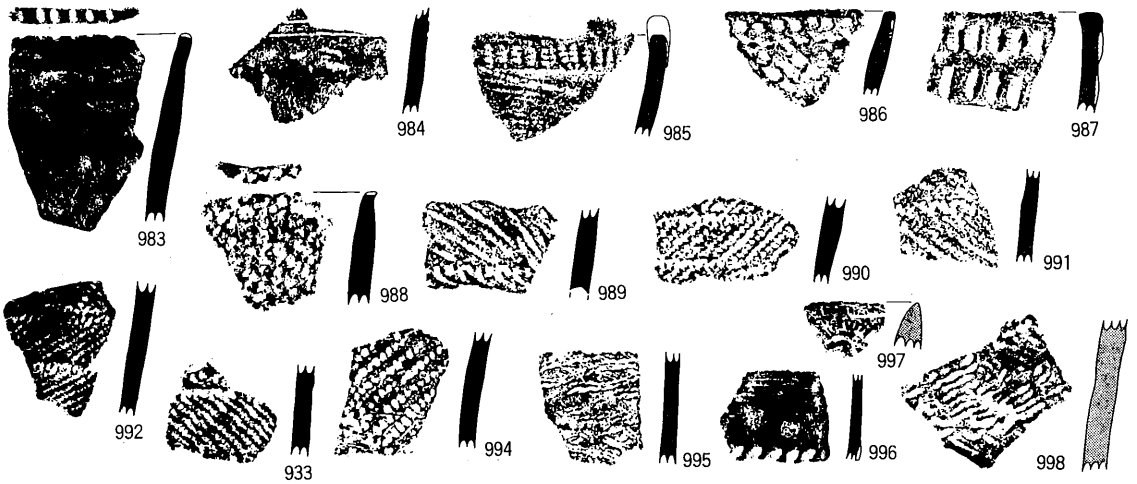


図98　33・19・20号住居址出土土器拓影

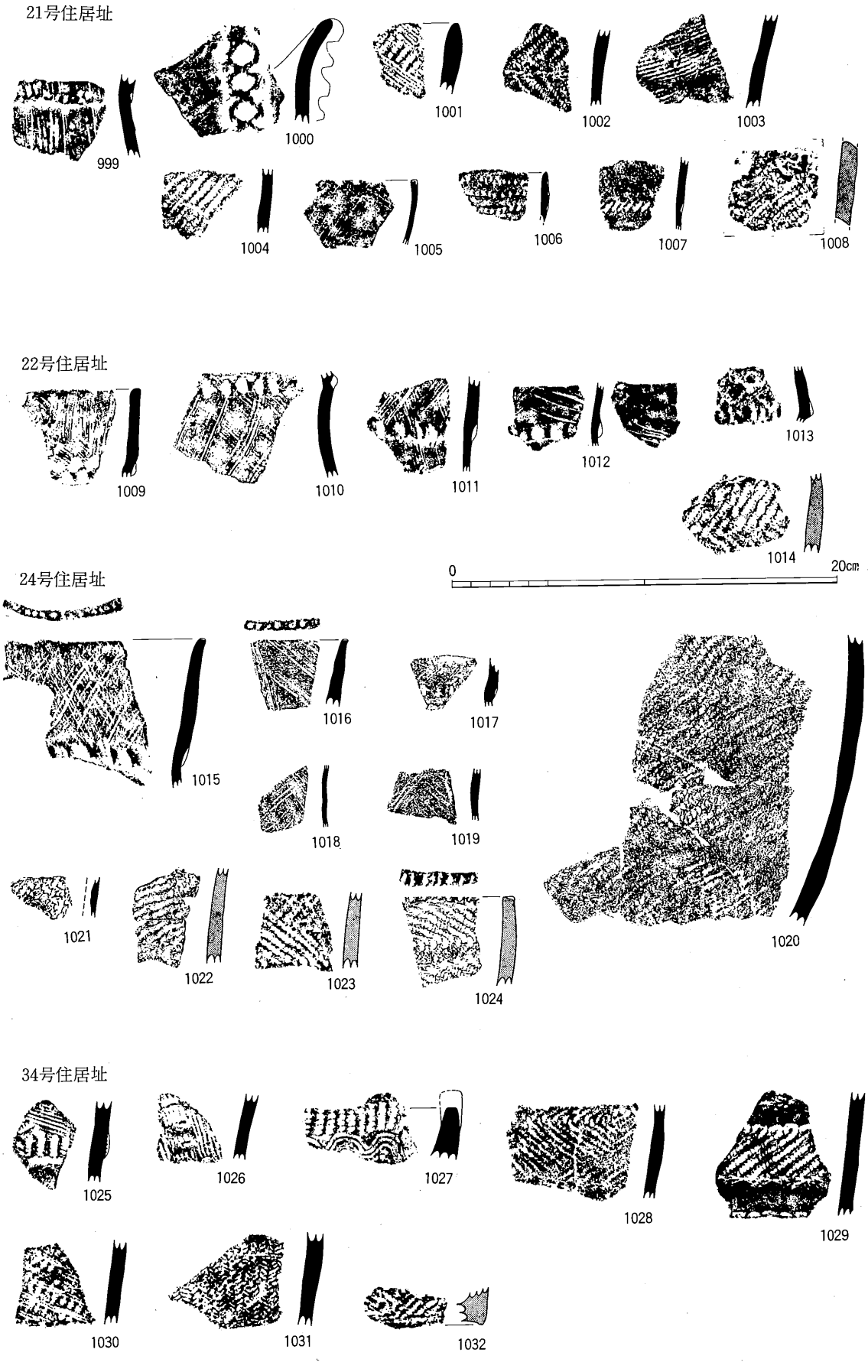
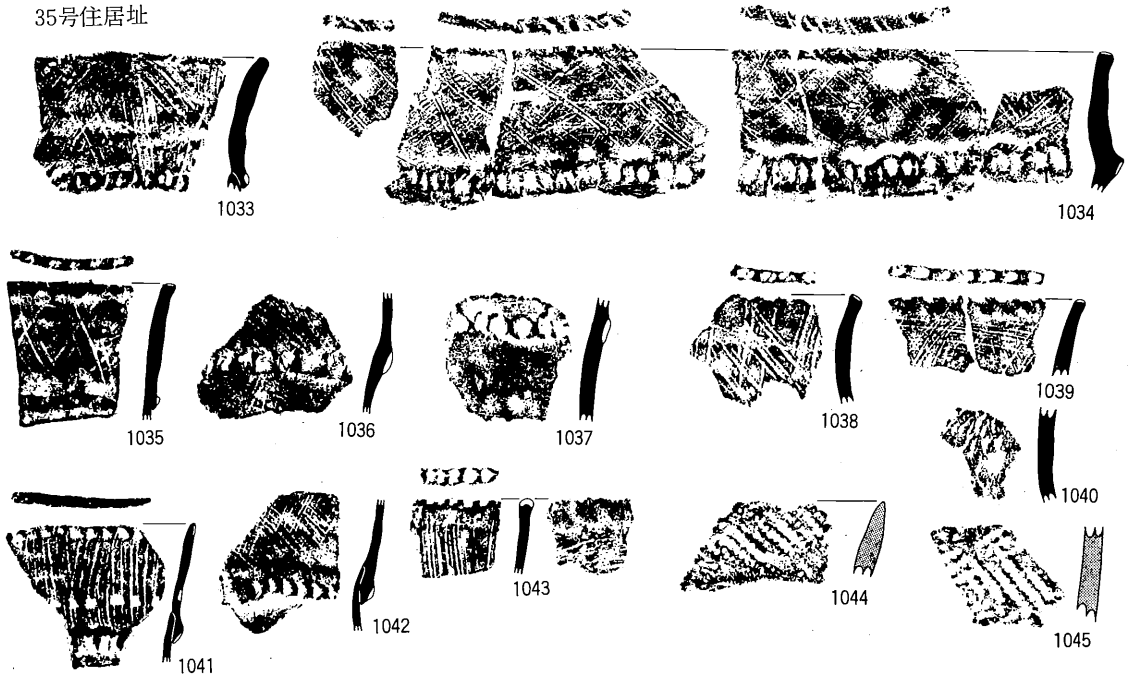
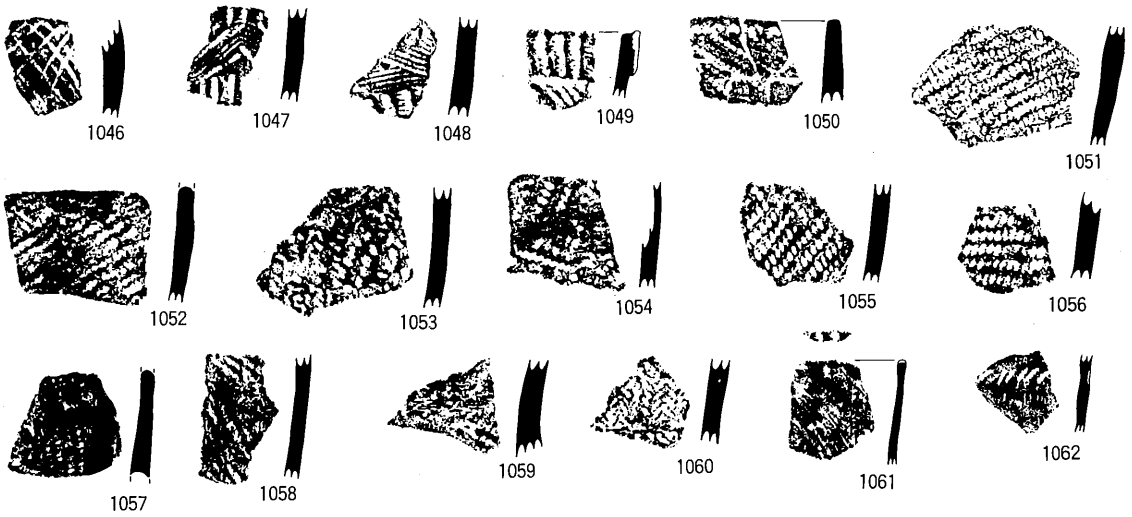


図99　21・22・24・34号住居址出土土器拓影

35号住居址



36号住居址



37号住居址

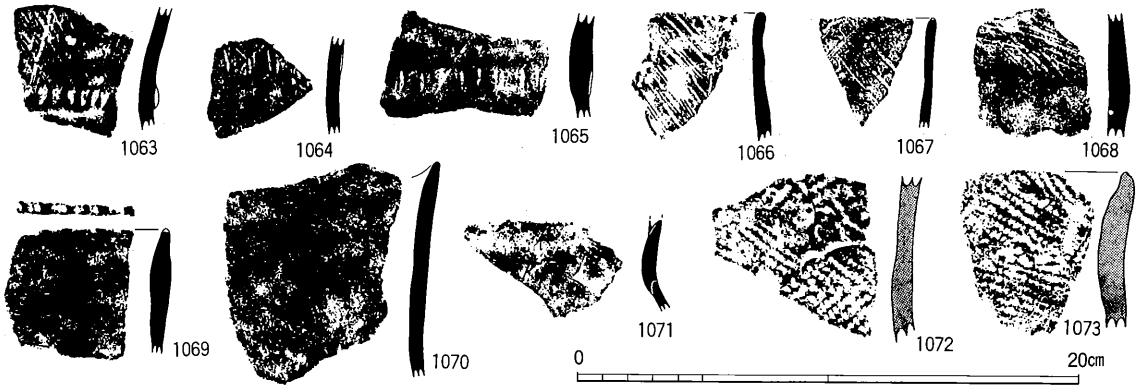


図100　35・36・37号住居址出土土器拓影

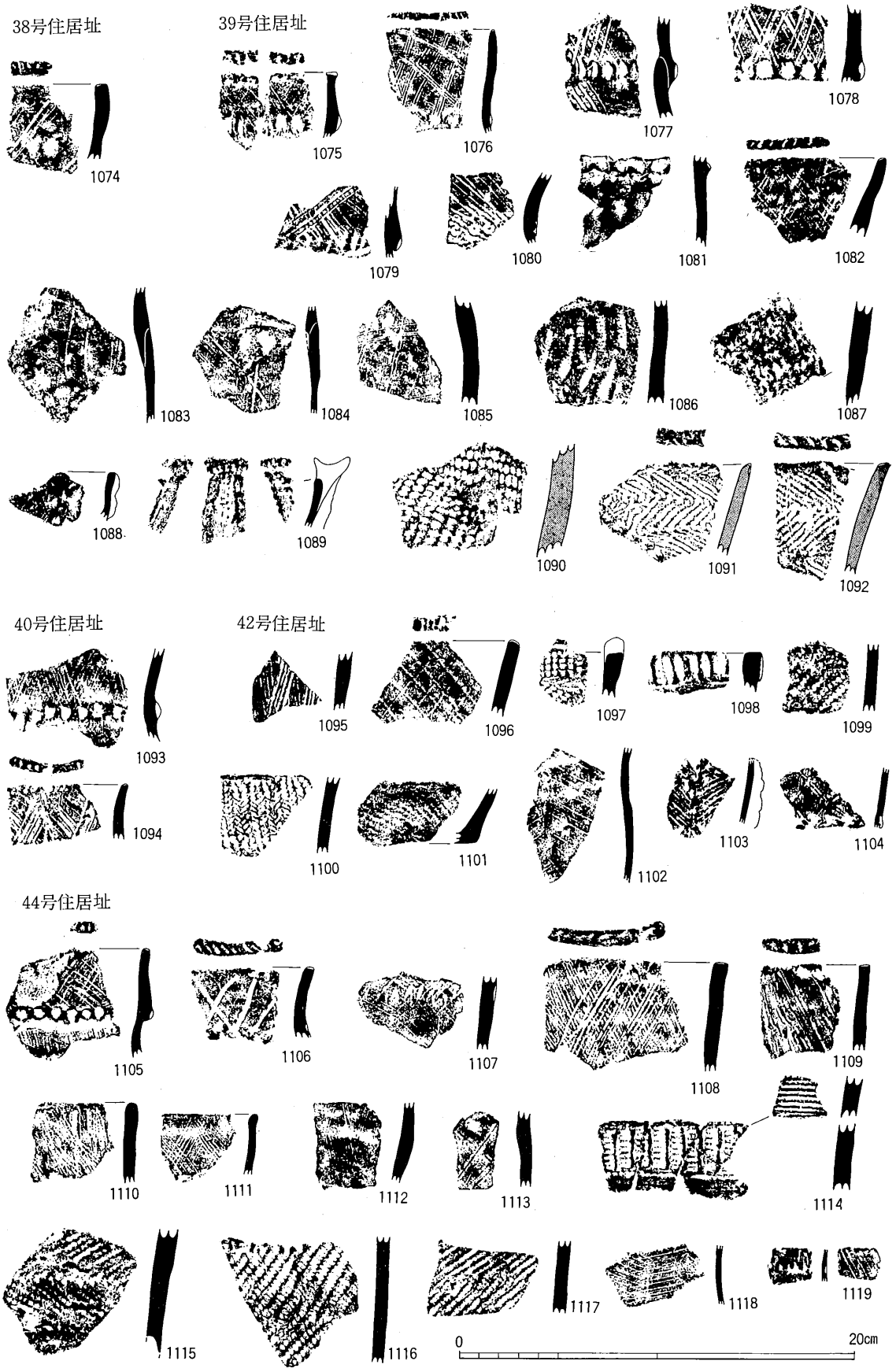


図101　38・39・40・42・44号住居址出土土器拓影

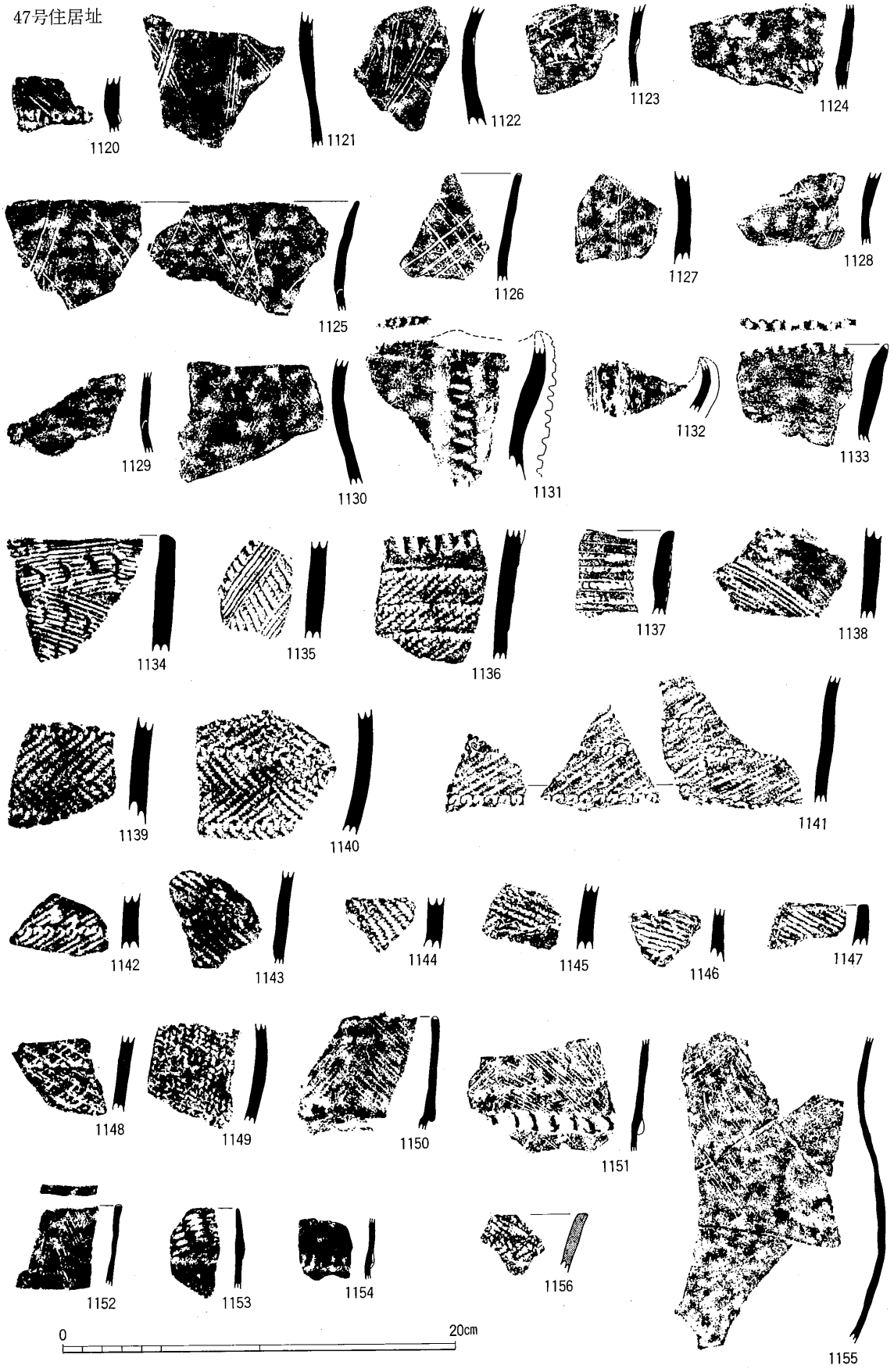


図102　47号住居址出土土器拓影

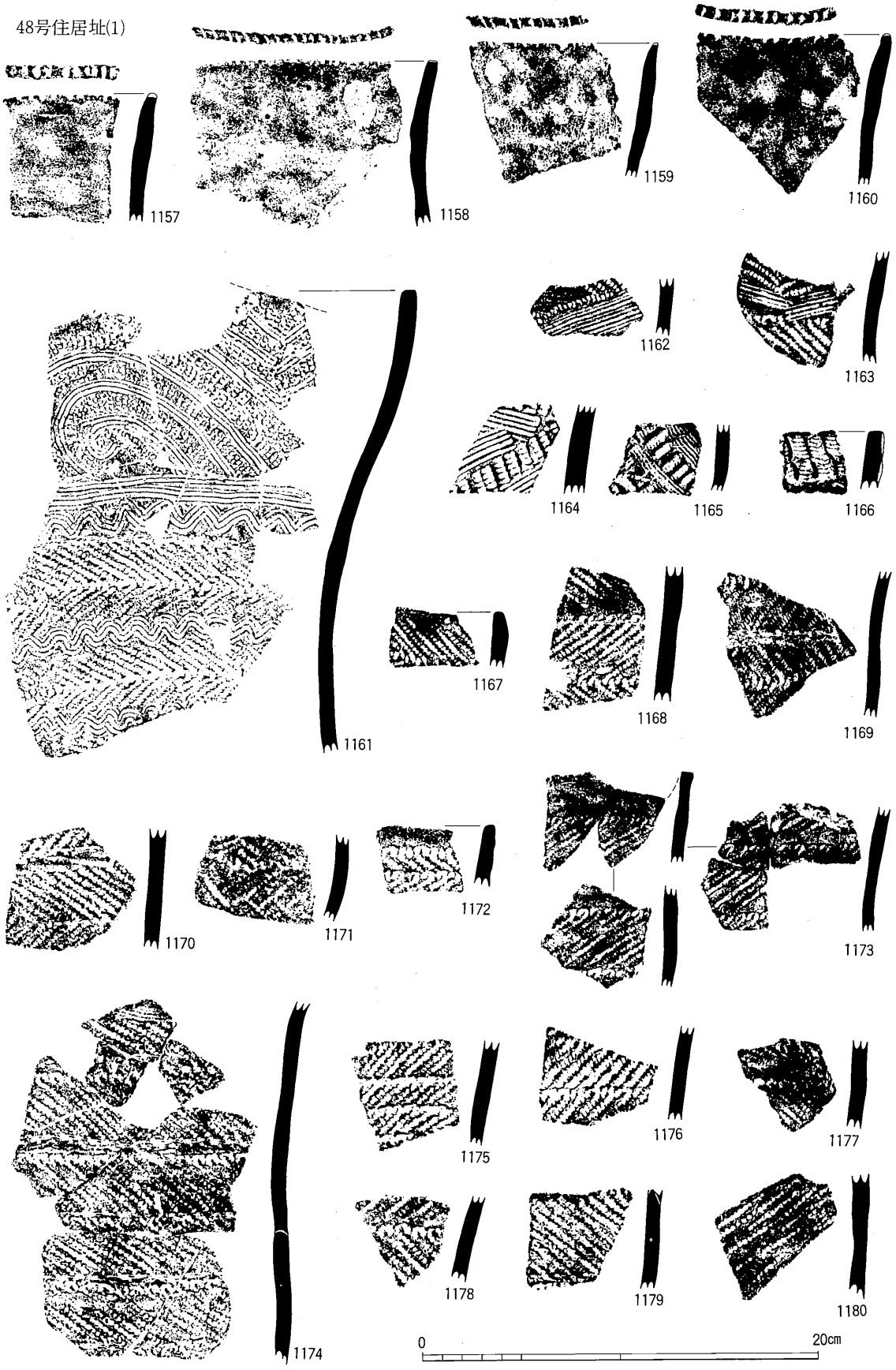


図103　48号住居址出土土器拓影

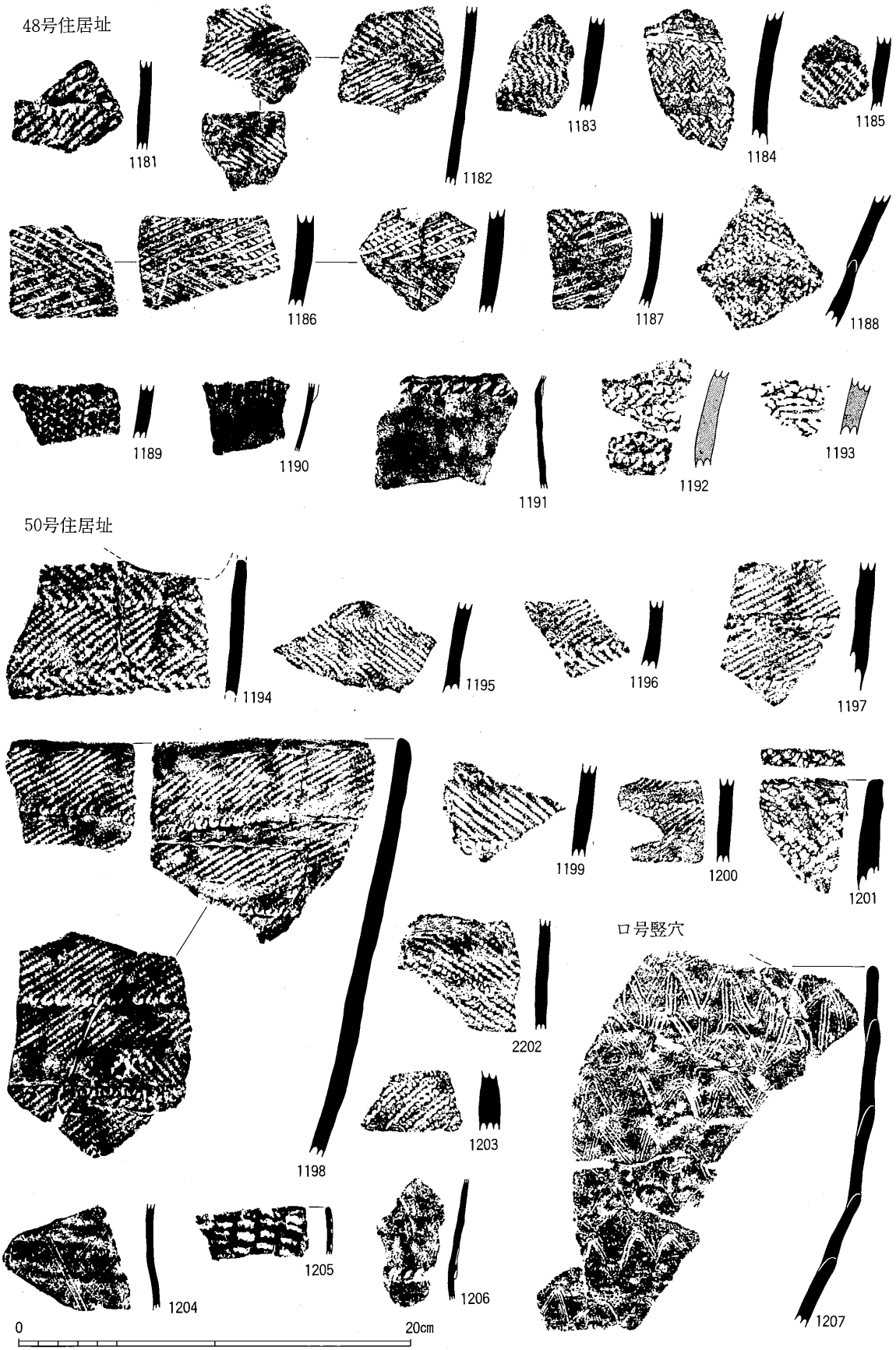


図104　48・50号住居址、ロ号竪穴出土土器拓影

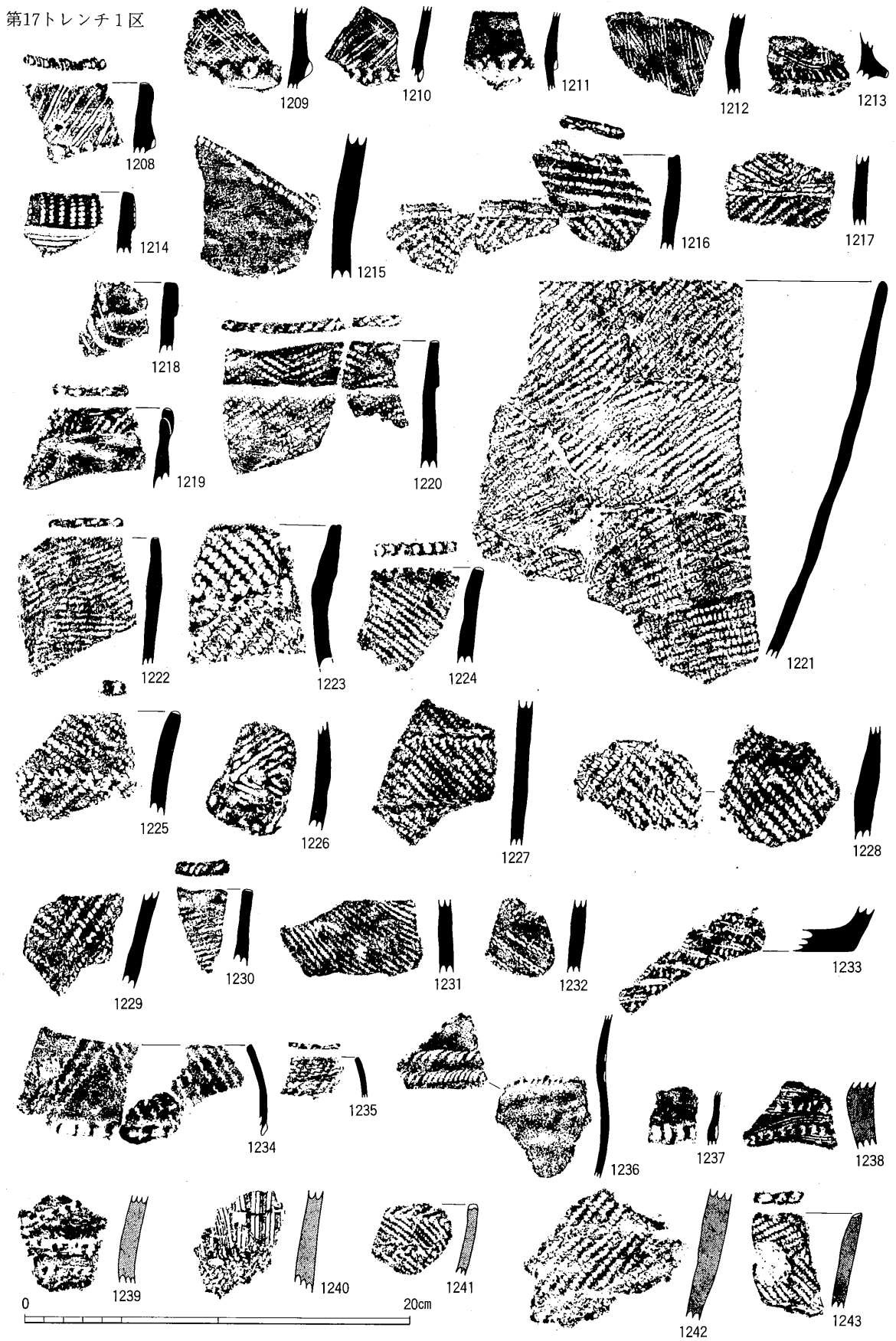


図105　17トレンチ出土土器拓影

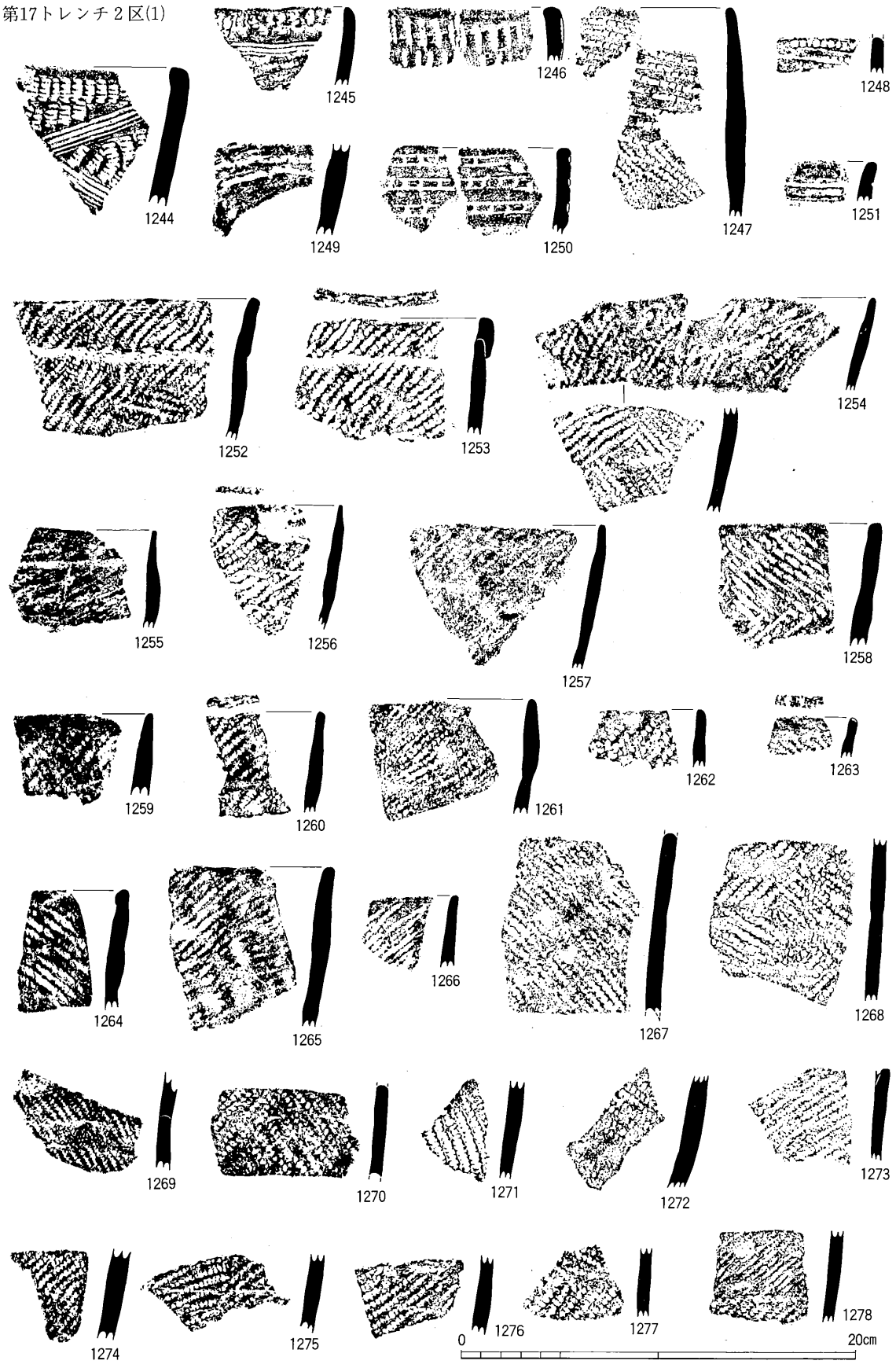


図106　17トレンチ出土土器拓影

図107　17トレンチ出土土器拓影

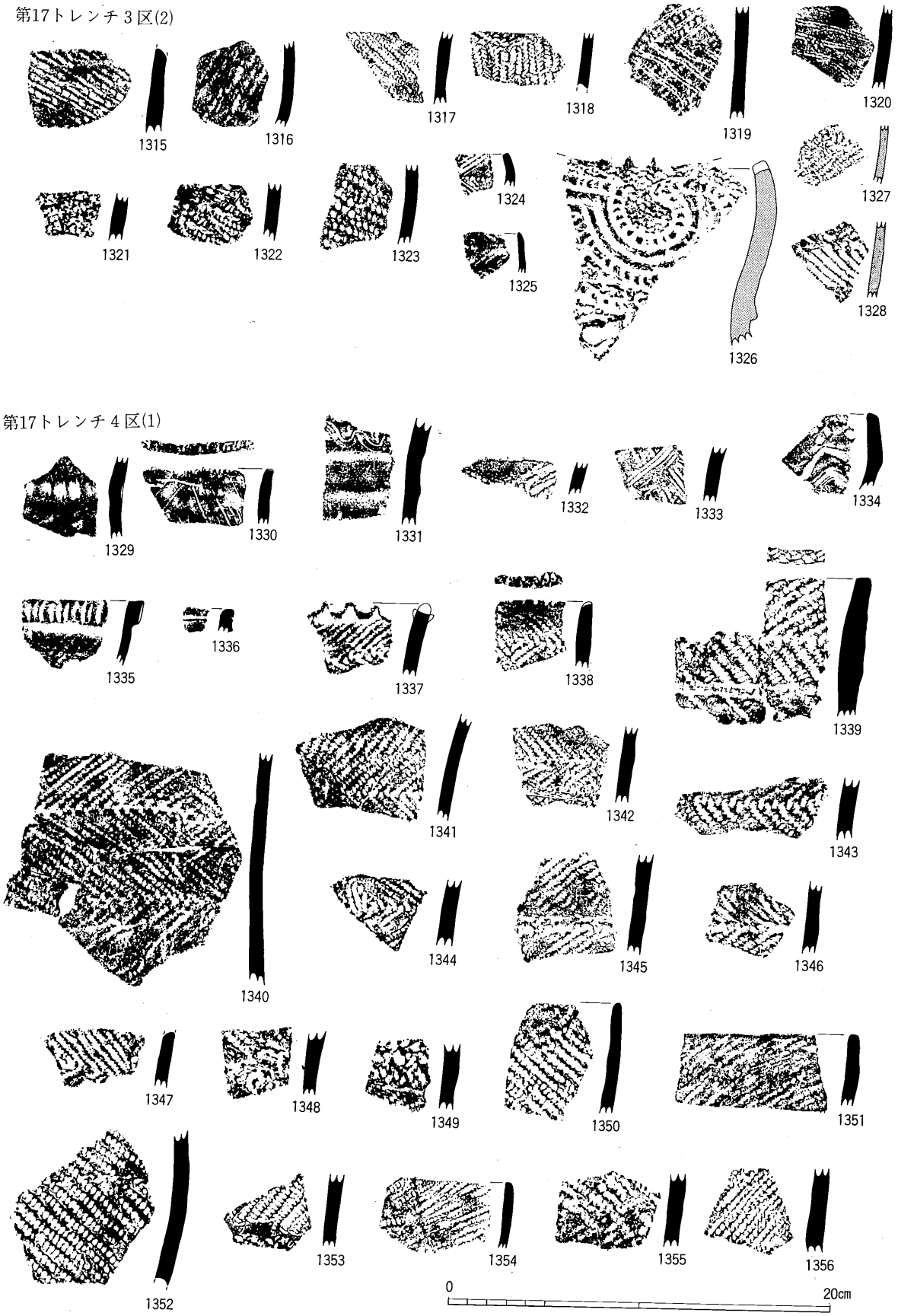
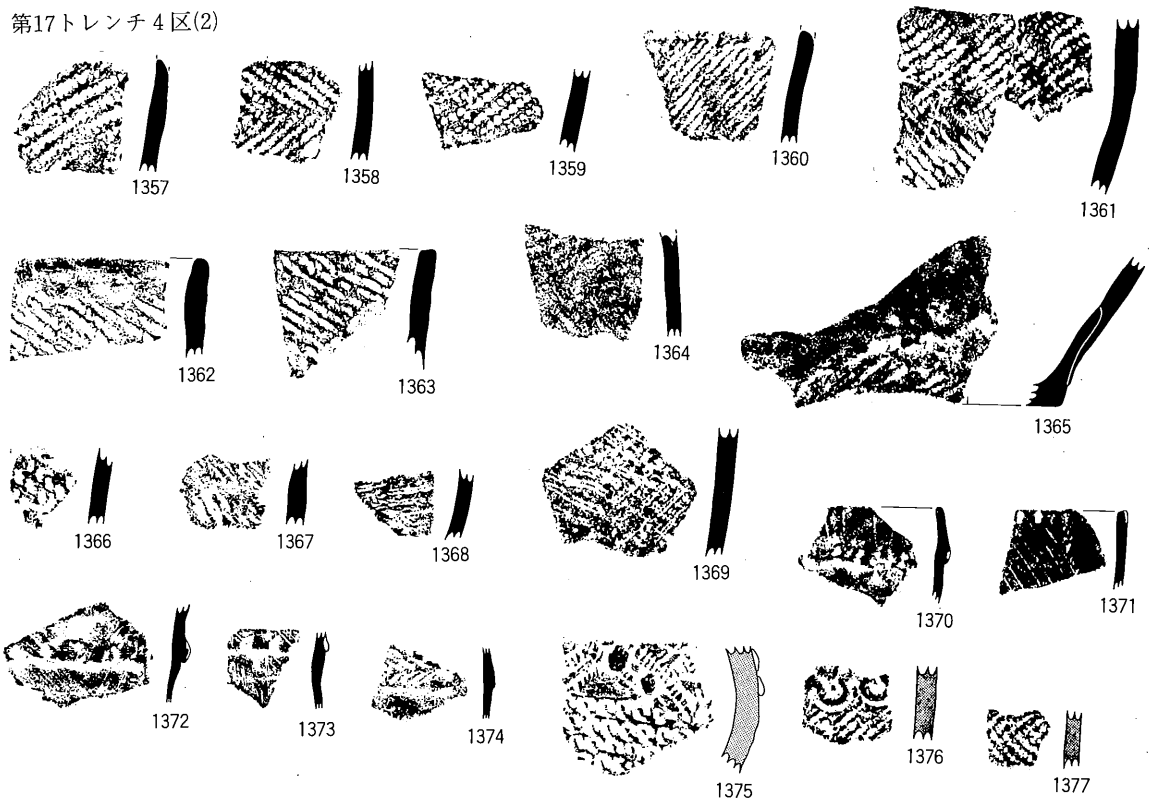


図108　17トレンチ出土土器拓影

第17トレンチ４区(2)



第17トレンチ５区

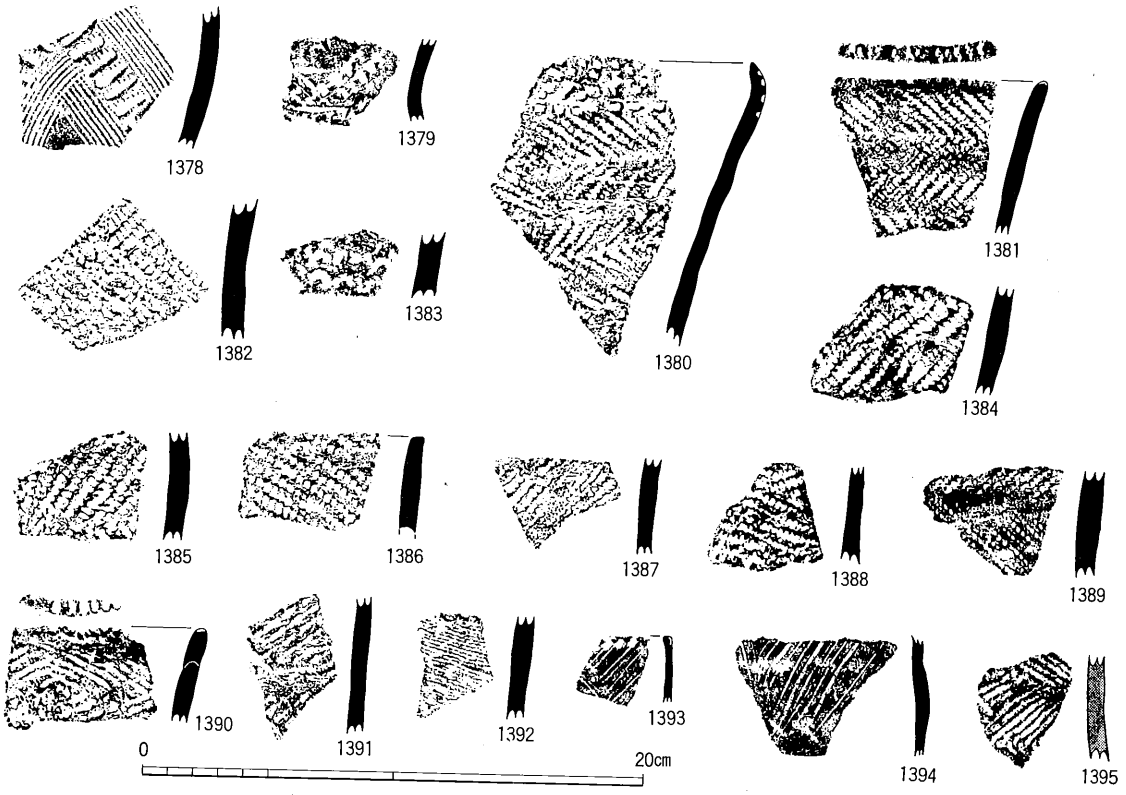


図109　17トレンチ出土土器拓影

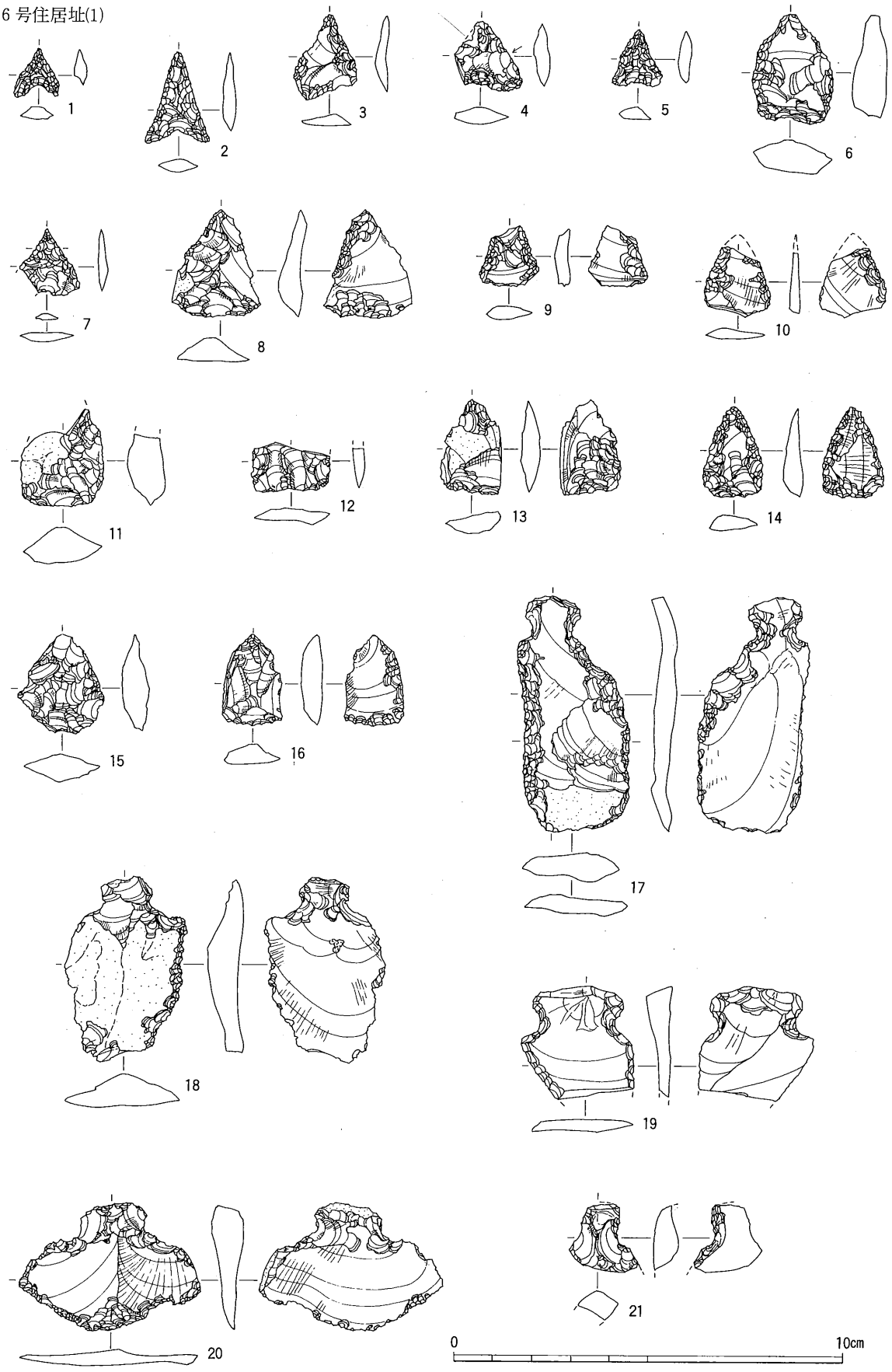


図110　6 号住居址出土石器実測図

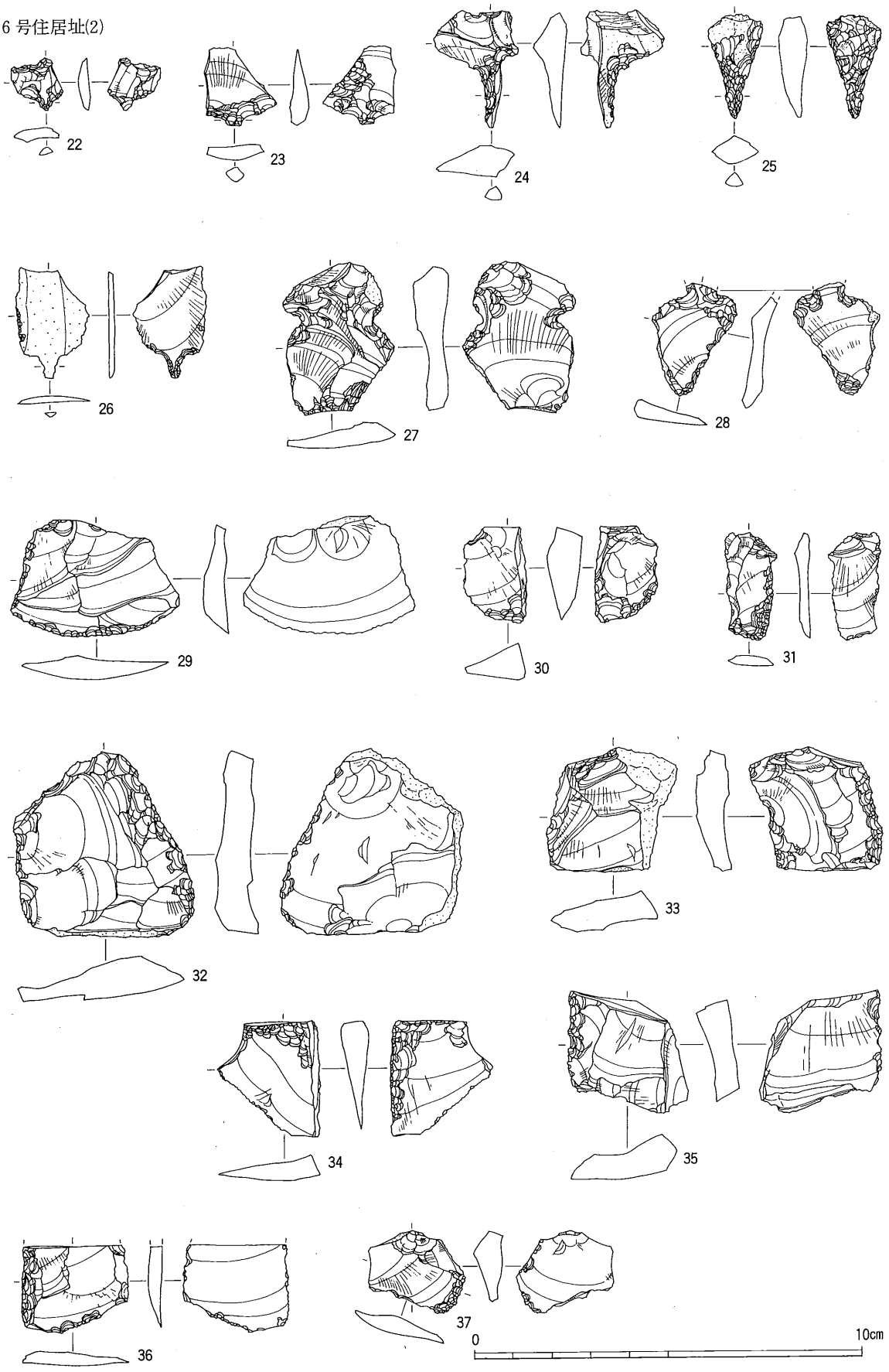


図111　6 号住居址出土石器実測図

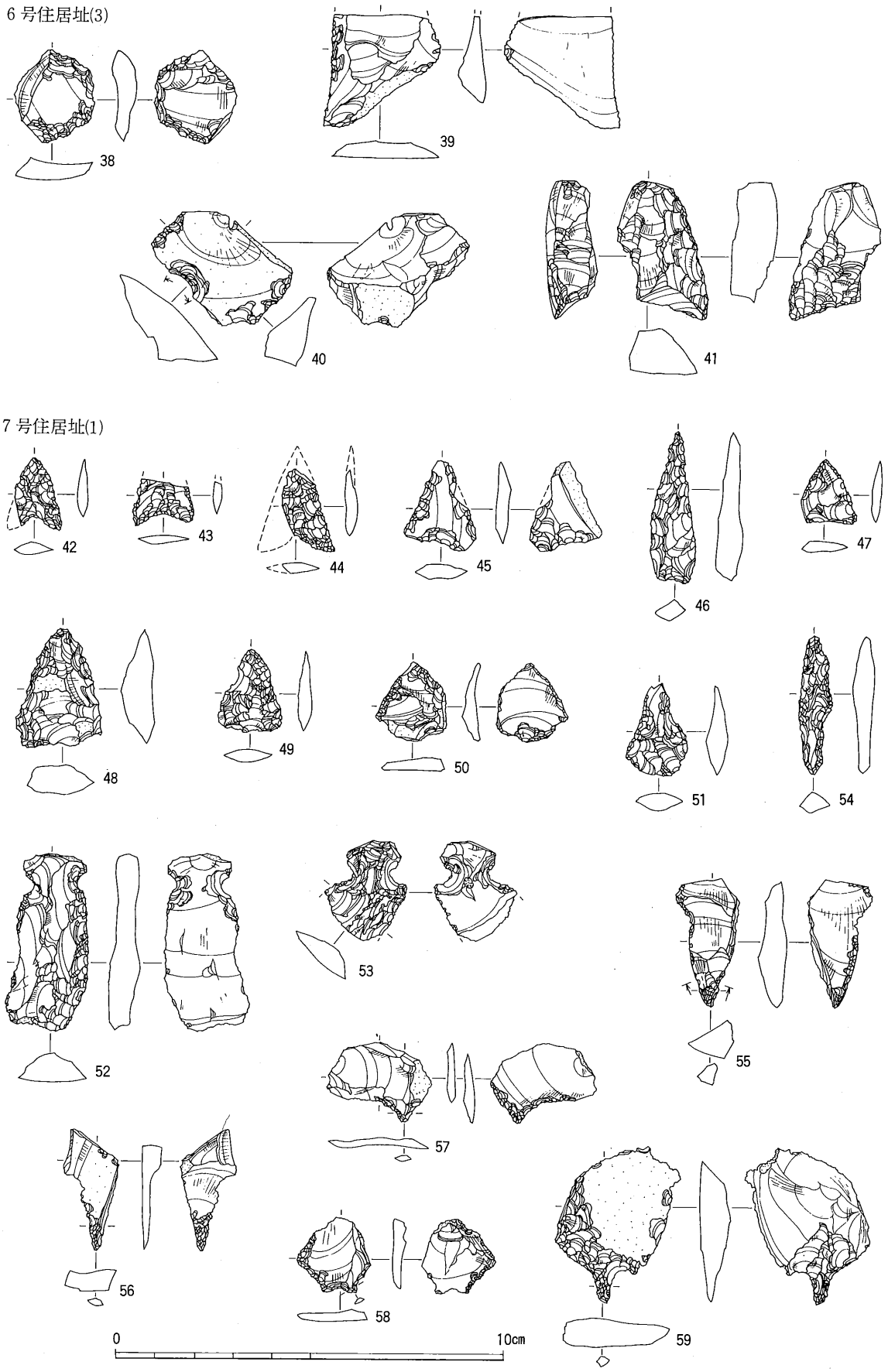
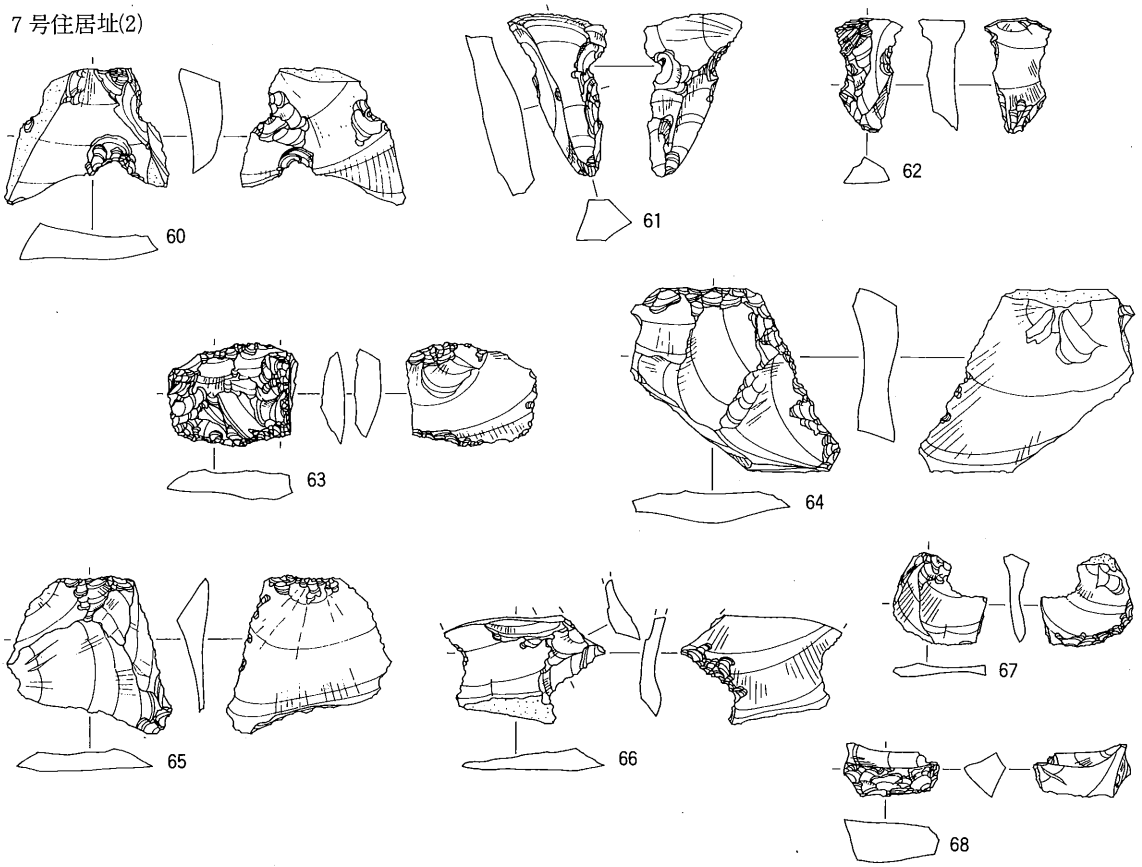


図112　6・7 号住居址出土石器実測図

7 号住居址(2)



8 号住居址(1)

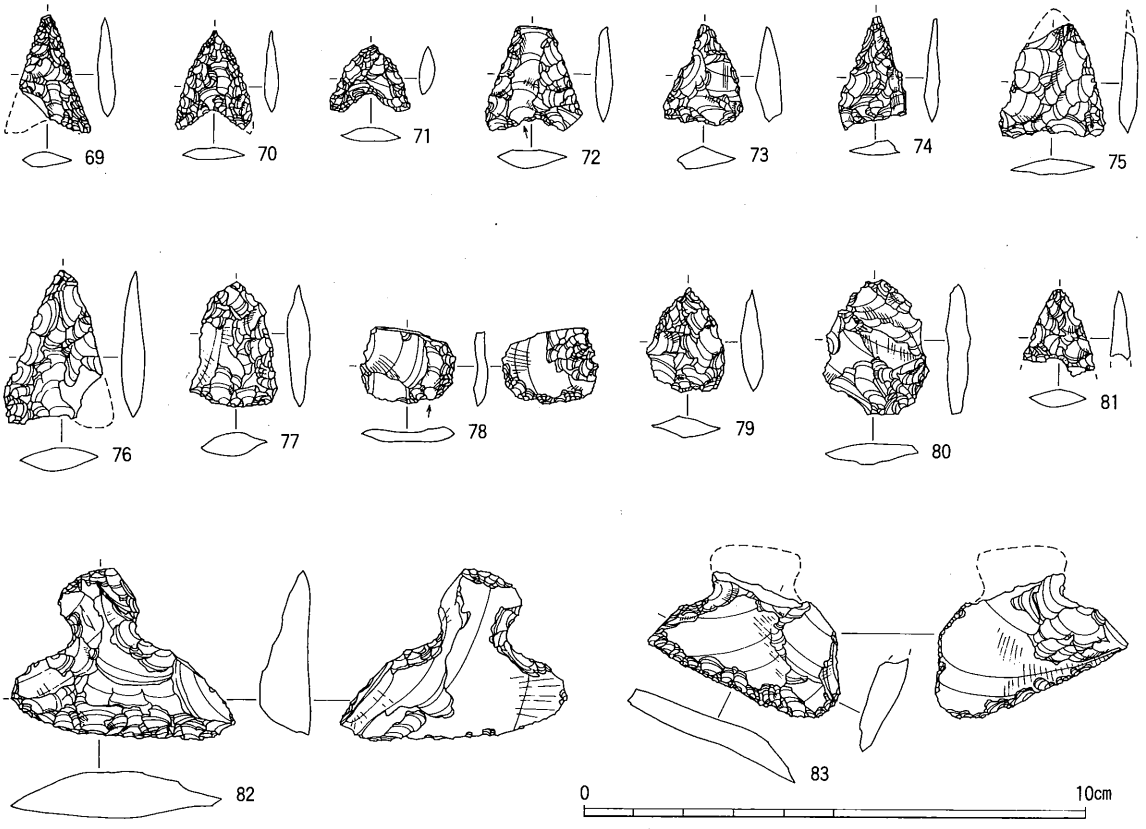
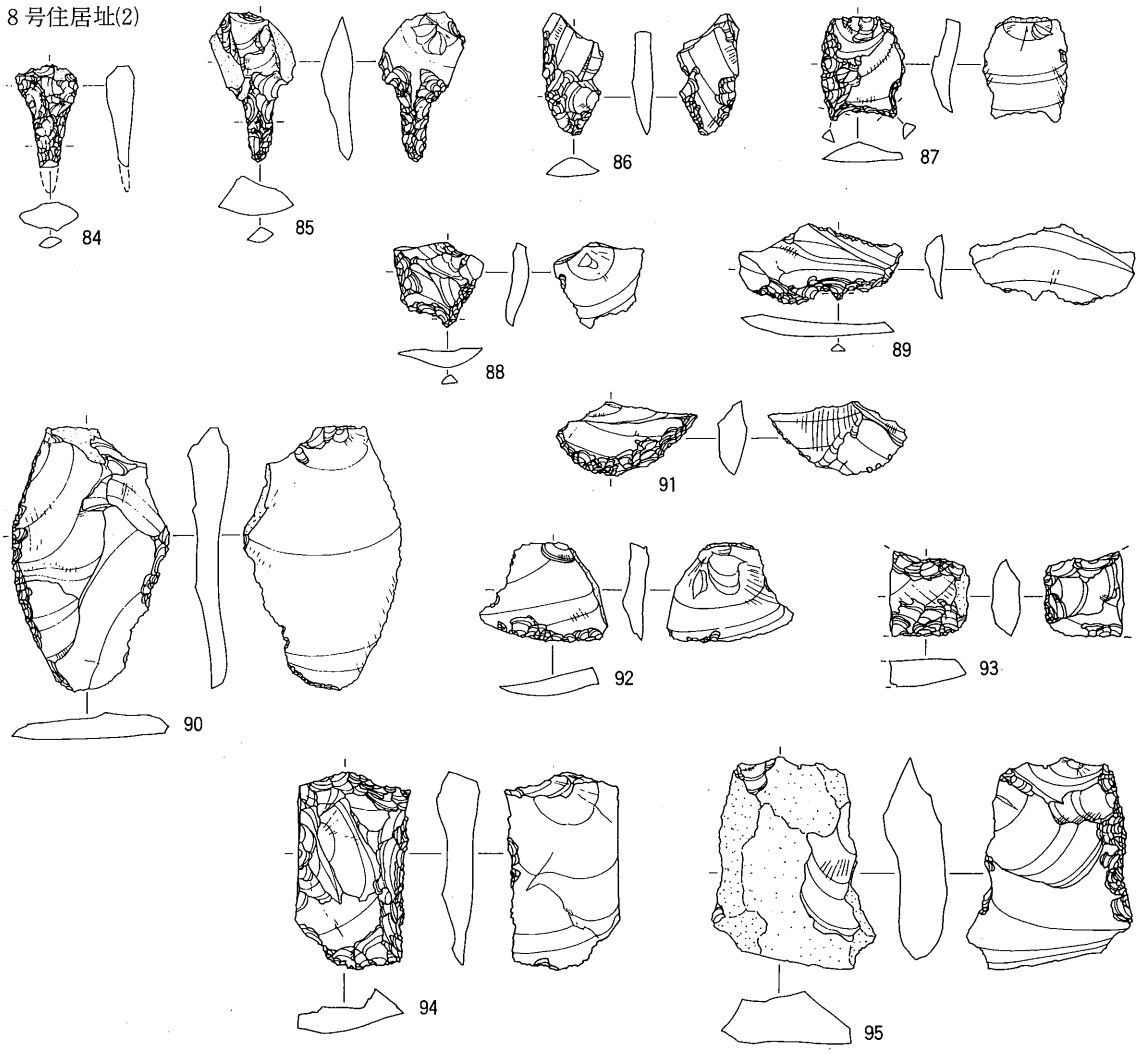


図113　7・8 号住居址出土石器実測図

8号住居址(2)



9号住居址(1)

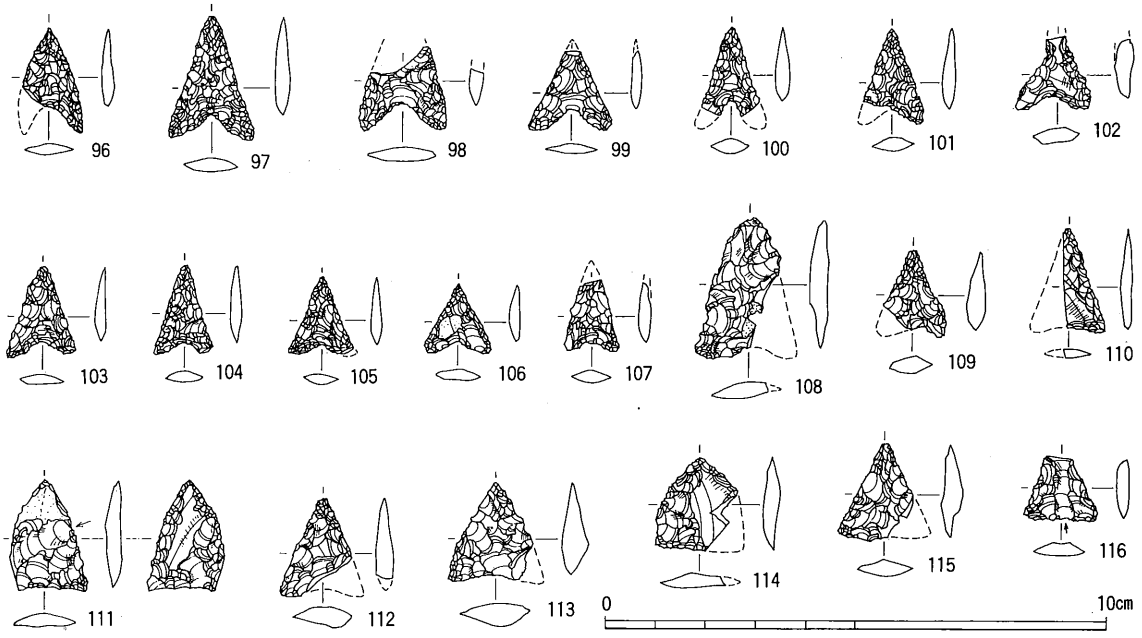


図114　8・9号住居址出土石器実測図

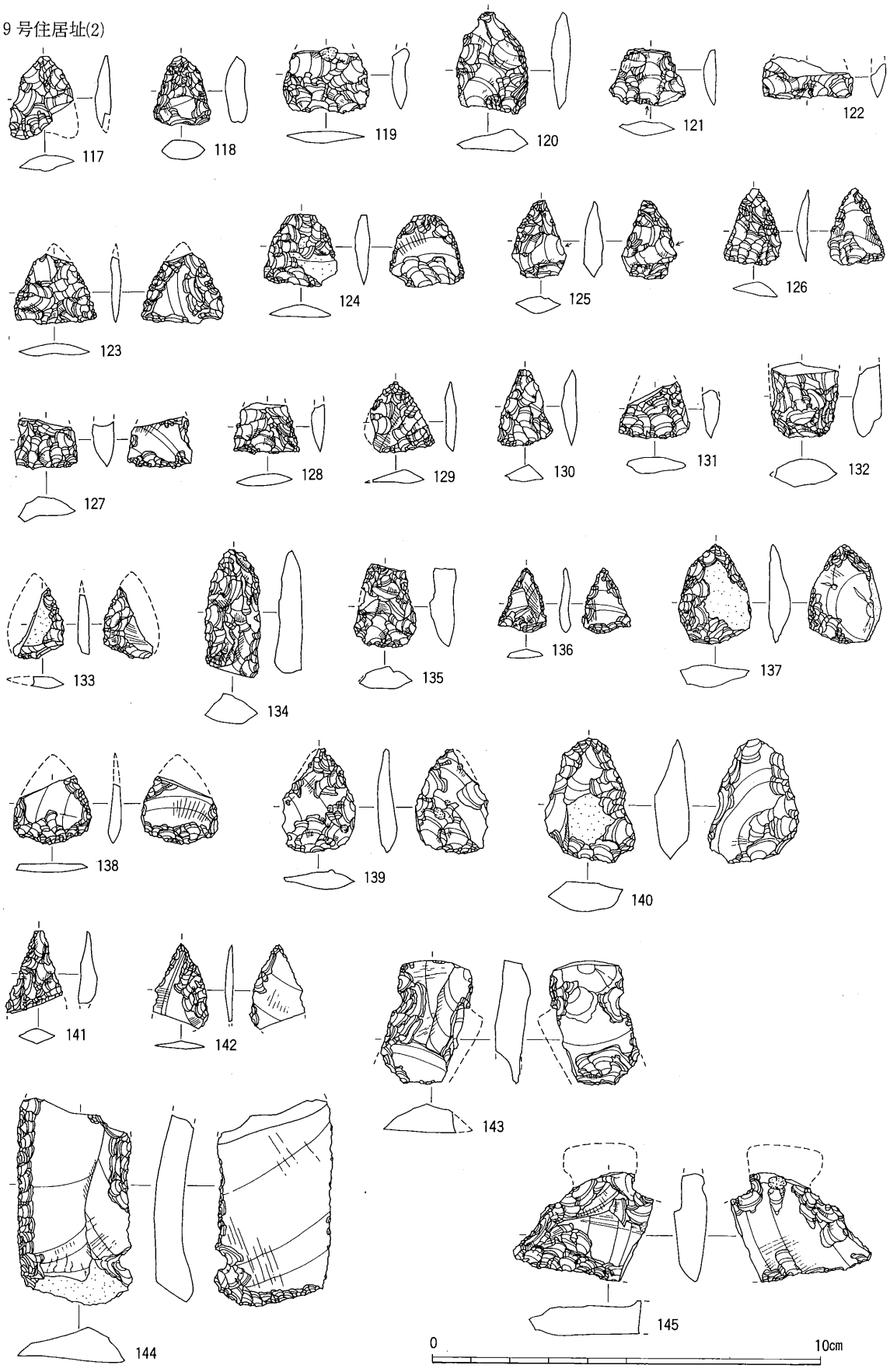


図115　9 号住居址出土石器実測図

9 号住居址(3)

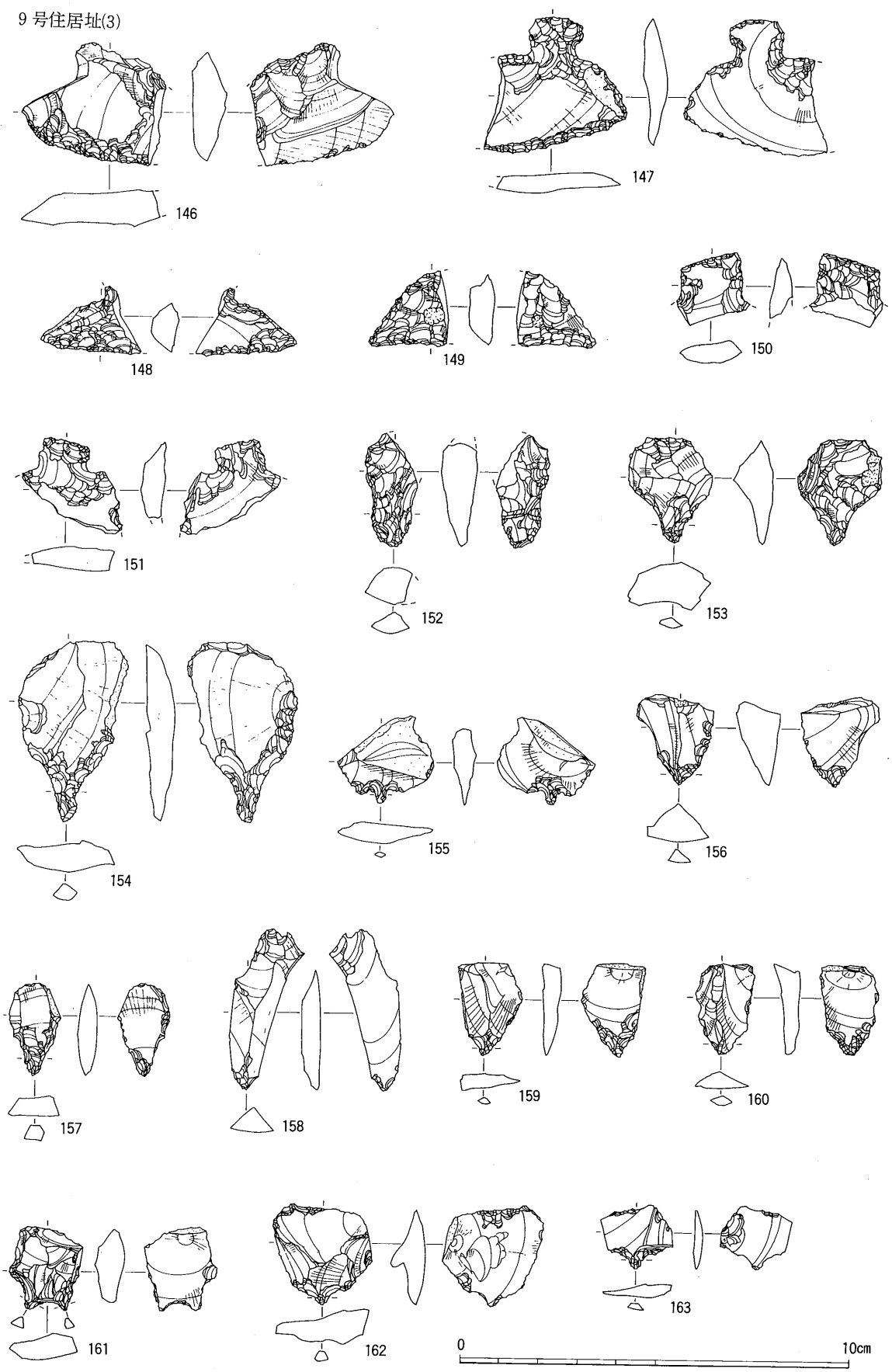


図116　9 号住居址出土石器実測図

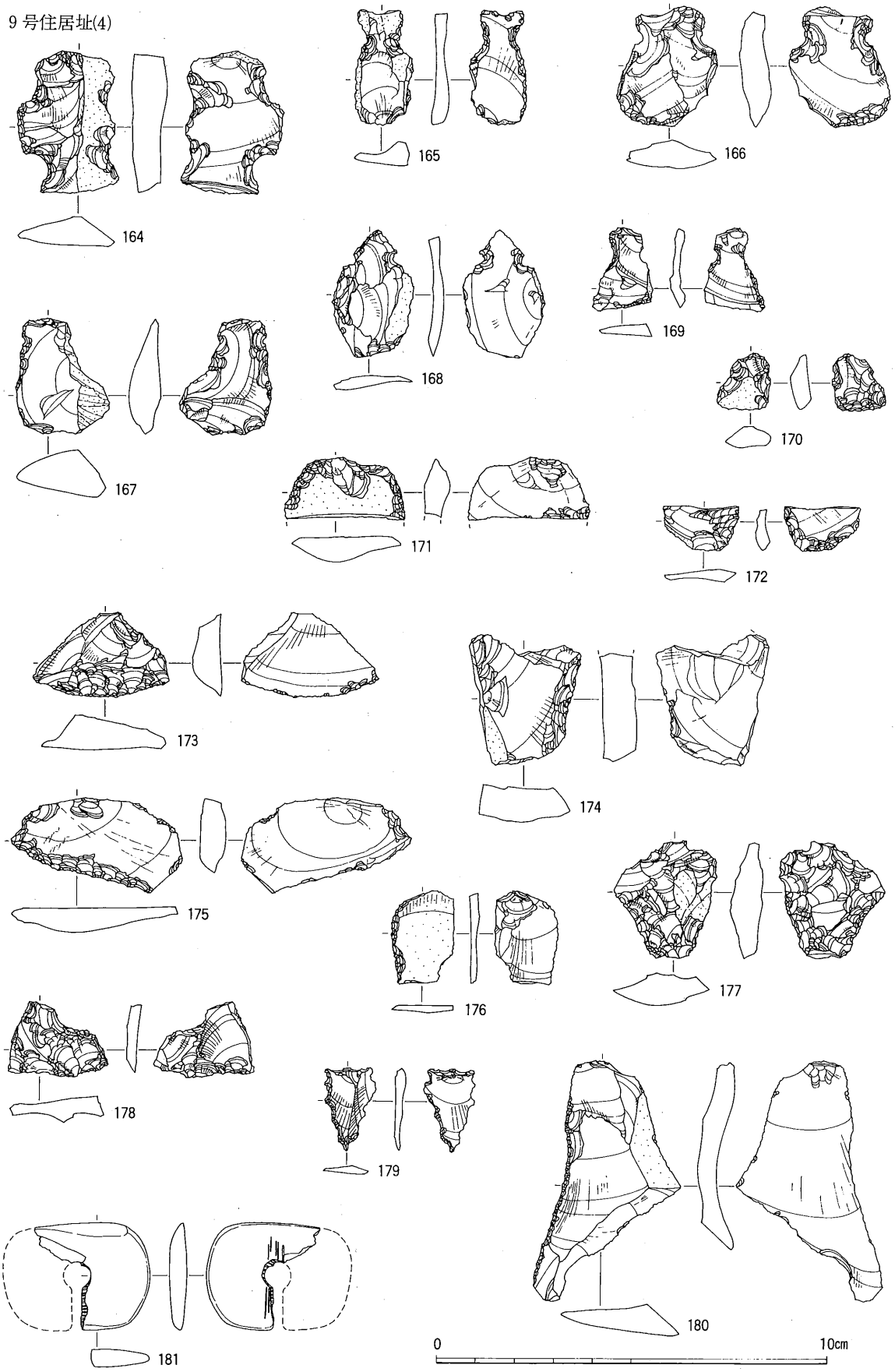


図117　9 号住居址出土石器実測図

10号住居址(1)

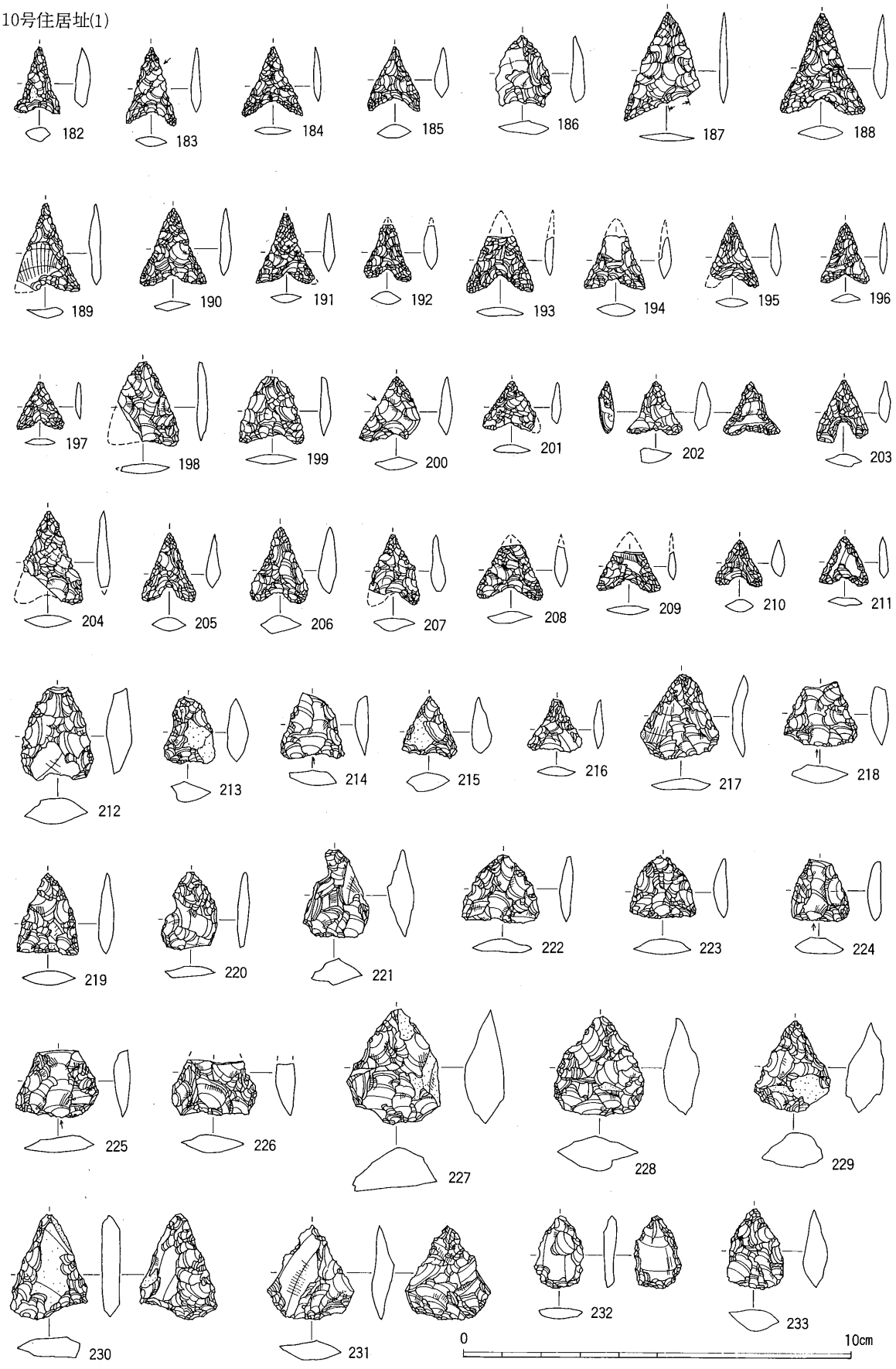


図118　10号住居址出土石器実測図

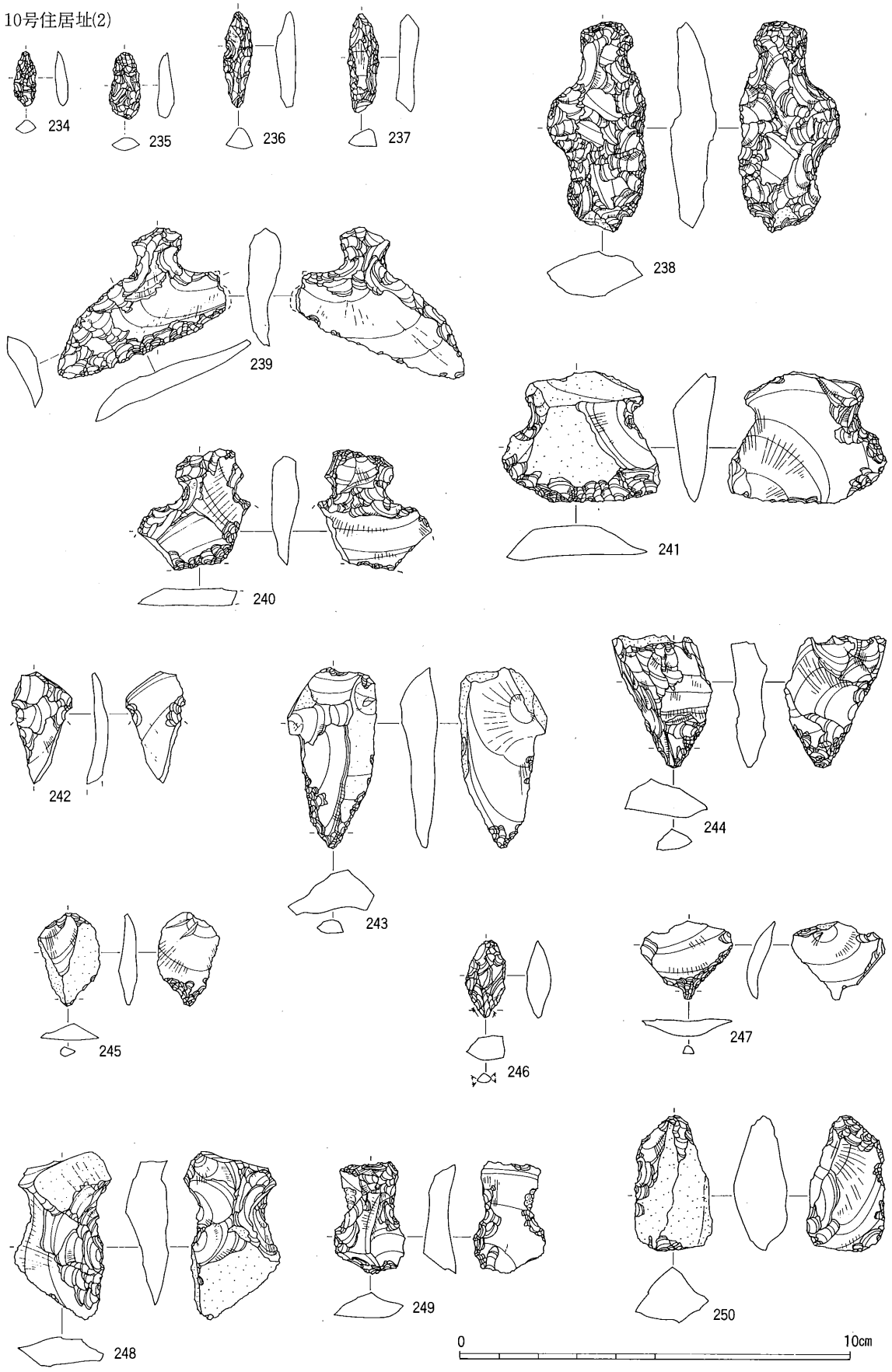


図119　10号住居址出土石器実測図

10号住居址(3)

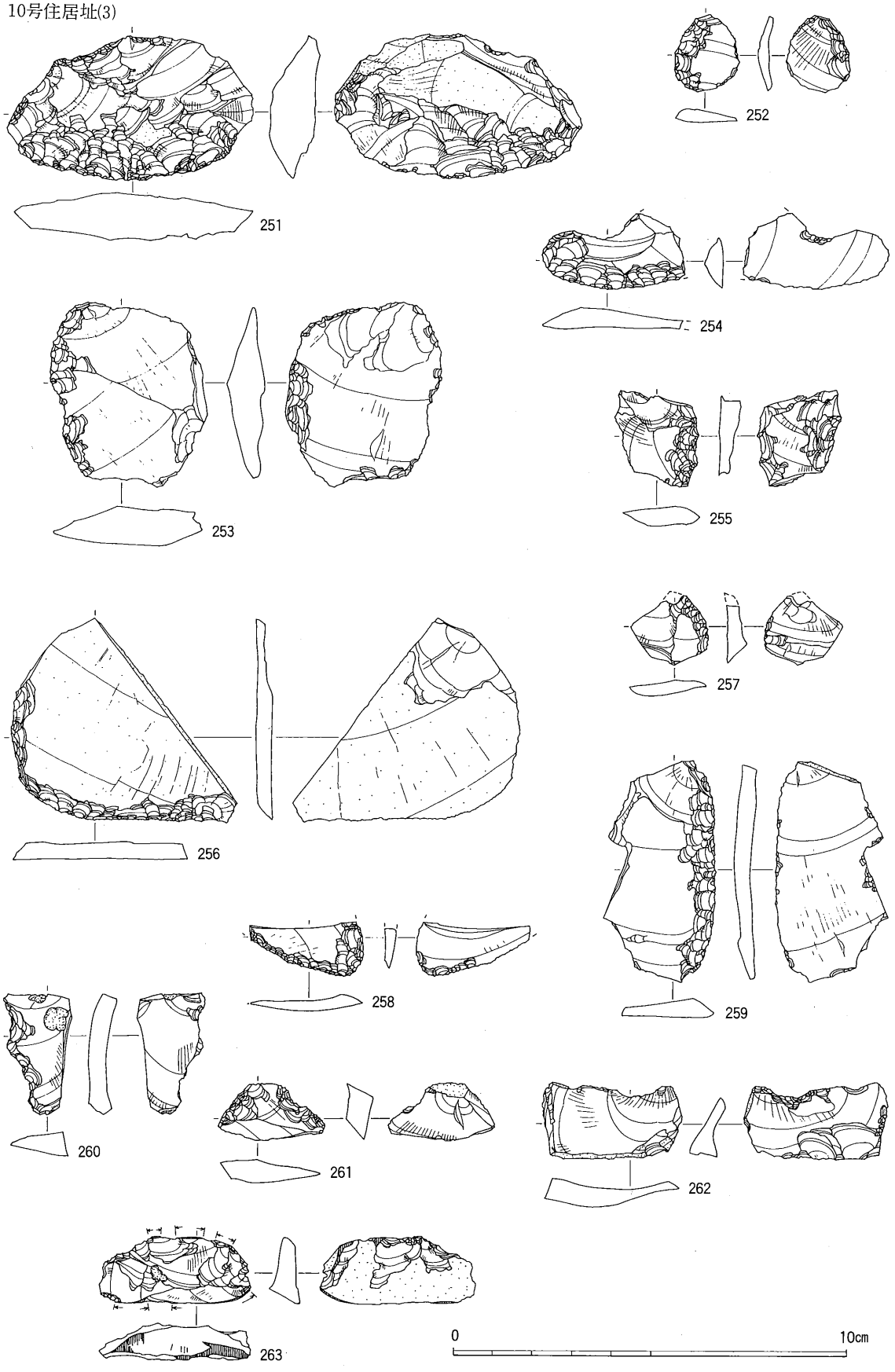


図120　10号住居址出土石器実測図

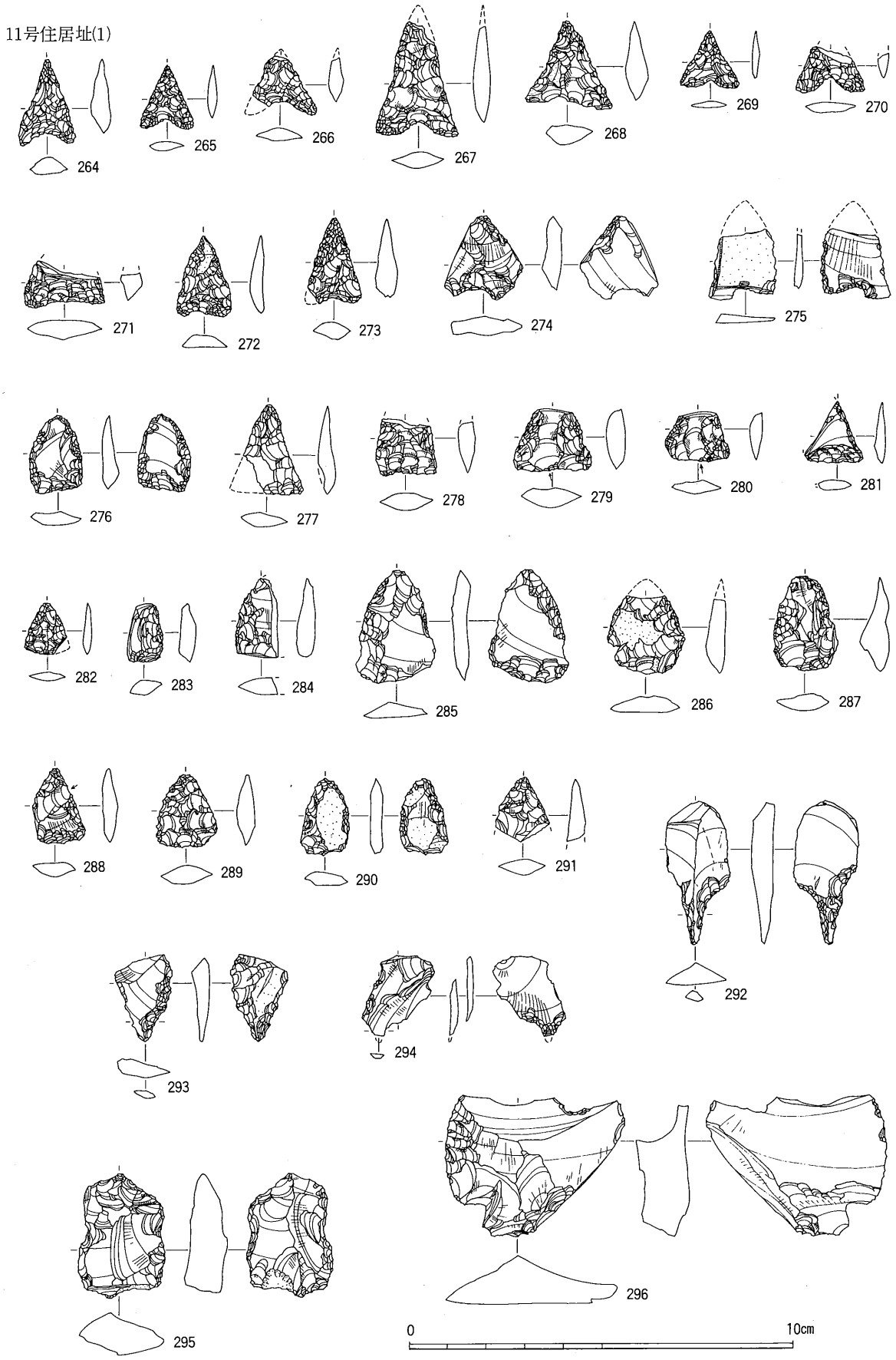


図121　11号住居址出土石器実測図

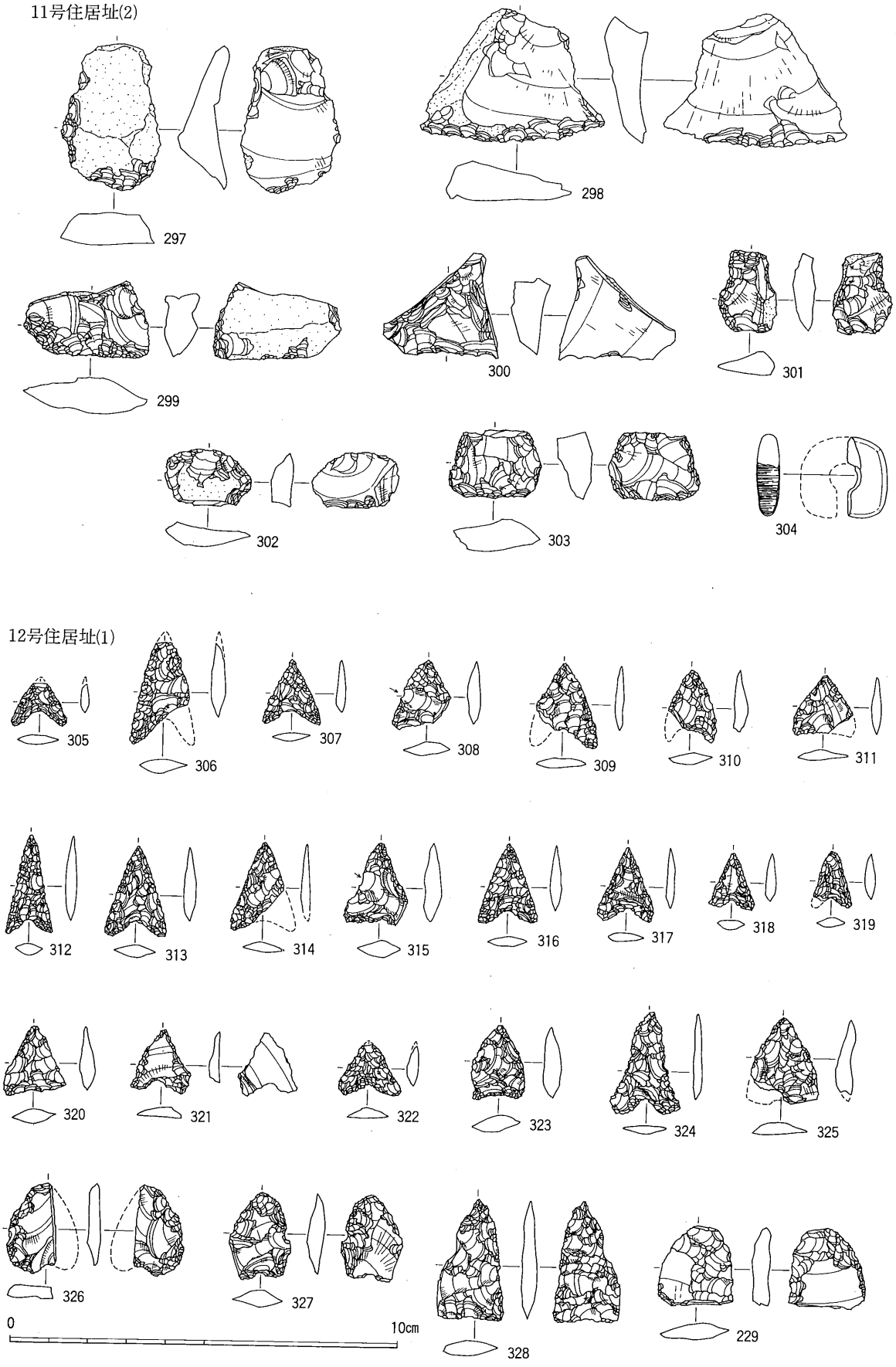


図122　11・12号住居址出土石器実測図

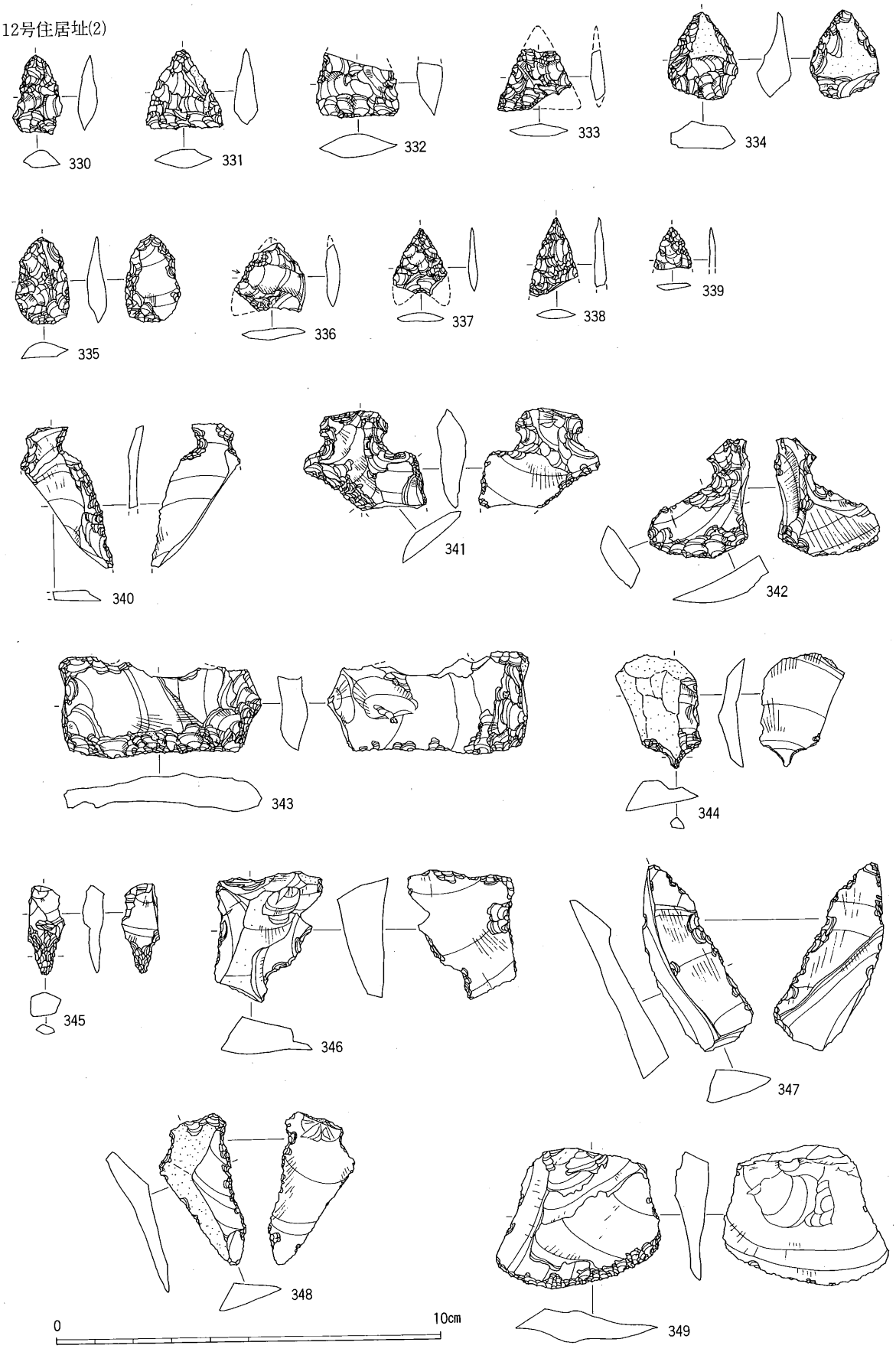
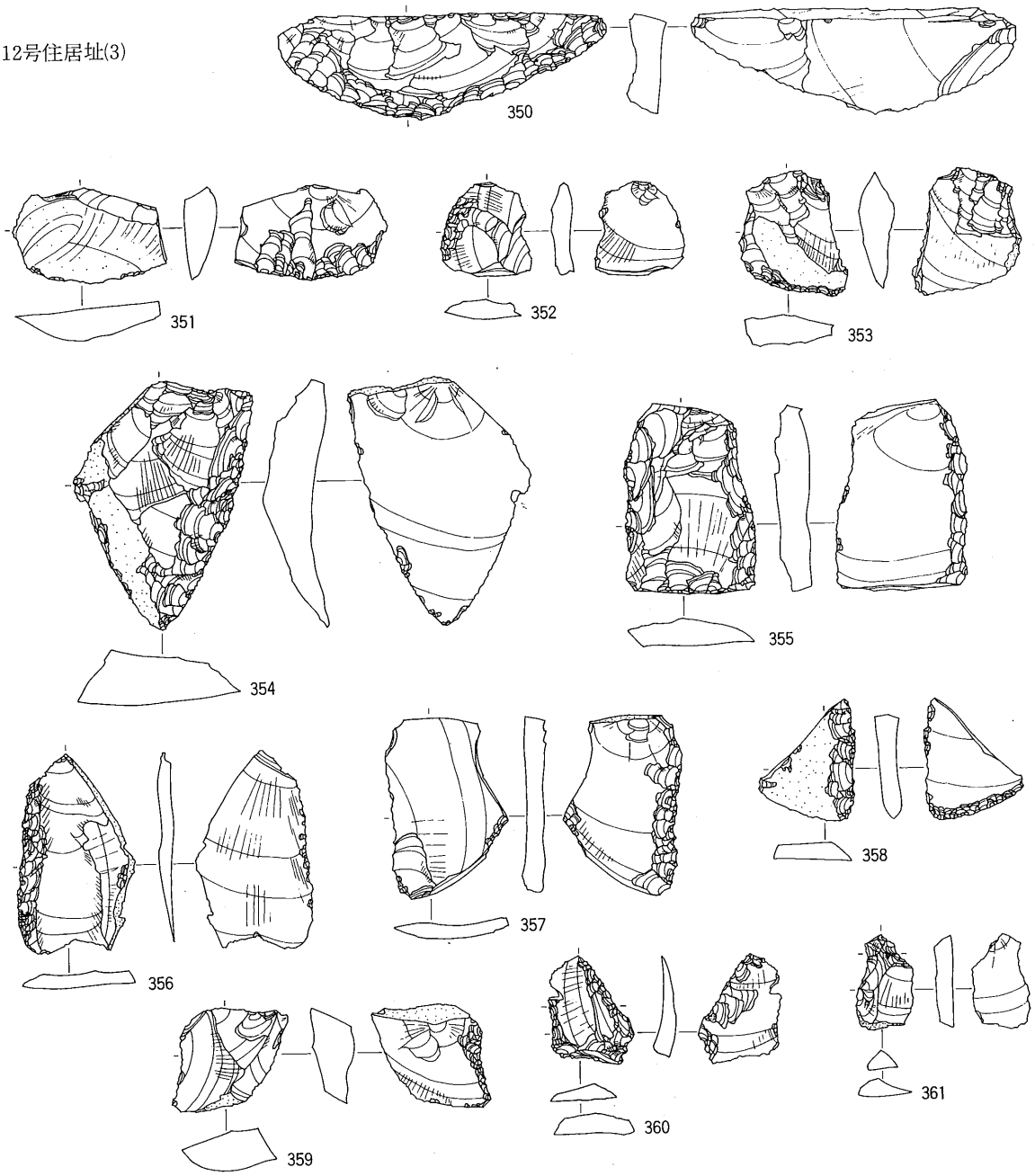


図123　12号住居址出土石器実測図

12号住居址(3)



13号住居址(1)

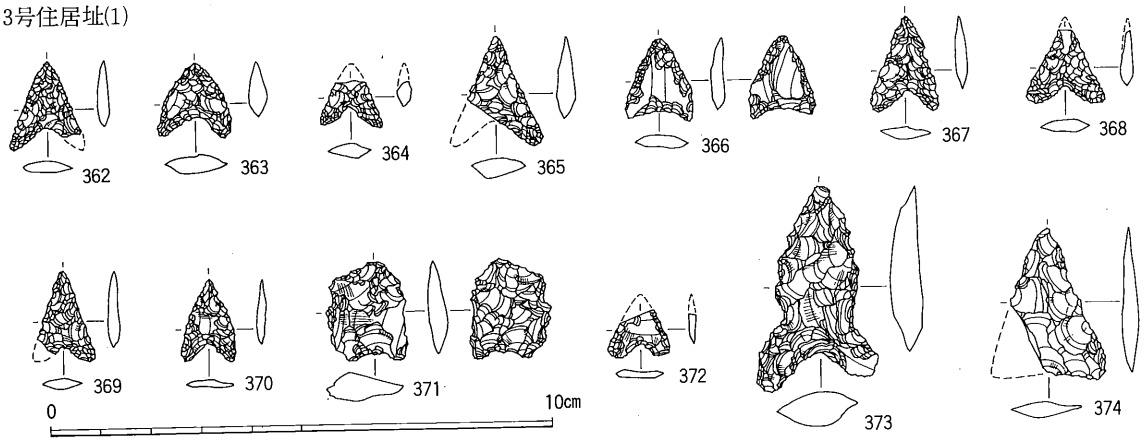


図124　12・13号住居址出土石器実測図

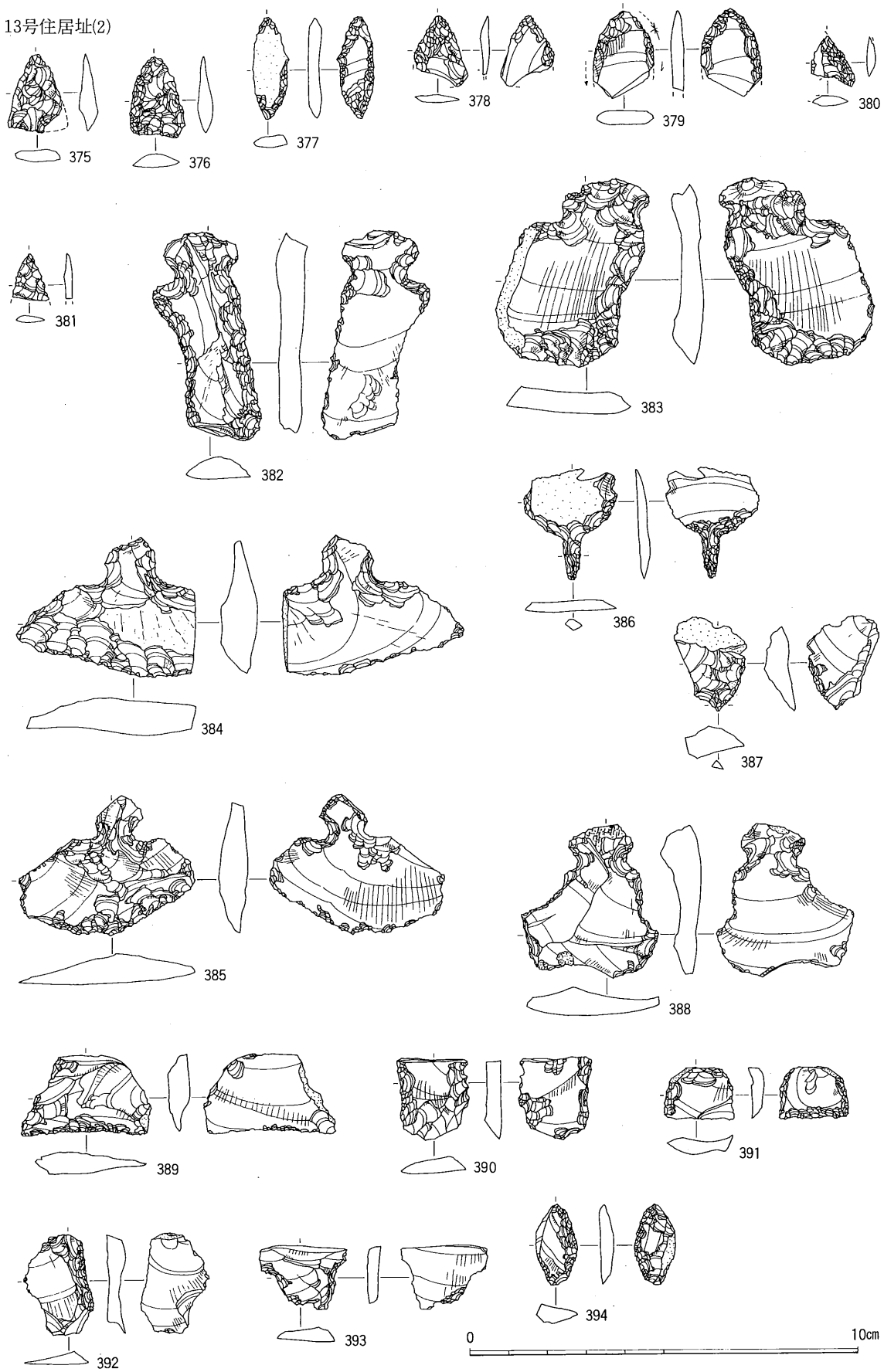


図125　13号住居址出土石器実測図

14・23号住居址

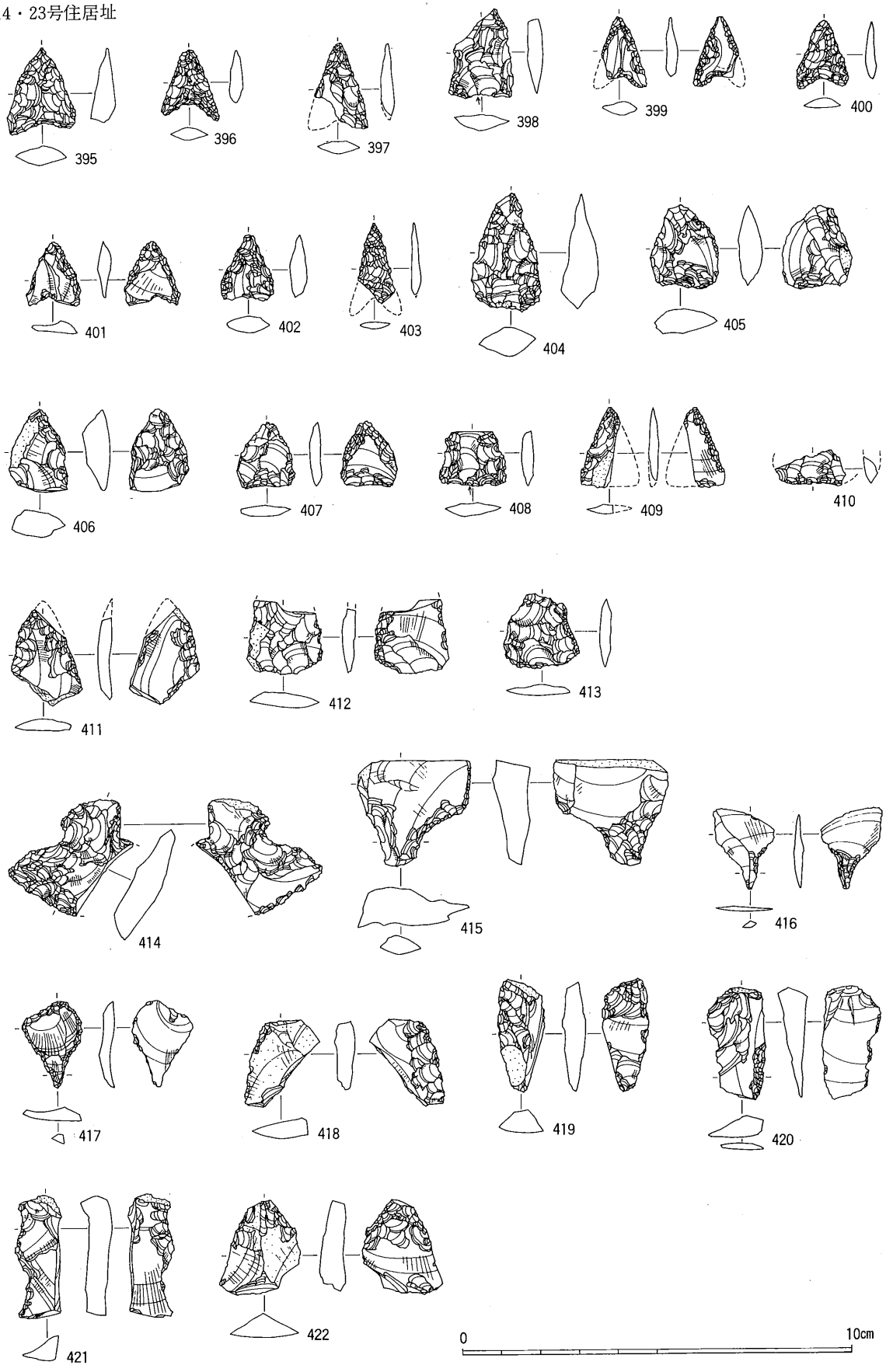


図126　14・23号住居址出土石器実測図

14号住居址(1)

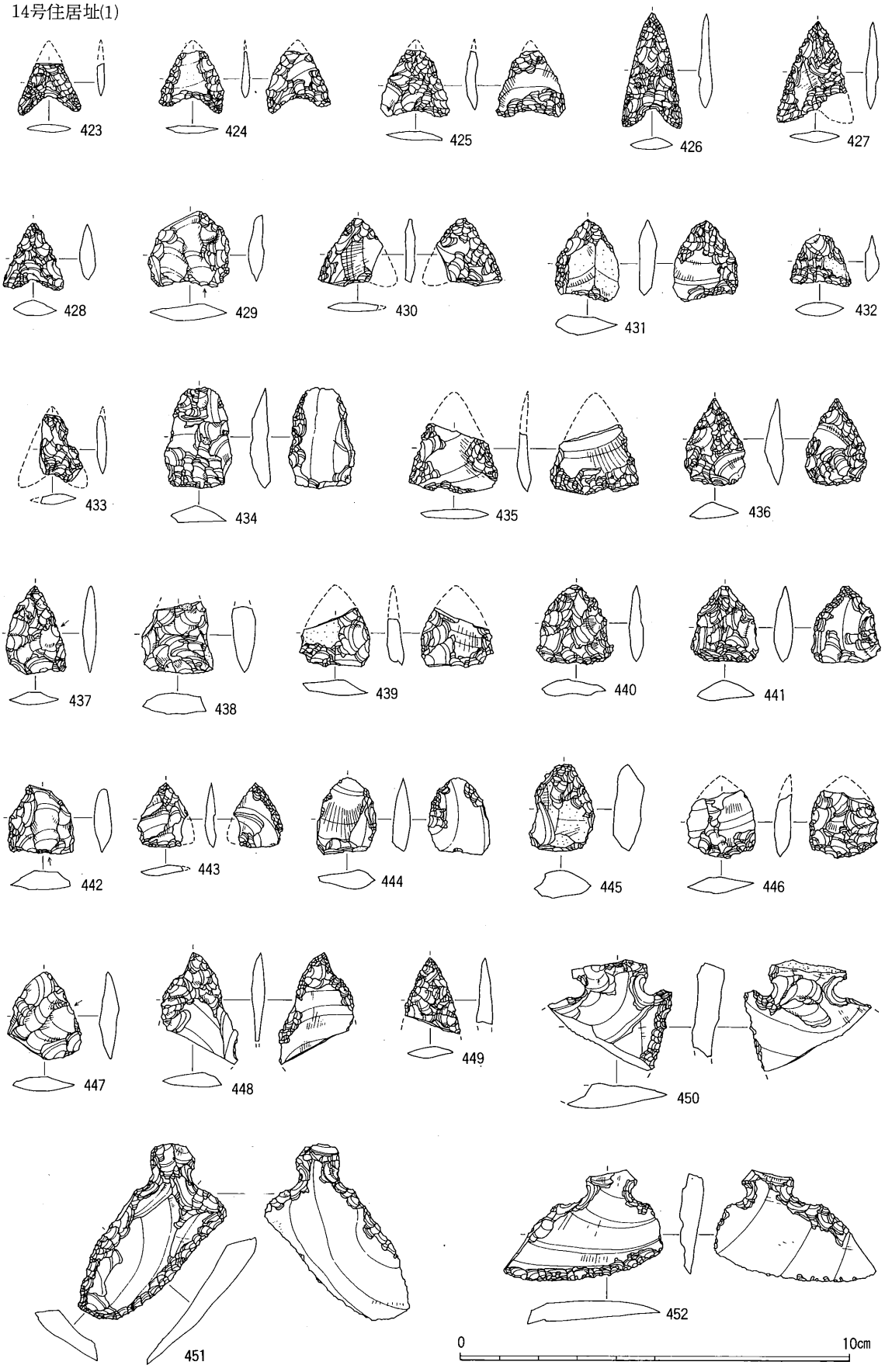
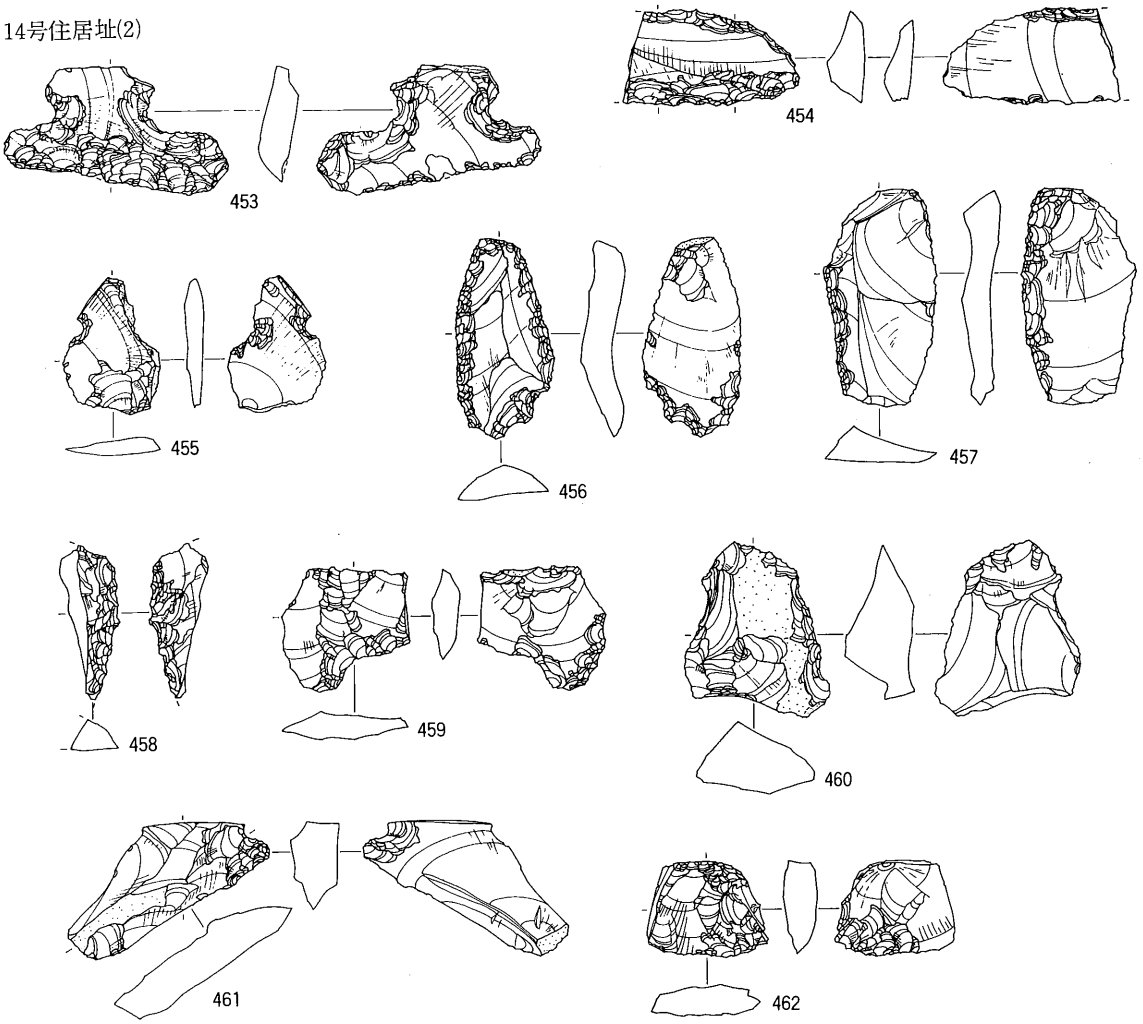


図127　14号住居址出土石器実測図

14号住居址(2)



17号住居址(1)

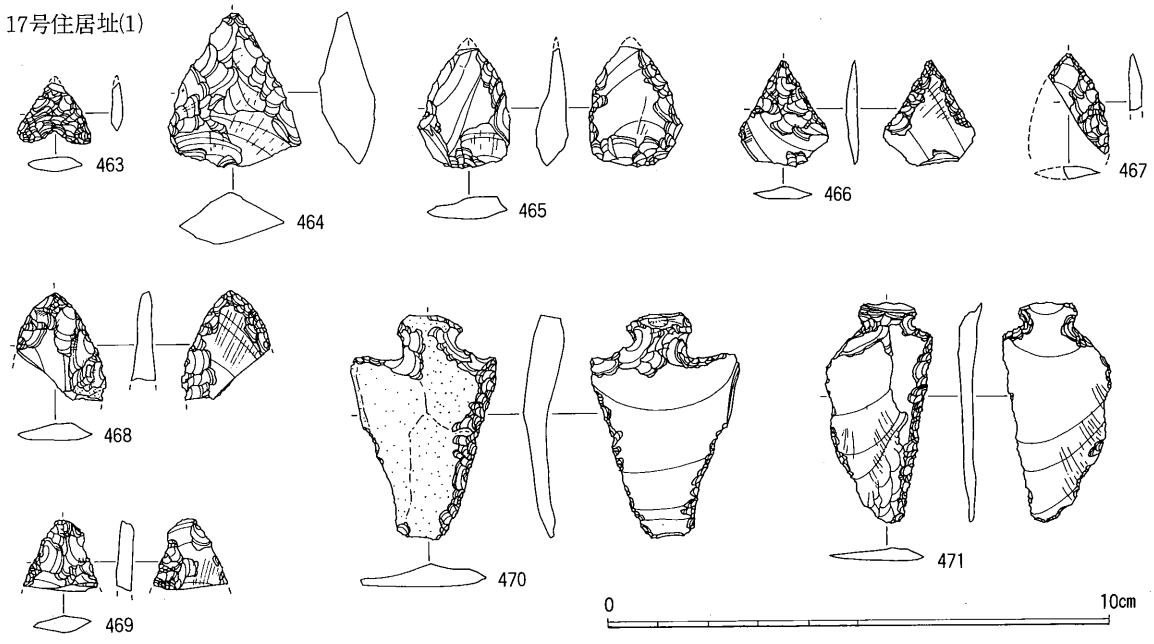


図128　14・17号住居址出土石器実測図

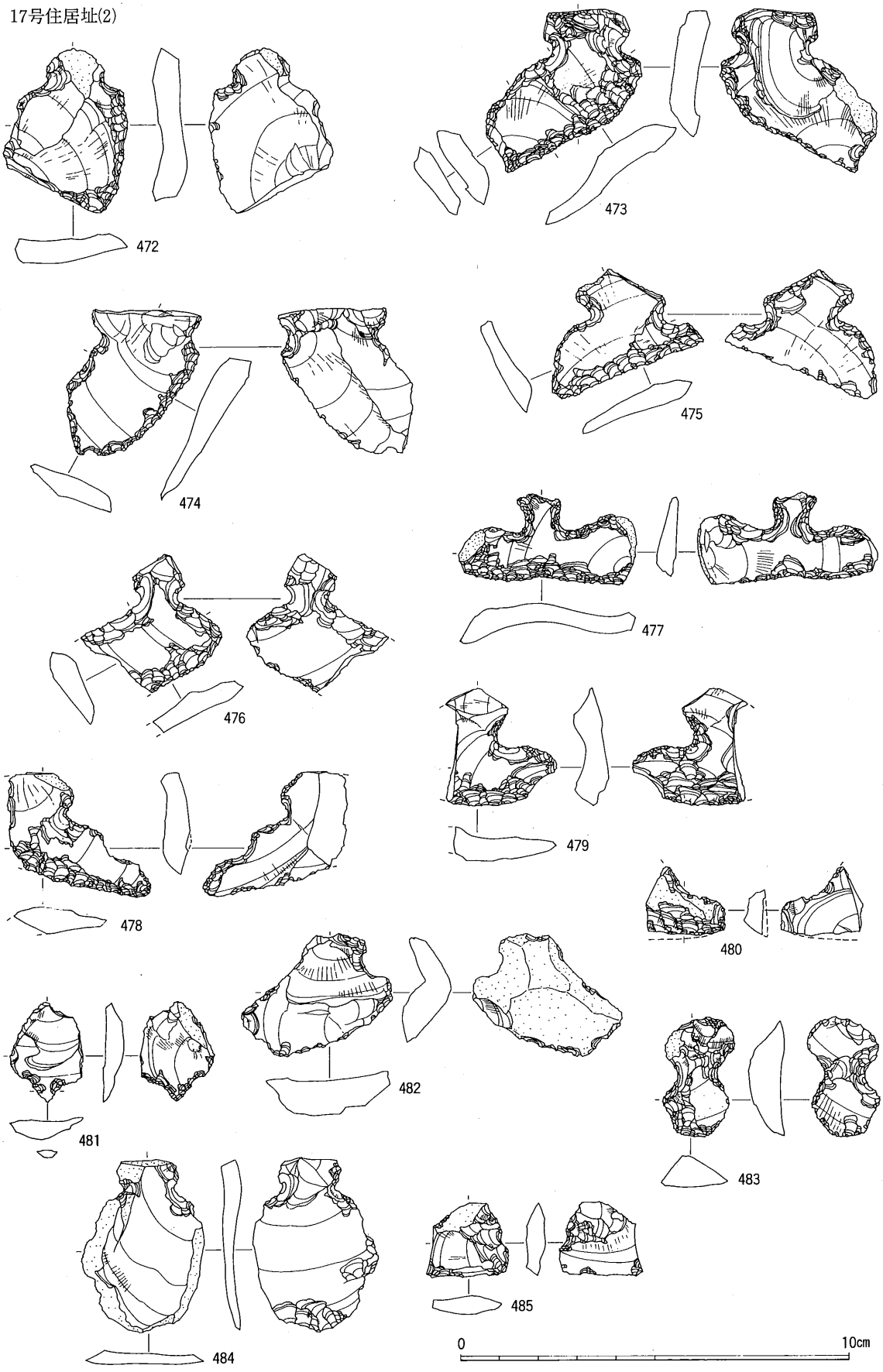


図129　17号住居址出土石器実測図

図130　17・18号住居址出土石器実測図

18号住居址(2)

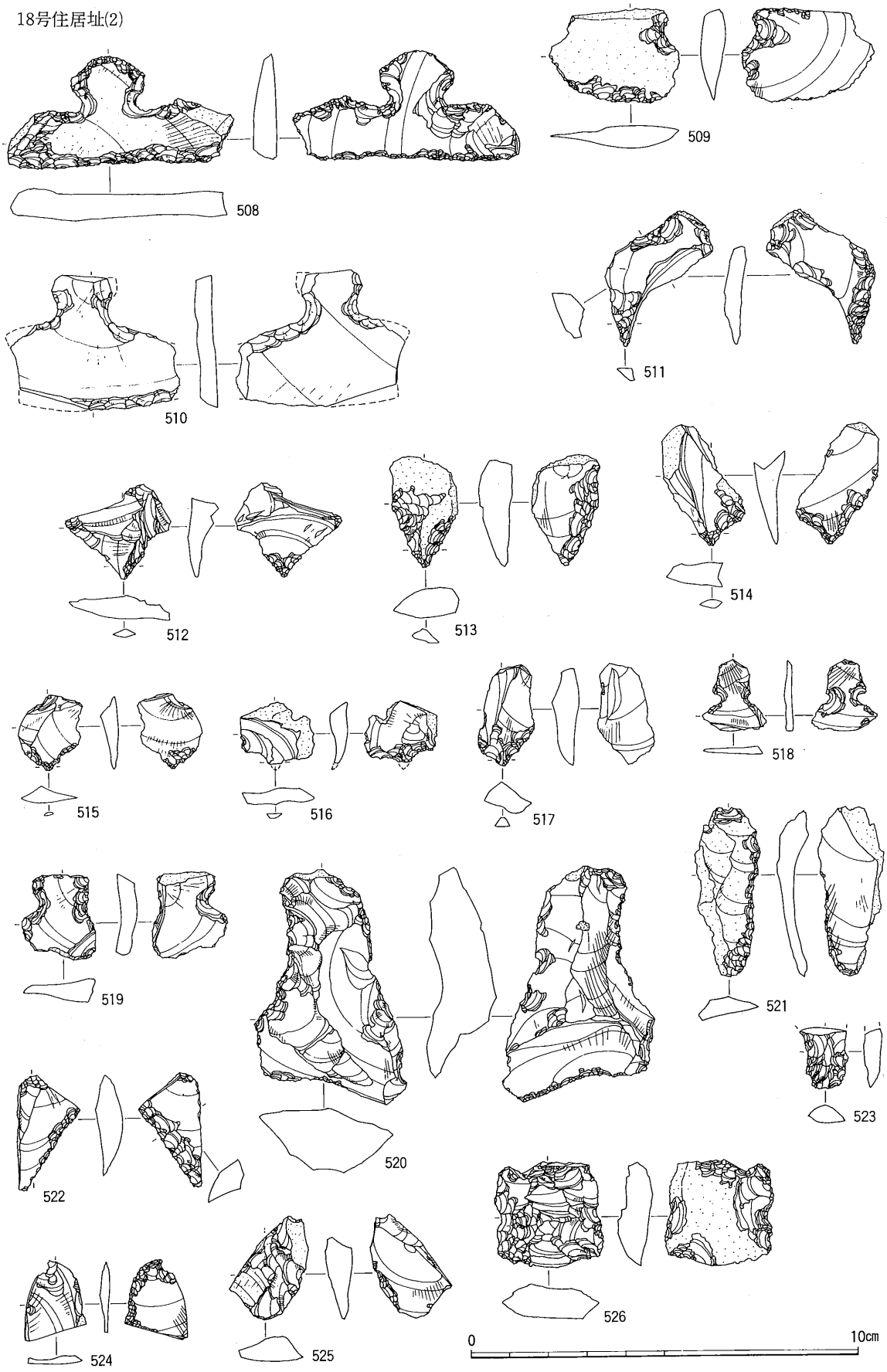
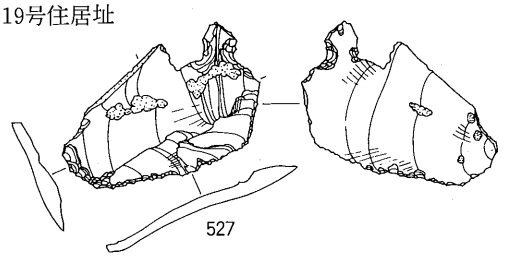
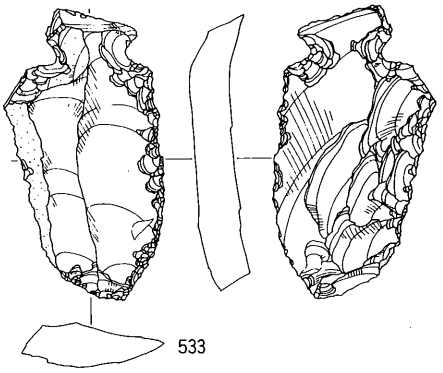


図131　18号住居址出土石器実測図

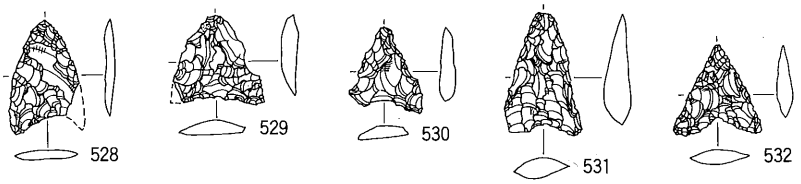
19号住居址



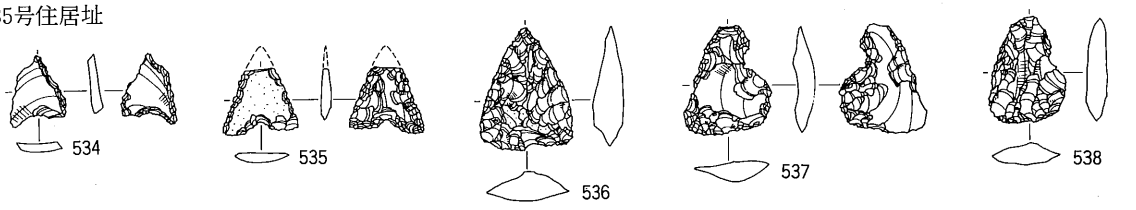
24号住居址

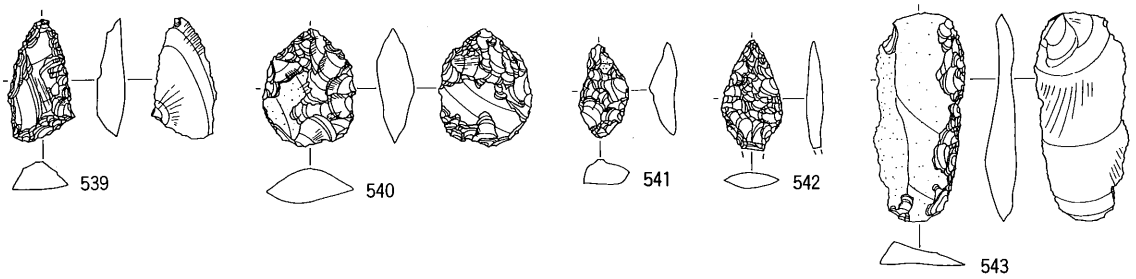


23号住居址

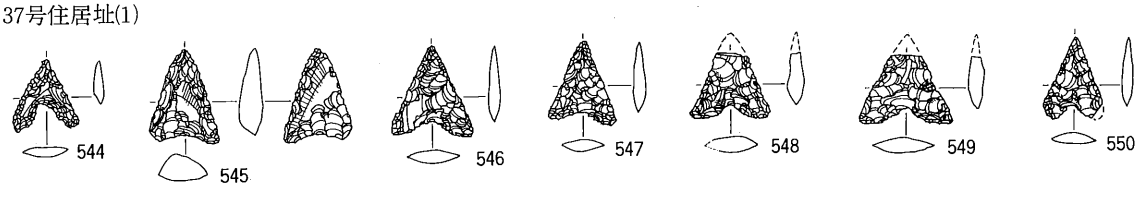


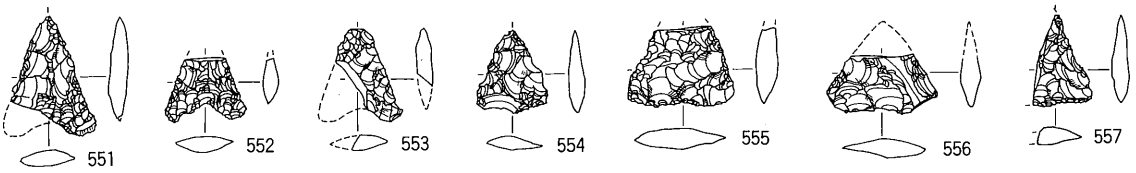
35号住居址





37号住居址(1)





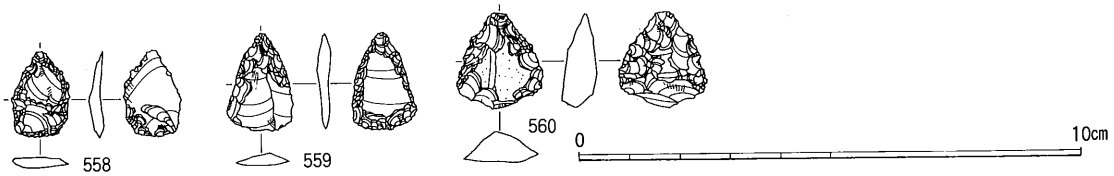


図132　19・23・24・35・37号住居址出土石器実測図

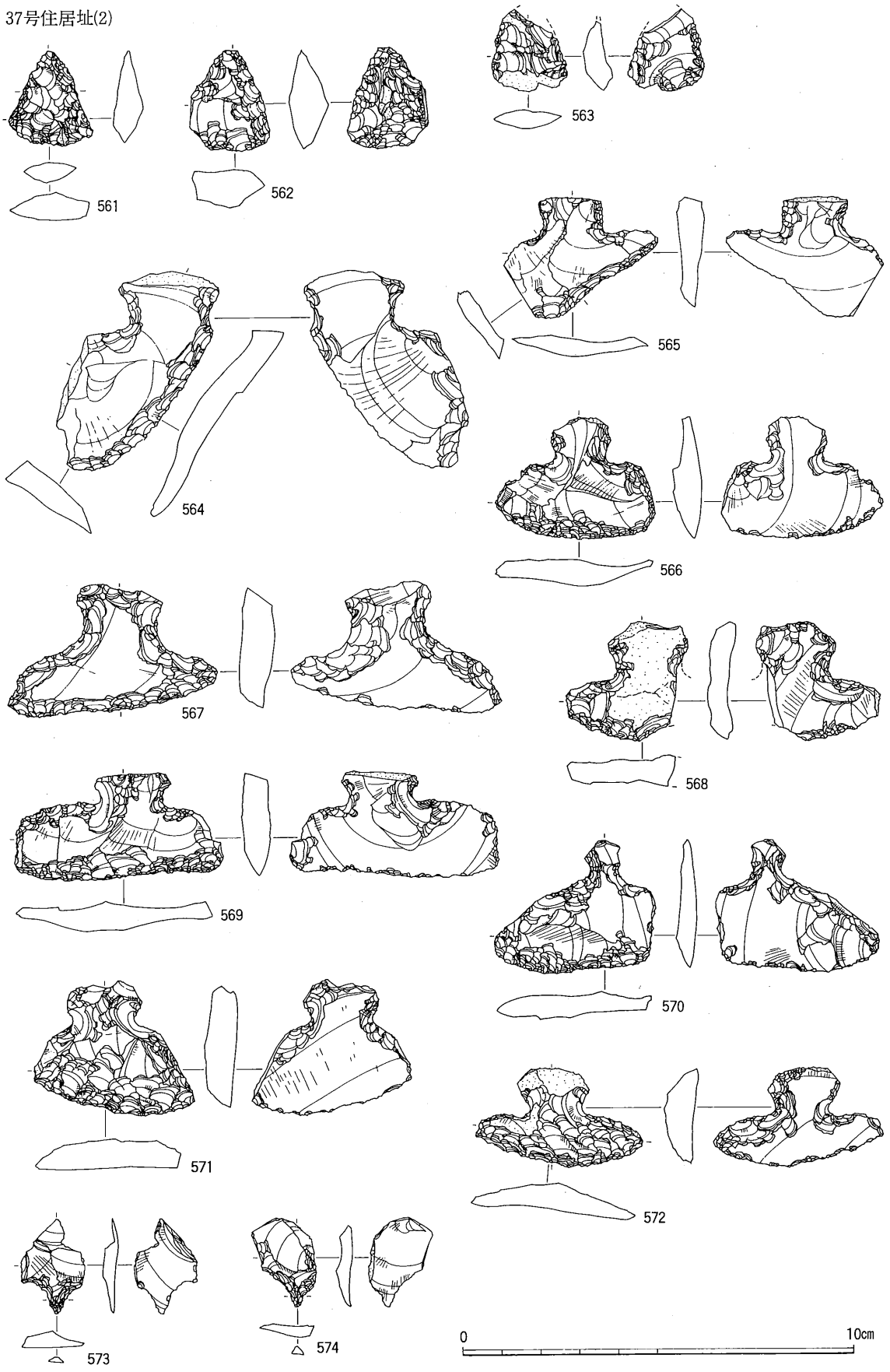
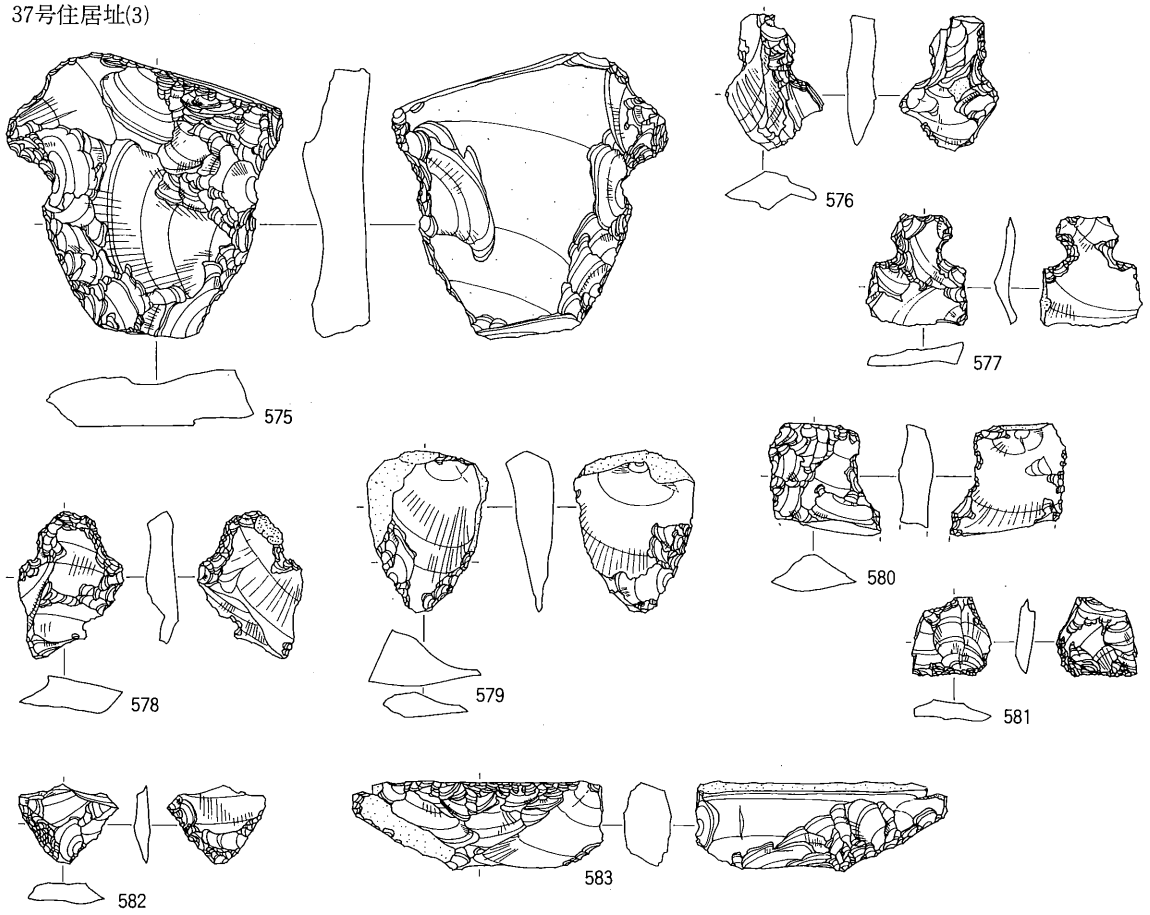
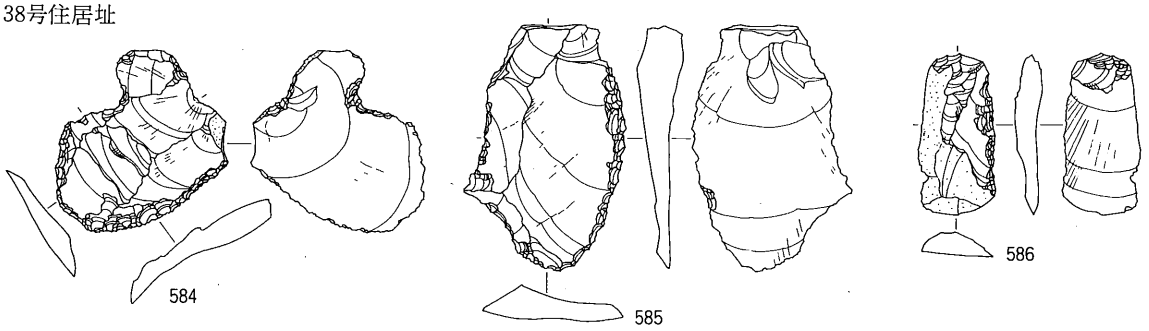


図133　37号住居址出土石器実測図

37号住居址(3)



38号住居址



47号住居址(1)

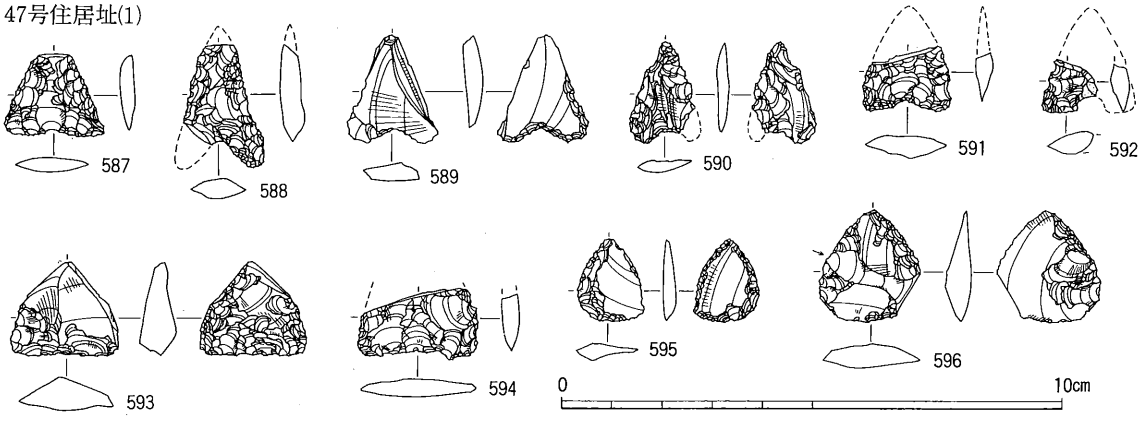
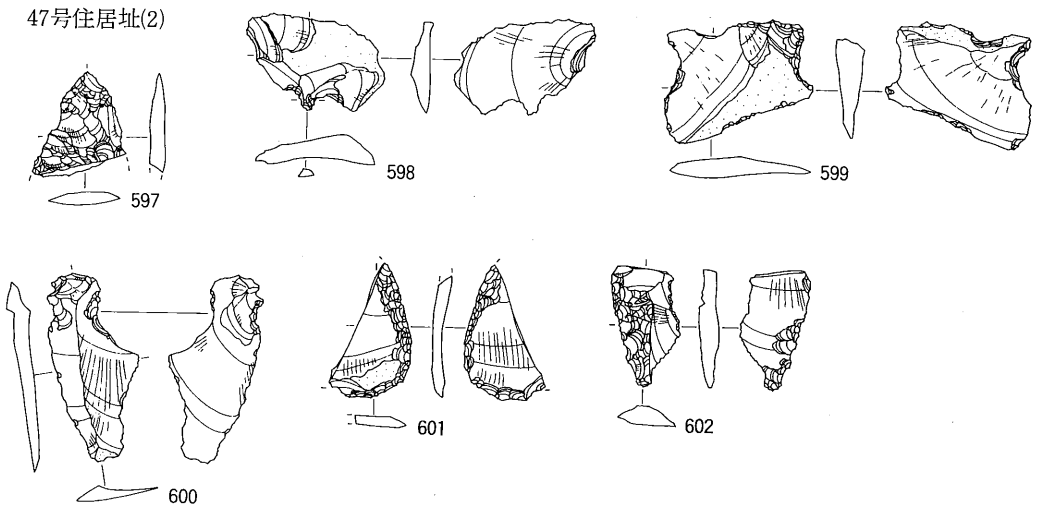


図134　37・38・42・47号住居址出土石器実測図

47号住居址(2)



48号住居址(1)

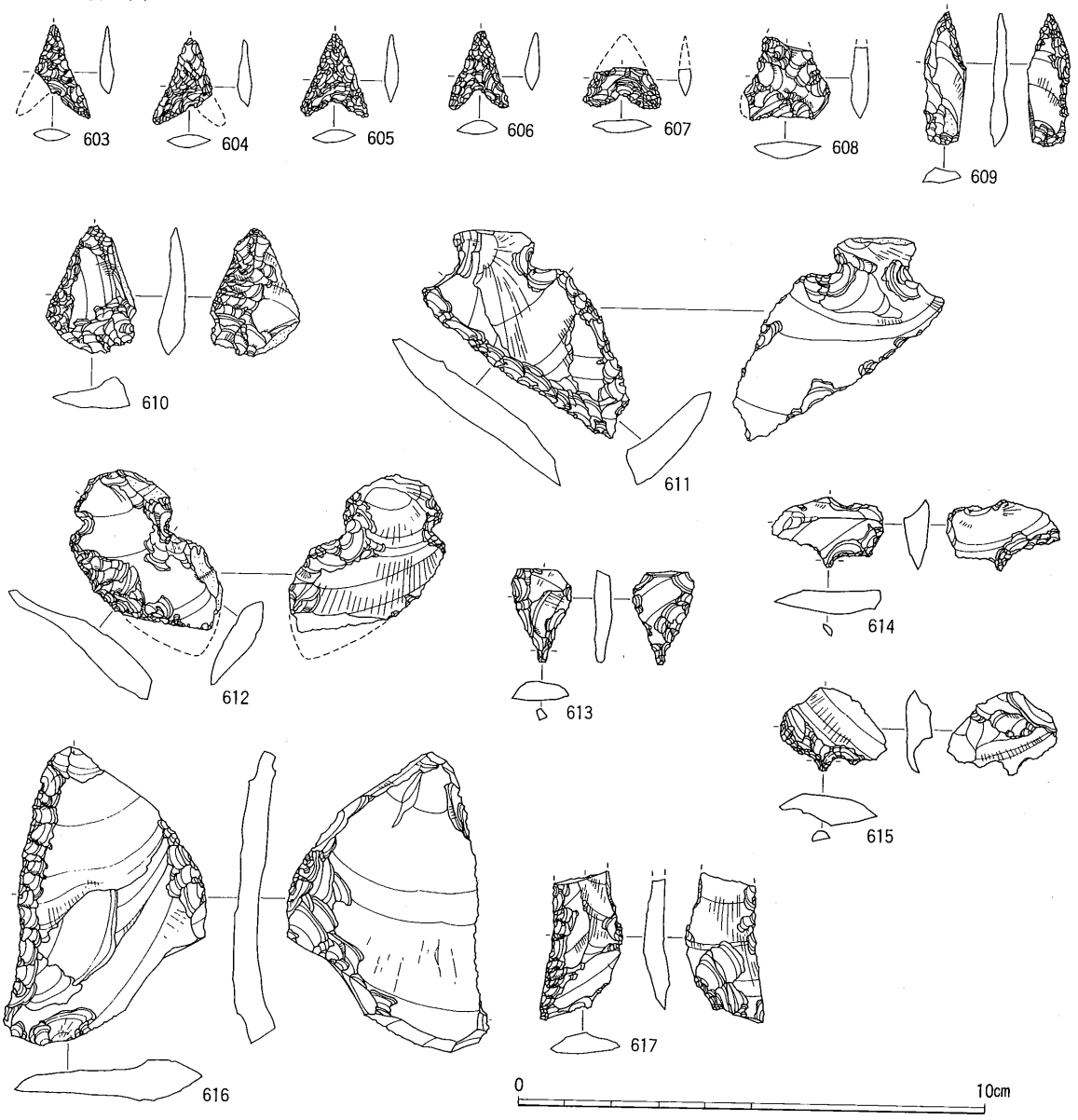
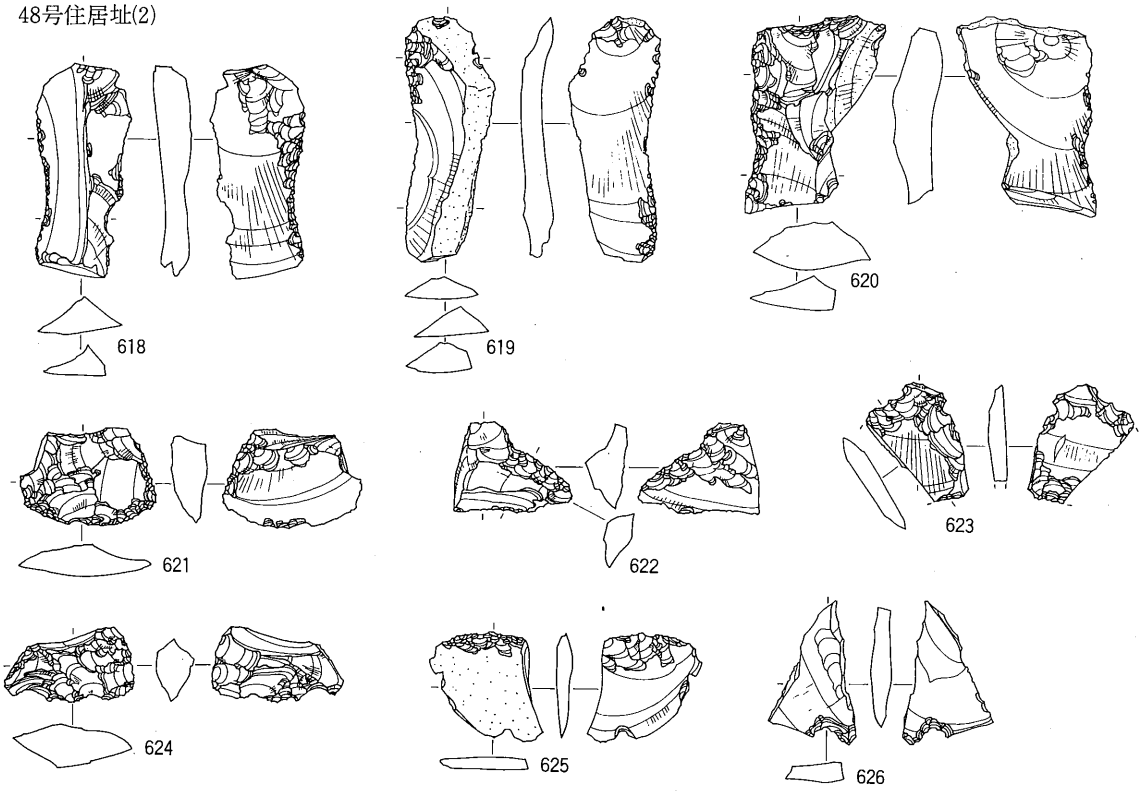
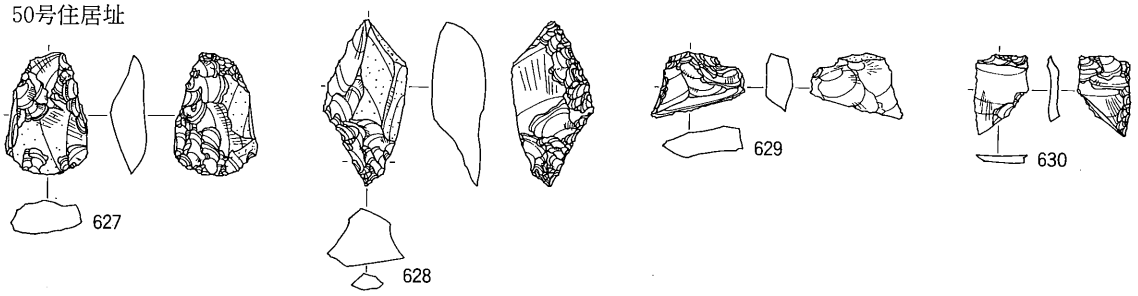


図135　47・48号住居址出土石器実測図

48号住居址(2)



50号住居址



第17トレンチ１区(1)

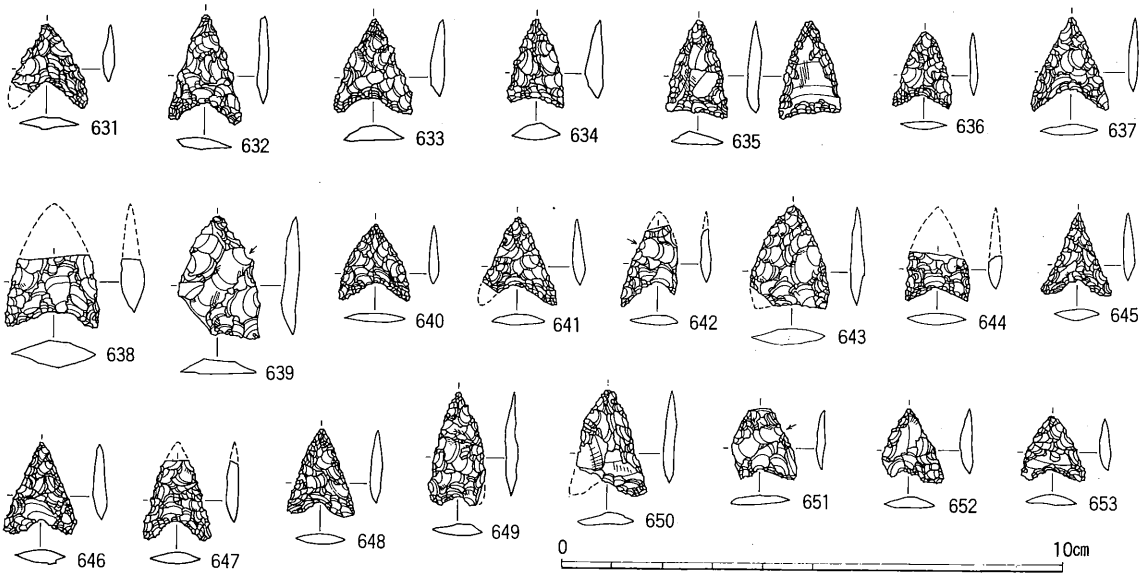


図136　48・50号住居址・17トレンチ出土石器実測図

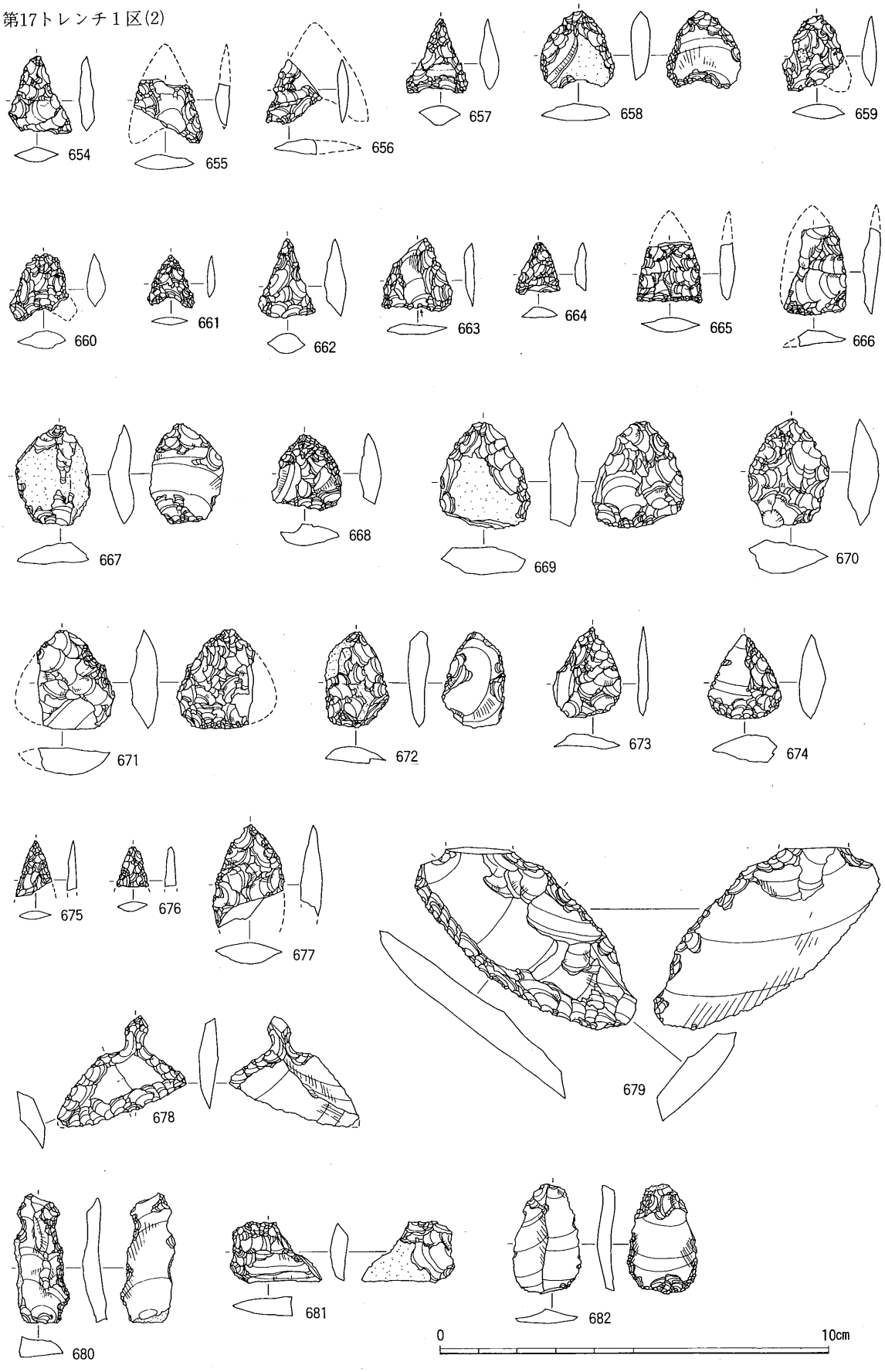
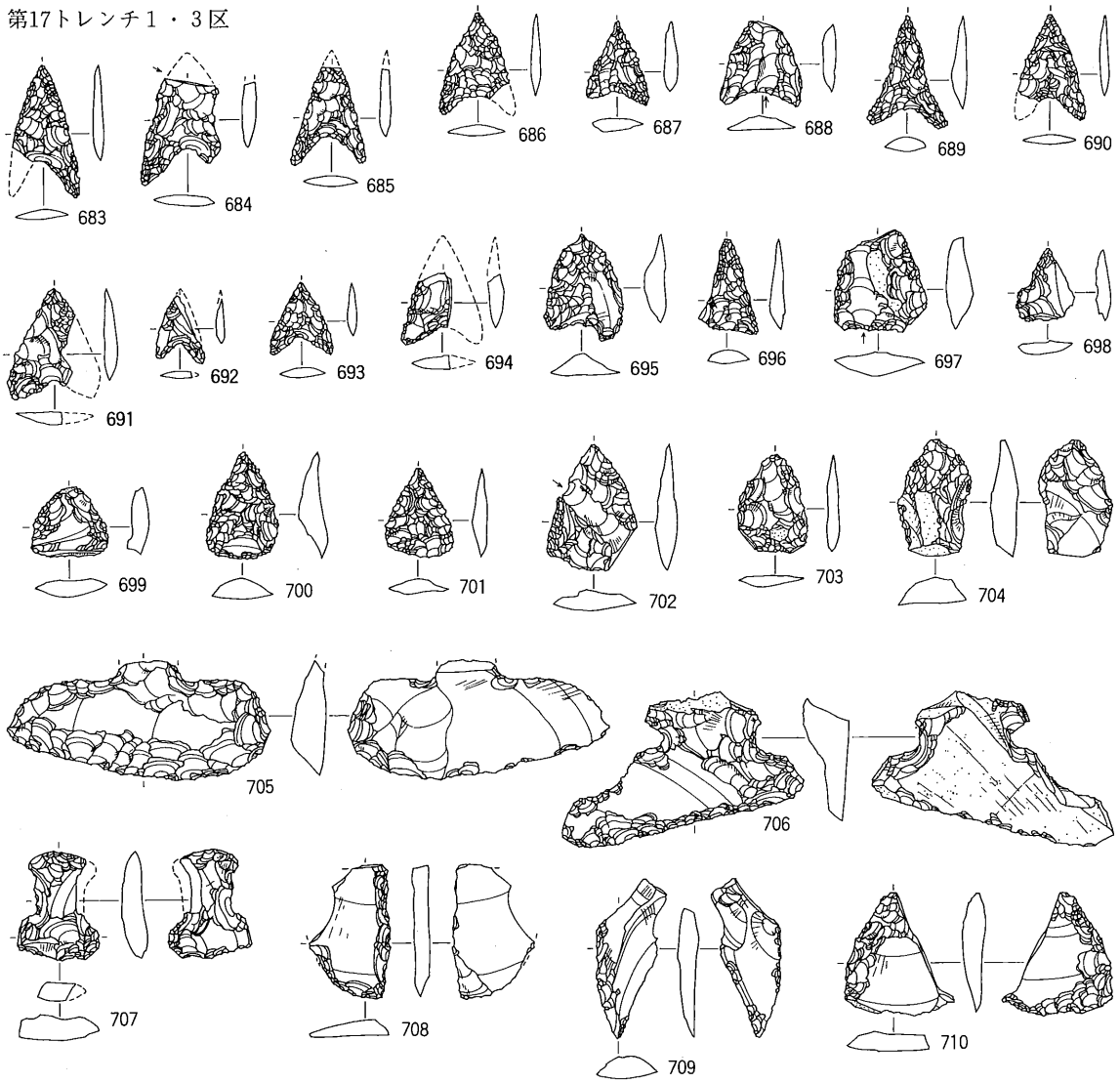


図137　17トレンチ出土石器実測図

第17トレンチ１・３区



第17トレンチ２区(1)

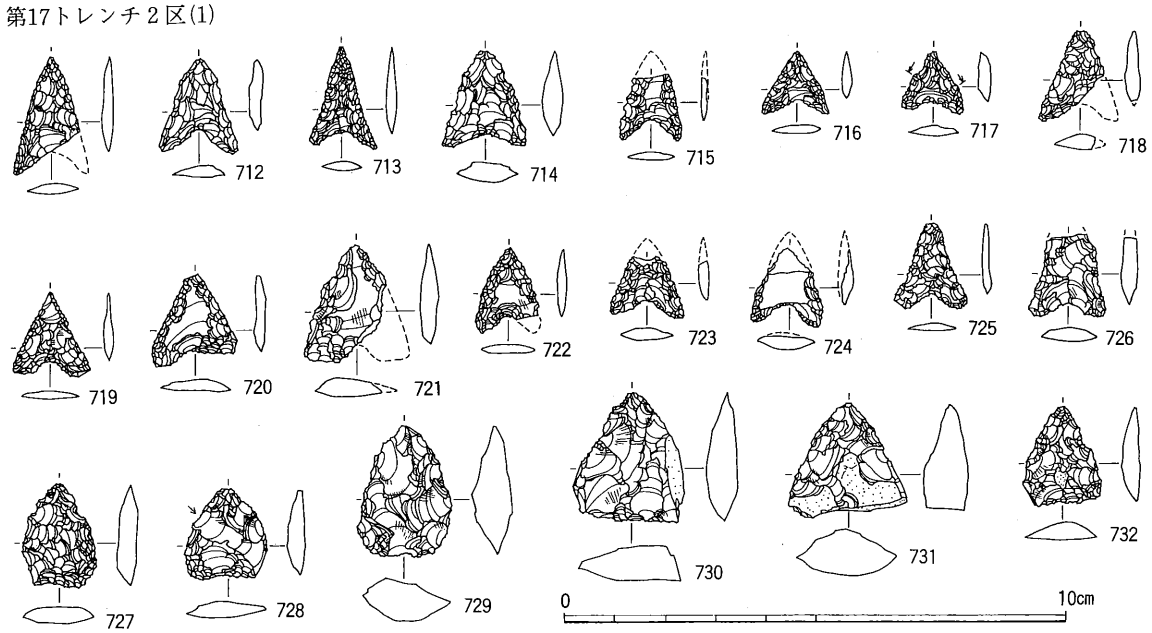


図138　17トレンチ出土石器実測図

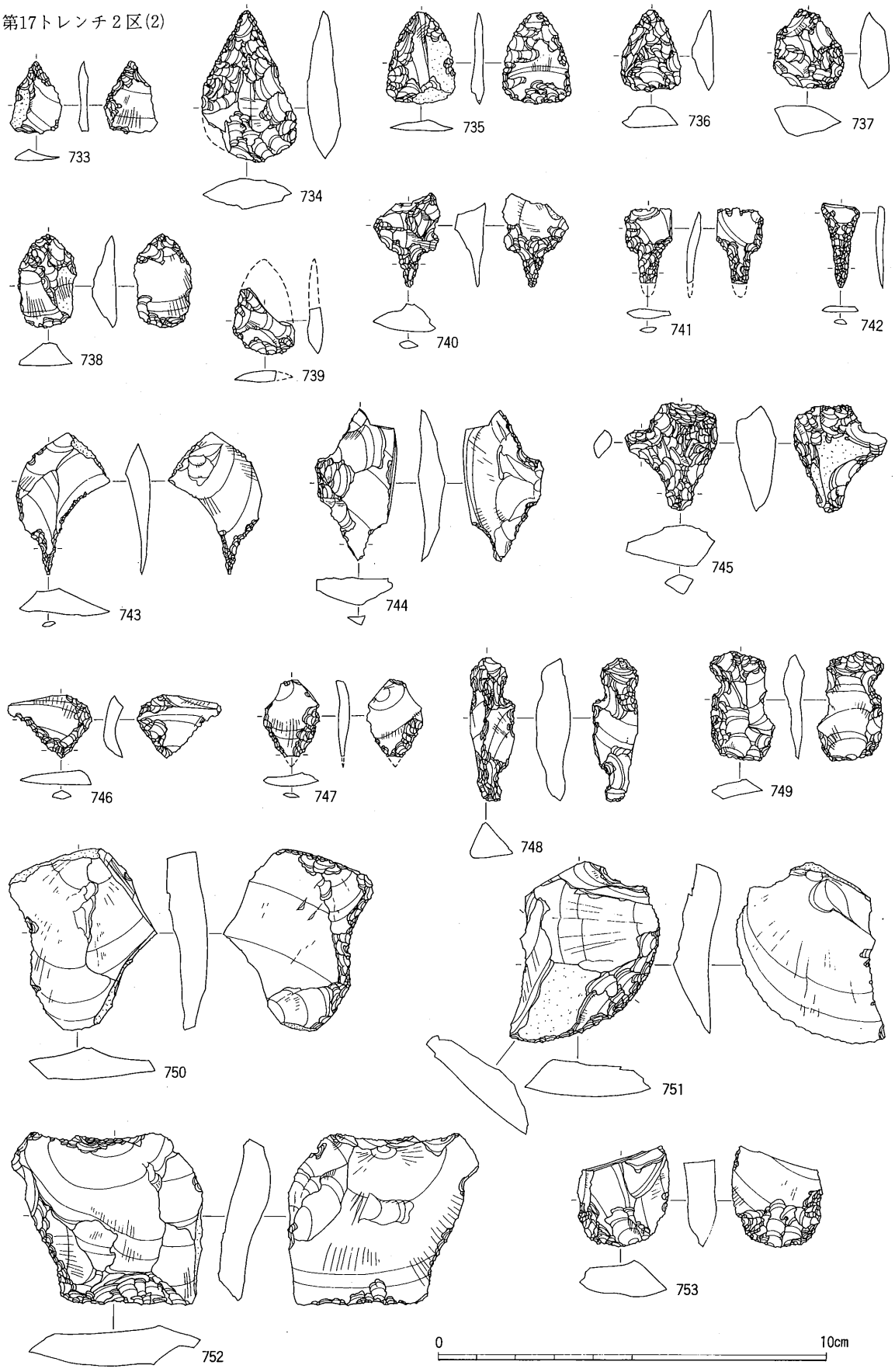
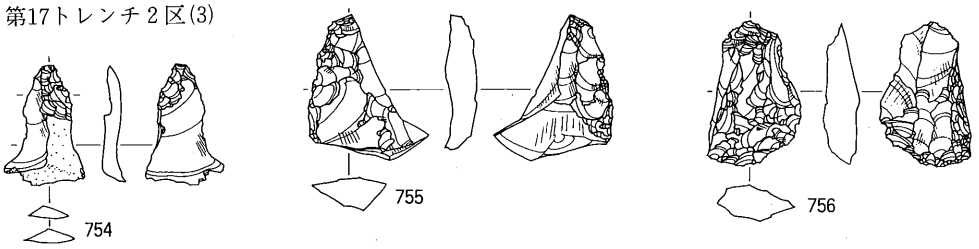
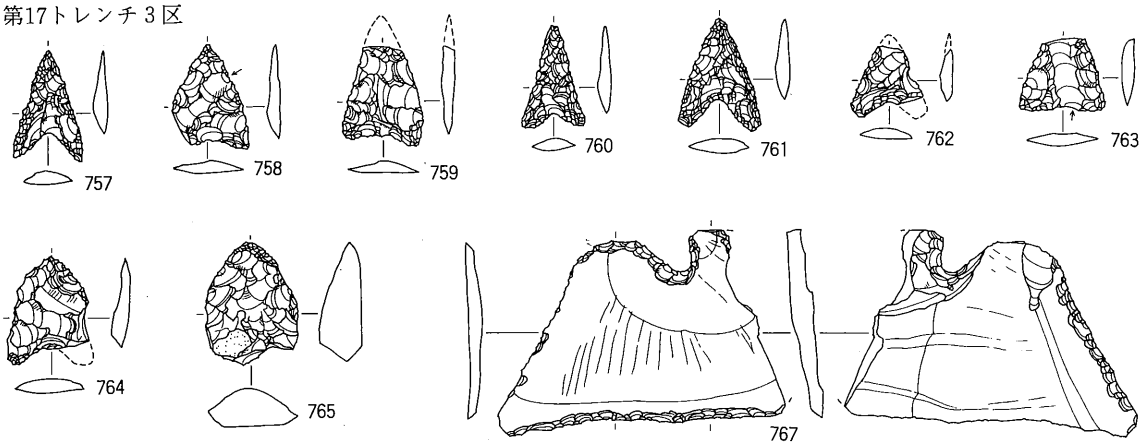


図139　17トレンチ出土石器実測図

第17トレンチ２区(3)



第17トレンチ３区



第17トレンチ４区(1)

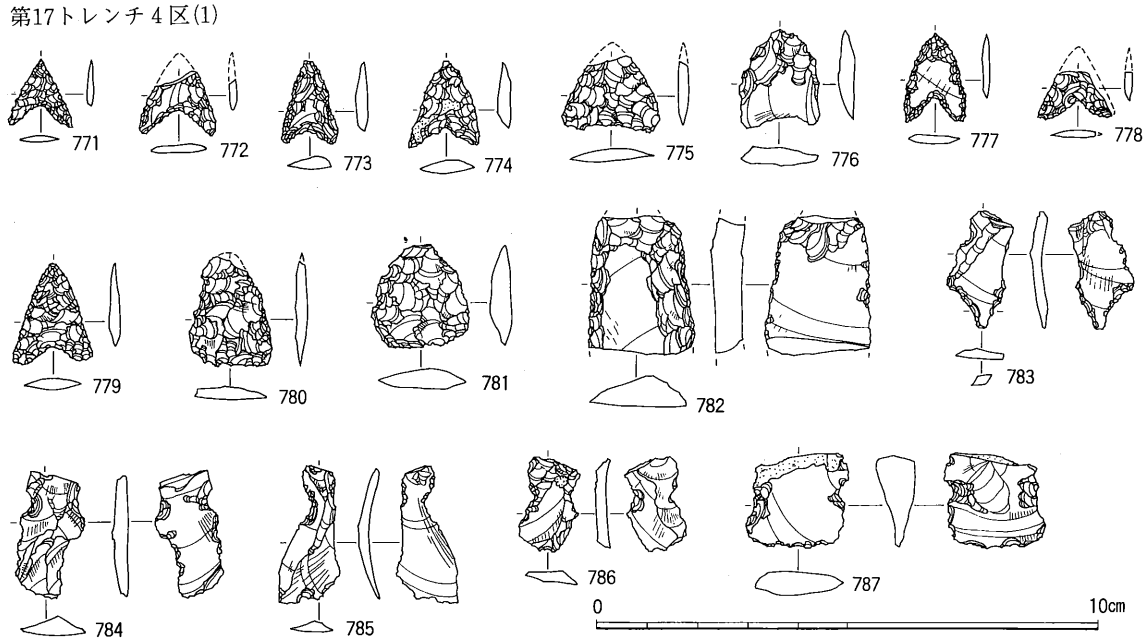
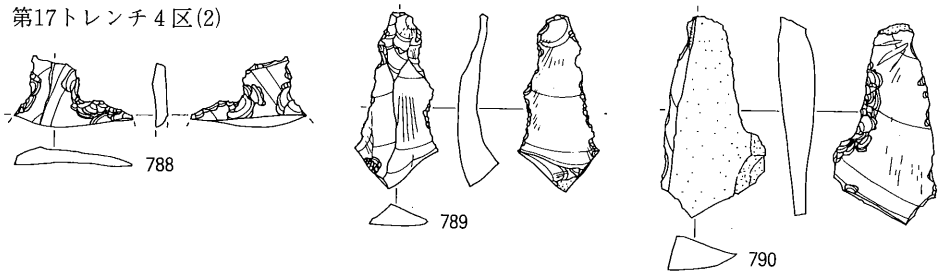
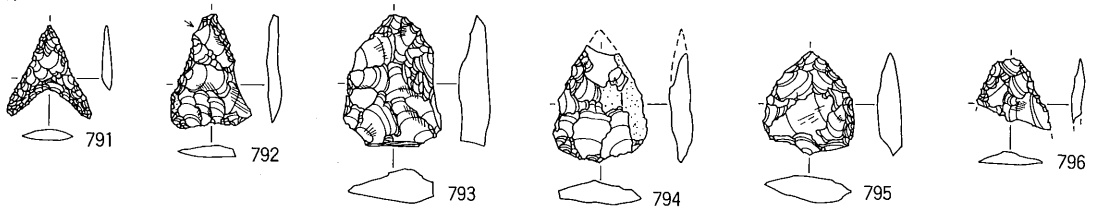


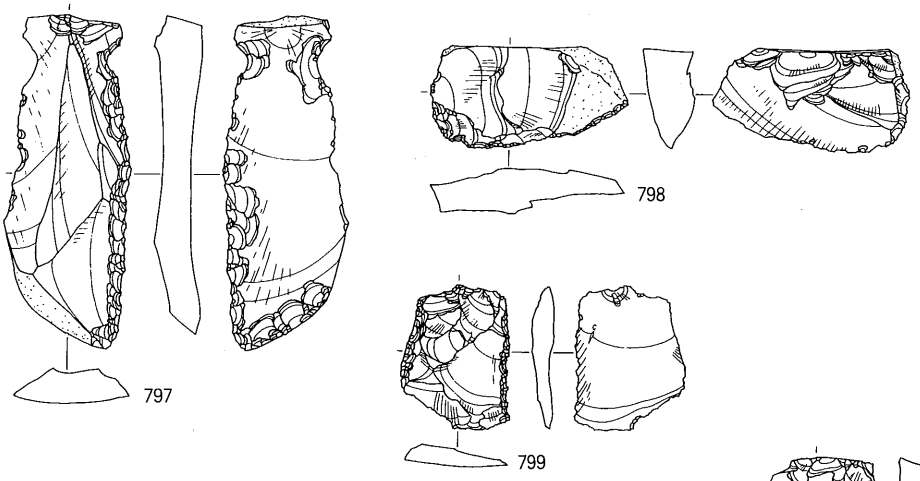
図140　17トレンチ出土石器実測図

第17トレンチ４区(2)

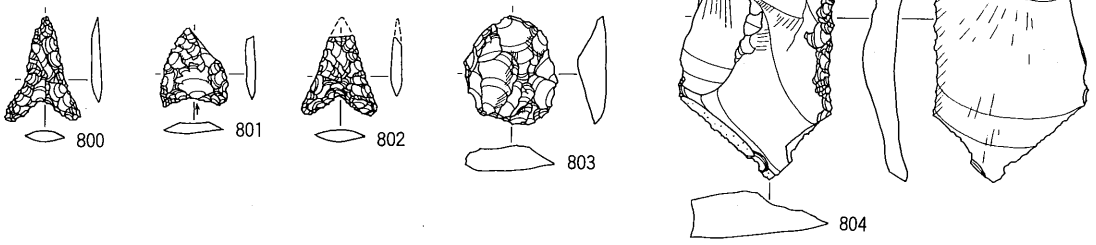


第17トレンチ５区

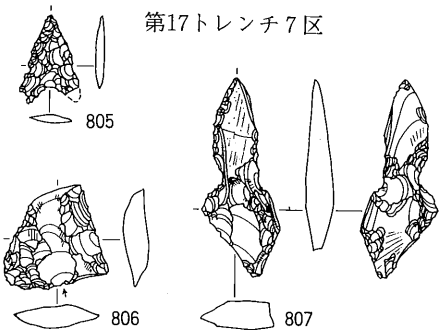




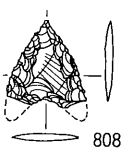
第17トレンチ６区



第17トレンチ７区



第17トレンチ８区



第17トレンチ９区

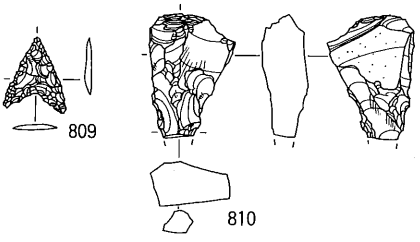


図141　17トレンチ出土石器実測図

第17トレンチ(1)

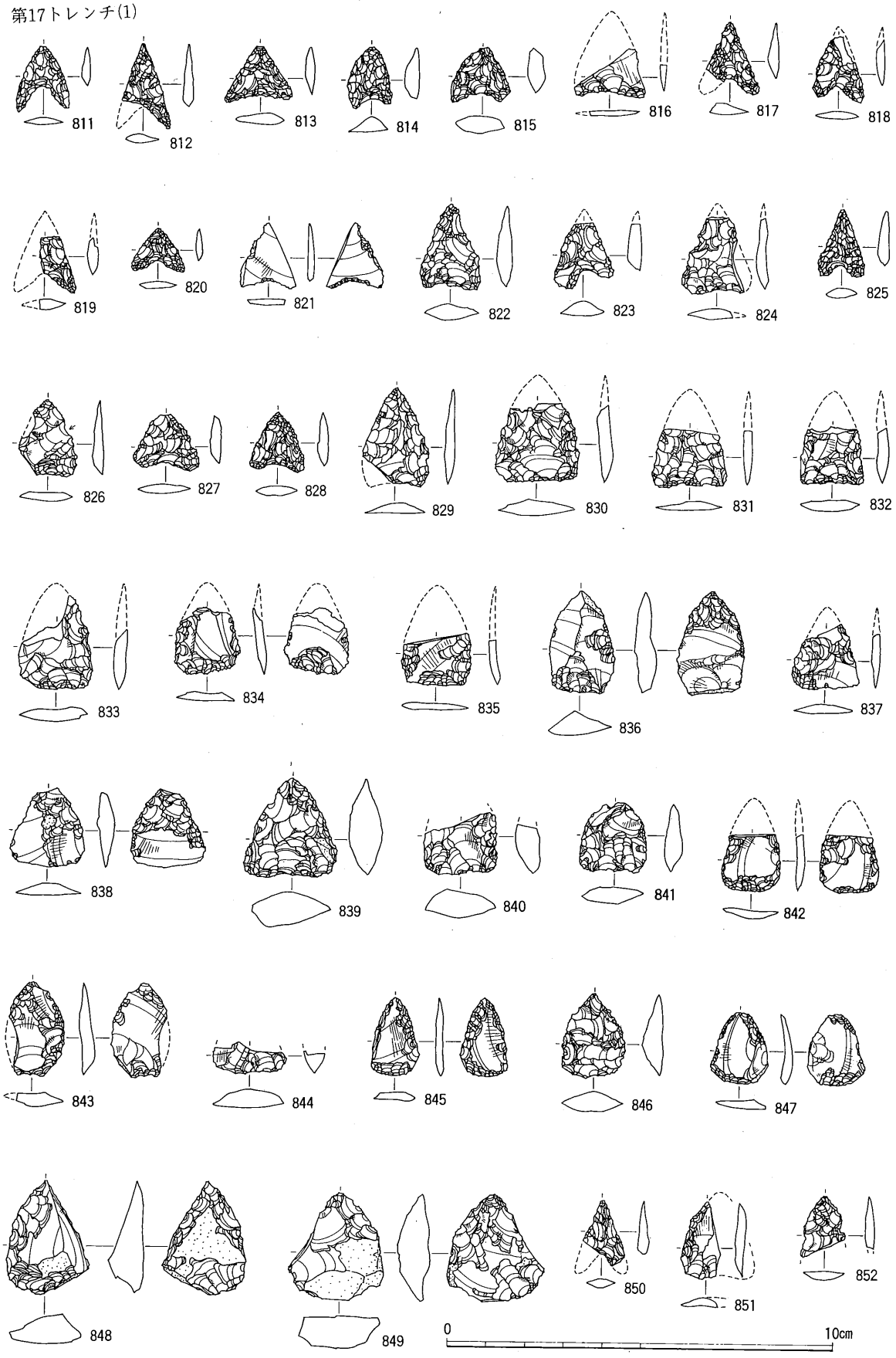


図142　17トレンチ出土石器実測図

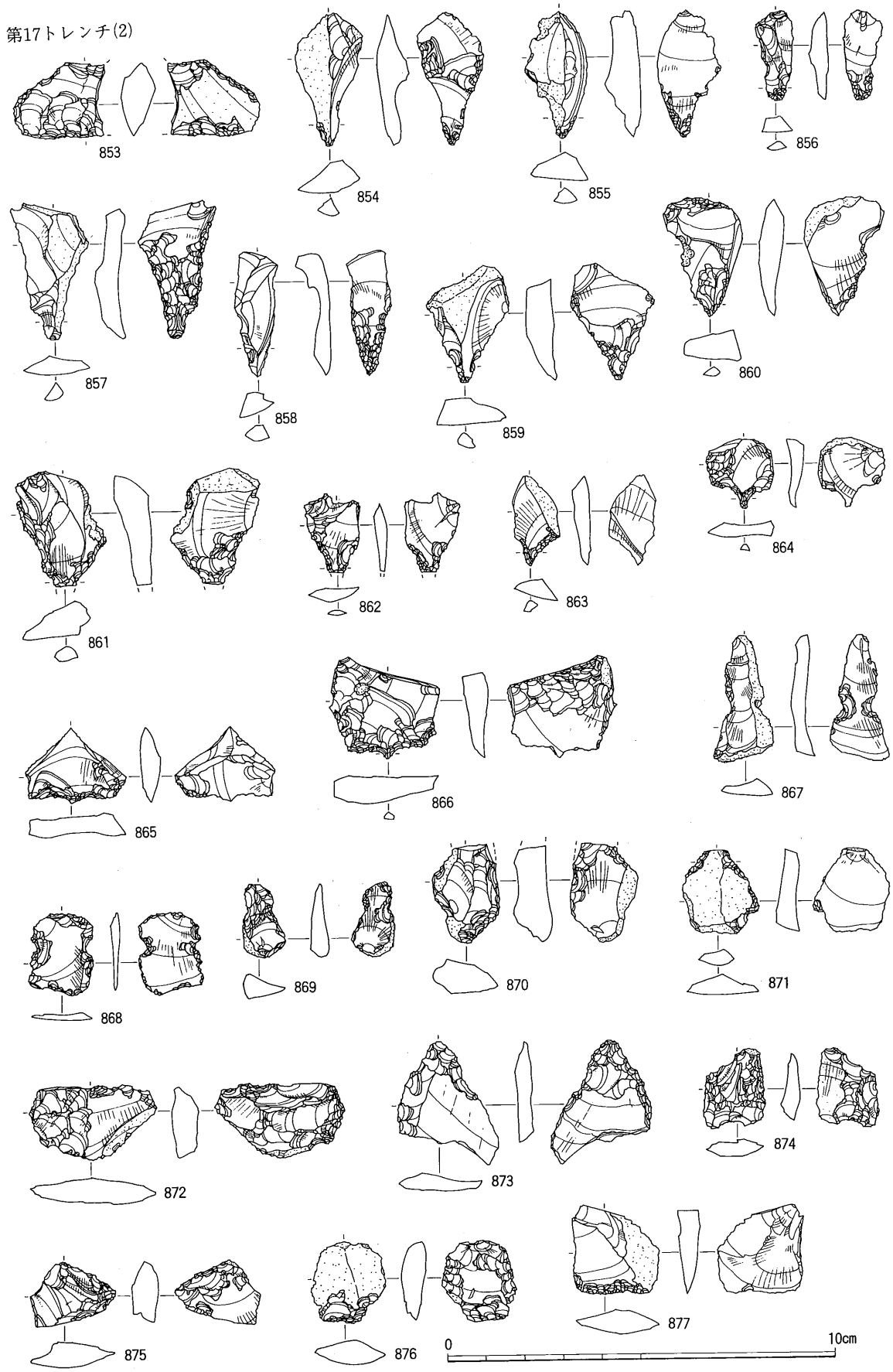


図143　17トレンチ出土石器実測図

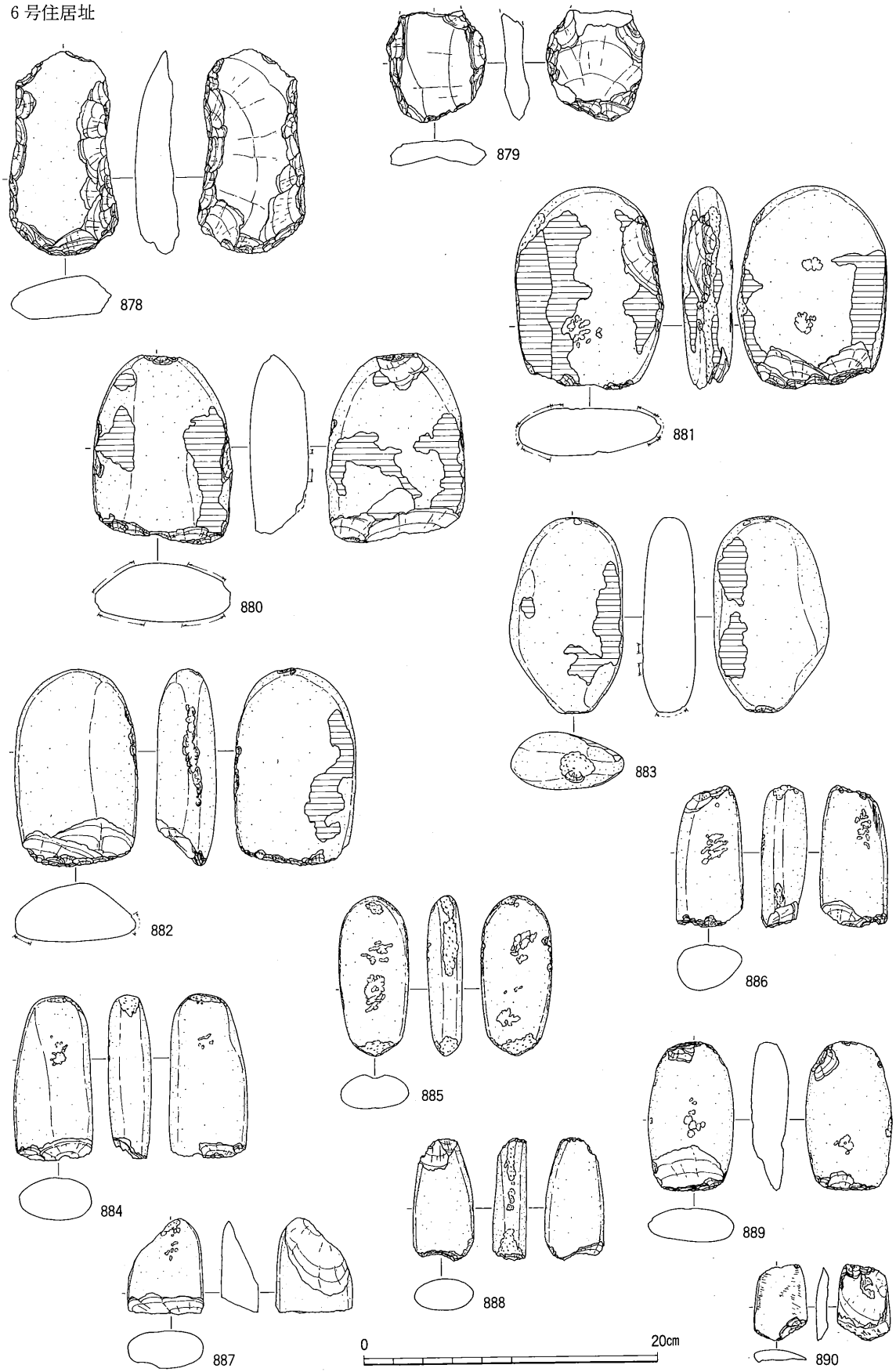


図144　6 号住居址出土石器実測図

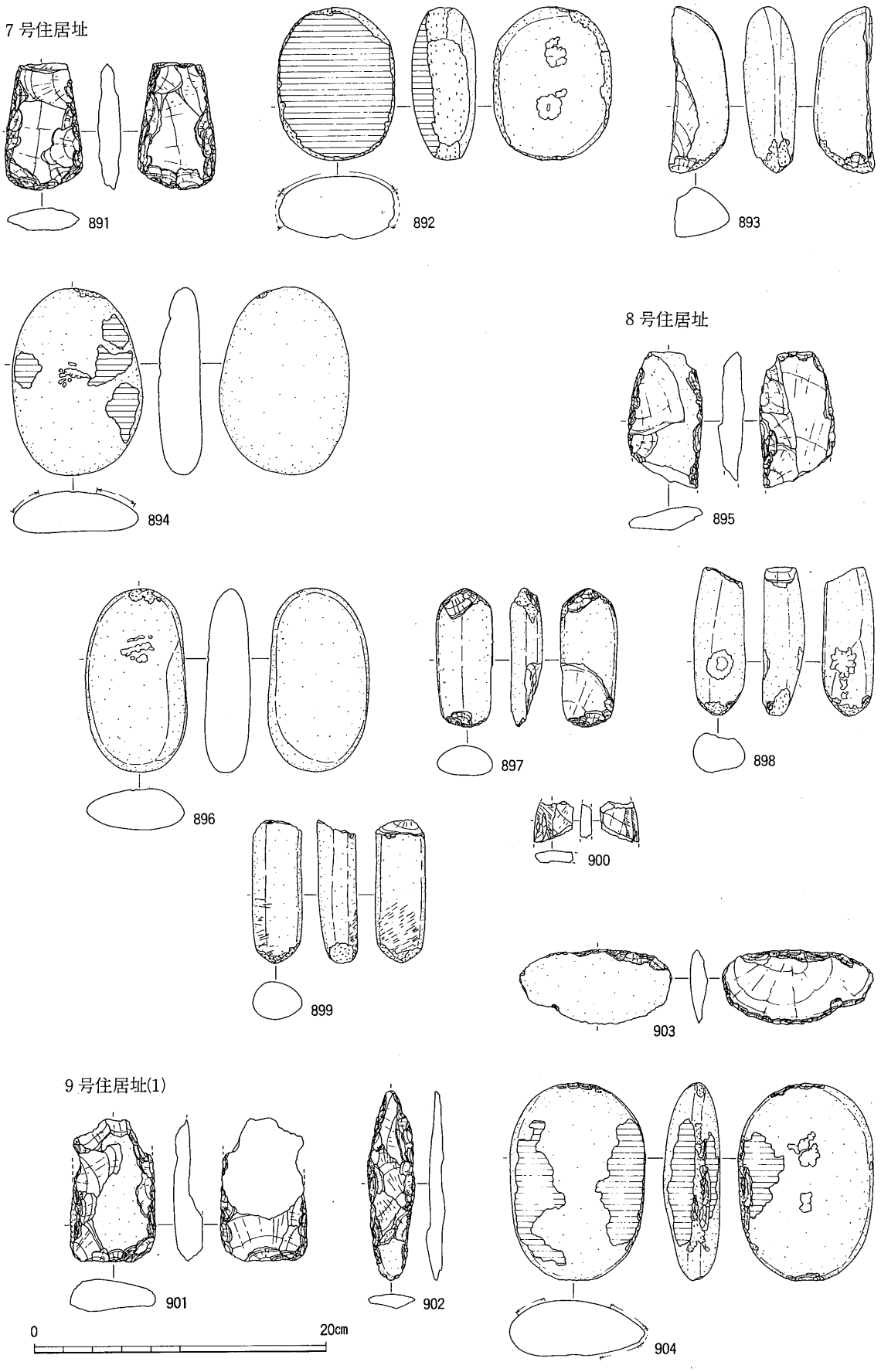


図145　7・8・9 号住居址出土石器実測図

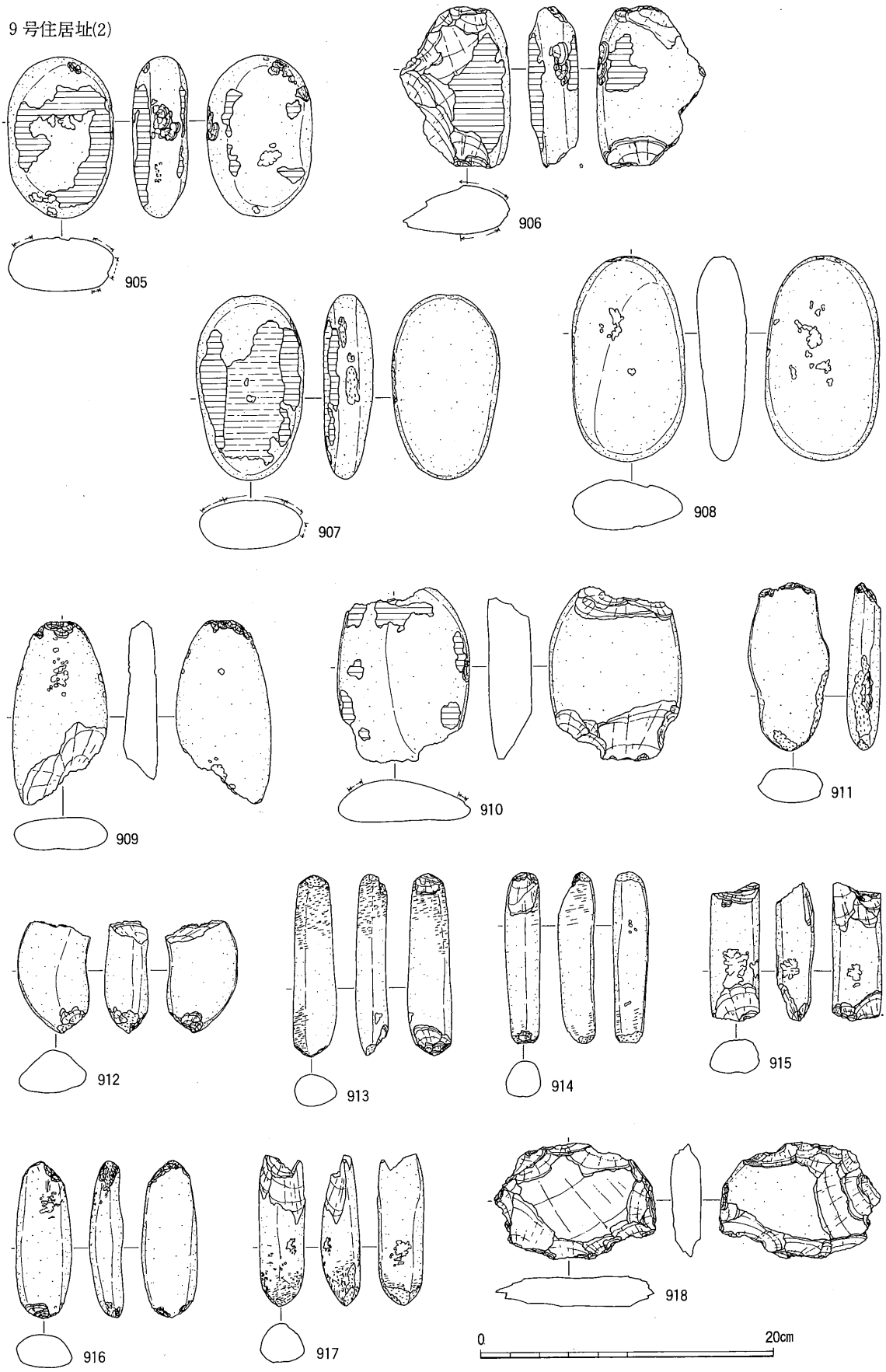


図146　9 号住居址出土石器実測図

10号住居址(1)

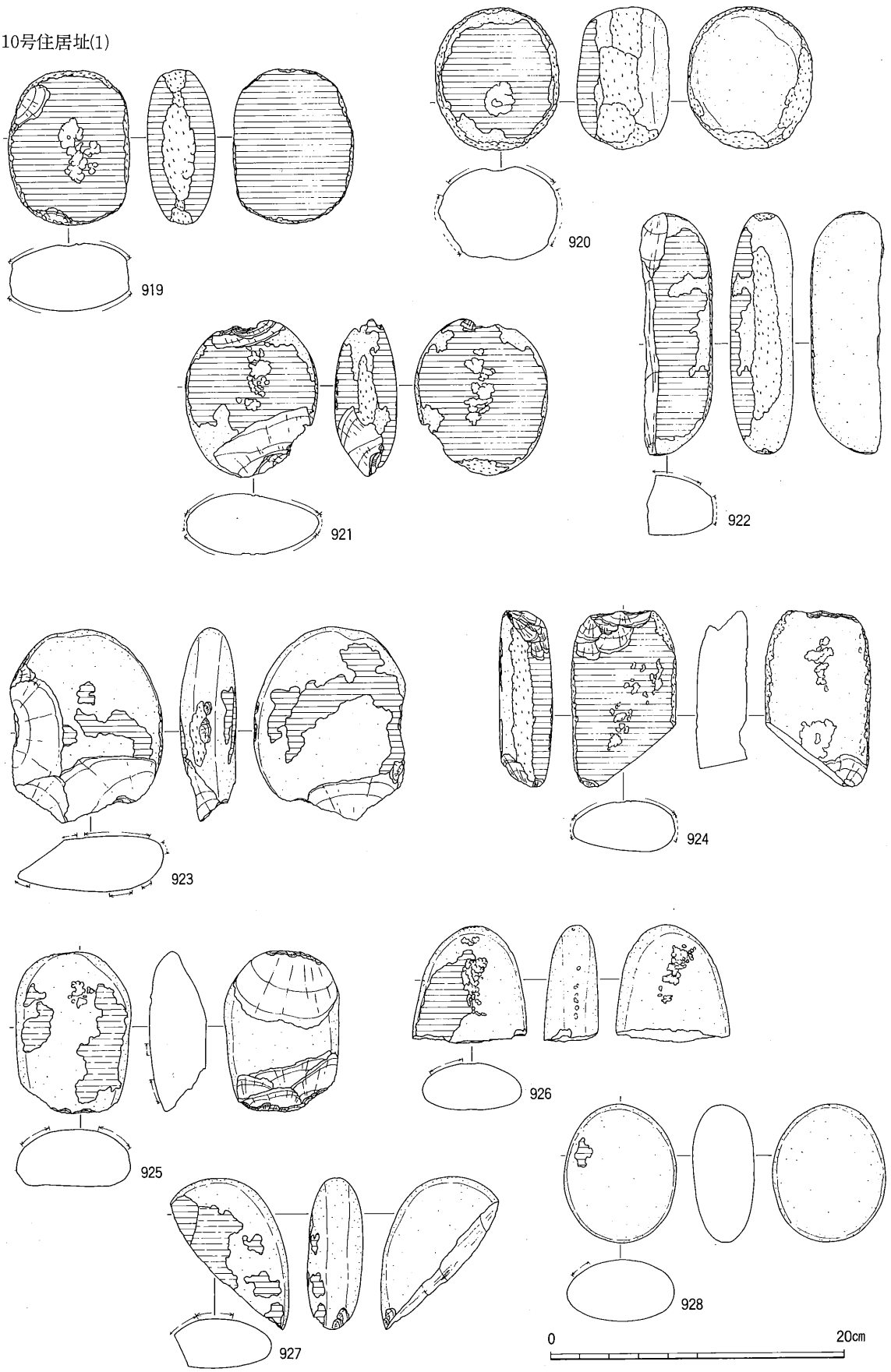


図147　10号住居址出土石器実測図

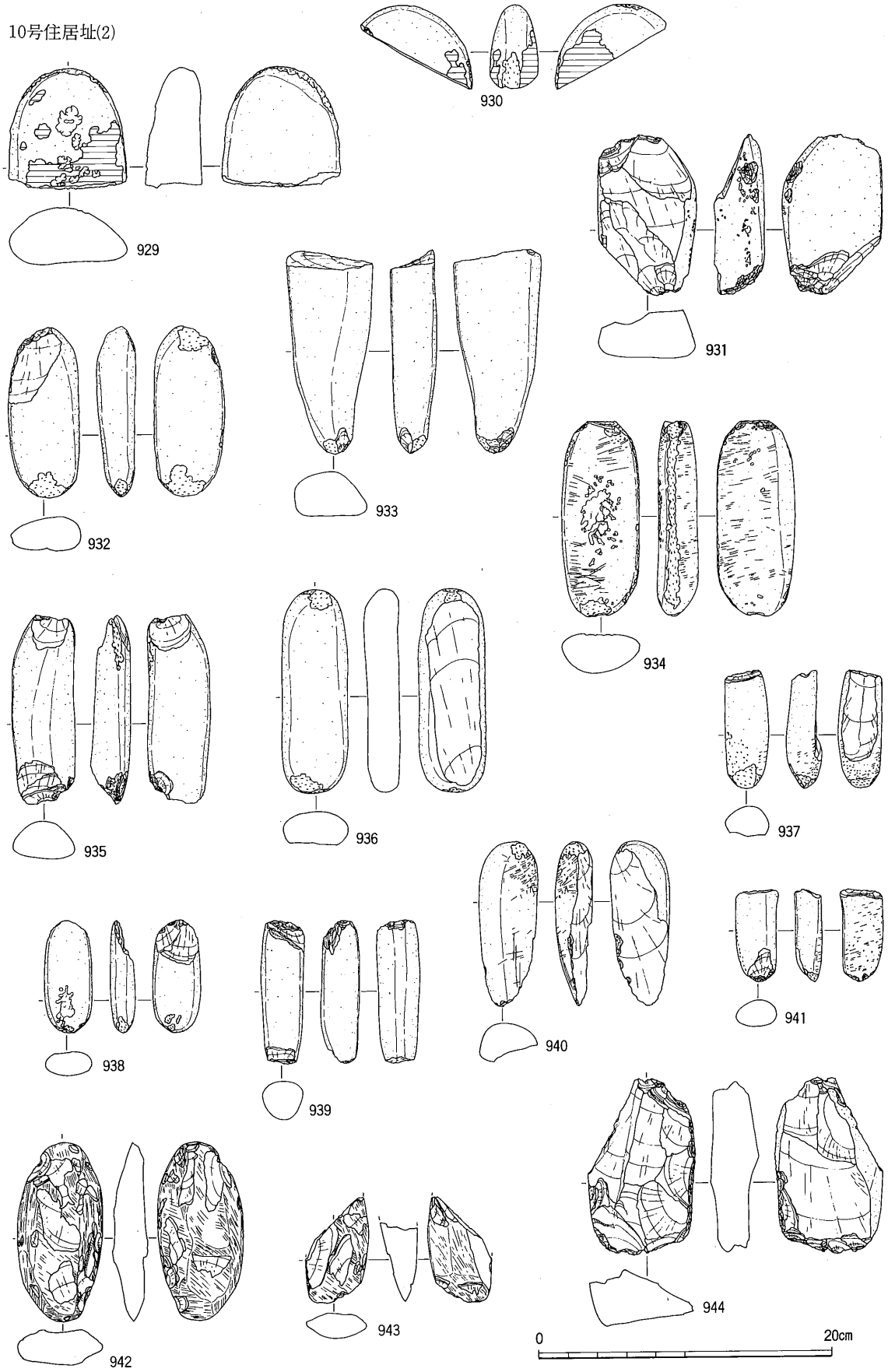


図148　10号住居址出土石器実測図

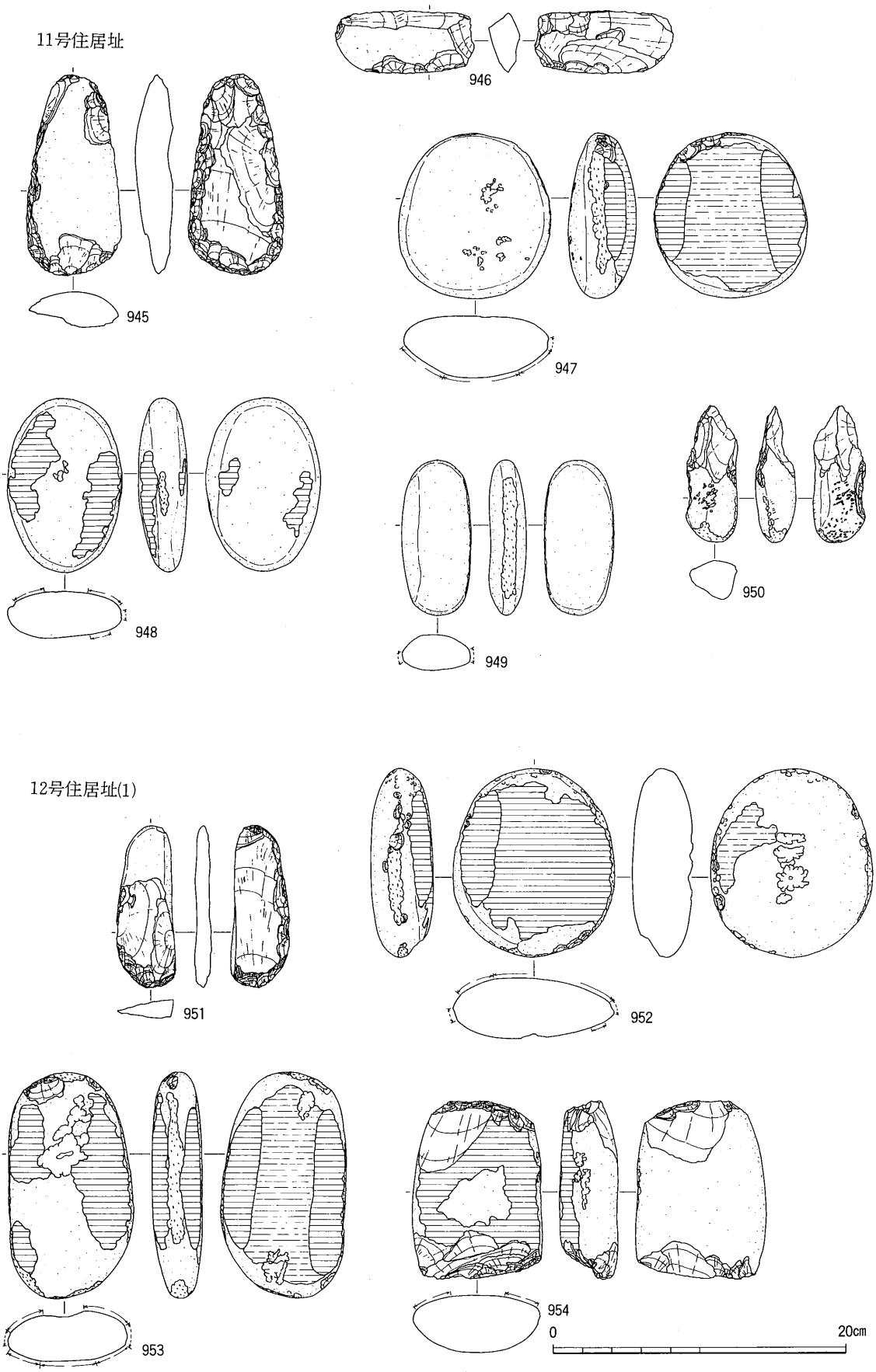


図149　11・12号住居址出土石器実測図

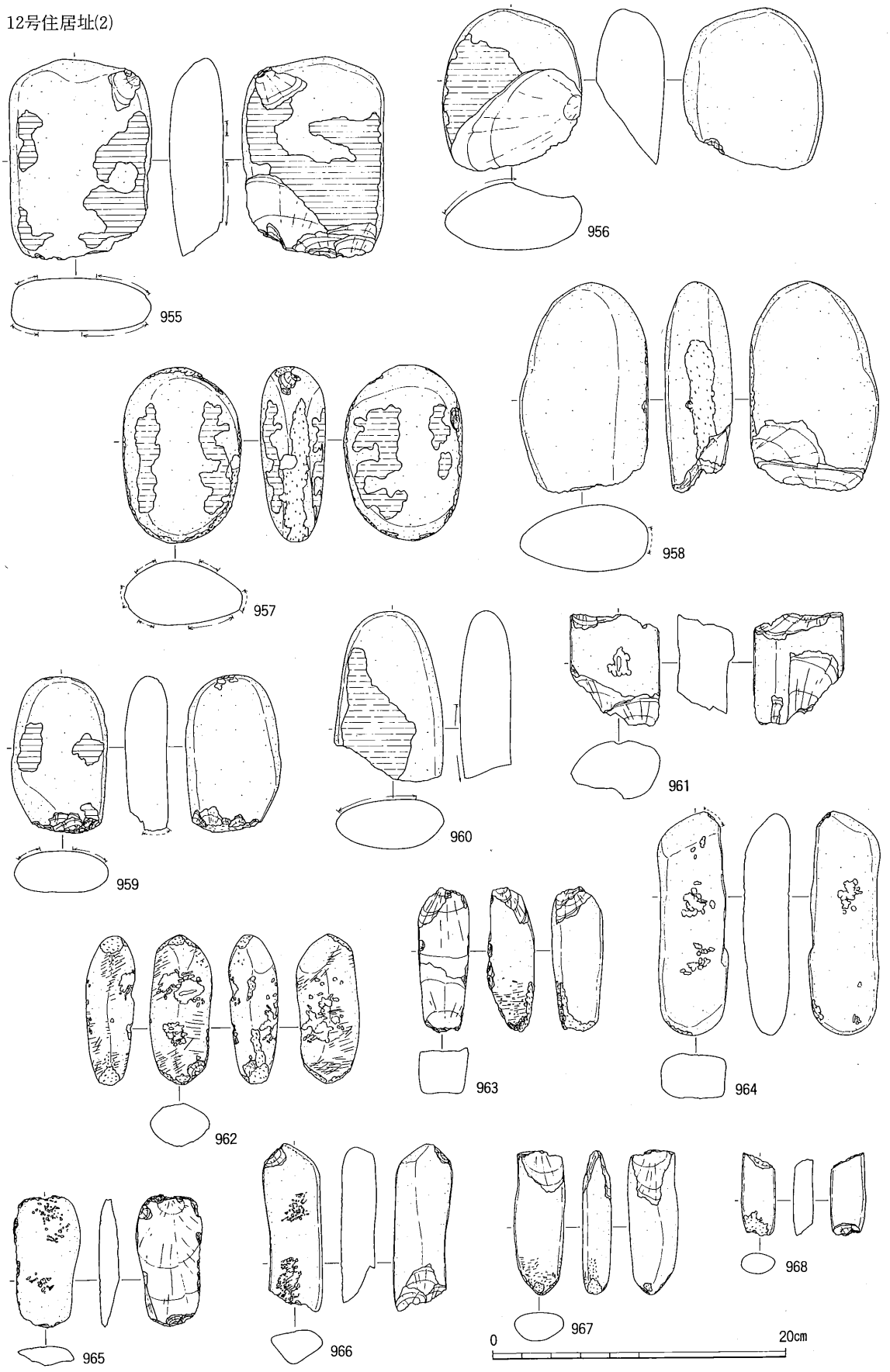


図150　12号住居址出土石器実測図

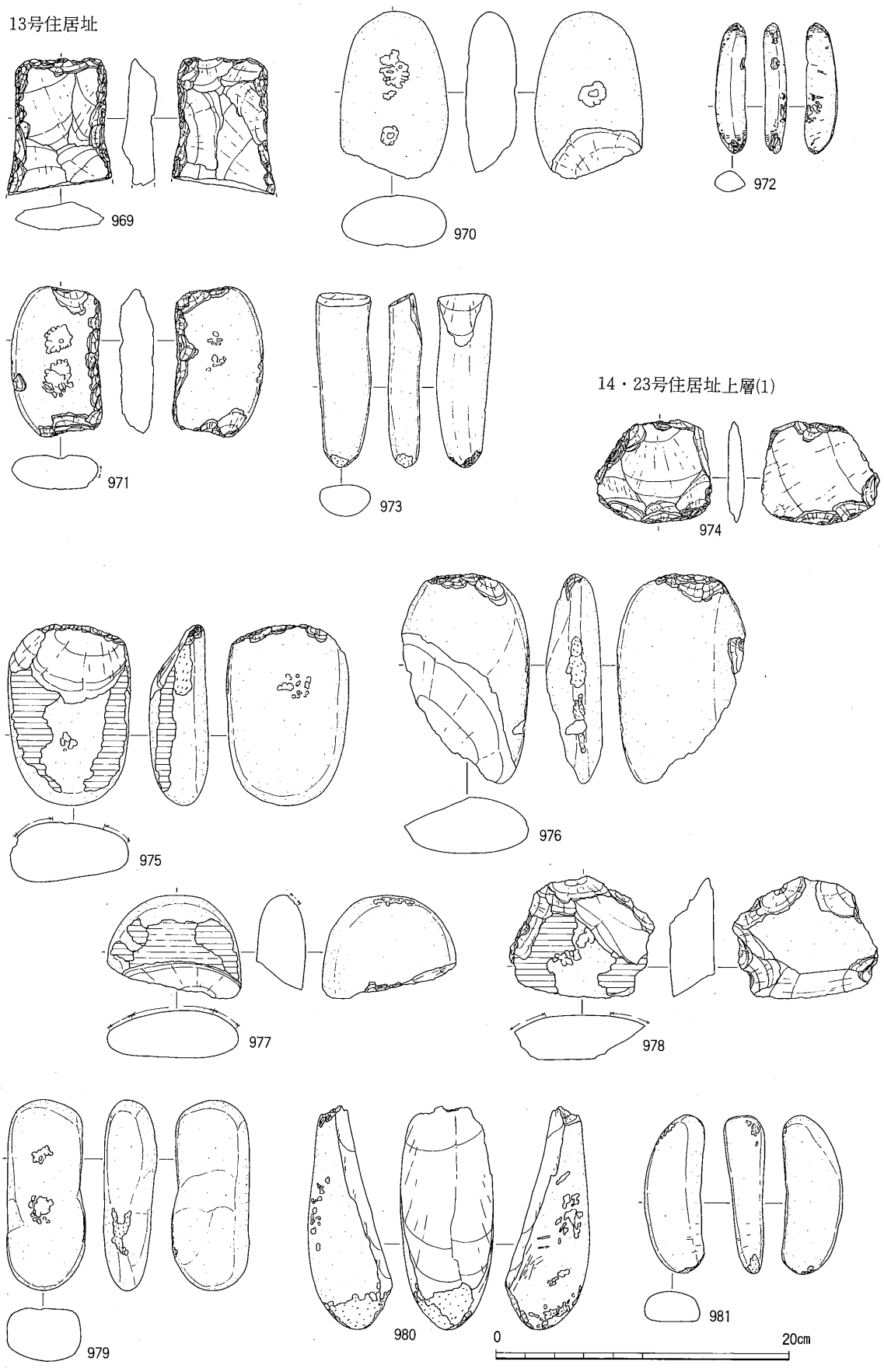
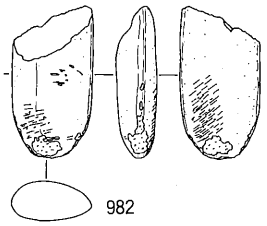
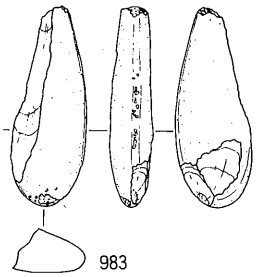


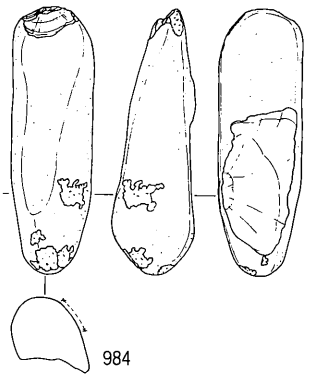
図151　13・14・23号住居址出土石器実測図

14・23号住居址上層(2)

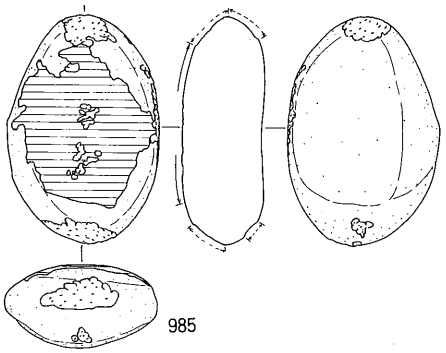


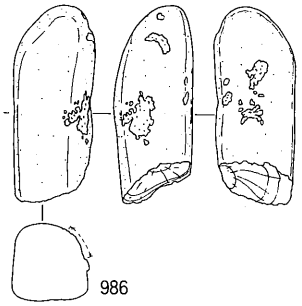
14号住居址



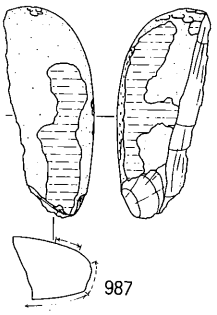


15号住居址

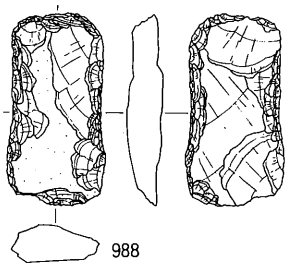


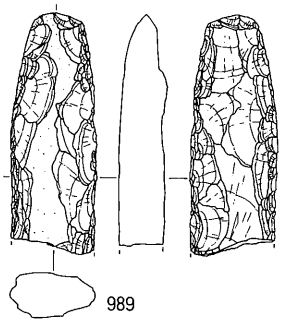


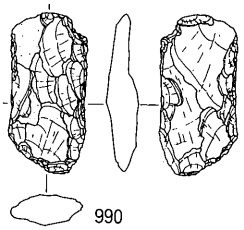
16号住居址

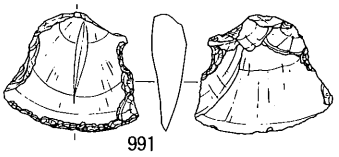


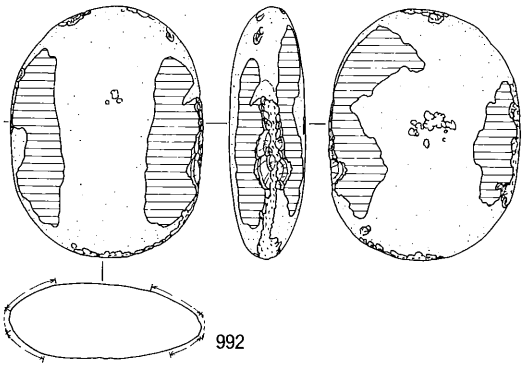
17号住居址(1)











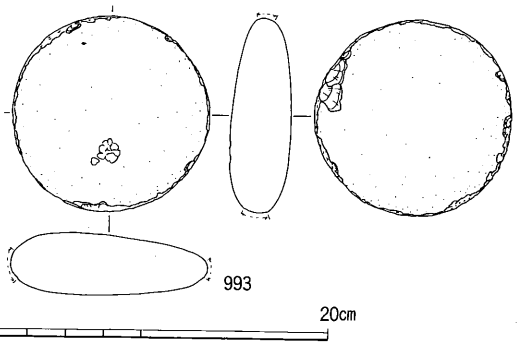
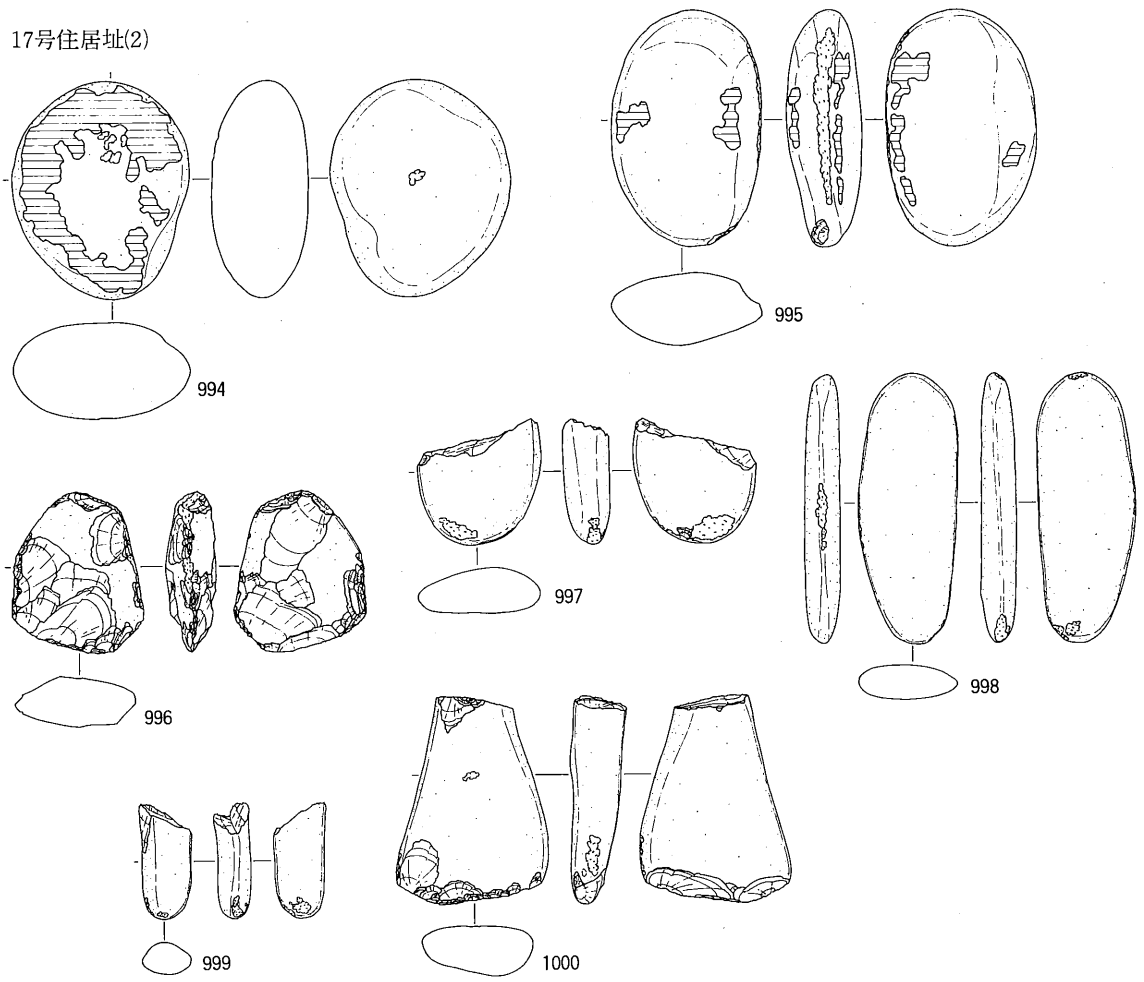


図152　14・23・15・16・17号住居址出土石器実測図

17号住居址(2)



18号住居址(1)

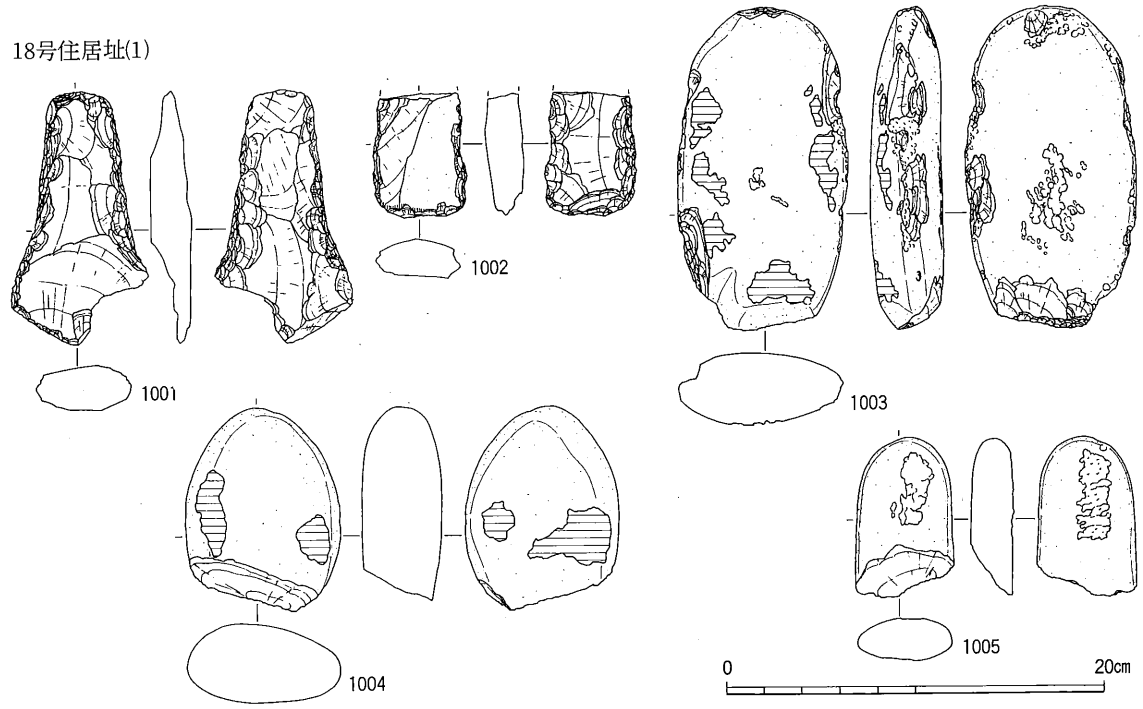


図153　17・18号住居址出土石器実測図

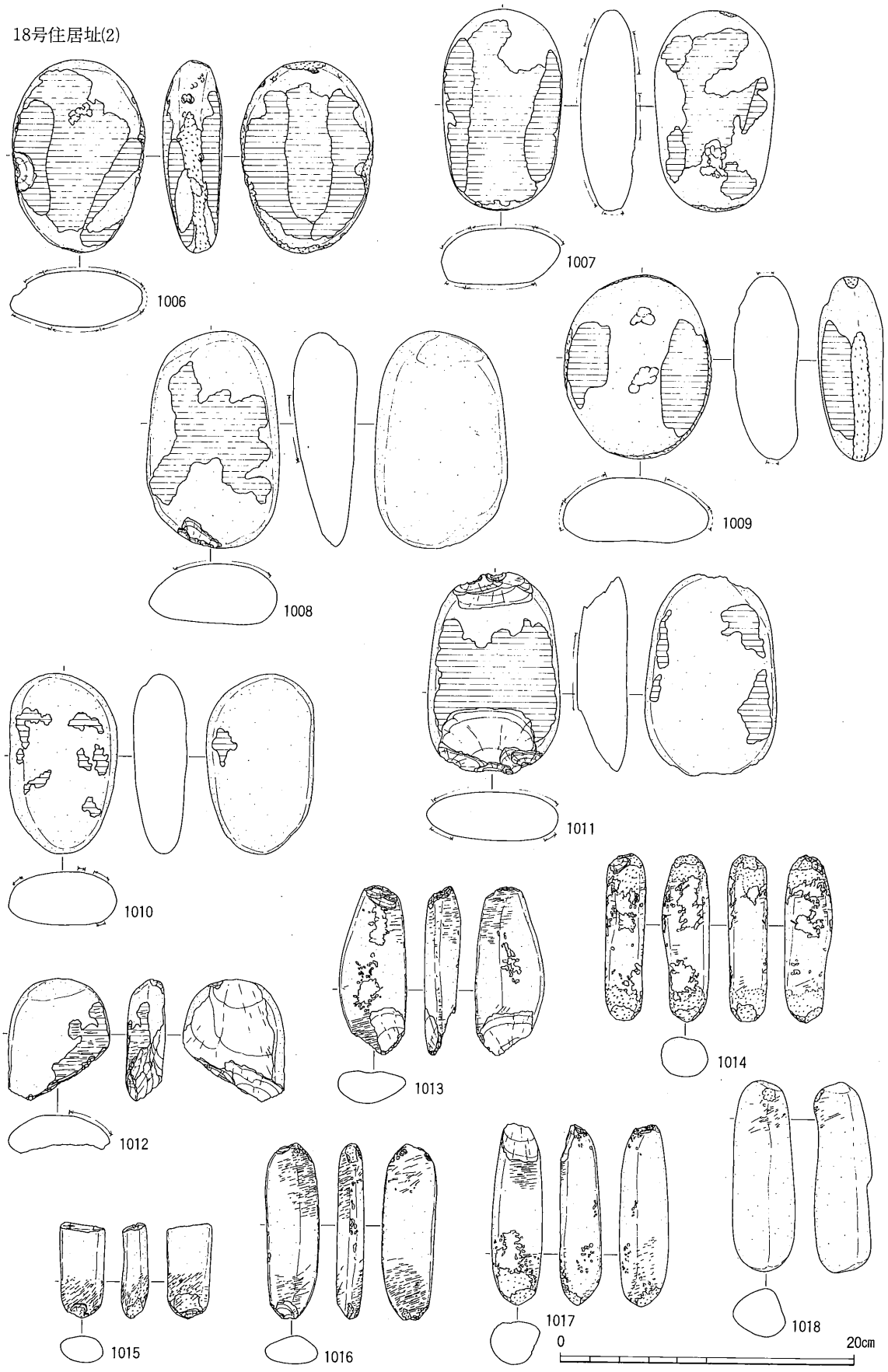
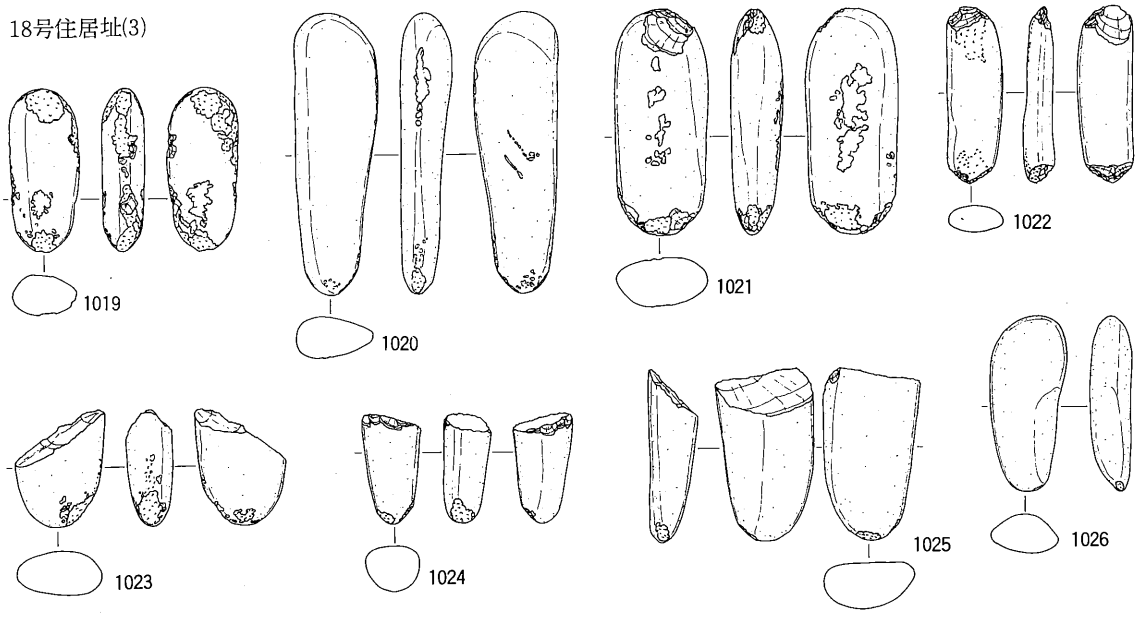
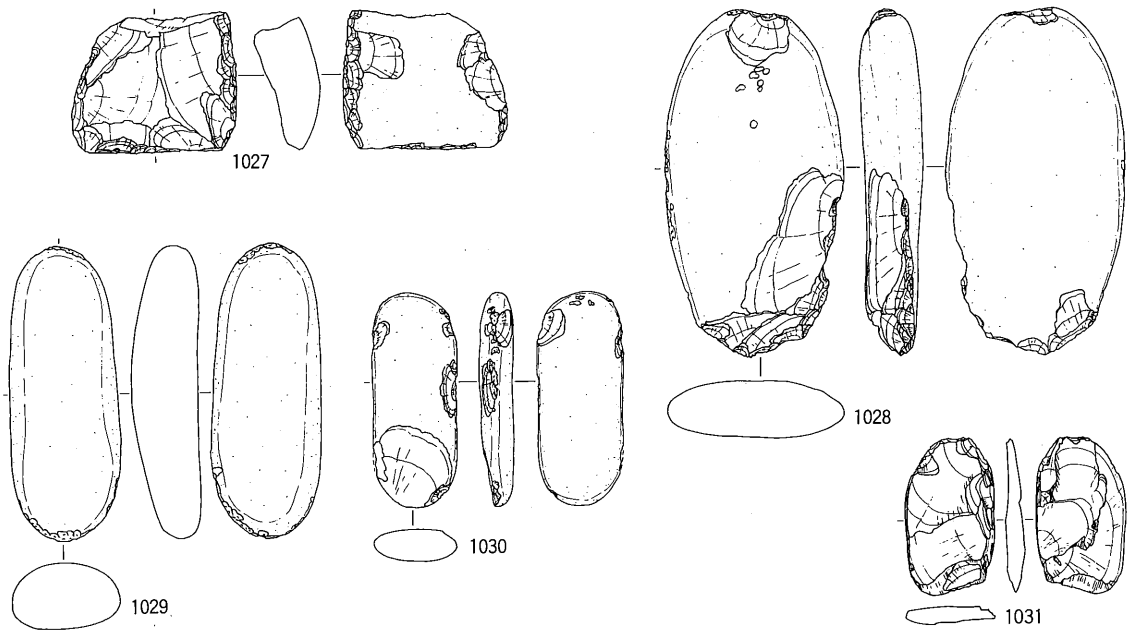


図154　18号住居址出土石器実測図

18号住居址(3)



23号住居址



24号住居址

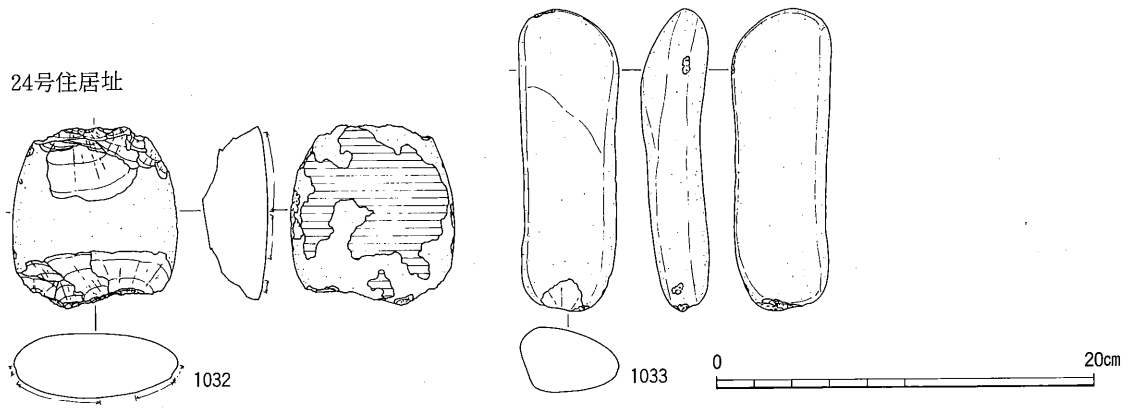


図155　18・23・24号住居址出土石器実測図

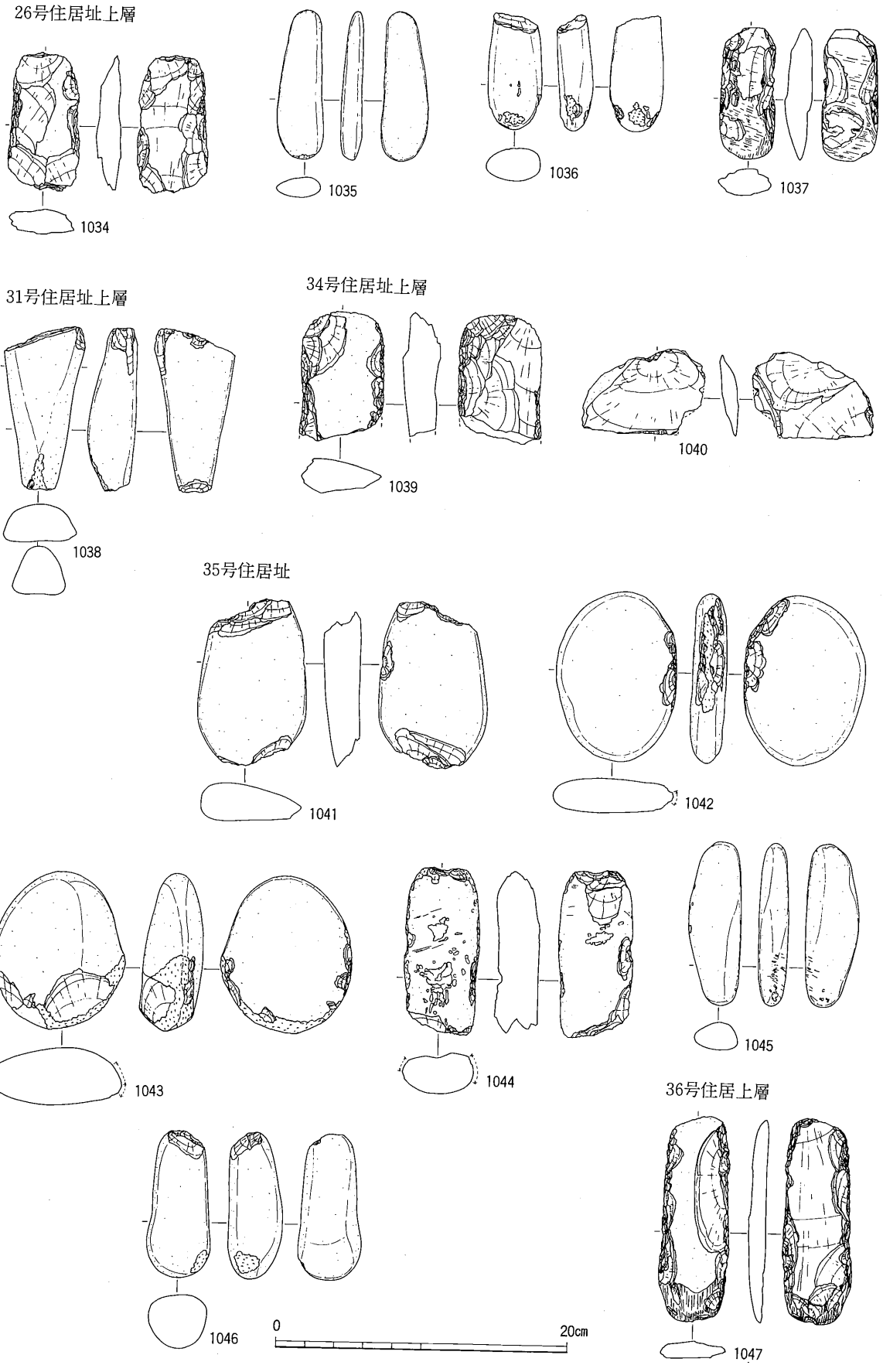


図156　26・31・34・35・36号住居址出土石器実測図

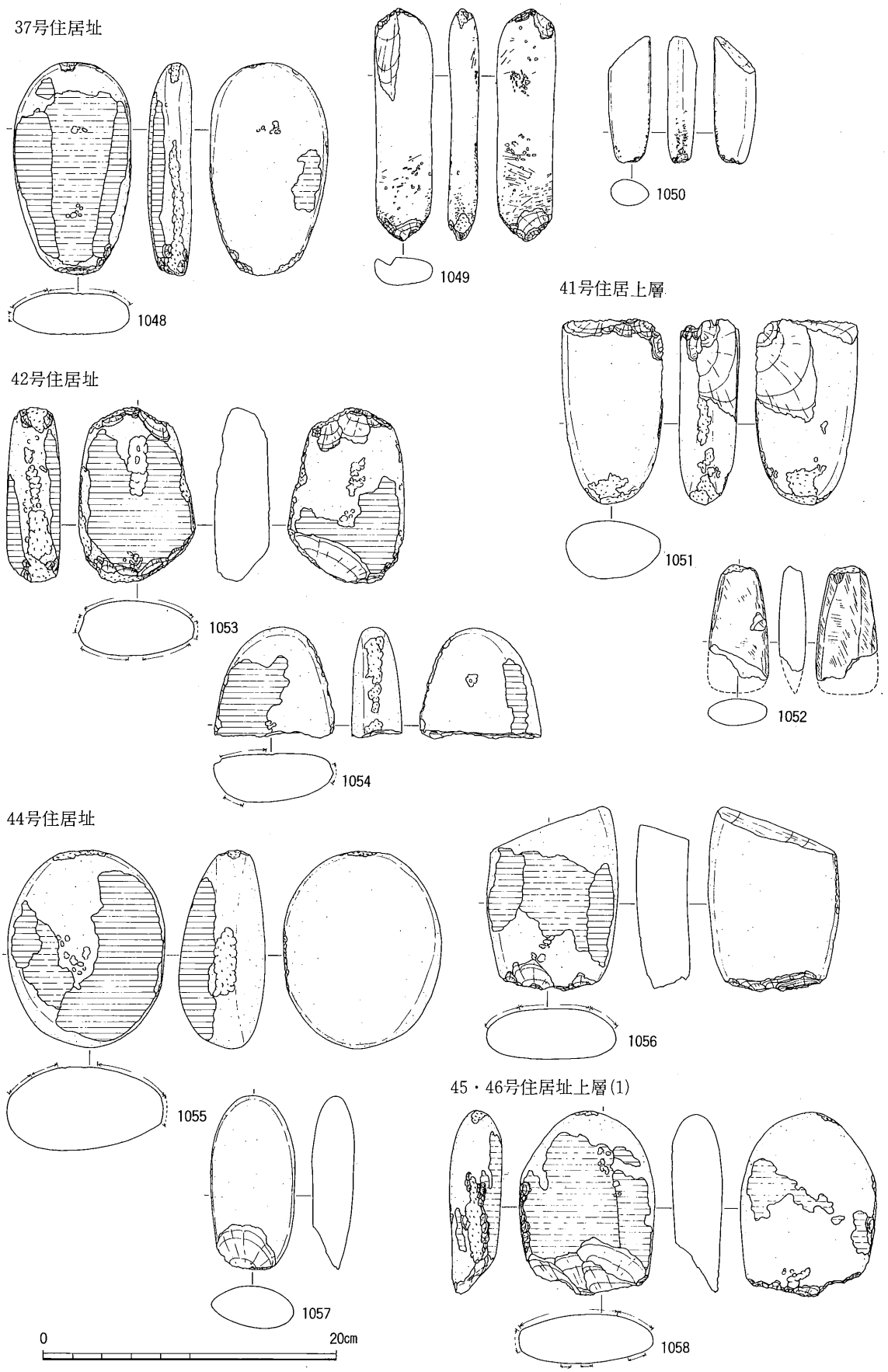


図157　37・41・42・44・45号住居址出土石器実測図

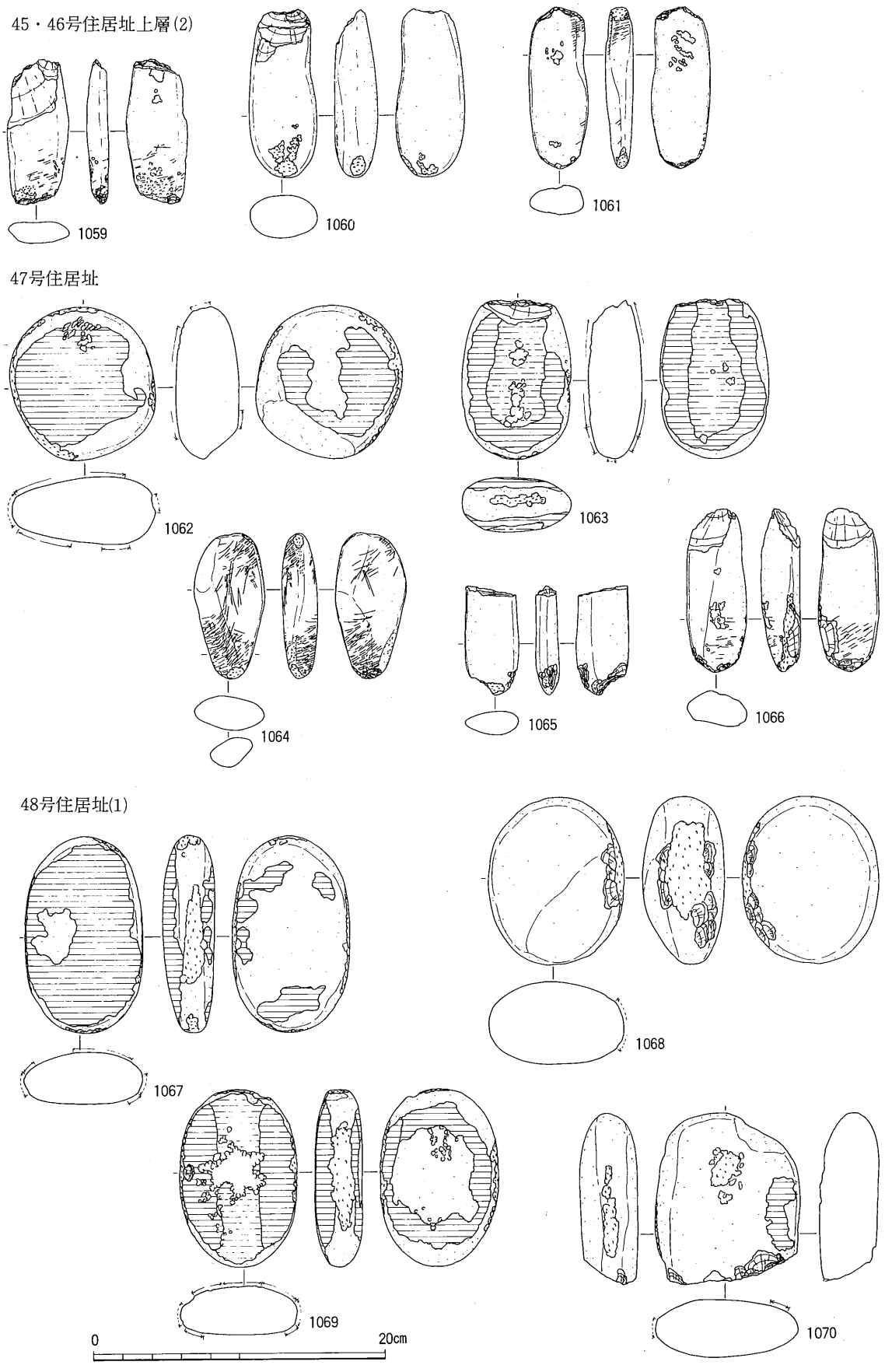


図158　45・47・48号住居址出土石器実測図

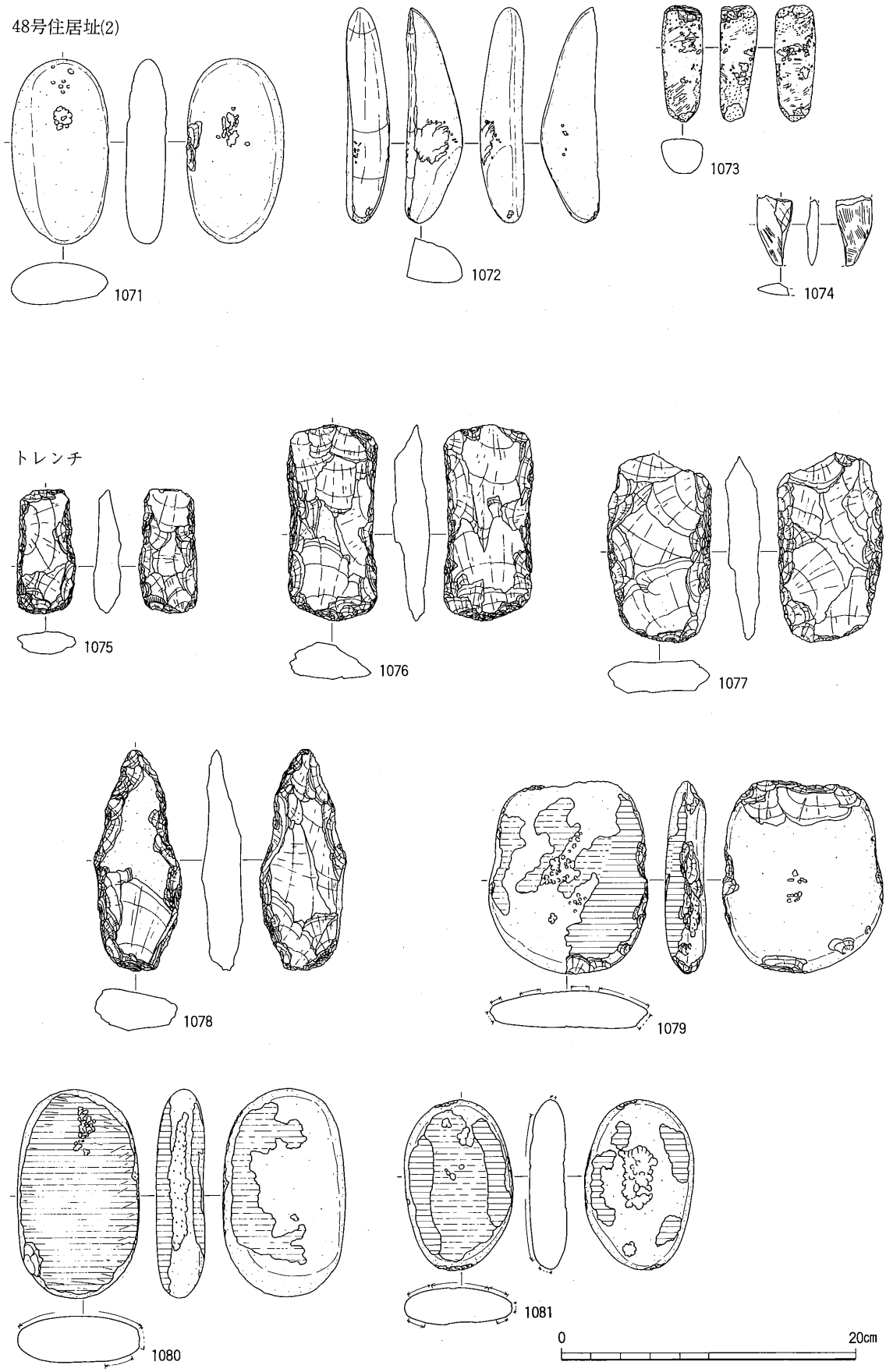


図159　48号住居址、トレンチ出土石器実測図

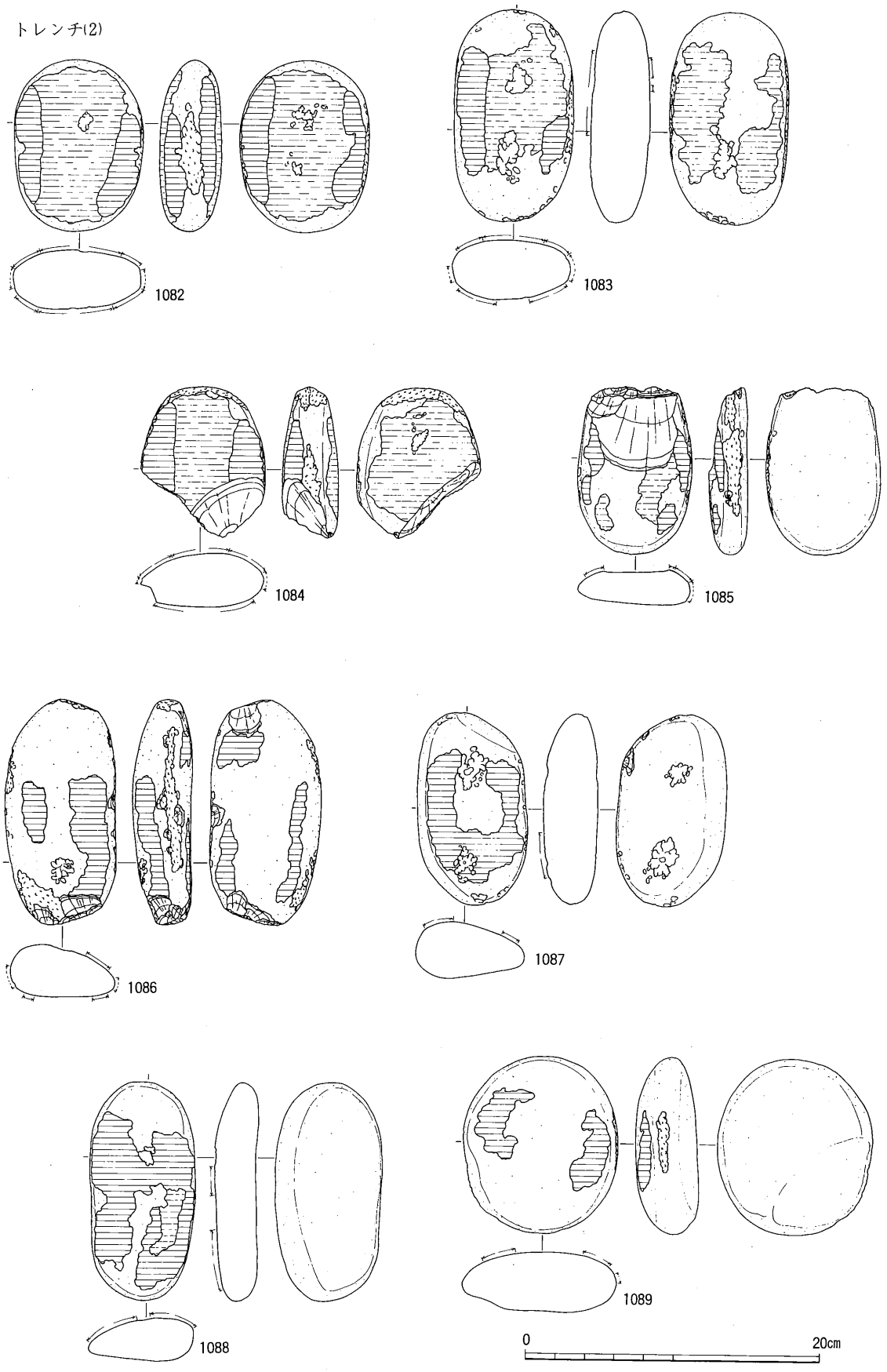


図160　トレンチ出土石器実測図

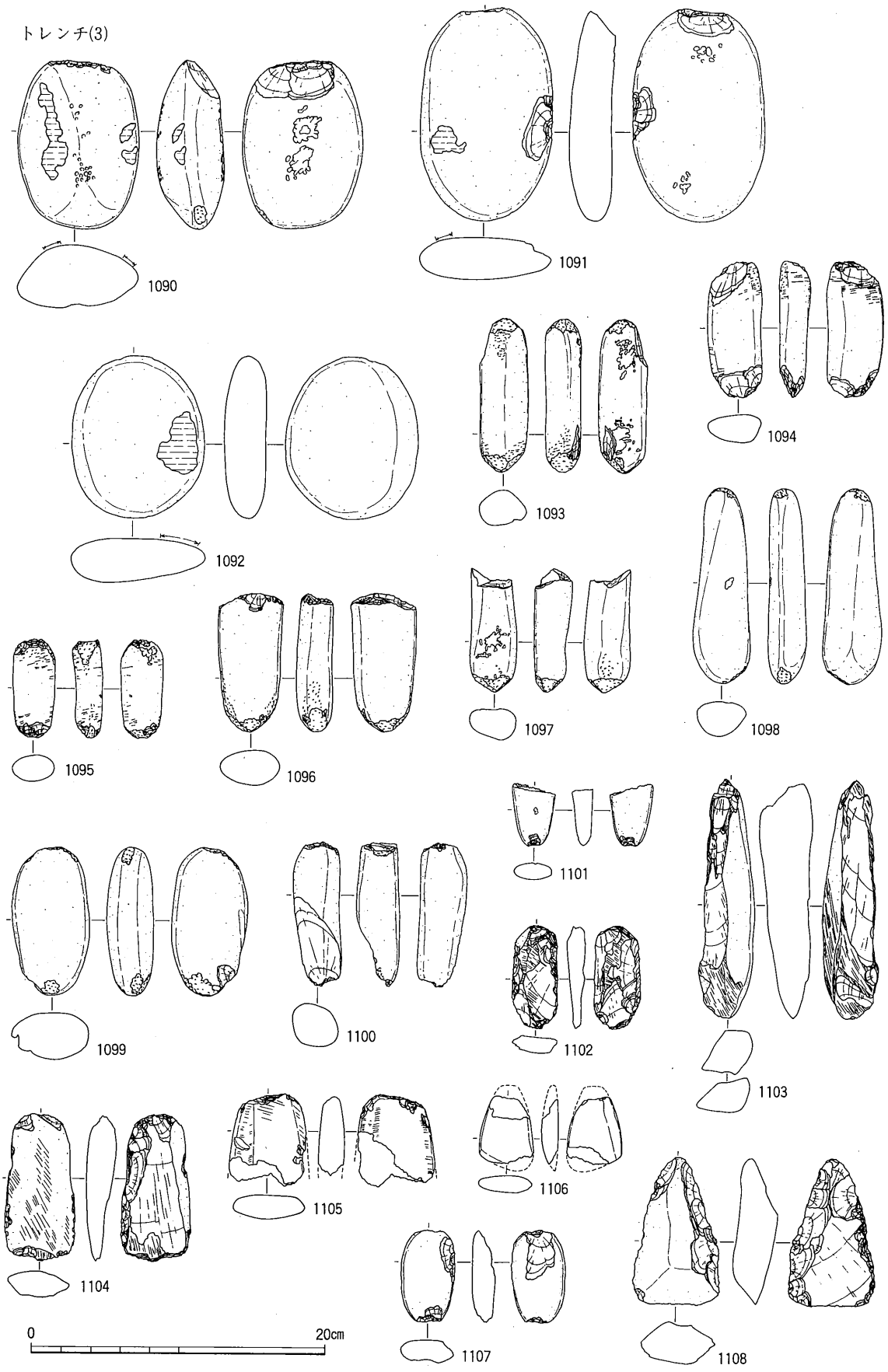


図161　トレンチ出土石器実測図

第3節　第5次調査

Ⅰ　調査の方法と経過

第5次調査は、過去4回にわたって行なわれた発掘調査の整理と、近い将来の報告書作成、発行という村当局の構想を受けて企図された。第1次調査から19年、第4次調査から7年後の、昭和51年8月1日から9月3日までの約1箇月を用して実施されたもので、過去の調査の若干の補足という点も含めて、次の5点を当初の調査目的とした。

図162　第5次調査全体図

① 遺跡内における土層の観察と把握

② 遺物の平面および垂直的な分布状態の観察による遺物包含層の把握

③ 住居址等遺構の発掘過程の詳細な記録化と重複関係の把握

④ 住居址埋土からの遺物の出土状態の観察

⑤ 遺構外での遺物出土のあり方

調査では、第4次の第17トレンチ北東の空地、BU15地点を中心とした10m×10mの範囲に25グリッドを設定し、後にA-1グリッドおよびA-2グリッドに接してA'-1グリッドを拡張し、調査区北東に2m×2mのグリッド1箇所を設けたが、遺物包含層の下まで調査したのは、A'-1、A-1・2・3、B-1・2・3と調査区北東の計8グリッドであった。各グリッド間には幅20cmの土層観察用の畔を残して掘り下げるとともに、遺物1点ごとに出土地点を記録し、遺物台帳を作成した。調査団は、友野良一団長以下、小木曽清・丸山やよい・赤羽義洋・宮沢良人・小原晃一・原明芳等を主要メンバーとして構成され、地元研究者多数の協力を得た。なお、毎日の調査経過は調査日報(『なかこし』)として記録し、発行している。

調査区内の土層については、その観察と把握が調査目的のひとつでもあったため、できる限り多くの断面を観察し、記録化することにつとめたが、結果的には土層の状態は微妙で識別は容易ではなかった。遺構外には、I層表土(耕作土)、II層黒色土、III層黒褐色土が存在し、以下はソフトローム上部となった。また、調査区内の一部には埋め土と思われる土層が最上部に位置する箇所も見られた。なお、III層は住居址埋土と近似し、肉眼での区別は不明瞭で、住居址竪穴外のIII層が竪穴内へ短期間に流入したという考えが調査時には支配的であったため、竪穴内埋土の一部をIII層として扱ったが、このIII層も含め、土層については報告書記述の段階で番号等を整理し、遺物の垂直分布も考慮して再検討した上で、竪穴内埋土と遺構外土層とを区別して表現してある。一方、遺物の包含はI層下部およびII層それにIII層上半部に多く、生活面についてはII層下部からIII層中位付近と考えた。また、調査では標高を導き出してB.M.を設定したのだが、後に作成された現地形図[(1)]と重ねてみると、B.M.から算出した地表面の方が約3m低くなってしまうため、調査の際用いた標高はカッコ付きで記載してある。

II 遺構と遺物

1 住居址

1) 53・54号住居址(図163・166)

調査区南西のA-1、A'-1グリッドを主体に検出され、全体の4分の1から3分の1を発掘した。

調査開始後、A-1グリッドを中心に遺物が集中して出土したため、下部の状態をさぐるべくサブトレンチを入れて掘り下げを行なった。その結果住居址床面に達したので、住居址平面プランを確認する目的で全体を徐徐に掘り下げ、隅丸(長)方形と思われる平面形の一部を捉えたが、その北壁、東壁とも不安定であった。このため引続き床面と壁の精査を行なったところ、北壁および東壁付近で周溝が2重に巡っていることが判明し、内側の周溝がローム混入土によって埋められた状態にあったため、外側を54号、内側を53号とした。ところが、更に慎重に床面を精査したところ、53号住内に軟弱な貼り床部分が認められ、その下部にも床面が確認できたので、これを57号とした。しかしその後、これ等の住居址相互の新旧関係と平面形を最終的に確認するため、A-1グリッドに接して西へA'-1グリッドを設定し、掘り下げを行なった結果、53号の床面は54号の床面の再使用に近い状態であり、周溝を埋め戻し、壁を外側へ広げた時間

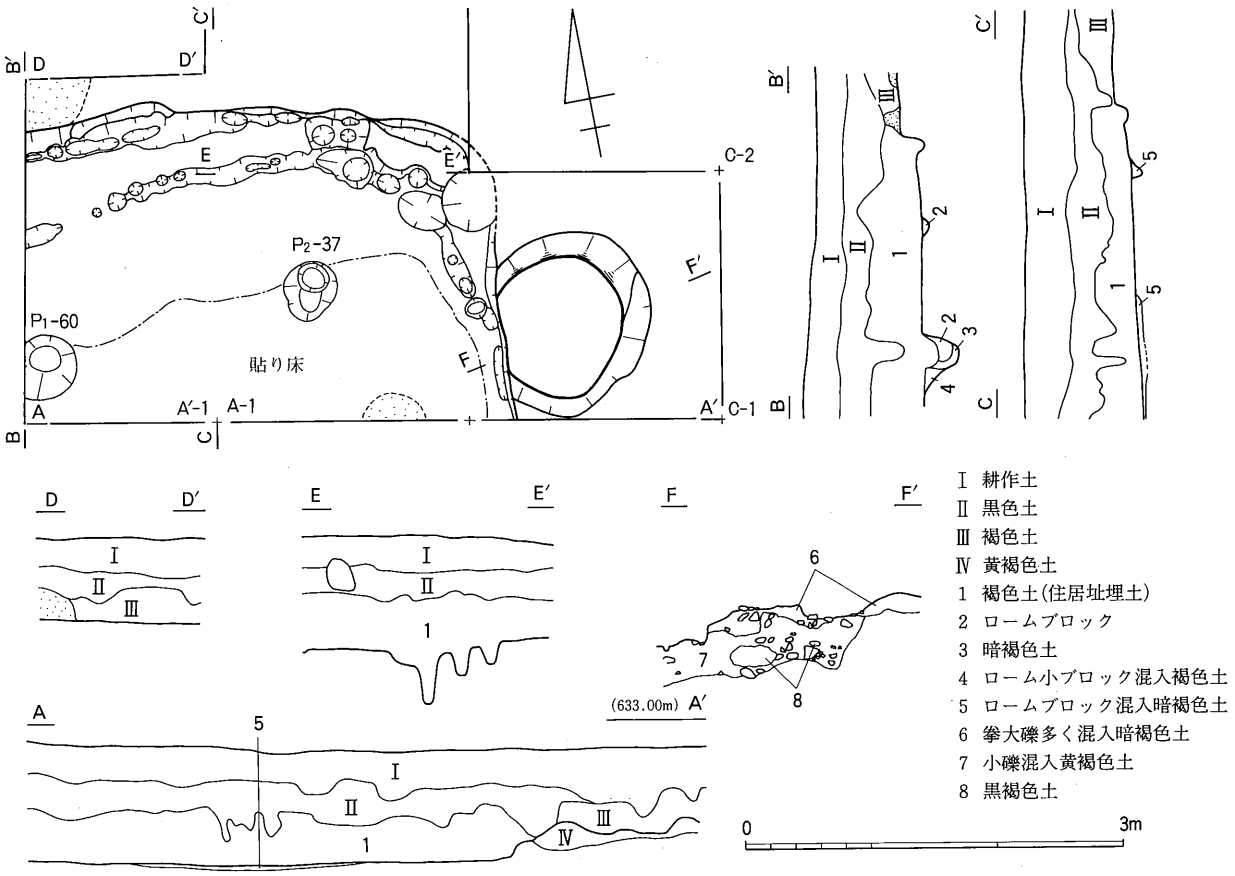


図163　53号住居址実測図

的な連続性が高いと認められたため、最終的には住居の拡張と判断して、外側の周溝の住居址を53ａ号、内側のものを53ｂ号とし、57号としてきた住居址を54号とすることとした。従って新旧関係は、54号→53ｂ号→53ａ号という順に新しくなる。この掘り下げの過程では、埋土上のII層が住居址中央部でより深くなっていく状態が観察された。

53号住の内部施設としては周溝のほか、主柱穴P_1・P_2があり、53ａ号住は同ｂ号住の主柱穴をある程度手を加えて使用していると思われる。床面は54号住上の貼床部分では軟弱であったが、その他の部分では堅く明瞭であった。なお、54号住に重なる貼床上にわずかな焼土とそれに接してロームブロックが分布する箇所があり、炉址と思われる。また、北側の壁外に焼土が認められたが、土層断面からみて53号住に先行するものと判断した。更に住居址東側にはロームマウンドが重複しており、これも時間的に住居址に先行すると認められた。

遺物は、平面分布をみると当然のこととして住居址の範囲に多いが、周辺部からも一定量出土している。層位的にはII層からＩ層中位に多く、垂直分布をみると、目視による土色の違いよりもさらに急角度で住居址中央に向かって低くなるレンズ状に分布している状態が観察される（付図）。この傾向は図164の土器の出土状態に表われているようにII期に顕著で、Ｉ群土器をみるとＩ期はむしろ上層から下層まで均等に分布しているといった方が良い。その結果住居址内の下部の壁側は、量は少ないもののＩ期の土器が卓越している。A-1、A'-1グリッド出土として取上げた土器を含めると、量的には、Ｉ層でＩ期15点・II期36点、II層でＩ期（77）177点、II期（78～95・129～145）431点でともにII期が７割を占めるが、１層上位（拓影図ではA-1・A'-1グリッドIII層としてある）ではＩ期（100～103）267点、II期（104～124・

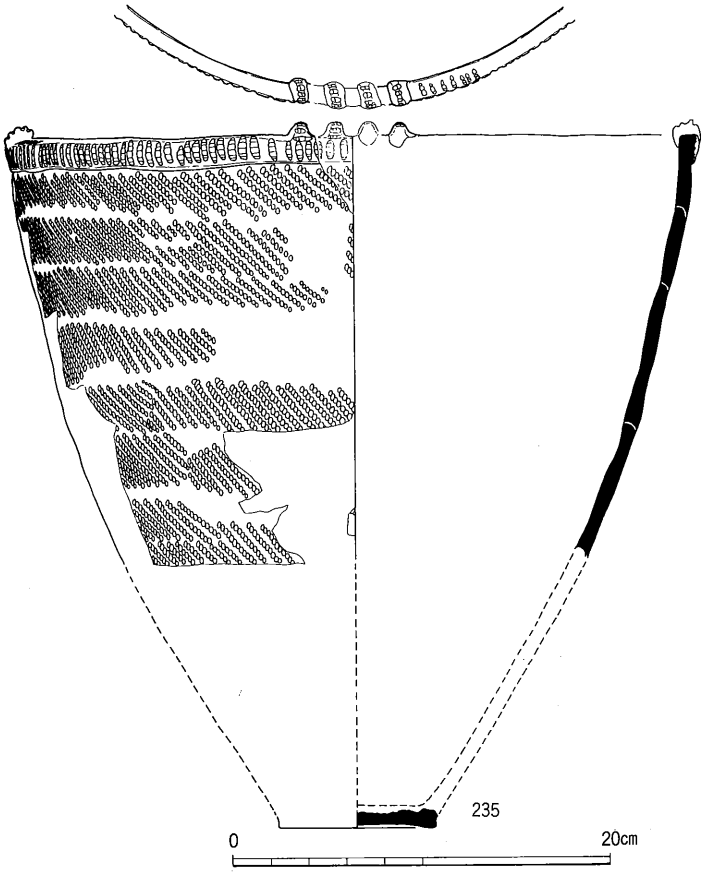


図164　53号住居址出土土器実測図

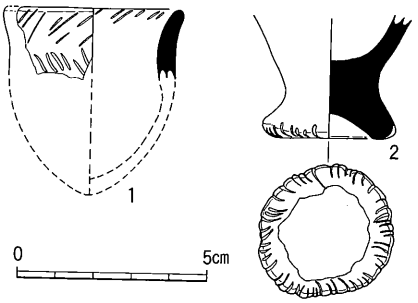


図165　土製品実測図

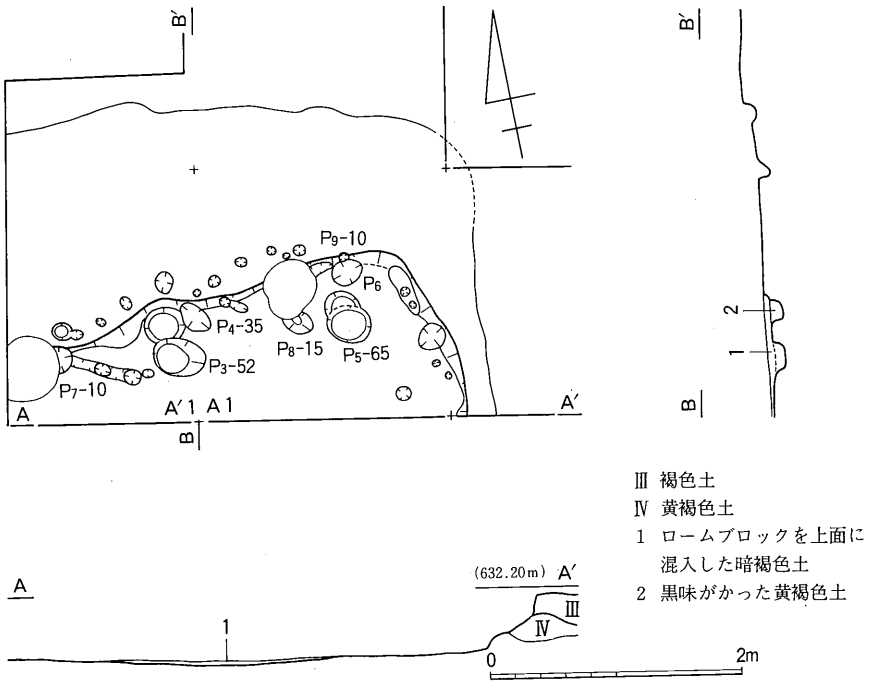


図166　54号住居址実測図

149～178）495点でII期は6.5割となり、１層下位（拓影図では53号住居址とだけしてある）ではＩ期（１～３）236点、II期（４～35）210点とII期が５割を下回る。石器は、Ｉ層から石鏃（１・２）２点、石匙（３）１点、叩石（82・83）２点、II層から石鏃（４～10）12点、石匙（11）１点、スクレパー（12）15点、打製石斧・横刃型石器（84）・礫端叩石（87）・磨製石斧（88）各１点、叩石（85・86）３点、１層上位から石鏃（13～19）10点、石匙（20・21）２点、石錐（22・23）２点、スクレパー（24・25）５点、叩石（89）２点、礫端叩石（90）１点、１層下位から石鏃（26～32）12点、石匙（33）・石錐（34）・打製石錘（35）各１点、スクレパー（36～38）８点、石皿（91）１点が出土している。極端に集中する地点や器種はないが、叩石や礫端叩石が１層下位にない点は注意される。他にミニチュア土器２点（図165）がある。

54号住は全体の３分の１程度を発掘したと考えられるが、53ｂ号住構築の際に上部を削平されたため、壁高わずか４～５cmが残っていたにすぎない。周溝は不明瞭で、北壁に沿ってその外側に小ピット列が検出された。主柱穴としてはP_3・P_5が考えられ、P_4・P_6が旧柱穴であった可能性もある。53号住よりやや小形の平面隅丸長方形で、６本柱であったと推測される。遺物は土器がごくわずかで、Ｉ群のＩ期(45～47)７点、II期（48・49）３点とIII群（50）２点だけである。

２） 55号住居址（図167）

Ａ-３、Ｂ-３グリッドを中心に、全体の３分の１から４分の１が発掘されたにすぎない。調査開始後両グリッドからは遺物が多く出土し、Ａ-３、Ｂ-３グリッド間にサブトレンチを設けて掘り下げたところ、住居址の床面が認められたため、平面形を把握すべくIII層付近を精査したが、東側の輪郭は極めて不明瞭であった。このため床面まで掘り下げた後、あらためて東壁部分の調査を行なった。しかし、ローム混りの土層や、一部貼床と思われる箇所もあり不安定で、この55号住の東側に更に１基遺構が存在したか否かについては、残念ながらはっきりした結論をうるまでに至らなかった。

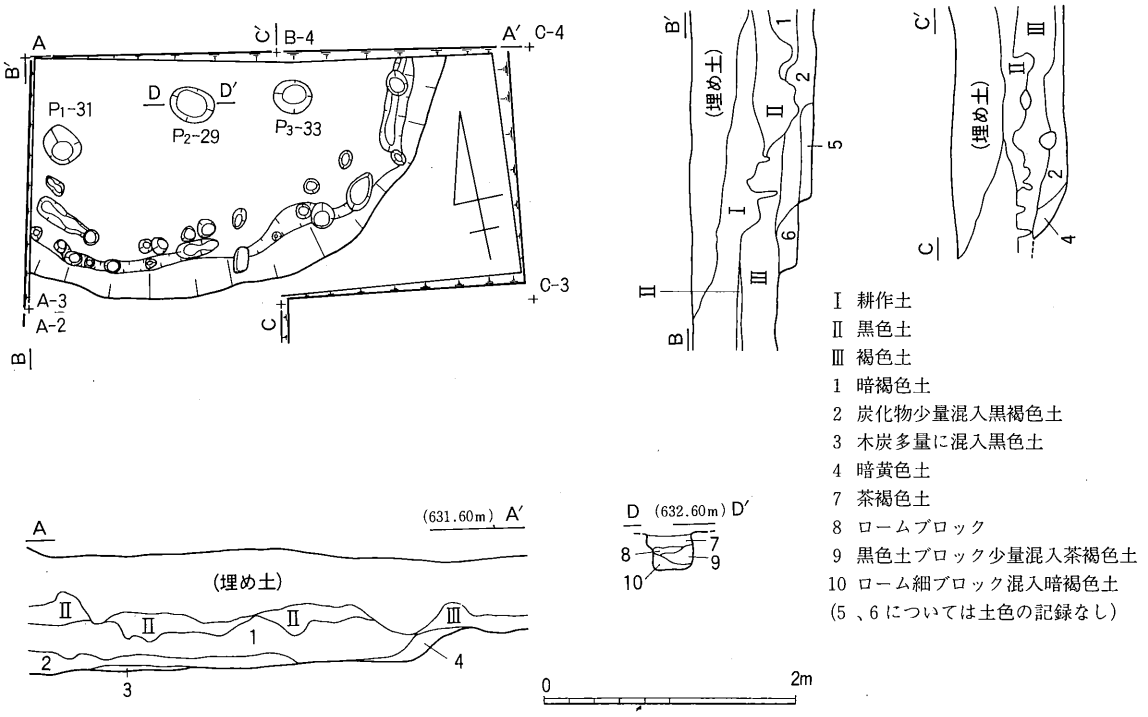


図167　55号住居址実測図

住居址内には、壁際に周溝と小穴列が断続的に二重に巡っており、土層断面から、内側のものがより新しいと思われる。また、主柱穴の可能性のあるP₁～P₃のうち、P₁には上面にロームが貼られており、ともに建て替えられた痕跡と考えられる。床面の状態は住居址中央部を中心に非常に堅く明瞭で、炉は今回の調査区内からは発見されなかった。

遺物の量は少ない。上層も含めると、木炭の包含が目立った2・3層の上から1層上部に多く、遺物のごく少ない層を狭んで床上10～20cmに濃密に分布しているのだが、53号住のように明確にレンズ状に落ち込む状態にはない。南壁際には黒曜石の剝片・屑片が集中して出土した箇所があった。土器は全て小破片で、I群に限るとI期が卓越し、上層で7割、埋土では8.5割を越え、遺物分布の特徴となっている。A～C（51）は稀で、D・Eが主体と考えられる。II期（52～63・199～202・204・228・229）はII層に多いものの床上10cm位まで散見される。石器は、埋土から石鏃（51～53）6点、石匙（54･55）2点、石錐（56～58）3点、スクレパー（59～63）10点、横刃型石器・叩石（93）各1点と黒曜石の剝片65点・屑片139点・両極打法痕のあるもの19点などが出土している。なお本址上層の石器には、石鏃（41～43・46～49）10点、石錐（44）2点、打製石錘（50）・叩石各1点、スクレパー（45）4点がある。

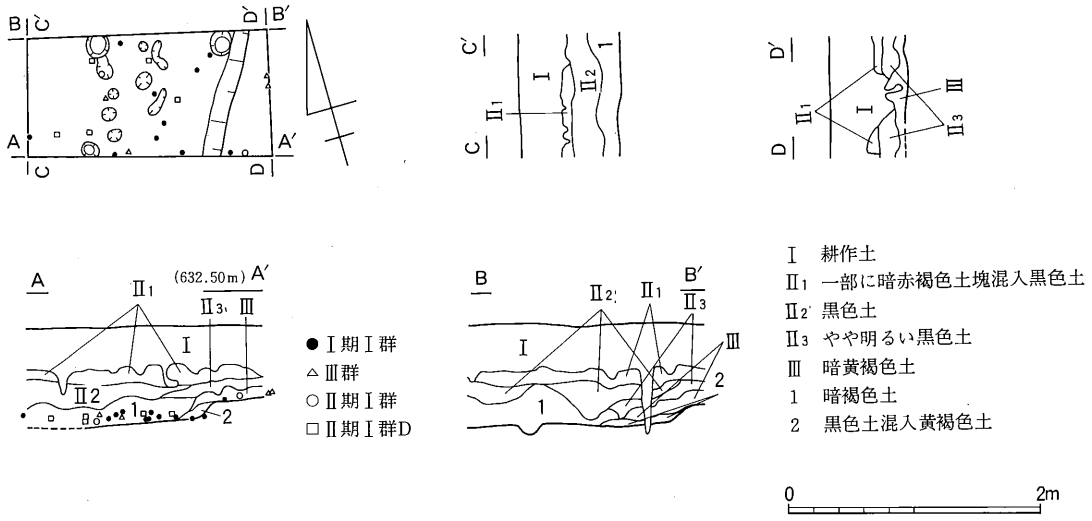


図168　56号住居址実測図

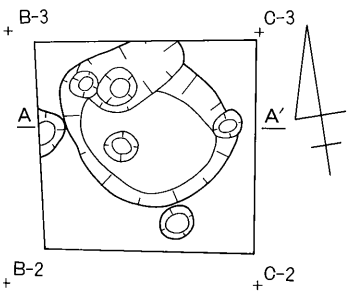
3）　56号住居址

土層の状態を観察するために、主調査区北東約10mの地点に2m×1mのグリッドを設定したが、掘り下げた結果またも住居址に当ってしまった。このグリッドでは基本土層のうちII層を新たに1～3まで細分した（図168）が、土層断面の観察では当時の生活面はほぼIII層内にあったと考えられ、53～55号住とほぼ同様の結果が得られた。この住居址は全体のごく一部を発掘したにすぎず、周溝がないことは確認できたものの、柱穴としてP₁・P₃を想定したが根拠はなく、床面も貼床であろうかと思われたけれど、下部を調査するまでに至らなかった。

遺物はごく少なく、土器は、同一個体かと思われる繊維を含んだ粗雑な作りの土器（69～73）の他は、I群のI期7点、II期1点のみで、石器も石鏃1点、スクレパー1点と黒曜石の剝片類がわずかである。

2　土壙

B－2グリッドに検出され、壁、床とも明瞭で、内外6箇所に小ピットがある。壁高十数cmで、遺物は埋土上部から石鏃1点（64）が出土したにすぎない。



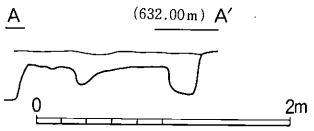


図169　土壙実測図

3　ロームマウンド

53号住東壁に重複してB－1グリッドに検出された。当初マウンド上に集礫が認められたため集石遺構とも思われたが、カッティングによってロームマウンドであることが確認できた。マウンド内には花崗岩、砂岩、緑泥片岩などの拳大の自然石が含まれていた。遺物の出土は皆無である。なお、このマウンドの東隣りにもロームマウンド1基の存在が認められたが、調査には至っていない。

なお、グリッド出土石器は多い。石鏃（65～74）30点、石匙（75）2点、石錐（77）4点、打製石錘（78）1点、スクレパー（79～81）20点、打製石斧（94）・磨製石斧・横刃型石器各2点、叩石（95）10点、礫石錘（96）・砥石各1点など多彩である。

註1　「西原土地区画整理事業現形図」1978

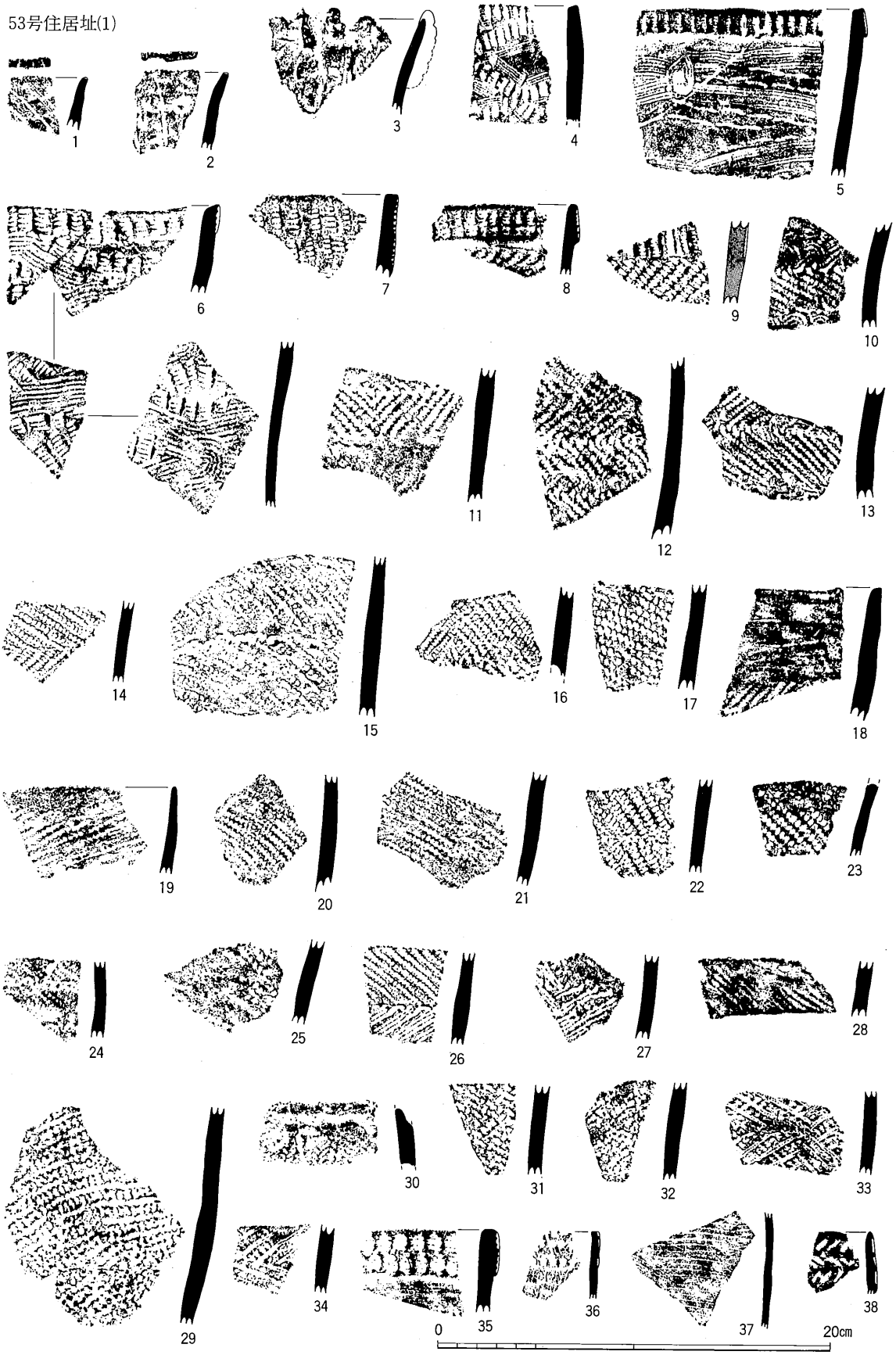
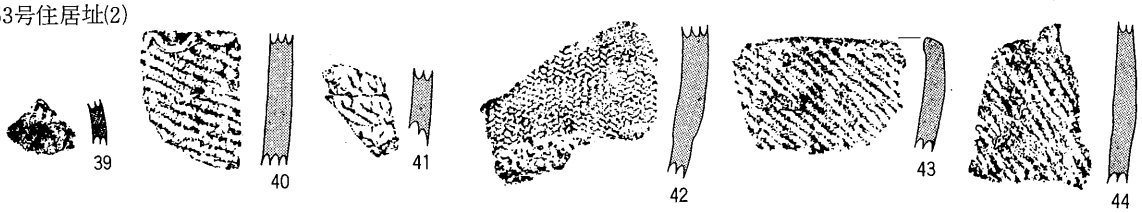
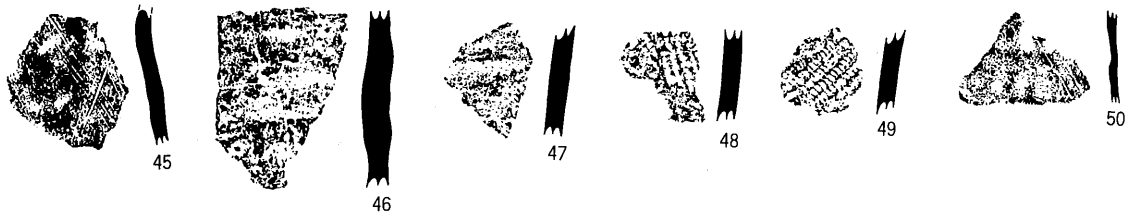


図170　53号住居址出土土器拓影

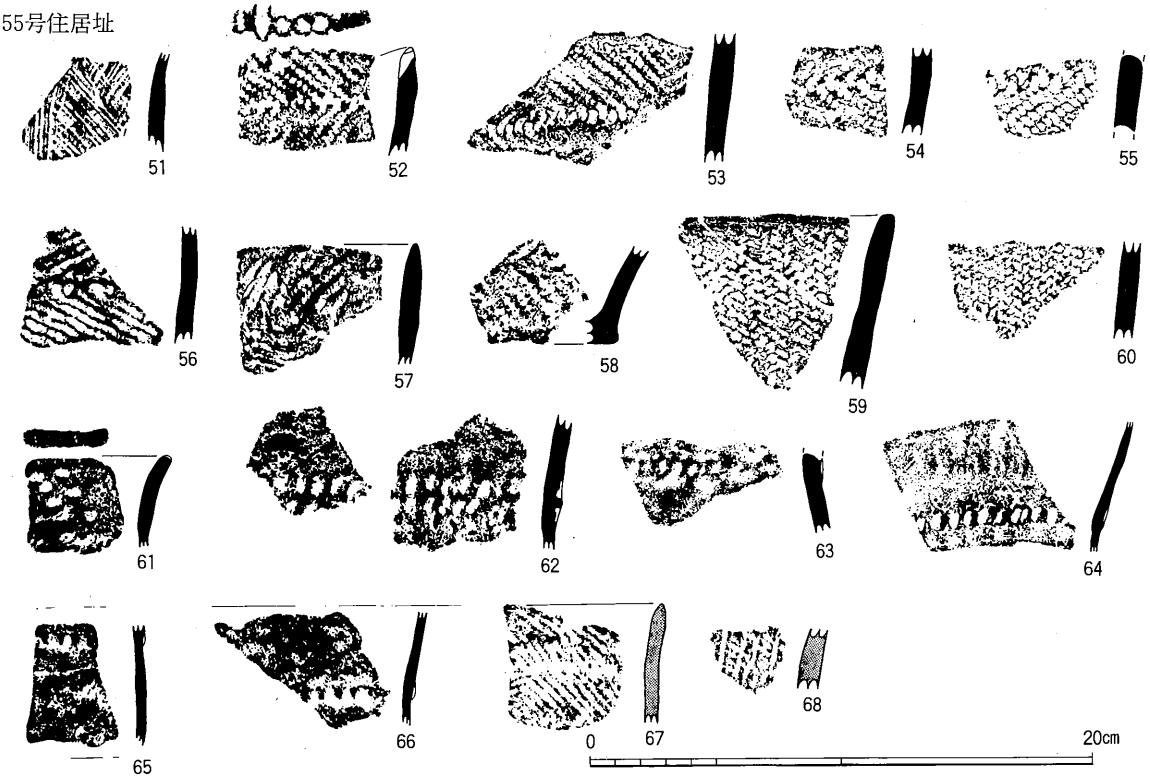
53号住居址(2)



54号住居址



55号住居址



56号住居址

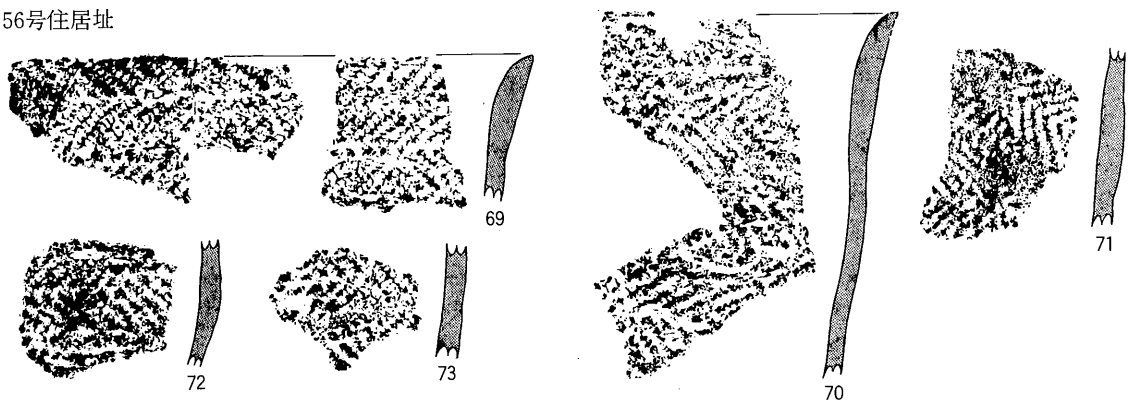


図171　53・54・55・56号住居址出土土器拓影

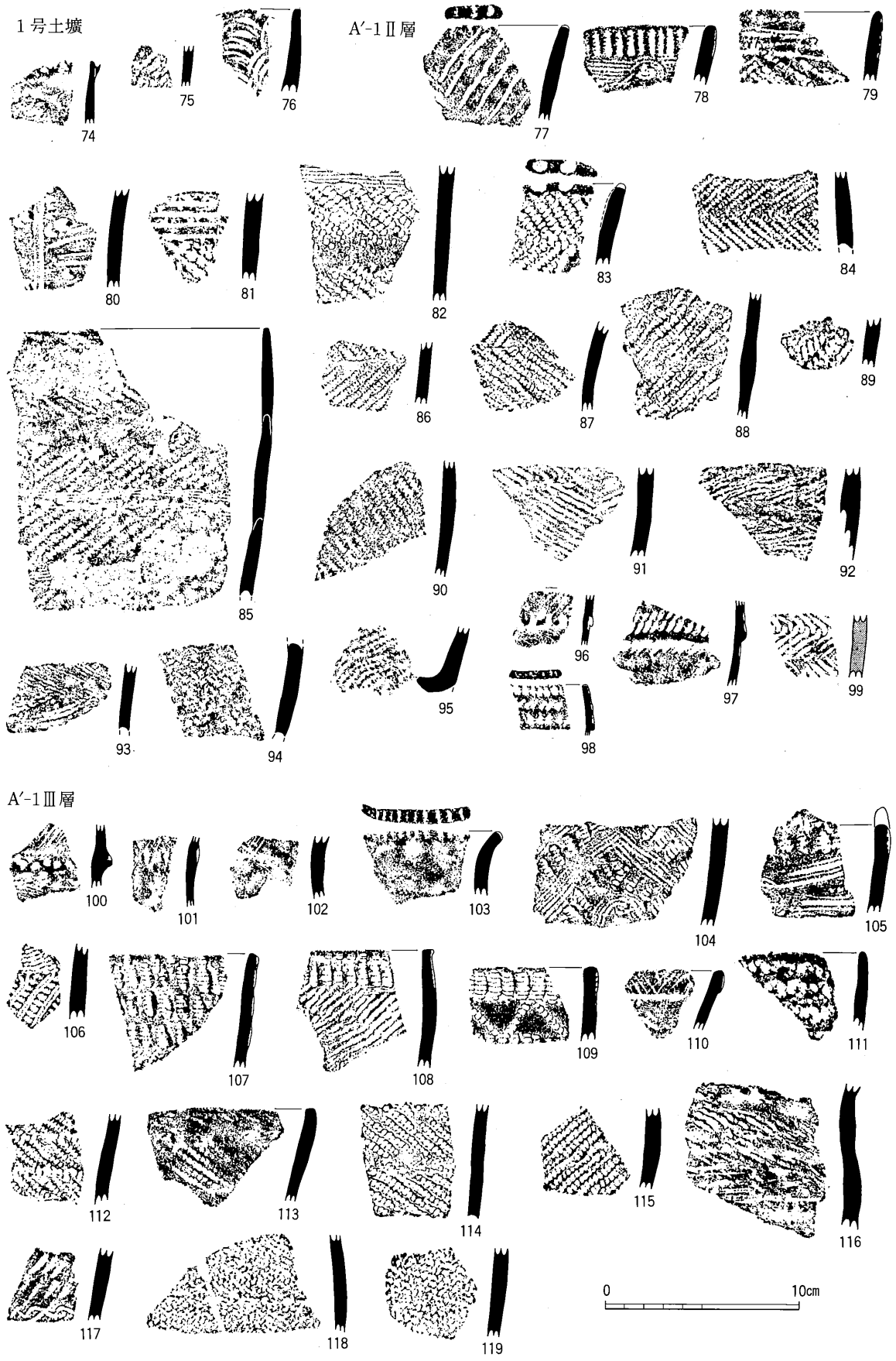


図172　1号土壙、グリッド出土土器拓影

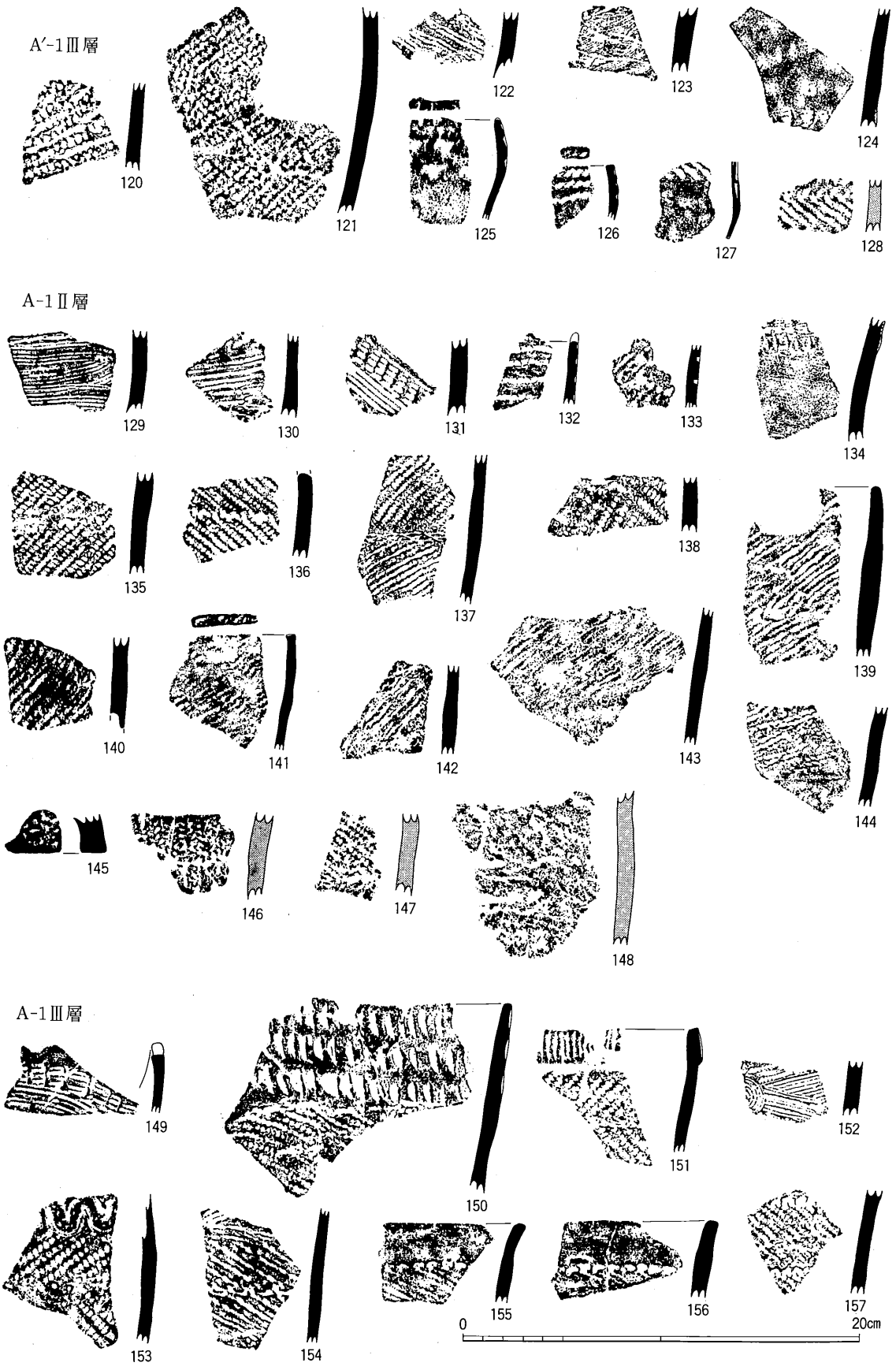


図173　グリッド出土土器拓影

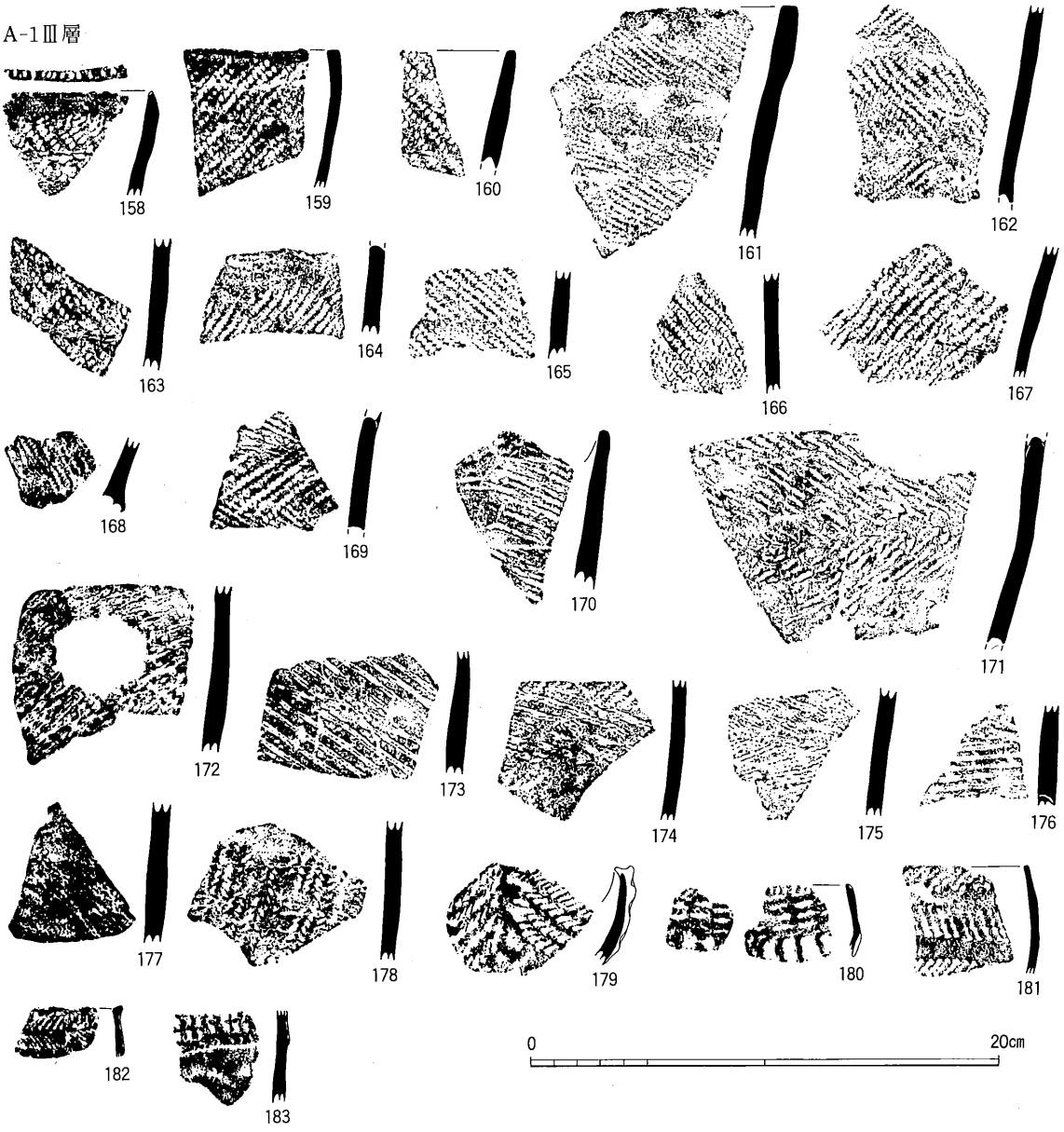


図174　グリッド出土土器拓影

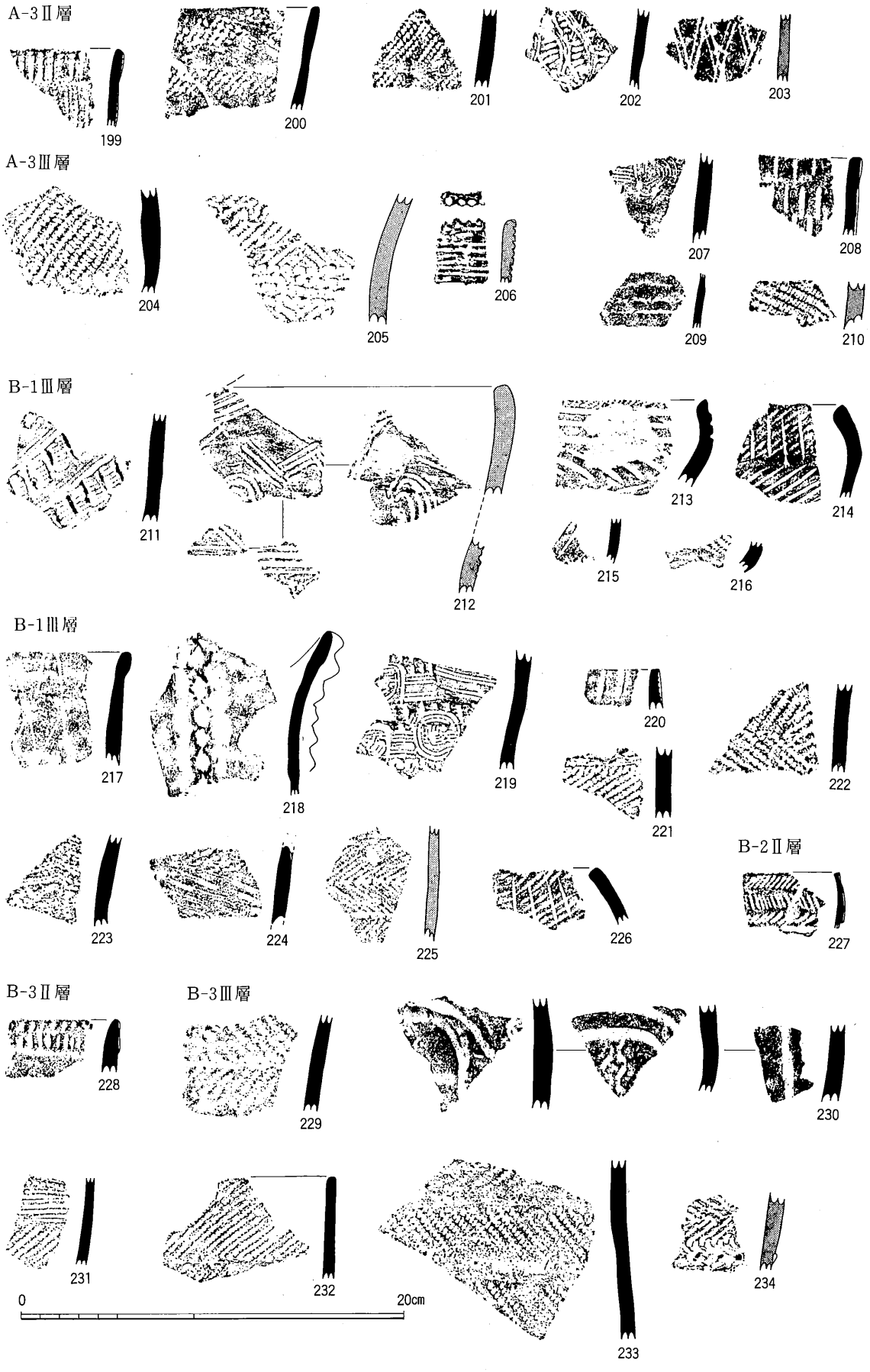


図175　グリッド出土土器拓影

53号住居址上層

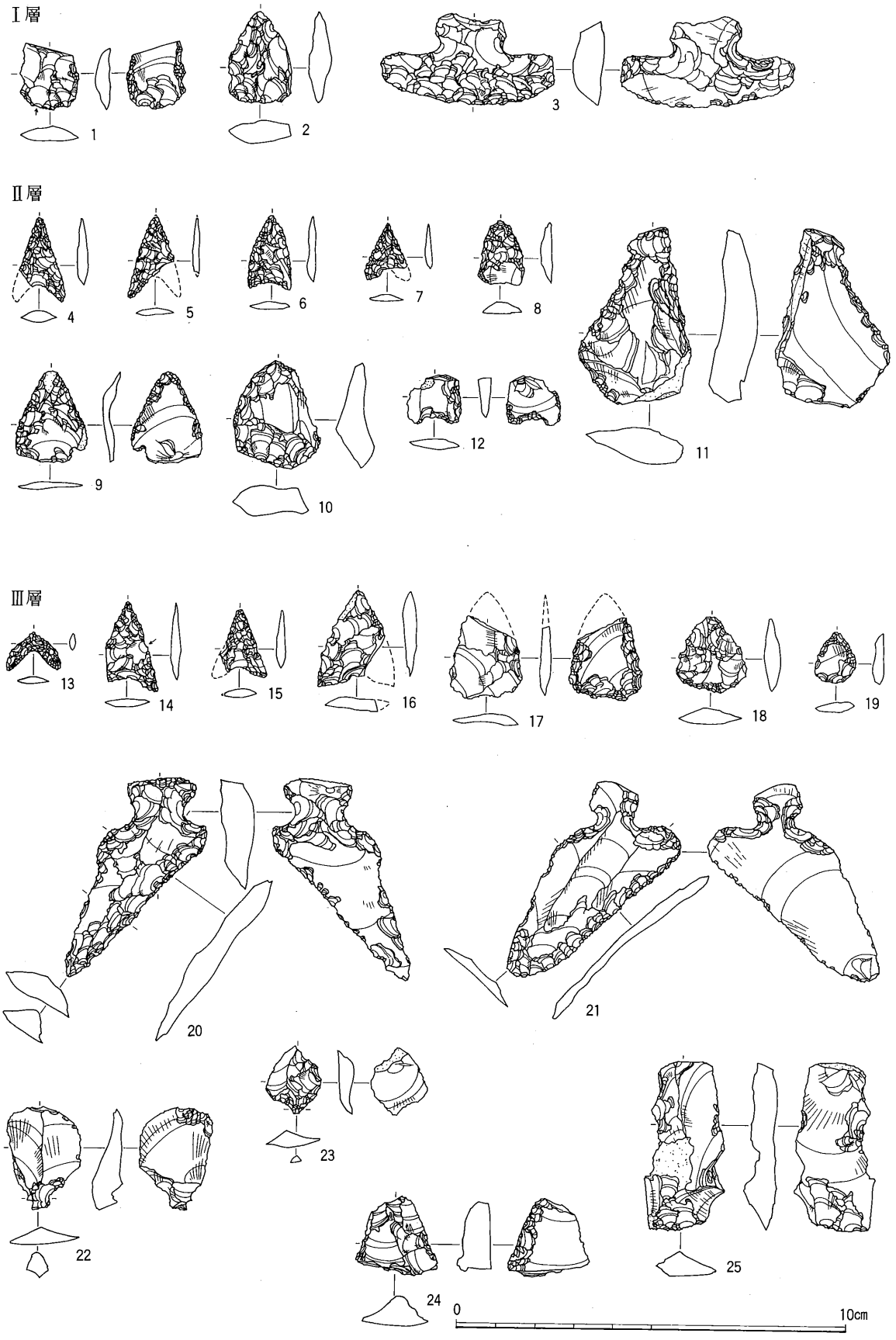
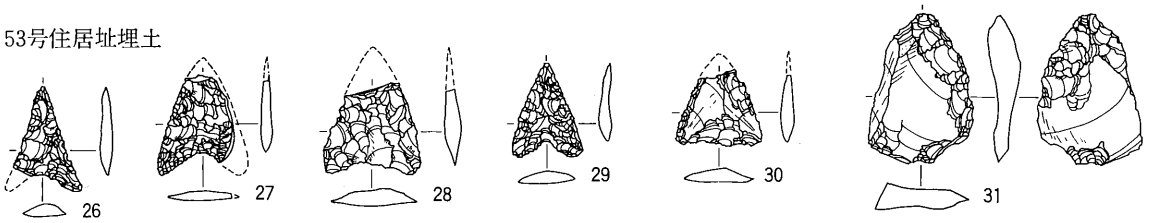
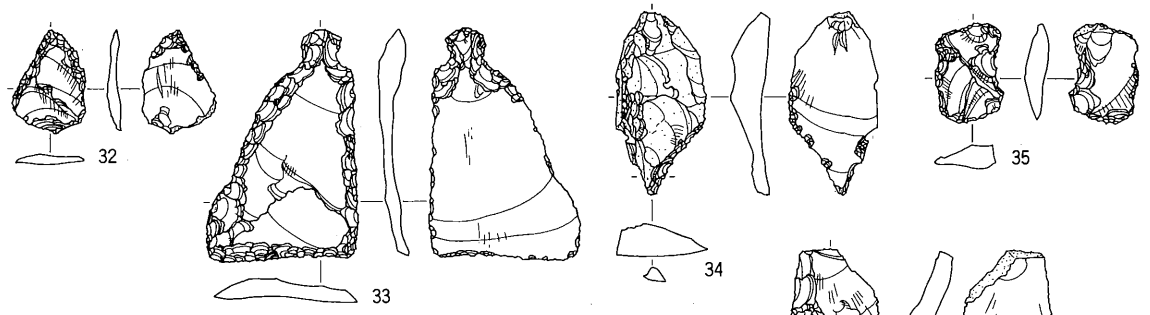
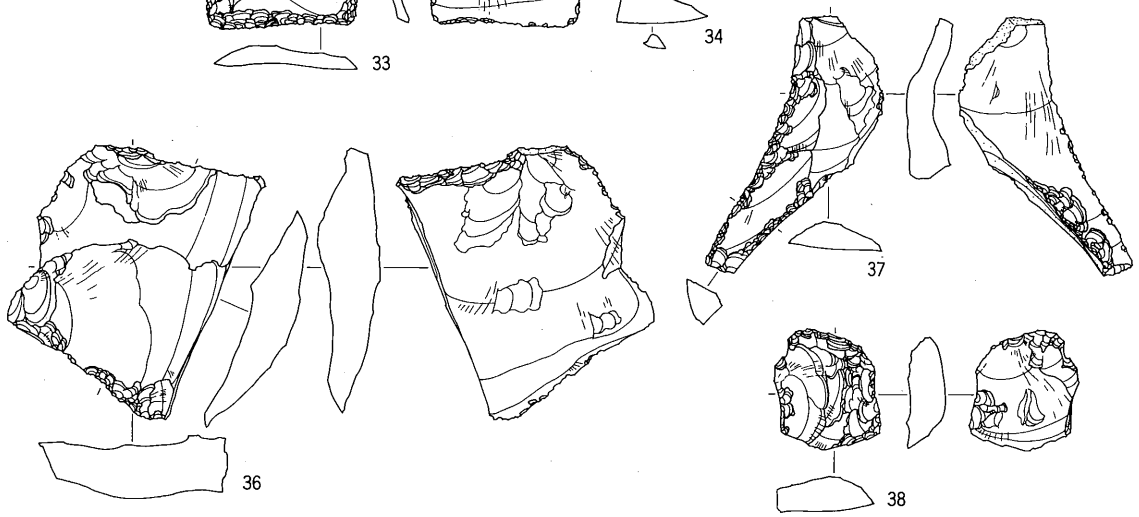


図176　53号住居址出土石器実測図

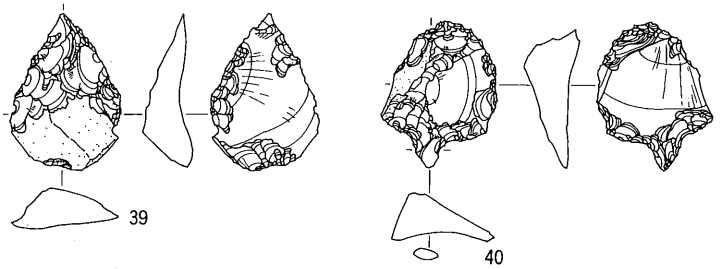
53号住居址埋土





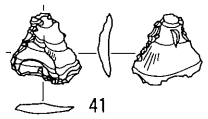


層位不明



55号住居址上層

Ⅰ層



Ⅱ層

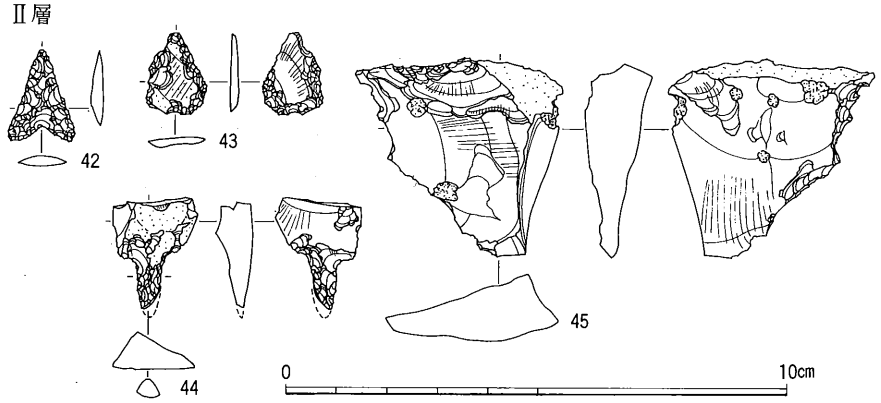


図177　53・55号住居址出土石器実測図

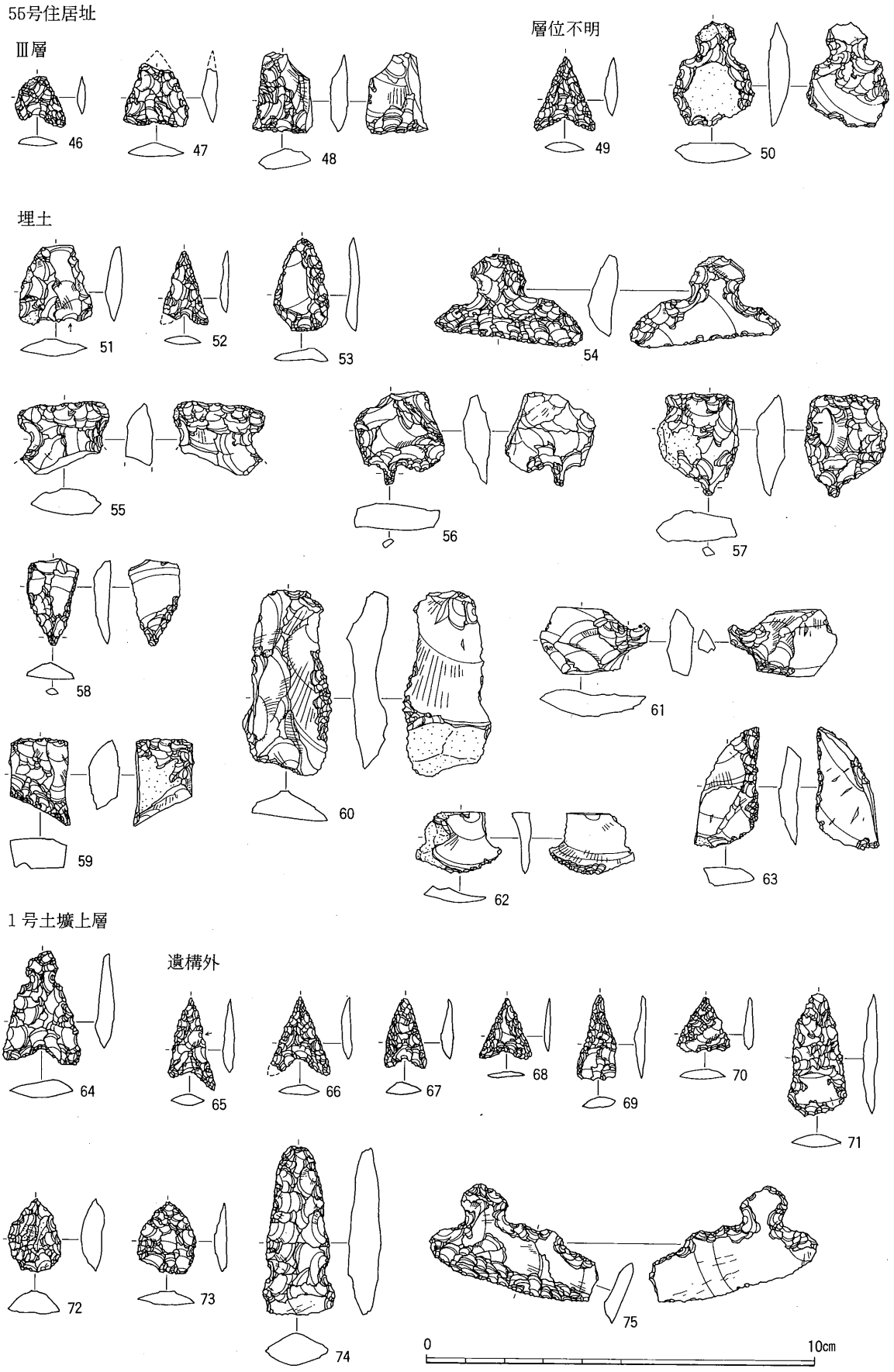
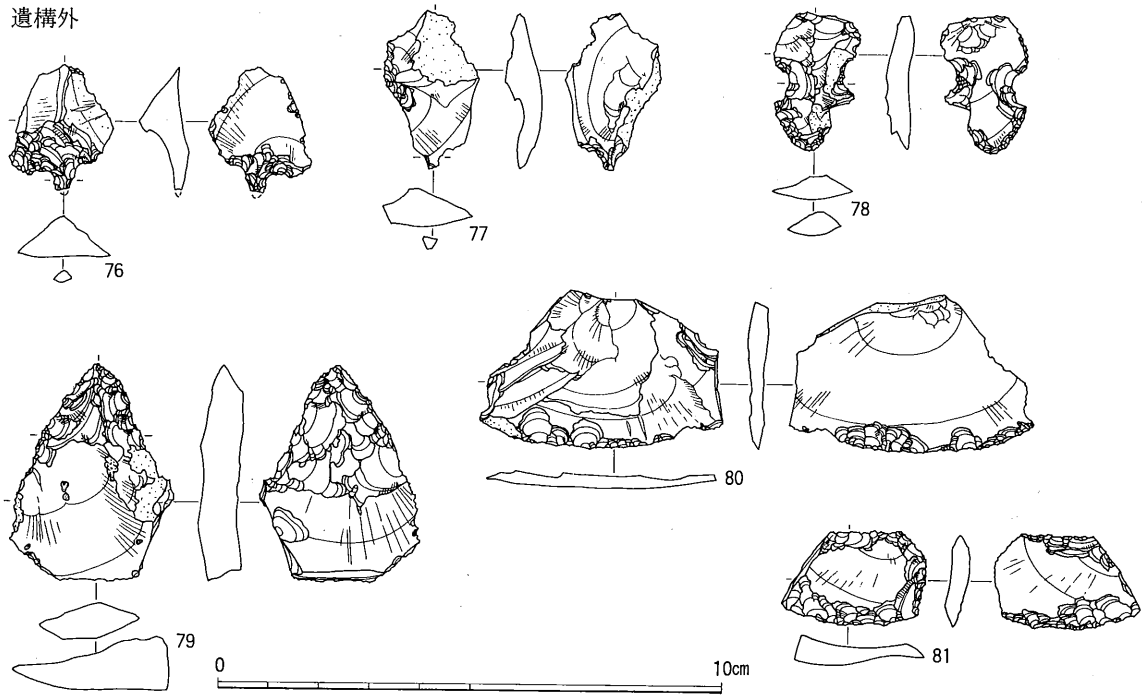


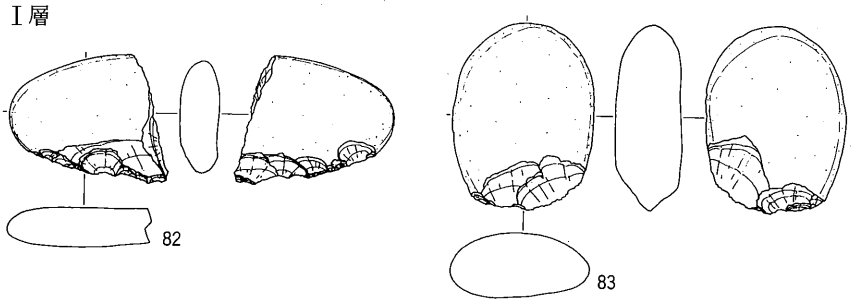
図178　55号住居址、1号土壙、遺構外出土石器実測図

遺構外



53号住居址上層

Ⅰ層



Ⅱ層

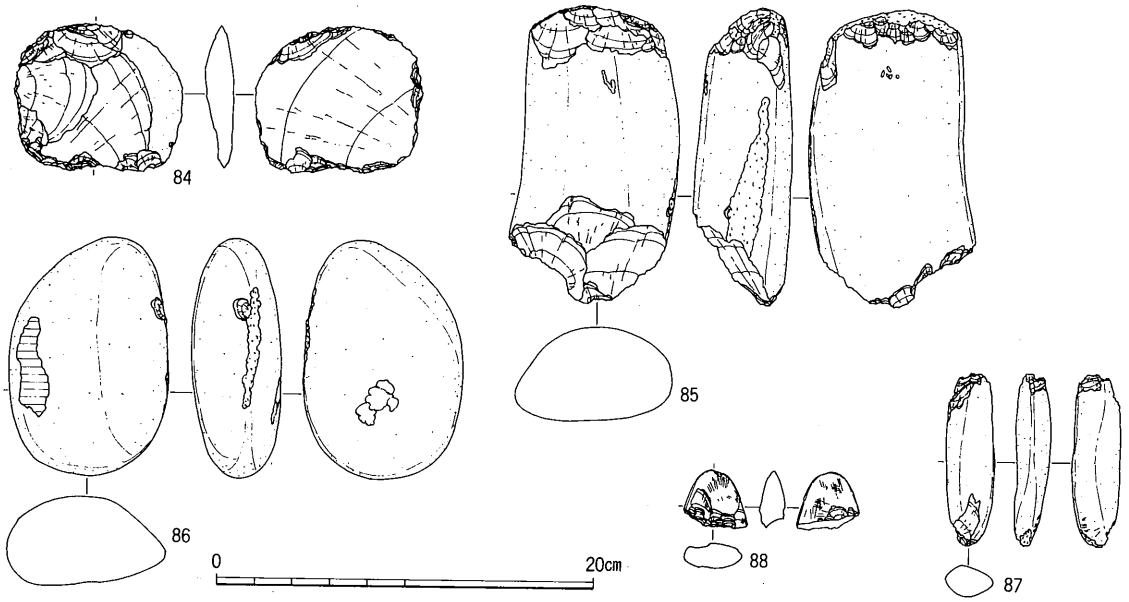


図179　遺構外、53号住居址出土石器実測図

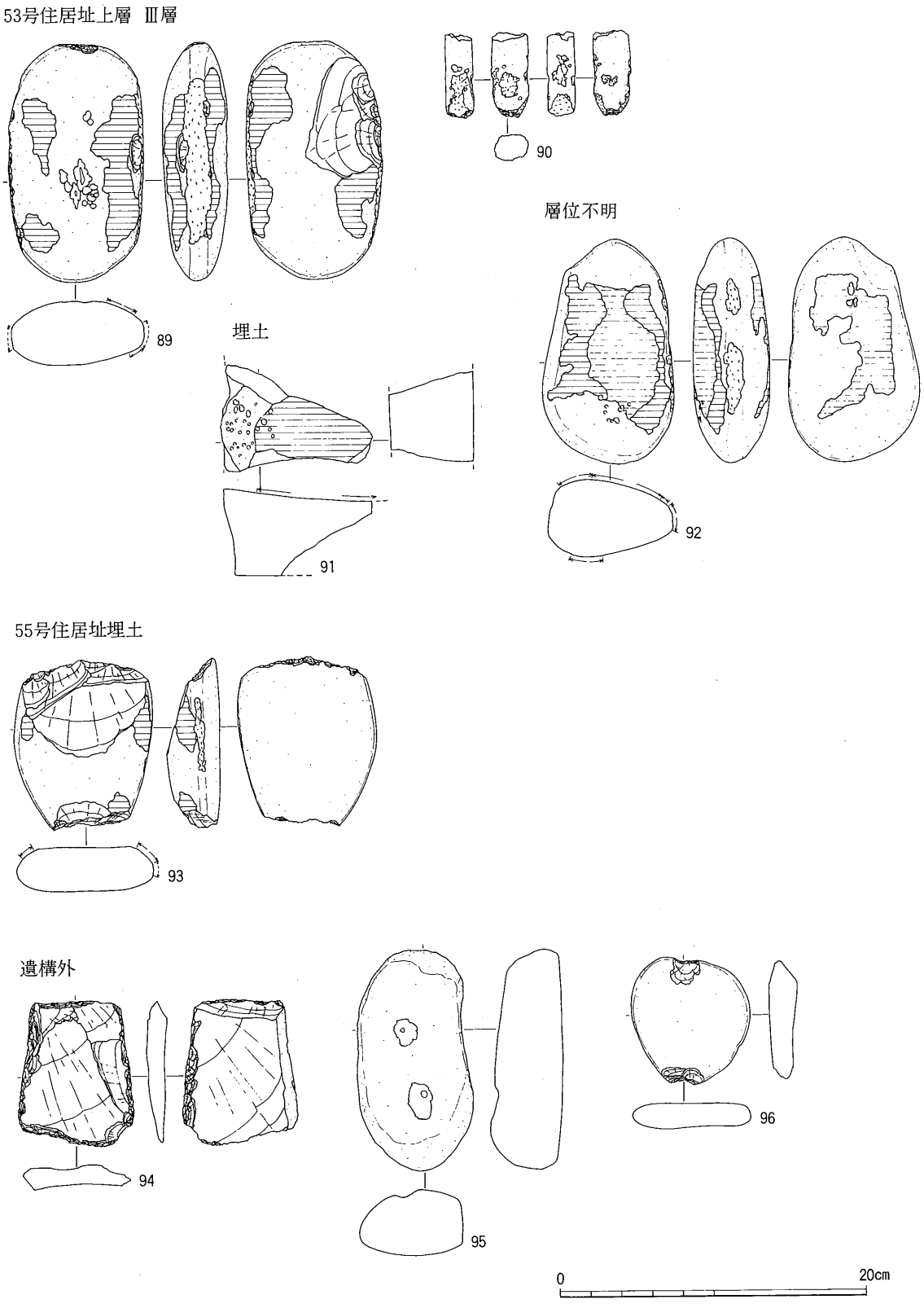


図180　53・55号住居址、遺構外出土石器実測図

第4節　第6次調査

I　はじめに

第6次調査は、昭和52年に、旧宮田中学校跡地の宮田村役場庁舎建設予定地（ＢＤ～ＢＩ—02～09）と、そこから南東へ170mの下位段丘上の個人住宅建設にかかわる箇所（ＡＮ・０—18～20）との2箇所で行なわれた。後者は、前者の発掘調査開始後、それを中断して急拠実施されるに至ったものである。

庁舎建設予定地の調査期間中に中越遺跡一帯の表面採集による遺物分布調査を行なったところ、縄文時代の前期および中期の範囲、それに南の一段低い段丘上に後期の遺物散布地を確認することができたため、前期部分を第1地区、中期部分を第2地区、後期部分を第3地区と仮りに区別しておいた。それに従うと先の調査地点2箇所は、前者が第1地区、後者が第3地区に含まれることになる。そこで今日までは、同じ調査団による期間が入り組んだ発掘調査であることを重視してそれ等を一括した上で、ロケーションの異なる2箇所を区別するため、後者、つまり縄文後期の箇所のみに、第3地区または第3（III）区の呼称を付してきた。改変することも不可能であり、ここでもやむを得ず一括するが、都合上、以下では「役場庁舎予定地」と「第3地区」に大きく分けて記述してある。

調査では、まず、庁舎予定地内3月22日にグリッドを設定して3月25日から29日までグリッド内の掘り下げを行ない、この時点で急拠第3地区内で個人住宅建設にかかわる発掘調査を行なうこととなったため、調査を中断して4月1日から5月7日まで第3地区内の調査を実施し、庁舎予定地の調査は5月1日から再開した。しかし、この間4月14日から21日まで田中南遺跡内の個人住宅建設予定地の発掘調査を緊急に実施し、さらに5月29日以降中越遺跡内の個人住宅建設予定地を対象に第7次調査を開始したため、庁舎予定地の調査は、6月12日残っていた測量作業を行ない、ようやく終了した。調査組織と参加者は次のとおりである。

調査団長　友野良一　調査員　赤羽義洋・小木曽清・丸山やよい　調査補助員　宮沢良人・荻原茂・大平聡・小池幸夫・松井覚　伊那北高校歴史研究部の皆さん

ほかに、小池政美（伊那市教委）、伊藤修（飯島町教委）、田畑辰雄（高遠町宮の原遺跡調査団）、小原晃一（伊南農協）各氏の協力を得た。

II　役場庁舎予定地の調査

1　調査の経過

庁舎予定地は東西約100m、南北約95mと広範囲であったため、主として庁舎本体建設予定地を対象に1辺2mのグリッドを設定し、まず千鳥方式に各グリッド内2m×1mの試掘坑約150をあけ、全体の状況をさぐることから始めた。しかし、全体に旧中学校建設等による土層の攪乱や削平がおこなわれており、特に16列から東側は顕著で、西側でも、Ⅰ層埋め土層の下にII層旧表土層以下が削平されずに部分的に残っている状態であり、縄文前期の住居址1軒とロームマウンドを検出したにとどまった。III層黒褐色土が縄文前期の遺物包含層であり、IV層は黄褐色再堆積ロームである。なお、対象地内北西の旧中学校テニスコート約1100m²については、削平が著しくローム層内まで達していることが確認されたため、発掘の対象か

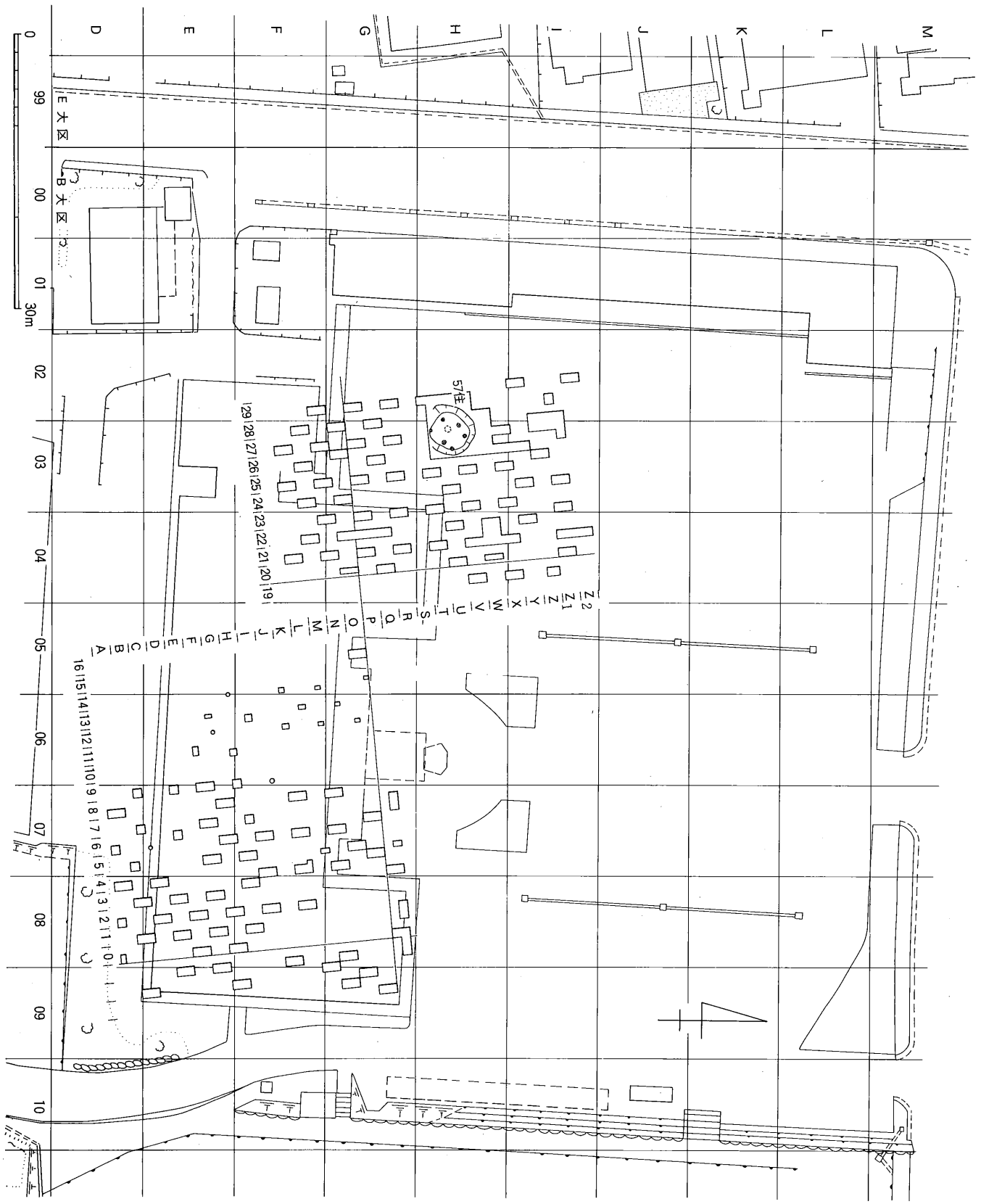
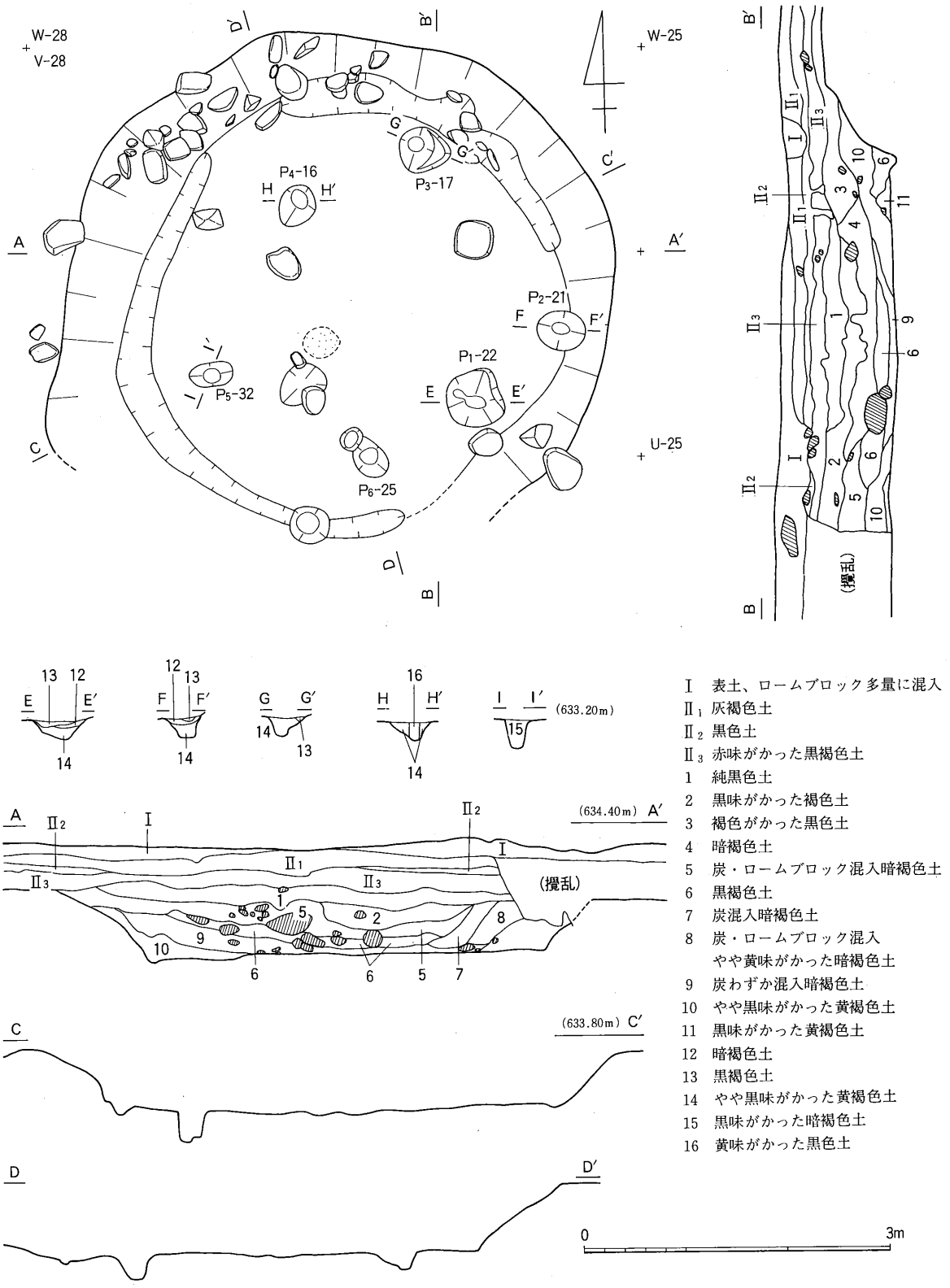


図181　第６次調査役場庁舎予定地全体図



I　表土、ローム ブロック多量に混入
II1　灰褐色土
II2　黒色土
II3　赤味がかった黒褐色土
1　純黒色土
2　黒味がかった褐色土
3　褐色がかった黒色土
4　暗褐色土
5　炭・ローム ブロック混入暗褐色土
6　黒褐色土
7　炭混入暗褐色土
8　炭・ローム ブロック混入
　やや黄味がかった暗褐色土
9　炭わずか混入暗褐色土
10　やや黒味がかった黄褐色土
11　黒味がかった黄褐色土
12　暗褐色土
13　黒褐色土
14　やや黒味がかった黄褐色土
15　黒味がかった暗褐色土
16　黄味がかった黒色土

図182　57号住居址実測図

らは除いた。また、南西の一角は旧校舎の一部が残っていたため、さらに西側の国道153号線に接して民有地の畑地が幅5～6m、長さ28mにわたって残されていたものの耕作されていたため、いずれも試掘調査も実施できなかった経過がある。調査では標高を導き出してB.M.を設定したのだが、それと現地形の地表面の標高とは数mの差が生じてしまったため、図にはカッコ付きで記してある。

2　遺構と遺物

1）　57号住居址（図182～184）

W-20、W-22、X-21およびT-25、T-27、U-26の各グリッド、それにZ-27、O-22、Q-22グリッドなどから遺物が出土し、遺構らしい落ち込みも認められたためこれらのグリッドを拡張して調査したところ、T-25、T-27、U-26グリッド地点で住居址の存在が確認できた。他は20～30点の遺物の出土する包含層で、落ち込みは旧校舎建設時の攪乱によるものであった。

この57号住は、東壁の一部と南壁付近が攪乱により失われているが、壁高60～70cmと保存状態は比較的良好で、III層付近でみつかった落ち込みの平面形は、ほぼ円形に近い。しかし、床面の形態から本来は、N50°Eに主軸をおき、北東壁が張り出した円味をもつ隅丸方形であったと推定される。規模は4.8×4.5m程度であろう。竪穴内中央やや南西寄りに炉と思われる焼土と浅い掘り込みがあり、炉を通る主軸線上の北

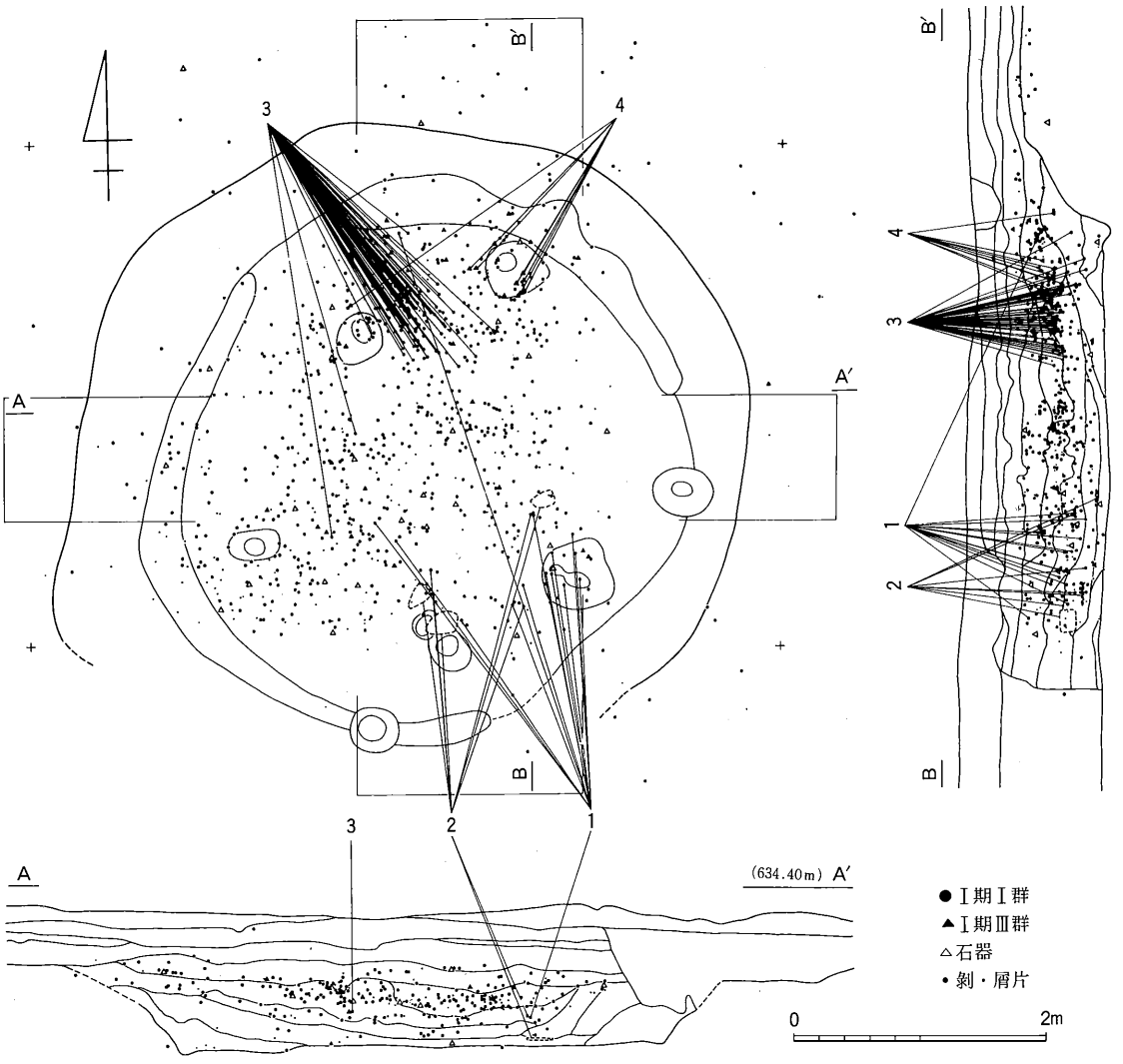


図183　57号住居址遺物出土状態

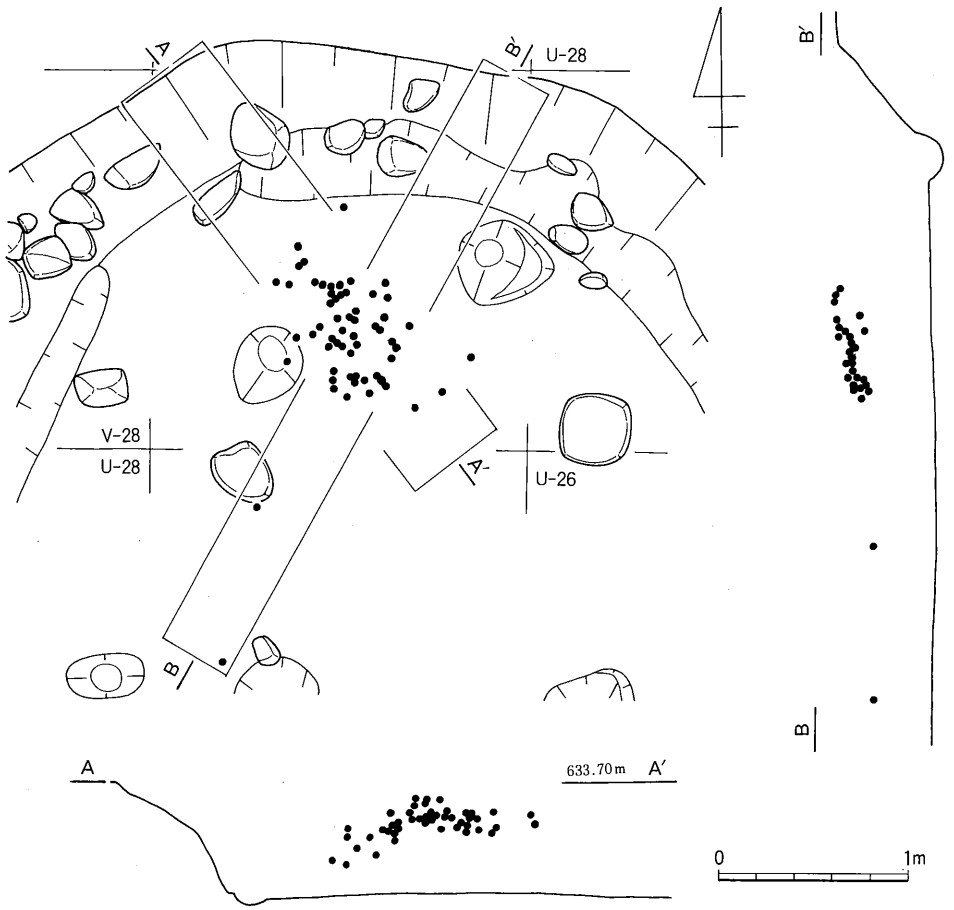


図184　土器３出土状態

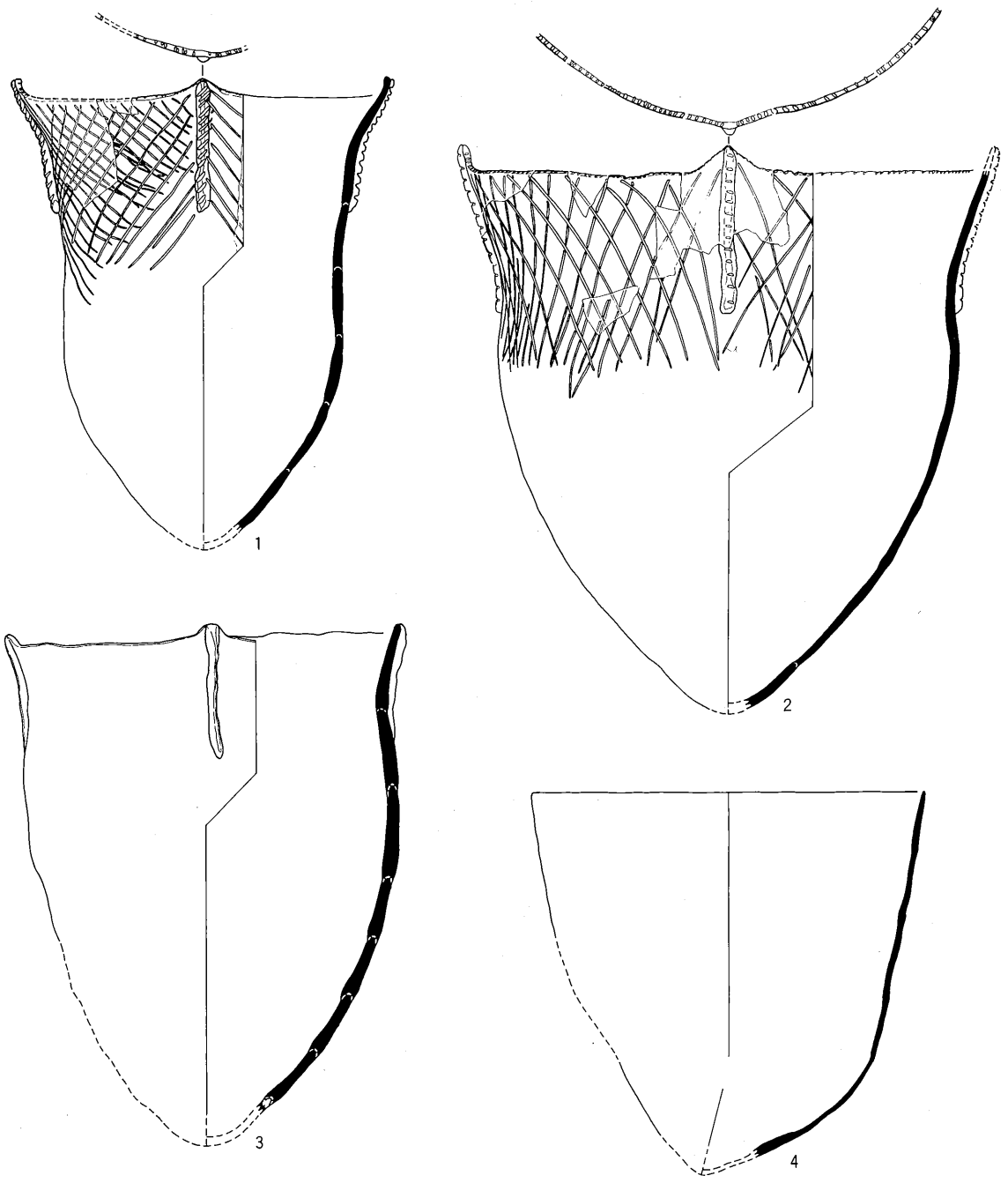
東壁際の床面上には、35×40cmの大形の扁平な礫が置かれていた。主柱穴はP_1～P_6の６本で、周溝が北東および西から南にかけての壁直下に設けられている。なお、北西の壁には大形の礫が露出しているが、これはローム層中に含まれる花崗岩の自然石である。

竪穴埋土には大形の礫が入りこんでいるが、遺物は、これらの礫を含む５・６層よりも、若干レベルが高い２～５層内に多く包含されていた。特に器形復元可能となった１～４の土器は壁に近い埋没土中からまとまって出土しており、中でも床面に近い９層上面から中心となる大破片が出土した２は、この住居址の所属時期を決定する主体となる遺物のひとつと考えられる。床面直上には土器小片と黒曜石片がわずかに出土したにすぎない。

遺物の量は中量で、土器は全てⅠ期であり、Ⅰ群のC（１・２）・D（３）の図化したものとA（６・７）２点、B（５・８）２点、C（12）１点、D（13・14）とEの口縁部26点に斜格子目文（９～12）32点、無文胴部533点の破片、Ⅲ群土器片（15～18）24点である。４は例がなくⅠ群土器にも似るが、Ⅲ群Aに含めておきたい。石器には、石錐（１・３～９）８点、石匙（10・11）２点、石錐（12）１点、打製石錘（13）１点、スクレパー（２・14～16）５点、叩石（22～26）６点と、黒曜石の剝片52点、屑片57点、石核31点、両極打法痕のあるもの16点がある。

住居址北西壁には、状態から住居址に先行すると判断される、自然礫を多量に含むロームマウンドが検出された。調査したが遺物は全く出土しなかった。近くにもう１基同様のロームマウンドの存在を確認したが調査してない。いずれも人為的な遺構とは認められず、図示はしてない。

57号住居址



遺構外

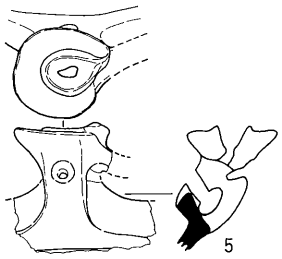


図185　57号住居址、遺構外出土土器実測図

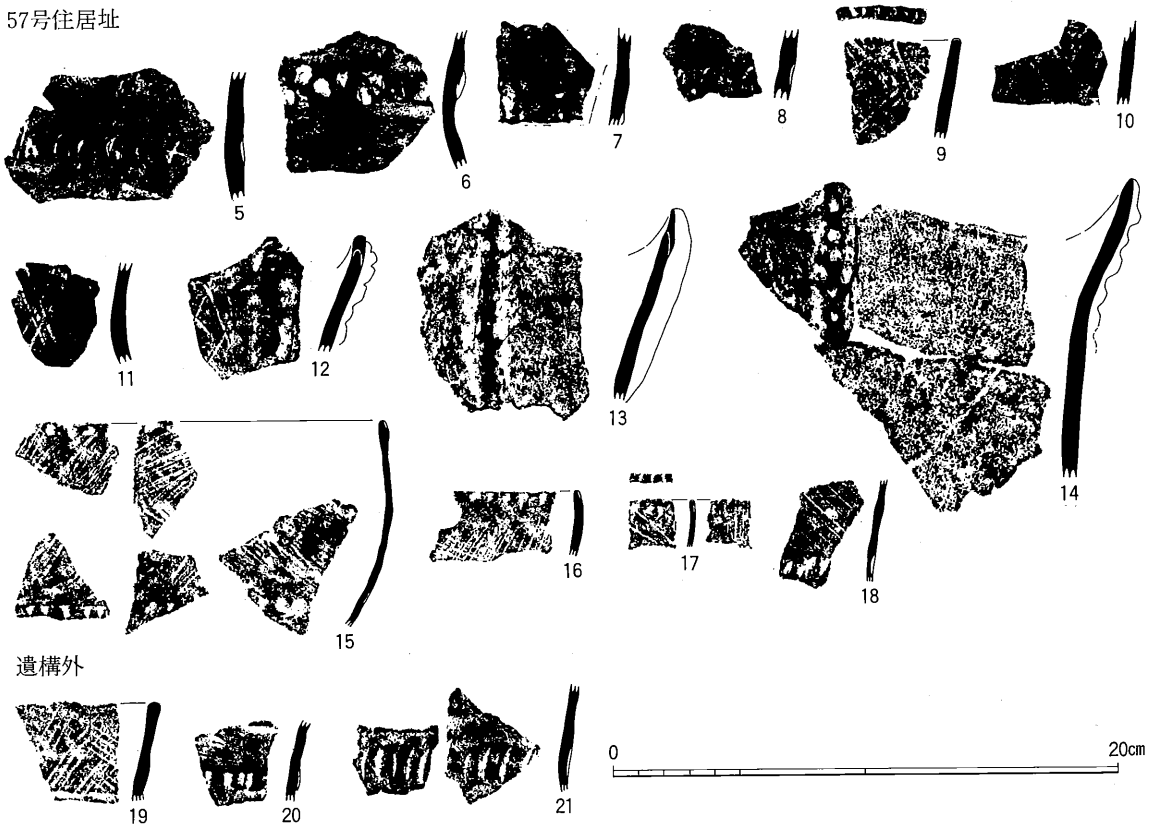


図186　57号住居址、遺構外出土土器拓影

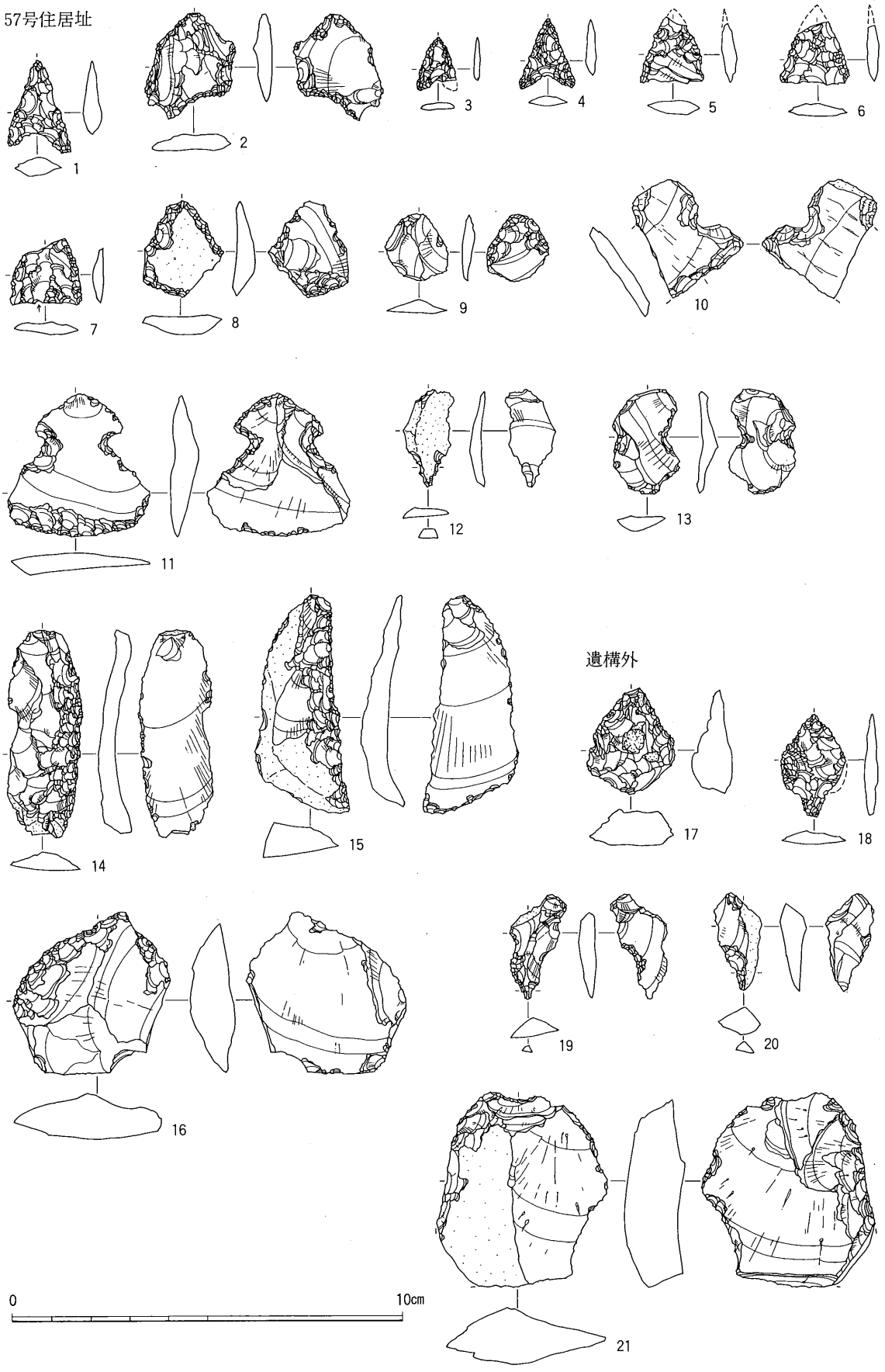


図187　57号住居址、遺構外出土石器実測図

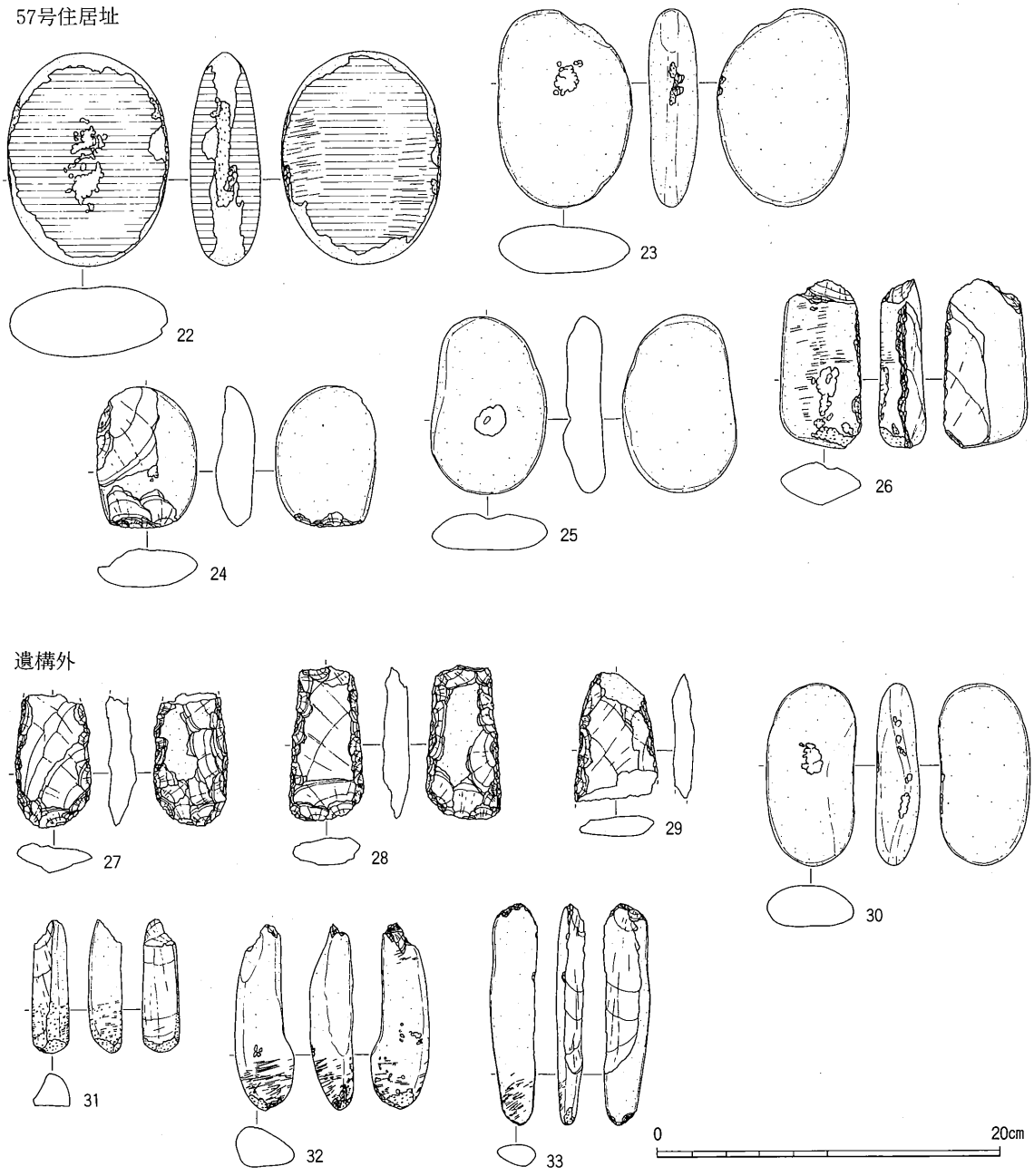


図188　57号住居址、遺構外出土石器実測図

III　第３地区の調査

1　調査の経過

住宅建設敷地を対象に水田基盤層まで重機による排土を行ない、20×22mの範囲に１辺２mのグリッド110箇所を設定し、予定される建築物に従ってほぼ平面「コ」の字状の範囲のグリッドを、間に土層観察用のベルトを残しながら千鳥方式で掘り下げた。経過としては、C～K列の５～８グリッドで縄文後期の遺物が多量に出土し始め、遺構と思われる多数の礫も認められたため隣接するグリッドを順次拡張していったのであるが、最終的には、建築物にかかる部分全ての調査はできず、40グリッドを掘り下げただけで、しかもそのうち30箇所を完掘し、C～F列の５～７グリッド10箇所は、III層付近まで掘り下げ、礫群の上面

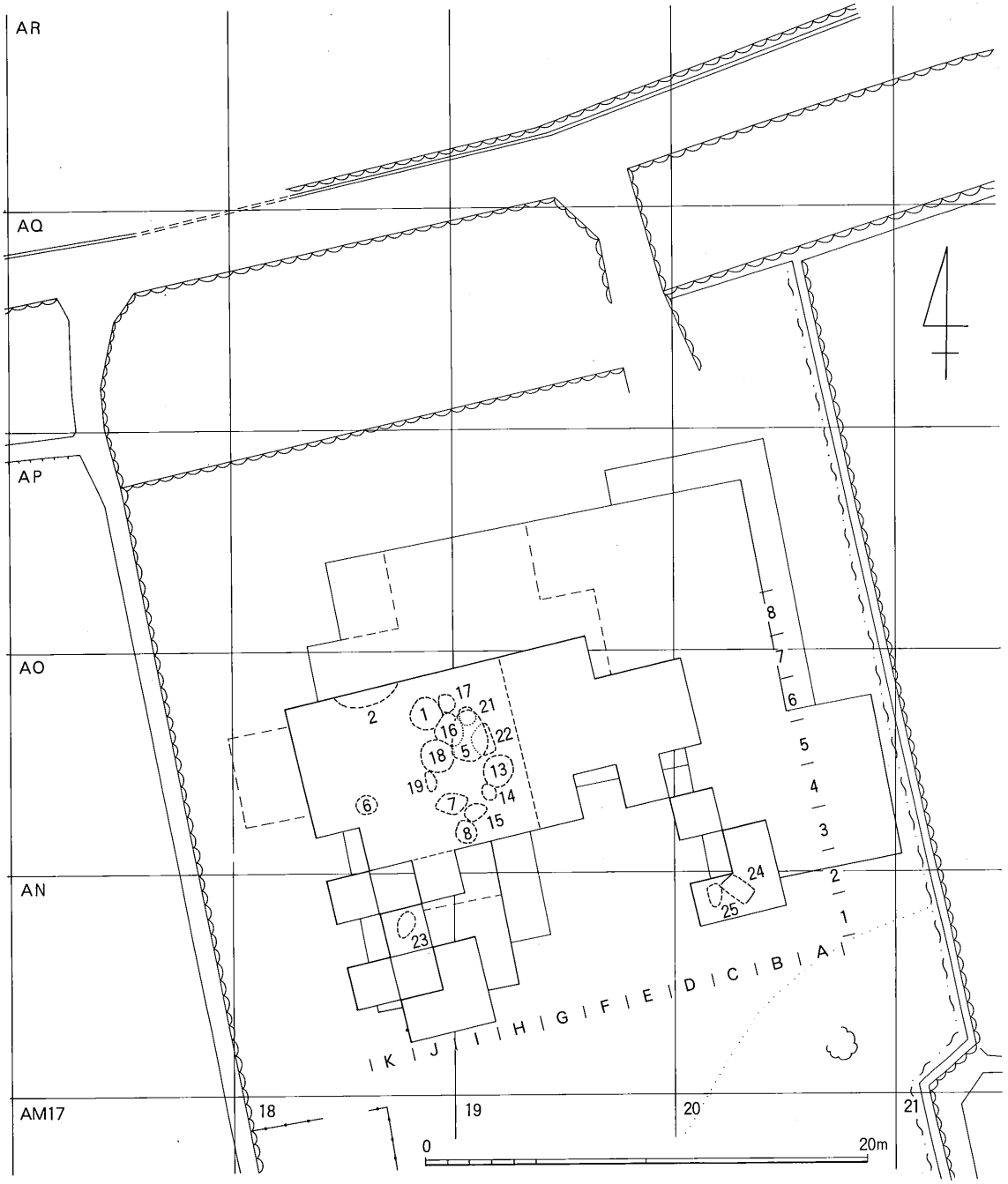


図189　第６次調査第３地区全体図

にまで達した段階で、主に時間的制約から調査を打ち切らざるを得なかった。遺物は、原則的には各グリッド毎に層序別に取り上げ、遺構に付随すると考えられる出土状態のものは、各遺構別に取り上げた。なお、骨片（粉）や木炭については、出土状態を詳細に記録することはできなかった。

発掘区の基本土層は、水田基盤層および重機で排土した水田耕土（Ⅰ層）の下に、黒色土層が3層認められたので、上からII層：黒色土（1）、III層：黒色土（2）、IV層：黒色土（3）とした。さらにその下にV層：暗褐色土、VI層：褐色土（ローム層上部）が認められた。II層は水田築成前の旧表土層の一部であり、遺物は総体的にIII層およびIV層に多く包含されており、特にIII層下部からIV層上面にかけての出土が目立った。また、遺構を構成する礫はIII層からIV層内に存在していた。

発掘当時は、次々に露われる多量の礫の中から、できる限り有意なまとまりを取り出し、遺物も可能な限りそれと関連づけてとり上げることに努め、個々の礫のまとまりには第何号遺構という形で一連番号を付した。その後、報告書作成の段階で再検討した結果、現場調査でとらえた礫のまとまりの、全てが妥当であったかについては疑問も出て来たが、ここでは一応現場での番号を用いて記述し、新たに注意される礫のまとまり等はその中でできる限り補うこととした。なお、第32号以降は整理の段階で新たに付した番号である。また、形態が一様でないこの礫がまとまった状態を、本書では集礫と呼んでおきたい。

集礫の下層からは全面から土壙を含む多数のピットが検出された。性格は一様でないだろうが、全てピットの呼称を用いてある。

2　遺　構

礫による遺構は、発掘調査の結果からでは全体像をつかみ得ないほどの規模を持つと推定されるのだが、広範囲を集礫下まで調査したG～K列の5～8グリッド内をみるとその分布は一様でなく、西側の遺構が散在する一帯との間に空白をおくようにして、東側に遺構が集中している(集礫遺構群)。さらにこの集礫遺構群は、比較的大形の礫によって構成された上部と、核となる大礫を含み中形から小形の礫多数で構成された下部とから成り立っており、上部には、中央東寄りの山状に大礫が積まれた5号、東端の環状の集石（13号）と立石（14号）、中央南寄りの南に開く東西方向の弧状の石の並び（14号から28号南縁をとおり19号にかけて）、その南の帯状の空白部を隔てた遺構の集まり（7・8・15・33号）などが指摘でき、下部では、北側に環状の集礫（1・16・17・18号）が目につき、中央では大礫（21・28号）を配しながら中小の礫が空隙をもちながら敷きつめられ、上層よりも南へ寄るものの南寄りに帯状の空白部も存在する、などの点が指摘されよう。B・C－2グリッドに明確な石棺墓（24号）が1基ある。

一方、C～F列の5～7グリッドでは先述したようにIII層まで掘りさげたにとどまったのだが、その全てからも礫の出土が認められた。特にD－5、D－6グリッド内では礫と共にIII層が南側へ盛り上がった状態が観察され、C－4とB－3グリッド内に積石状の集礫が存在することを考えあわせると、この付近にも、5号遺構としたものに類似したさらに規模の大きな遺構を想定することも可能だろう。

以下、個々の集礫遺構と下層のピットについて述べていきたい。

1）1号遺構

H－7、H－8、I－7、I－8グリッドにまたがる径約2mの隅丸方形環状となる集礫で、中央北寄りに極めて大形の礫がIV層以下にくい込んで存在し、その南側には焼土が認められ、焼土下からは骨片が出土した。さらに、中小の礫による集礫の下部からはピットが検出されており、南西部分は、P_{31}、P_{30}、P_{41}、P_{29}、P_{94}、P_{95}などに伴う小規模な集石の連なりとも考えられる。東側部分は17号遺構と重複している。遺物は、縄文中期土器6点、堀之内式併行を主体とする後期土器片(99～103)15点、無文小形深鉢(97)・

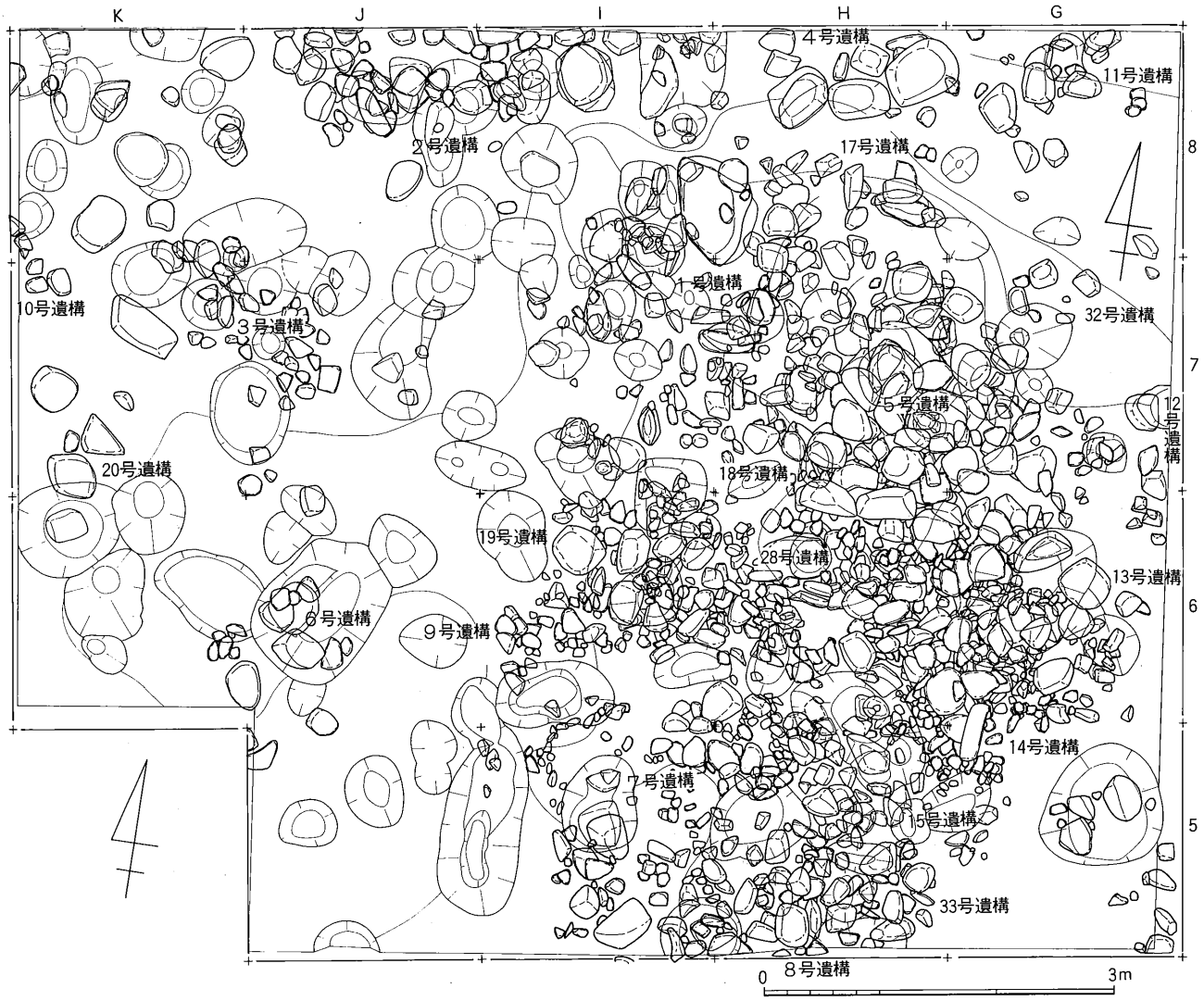


図190　集礫集中地点全体図

注口土器各１点と、スクレパー・磨製石斧（35）・叩石（44）・礫石錘（51）各１点の石器が出土している。

２）　２号遺構

Ｉ・Ｊ－８グリッドの北側部分にあり、大形の礫を含んだ平面円形状の集礫遺構の一部と考えられる。Ⅲ層内には礫を敷いたような状態の部分もある。中央南寄りに立石が見られ、礫に混じって凹石（39）、磨石、礫石錘（68）なども出土しており、焼けた礫も認められた。骨片もわずかに出土している。礫の下層からは、弧状に並ぶP_{22}、P_{23}、P_{85}、P_{65}、P_{84}が検出されており、調査区北壁外へ広がると予想される敷石状の部分を除いた環状の集礫部分は、１号遺構と同様、ピットに伴う小規模な集石の連なりと思われる。集礫間および集礫下を中心に、加曾利B式、堀之内式併行の土器片（104～109）と注口部１片が出土している。

３）　３号遺構

Ｊ－７、Ｋ－７・８グリッドにまたがるⅣ層内で検出された。やや雑然とした礫の配置だが、周囲にくらべると礫が集中していたことから遺構としたものである。マウンド状にやや高くなっている西寄りでは大形の礫２個がⅣ層以下にくい込んでおり、それを含めて南東側の集礫までをひとつの遺構として扱ったが、大きく東西ふたつのまとまりに分けられる可能性もある。礫の下層からはP_{78}～P_{83}が集中して検出され、

やや離れてP_{101}があるが、いずれも上部礫との関連は不明瞭である。集礫内および下部からは少量の縄文中期と堀之内式併行の土器片、土製円板（12）などが出土している。

4）　4号遺構

H・G-8グリッド北寄りに検出された大形の礫を中心とした集礫である。調査区北壁外へ広がるため全体は不明だが、大形の礫が環状に配されている印象をうける。この大形の礫の下部にはわずかに中小の礫があったが、下層にピットは認められなかった。礫以下を中心に、堀之内式併行の土器が多く出土し（1・2・110～114）、石鏃（1）・礫石錘各1点も出土している。

5）　5号遺構

Ⅲ層を掘り下げる過程でG-7、H-7グリッドを中心に検出された。遺構は多量の大形の礫を積み上げた状態にあり、平面形は不整円形に広がっている。これら大形の礫を取り除くとその下層から新たに中形の礫によるまとまりが認められたので、それらを21号、22号遺構とした。堀之内式併行の土器（1）もあるが、集礫中など下部を中心に加曽利B式併行の土器が多く出土しており（27・115～118）、他に注口部2点、礫石錘1点（52）がある。礫には焼石も一部混っていた。

6）　6号遺構（図191）

J-6グリッド内で検出され、大・中形の礫が「コ」の字状に配されており、北東側の礫のひとつは立石となっていた。下層には、やや扁平な大礫が埋置されている平面楕円形に近い深さ40cmの土壙があり、P_7とした。集礫と土壙とは一体のものと考えられる。上部の礫検出面から骨片若干が、礫の付近からは縄文中期土器および加曽利B式併行の土器片などが出土した（43・119・120）が、P_7内から出土した遺物はない。

7）　7号遺構

H-5・6からI-5・6グリッドにまたがって検出された。Ⅲ層内の比較的高いレベルでまとまりとしてとらえられ、中小の礫を中心に平面楕円形に近い集礫と考えた。その後、礫をとりはずして行く過程で

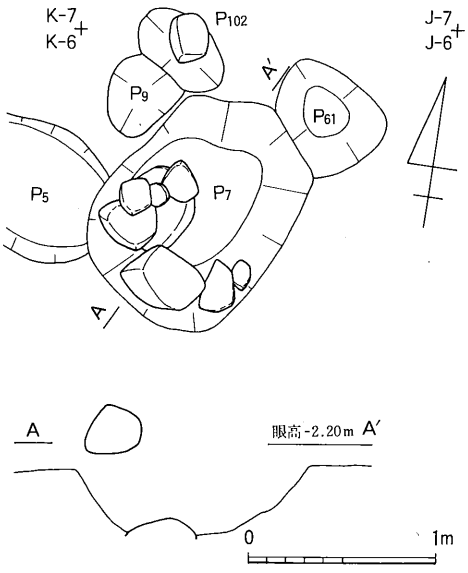


図191　6号遺構実測図

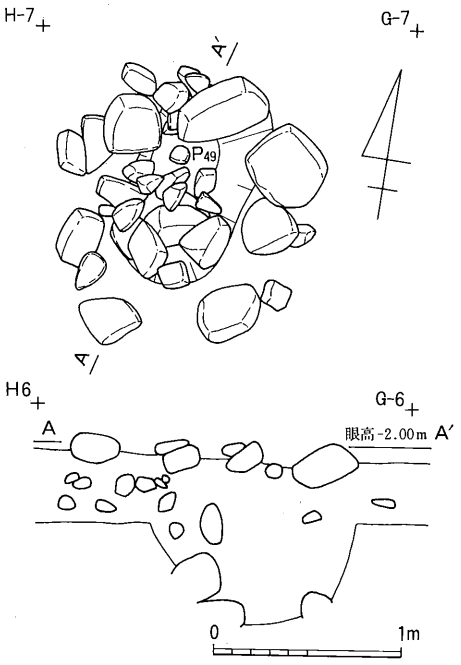


図192　13号遺構実測図

集礫下部は3箇所のまとまりに分裂する傾向がみられ、さらに集礫下面から20cm下ではあるが、P_{43}・P_{44}が検出されたことにより、最終的に遺構は、北寄りのP_{43}の上部にあたる比較的小形の礫のまとまりと、P_{44}が西へ張り出した部分の上部に集中する中小の礫、それに南寄りの集礫とが近接しているものと考えた。なお、P_{44}の西側の張り出しは浅く、上部に集礫をもつ浅い土壙と、内部に礫を配した深い土壙との重複の可能性を指摘しておきたい。また、南西寄りの集礫も下部の状態から東西ふたつに分かれるとも考えられる。加曽利Bから曽谷・安行式併行の土器（28・29・121～132）、注口部（89）、打製石斧2点、叩石・礫石錘各1点の石器の他、土器片錘と思われるもの（15）が出土している。

8） 8号遺構

7号遺構の南、H-5のグリッド南寄りの集礫である。球形に近い大形の礫が高いレベルにあり、これをとりまくような形で中形の礫がその下部に配されている。北側の15号との境界は明瞭ではなく、当初I-5グリッドにまたがる集礫を含めて8号としていたが、その下層にP_{53}が検出されたため分けて考えることとし、さらに東側の集礫は新たに33号とした。最終的に8号とした礫の下層には深さ9cmの浅いP_{99}がある。集礫下部を中心に加曽利B式から曽谷・安行式併行の土器片（25・46・133～150）、注口土器片（75・76・81）などが出土している。

9） 9号遺構

I-6グリッド西寄りの集礫で、大きさのほぼ同じ中形の礫を主体に、南北に細長い構成となっている。堀之内式および加曽利B式併行の土器（1・9・141～143）と礫石錘・横刃型石器各1点が出土している。

10） 10号遺構

調査区西端でK-7・K-8グリッドにまたがる。中形の礫数個から構成されているが、一部調査地区外へのびている。加曽利B式併行の土器（43）および縄文中期の土器が出土している。

11） 11号遺構

G-8グリッド北寄りにあり、小形から大形の礫によって構成されているが、一部調査地区外へかかる。一括して11号としたが、下層部で約70cm離れた位置に大形の礫2個が出土しており、それ等を中心に小形の礫が何個か集められている2箇所の遺構に分けることができそうである。付近からは堀之内式および加曽利B式併行の土器片が出土している。

12） 12号遺構

G-6・G-7グリッドの調査区東壁にかかって検出された。中形から小形の礫の集まりで、やや離れた位置のIII層中に大形の礫1個がある。集礫間から磨製石斧1点が、付近から堀之内式併行の土器片と礫石錘（64・65）2点が出土している。

13） 13号遺構（図192）

G-6グリッド内に検出された。大形の礫6～7個が径1.4m～1.6mの環状に配され、更にその内側に中形の礫が環状に組まれ、中心部下層に大形のやや扁平な円形の自然石が置かれている。内側の環状組石のうち西側の1個は立てて組まれている。これらの礫を取り除くと、中心部の大礫の周辺に径10cm前後の小形の礫をあらく敷きつめたような状態が露呈された。更に調査区全体ですべての礫を掘り上げた結果、下層の礫の下面から約25cm下で土壙（P_{49}）が検出された。土壙は長径1m短径60cmの長楕円形で、長軸の両端の壁際に大形の礫が埋まっていた。遺物は、上部の礫間より縄文中期および堀之内式（144・145）加曽利B式（13・14）併行の土器、それに注口土器（85）と、横刃型石器（33）・叩石・礫石錘（59）各1点などが出土しており、土壙内からは堀之内式併行の土器片（217）が出土している。なお上部の環状の配礫を

みると西端部の礫２～３個が失なわれていると思われるが、28号遺構との間の集礫もひとつの遺構の可能性があり、この集礫の構築に際して13号の上部の礫のいくつかを取り去ったとも考えられる。

14） 14号遺構

13号遺構の南に隣接する。調査開始の初期に長さ約50cmの角柱状の倒れた立石が認められ、この立石を中心に大形の礫２個があり、その下層には、13号遺構の下層同様小型の礫が空隙をもちながらも密集している状態がみられた。当初この立石を起点にⅠ－６グリッド内の９号遺構まで集礫が弧状に並び、一部列石状の部分も見られたことから、それも含めて14号としてとらえたが、下層部の状態などから、立石を中心とした箇所を限定的に扱うこととした。東側付近から骨片が多く出土している。14号遺構出土とされている遺物には、堀之内式、加曽利Ｂ式併行の土器（22・61・146～172)、打製石斧・礫石錘（54）各１点、土製円板（14）などがあるが、９号遺構に連なる弧状の集礫から出土した遺物も含んでおり、立石に直接付随する遺物は特定できなかった。

15） 15号遺構

７号遺構の東に位置し、接する８号遺構との区別が不明瞭な、Ｈ－５グリッド内中央やや北東寄りの礫の集まりである。発掘時には、焼石が多く円形に近い状態にまとまるかとも考えられた８号遺構東側の集礫もあわせていたのだが、報告書作成の過程で新たに33号遺構として分離した。礫の上限のレベルは２号遺構とほぼ同じであった。下層からは直下にP_{55}が、やや南寄りにP_{45}、P_{36}が検出された。遺物は礫間および礫の下から堀之内式併行を主体とする土器（１・173～176)、スクレパー・横刃型石器・磨製石斧各１点と特殊なものとして軽石製品２点（77･78）が出土している。またP_{36}内から堀之内式併行（２）３点、加曽利Ｂ式併行（213）１点、無文12点の土器などが出土したが、P_{45}・P_{55}内から出土した遺物はなかった。

16） 16号遺構（図193）

当初Ｈ－７グリッドの中央北西寄りの、中形の礫を主体にした環状のまとまりを16号遺構とした。P_{31}上部の礫付近で１号と接し、P_{32}上部の礫も含むと考えたのである。しかし最終的にはこの二者はそれぞれのピットに付属するものと判断し、16号はグリッド中央西寄りの大形礫を中心にして中小の礫が径１ｍ×80cmの環状に巡る遺構と考えるにいたった。東側は５号遺構の大形礫が覆っている。堀之内式併行の土器片

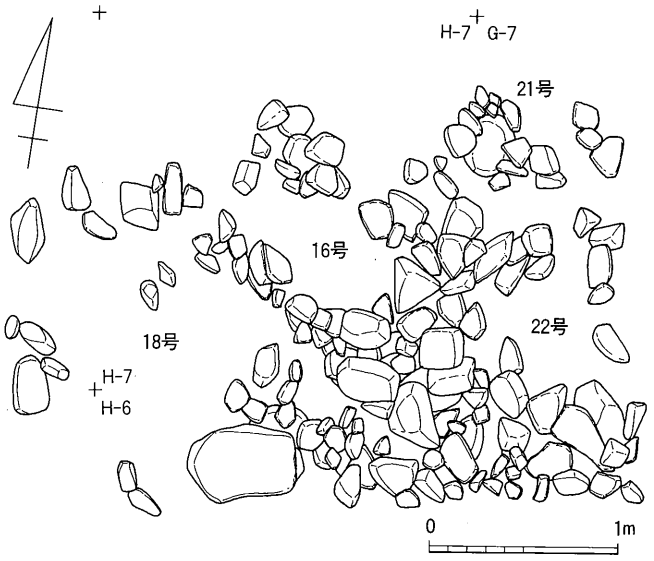


図193　16・18・21・22号遺構実測図

（1・6・9・177～180）と打製石斧・礫石錘（69）各1点が出土している。

17） 17号遺構（図193）

H-8グリッド南寄りにある。1号遺構の礫と一部重なる環状に近い配礫で、東側部分に立石が見られる。配礫内および直下、それに東側付近で堀之内式併行の土器片（1・6・5・181～183）と礫端叩石（46）・礫石錘（63）各1点が出土している。

18） 18号遺構（図193）

H-7、I-7グリッドにかかる環状に近い礫のまとまりだが、礫の並びは明瞭な形として見えない。周囲に隣接する1号、16号、19号、28号の遺構に属さない礫としてネガティブにとらえたきらいもあるが、やや小ぶりながら大形の礫を中心に径1m前後の範囲に中小の礫が巡る遺構の可能性もある。堀之内式併行の土器の比率が高く（1・2・184～189）、注口部も出土している。

19） 19号遺構

I-6グリッドの北東寄りの、18号遺構の南、28号遺構の西に位置する礫の集まりである。東西1.5m、南北1.6mの範囲の礫だが、下層の北寄りにP_{26}、南寄りにP_{25}が検出されたことから、中央から東の部分は、北側がP_{26}に、南側がP_{25}に付随する礫であると考えられ、残りの西側部分は、径45cmほどの大形の礫を中心に中小の礫が径1mの環状に巡るパターンをもつ遺構と思われる。P_{25}上部の礫は、下層に小形の礫が集中し、その上に載る比較的大形の礫は西側の環状の礫の東側部分を覆うような状態で積まれている。従ってP_{25}は環状の集礫の一部を破壊して掘られている可能性があり、さらにP_{88}でも、環状の集礫の西側部分を壊して掘られている状態が観察できる。19号遺構から出土した遺物は少なく、P_{25}内から、縄文中期6点、堀之内式（1）加曽利B式（210）併行4点と無文23点の土器片などが出土している。P_{26}・P_{88}から遺物は出土していない。

20） 20号遺構

K-7グリッド内南西寄りの礫5個で、大形の礫3個を含んでいる。遺構に付随する遺物はないが、該当するグリッドからは堀之内式併行の土器が主体に出土している。

21） 21号遺構

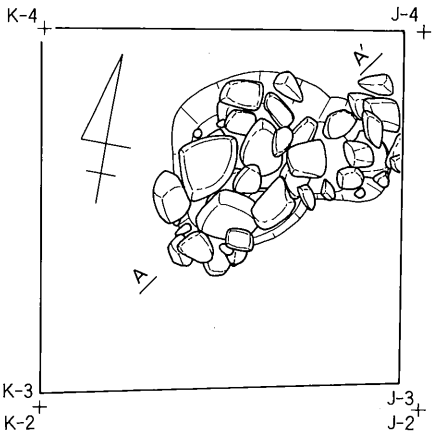
5号遺構の積石の、北寄りの下層に検出された、径40cmほどの大形の礫の周囲に小形の礫を環状に並べたものである。この直上には、P_{50}・P_{57}を覆うような位置に径70cmに達する大形の扁平に近い礫が2個置かれているが、5号遺構としたのは更にこの上層に積まれた礫の一群である。なお、P_{50}が21号遺構より下層で確認されてはいるが、遺構中央の大形の礫はIV層以下へ続いており、地山の礫を利用した可能性もある。遺構から堀之内式併行の土器片3点と横刃型石器（32）1点、P_{50}内から縄文後期土器片4点が出土している。

22） 22号遺構

21号遺構同様5号遺構の下層から出土した礫のまとまりで、当初は21号の南東側の礫のない部分を含め、環状に近く中形の礫が巡るものを遺構とした。しかし、礫の並び方は整っておらず、南西側の、28号の東北に接する集礫の部分を遺構と考えた方が妥当かと思われる。最下層ではIV層にくい込む大形の礫2個の周辺に小形の礫多数が分布していることから、むしろその大形礫2個を中心に上部へ礫が積まれたと考えたい。つまり、5号遺構の下層には、少なくも3箇所の大形礫を中心とした単位が在存していたことになる。なお、当初21号遺構とした箇所からは、堀之内式併行の土器片（1）と無文土器が出土している。

23)　23号遺構（図194）

J－3グリッド内から出土し、集礫は1m×70cmの規模をもつ。集礫の直下に深さ60～70cmの土壙が検出され、集礫直下、土壙上部には径40cmほどの大形の礫がある。土壙内からは骨片のほか縄文中期土器片3点が出土したにすぎない。なお、この土壙は東へ浅いピットが続くが、このピットは発掘時の所見から先行する別の遺構の可能性がある。そこからも骨片が出土している。またJ－3グリッドからは縄文中期、堀之内式・加曽利B式併行の土器など200点あまりが出土した。



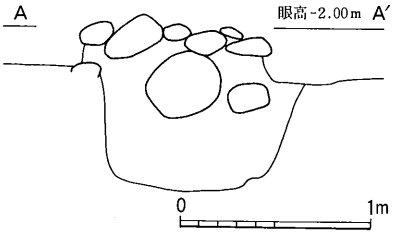


図194　23号遺構実測図

24)　24号遺構（図195）

グリッド掘りの段階で、C－2グリッド内北東寄りのIII層中に、径45cmを超える大形礫を伴って中形の礫が散在して出土し、これを取り除いて更に掘り下げたところ、IV層付近でグリッド東壁にかかって石棺墓の一部と思われる遺構が露われた。このため更にB－2へ拡張し掘り下げたところ、長軸をN55°Eにおき、140cm×80cmの長方形の礫を配した整った石棺墓が検出された。ふた石は見られず、長軸方向の2箇所に扁平な大形礫2個を掘り込んで立て、長辺は丸味のある河原石を並べてある。内部には黒褐色土が充満しており、無文土器十数点と打製石斧1点が出土したのみで、骨片等も確認できなかった。内部土壙北西寄りの3分の1の底面には小礫が空隙をもちながらも敷きつめられた様な状態が観察された。C－2グリッド北壁際の石棺外からは、立石と思われる大形の棒状の礫が横になって出土している。ところで、当初グリッド掘りの段階では、石棺上部やB－3、C－4グリッドから小礫と少なくも1点の棒状の立石を含む多量の大形礫が出土したのだが、それ等を傾斜地の水田築成時における埋め土・埋め石と判断したため、大半は記録化せずに掘り上げてしまった。しかし本来は、24号遺構の土層断面の観察結果からみて、大形礫はIII～IV層にかけて積まれたような状態にあったものであり、先述したようにD－5、D－6グリッドまで広がる大規模な集礫の一部と解すべきであると判断した。ただ、25・26号遺構から石棺の上部には、礫は積み上げた状態にはなく、注意される。

25)　25号遺構（図195）

C－2グリッド内の石棺墓西側に隣接して検出された。石棺の配石を認めたIV層下部付近で集礫が出土し、これに伴って下部から径1m×60cm、深さ50cmの土壙があった。集礫は、土壙上面の下部に大形の礫を置き、それを覆うような状態で小礫が集められている。土壙内から出土した遺物はない。

26)　26号遺構（図195）

C－2グリッド南西コーナー付近から出土し、土層との関係は25号遺構とほぼ同じであった。径80×90cmの土壙内上部に、大形礫1個と中小の礫数個が包含されているもので、土壙内西寄りの埋土上面付近から赤色塗彩された土製耳飾（5）1点が出土している。24号遺構の南コーナーの礫1点がわずかにこの土壙上部にかかっており、新旧を反映したものと思われる。

27)　27号遺構

H－6グリッド内西寄りの、7号遺構の北側に位置する集礫で、1.2m×70cmの範囲に雑然と中小の礫が集められている。27号遺構として取り上げた遺物はないが、集礫からやや南へずれた位置の下層にP_{43}が認め

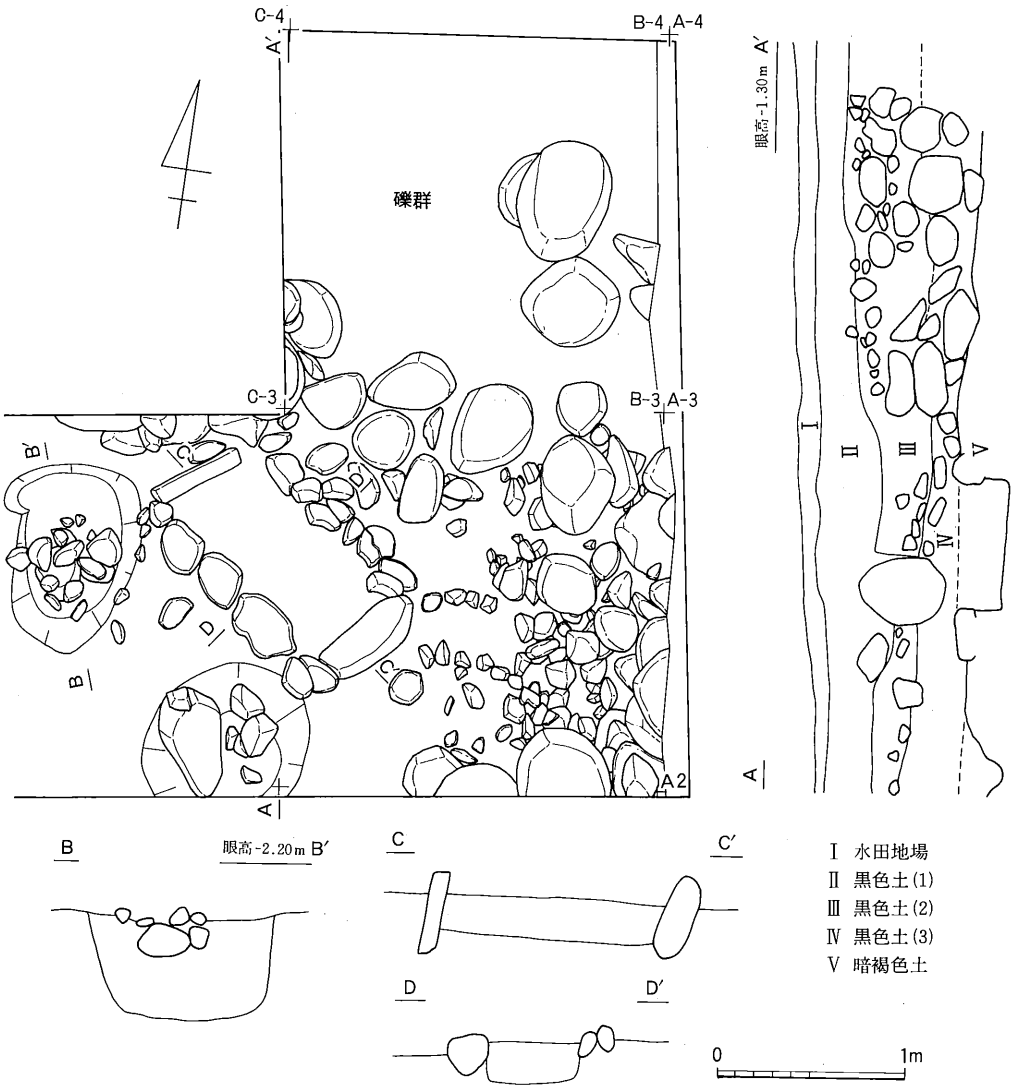


図195　24・25・26号遺構実測図

られ、加曽利B式併行の土器片が出土している。

28)　28号遺構

27号遺構の北側に隣接して検出された。径60×40cmの大形礫を中心に、周囲に小礫が巡る類型的な遺構である。レベル的には5号遺構の大形礫の下に位置し、遺物として堀之内式併行（190・191）5点、無文13点等の土器片が出土している。

29)　29号遺構

H-6グリッド東寄りで、13号遺構の西側に隣接している。13号遺構下部から続く小礫が円形状に集められた状態の部分であり、28号遺構との間は中小の礫がやや雑然と続いている。明瞭に遺構に伴う遺物はない。

30)　30号遺構

B-2グリッド内の24号遺構東側に、小形から大形の礫による積石状の部分があり、このうち中央にやや大形の礫を置き、周囲に小形の礫を配したととらえられるまとまりを30号遺構とした。礫のレベルは24号の長辺の礫とほぼ同じである。縄文中期と後期後葉の土器片各1点と無文土器が出土している。

31） 31号遺構

30号遺構の南側の小形の礫によるやや円形状の集礫だが、雑然としており、東側の調査区外へ続く積石状の集礫との区別は明瞭でない。30号、31号ともこの積石状の集礫と一体のものである可能性もある。遺物は、縄文中期１点と無文の土器が出土している。

32） 32号遺構

G－７グリッド北端にあり、中小の７個の礫により構成されている。平面長方形に礫が配置され、一見小形の石棺状と見えなくもないが、内側の掘り込みは認められなかった。南側の礫下層にP_{52}がある。

33） 33号遺構

H－５グリッド東寄りで、８号遺構の東、15号遺構の南東に隣接する。現場調査では８号および15号に含めて扱ったが、焼石が多く、平面円形状の集礫部分を33号遺構として分離することとした。

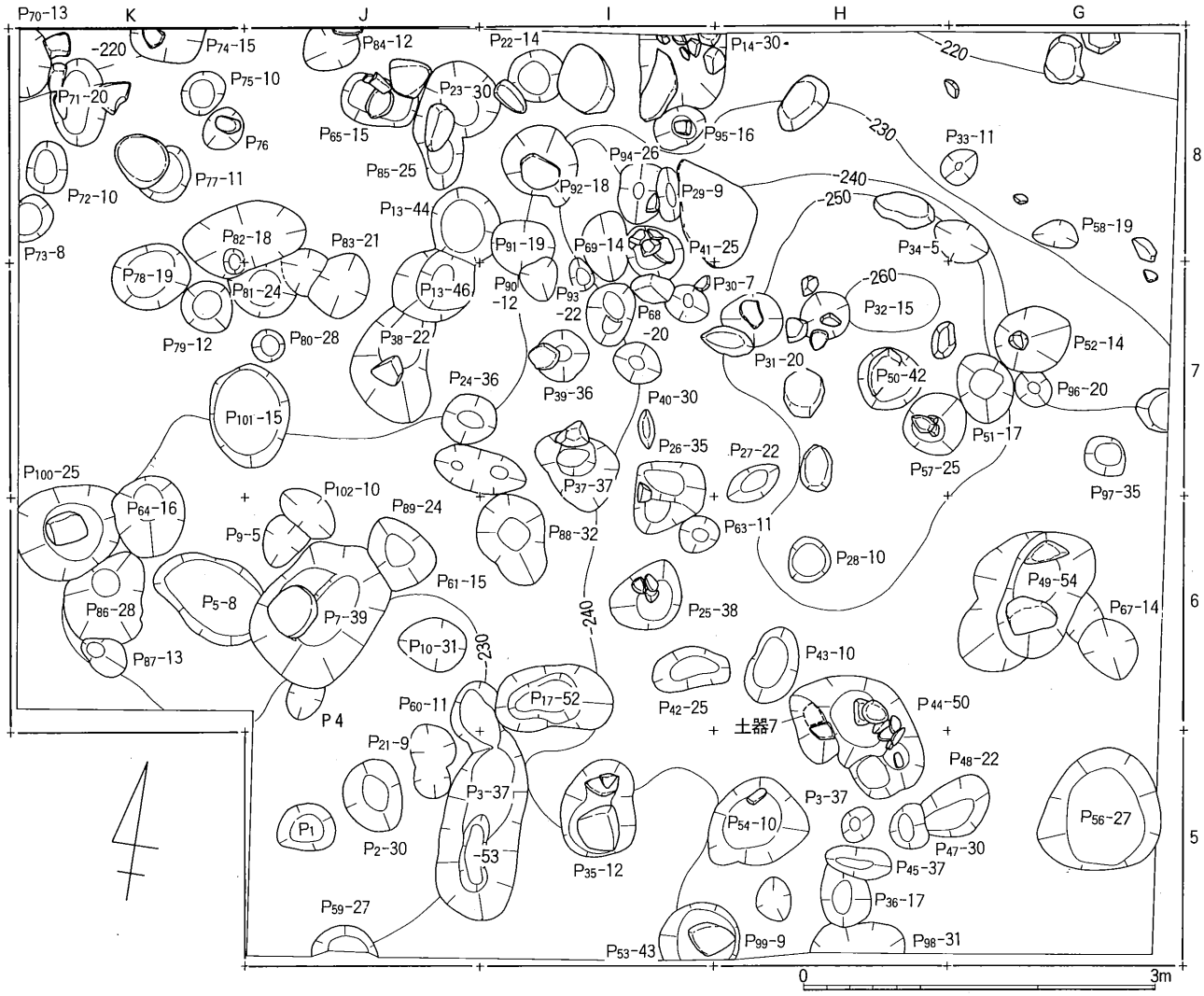


図196　ピット全体図

34） 34号遺構

G-5グリッド内の、一部東壁にかかる礫のまとまりで、P_{56}に接する。中小の礫約20個がやや雑然と集められており、層位的にはIII層からIV層にわたっている。

35） 35号遺構

K-6グリッド東端で6号遺構の西に接する。比較的小形の礫数個が集められた小規模なもので、P_{67}・P_{97}上部の集礫に似るが、下部には付随するピットは発見できなかった。一部P_5が下層で重複している。

36） 土壙およびピット（図196）

III層からIV層にわたる礫による遺構を取り除くと、下層から約100基の大小のピットや土壙が検出された。それらの中には、上部の礫と一体となったものや、礫との関係が不明瞭なもの、礫を伴わないものなどがあり、狭い範囲に密集している割には重複し合うものが比較的少ないことも特徴の一つである。いくつかのタイプに分けることが可能であり、概要を示すと以下の通りである。

①平面長楕円形で大形の土壙。P_{44}、P_{49}、P_7、P_3などで、上部および内部に礫を伴うものが多い。P_7、P_{49}は内部に大形の礫が埋置されており、P_{44}は壁際に中小の礫が積まれたような状態で出土している。

②平面円形に近く、やや大き目の土壙またはピットで、P_{56}、P_{100}、P_{101}、P_{53}、P_{54}などである。上部および内部に礫があるものが多く、その場合、中形または大形の礫1個が中央付近に埋置されている。P_{25}、P_{26}も、内部に大形の礫はないものの類似の土壙であり、23号、25号、26号遺構としたものもここに含められよう。

③②よりひと回り小さいピットで、上部または内部に中形の礫1個を伴う例が多い。P_{76}、P_{77}、P_{39}、P_{92}などである。

④平面円形の小形のピットで、上部および内部に小形の礫を集めたタイプである。P_{67}、P_{97}に基本的な類型がみられ、1号・2号遺構の環状の集礫下にあるP_{30}、P_{31}、P_{32}、P_{68}、P_{41}、P_{92}、P_{22}、P_{23}、P_{65}、P_{84}などもここに含めて考えてよいであろう。なお、P_{44}の西壁の張出部とした部分は、上部に集礫をもつ別のピットと考えた方が適当と思われ、ここに含めた。内部から堀之内式併行の浅鉢（7）が伏せた状態で出土している。P_{14}もこの形態のピットであった可能性がある。

⑤礫を伴わないピットで比較的小形のものが多い。深さは浅いものからやや深いものまで様々である。

以上5タイプに分けられるピットや土壙の、内部からの遺物の出土は少なく、所属時期を断定できるものはわずかだが、先に述べたP_{44}のほかP_4、P_{12}、P_{24}、P_{31}、P_{34}、P_{49}などから出土した大破片がいずれもそうであるように、堀之内式併行の土器が出土する例が多い傾向は指摘できる。加曽利B式併行と断定できる土器が出土したピットはない。従って、ネガティブながら、第3地区の最下層の遺構であるピットや土壙は、縄文中期中葉のP_2、中期末葉のP_{86}を除き、堀之内式併行期の妥当性が高いといえよう。

3 遺 物

1） 縄文中期

ピット内、遺構の下層、IV層、III層下部などの縄文後期の遺物包含層の下位から少量出土している。V期を中心にIV期からのものだが、保存状態は悪く、北側の高燥台地の南縁に展開している縄文中期の大集落址からもたらされたものとしたい。ただ、P_2から出土した中期中葉（IV期）Cの破片3点とP_{86}から出土した中期末葉（V期）I群A_2の大破片は、保存状態も良く、共に土壙に伴うものと考えた。

2） 縄文後期

遺物の出土状態をみると、遺構との関連性がつかめなかったものが大半で、中でもIII層からが最も多い。ピット内のほか、集礫遺構出土としたものも少なくないが、住居址埋土のような「遺構と関連した包含層」を線引きできたわけではなく、遺構と直接結びつく遺物は、ピット内に埋置されていたと判断される土器2点（7・10）と集礫に組み込まれていた石器（39）があげられるにすぎない。

土器はすべて破片である。図化できたものは加曽利B式併行III期から曽谷・安行式併行期にかけてが多いが、保存状態や破片の大きさを反映したものであり、量的には堀之内式併行III期にもう1つの山があり、堀之内式併行と加曽利B式併行とわかるものが共に約550点、曽谷・安行式併行とわかるものは100点未満となっている（所属時期を特定できない羽状沈線文が約300点ある）。他は、小破片で時期を特定できない後期土器約800点と、分析まで至らなかった粗製無文土器である。それ等の出土状態については、調査時すでに集礫遺構を境界として上層に加曽利B式併行が多く、下層から堀之内式併行が多く出土するように見え、その点が注意されていた。器種別には、浅鉢と注口土器の割合が高い。

堀之内式併行の土器は、I期の新しいところから始まりII期が主体である。H～K列グリッドのIII層下からIV層と、そこに含まれる遺構、および集礫下のピット内から多く出土している。B-2・3、C-2グリッドからは出土していない。破片は接合する例が多いが破損した土器を一括して廃棄した状態ではない。最も古いI期の1が、H-7グリッドを中心とした5・9・15～19・22号遺構から4・28号遺構の下、P_{12}・P_{31}・P_{49}内と広範囲に散在していた他、II期の2が15・18号遺構と4号遺構下層、6が16・17号遺構とP_{31}内、7がP_{34}・P_{44}内、8がP_{4}、9が9・16号遺構から9号遺構下層、10がP_{24}・P_{31}内からそれぞれ出土した。しかもそれ等は、埋置されていたと考えられる7・10以外は、大部分が極端なものは水洗時に器面がとろける程風化しており、同一個体の風化程度が極端に異なる例もあった。集礫遺構築成前から下部遺構築成時に、地表面に見える状態で散在していた可能性が強く、初期の遺構の景観を類推する資料となろう。ピット内に埋置されていた土器のうち7は、埋葬に由来するものと考えたい。

加曽利B式併行の土器は、I・II期は少なくIII期に増加し、次期に引き継がれる。B-2・3、C-2とI-5グリッドを中心にH-5～7、I-5～8グリッドに多く、主としてIII層から出土し、5・7・8号遺構などの上層の集礫遺構からも出土している。極立って大きな破片はなく、接合したのもごく少ないが、特にIII期のものは保存状態が良い。ただ20は例外的に風化が著しい。

曽谷・安行式併行の土器は、B-2・3、C-2やH-5～7、I-5・6グリッドのIII層付近から多く出土し、ピット内にはない。注口土器の一部に接合例がある（75・76・274）が、大部分に接合関係を見出すことができず、やはり破片の形で遺跡地へもたらされたもので、保存状態も良い。このような遺物の保存状態の相違から、遺跡地の集礫群は、初期には地上に露出した状態にあり、衰退期をはさんで加曽利B式併行III期ころからは、集礫遺構を土壌が覆い始めたとの推定も可能であろう。

第3地区から出土した石器には、石鏃（1～13）18点、スクレパー15点、打製石斧（14～24）60点、粗大石匙（25・26）3点、横刃型石器（27～33）28点、磨製石斧（34～38）11点、凹石を含む叩石（39～44）15点、礫端叩石（45～47）6点、敲打器（48～50）5点、石皿（72～74）5点、礫石錘（51～71）32点、石棒（75）3点、軽石製品（76～78）3点がある。伴出土器から縄文後期の石器群であり、P_{2}出土の打製石斧（14）など、縄文中期の石器が混入している可能性があるが、量的にはごくわずかであろう。層位的には、III層を中心とした包含層から出土しているものが多く、石鏃が比較的上層から、礫石錘が遺構に伴って共に多く出土しているなどの点が注意されるが、有意な差とも言い切れない。形態的には石鏃、打製

石斧、敲打器、石皿に該期の特徴が見出されるほか、石棒、軽石製品を縄文後期に限られた石器ととらえ得よう。

土製品としたもののうち、1～4の小形土器は、1が堀之内式併行のミニチュアとわかるように古手で、11～15の土製円板もしくは土器片錘も、遺構やIII層下から出土しており、いずれも堀之内式併行が多いと考えられる。それに対し6～10の土偶（9は土偶とするには疑問が残る）は、遺構との密接な関係が見出せず、6～8がII・III層、9・10も下層ながら堀之内併行期の土器の少ない地点からの出土であることから、いずれも加曽利B～曽谷・安行式併行期に属すると判断され、際立った違いを見せている。5は26号遺構のピット内から出土した唯一の土製耳飾である。

4　遺構の所属時期と変遷

先述したように第3地区の土器は、量的には堀之内式併行II期と加曽利B式併行III期から曽谷・安行式併行期との2つのピークがあり、各遺構出土遺物を総合すると、前者がピットと下部集礫遺構に、後者が

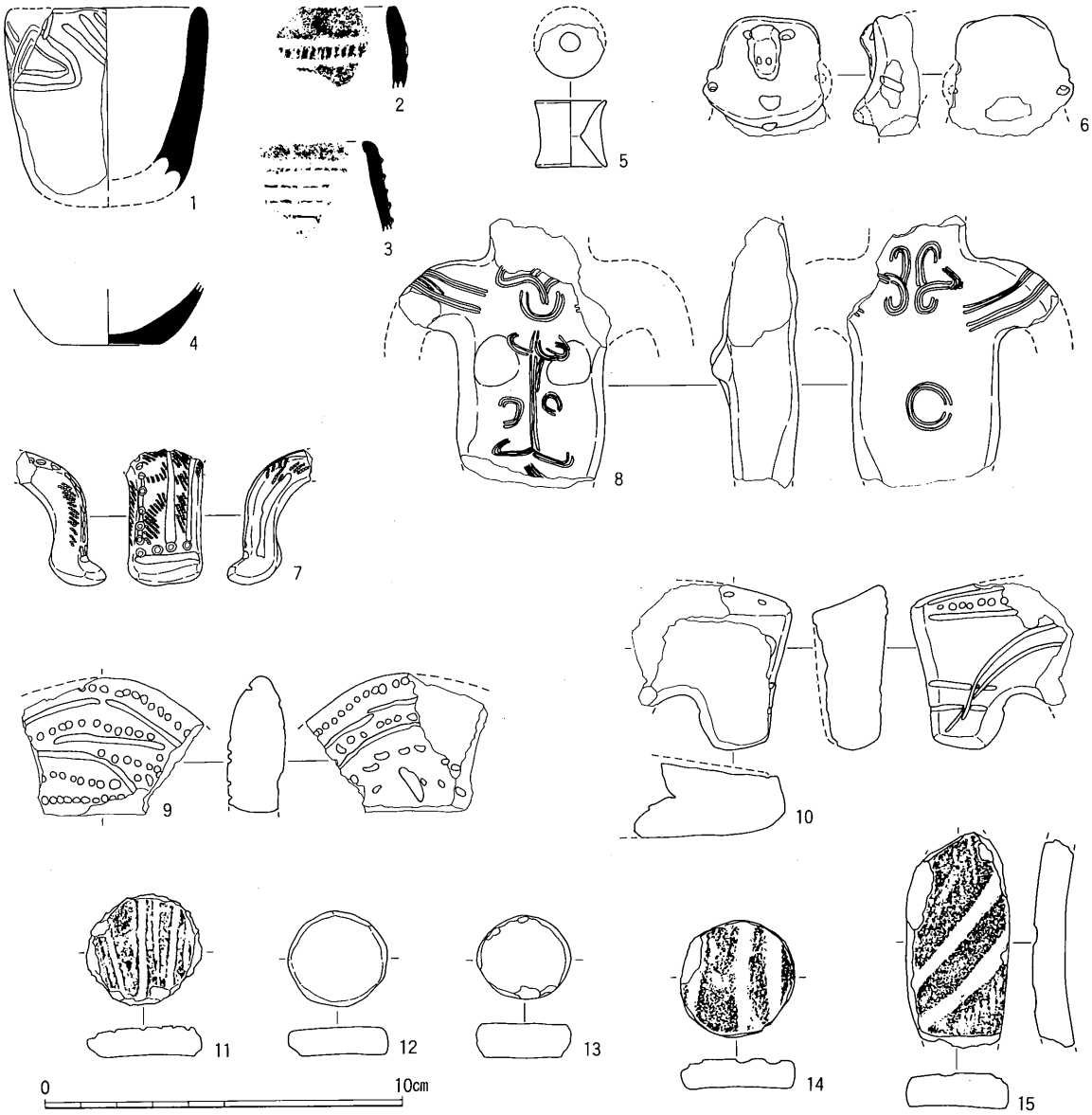


図197　土製品実測図

上部集礫遺構に伴う形となっている。それが遺構の所属時期を示すとすれば、まず堀之内式併行期に土壙、ピットと下部集礫遺構が築かれ、加曽利B式併行期以降に積石状の集礫を含む上部集礫遺構が築成されたと考えられる。従って遺構の形態的変遷としては、「強度の屈葬や抱石葬を思わせるピットおよび土壙、中央に大形礫のある環状の集礫遺構など下部集礫 → 上部の積石状の集礫と14号遺構の立石、それに伸展葬または軽度な屈葬が想定される石棺墓」という時間的な経過が推測される。下部の遺構と上部の遺構との間に、時間的意識的な継続性があったとすれば、時間を追って、埋葬をめぐりより祭祀的な面が顕在化した可能性がある。また、部分的な発掘の結果ではあるが、集礫群の範囲が、南もしくは南東へと拡大あるいは移動していると解することも可能であろう。なお、C～F列の5～7グリッド内の礫間からは、加曽利B式併行の土器片の出土が目立ち、堀之内式併行の土器は比較的少ない。このことは、G列以西の上部集礫の所見と同様に、そこに推定された大規模な積石状の集礫も加曽利B式併行期以降に所属する可能性を示すものであり、位置的にみて24号遺構は、その集礫を意識的に避け、空白部または縁部に築成されたものと考えられよう。

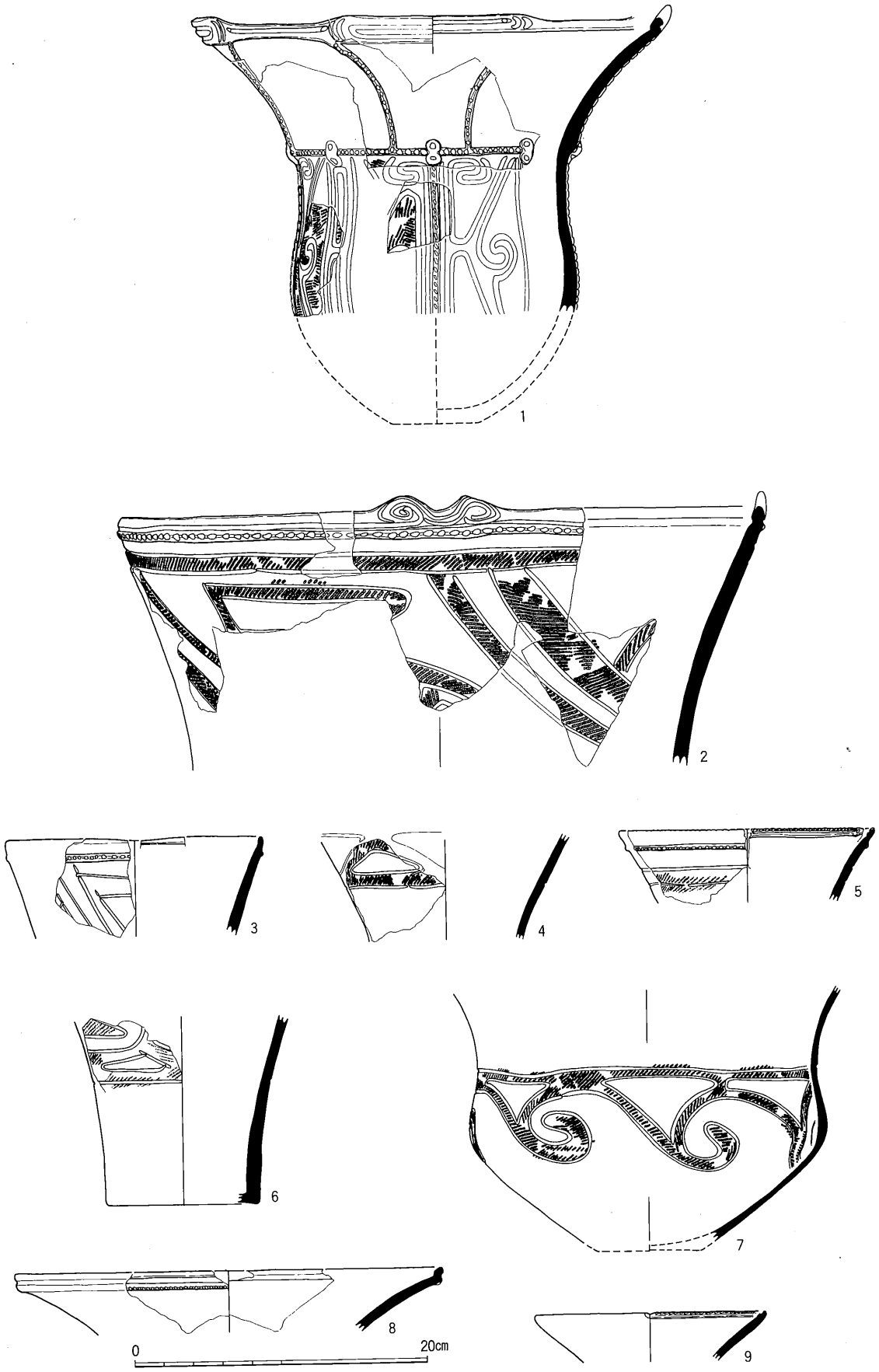


図198　出土土器実測図(1)

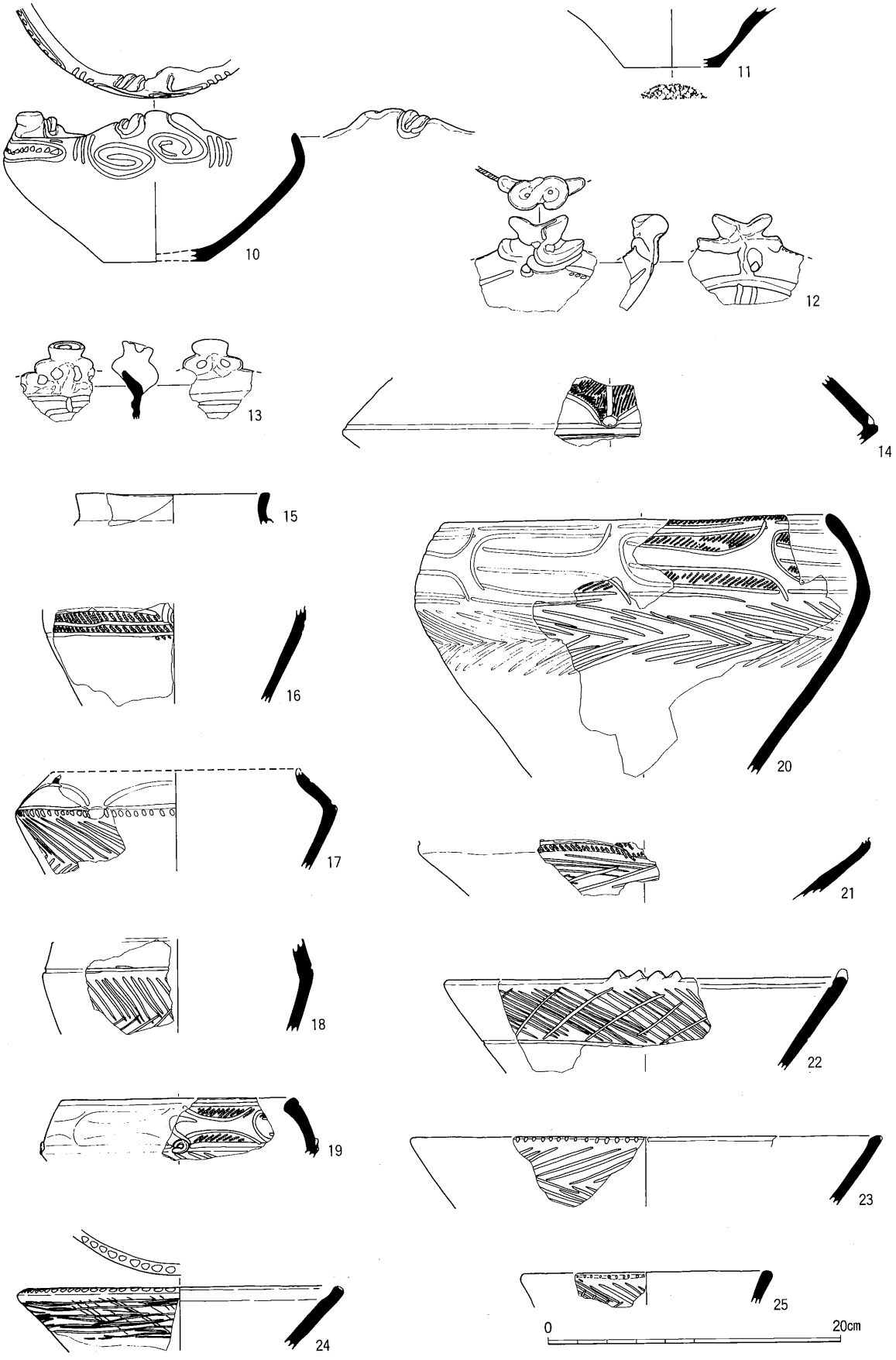


図199　出土土器実測図(2)

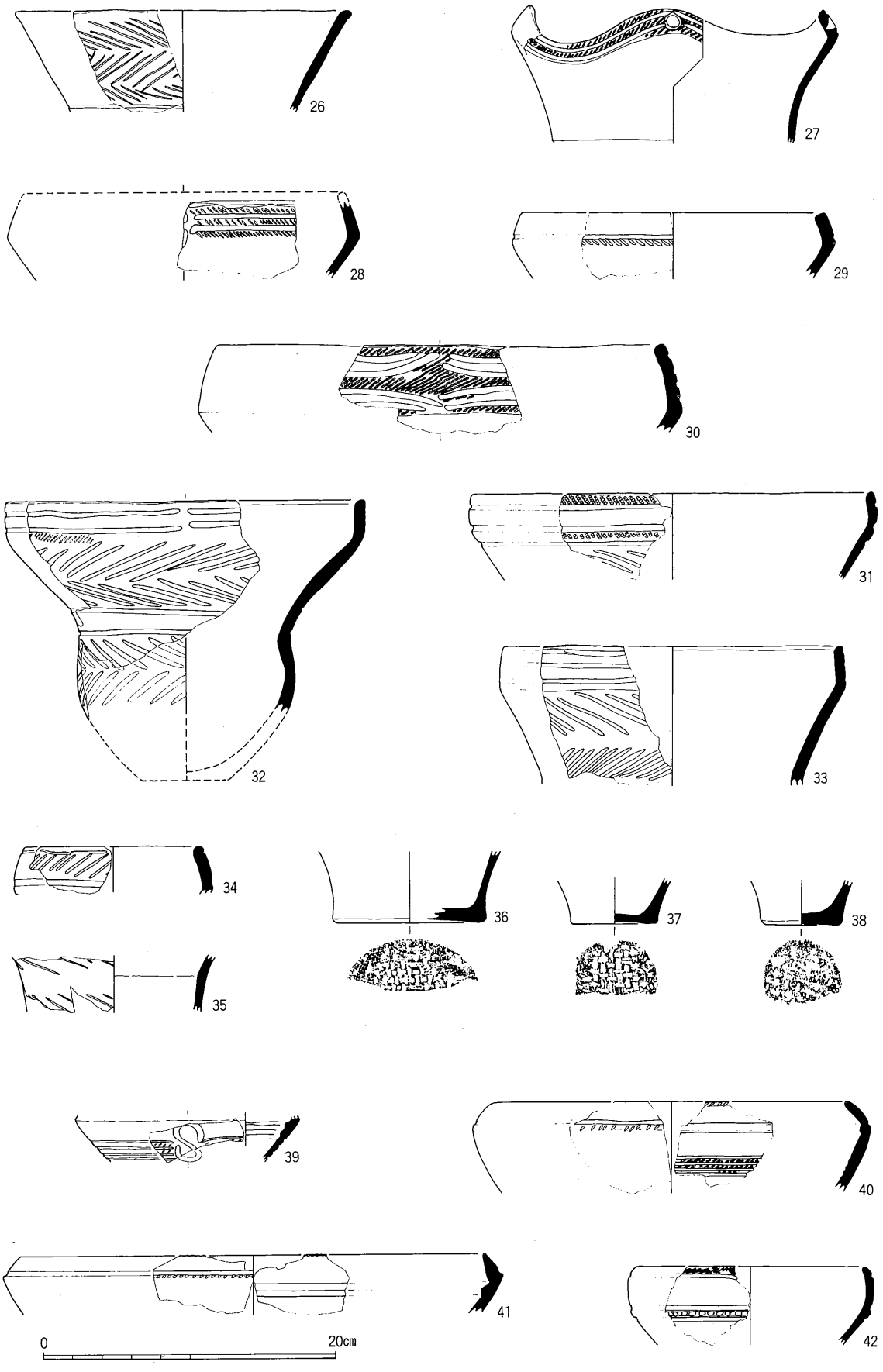


図200　出土土器実測図(3)

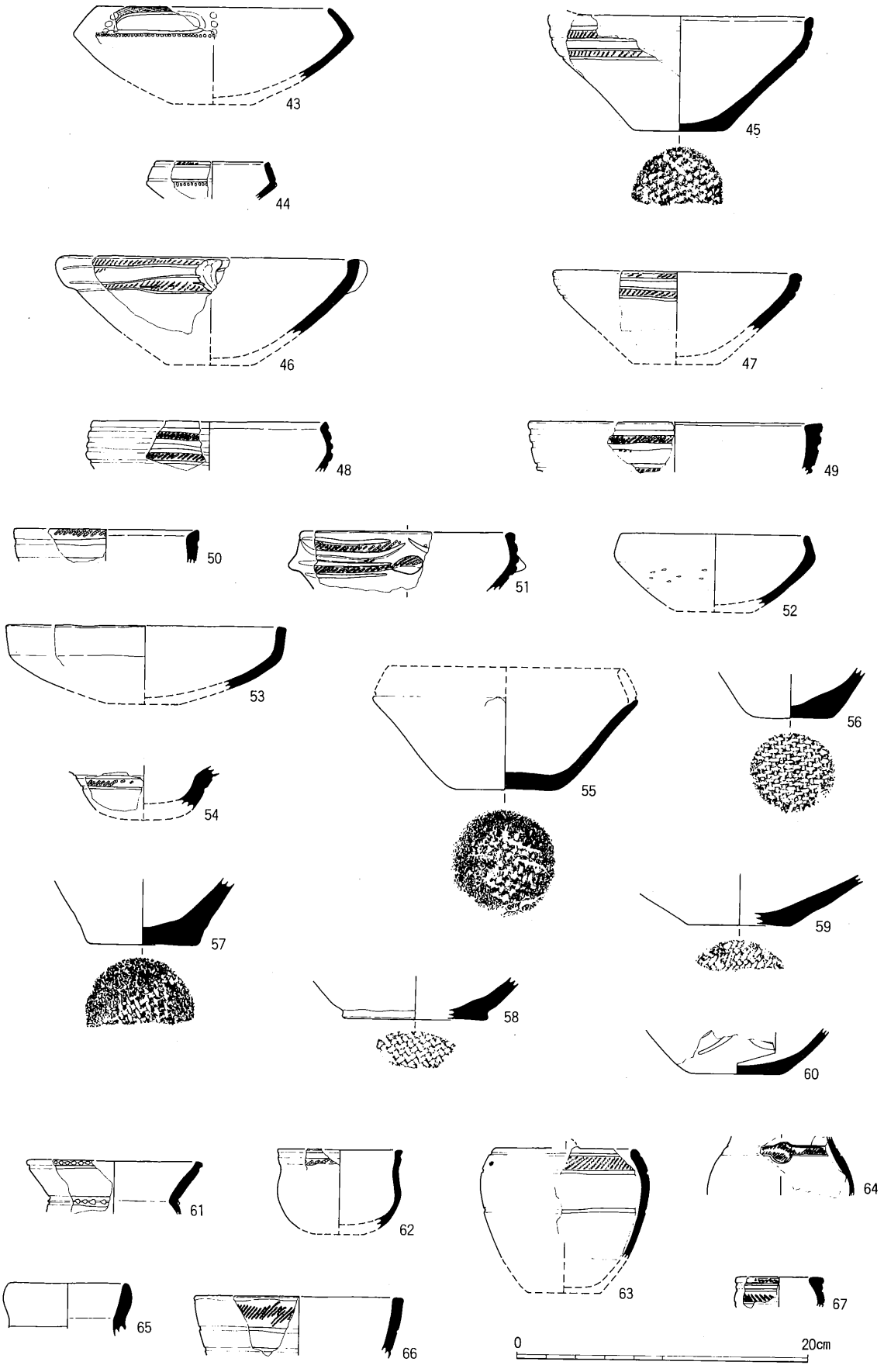


図201　出土土器実測図(4)

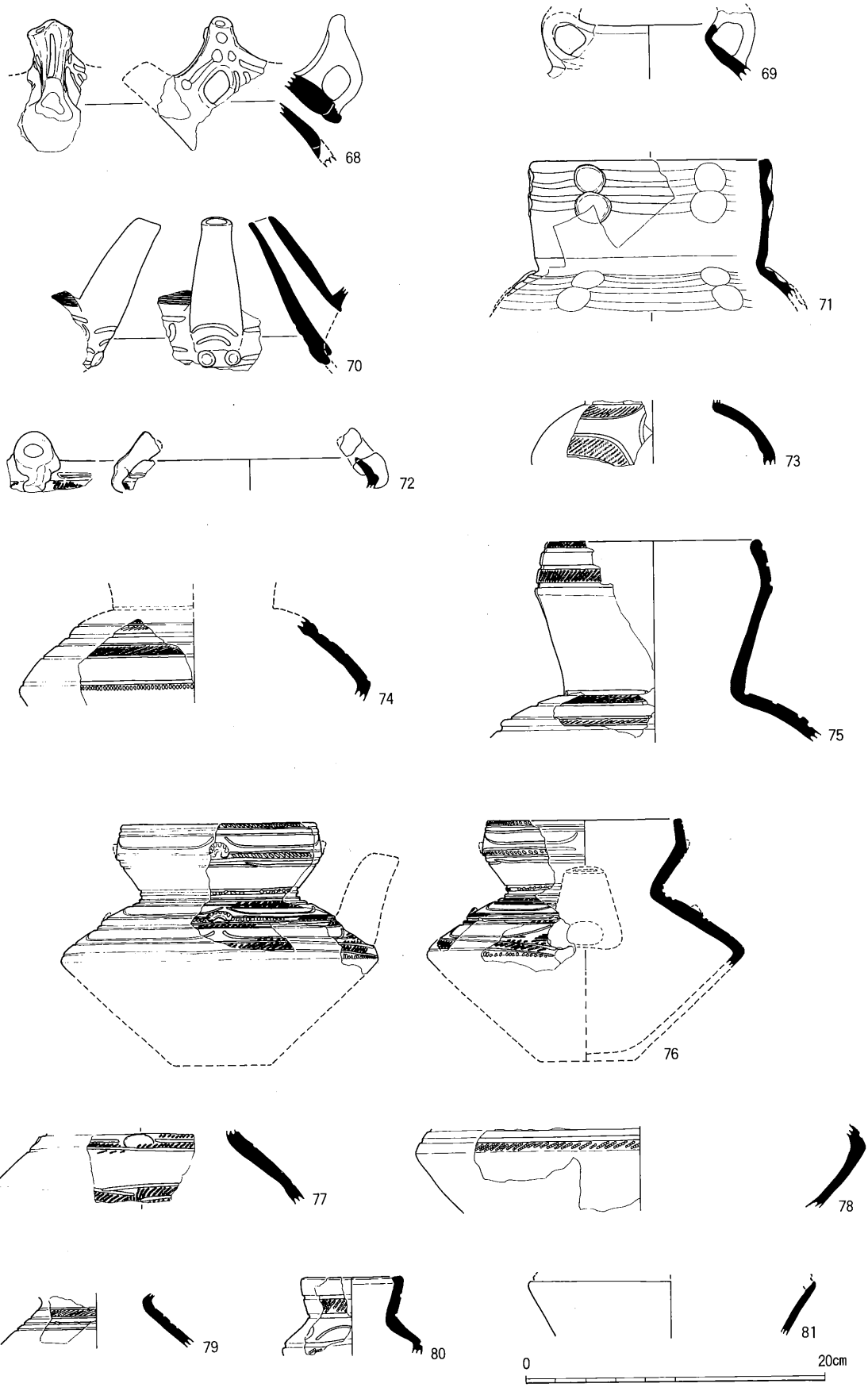


図202　出土土器実測図(5)

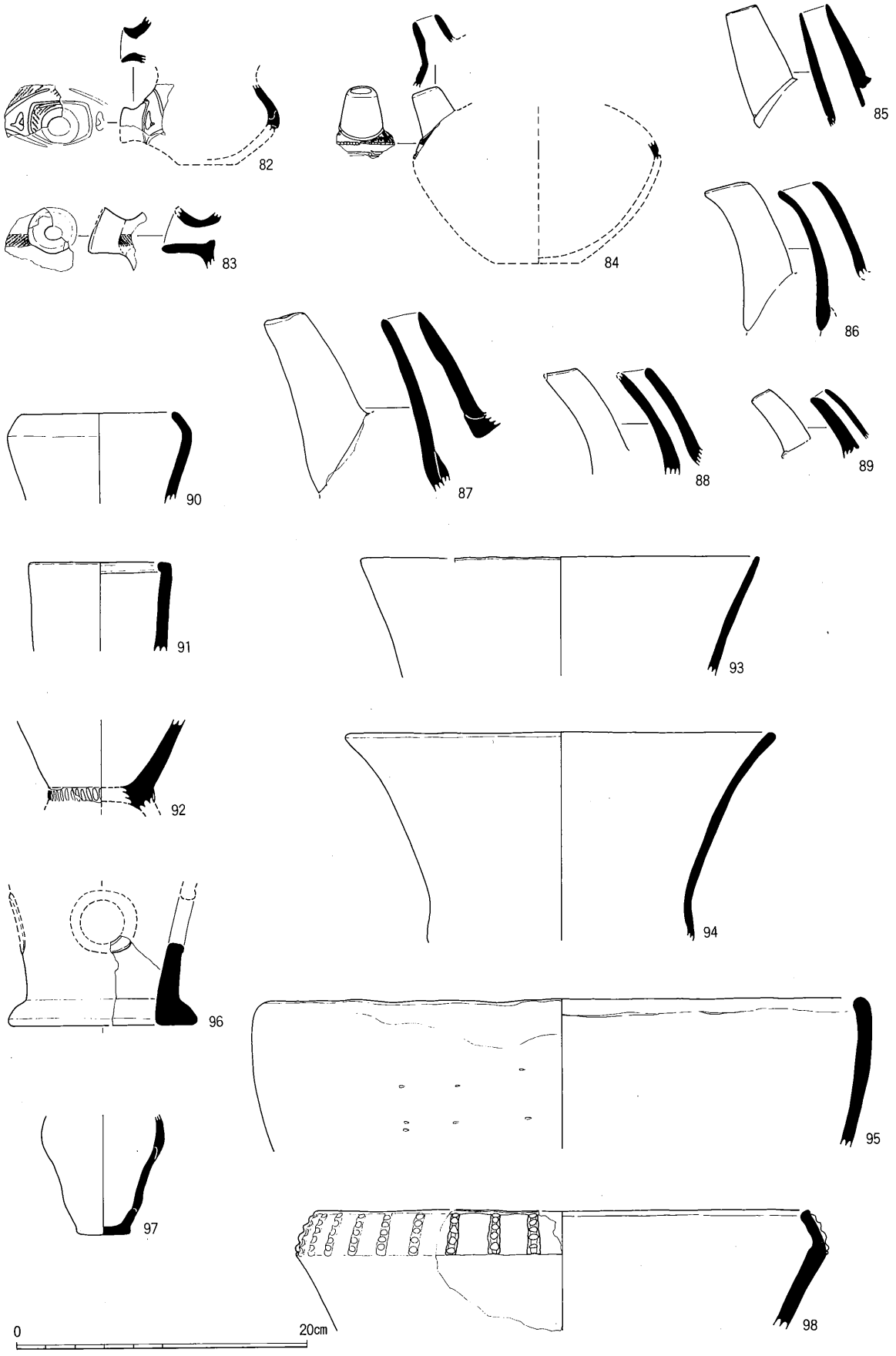
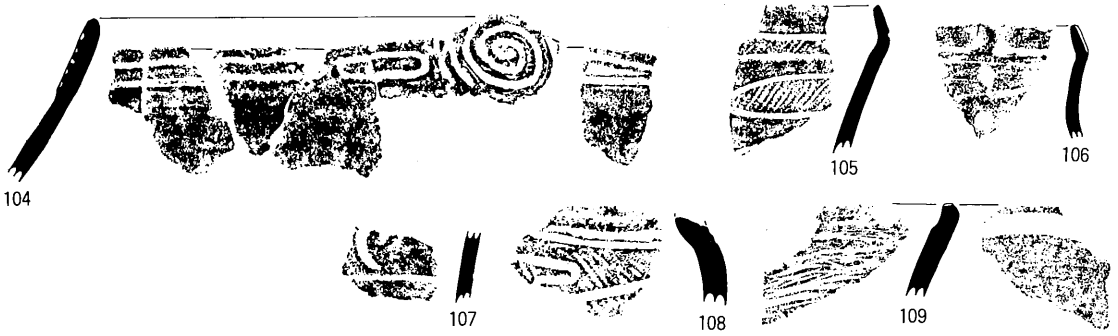


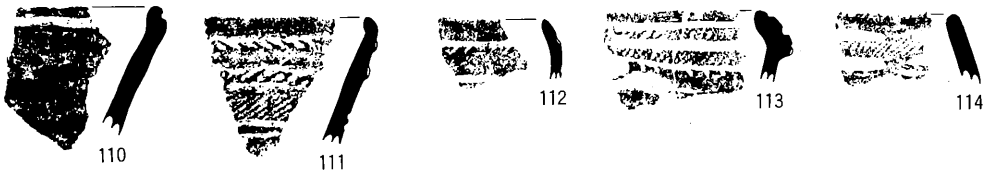
図203　出土土器実測図(6)

1 号遺構

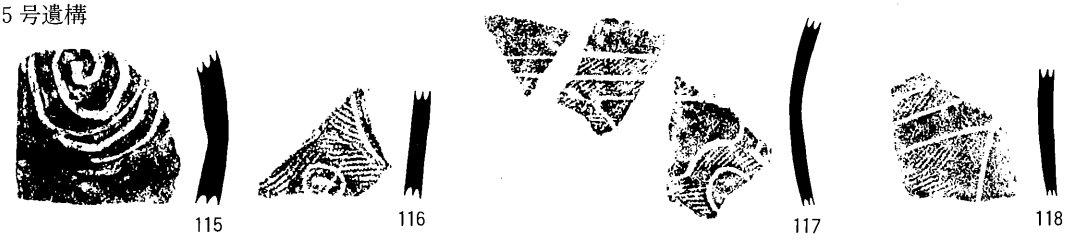
2 号遺構



4 号遺構



5 号遺構



6 号遺構

7 号遺構

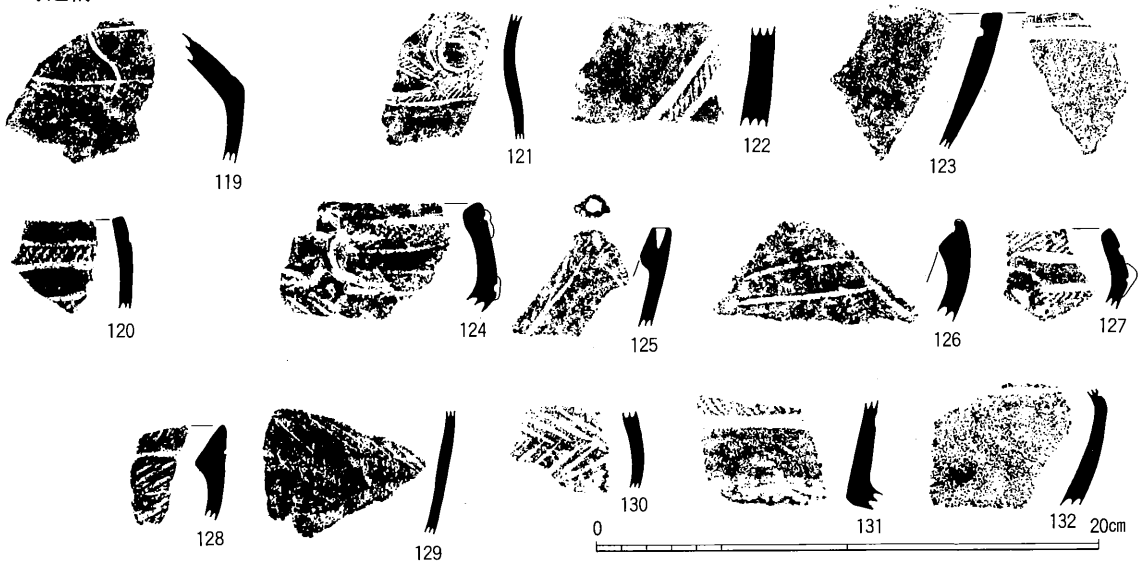


図204　1・2・4・5・6・7 号遺構出土土器拓影

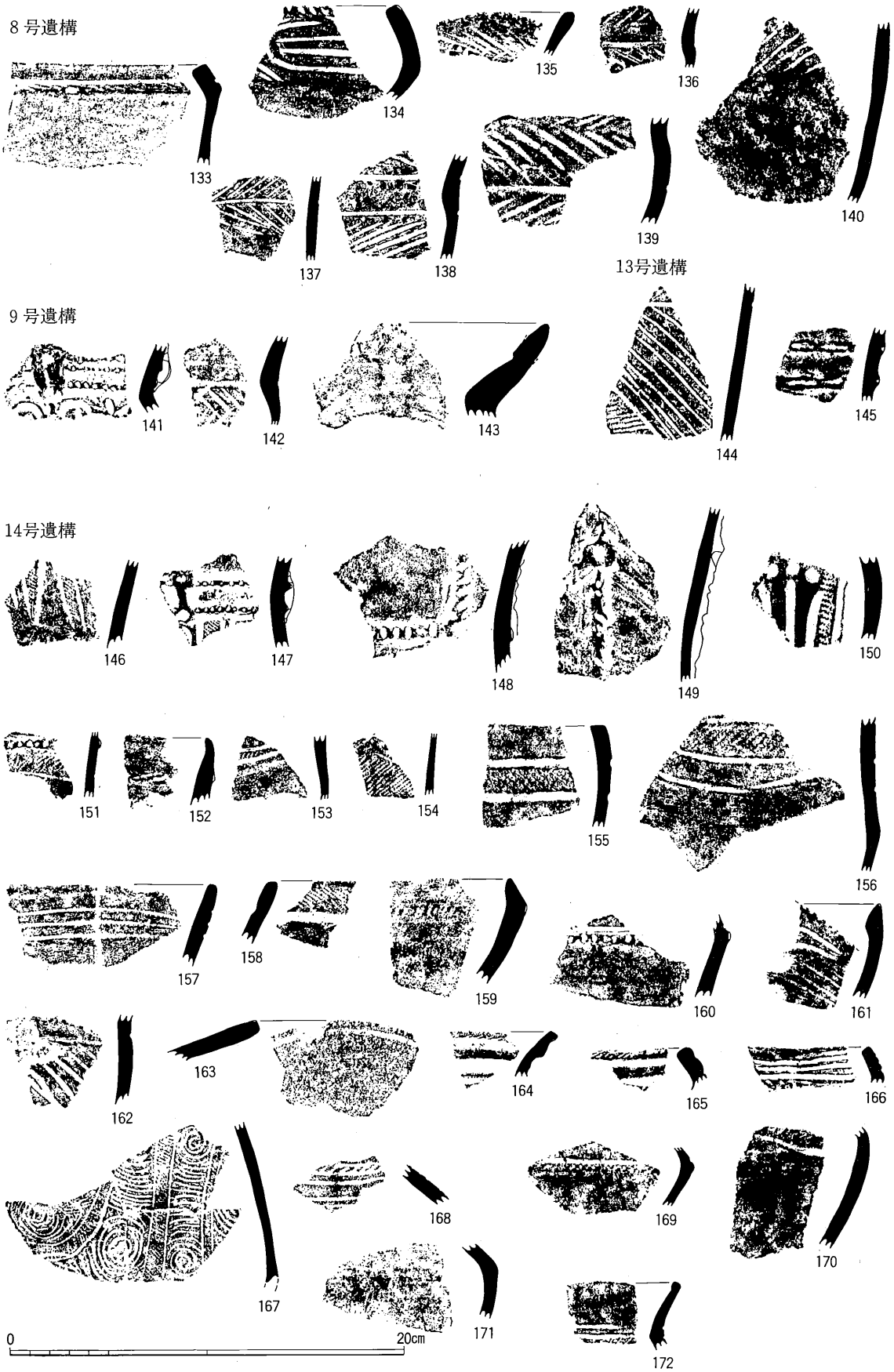


図205　8・9・13・14号遺構出土土器拓影

図206　15・16・17・18・28号遺構、ピット内出土土器拓影

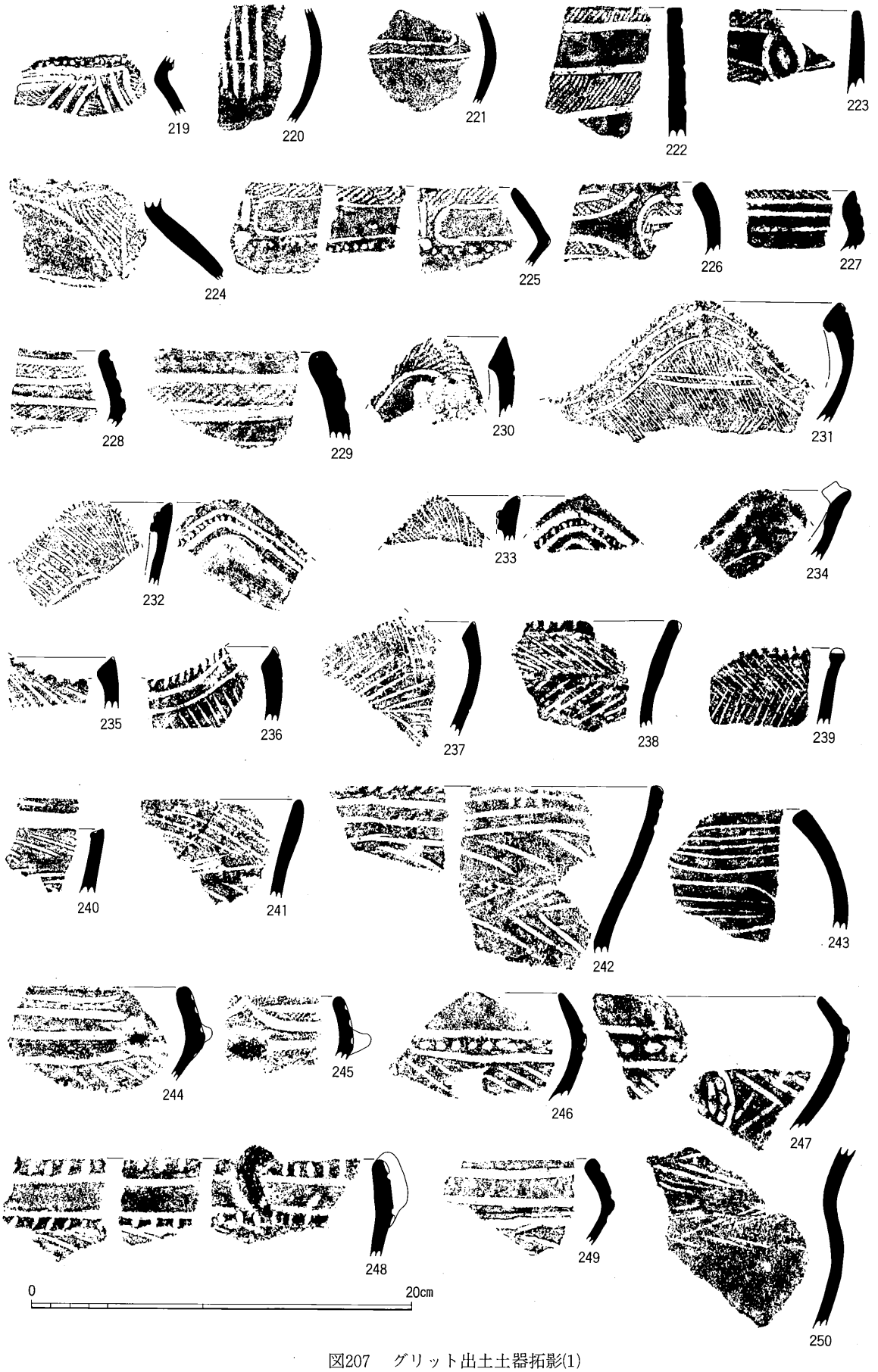


図207　グリット出土土器拓影(1)

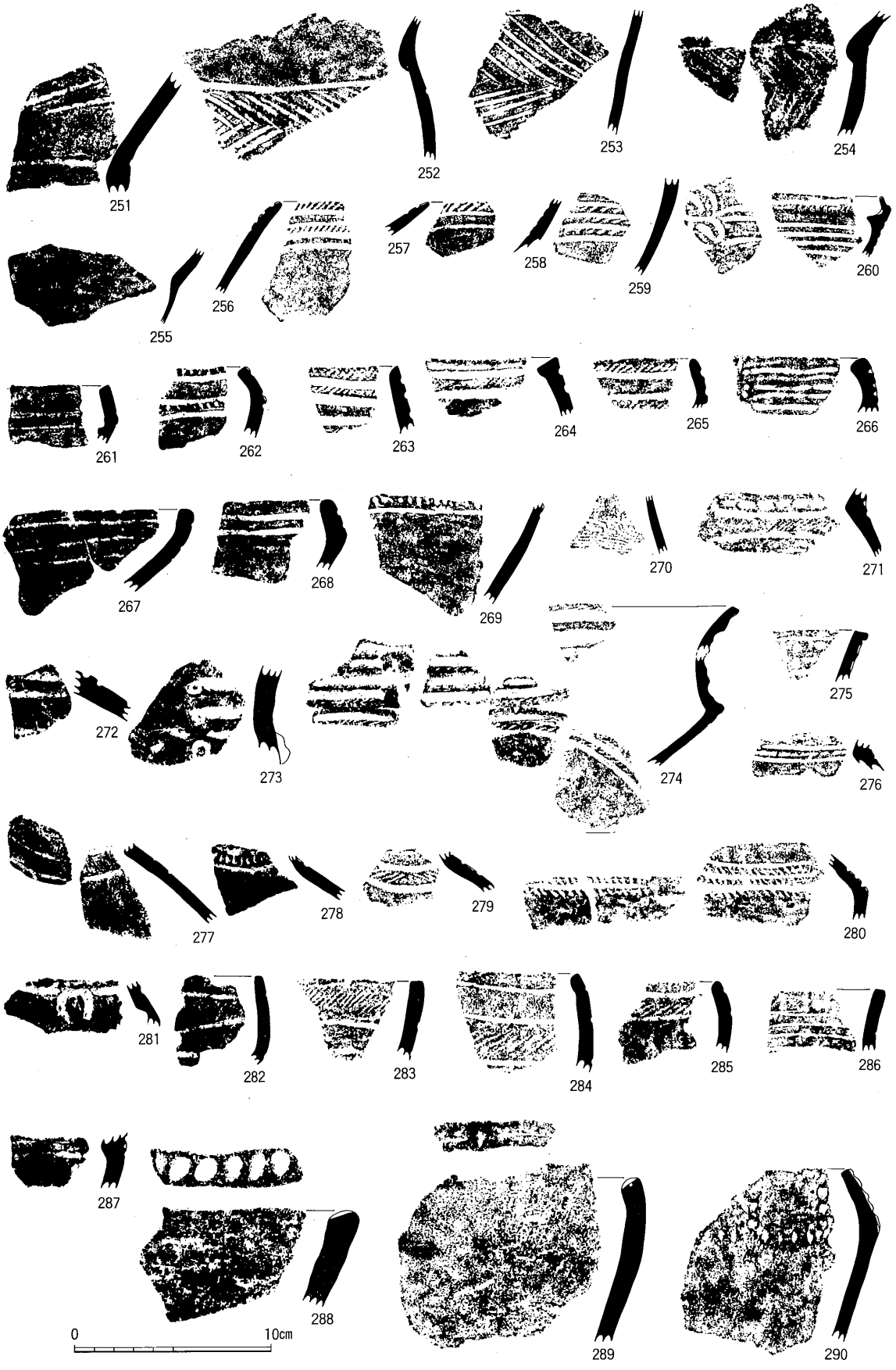


図208　グリット出土土器拓影(2)

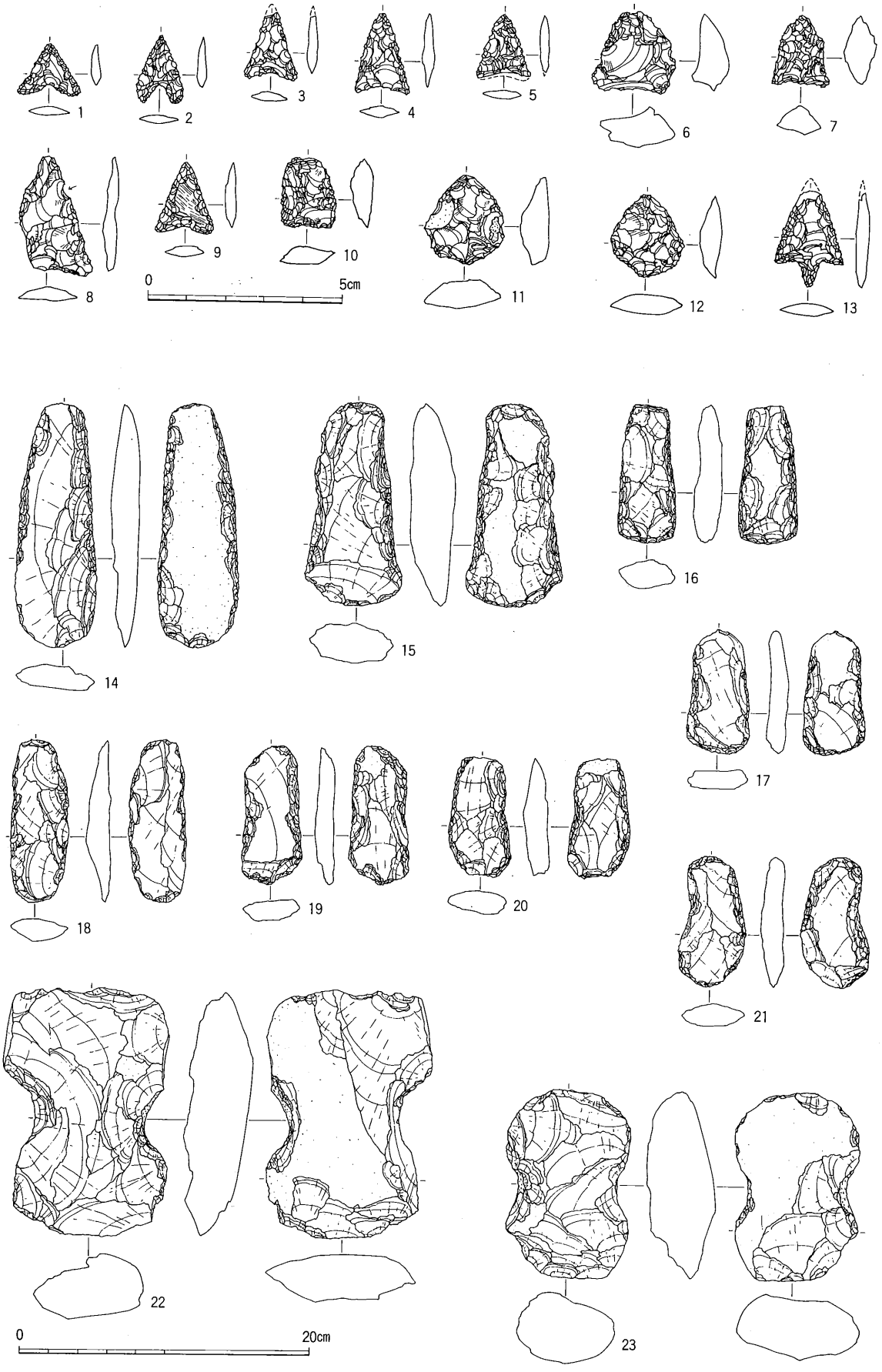


図209　出土石器実測図(1)

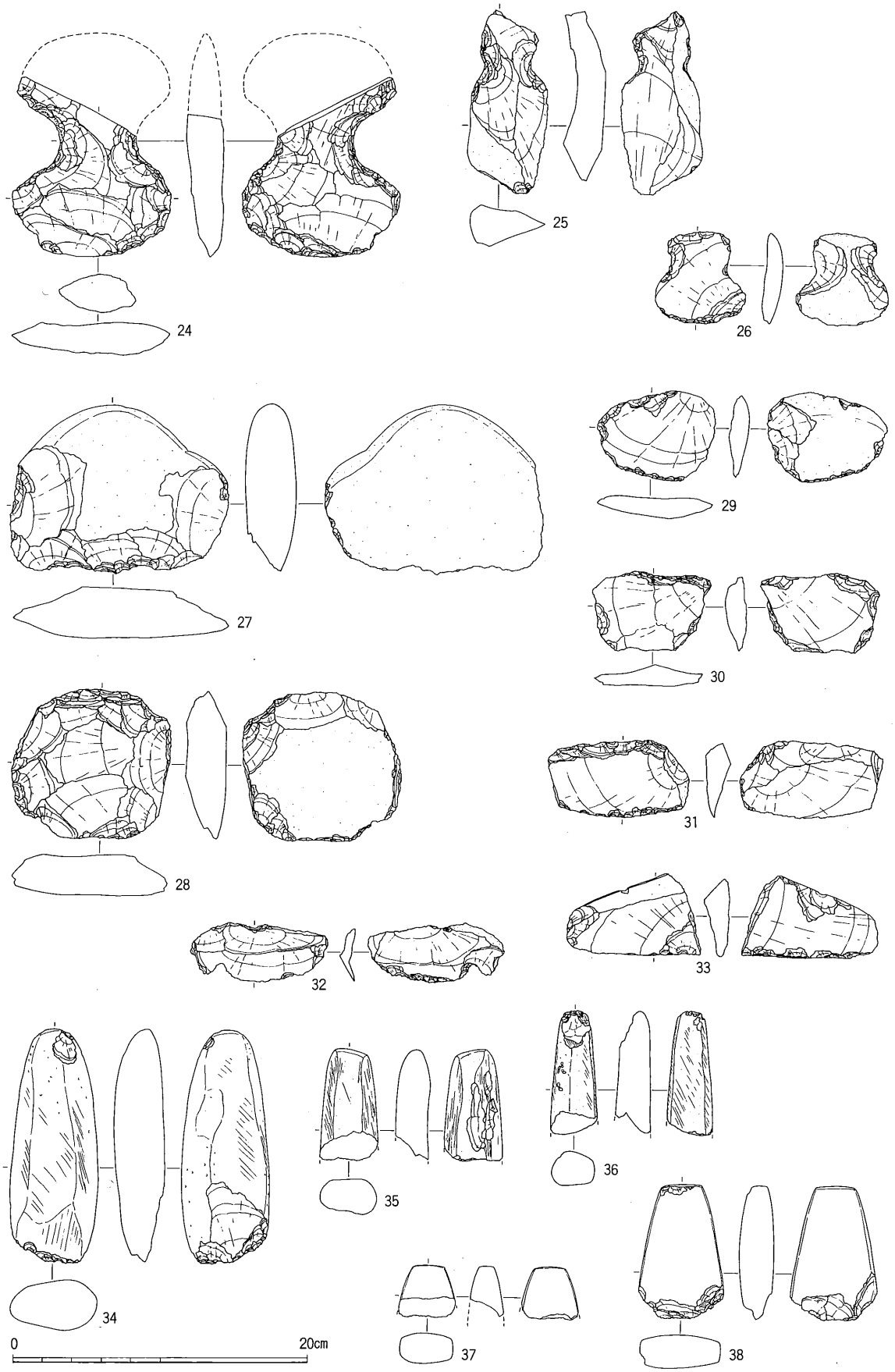


図210　出土石器実測図(2)

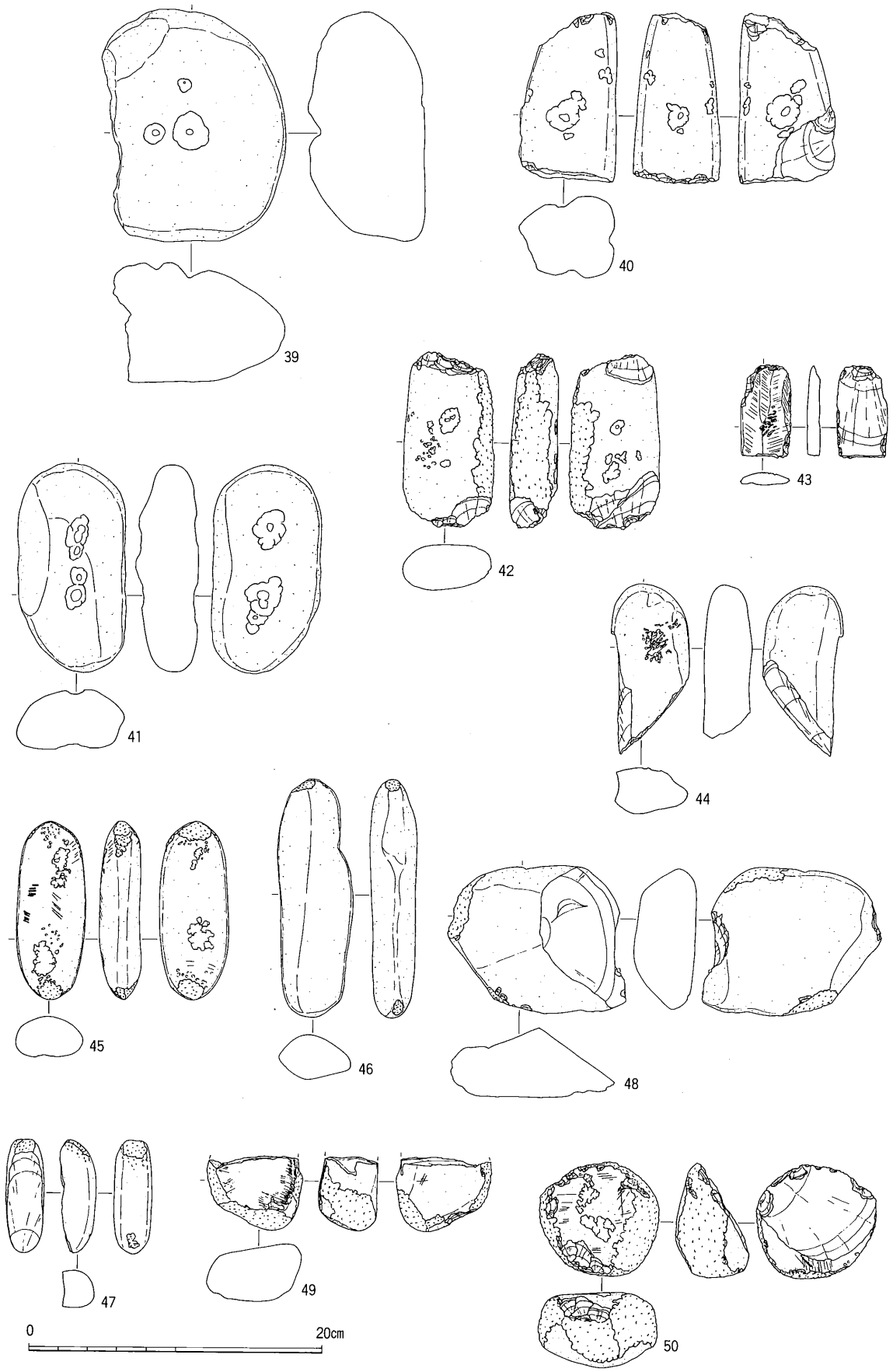


図211　出土石器実測図(3)

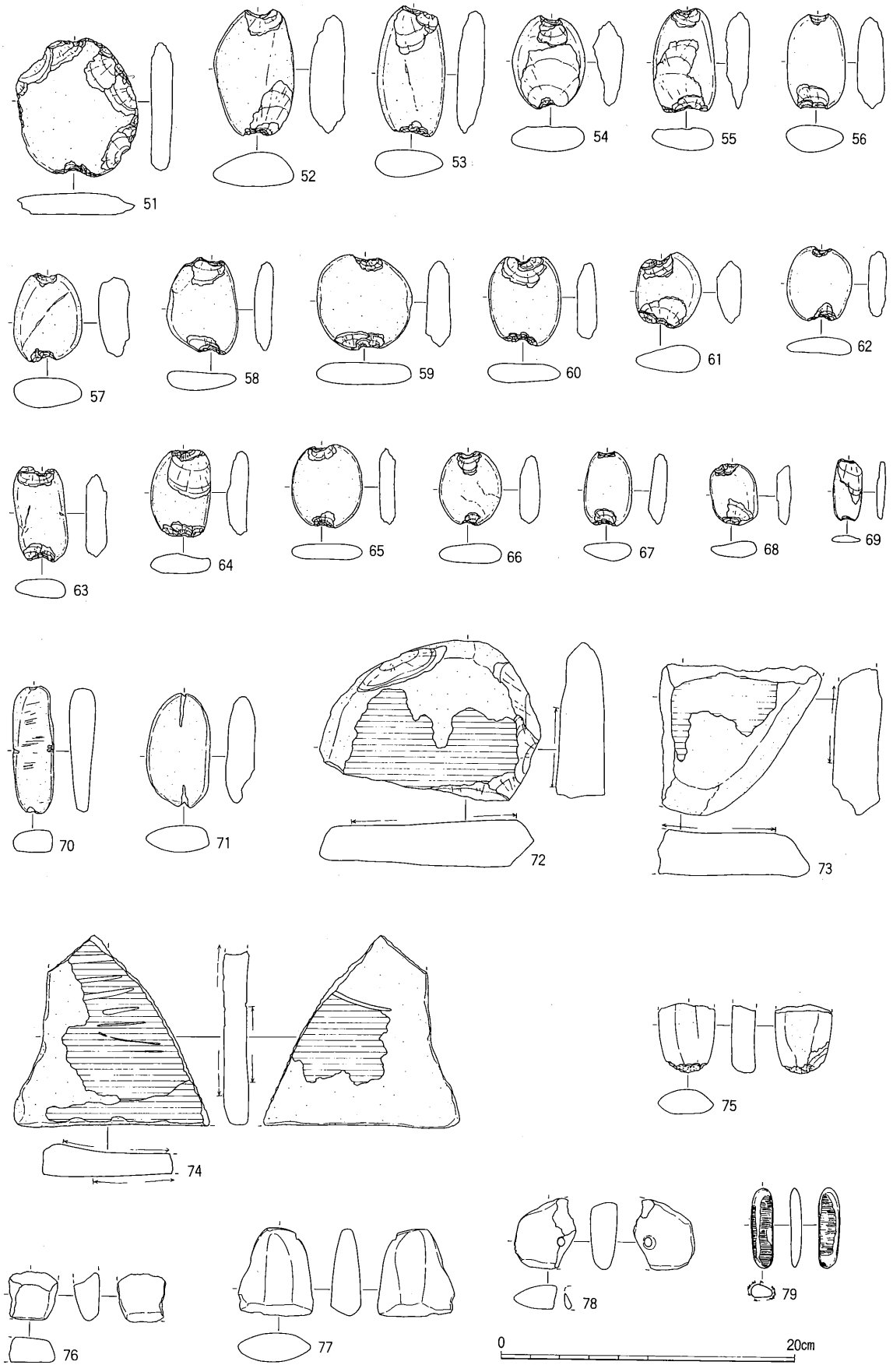


図212　出土石器実測図(4)

第５節　第７次調査

Ⅰ　調査の経過

昭和52年５月29日の分布調査の後、６月３日～10日まで、第６次調査の終末期と併行して実施された。ＢＸ07－ＢＹ08に予定された個人住宅建設に伴うものであり、調査体制も第６次調査と同様で、友野良一を団長とし、小木曽清・赤羽義洋・丸山やよい等によって組織された。

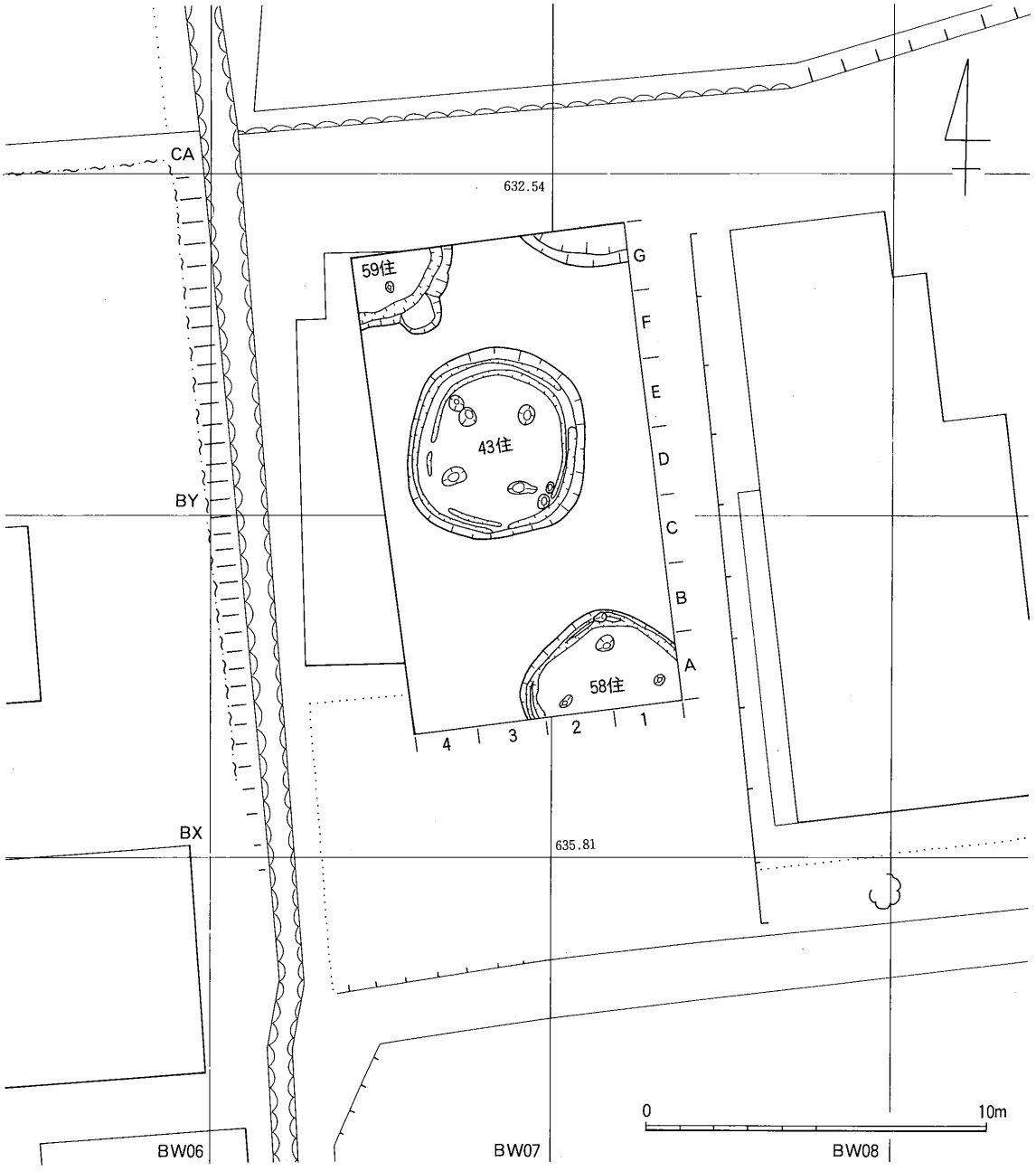


図213　第７次調査全体図

調査では、南北14m、東西８mの範囲に１辺２mのグリッドを設定し、南から北へA～G、東から西へ１～４と呼んでおり、結果として第４次調査で確認していた１軒の住居址を完掘し、２軒の住居址の一部を発掘している。調査地点は水田となっており、平坦で、20～30cmの耕作土の下は10cmの地場層（水田耕作土下の酸化鉄沈澱層）、その下は大部分がロームあるいは赤褐色土となっているが、調査区北東隅のみはローム面が急激に深くなる。遺構は地場層の下で検出された。

調査後に記録の一部が散逸してしまっている。遺物の垂直分布の記録、調査時のレベル眼高などであり、ここでは、調査の全容を記録出来てない。また、整理の不手際で、58・59号住出土の土器片と、43号住出土石器の多くを図示することが出来なかった。写真図版によられたい。

II　遺構と遺物

１）　43号住居址（図214）

調査区のほぼ中央に検出され、拡張の痕がある。新しい住居址の平面形は、N５°Eに長軸をおく円味をもった隅丸方形で、特に北壁は円い。規模は5.6～5.0m、柱穴はP₁～P₄の４本で、P₉が地床炉であろうと思われる。周溝が壁下をめぐるが、南東隅のみはやや内側に入っている。床面にみられる沢山の小ピット、北壁、東壁に斜めに穿たれた小ピットの性格は不明である。周溝の内側に、ロームを貼った全く相似

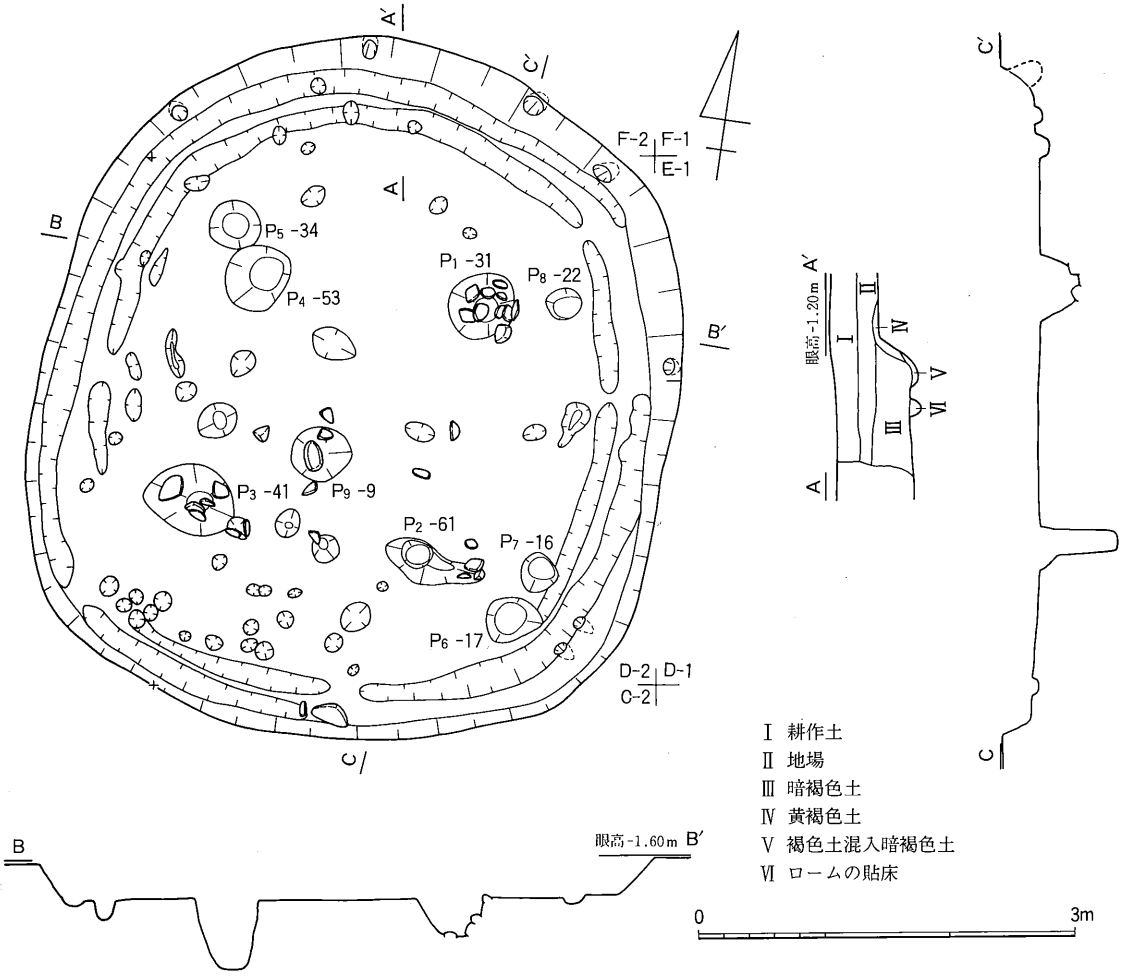


図214　43号住居址実測図

形の溝があり、旧住居址の周溝とした。それが壁下をめぐっていたとすれば、旧住居址の規模は周溝外壁で4.8×4.2mを測る。新しい住居址の大部分は第４次調査で発掘され、第７次調査では、北側の未掘部分とピット１個、旧住居址の周溝が調査されている。

遺物は少ない。土器はⅠ期Ⅰ群A～C（１～13）とⅢ群B（16～25）が主体で、前者の中にCの大破片（８）もある。石器は、石鏃35点、石匙６点、石錐４点、打製石錘５点、スクレパー22点、叩石３点と、若干の黒曜石の剝片類が出土している(図版95)。石器量からみて、土器がこれで全てであるかは疑問も残るが、埋土の遺物はⅠ期前半のものとしておきたい。

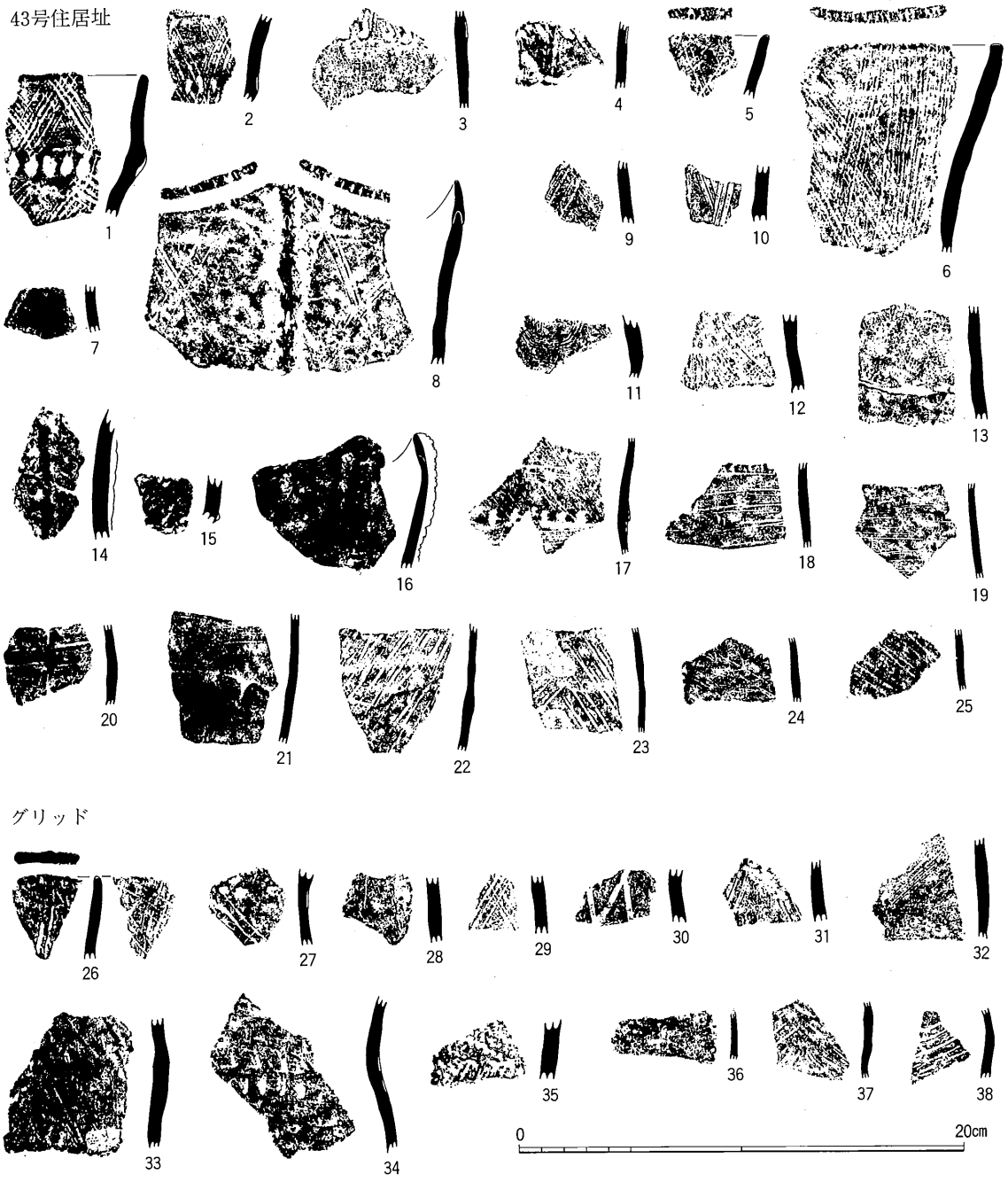


図215　43号住居址、グリット出土土器拓影

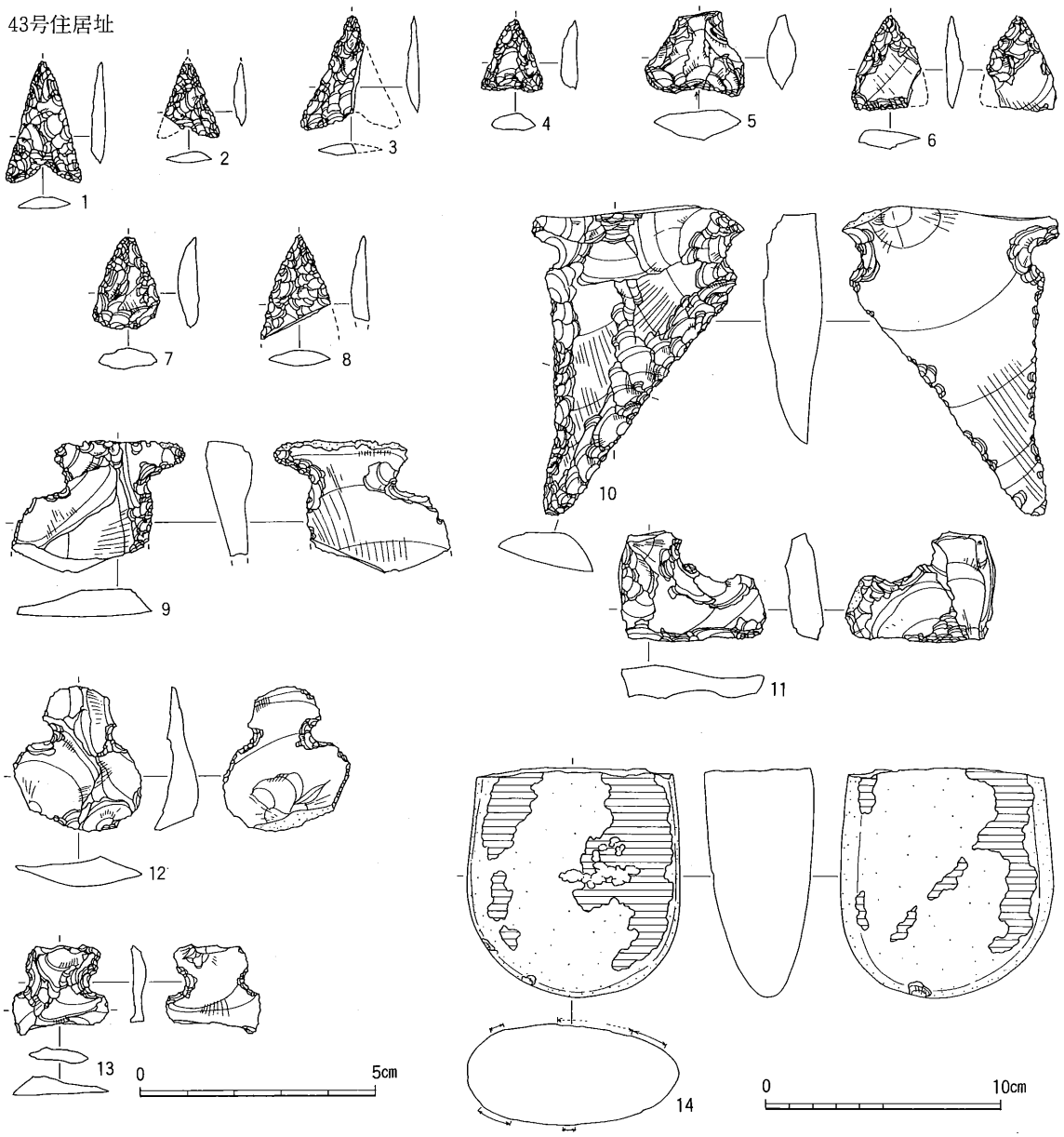


図216　43号住居址出土石器実測図

2）　58号住居址（図217）

調査区南東隅に検出され、北西の約半分が調査されている。水田化の際に上層を削平しているのか、検出面から床面までは浅い。床上に焼土と炭化物、炭化材があり、東側にある37号住と同じく焼失住居といえる。平面形はおよそN50°Wに長軸をおく１辺4.5m程の円味をもった隅丸方形となろう。柱穴はP_1～P_3と未掘部分に１本の４本を想定したが、壁下をめぐる周溝が二重になっている（図版13）ことから、小型で深いP_9も柱穴として、建て替えされているものと考えられる。おそらく拡張であろう。

遺物はごく少量である。土器は破片で、Ⅰ期Ⅰ群のＡ１点、Ｂ３点、斜格子目文26点、無文部92点と、Ⅲ群14点であり（図版64）、前者は斜格子目文の施文等からＡ・Ｂが主体であると言え、Ⅲ群は斜走沈線を付すものの割合が高い。石器は、石鏃（15）１点、石錐（16）１点、スクレパー（17～19）３点、叩石１点と若干の黒曜石剝片類があるにすぎない。

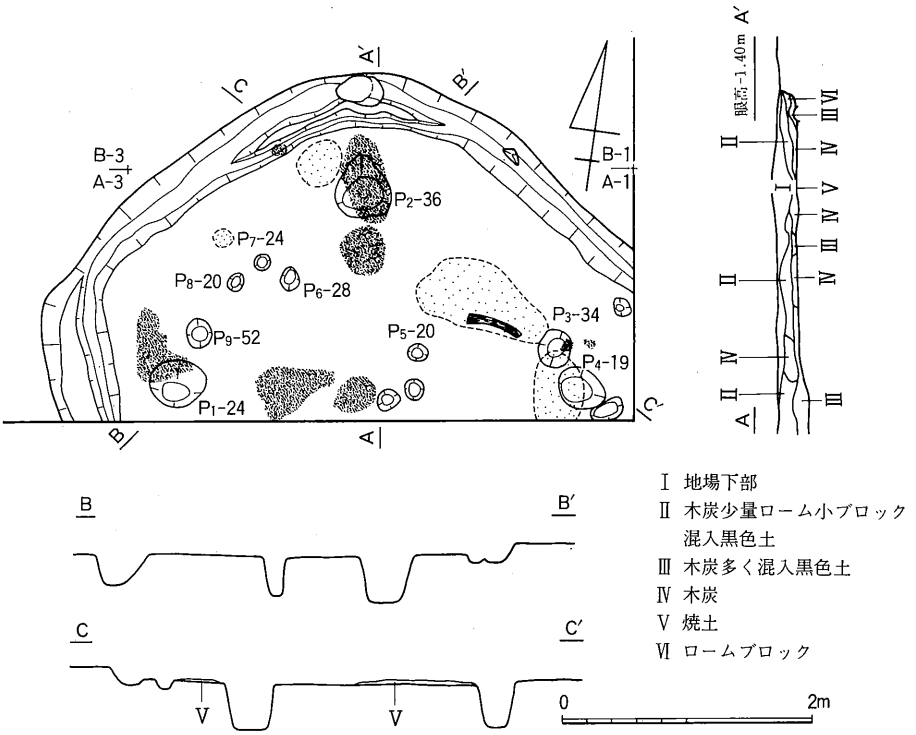


図217　58号住居址実測図

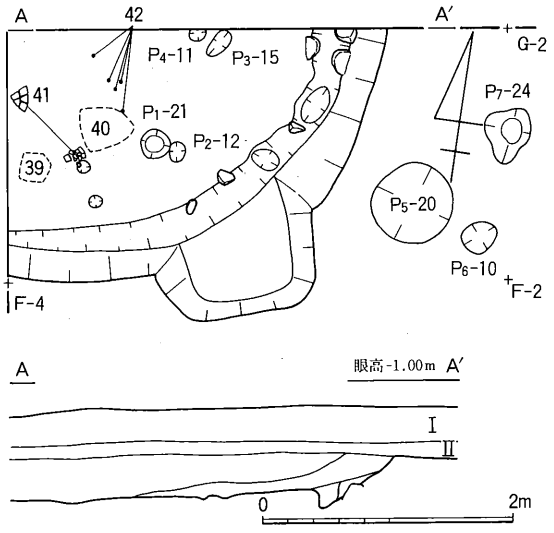


図218　59号住居址実測図

3） 59号住居址（図218）

調査区北西隅で検出され、4分の1を調査した。平面形、規模共不明だが、円味をもった隅丸方形が想定される。幅広の周溝が壁下をめぐり、南東隅に張出部らしきものがある。P_1は柱穴となろう。埋土中には、12・14号住などと同様に多数の拳大から人頭大の礫が、壁際で高く中央部で低い状態に埋没しており、その礫群より下層の床面にかけてから、図化した土器大破片が出土した。土層図には土色が記録されていない。ただ、Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は水田地場となろう。

遺物は少なく、土器は、Ⅰ期Ⅰ群B（39・40）、C（41）、底部（42）、Ⅲ群B（43）の図化したものの他、破片にⅠ期Ⅰ群のA5点、B1点、G2点、斜格子目文16点、無文胴部片109点と、Ⅱ期Ⅰ群A1点、Ⅲ群22点（内にAが1点）がある（図版64）。石器は、石鏃3点、石匙（20）4点、打製石錘（21）1点、スクレパー4点、叩石3点と若干の黒曜石剝片類が出土している。また、張出部から、Ⅰ期Ⅰ群のB2点、斜格子目文1点、無文片6点と、Ⅲ群1点が出土している。

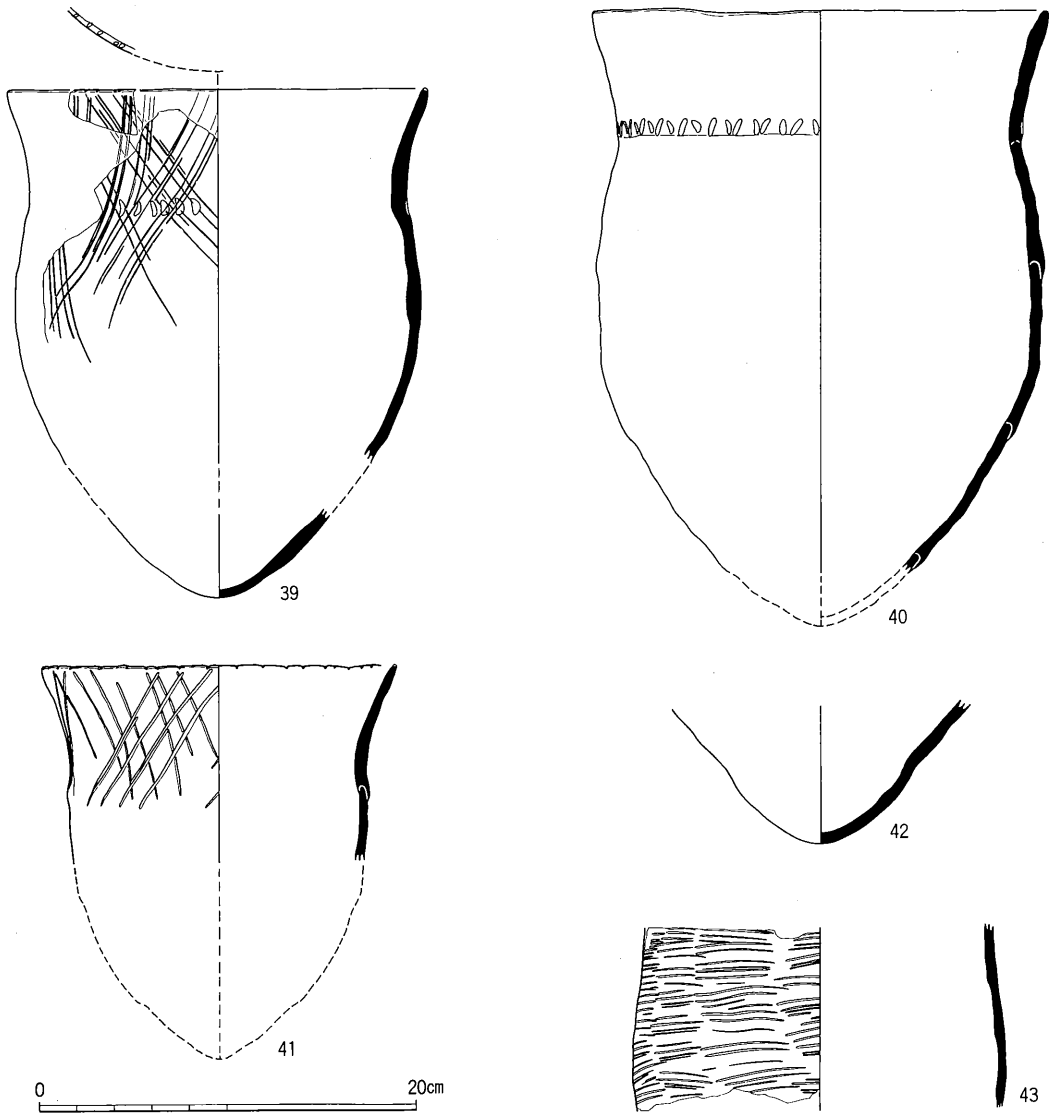


図219　59号住居址出土土器実測図

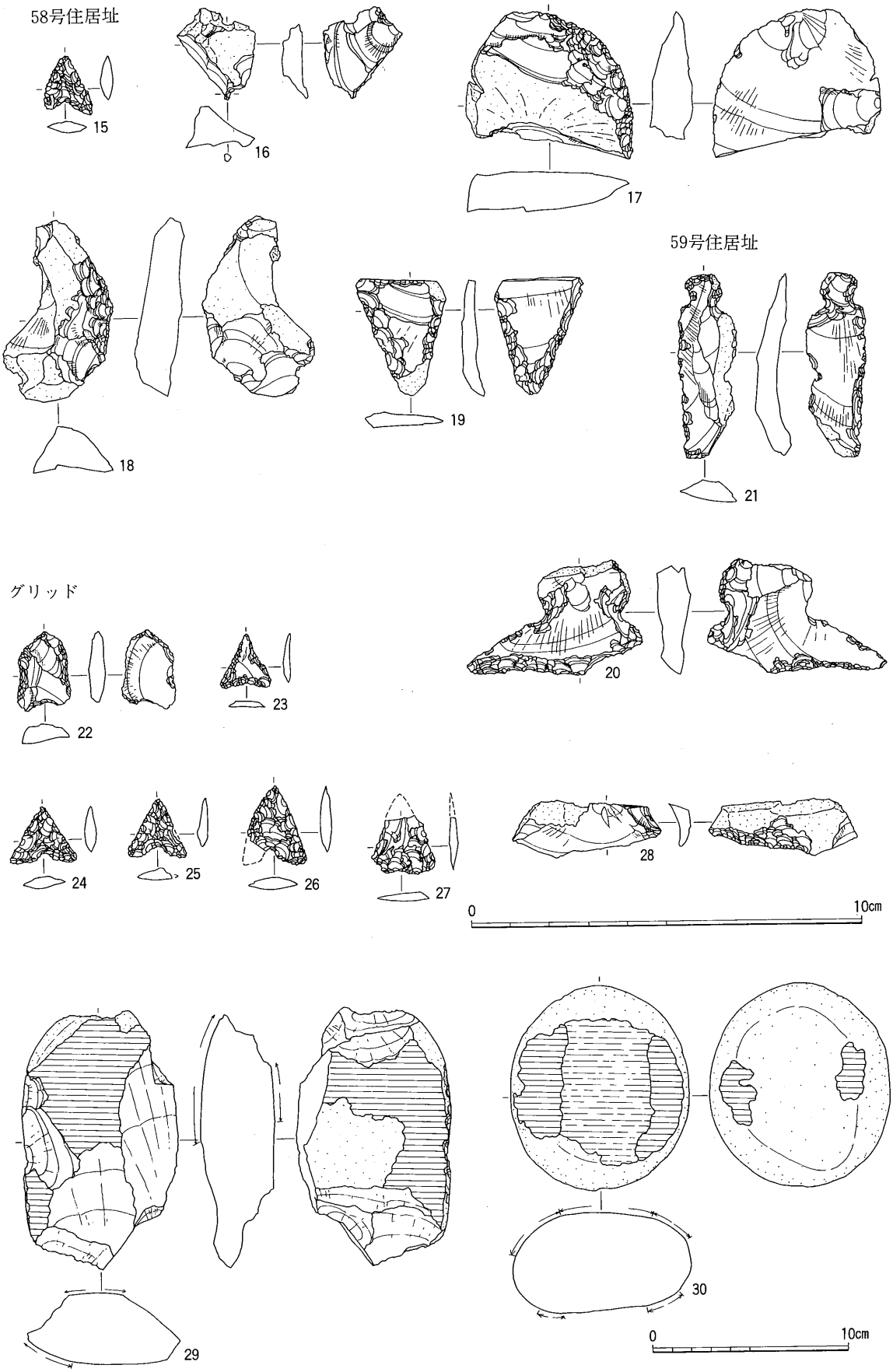


図220　58・59号住居址、グリッド出土石器実測図

第6節　第8次調査

I　調査の経過

昭和52年11月12日から19日頃まで、ＢＸ～ＣＢ—23地点で実施された個人住宅建設に伴う調査で、第6・7次調査と同様の体制で臨んでいる。調査では、南北32m、東西５mの細長い調査区に１辺２mのグリッドを設定し、北から南へ15～30、東から西へＡ～Ｃとして全面を発掘し、結果として土壙３基、集石２基、マウンド１基とピット群を検出した。このうち、Ｃ19北東隅に検出されたマウンドは人為的なものでないと判断し、ここでは遺構から除いてある。

II　遺構と遺物

１）　１号土壙（図222）

調査区の北端近くで検出された。北北西方向に長軸をおく1.4×0.9mの不整楕円形を呈し、掘り方、埋土ともに整ってはない。遺物も出土していない。

２）　２号土壙（図223）

調査区の中央北寄りで検出された。平面形は北北西方向に長軸をおく1.1×0.8mの長円形を呈し、掘り方は浅い。埋土からは、硬砂岩礫や叩石（図227—２）を含む径10～20cmの礫が集石状に出土している。礫は東側で土壙底につき、西側はやや浮くようである。土器はない。土層図が残されているものの、土色が記録されてない。

３）　３号土壙とピット群（図224）

調査区南寄りのＣ26･27に３号土壙、その周辺に10個のピットが検出された。東西に長軸をおく0.7×0.5mの小型の土壙は、検出面からの深さ40cmで埋土には木炭が混入している。一方ピット群を構成するのは径30cm前後、深さ30～50cmのピットで、図でみる限り掘り方もしっかりしているようだが、調査範囲が狭いこともあって、配置に規則性は見出せない。３号土壙内よりＩ期Ｉ群Ａの土器、P_{10}よりＩ期Ｉ群ＡとIII群の土器のそれぞれ小破片が出土している。

４）　１・２号集石（図225）

調査区中央のＢ・Ｃ23に検出され２基が並んでいる。１号集石は礫の大きさがそろい、配置も密だが、２号集石は礫の大きさ、配置ともにばらついたものである。いずれも、礫間や付近から遺物は出土しておらず、人為的とする根拠はみあたらない。

５）　遺構外の遺物

遺構検出面あたりから、Ｉ期Ｉ群Ａ、III群の小破片が約20点、縄文中・後期土器片数点と、黒曜石のスクレパー（１）２点、硬砂岩の叩石（３）１点が出土している。

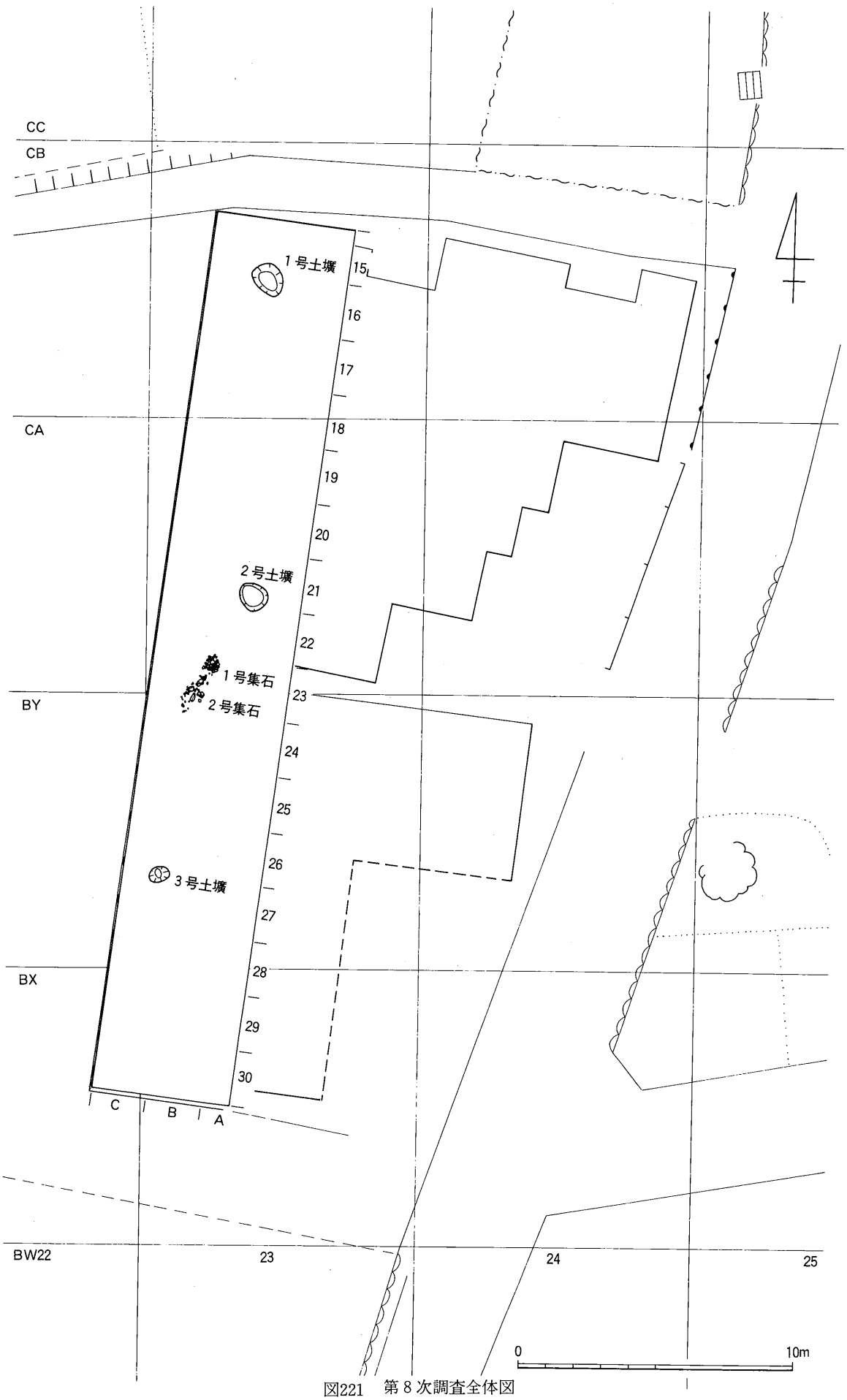


図221　第8次調査全体図

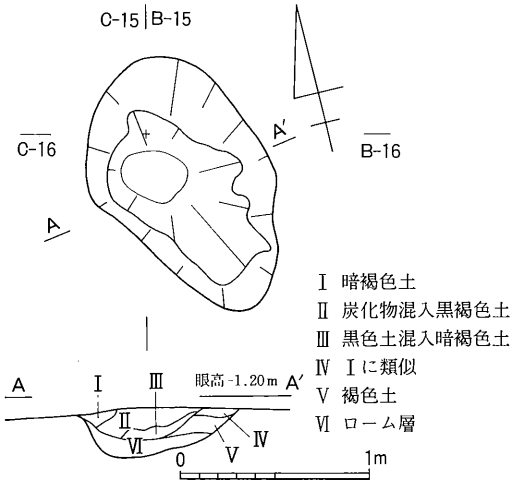
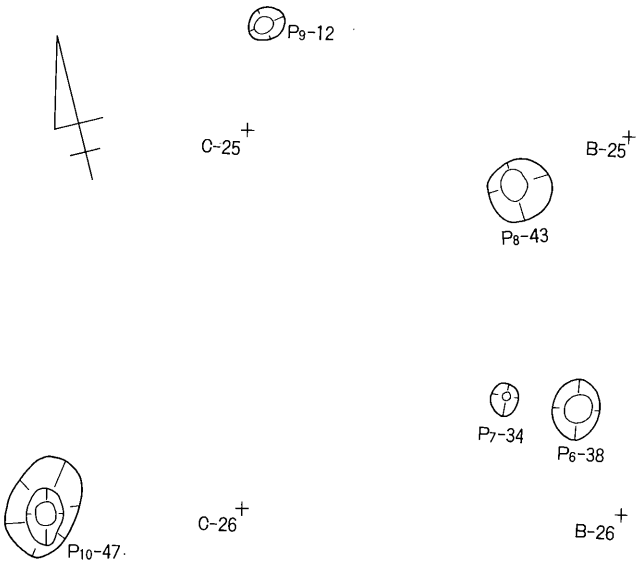


図222　1号土壙実測図



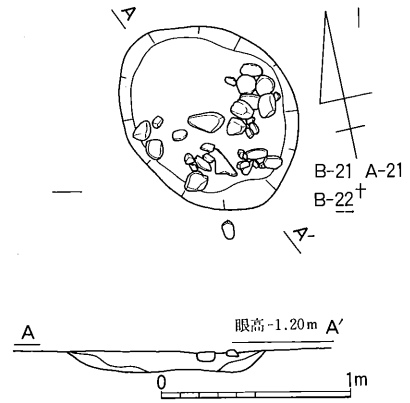


図223　2号土壙実測図

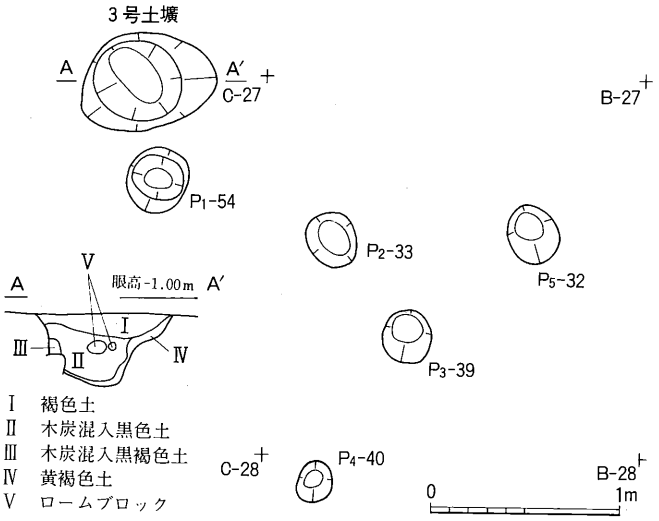


図224　3号土壙、ピット群実測図

図225　1・2号集石実測図

図226　出土土器拓影（2：3）

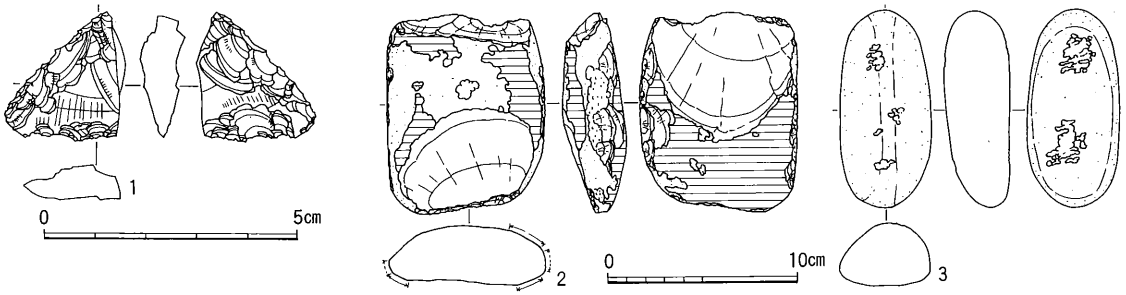


図227　出土石器実測図

第7節　第9次調査

I　調査の経過

ＢＳ・Ｔ―02～04地点への住宅建設に伴う調査で、友野良一を団長として実施され、昭和53年9月27日から10月25日までの間の、延べ11日間（9月27・30日、10月2日・11・12・19～21・23～25日）を用している。この調査に先立ち、9月22日には第10次調査に備えて遺跡全面に1辺10mのグリッドが設定されていた。そこで第9次調査でもそれに従って地区設定をした上で、具体的には調査地域内の任意の小グリッド（2m×2m）14箇所を掘り、遺構の検出された地点を拡張する方法をとっている。従って、図228にみるように、用地の全てが調査されているわけではない。この調査で5軒の住居址が検出されたわけだが、完掘しているのは1軒だけである。

II　遺構と遺物

1）　60号住居址（図229）

ＢＴ02に検出されたが西側は調査し切れてない。平面形はＮ10°Ｅに長軸をおく1辺4.5m程の隅丸方形が推定される。大小の礫の多い土中に構築されており、北壁下を中心に大礫が、床面中央に小礫が多く露出している。床は軟らかく南にわずか傾斜している。柱穴はP_1・P_3を含めて方形に配される4本を想定した。北側で広くなる周溝が壁下をめぐり、東壁中央で途切れる部分があって北側に大礫、南側にピットがある。入口部を示唆しているか。

遺物はごく少なく、Ⅰ期Ⅰ群の無文部7点、Ⅱ期Ⅰ群（1・2）2点と縄文中期（3～5）3点の土器と、上層から叩石（27・28）2点と礫端叩石（29）1点が出土しているにすぎない。

2） 61号住居址（図230・231）

ＢＳ―02・03に検出されたが、南縁が用地外へかかるため完掘してない。Ｎ80°Ｅに長軸をおき、平面形は西壁が強く張出した円味をもった隅丸方形を呈すると思われる。規模は4.8×4.0mほどになろう。床面は堅。主柱穴はP_1・P_3・P_6・P_7の４本を考えたが、P_2・P_4をあわせて多柱穴の住居、あるいはP_8・P_9を黒土が埋まっていたことからともに炉址と考え、建て替えにより柱穴が移動しているとすることも可能だろう。壁下を広めの周溝がめぐっている。

遺物は東側の埋土下部に集中するが量は少なく、土器は全て破片で、Ｉ群Ｉ期Ａ（６・７）４点、Ｂ（８～10・69・70）７点、Ｄ・Ｅ２点、斜格子目文（11～19）52点、無文胴部124点とII期（22）２点と、III群

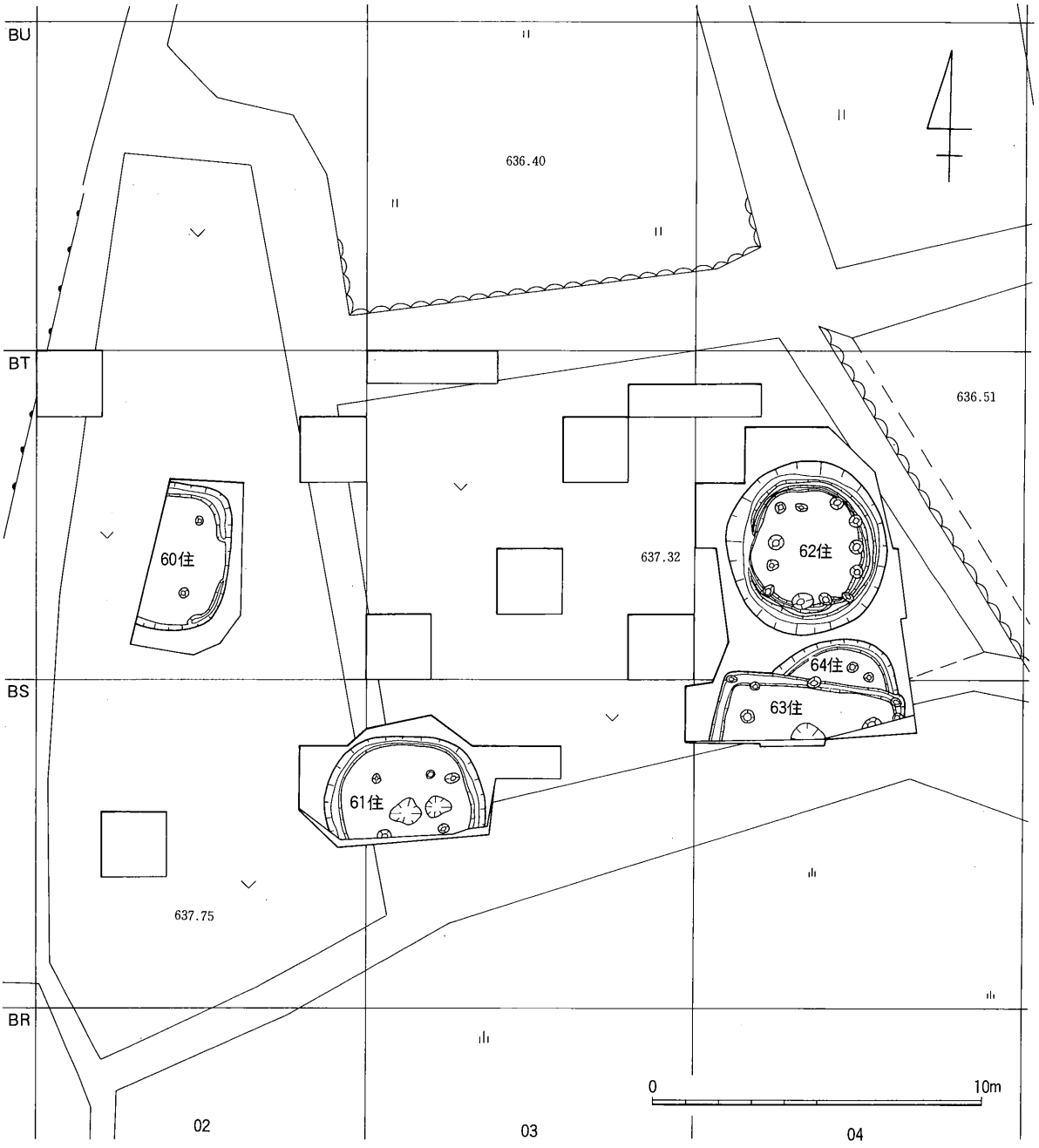


図228　第９次調査全体図

(20・21・71) 44点、内耳土器片1点がある。石器は石鏃（1）・スクレパー・打製石斧（30）・磨製石斧（33）・叩石（31）・礫端叩石（32）各1点が出土している。集合細線による斜格子目文が目につき、Ⅰ群はⅠ期Bでも古手の感が強い。

3） 62号住居址（図233・234）

BT04に検出され、南に64号住居址が接している。平面形は掘りあがったところではほぼ円形だが、周溝から、N10°Eに長軸をおく円味をもった隅丸方形であり、北壁が円く張り出しているとしたい。埋土は、上層から中位まで耕作が深く達しているため部分的にしか残されていないが、黒褐色土の下にやや厚い赤褐色土があり、その下の床面までの間に少し黒味がかった赤褐色土、より黒味がかった赤褐色土の薄い2層がみられた。床面は一部を除き非常に堅い。周溝は2重で、壁直下をめぐるものの方が幅が広く深い。柱穴は13本が可能性をもち、組み合わせとしてP_1～P_{12}の12本で構成される方形柱列様の配置、P_2～P_5とP_8～P_{11}の8本で構成される4本2列の配置、P_1・P_{14}・P_9・P_{11}の4本などが考えられる。周壁中に斜めに穿たれたピットが多く43号住や次の63・64号住とも似る。周溝からも、1回以上の建て替えがあったことは確かだが、床面施設の組み合わせや前後関係を断定する資料はない。いずれにせよ多柱の住居であった可能性は強く本遺跡では特異例といえよう。床面中央から木炭が出土したが、炉とはされていない。

遺物は少なく、壁下に無遺物層をおいてレンズ状に入りこんでいる。土器は、Ⅰ期Ⅰ群ではEの略完形

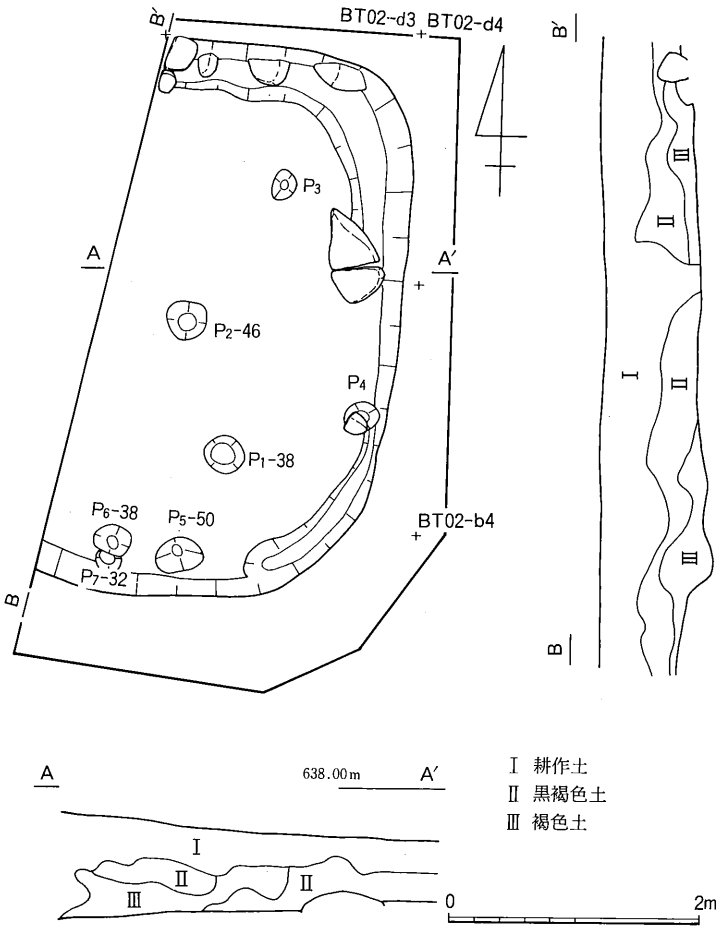


図229　60号住居址実測図

品２点（72・74）とＤかＥの大破片（73）の他、Ａ（23～25）４点、Ｂ２点、ＤかＥの口縁部６点、斜格子目文（26～29）30点、無文胴部片251点と、II期Ｉ群５点、III群（30～33）12点があり、石器は、石鏃（２）１点、石匙（３・４）２点、スクレパー（５）４点、礫端叩石（35・36）２点と、黒曜石の剝片28点・屑片53点・石核15点などが出土している。打製石斧（34）礫端叩石（37）各１点が上層のグリッドから出土している。

４）　63・64号住居址（図233・234）

62号住の南に、半分以上が用地外にかかる状態で検出された切り合う住居址で、64号住の大部分を63号住が切っている。

63号住は、64号住床面より10cm下まで掘り込まれており、平面形はN80°Wに長軸をおく長辺5.8mの長方形と推定され、埋土は、上から黒色土・黒色土混入暗褐色土・褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積している。壁直下を周溝がめぐり、柱穴はP_{28}・P_{29}を含む４本柱が考えられるが、周溝上のP_{31}・P_{32}・P_{34}や周壁中のP_{33}なども上屋構造に関係したものとみたい。中央の床面に炭があり、炉となろう。遺物は少なく、中央に近い埋土の上層から下層まで、まんべんなく出土しているように見えるが、部分的な調査であり明言はできない。土器は、Ｉ期Ｉ群（34～39）145点、II期Ｉ群（40～51・75）21点、III群（52～59・76）29点が、石器は石鏃（７・６）２点、スクレパー（８）３点、磨製石斧・叩石（38）各１点と若干の黒曜石の剝片類が出土している。II期Ｉ群土器が床上から出土しており、廃絶時期はII期のうちに求められよう。

64号住居址は、検出面からの掘り込みが浅く、平面形が円味をもった隅丸方形と推定される他は、規模、柱穴等は不明で、床面も堅くない。壁下を周溝がめぐっている。遺物は数点で、Ｉ期Ｉ群４点、II期Ｉ群１点（63）、III群１点の土器があるにすぎない。

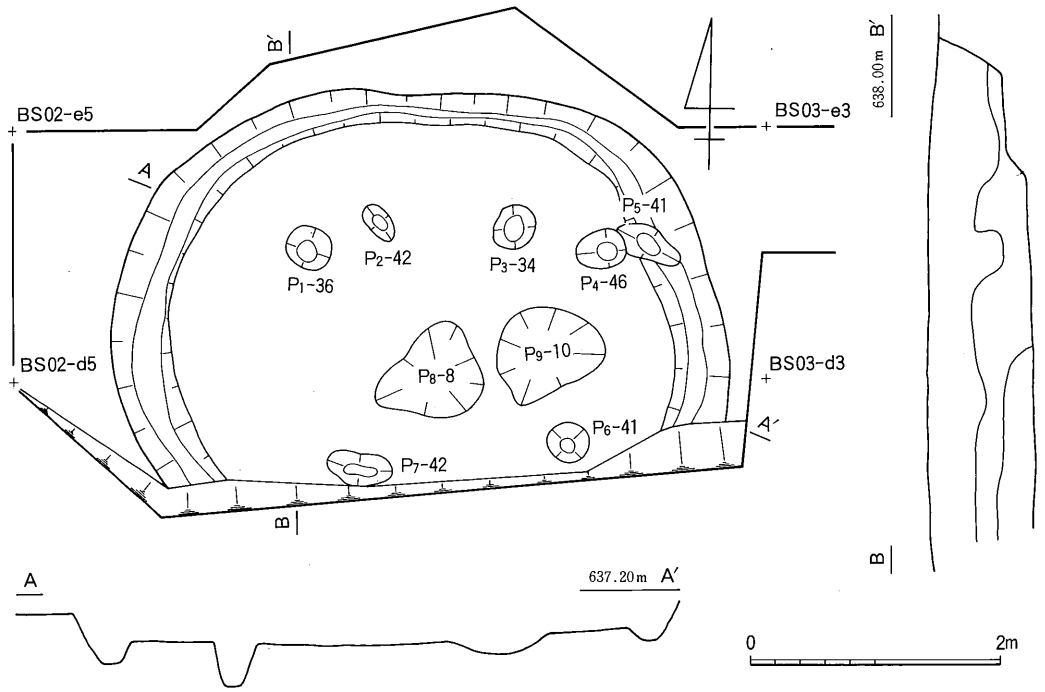


図230　61号住居址実測図

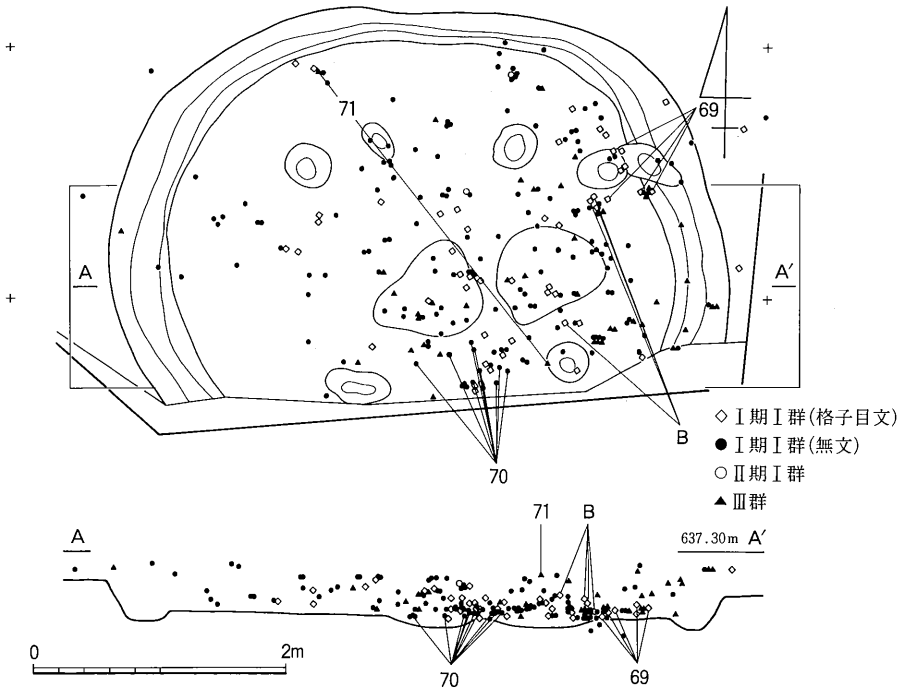


図231　61号住居址遺物出土状態

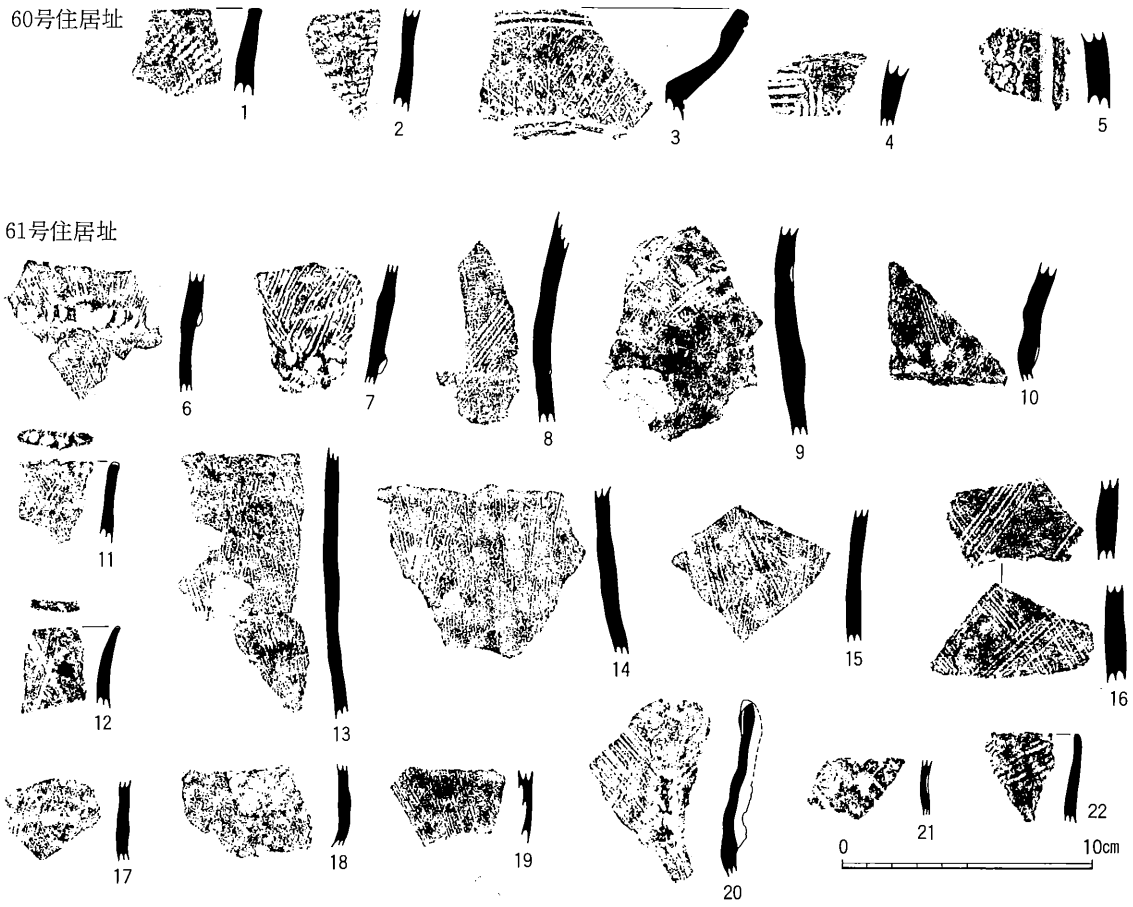


図232　60・61号住居址出土土器拓影

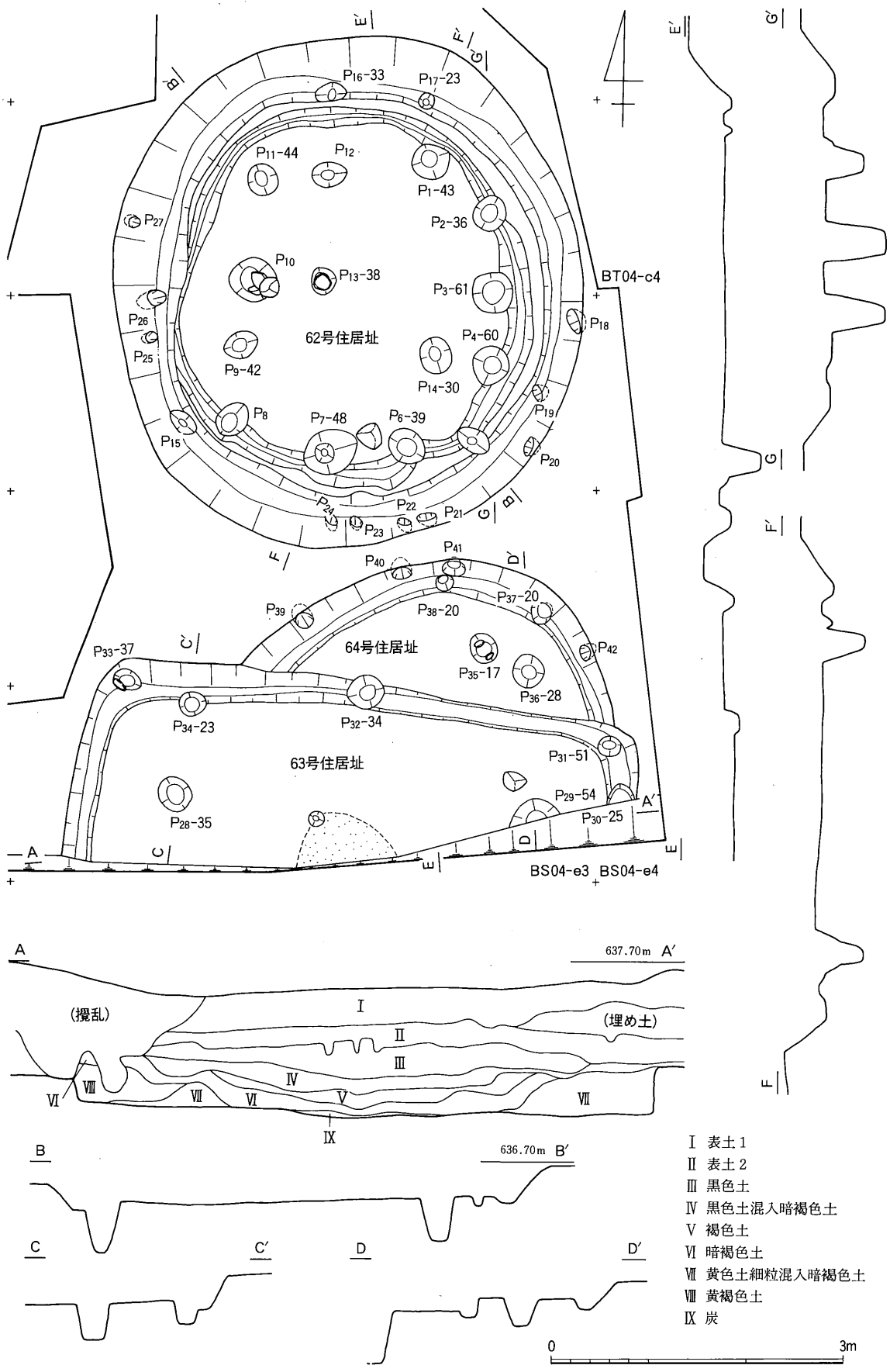


図233　62・63・64号住居址実測図

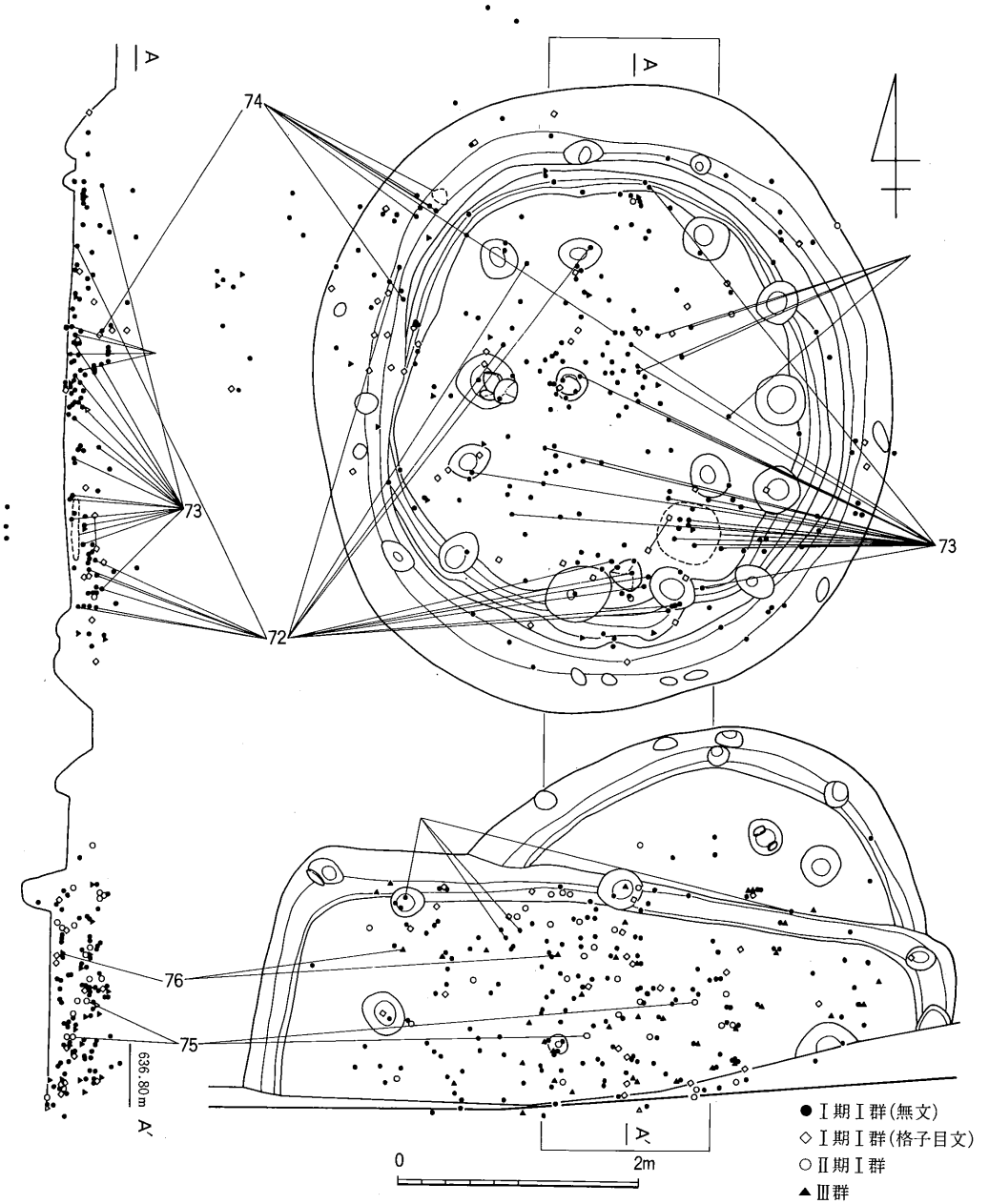


図234　62・63・64号住居址遺物出土状態図

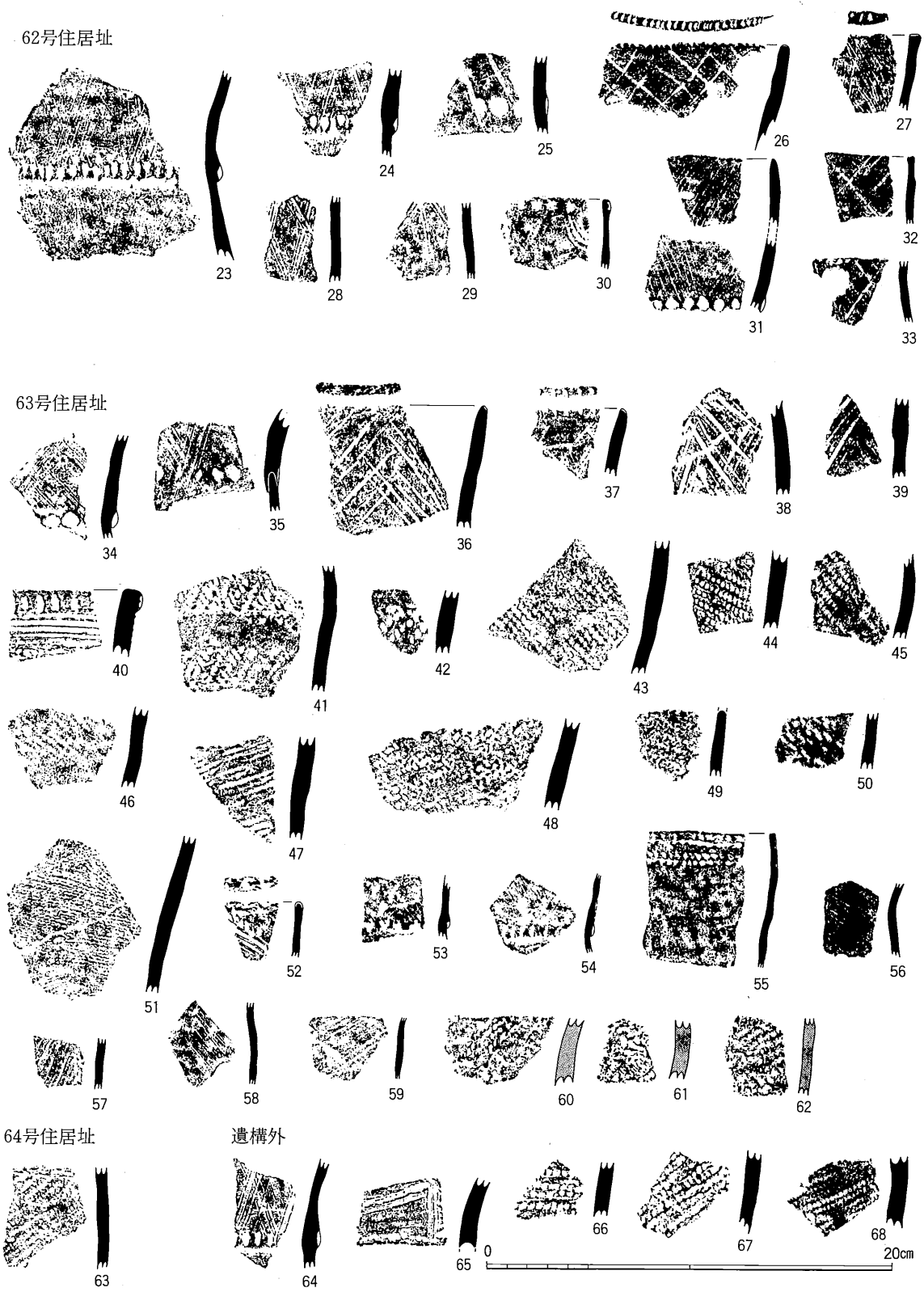


図235　62・63・64号住居址、遺構外出土土器拓影

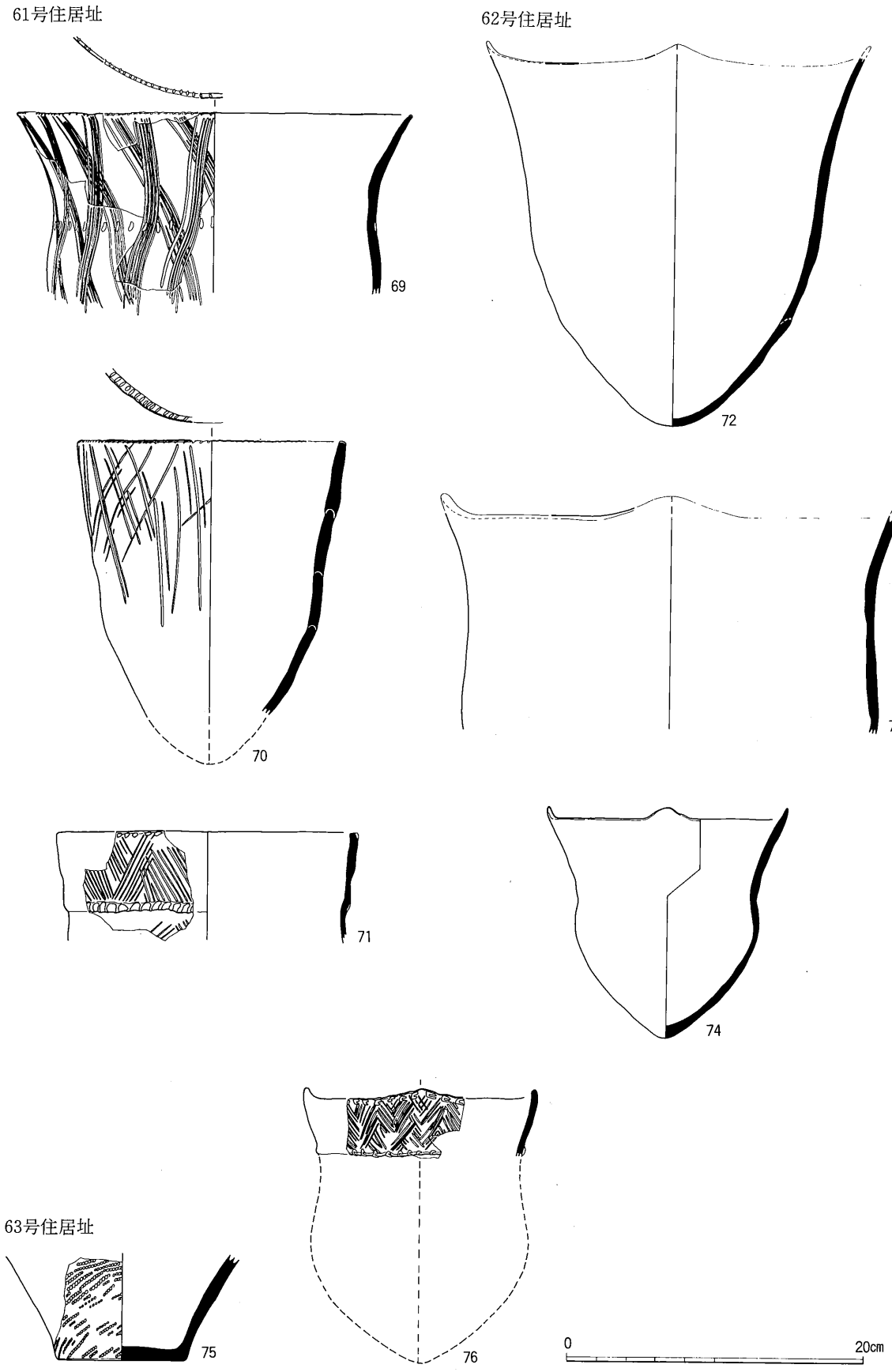


図236　61・62・63号住居址出土土器実測図

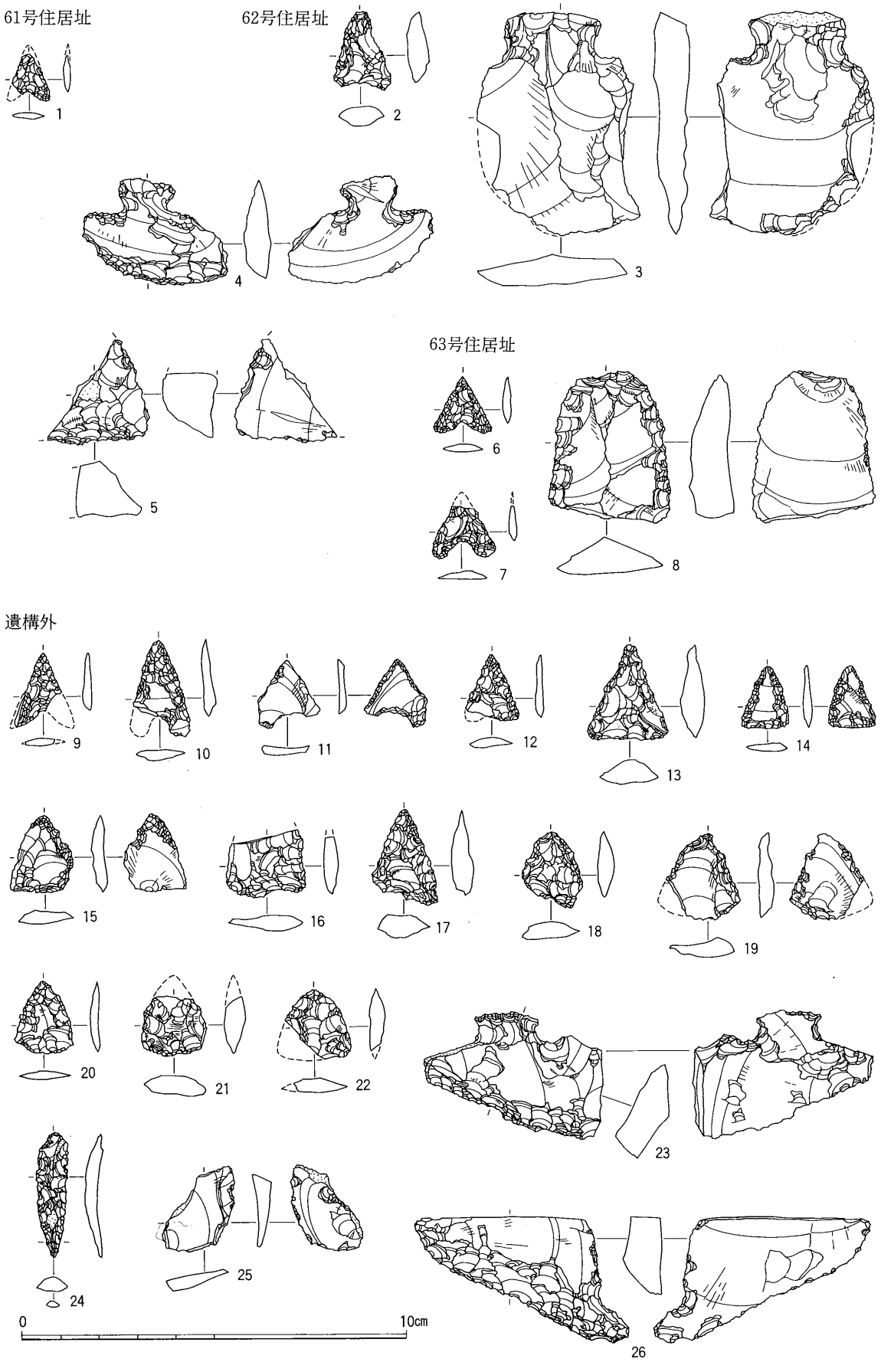


図237　61・62・63号住居址、遺構外出土石器実測図

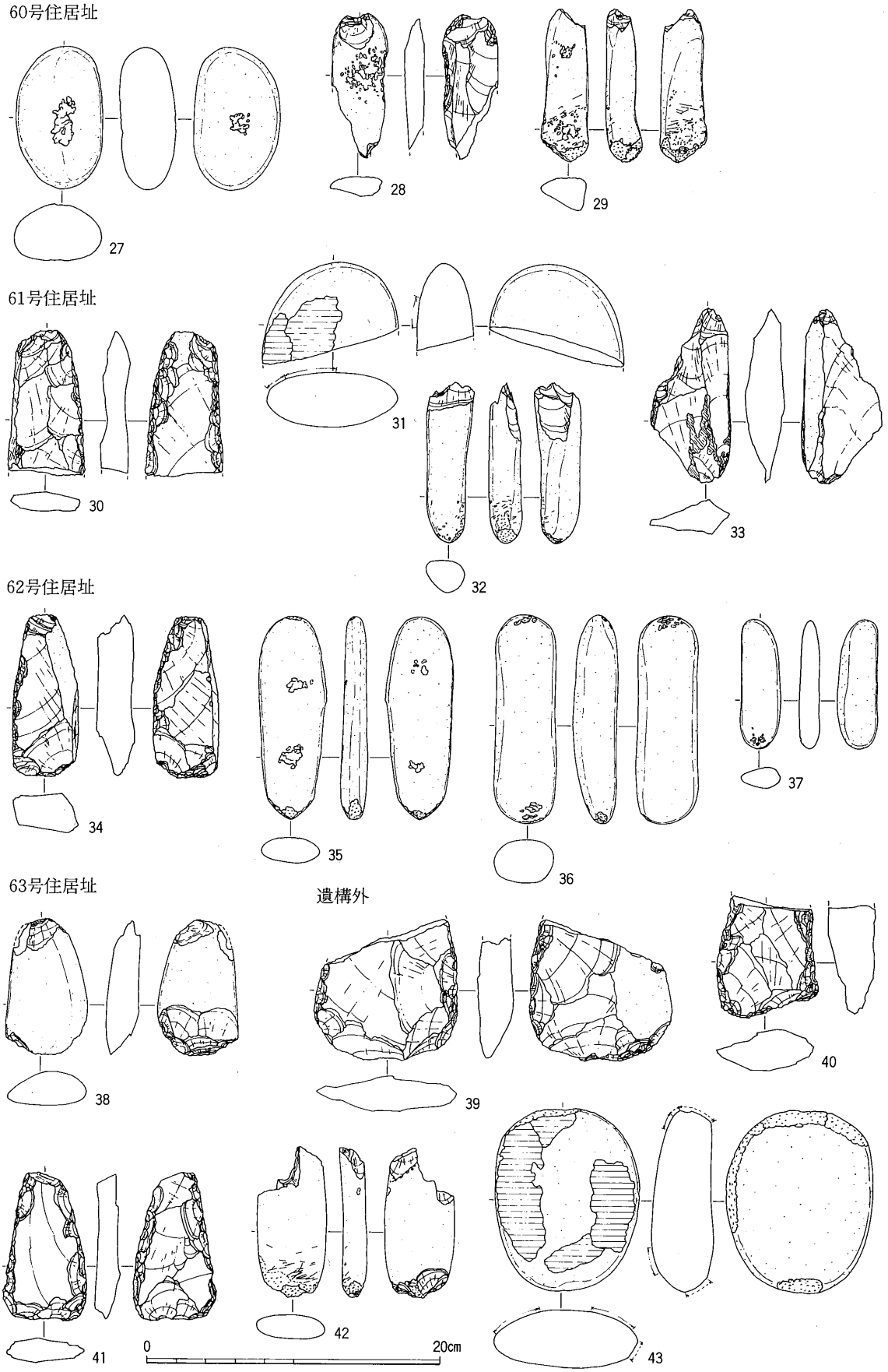


図238　60・61・62・63号住居址、遺構外出土石器実測図

第８節　第10次調査

Ⅰ　調査の経過

昭和53年11月４日より12月８日まで実施された。同年４月に遺跡を含む西原地籍の土地区画整理事業計画が公表されたのを契機として、地元研究者から遺跡保存の強い要望が出されたのを受けた村教育委員会によって計画された、範囲確認調査である。県教育委員会との再三にわたる協議の中で、縄文前期の遺跡範囲が以前の調査（第４次）で推定されたものより確実に広がることが予想されるので、保存のための基礎資料として、まず遺跡の範囲を具体的に知る必要があるとされたことによるもので、昭和53年度国庫補助事業として実施された。調査団は向山雅重を顧問とし、友野良一団長以下、小木曽清、丸山やよい、和田武男の各調査員によって組織された。調査では、201箇所の「調査坑」―基本は１辺２mの方形―を遺跡地内の調査可能な地点へ任意に設定し、遺構・遺物の出土状況を観察している。この調査に先立って設定されていた１辺10mのグリッド(1)を基に、新たに設定された地区割りによって調査範囲を示せば、図239のようにＢ大区を中心にＡ・Ｃ大区まで広がる19～46列と、ＢＮ～ＢＳ―01～08付近との２箇所、約73,500㎡である。個々の調査地点からの出土遺物は既刊の報告書〔友野良一1979〕に詳しいので、ここでは、第10次調査の結果に第９次調査までの成果を加味しながら、調査目的である遺跡の範囲を明示することに主眼をおいて述べておきたい。出土した個々の遺物や遺構についての分析や、さらには住居址に番号を付して示すこともここではしてない。(2)

Ⅱ　遺構と遺物

１　縄文時代前期の遺構と遺物（図239）

Ⅰ期とII期がある。今回の調査範囲に限ると、Ⅰ期の遺物の出土する範囲は、縄文前期の遺物の分布域（図239）そのものであり、03列以西、南東側の大部分、北東の台地縁辺部からの出土はない。量は、ＢＯ08が最も多く、ＢＶ19、ＢＱ05、ＢＱ08と続いており、東方に行くに従って減少する。24列から30列付近が少なく見えるのは、住宅地のため調査地点そのものが少ないことによる。一方、II期の遺物は、18列以東は数箇所から多くて２・３点の出土をみたので、04列から08列の特に東側に多く出土しており、特に多かったＢＯ08、ＢＱ08の調査坑では、II期がⅠ期を上回っている。遺構は、東端はＢＸ35で、西端はＢＱ02で住居址と思われる落込みが検出され、その間に切り合いも含めて30軒弱を数えた。

これに第９次までの調査結果をあわせて、遺跡の規模を考えてみると、Ⅰ期では、第６次調査でＢＨ03から、第９次調査でＢＴ02から、第７次調査でＢＹ07からいずれも住居址が検出されており、今回、ＢＸ35に遺構が予想されたことを加味すると、集落は、ＥＬ95、ＢＸ35付近を長端とする長さ420m、幅180m程度になろう。今回の調査で03列以西が極端に遺物が少なかったことから、西端は単純に収束するのではないかもしれない。いずれにせよ、遺跡の範囲内では、北側の西寄り、最も高い一帯であり、中をみると、遺構、遺物ともに東方が粗く西方に密に分布している。第９次調査の結果を考えあわせると、台地北縁に回りこむようにしてさらに西方へ集落が続いているとも考えられる。II期と判断される住居址は、西側は

図239　縄文前期の遺物分布図

ＢＳ04、北側はＢＴ04、東側はＢＱ17、南側はＢＮ12～15に検出されている。北方でＢＹ08のＩ期の住居址に12点のII期Ｉ群があること、南方は道路によって切られている状態がうかがえることから、集落址としてＢＲ04、ＢＲ17付近を両端とする径140m位の範囲が想定される。

遺物は、Ｉ期Ｉ群（18～20・77～89）、II期Ｉ群（21・23～27・90～102）同II群（２２）、III群（28・29・103～110）、II群（112）、II期Ｉ群Ｄ（113～115）の土器の他、石鏃（１～７）、石匙（８～11）、石錐（12）、打製石錘（13・14）、スクレパー（15・16）、横刃型石器（17）、磨製石斧（18）、叩石（19）、礫端叩石（20～22）の石器、土製円板（図240－１・２）と土製品（３）が出土している。

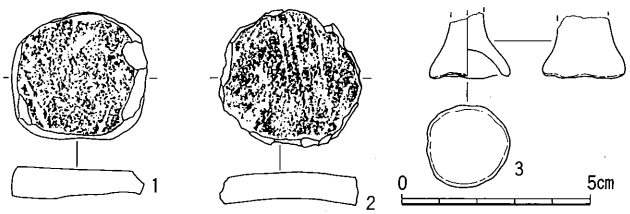


図240　土製品実測図

2　縄文時代中期の遺構と遺物（図241）

調査によって、台地上位面のうち南方低位の面、ＢＨ列以南一帯から、多量の遺物の出土をみている。北方でもわずかながら出土し、特に東側では少なくない地点もあるが、縄文前期の遺物の出土範囲とは、その東方でわずか重なるだけである。しかし、南方で西側と東側がさらにどの程度広がるか、南縁がどこで限れるか等は、明らかにし得てない。

土器はIII期からＶ期まで出土している。調査範囲内に限ると、III期（中期初頭）の土器（30・116～131）はＢＱ43、ＢＩ36、ＢＩ39、ＢＨ35などの台地中央部の調査坑で目につき、南はＢＡ列付近まではわずかに出土しているが、南縁であるＡ大区にはない。量的には多くない。IV期（中期中葉）の土器（31～39・132～153）は、ＢＧ22からＢＥ38の間の幅約30mの範囲、ＢＢ25などで比率が高い。中期の土器が多く出土している調査坑からはほぼ例外なく出土しているが、南縁で少なく東縁にはなく、台地の内側の方に多い傾向は続いている。Ｖ期（中期末葉）の土器（40～73・154～183）の出土範囲は、中期の土器の出土範囲そのものといって良く、南縁、東縁で比率が高い。第６次調査でＡＯ18に、少なからぬ量の縄文中期とともにＶ期の土器片の埋まるピット１基が検出されており、南の狭小な低位面まで、Ｖ期の分布域が広まることは確かである。石器は打製石斧(26～35)が81点と極立っており、横刃型石器５点、粗大石匙(36～39)６点、磨製石斧や乳棒状石斧（40～42）14点、敲打器（43～46）18点、礫石錘（47～50）、叩石各５点があるが、小型の石鏃（23）・石錐（24）・スクレパー（25）は各１点で少ない。

遺構は、調査範囲ではＡＹ列からＢＥの間に住居址と判断される落ち込みが10箇所程検出されているが、

図241　縄文中期の遺物分布図

遺物の出土状況から、上面台地の南半に集落が展開しているものと推測される。しかし、中期の中での集落の変遷は明らかにし得ない。

3　縄文時代後期の遺構と遺物

A大区のV列以南の調査坑から、1坑あたり多くて数点が出土している（74•184～187）。第6次調査で南の狭小な低位面のAO18・19から縄文後期の石棺墓とピット群、それをおおう集石・配石・立石を含む集礫遺構群が検出されており、その包含層が上面台地の肩まで広がっているのであろう。

調査範囲に遺構はみつかっていない。

4　弥生時代の遺構と遺物（図242）

BI36とBJ36にまたがる調査坑に4基の土壙が検出されたが、その1号土壙から、壺（75）と小形甕（76）が条痕文土器片（188・189）とともに出土した。壺は、頸部はやや広めで胴上部に最大径をおき、2条づつの粗雑で太い刻みを付す隆帯を頸部と口唇部外側に付し、3条からなる櫛状工具により右下から左上方向へ引く粗い条痕で埋めている。小型甕は無文で、口縁は一部立上がるもののその全体形はわからない。外面ヘラミガキで内面は頸部以下にケズリが見られる。外面と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。遺構は、ほぼ円形で検出面で径1.2m、深さ25cmの浅いタライ状を呈しており、弥生時代前期末から中期初頭の土壙墓とされている。

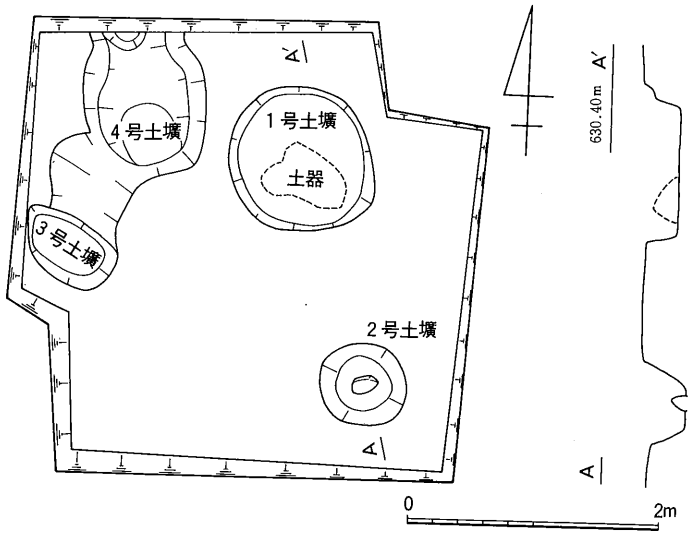


図242　1～4号土壙実測図

5　古墳時代以降の遺物

調査範囲全面より少量出土しているが、遺構はない。須恵器（図243－1・2）、黒色土器（3・4）、土師器（5）、灰釉陶器（6～8）、天目（9）、陶器（10・11）、内耳土器（12）の他、ごく新しい陶器（13～16）、薄い鉄釉のかかるフタ状のもの（17）などで、5と17が完形である他は全て小破片である。

6　時期不明の遺構（図244）

BR32付近で、1辺約14mの不整方形を描く周溝と推定される溝が部分的に検出された。溝は広い所で幅約1.4mで、検出面からの深さは20～50cmとさほど深くない。縄文前期I期の集落内であるが、所属時期を断定する資料は出ていない。また、平面形も推定されたものを外れるかもしれない。

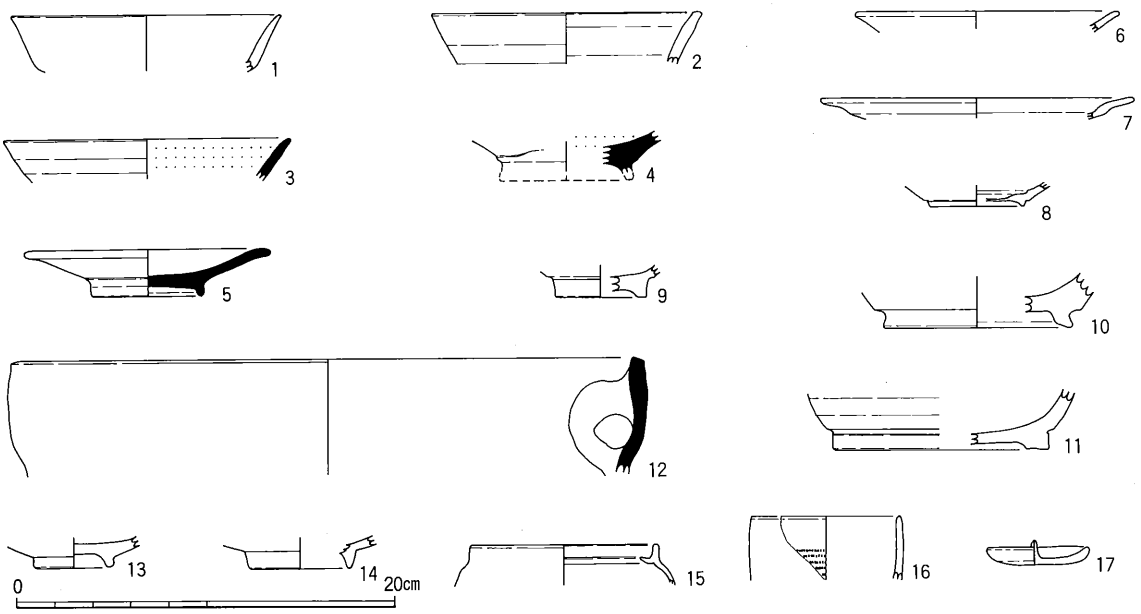


図243　出土土器実測図(1)

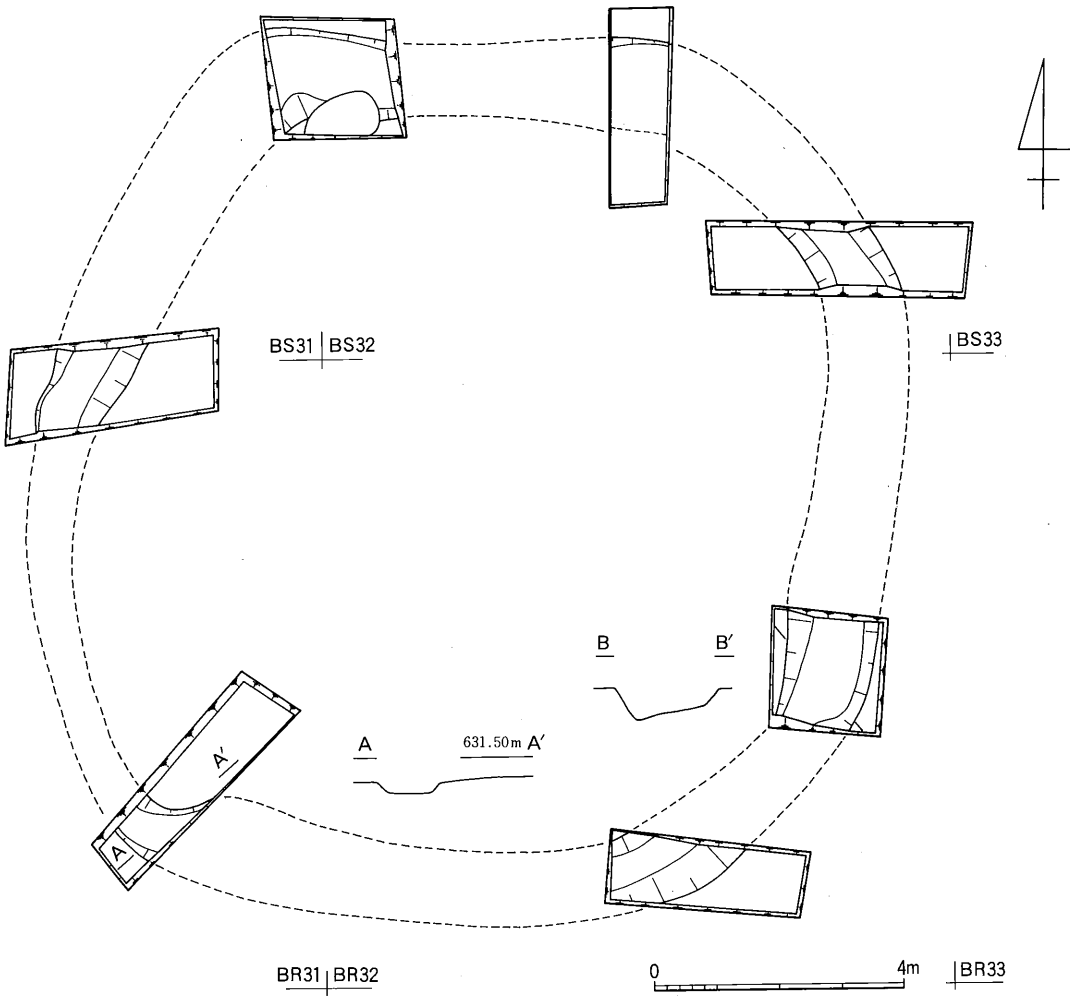


図244　溝址実測図

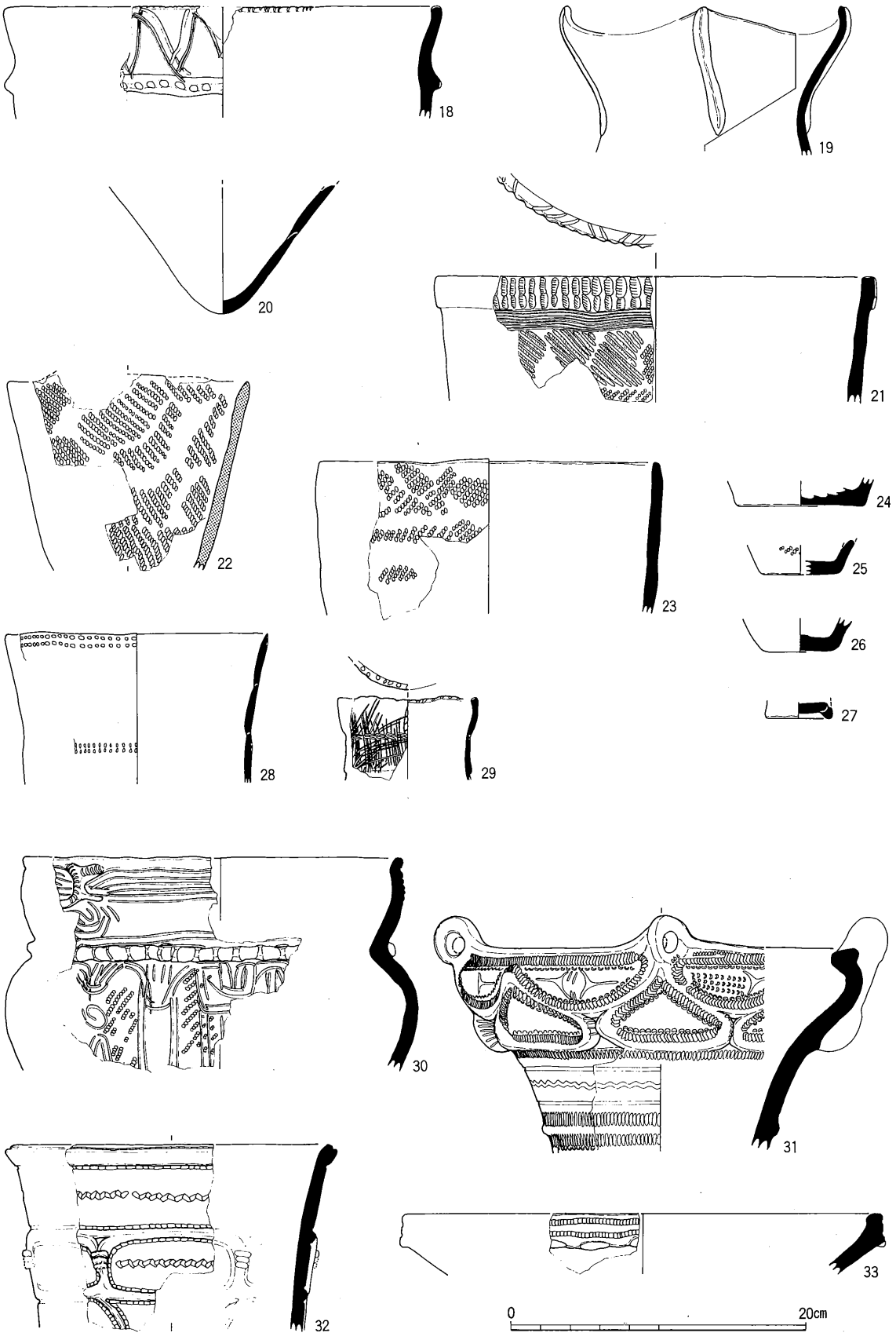


図245　出土土器実測図(2)

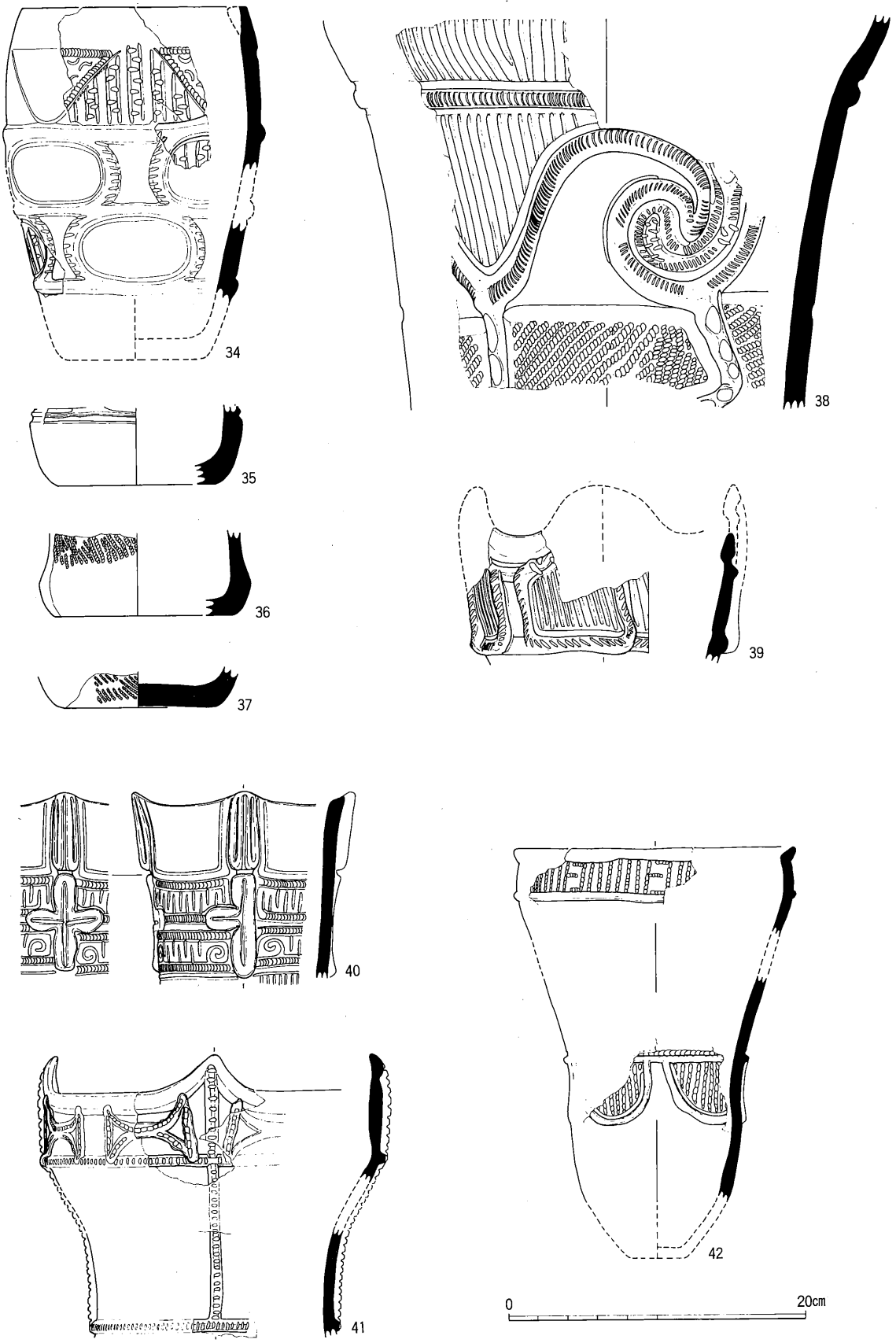


図246　出土土器実測図(3)

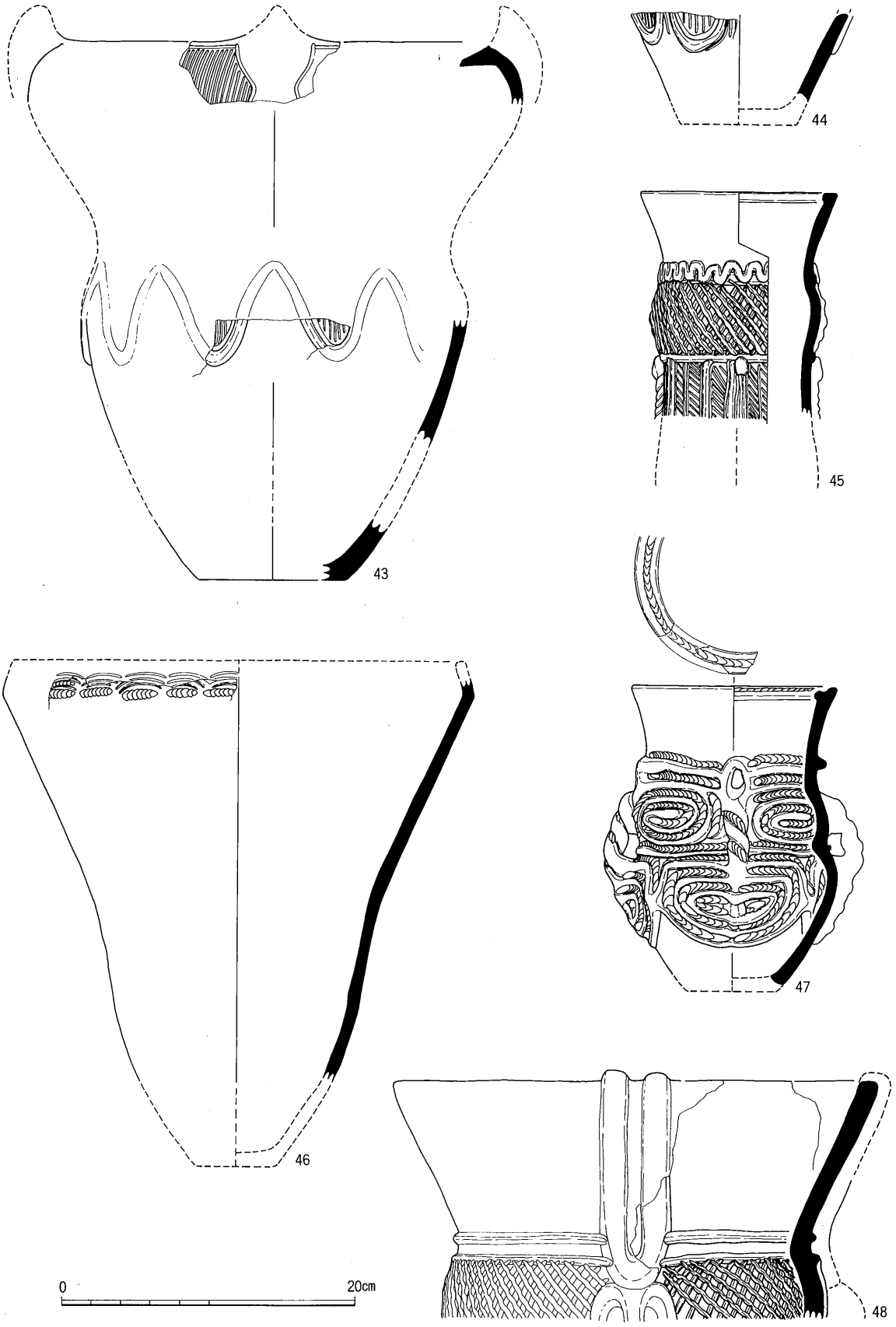


図247　出土土器実測図(4)

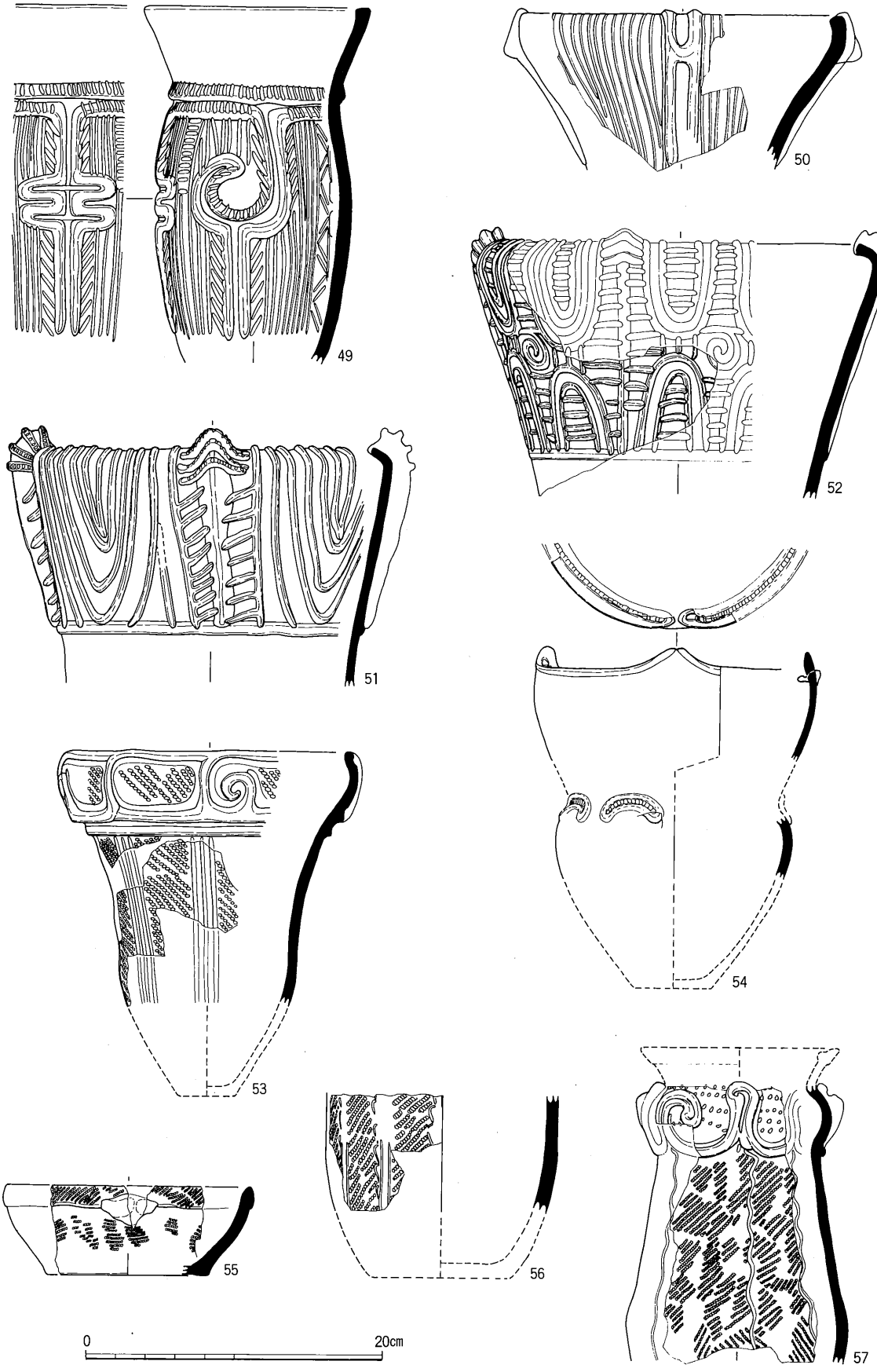


図248　出土土器実測図(5)

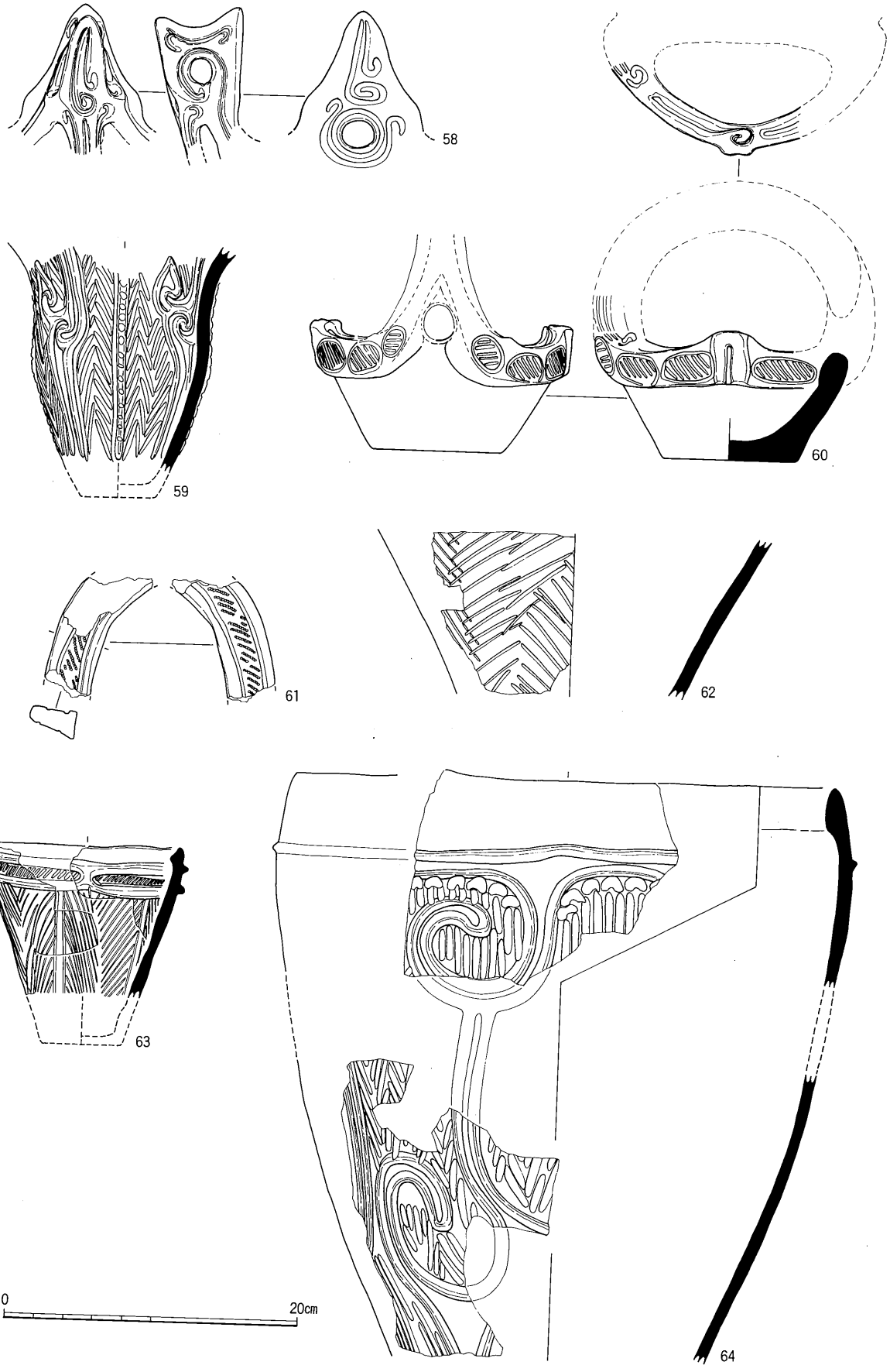


図249　出土土器実測図(6)

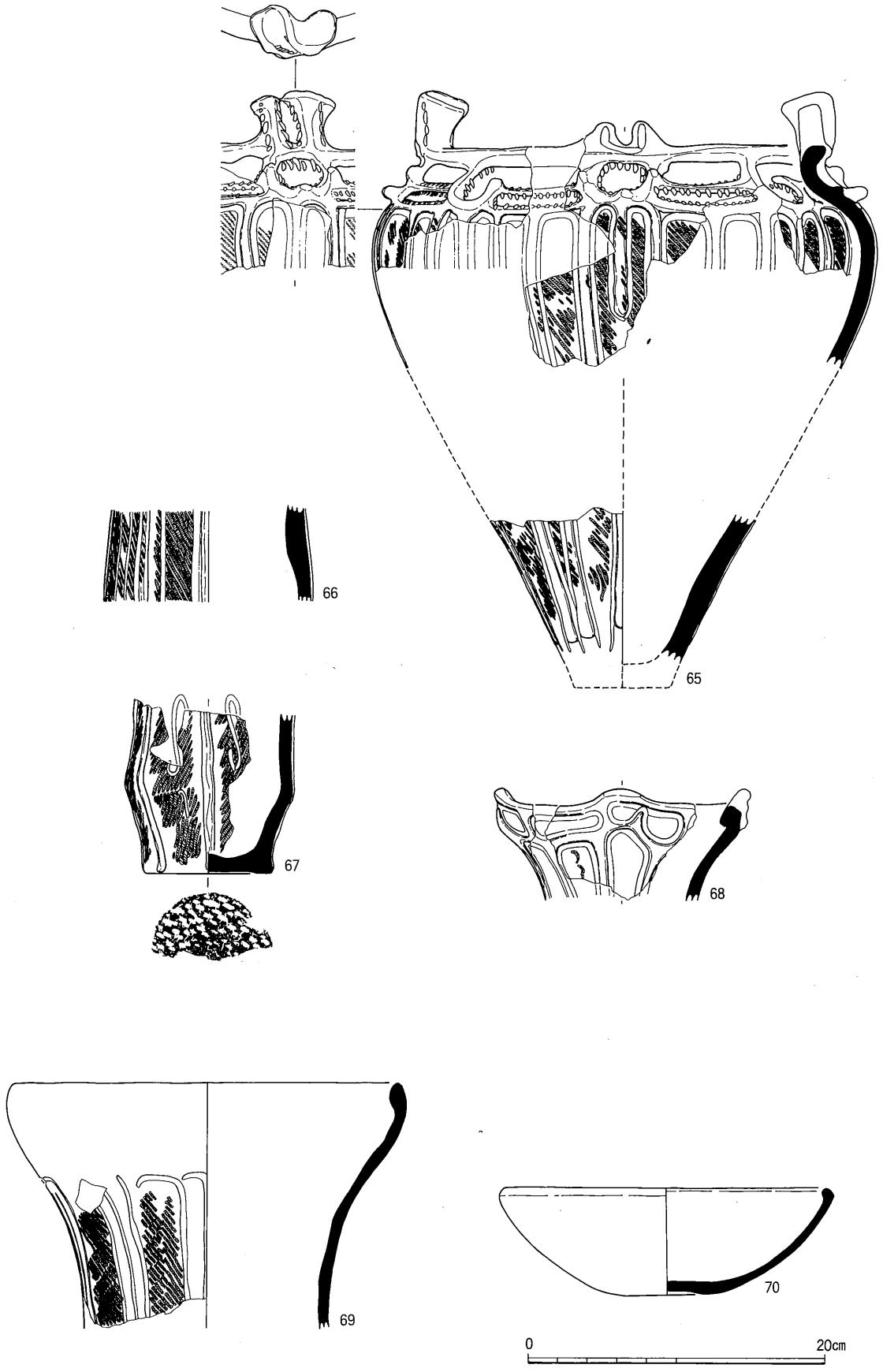


図250　出土土器実測図(7)

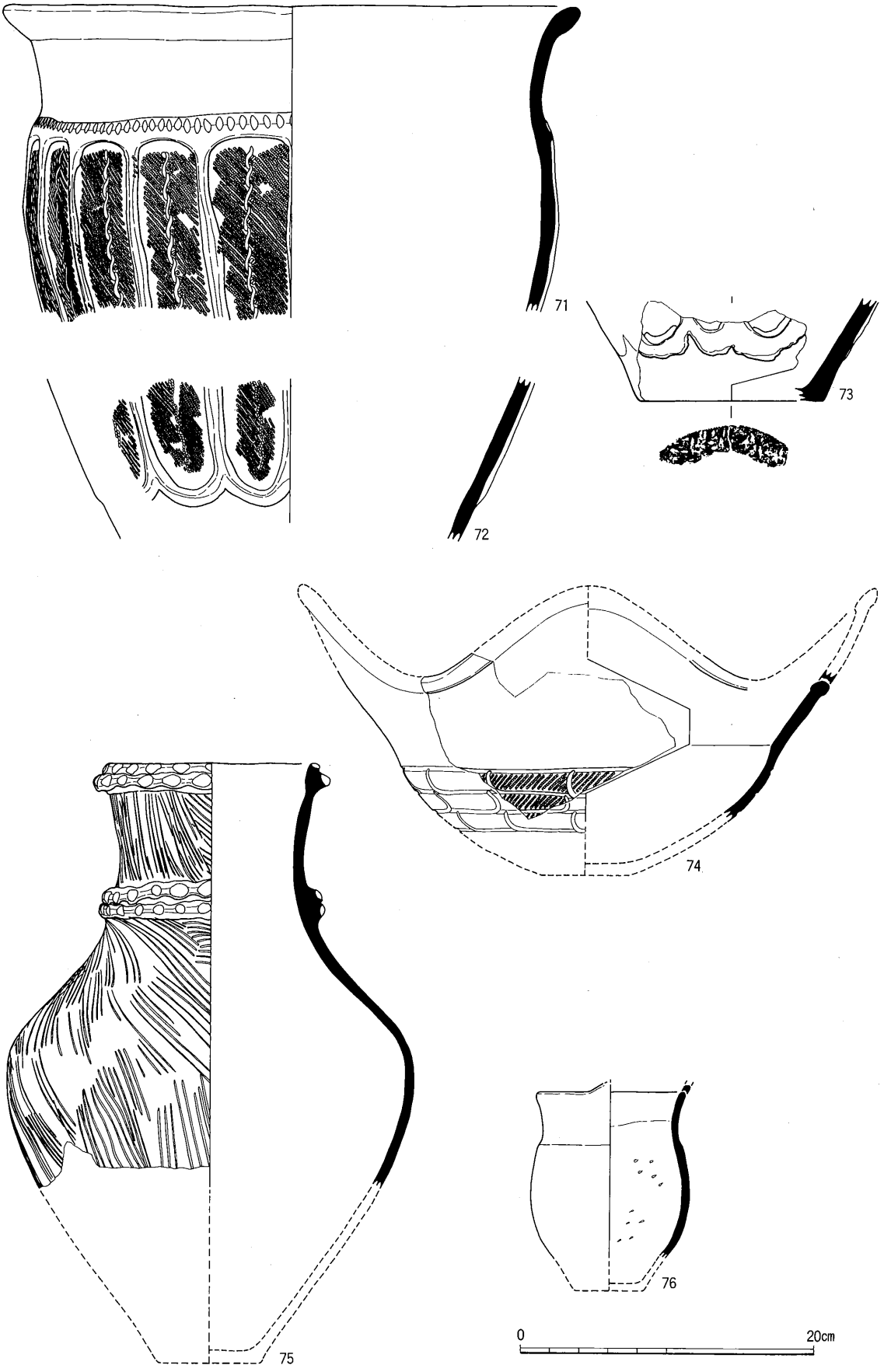


図251　出土土器実測図(8)

図252　出土土器拓影(1)

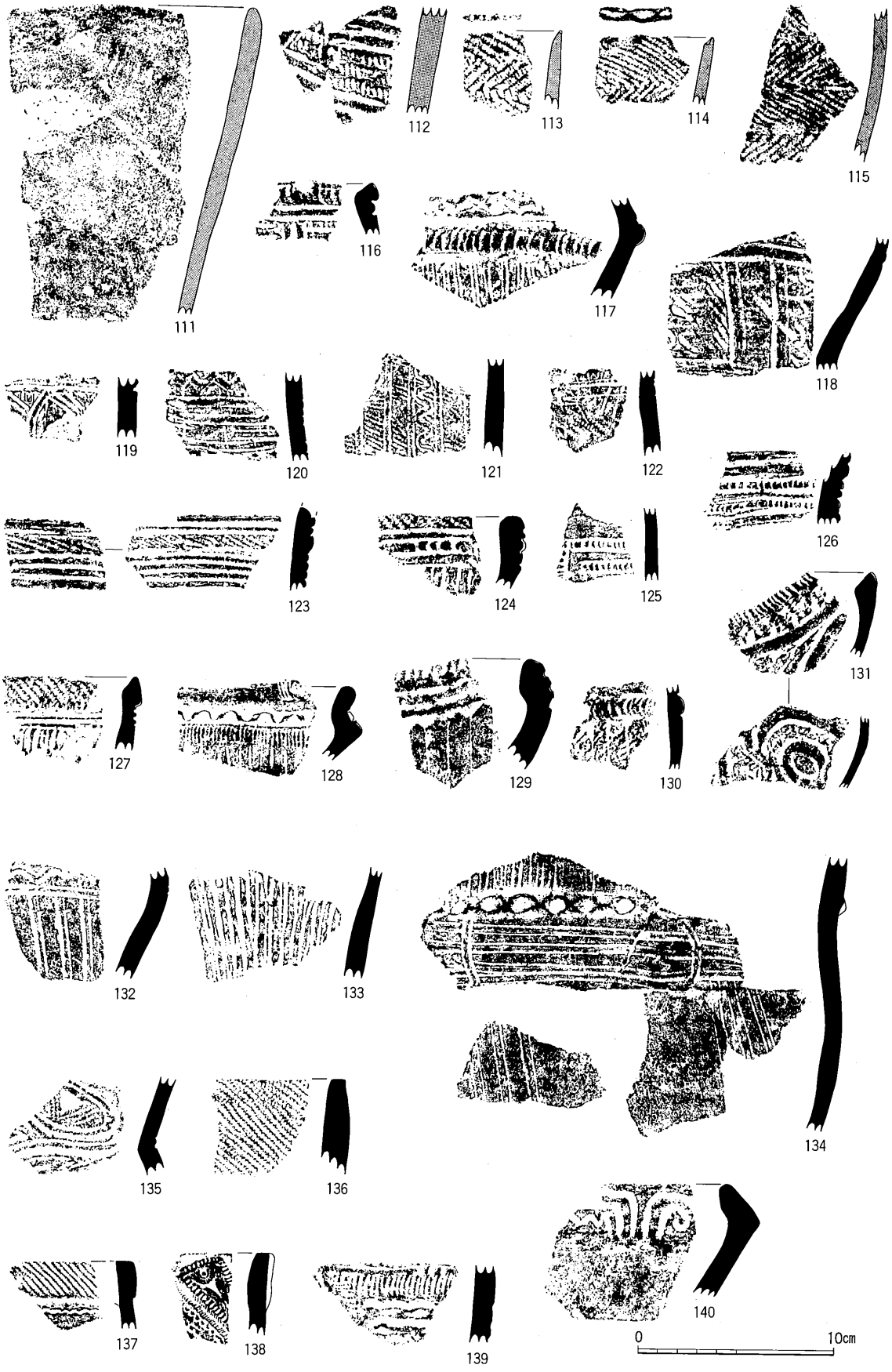


図253　出土土器拓影(2)

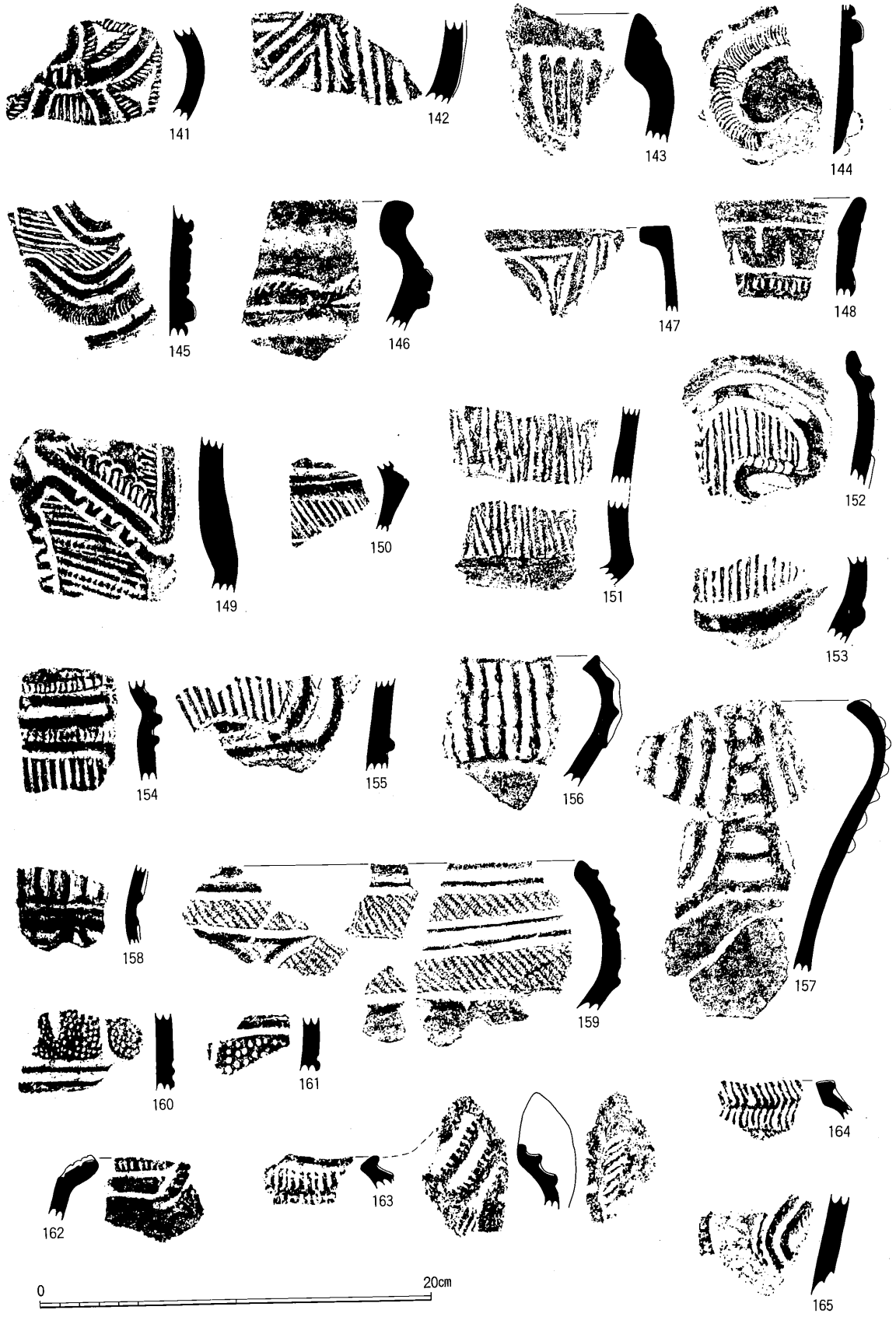


図254　出土土器拓影(3)

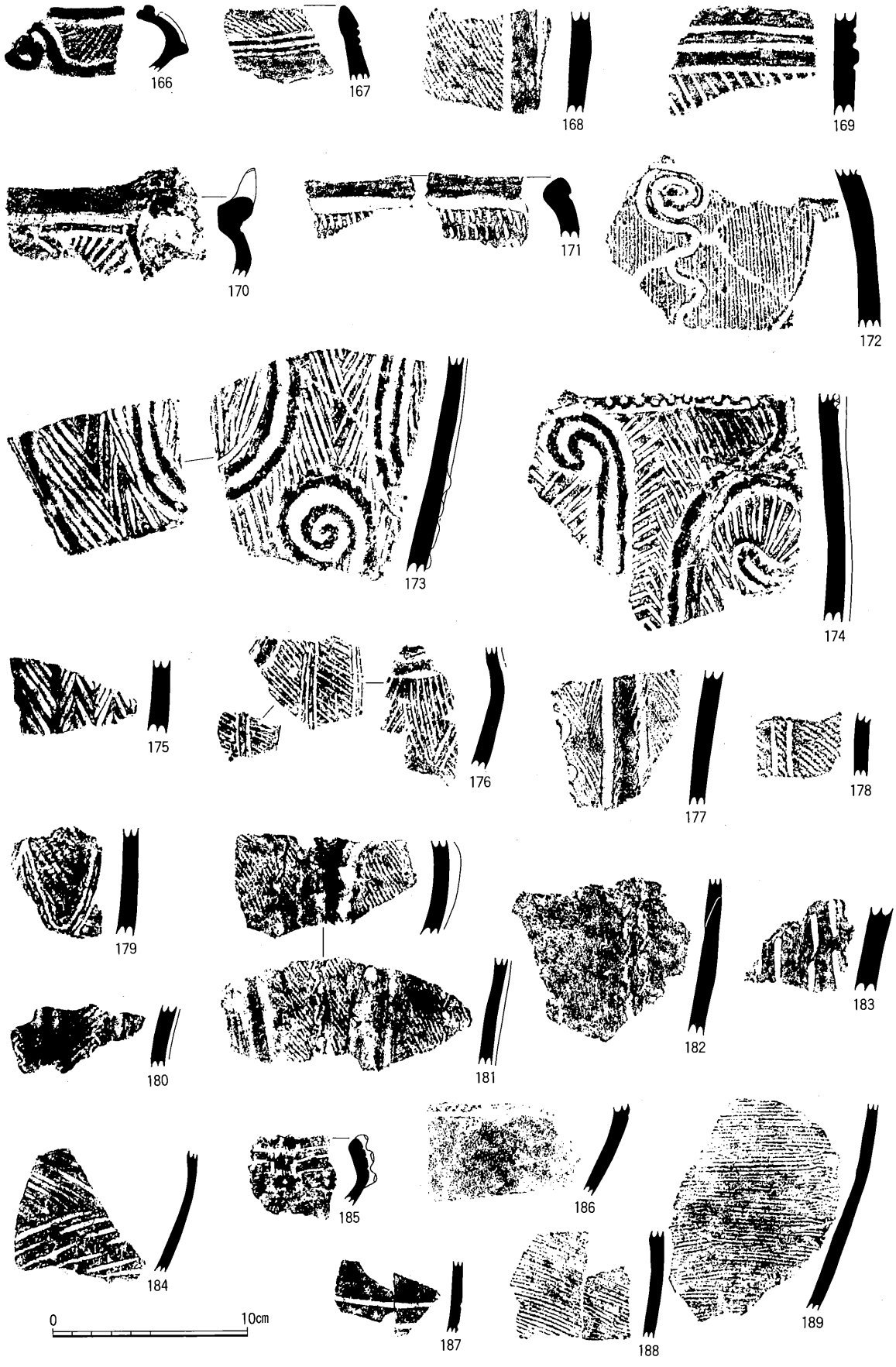


図255　出土土器拓影(4)

図256　出土石器実測図(1)

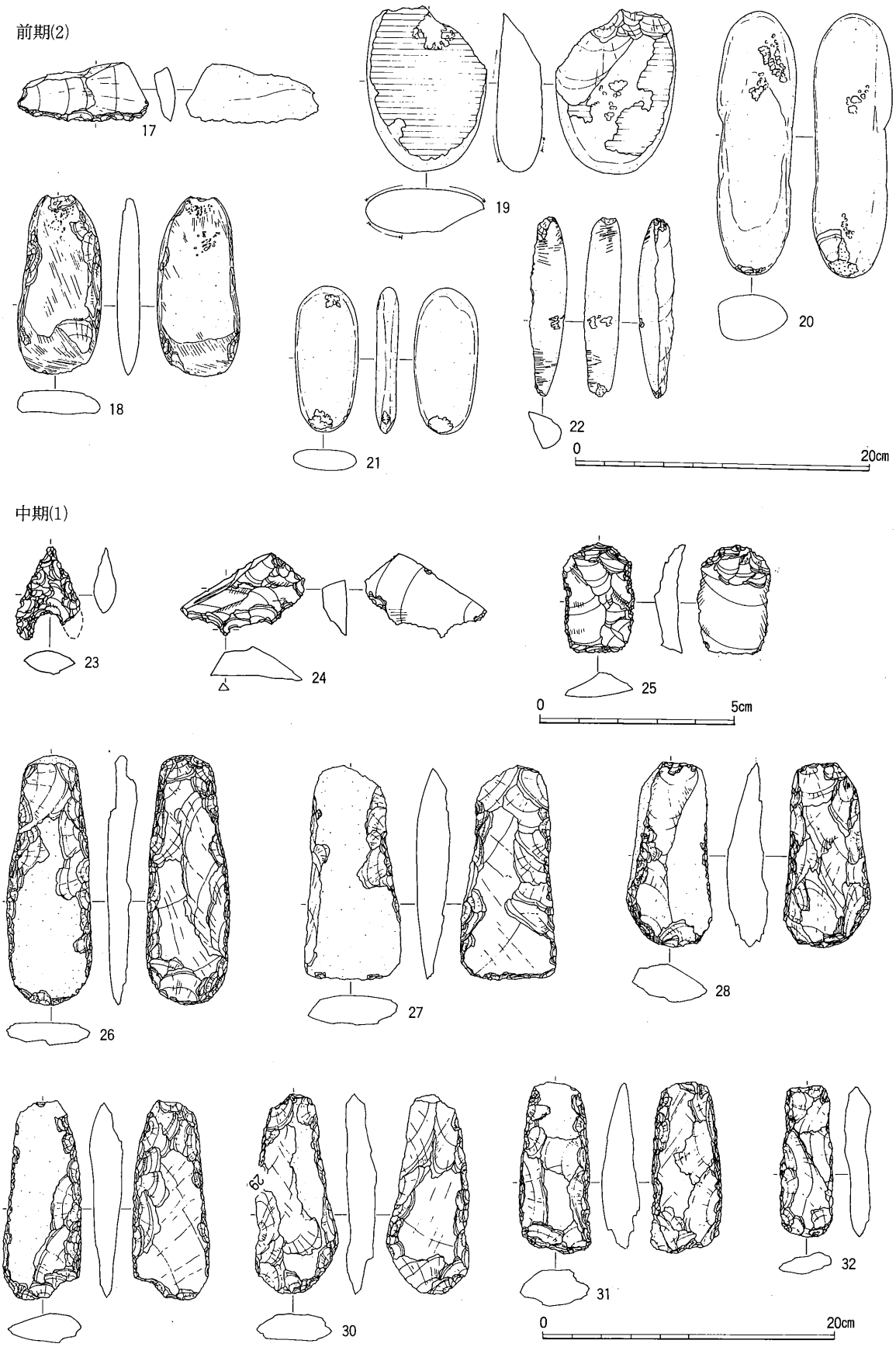


図257　出土石器実測図(2)

中期（2）

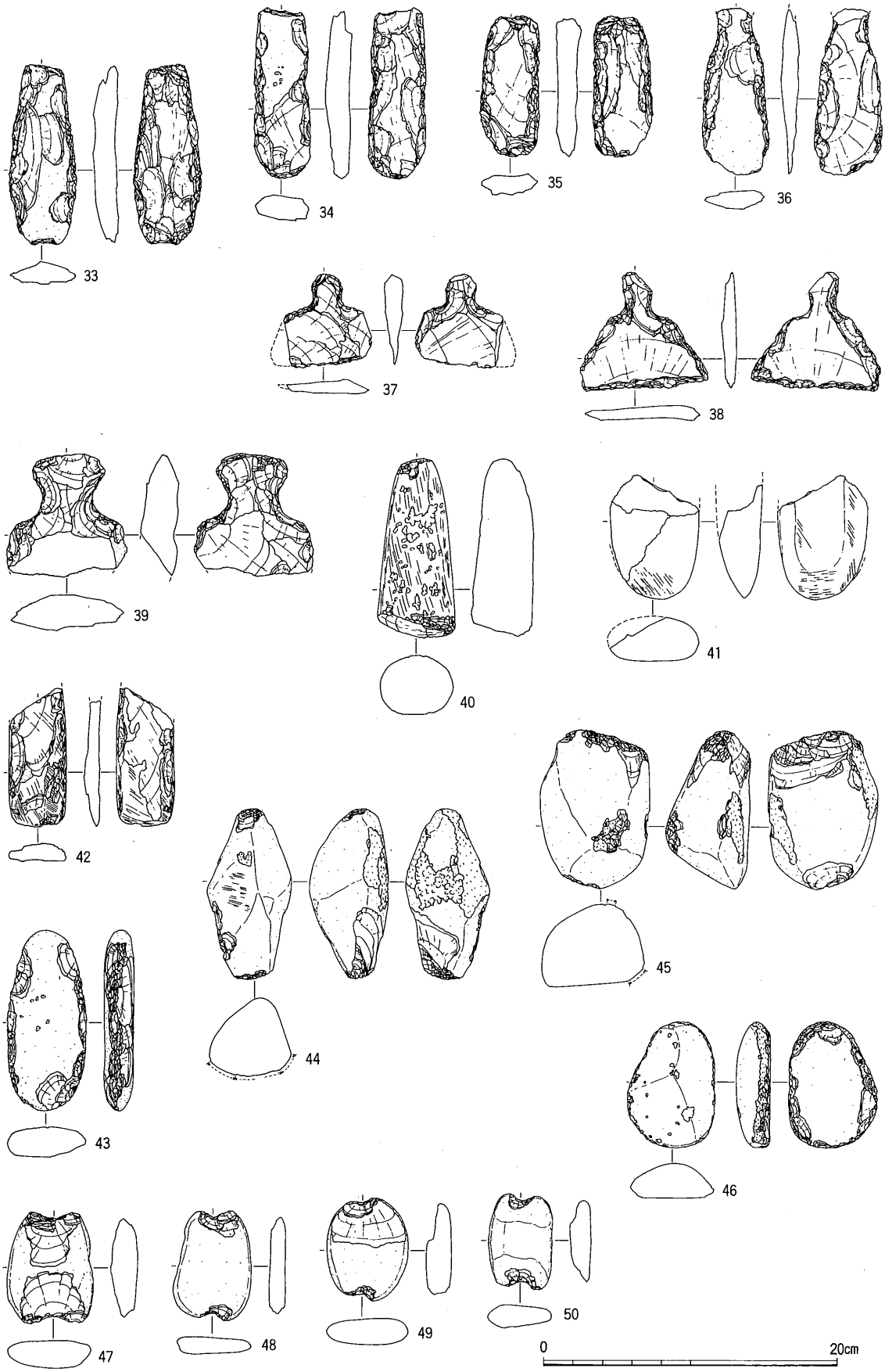


図258　出土石器実測図(3)

第９節　第11次調査

Ⅰ　調査の経過

ＢＯ03付近での食堂建設に伴う調査で、昭和55年５月16～22日まで、友野良一を団長として実施された。４基の土壙と配石が検出されている。調査時には荒れ地となっていたが過去には水田化された時期があるようで、耕作土下に水田地場層がある。さらに調査区の南東隅のＢＯ04西側付近を除き削平されており、地場層の下はロームとなる。包含層はごく浅く、南東隅を除き、量的にもごくわずかである。調査面積は132㎡であった。

調査結果は一度整理されている。遺構図は整理されたものに従って作図した。調査記録とつきあわせるといくつかの疑問点や適当でない表現もあるが、修正できなかった。

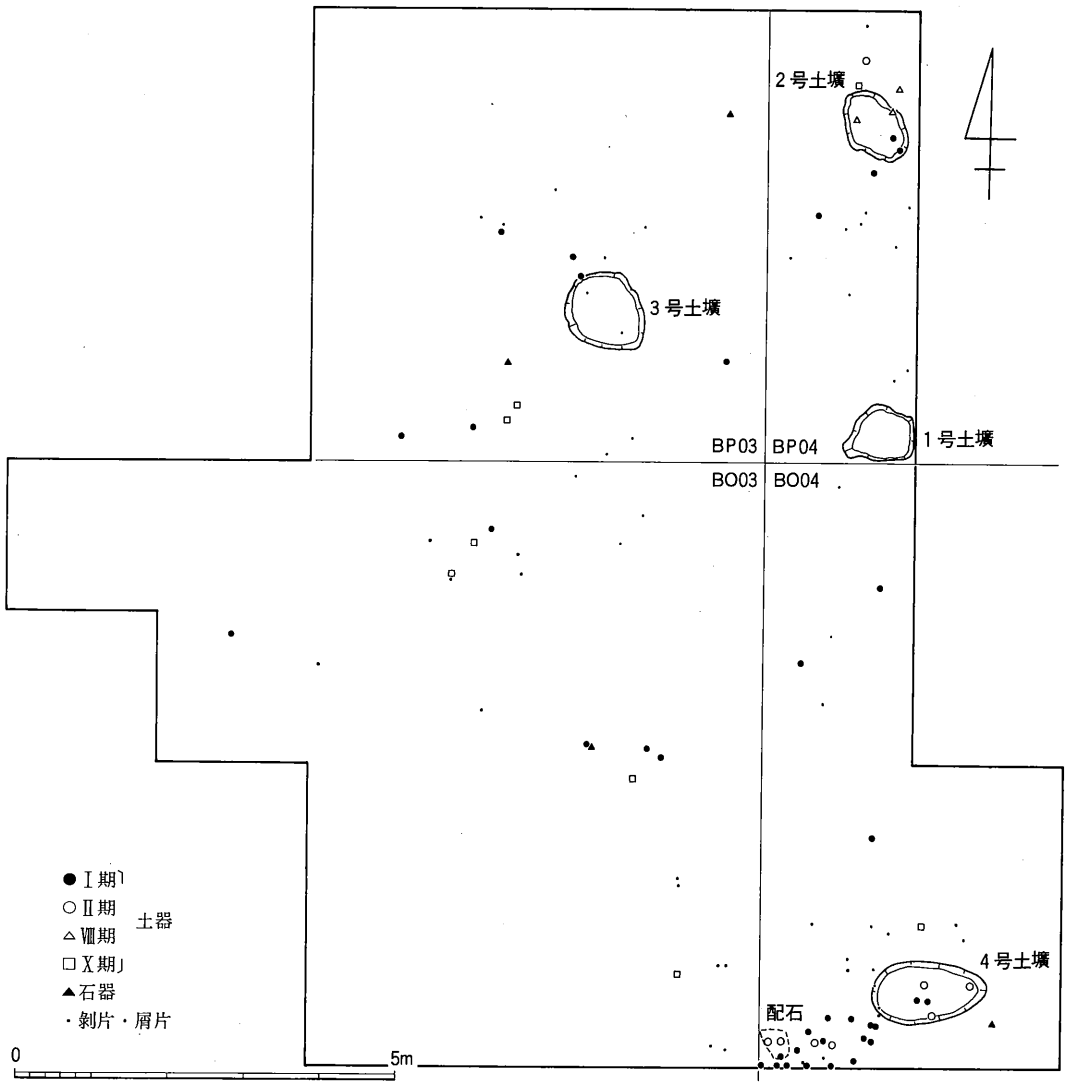


図259　第11次調査全体図、遺物出土状態

II　遺構と遺物

1）　1号土壙（図260）

ＢＰ04南西隅に検出され、平面形は１辺約80cmの不整四辺形を呈する。図では検出面からの深さ23cmを測り、埋土は黒褐色土で掘り方も整っているが、調査記録の中には、浅い皿状の凹み程度だったことを示す１号土壙の土層図（観察地点不明）がある。遺物はない。

2）　2号土壙（261）

ＢＰ04西側中央に検出され、平面形は110×75cmの不整長円形を呈する。掘り方も浅く整っておらず、凹み程度のものである。付近の上層から、弥生終末期の土器片（10）が出土しているが、埋土からの遺物はない。

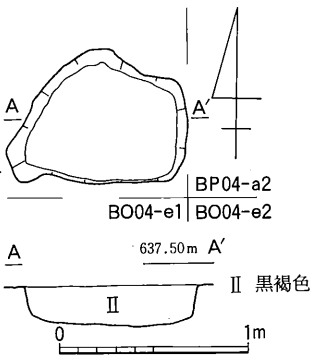


図260　1号土壙実測図

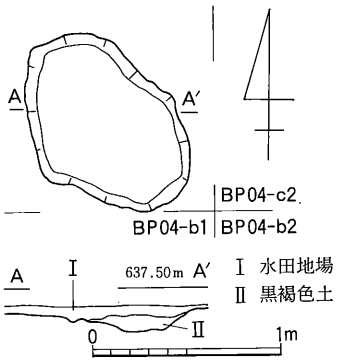


図261　2号土壙実測図

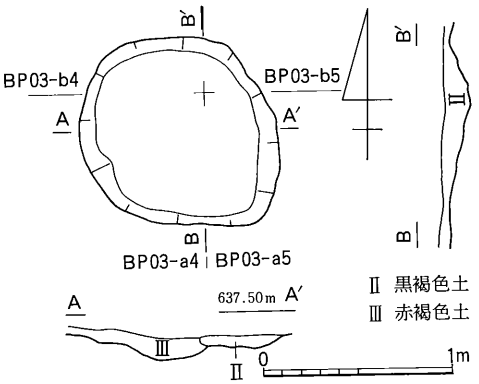


図262　3号土壙実測図

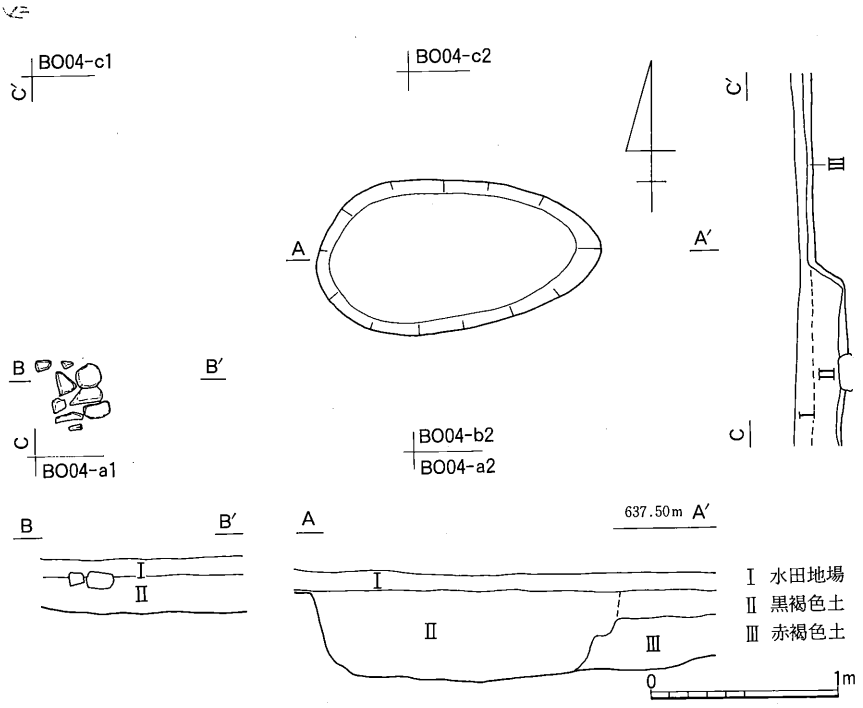


図263　4号土壙、配石実測図

3） 3号土壙（262）

ＢＰ03の南東寄りに検出され、平面形は径約110cmの不整円形を呈する。掘り方も浅く整っておらず、凹み程度のものである。遺物はない。

4） 4号土壙と配石（図264）

ＢＯ04の西側中央付近に検出された。図に従えば、土壙は、平面形が150×80cmの卵形を呈する黒褐色土の落込む深いもので、さらに東方にはローム上に赤褐色土が広がっていることになる。また配石は、径20cm以下の数点の礫が赤褐色土上面に平坦におき並べられており、ＣＣ′の土層図は（Ⅲ層が不自然だが）配石を含む落込みが存在することを示している。平面形は不明だが、４号土壙と配石部分を内にとりこむ埋土が赤褐色土の大きな落込みがあったとも解されるのである。しかし調査記録の中には、擂鉢状の整わない浅い落込み部に４号土壙と書かれた土層図や、浅く凹むローム面から礫が顔を出し、礫上面も平坦とはならない状態の部分を配石とした土層図があり、実体は不明といわざるを得ない。付近は調査区の中では唯一の遺物包含層といっていい状態にあり、Ⅰ期とⅡ期の土器片（１～９）と黒曜石の剝片類が出土している。

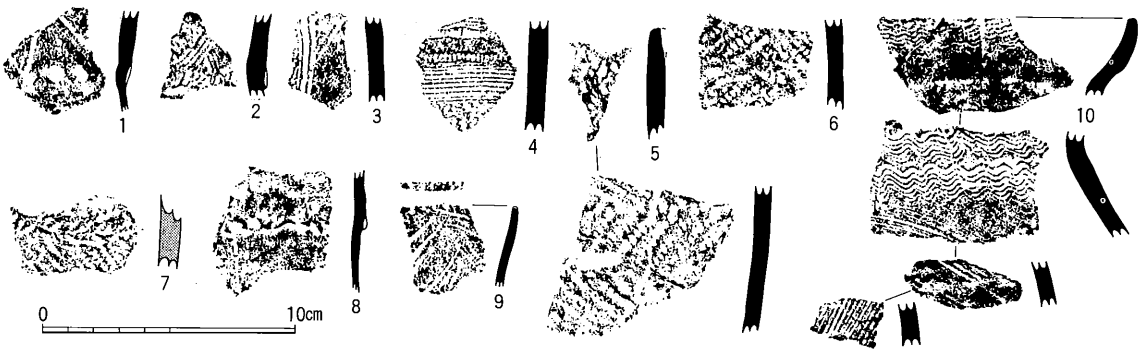


図264　出土土器拓影

5） 遺物外出土石器

石鏃（１～４）５点、スクレパー・礫端叩石（５）各１点がある。

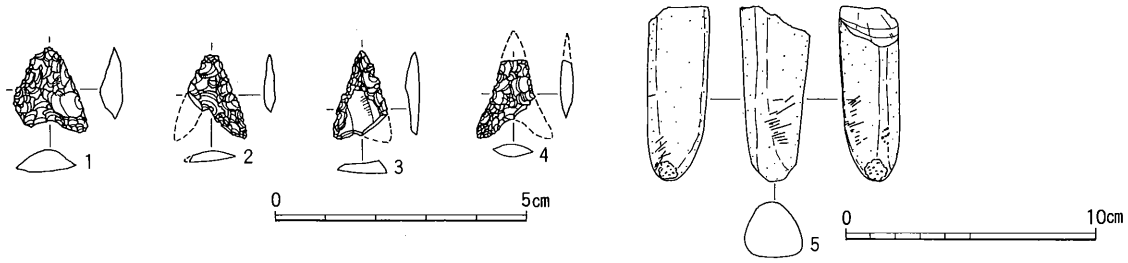


図265　出土石器実測図

第10節　第12次調査

Ⅰ　調査の経過

昭和56年８月１日から８日まで、ＢＬ・Ｍ―42～44地点において、友野良一を団長として実施された住宅建設に伴う調査である。調査では予定地に第10次調査時の座標軸に従って１辺２ｍのグリッドを設定し、任意のグリッドを発掘して検出した遺構を調査する方法をとっている。グリッドは、図のように北からＣ～Ｉ、西から１～８としてある。浅い小竪穴である貯蔵址２基と土壙１基を検出したが、記録の不備から、遺構、遺物の充分な復元ができなかった面がある。なおこの調査に先立ち、７月にＢＢ・Ｃ―31・32地点

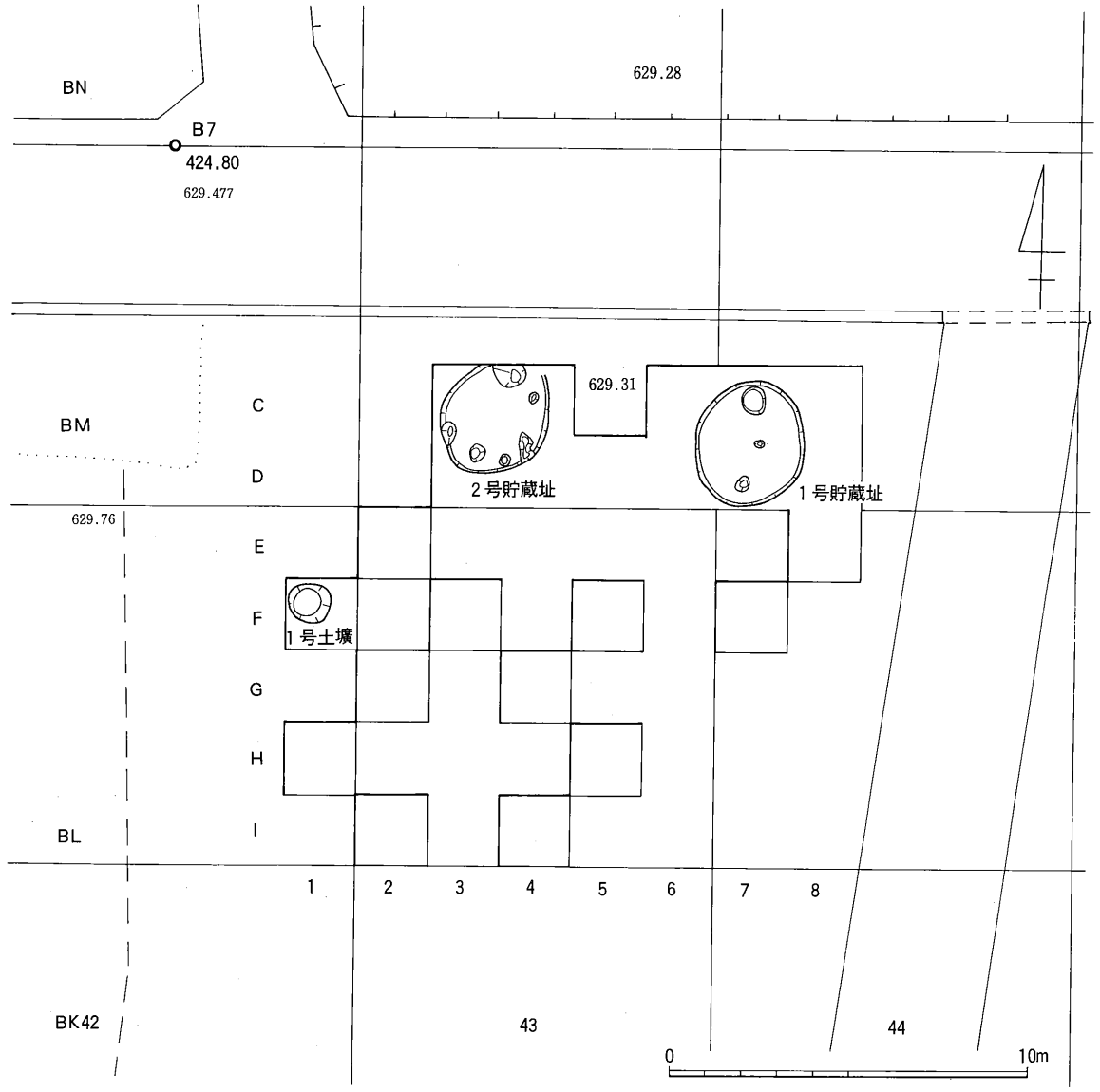


図266　第12次調査全体図

で住宅建設に伴う調査が実施されており、これも第12次調査として整理されている。グリッド等の記録はないが、数箇所のピットを掘っただけのようで、数点の縄文中期中葉から末葉の土器が採集されている（図267）。

図267　7月調査出土土器拓影

II　遺構と遺物

1）　1号貯蔵址（図268）

BM44の南西隅、C・D－7グリッドに検出された。平面形は南北に長い3.5×3.0mの長円形で、検出面からの掘り込みは浅く、床面は軟らかい。中央やや東寄りに深さ38cmのピットがあり、東から南にかけての壁外と壁面には、径10cm、深さ10～15cmの小ピットが、60cm前後の間隔で並んでいる。北端のP_2は、平面形と深さから土壙の可能性もあろう。遺物はP_2内と遺構外の検出面および上層からは出土しているが、貯蔵址そのものの埋土からは出土していない。土器（1～7）は全てIII期である。上層から横刃型石器（2）1点が出土している。

2）　2号貯蔵址

1号貯蔵址の西に4mを隔てて検出された。平面形はN40°Eに長軸をおく3.6×3.0mの卵形で、検出面からの掘り込みの浅いこと、壁外に小ピットが並ぶこと、床面北隅に大ピットがあることなど、1号貯蔵

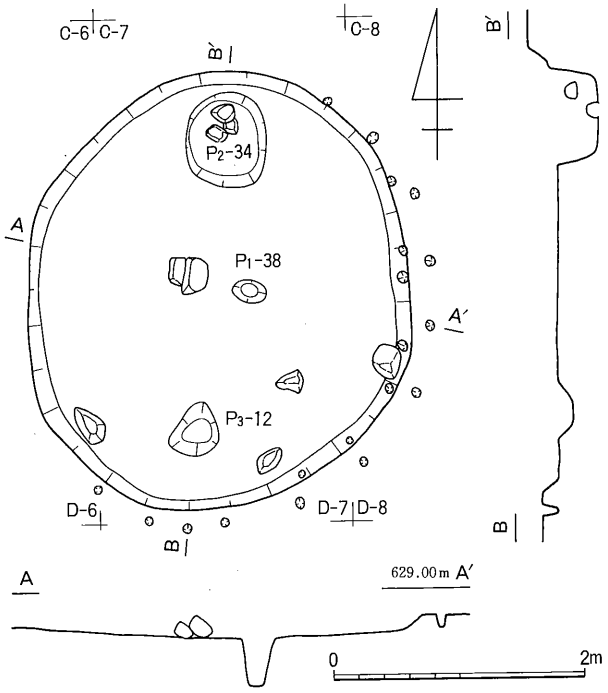


図268　1号貯蔵址実測図

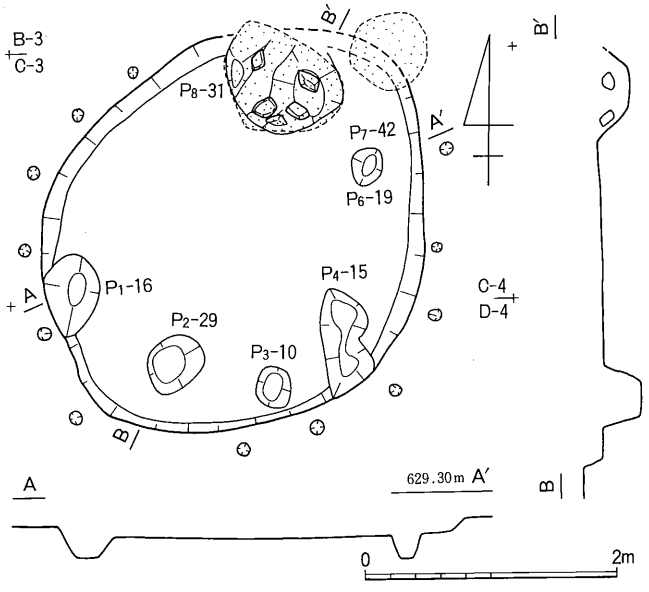


図269　2号貯蔵址実測図

址との共通点が多い。２つにわかれるらしい北隅の大ピット（P_7・P_8）の部分と、その東側の２箇所に焼土が検出されている。遺物の出土するのはこの焼土の範囲に限られ、層位的には遺構の検出面から床面の間およびピット内部である。ただ焼土との関係は、焼土の高さの記録がなく明示し得ない。遺物は土器がわずかで、III期（８～13）18点を主体とし、V期（14～17）８点がある。レベルに従えば、これ等は混在していたものとみられる。

３）　１号土壙

ＢＬ42の北東、Ｆ１に検出され、平面形は径120cmの不整円形を呈し、検出面からの深さ47cmを測るしっかりした土壙で、底面は堅い。埋土は上から赤褐色土、褐色土、砂混入ロームとなっている。

遺物は、床面に多くて中央部はより上層まで達する山状に出土した（図270）。35点の土器片は上層の１点を除き全てIII期（18～36）で、上層から打製石斧（１）が出土している。出土地点の記録がないため図化できなかった底面出土土器が10点ある。また、断面エレベーションを、遺構実測時のレベル眼高の記録がないため遺物取上げ時のそれと同一として作図したが、実際はもう数cmさがるだろう。

４）　遺構外の遺物

調査区の北東、１号貯蔵址上層付近に、グリットあたり約30点と多く出土しており、南西側は少なく、Ｉ列からの出土はない。土器はIII群（37～77）144点で８割を占め、IV期（78・79）６点、V期（80.81）９点、細分不可能な縄文中期土器小片17点であった。III期以外の遺物の集中するところはない。定形石器はない。

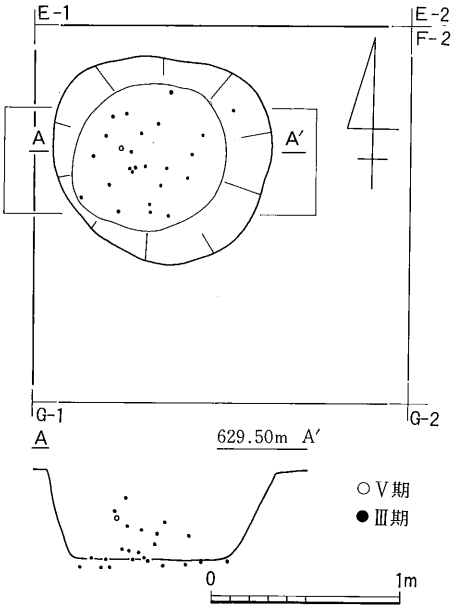


図270　１号土壙実測図

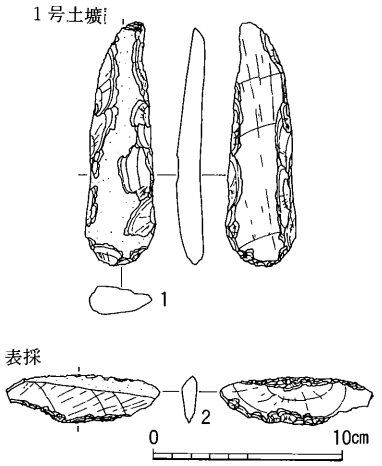


図271　出土石器実測図

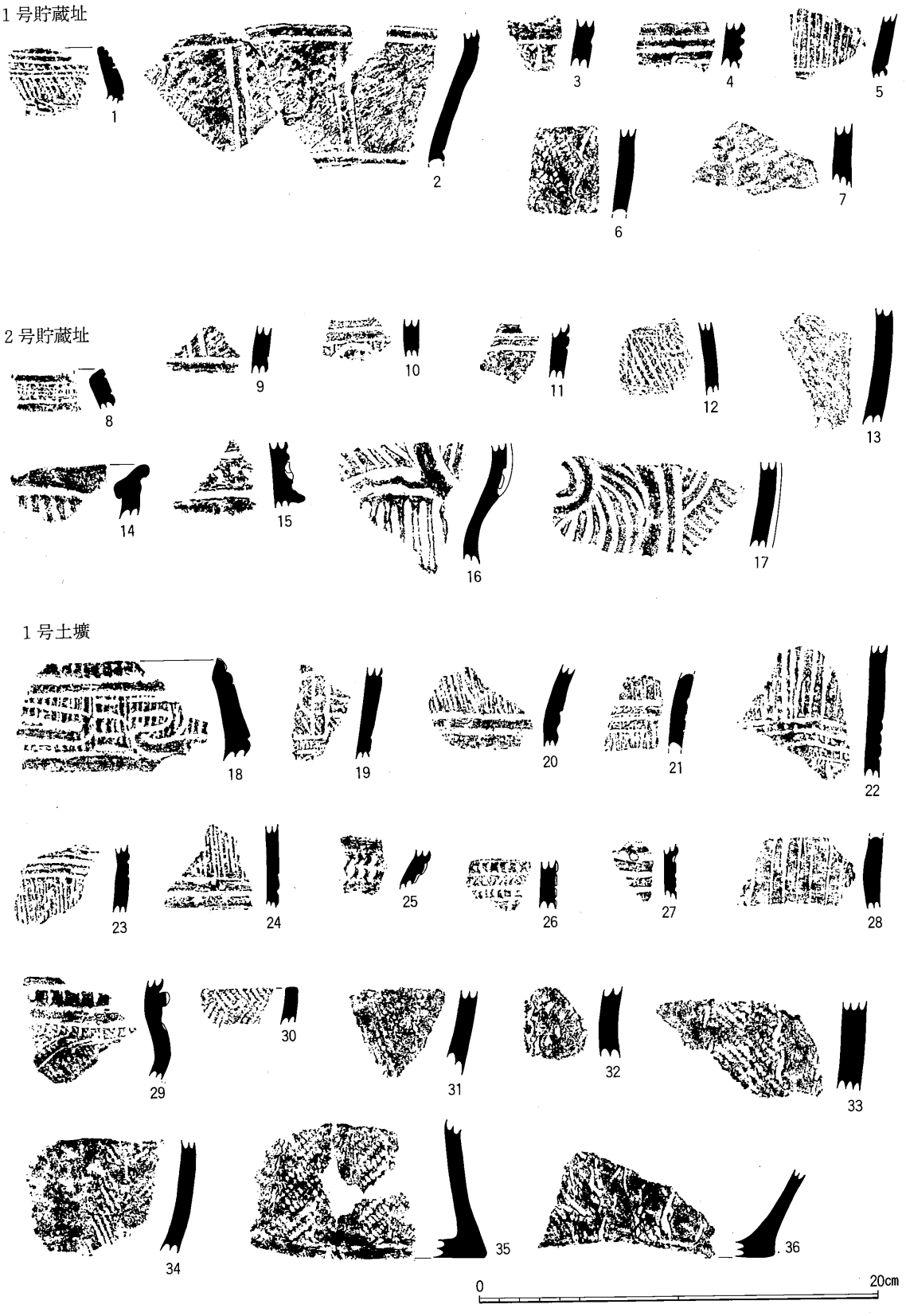


図272　1・2号貯蔵址、1号土壙出土土器拓影

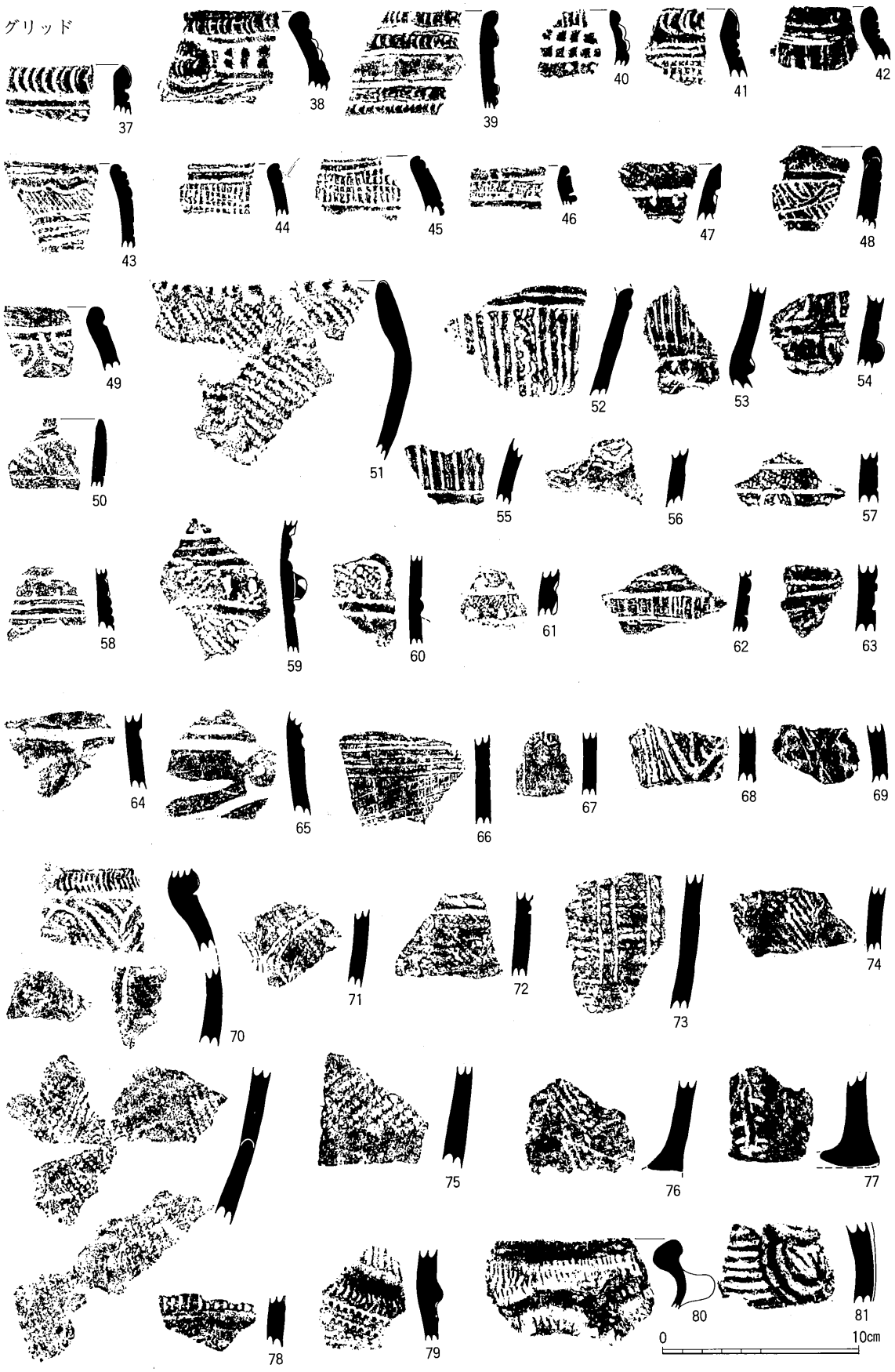


図273　グリッド出土土器拓影

第11節　第13次調査

Ⅰ　調査の経過

昭和56年９月17・18日、友野良一を団長としてＢＨ・Ｉ—22・23で実施された住宅建設に伴う調査である。第10次調査の際、遺構の存在が予想された地点である。調査では矩形である調査区の10×12cmの範囲に１辺２ｍのグリッドを境界線とほぼ平行に設定し、７箇所を発掘しており、住居址１軒と土壙１基を検出している。20cmの黒色の耕作土の下は黒褐色土を経てロームとなっているが、黒褐色土は薄く10cm以下で、所によっては無い。遺構のうちＢＩ22東側の中央付近で検出された土壙は、平面形がほぼ円形となること以外は、詳細を記述し得ない。また住居址埋土出土以外に見るべき遺物はない。

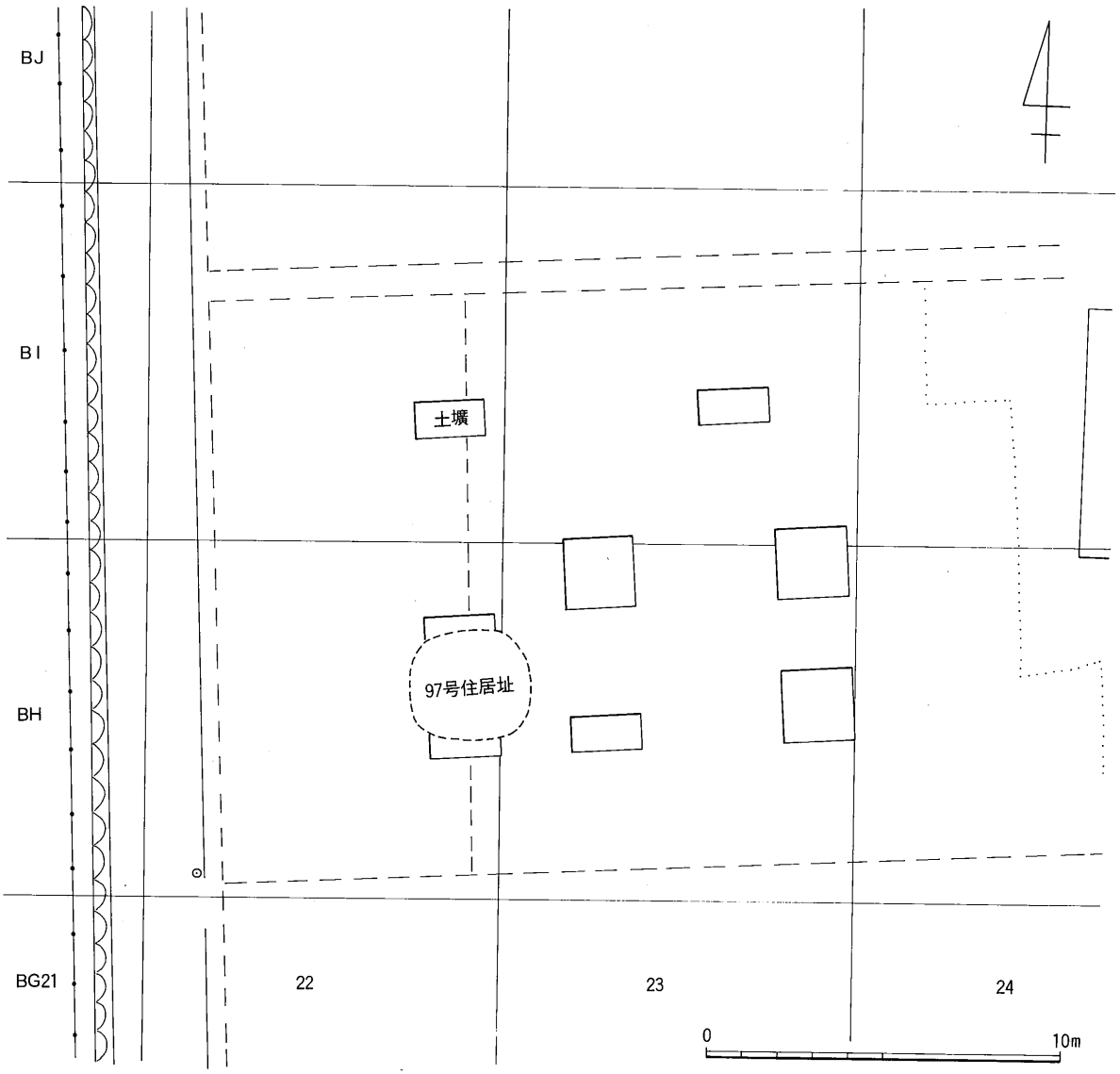


図274　第13次調査全体図

II　遺構と遺物

1）　97号住居址

ＢＨ22東辺に検出された。略測図しか残されていないため詳細は記述し得ないが、平面形は南北に軸線をおく１辺約３ｍの円味をもった隅丸方形で、掘り方は深いようである。床面には礫が多く、周溝はない。柱穴はいずれも浅いがP_1・P_3・P_4・P_6の４本が考えられる。中央北寄りに小型の地床炉がある。

遺物は少ない。土器のうち１は、埋土南側の地表下30cmから下方の、かなり広範囲から出土したサンショウウオ文を付すバケツ形の深鉢である。口縁部の無文帯の下と胴下位にそれぞれ横位の２列の楕円区画文を設け、隆帯の脇に多截竹管背面による幅広の連続爪形文を付す。厚みをもつサンショウウオ文の隆帯は、多截竹管内面による連続爪形文とヘラ状工具による刻み、体部は平行する押引沈線と爪形文列を交互に付して埋めてある。２は台付土器の台部で、胴部には縦位の隆帯と沈線による文様が施されるようである。ごく少量の破片（３～７）を含め、Ⅳ期Ｃ（藤内Ⅰ式）とされよう。なお、７は土器体部へ貼付した部分が剝落したものとみたい。石器は打製石斧（図277）１点がある。

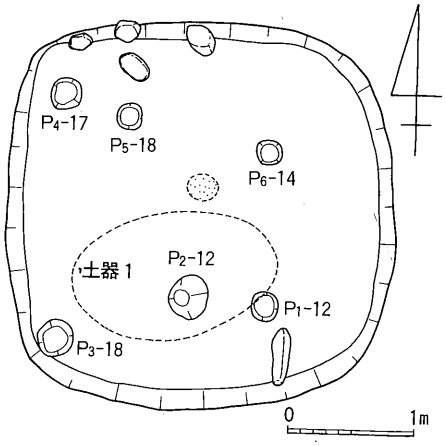


図275　97号住居址略測図

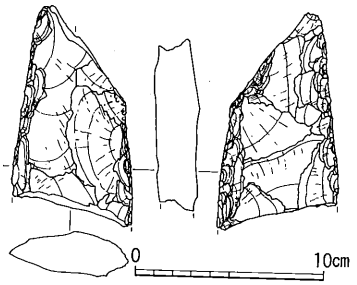
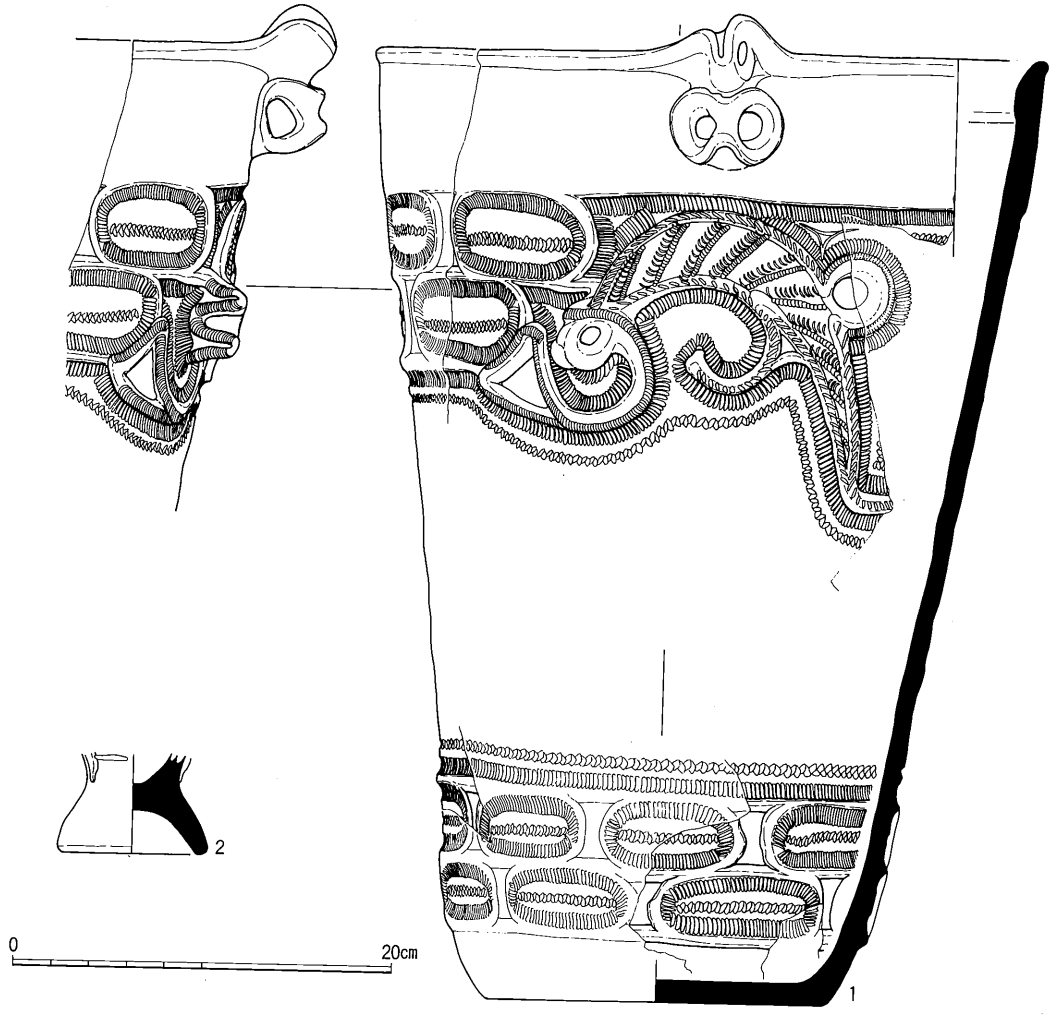


図277　97号住居址出土石器実測図



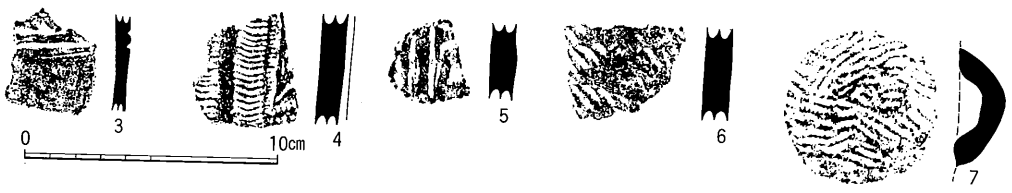


図276　97号住居址出土土器実測図・拓影

図278　第14次調査全体図

第12節　第14次調査

I　調査の経過

昭和59年８月１日から９月10日まで、ＢＮ～Ｒ－06～08地点で実施された宮田村商工会館建設に伴う調査である。村当局の援助をうけ、宮田村商工会会長を調査主体者とし、村教育委員会の指導の下に発掘調査団を組織して実施されており、調査担当者である友野良一を団長とし、木下平八郎、小池孝、飯塚政美を調査員、根津清志を顧問としている。

調査では、除土を置くべき空間がなかったため、初め南側に表土を集めて北側を、後に反転して南側を発掘したのだが、その際、用地が建設資材置場になっていたこと等から表土は相当荒されているものと判断し、機械力によってそれを除去している。調査区には、すでに遺跡全面に設定されていた座標軸にもとづき１辺10mのグリットを設定し、その中をさらに２mに区画した。調査により、住居址12軒、方形柱列１基を検出している。

用地は水田であった時期がある。そのため調査時は平担であったが、以前は西側中央付近が最も高く、東側特に北東寄りが最も低かったようで、西側では表土と水田地場層を除去した時点でローム面があらわれ、東側では水田地場層の下に西側を削平してもたらされたと考えられる埋め土の下に、旧地表面（その上層は動かされているかもしれない）が確認されている。削平されていない部分の土層は、耕作土と水田地場層の下に黒色土、黒褐色土、赤褐色土、ロームとなっている。遺構は黒褐色土中に検出されたが、掘り込みの深いものは黒色土が埋土上層にレンズ状に入りこんでおり、それによって遺構の存在を予測することができる。なお、用地には第10次調査で調査坑をあけており、その際確認され付されていた住居址の番号は、そのまま使ってある。

II　遺構と遺物

1　住居址

1）　76号住居址（図279）

調査区北西寄りのＢＱ06北東隅に検出された。平面形は東西4.8m、南北4.4mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは50cmを測る。南東隅に張出部が設けられている。床面はほぼ平坦で堅く、周溝はない。柱穴はP_1～P_4の４本で、深さ10～15cmと浅い。柱間は桁行2.45m、梁間2.2mで小屋組構造をもつ架構が考えられる。炉は中央やや北寄りにある地床炉である。

遺物は埋土上層に多く床面からは少ない。土器は、Ⅰ期Ⅰ群の斜格子目文を付す古手（42～50）と無文部（51～53）、II期Ⅰ群Ａ（54～61）、Ｂ（62～65）と縄文施文胴部（66～69）、III群（70～74）等がある。石器は、石鏃26点、石錐４点、打製石錘１点、スクレパー９点、礫端叩石１点、敲打器１点、打製石斧２点と、黒曜石類の剝片264点、屑片101点、石核92点、原石11点、両極打法痕のあるもの19点などが出土している。土器62の一部が炉内から出土しており、II期の中でも、また今日まで中越遺跡で調査された縄文前期の住居址の中でも、最も新しい住居址と考えられる。

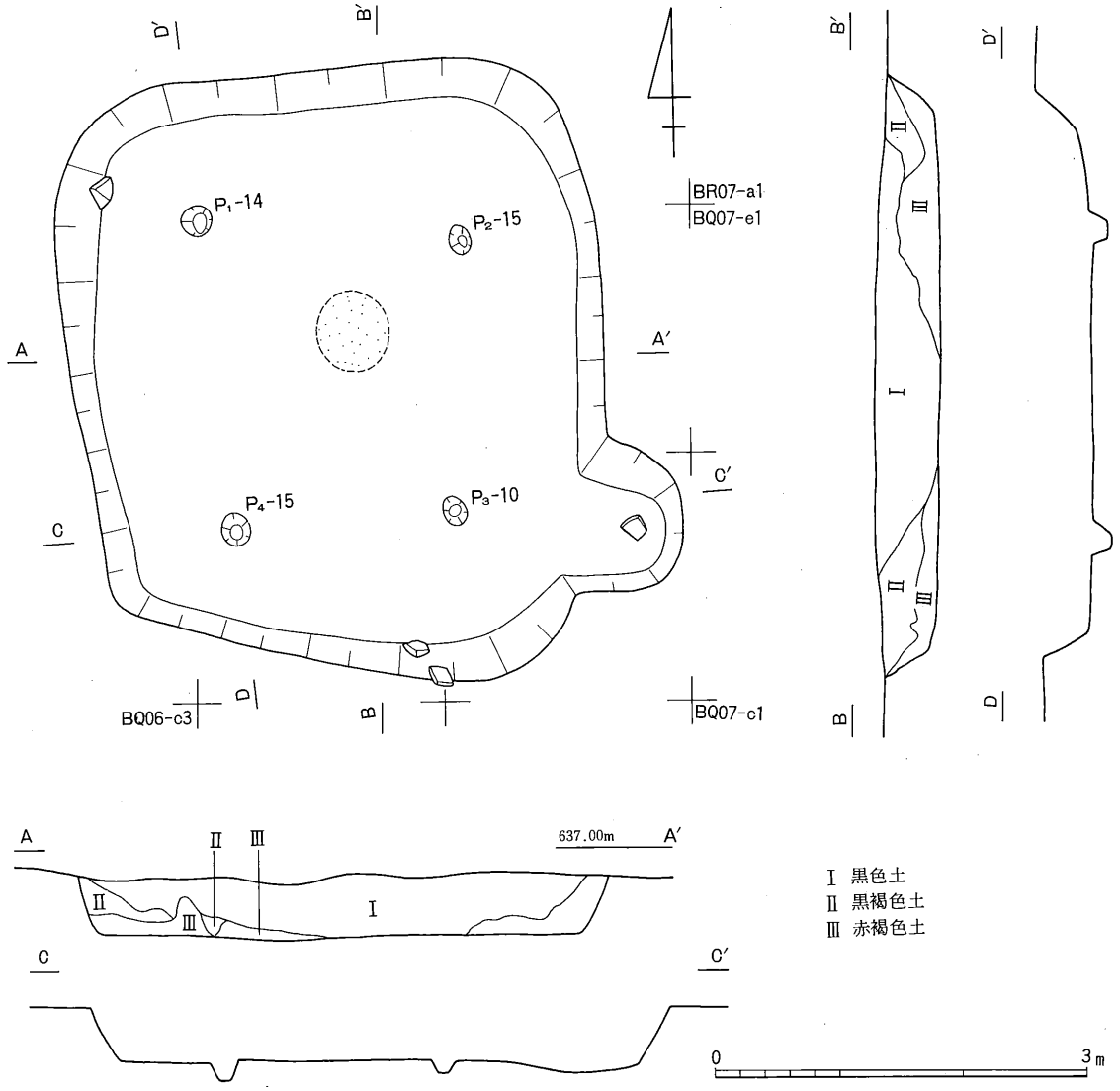


図279　76号住民址実測図

2）　79号住居址（図280）

ＢＱ07の北東、調査区の北側ほぼ中央に位置し、102号住の埋土の北東隅を切りとって構築されている。遺構は黒褐色土中に検出され、平面形は東西に長軸をおく4.8×4.6mのやや胴の張る隅丸方形を呈する。壁は北側、東側がゆるく立ち上がり、高さは北西で50cm、南東で30cmを測る。床面は堅く、102号住と重なる部分は、ロームの混入する黒褐色土を５cm前後貼ってある。周溝は無い。柱穴はＰ₁～Ｐ₄の４本でＰ₃Ｐ₄はやや内側に入りこむ。炉はほぼ中央にある地床炉で、深さ10cmの炉内に残る焼土は少ない。東側半分の埋土には、廃絶後に拳大から人頭大の礫が多量に投げこまれており、礫の間に土器片が多量に入りこんでいる。床面上の遺物は少なく、東壁に立てかけるような状態で石皿が置かれていた。

遺物は多く、土器は全て破片で、図化出来たものには、II期Ｉ群Ａの大深鉢口縁部（12）III群のＢ（15）とＤ（16）およびＩ群の底部（13・14）がある。他は小破片で、Ｉ期Ｉ群858点、II期Ｉ群586点（中にＢ16点）、III群20点であった。12の破片は検出面付近に多く、一部はより上層からも出土している。石器の量は多い。石鏃28点、石匙14点、石錐４点、打製石錘４点、複数抉入石器１点、スクレパー９点・磨製石斧・敲打器・横刃型石器・石皿・石匙型石製品各１点、叩石９点、礫端叩石５点と、黒曜石の剝片401点、屑片

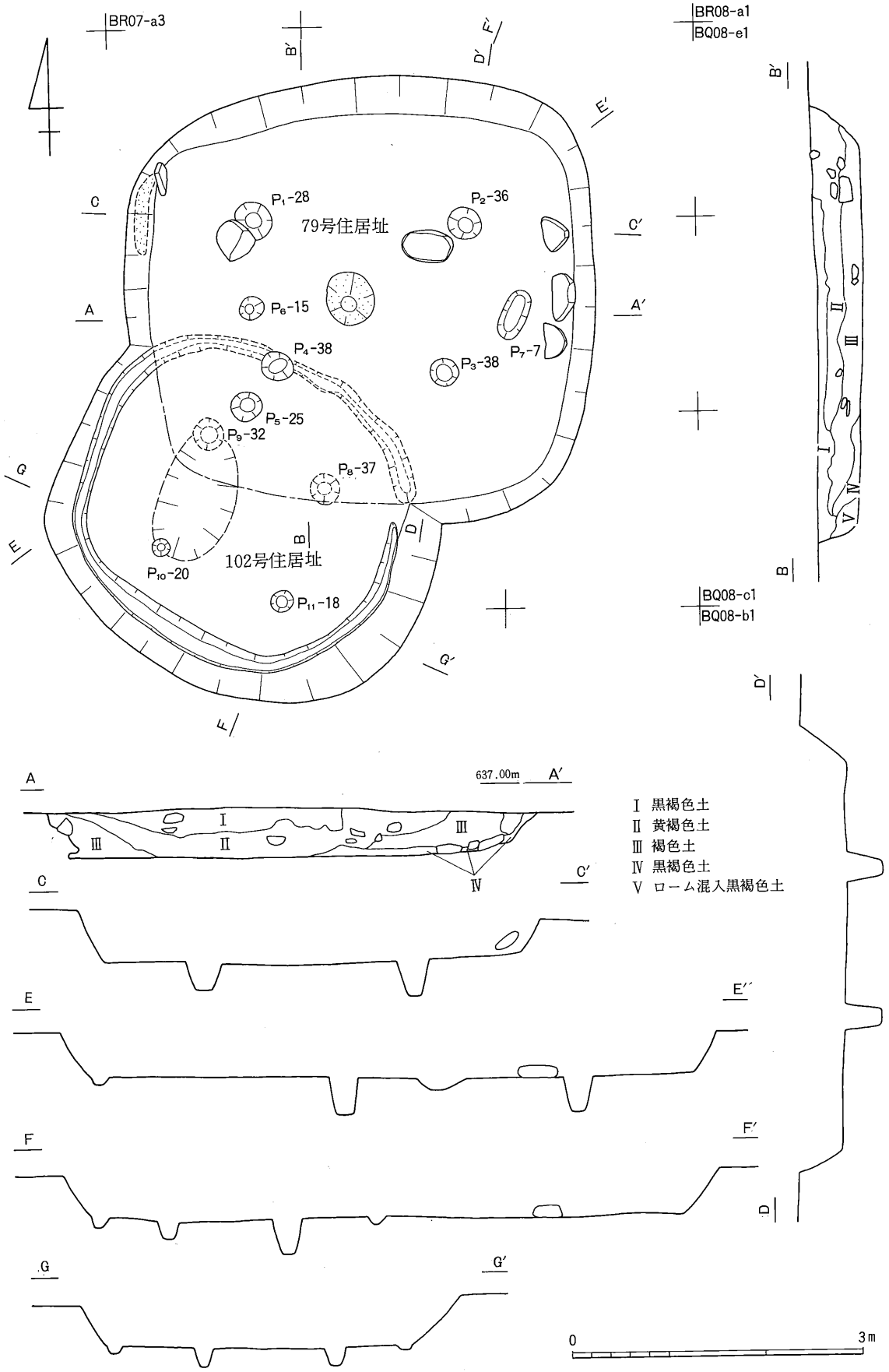


図280　79・102号住居址実測図

108点、石核197点、原石12点、両極打法痕のあるもの51点がある。床面上の遺物が小破片で少なく、決定は困難だが、廃絶時期はⅠ期の新しい時期と考えられる。

3） 102号住居址（図280）

ＢＱ07に検出され、東北側の埋土の床面直上に79号住が貼床している。黒褐色土中でみつかった平面形は、長軸をN60°Wにおく3.8×3.6mの円味をもった隅丸方形を呈する。壁はゆるく立ち上がり、壁高は50cm前後を測る。深さ10cm前後の周溝が、東隅の20cmを除き壁直下をめぐる。柱穴はＰ₈～Ｐ₁₁で、南側がいずれも浅く小さい。炉はみつかっていない。Ｐ₉からＰ₁₀にかけての図で破線で示した部分のローム面は、最も深いところで７cmの浅い凹みとなり、床面はロームブロック混入黒褐色土を埋めて叩いてあった。

遺物はごく少ない。土器は小破片でⅠ期Ⅰ群36点、Ⅱ期Ⅰ群15点、Ⅲ群４点があり、石器は黒曜石の剝片１点があるのみである。79号住居址より古く、Ⅰ期のうちに廃絶時期は求められよう。

4） 98号住居址（図281）

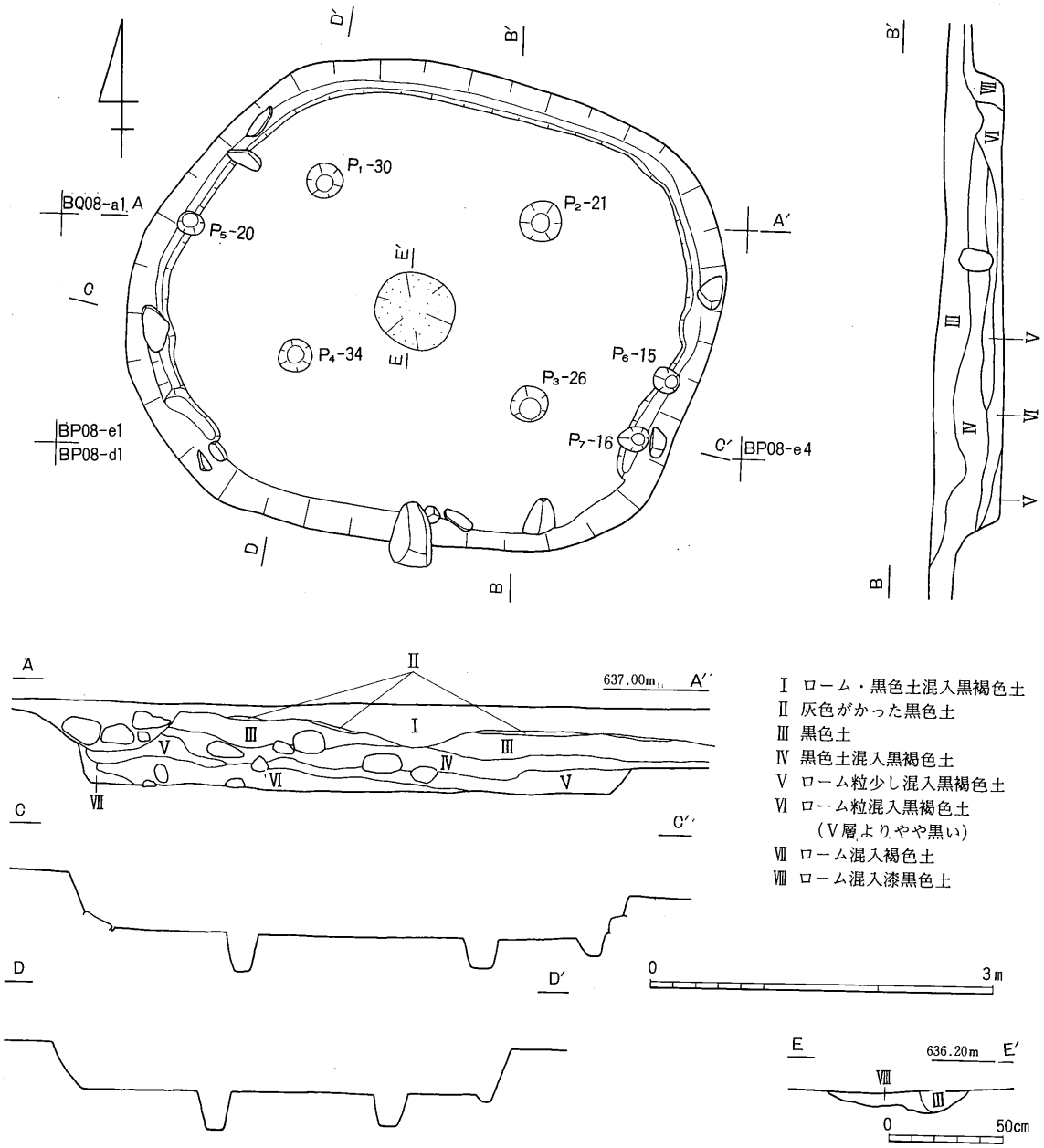


図281　98号住居址実測図

用地東縁北寄りのＢＰ08からＢＱ08にかけて検出され、104号住を切っている。黒色土混入黒褐色土から掘り込まれているが、この土は用地東縁のローム面が東へ傾斜する部分にのみ残っているものであり、西側ではＩ層を除去した時点で落ち込みがみつかっている。平面形は、長軸をN80°Wにおく5.1×4.2mの円味をもった隅丸方形だが、五角形にみえる程西辺が強く張り出している。掘り込みは深く、西側で壁高48cm、東側でも28cmを測る。埋土はローム粒混入黒褐色土で、下層がより黒い。拳大から人頭大の礫が多出し、西側により多く、礫群上面が東へ傾斜するという西方から落ち込んだ状態を呈していたが、土層との関連性は見出されなかった。床面は平坦であるが硬くなく、貼床部分もない。南側を除く壁直下を深さ６～７cmの周溝がめぐっている。主柱穴は東西に長く配されたＰ１～Ｐ４の４本で、周溝上のＰ６Ｐ７は入口施設に関係あるものとしたい。中央に径70cmの地床炉があるが、炉床は焼けておらず、内部には漆黒色土が埋まっていた。なお、平面図中の礫に据えられたものはない。また、土層中のＩは水田化の際に西方から運ばれたもの、IIはそれ以前の耕作土である。

遺物量は非常に多い。埋土とその上層のIII・IV層から出土しており、床面に近づくほど量は減少する。土器は全て破片である。Ｉ群ではII期が約1400点と最も多い。図化した大破片（34～36・38）はIV層出土が主体であり、上層により多い傾向が最も強い。しかし床面や周溝内からも少量ながらII期が出土してい

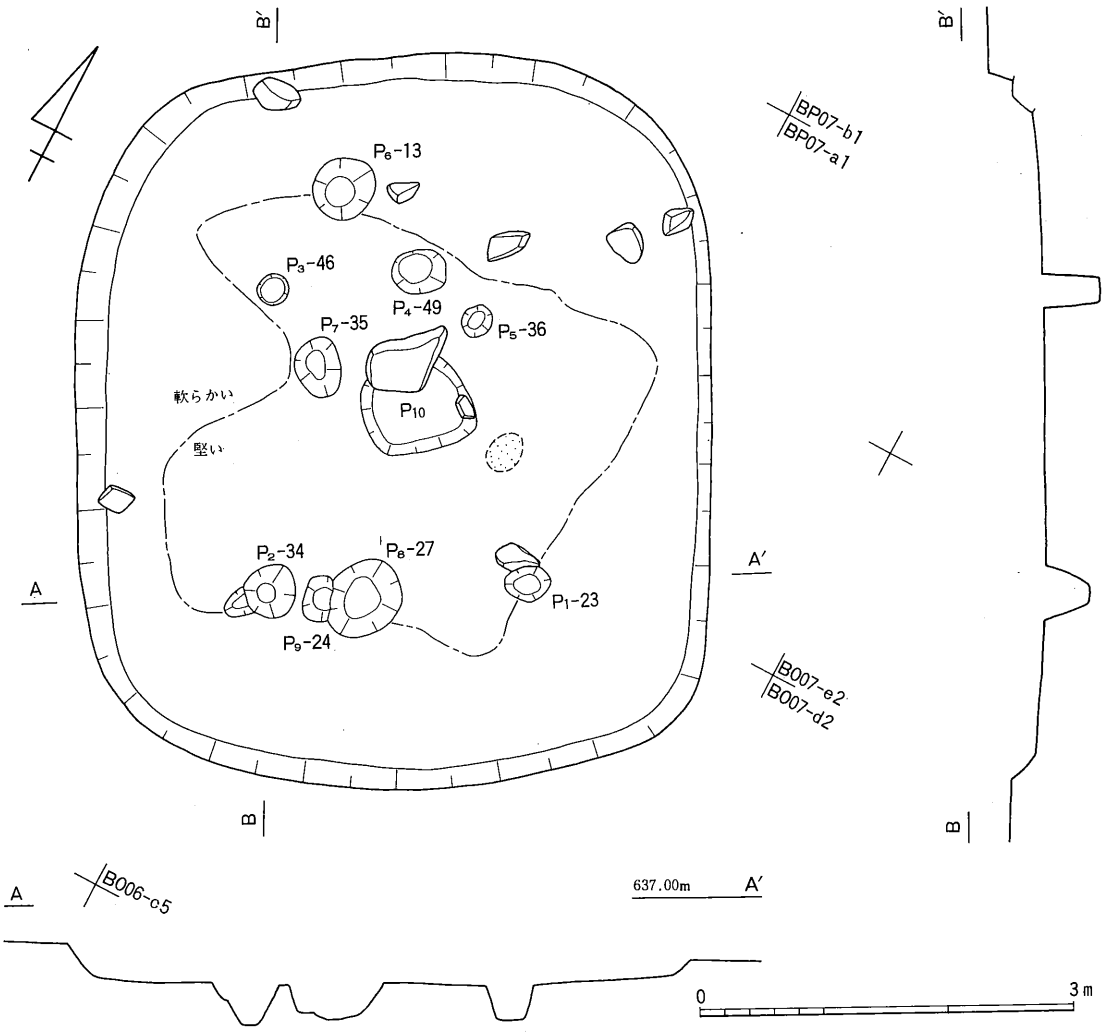


図282　99号住居址実測図

る。Ⅰ期も多く1150点あるが、大破片ではない。他に厚手の爪形文を付すⅡ期Ⅰ群が若干ある。Ⅰ群以外では、39や40のDを主体とするⅢ群が210点あるが、繊維を含む土器53点のうちⅡ群と断定できるのはごくわずかである。石器も多く、石鏃20点、石匙6点、石錐6点、打製石錘1点、スクレパー13点、打製石斧1点、叩石5点、礫端叩石2点の他、黒曜石・チャートの剝片類が約400点出土している。

住居址に直属する遺物はないが、土器の出土状態から廃絶時期はⅡ期の中に求められよう。

5） 99号住居址（図282）

BO07に検出された。平面形はN30°Wに長軸をおく5.8×5.1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは30cm前後を測る。床面は壁寄りが中央に向かってゆるく傾斜しており、中央部のみが堅くなっていた。炉はみつかっていない。中央部の、内部に大礫をおくP_{10}は、後世の撹乱の痕跡であり、あるいはそれによって炉が破壊されているのかもしれない。P_5とP_{11}の中間の床面が径30cm程焼けていた。柱穴としてP_1～P_4の4本を考えた。P_4が内側に寄っており、方形の配置とはならない。

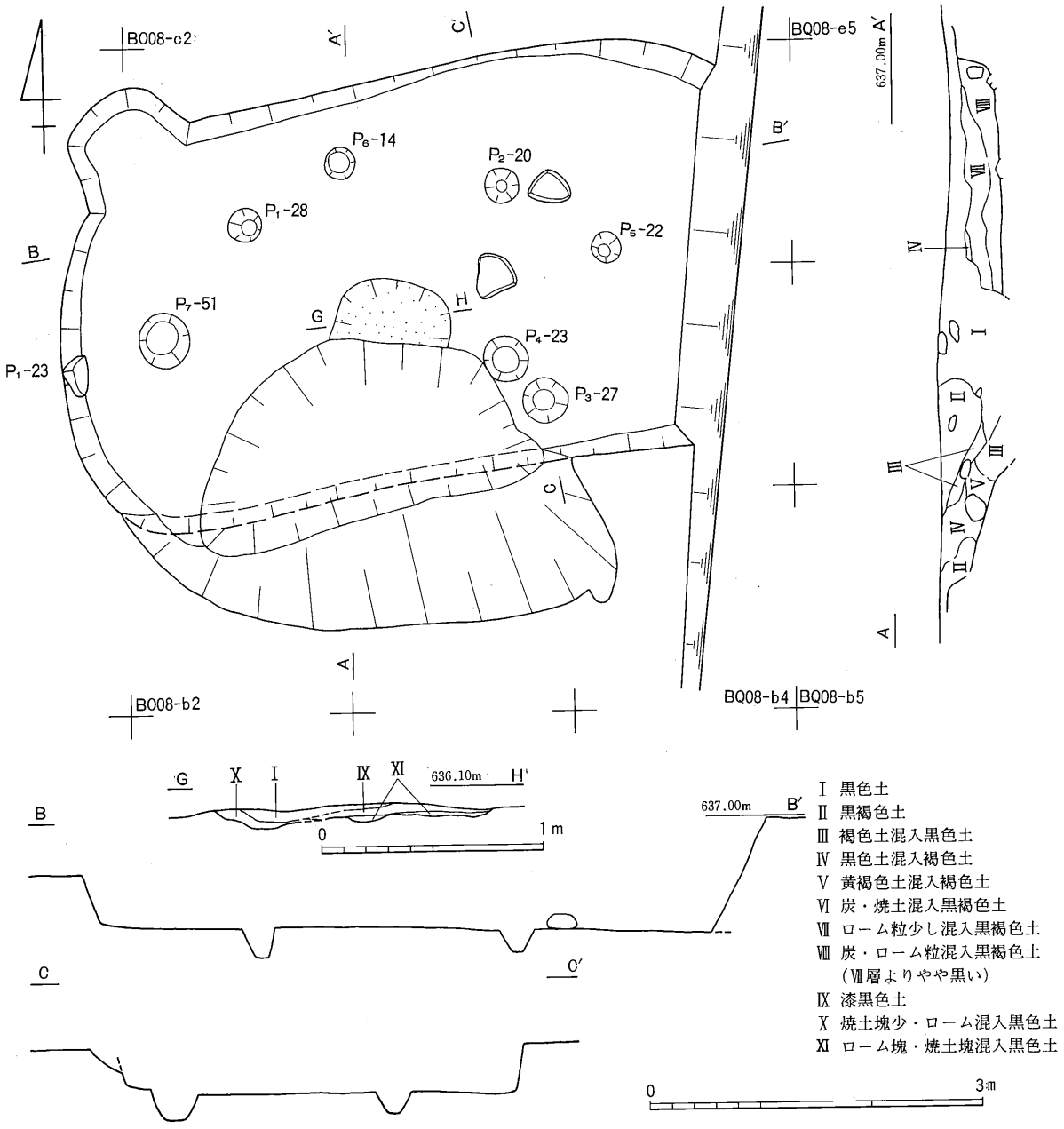


図283　100号住居址実測図

遺物は少なく、土器にはⅠ期Ⅰ群（159～163・165～167）147点、Ⅱ期Ⅰ群（168～183）145点とⅢ群（41・164）7点、Ⅱ群2点があり、Ⅰ期Ⅰ群では粗雑な厚手の無文土器片が多く、Ⅱ期Ⅰ群の粗雑な縄文を付す土器が床面近くからまとまった量出土している。174と175は図化すると口縁部形態が異なるため別個体としたが、胎土・焼成・色調・施文具とも共通しており、同一個体である可能性がある。石器は、石鏃6点、スクレパー3点、叩石2点と黒曜石類の剝片49点、屑片26点、石核18点、両極打法痕のあるもの5点が出土している。

6） 100号住居址（図283）

用地北東隅の、ローム面が北東へ傾斜するＢＱ08に検出され、南側は壁から床にかけて、風倒木によって大きく破壊されている。住居址は黒色土下面から掘り込まれ、東端が用地からわずか出ているため規模は推定だが、平面形はＮ80°Ｅに長軸をおく6.5×3.7mの隅丸長方形を呈する。西壁は円味をもち、北西隅に張出部がある。掘り込みは深く、床面が掘り込み面に従って東へ10cm以上傾斜しているため、壁高は西側で49cm、東側でも37cmを測る。また、西半の床面は、壁下から主柱穴付近まで5～6cmの緩傾斜となる。埋土の色や礫群の存在は98号住居址と酷似している。周溝はない。主柱穴は方形に配された4本で、P_1 P_2 P_3と破壊部に1本を想定した。P_5 P_6は支柱穴の可能性があるが、P_7は異質であり、貯蔵穴としたい。中央の地床炉は径1mと大きく、炉の埋土に焼土塊が散在するものの、炉床は焼けていない。P_2の東と炉の東に床面へ据えた状態で、また東壁中央には立てかけた状態で、いずれも角のとれた板状の石がある。

埋土からの遺物出土量は非常に多いが、西壁上から斜めに炉付近の床面までの埋土下層からは極めて少ない。土器はいずれも破片である。Ⅰ群ではⅠ期が最も多く約1600点を数え、上層から床面までまんべんなく見られた。17はP_5の直上床上10cmに出土した大破片である。次に多いのがⅡ期で約1000点あり、こちらは床面付近にも散見されるものの、埋土Ⅶ層の上層とその上のⅠ層からの出土が大部分である。他にⅢ群が約200点あり、その中の斜走沈線を付すもの50点は比率としては高い。Ⅱ群はごくわずかある。検出面から同一個体の表裏縄文10片が出土している。石器も多く、石鏃48点、石匙8点、石錐6点、スクレパー18点、叩石12点、礫端叩石4点、打製石斧・小型磨製石斧各1点に加え、黒曜石類の剝片532点、屑片261点、石核224点、原石11点、両極打法痕のあるもの38点と非常に多い。北東壁上に石皿があった。

所属時期は、床面上からもⅡ期Ⅰ群土器が出土していることからⅡ期であり、Ⅰ群土器のⅠ期とⅡ期の比率やⅡ期の出土状態、Ⅲ群の特徴等から、埋土出土土器群は、98号住居址のそれなどよりも古いことは言えそうである。

7） 101・103号住居址（図284）

調査区の南東隅のＢＯ08に検出され、建て替えといってもいい関係にある。東側は用地外まで達するため調査出来ず、西側も調査し切れていない。

101号住は、103号住の南壁の一部を破壊しながら、大部分重なる状態で103号住床面と同レベルか少し下位まで掘りこんで築かれている。これにより103号住の埋土はほとんど排除されてしまったことになる。平面形は、壁下を全周する周溝から、東西に軸線をおく隅丸方形と考えられ、南北で3.6mを測る。検出面からの掘り込みは非常に深く60～80cmを測り、細砂層まで達している。床面も完全な砂地で、貼り床等はみられない。柱穴はP_1～P_4の4本で、床上の3箇所に焼土があり、床上全体に炭粒が散在していた。

遺物は中量だが、土器では、埋土中位からⅠ期Ⅰ群Ｄの完形品（7・8）、Ｅの大破片（9）やそれらの底部（10・11）が出土している。破片はⅠ期Ⅰ群554点でうちに斜格子目文を付すものが39点あり、Ⅱ期Ⅰ

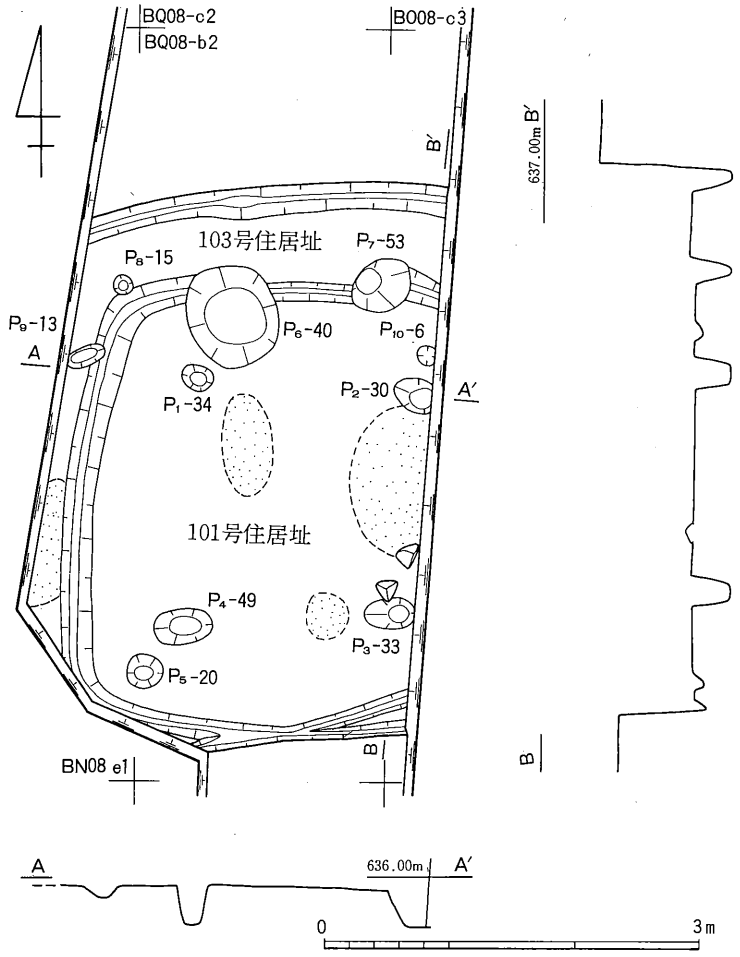


図284　101・103号住居址実測図

群222点、III群78点の他、繊維を含む粗雑な土器が8点ある。石器は、石鏃9点、石匙3点、石錐1点、打製石錘1点、スクレパー10点、打製石斧・横刃型石器・礫端叩石各1点と磨製石器の部分と推定されるものの他、黒曜石類の剝片148点、屑片34点、石核79点、両極打法痕のあるもの8点などがある。

103号住は、平面形として東西に軸線をおく（隅丸）方形が推定され、検出面からの掘り込みが深く、壁下を周溝がめぐることが知れる以外は、詳細はわからない。南北4.4mを測る。埋土から出土したと断定出来る遺物はごく少なく、II期I群土器1点と数点の黒曜石剝片類があるにすぎない。

8）　104号住居址（図285・286・287）

BQ08の南西隅に検出されたが、98号住によって東隅を切られ、南壁の2箇所が撹乱されている。水田地場層下のロームへ移行する土中に検出された。最も深い西側でも壁高8cmと掘り込みが浅く、東壁は確認出来なかった。従って98号住によってどの程度破壊されたかは明らかにし得ないが、柱穴等から南北3.9m、東西推定4.0mの隅丸方形の平面形が想定される。埋土は黄色がかった赤褐色で、床面の検出が困難であったほどであり、深く掘られた住居址のものとは明らかに異なる。床面は軟弱で、土地の傾斜に従って東へ緩く傾いている。周溝はない。床面上と壁外に多くのピットがある。柱穴は明確な決め手を欠くが、P_8 P_{10} P_{13} P_{16} P_{17}とP_{13}の対称点に1本の6本を想定した。壁外のP_4 P_6も柱穴の可能性があろう。柱穴が

壁に近く、柱穴の内側に広い空間が形成されていることになり、ピットの多さとあわせて注意される。P_5には土器6の口縁部が落込んでおり、上屋構築時には開口していたものであろう。中央に地床炉があるがその炉床は3～4cmの厚さによく焼けており、使用痕を良く残す唯一の例となる。炉の周囲の床面に凹みが2個あるが、炉石抜き型とは断定出来ない。

遺物は埋土の厚さに比べれば多い。土器は床面から3個体のⅠ期Ⅰ群が出土している。3（E）、4（C）は大破片であったが、埋土の厚さから後世の撹乱によって大部分が持去られたものと判断し、底を欠くのみの6（E）と共に、本址の廃絶時期に最も近いセットとしたい。器形、整形の粗雑な点も共通している。また、いずれも著しく風化しており、住居址埋没状況の特殊性を示すものとして注意したい。破片は、上層にII期Ⅰ群が20点ある他は、約110点のⅠ期Ⅰ群、若干のIII群がある。P_1 P_7から1片づつではあるがII期Ⅰ群土器が出土しており、廃絶時には共に開口していた可能性が強い。石器は、石鏃8点、石匙2点、石錐2点、スクレパー10点、打製石斧・磨製石斧・礫端叩石・岩偶各1点があるが、特筆すべき出土状態が2例ある。

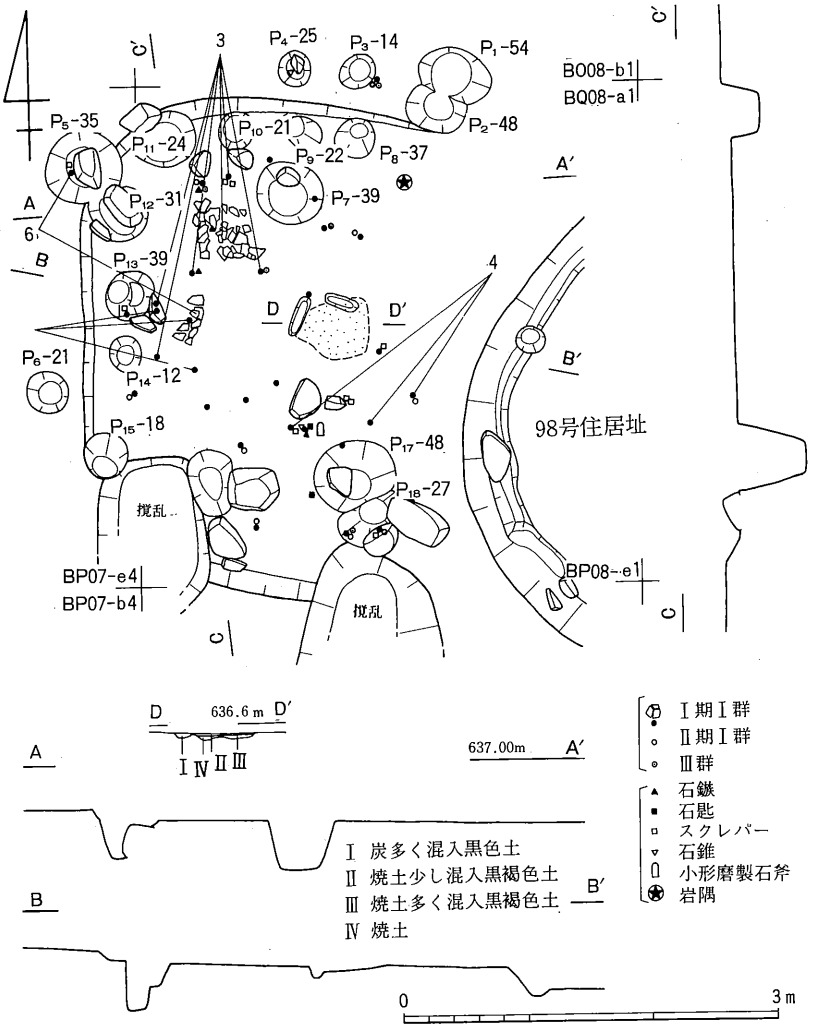


図285　104号住居址実測図

1つは、炉の南70cmの床上から、石鏃2点（195・196）、スクレパー3点（199～201）、石匙（197）・石錐（202）・磨製石斧（219）各1点が置き並べたような状態で出土した（図286）こと、もう1つは、炉北1mの床面に密着して、岩偶が出土したことである。いずれも住居址と密接な関係にあり、注意される。岩偶は、長さ7.0cm幅3.2cm厚さ0.5cm重さ16.8gのチャート製。全体形は片刃の小型磨製石斧に似て足端がとがり、わずかに反っている。上方に両腕と頭部を作出し、下端中央に表裏面から擦切技法によって長い切り込みをいれて脚部としている。黒色顔料が付着しているが、観察した限りでは図287のように塗りわけられていたようである。

出土土器からI期の住居址であり、埋土や掘り方等から、第14次調査地点では107号住居址に次ぐ古い時期の住居址としたい。岩偶と石器セットの床面出土、顕著な使用痕を残す炉、多数のピットとその内側の広い空間など、祭祀的性格の強い遺構であることを指摘しておきたい。

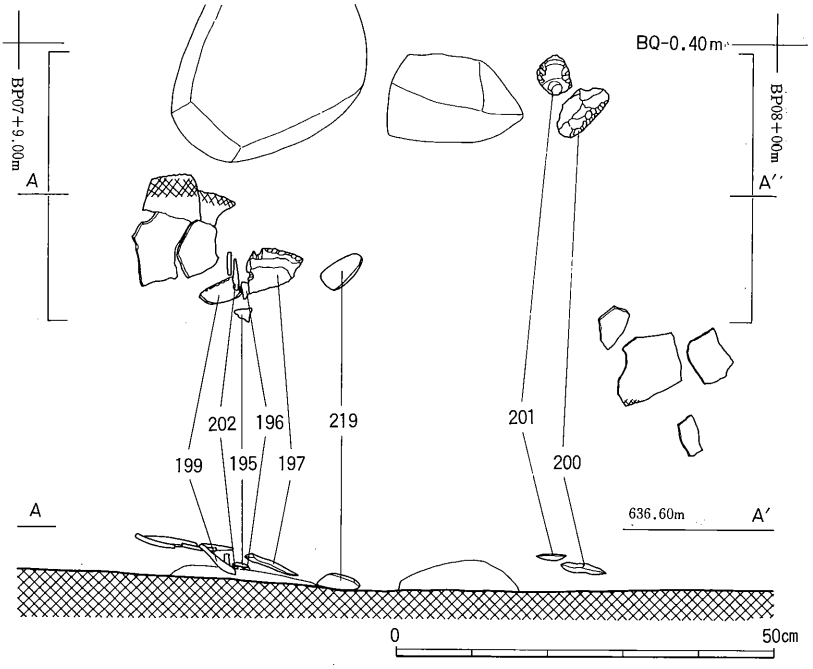


図286　104号住居址遺物出土状態(部分)

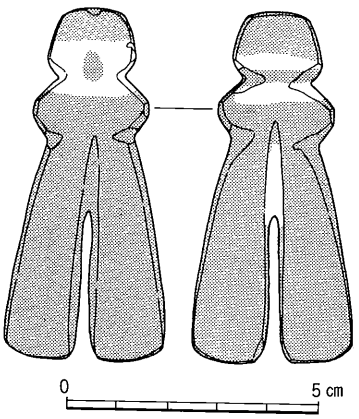


図287　岩偶黒色顔料付着状況

9）　105号住居址（図288）

BO07南西側、調査区の南側ほぼ中央に位置し、IV層の黒褐色土中に検出された。平面形は長軸をN20°Wにおく4.3×4.1mの、北壁が円く張り出すため五角形に近い、円味をおびた隅丸方形である。この形態は、砂質土のためか検出面までは壁がゆるく立ち上がる部分もあるため、むしろ壁直下をめぐる周溝に顕著である。床面も砂質で良好とはいえないが、埋土最下部の全面に黒色の炭化灰層があり、容易に検出された。周溝は幅15～30cm、深さ10cm前後である。柱穴はP_1～P_4の4本と考えられ、炉はP_7かP_8が該当するかとも思われるが、いずれも焼土はない。住居址内全面に火災による炭化材が多く残っており、柱材とおもわれるものが10本以上検出された。炭化材の周辺には床面より20cm以上浮いて焼土があり、上屋構造物の上あるいは焼失しつつある上屋構造の上に土があったことを示し、注意される。P_4の北の床面に石皿が据えられており、その上面は焼けていた。

遺物はごく少ない。土器は全て小破片でI期I群94点、II期I群11点、III群8点と繊維を含む厚手の無文土器3点がある。石器は石鏃2点、スクレパー2点、横刃型石器・磨製石斧・礫端叩石・石皿各1点と

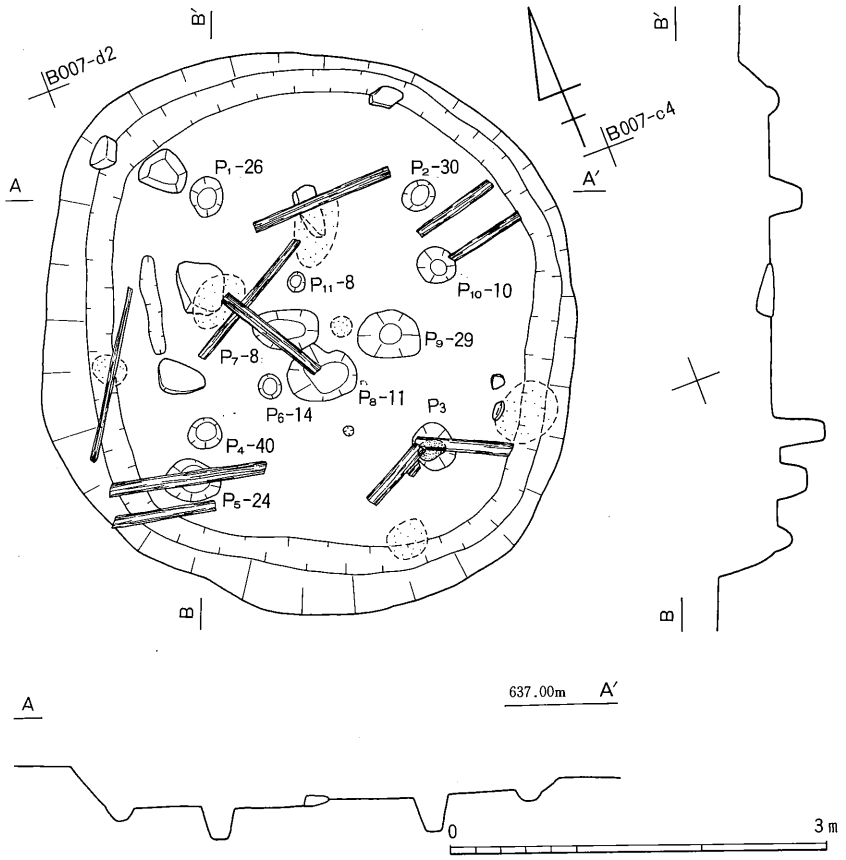


図288　105号住居址実測図

若干の黒曜石の剝片類がある。遺物からＩ期の住居址である。また、家屋の焼失が突発的ではなかったことも言えそうである。

10)　106号住居址（図289）

調査区南側、道路寄りのＢＯ06に検出されたが、地上にあった建物が移転されなかったため、北側半分しか調査されていない。平面形はほぼ東西に軸線をおき、東壁が極端に張り出す円味をもった隅丸方形となろう。東西は4.6mを測る。南壁がゆるく立ち上がり、検出面までの壁高は30cm前後である。床面は全体に堅いが、約10cm低くなる東側は堅くない。周溝はない。柱穴としてＰ１Ｐ３Ｐ４などが考えられるものの整然とした配置にはない。

遺物はごく少ない。土器は全て小破片で、Ｉ期Ｉ群16点、II期Ｉ群24点、III群10点があり、石器は石鏃１点、スクレパー２点と若干の黒曜石剝片類があるにすぎない。

11)　107号住居址（図290）

用地の南西隅に近いＢＯ06の北側に検出され、99号住によって東側を、方形柱列によって南側を切られている。表土・地場層を除去した時点で存在が確認されている。検出面からの深さ10cmと浅く、埋土が黄色がかった赤褐色であったため一部明確に出来なかったが、平面形は、長軸をＮ40°Ｅにおく3.5×3.0mの隅丸方形と考えられる。周溝はない。床面中央の1.6×1.8mの範囲が叩きしめられており、中央に２個のピットがあるが、柱穴は見あたらない。炉も無い。

遺物はごく少ないが完形土器が２点ある。２は中央の床上12cmに横たわって、１は中央から南東方にかけて床面に散在していたものである。いずれもＩ期Ｉ群Ａで１は底部のくびれ部が特に顕著である。10片

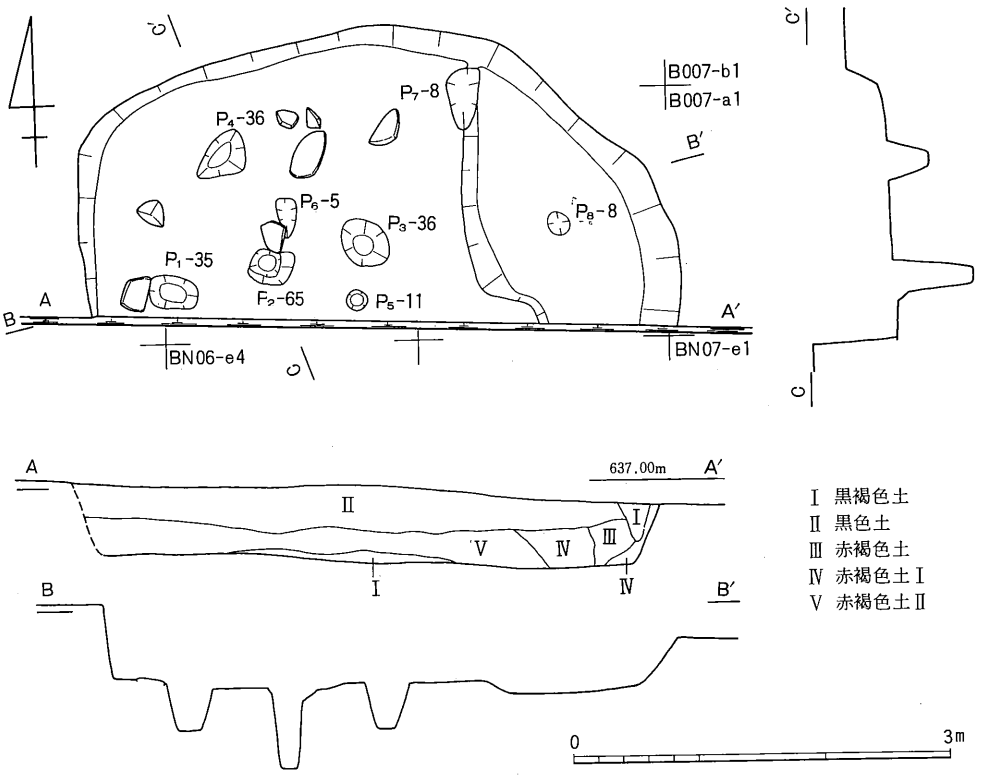


図289　106号住居址実測図

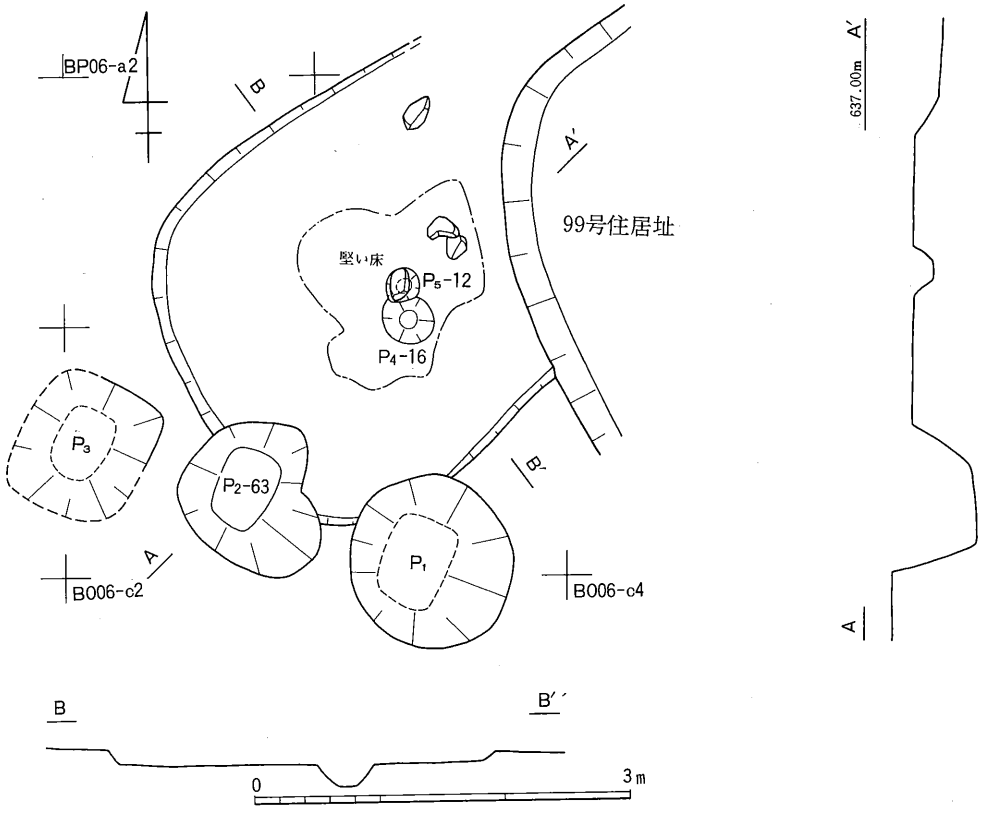


図290　107号住居址・方形柱列実測図

程の破片も、１点のII期Ｉ群を除き全てＩ期Ｉ群Ａである。石器は、石鏃２点と黒曜石剝片類13点の他、床面上に硬砂岩の円礫があったにすぎない。

所属時期はＩ期の最も古いところに位置づけられよう。

２　方形柱列（図290）

107号住の南壁を切る形で並ぶ大型のピットがある。調査期間の関係で３個の存在を確認したのみで全容を明らかにすることが出来なかったが、それ等がN65°Wに等間隔に並ぶこと、ピットは口径１m強で底面が65×45cm位の長方形となること、埋土は自然堆積でなく、拳大からまれに人頭大の礫を大量に含むこと等が確認出来た。ピットの形態が似ており、埋土も、ロームブロックと礫との差はあれ、人為的に埋め戻された状態にあり、阿久遺跡などで検出された方形柱列と同一遺構の一部と判断した。柱列が南西側に展開していることは確かだが、全体の規模やこの３個のピットがそのどの部分であるかは確認出来ていない。

遺物は数点の土器片のみで、Ｉ期Ｉ群のＡ２点と無文胴部３点、III群１点が出土している。切合関係と遺物から、107号住廃絶後のＩ期のうちに構築時期を想定しておきたい。

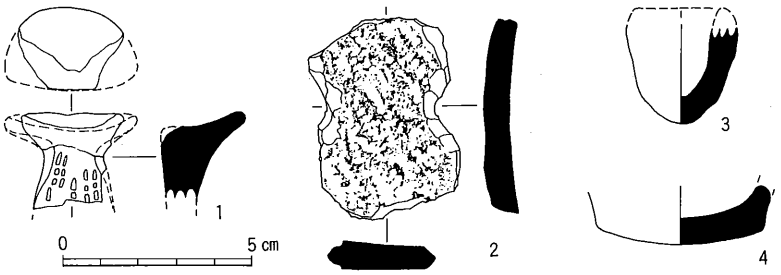
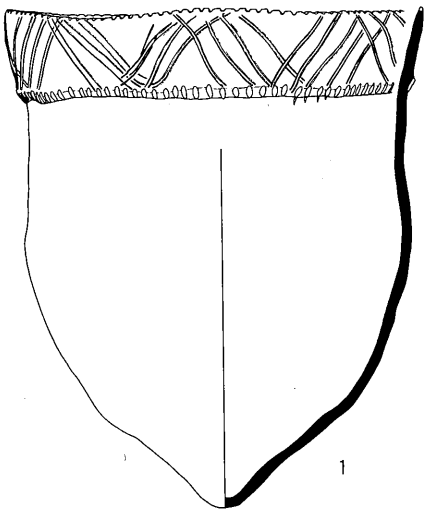
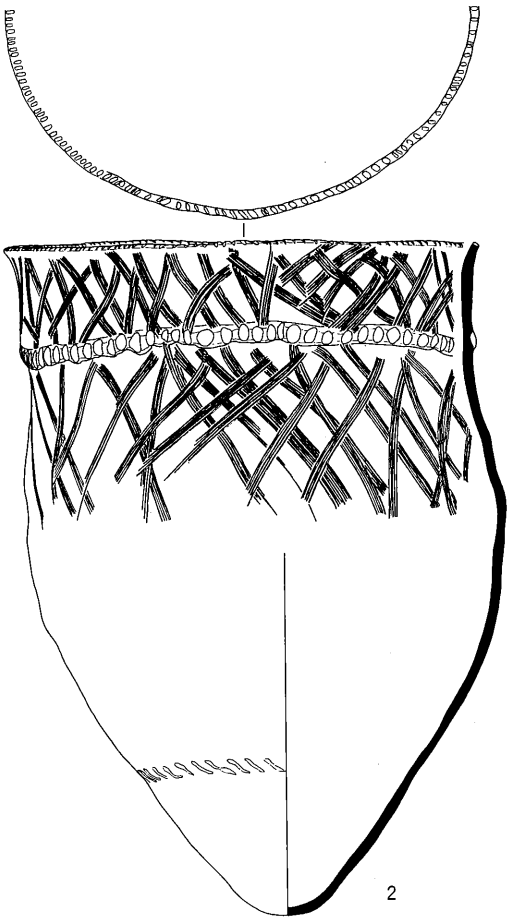


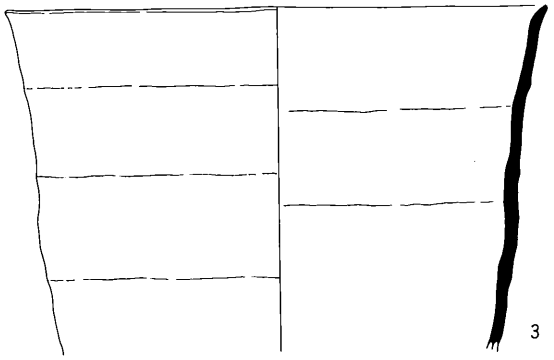
図291　土製品実測図

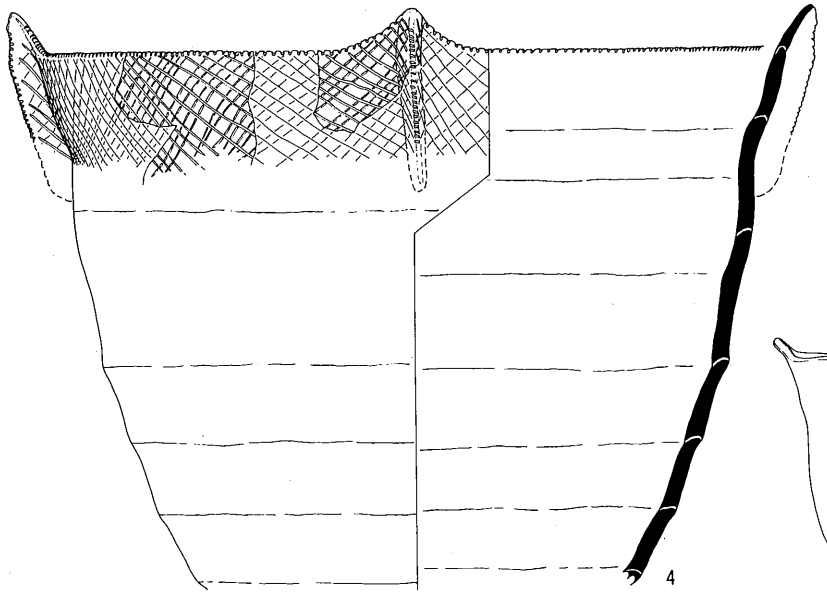
107号住居址





104号住居址





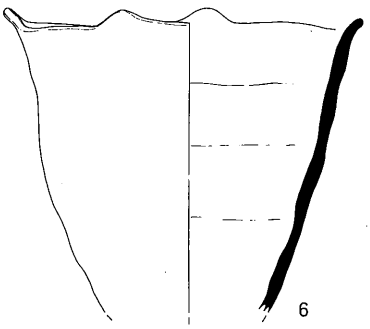
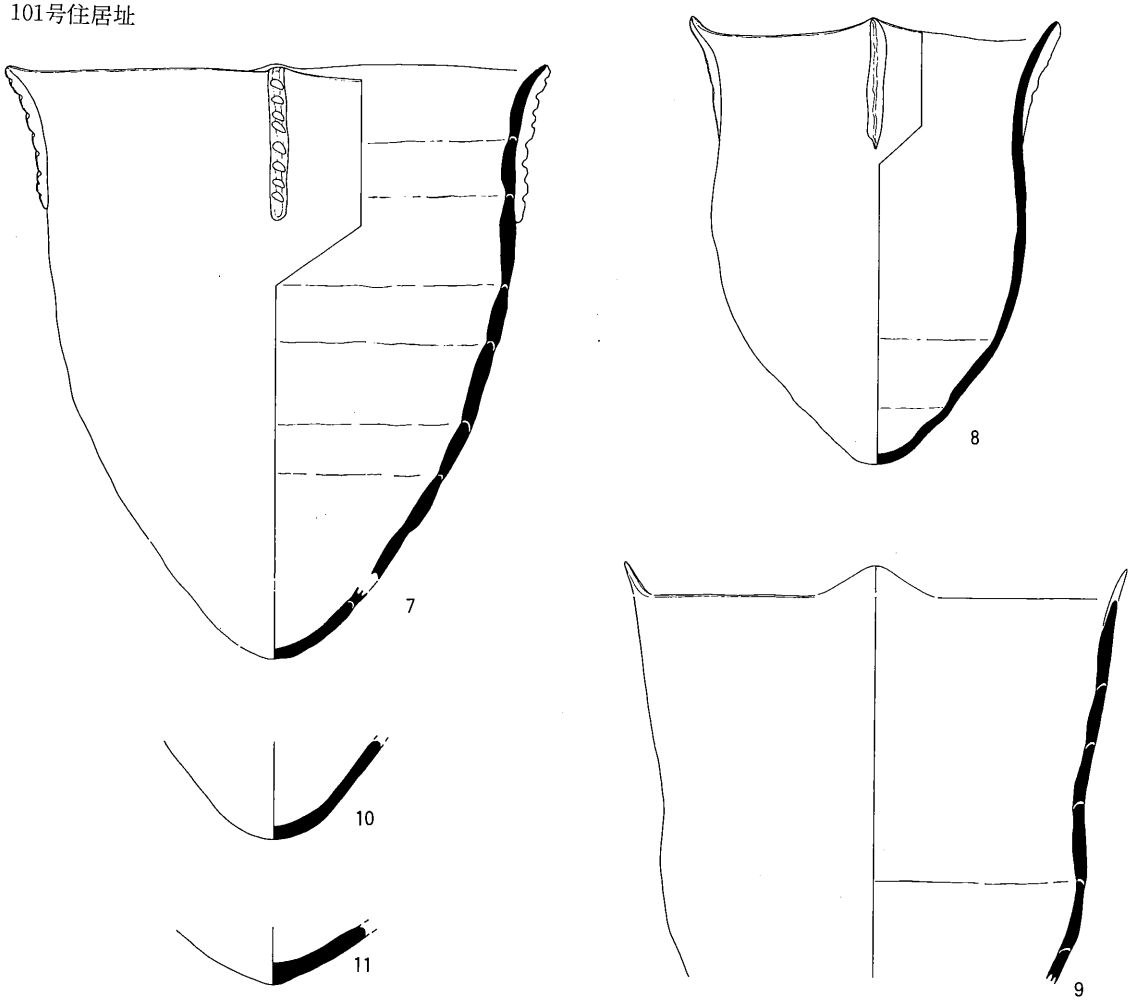


図292　107・104号住居址出土土器実測図

101号住居址



79号住居址(1)

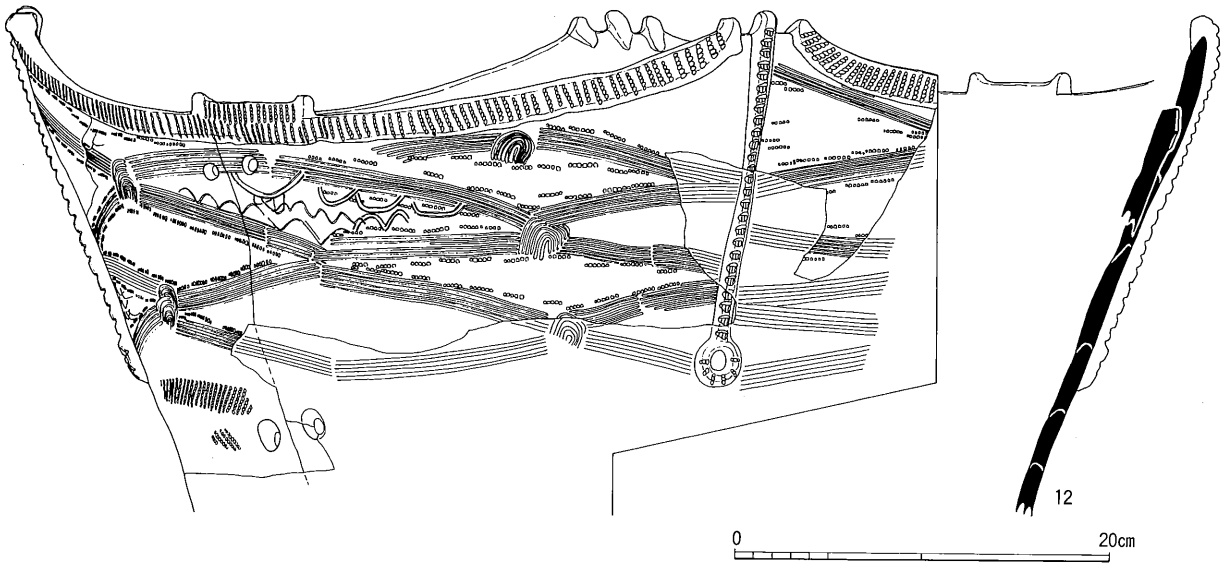


図293　101・79号住居址出土土器実測図

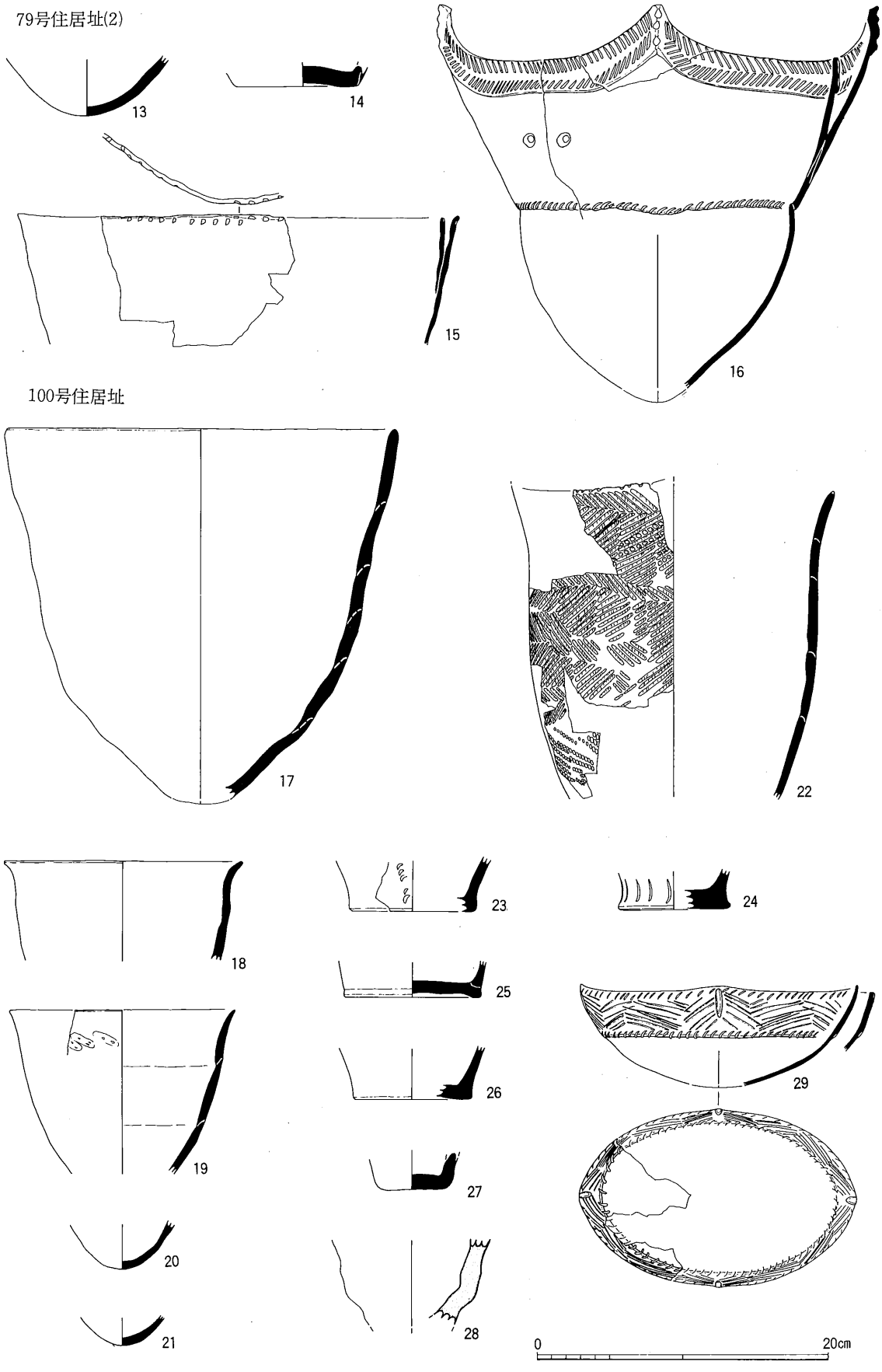


図294　79・100号住居址出土土器実測図

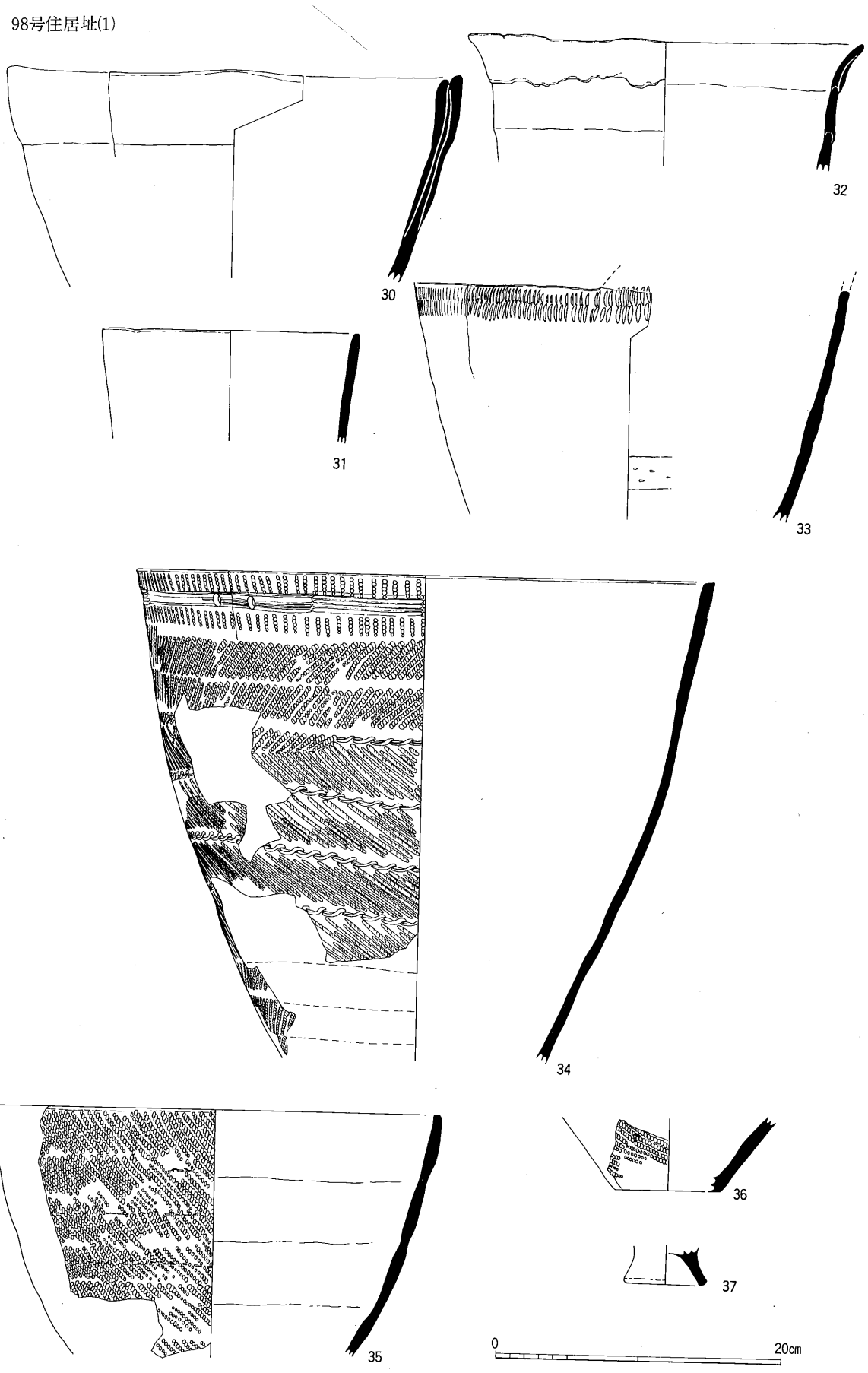


図295　98号住居址出土土器実測図

98号住居址(2)

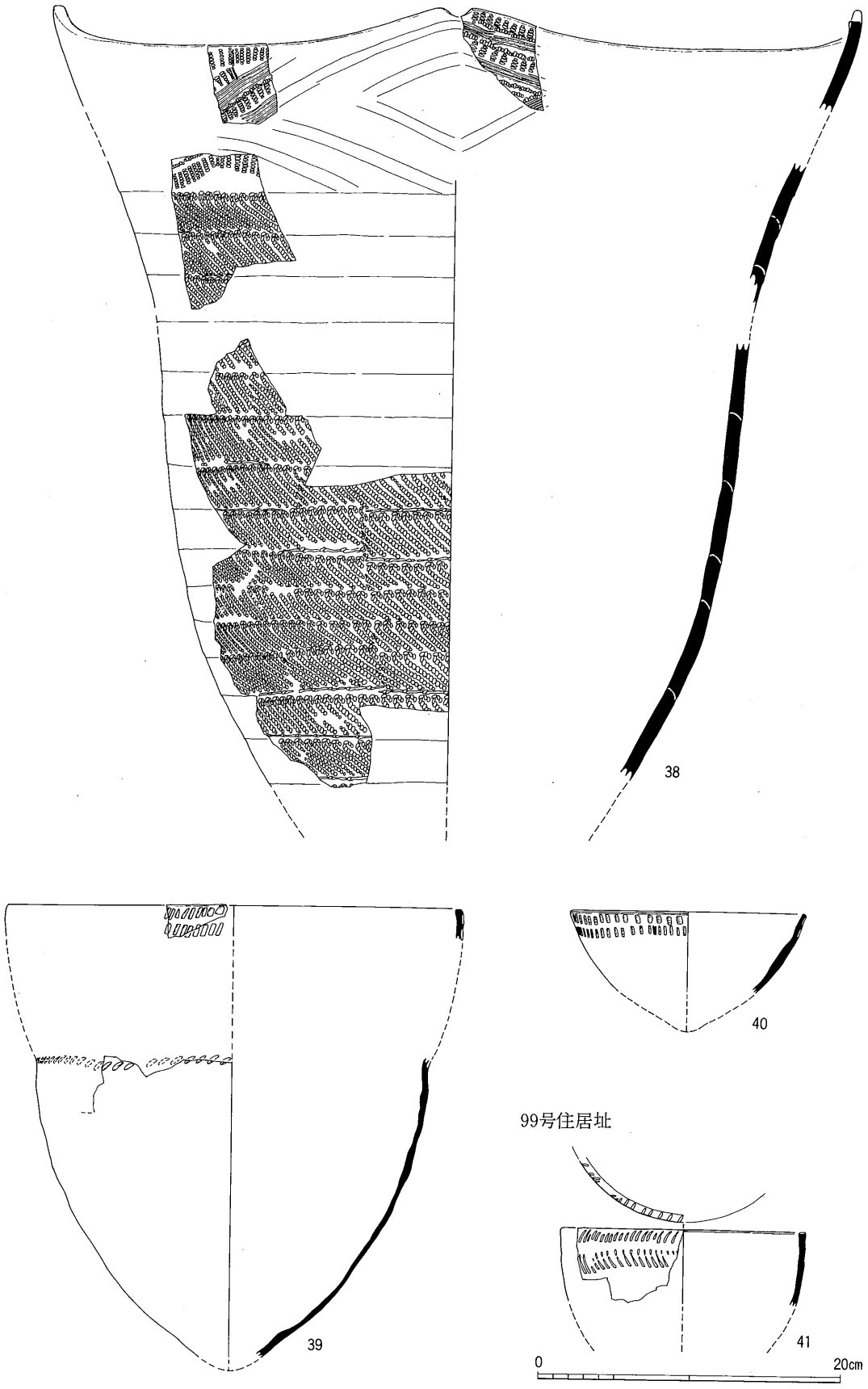


図296　98・99号住居址出土土器実測図

76号住居址

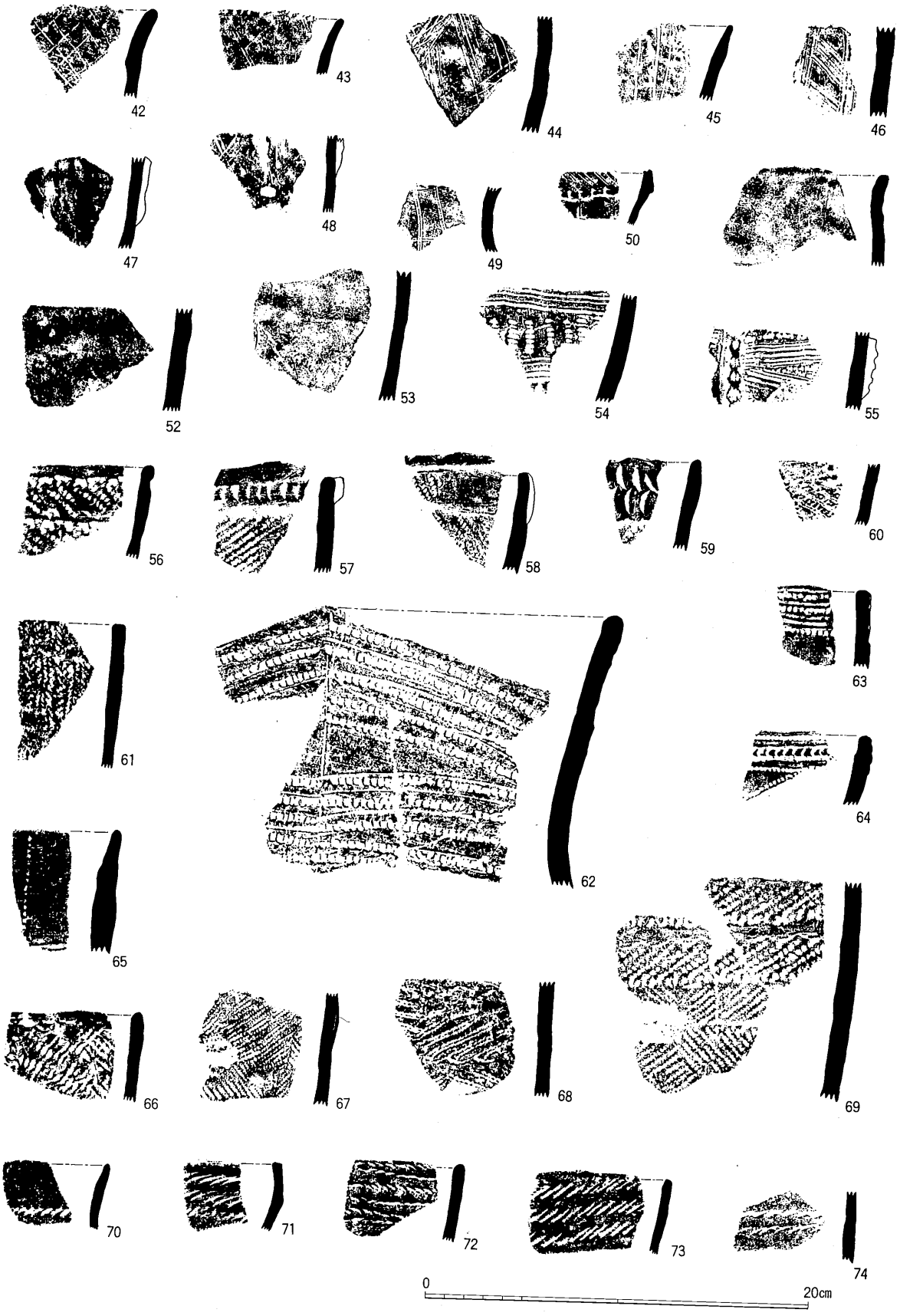


図297　76号住居址出土土器拓影

79号住居址

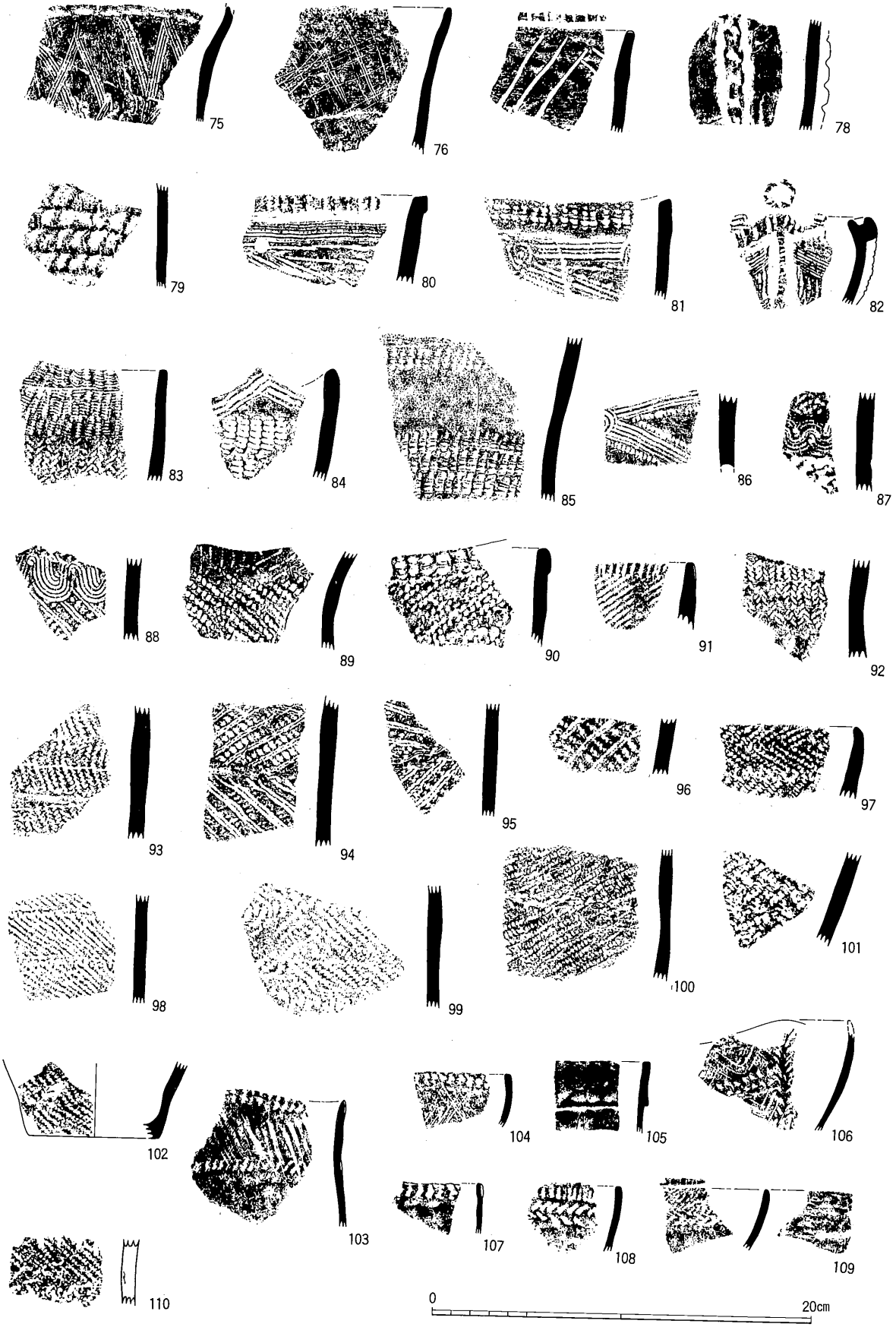


図298　79号住居址出土土器拓影

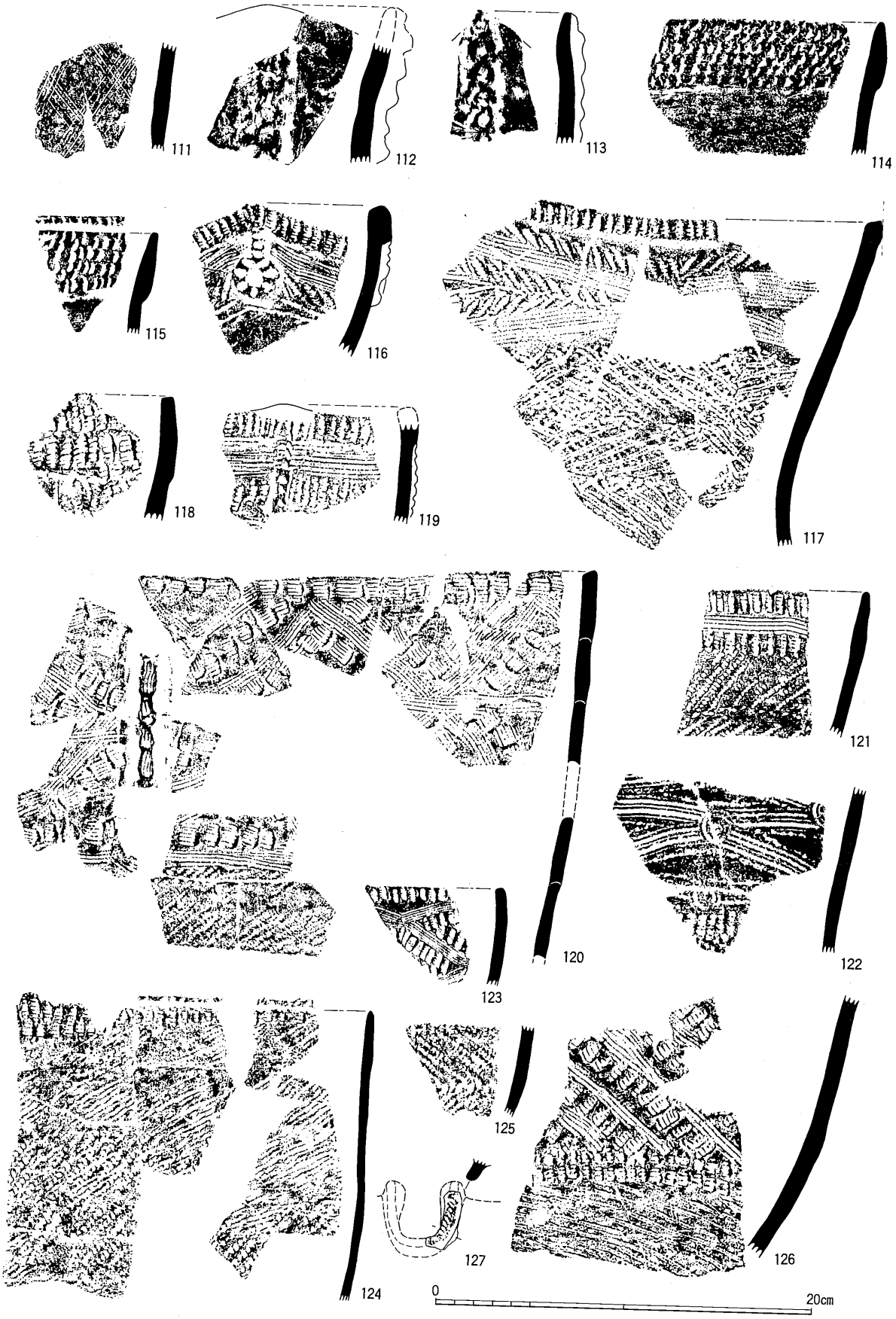


図299　98号住居址出土土器拓影

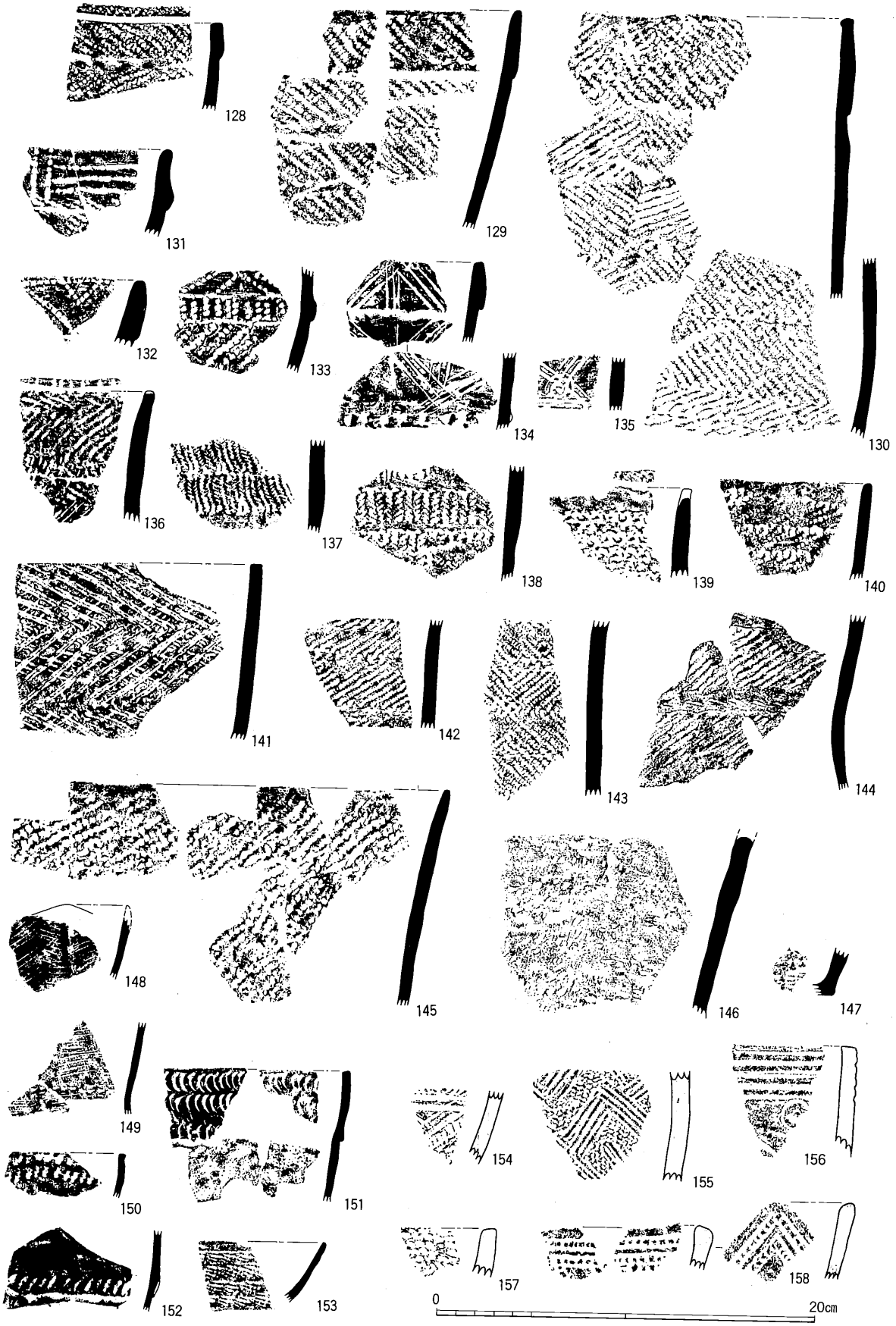


図300　98号住居址出土土器拓影

99号住居址

100号住居址(1)

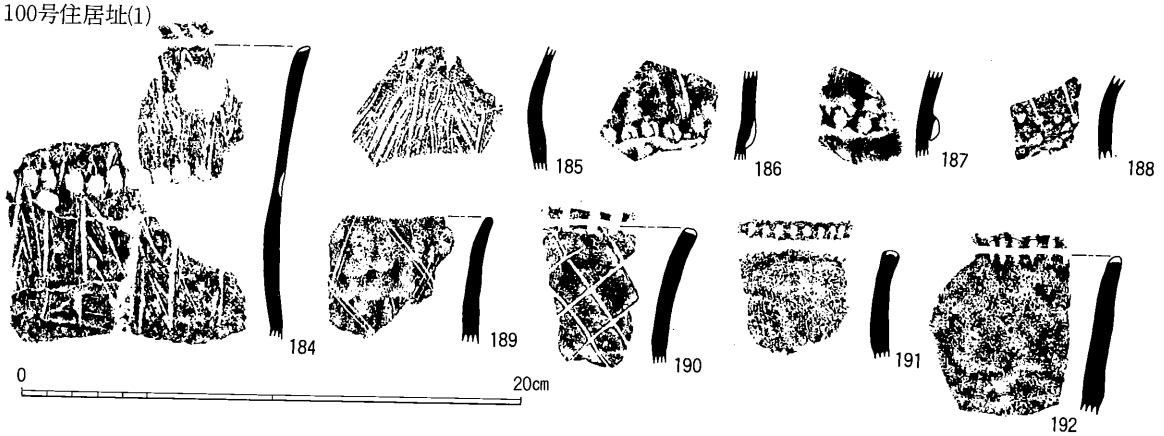


図301　99・100号住居址出土土器拓影

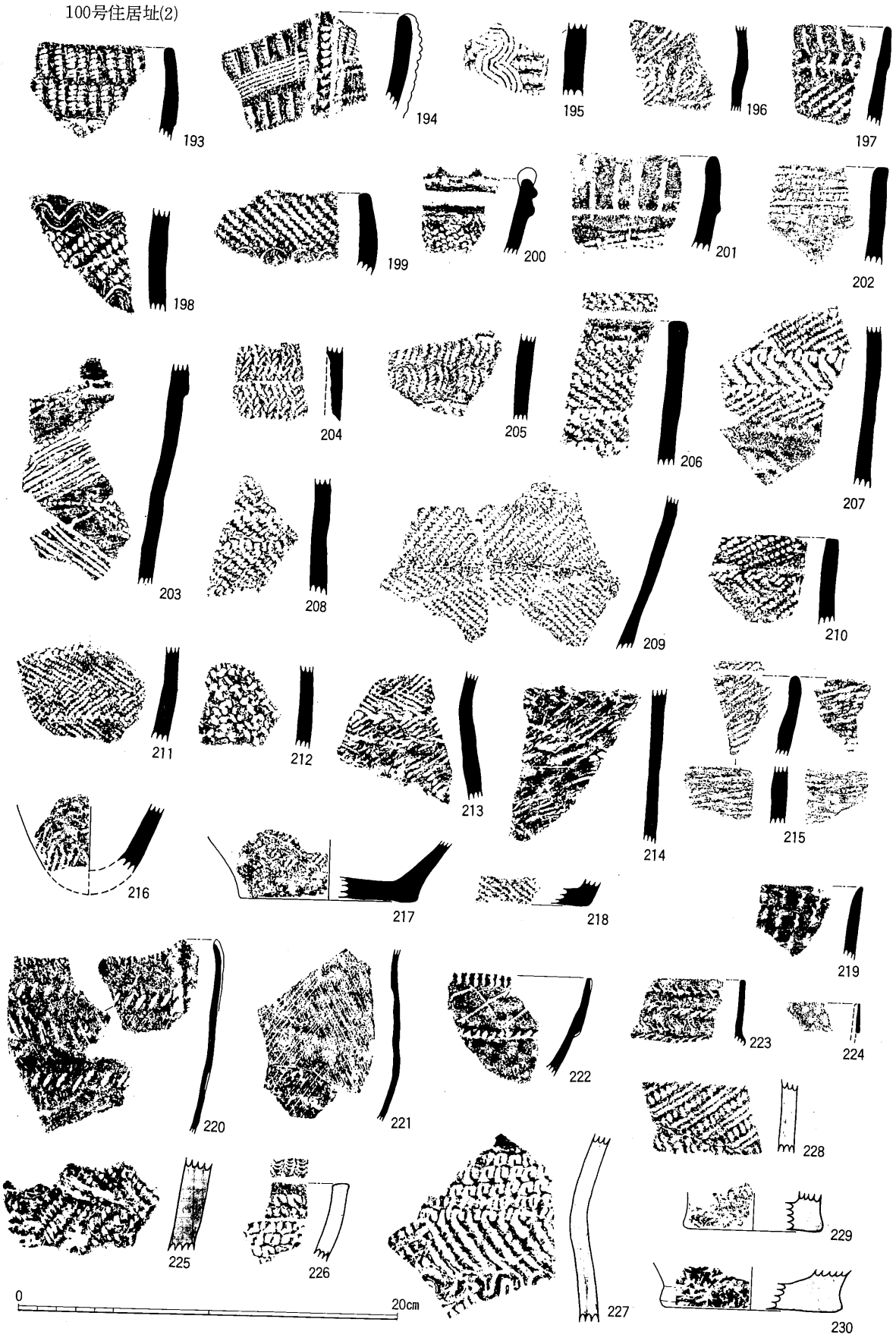


図302　100号住居址出土土器拓影

101号住居址

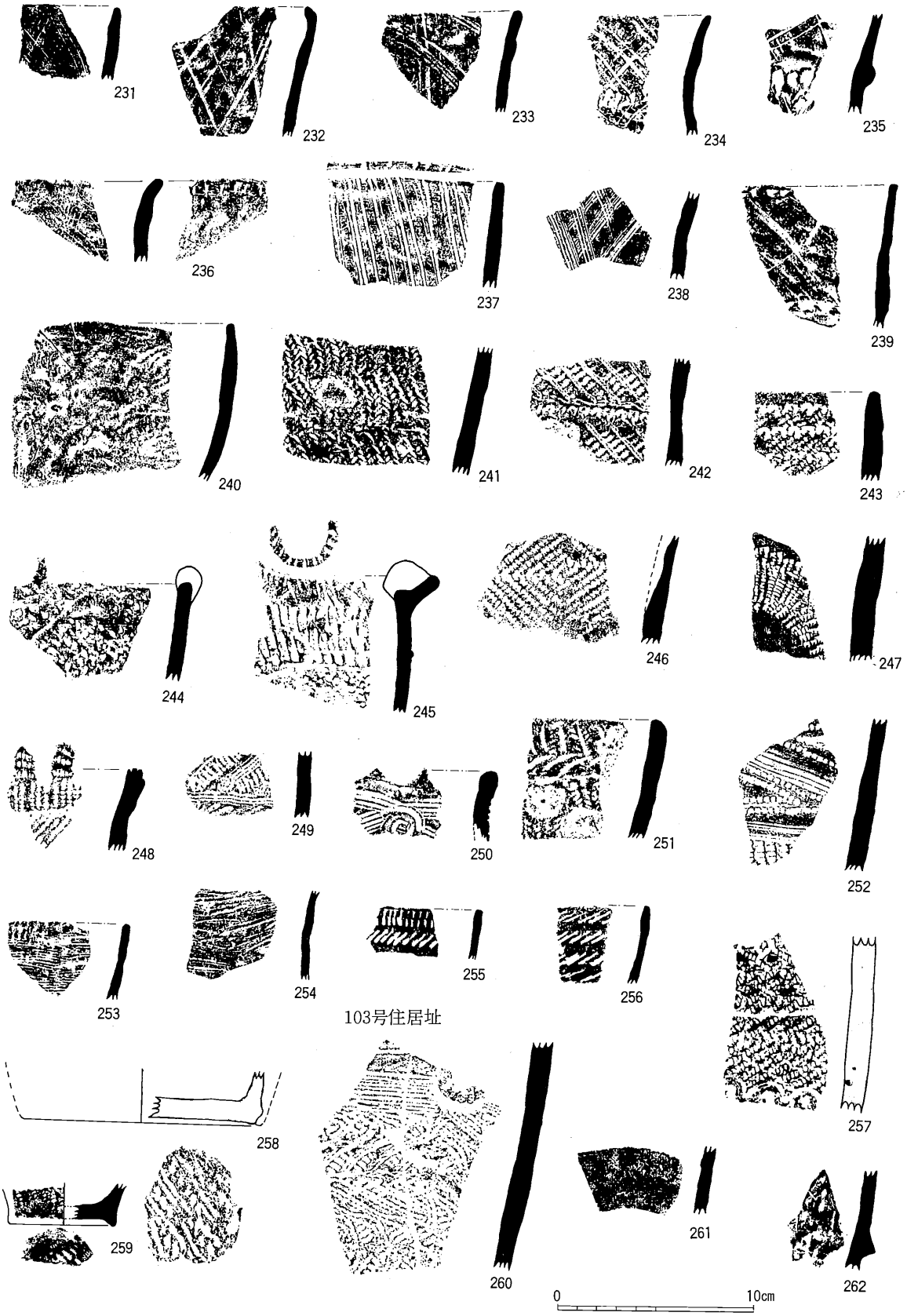


図303　101・103号住居址出土土器拓影

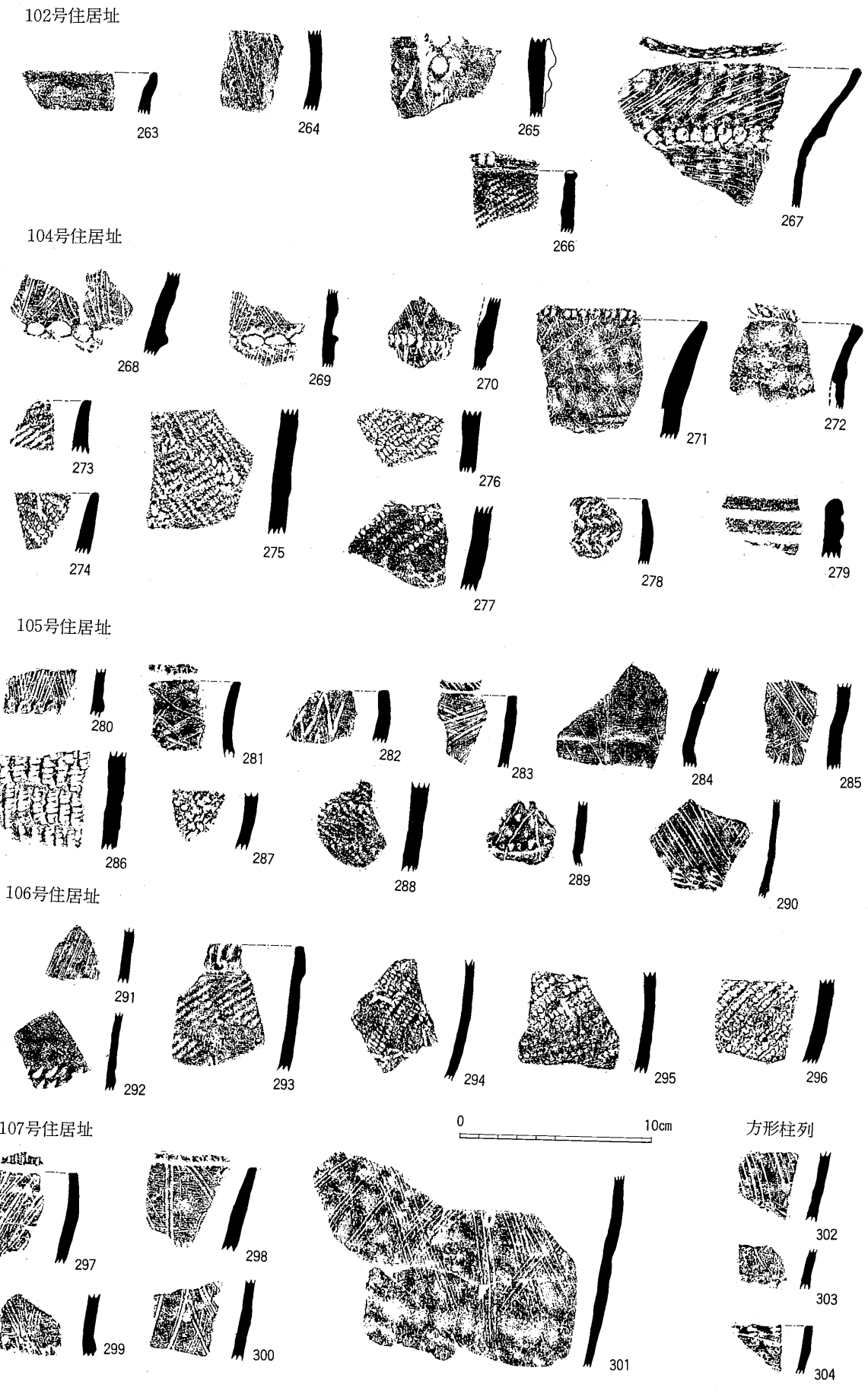


図304　102・104・105・106・107号住居址、方形柱列出土土器拓影

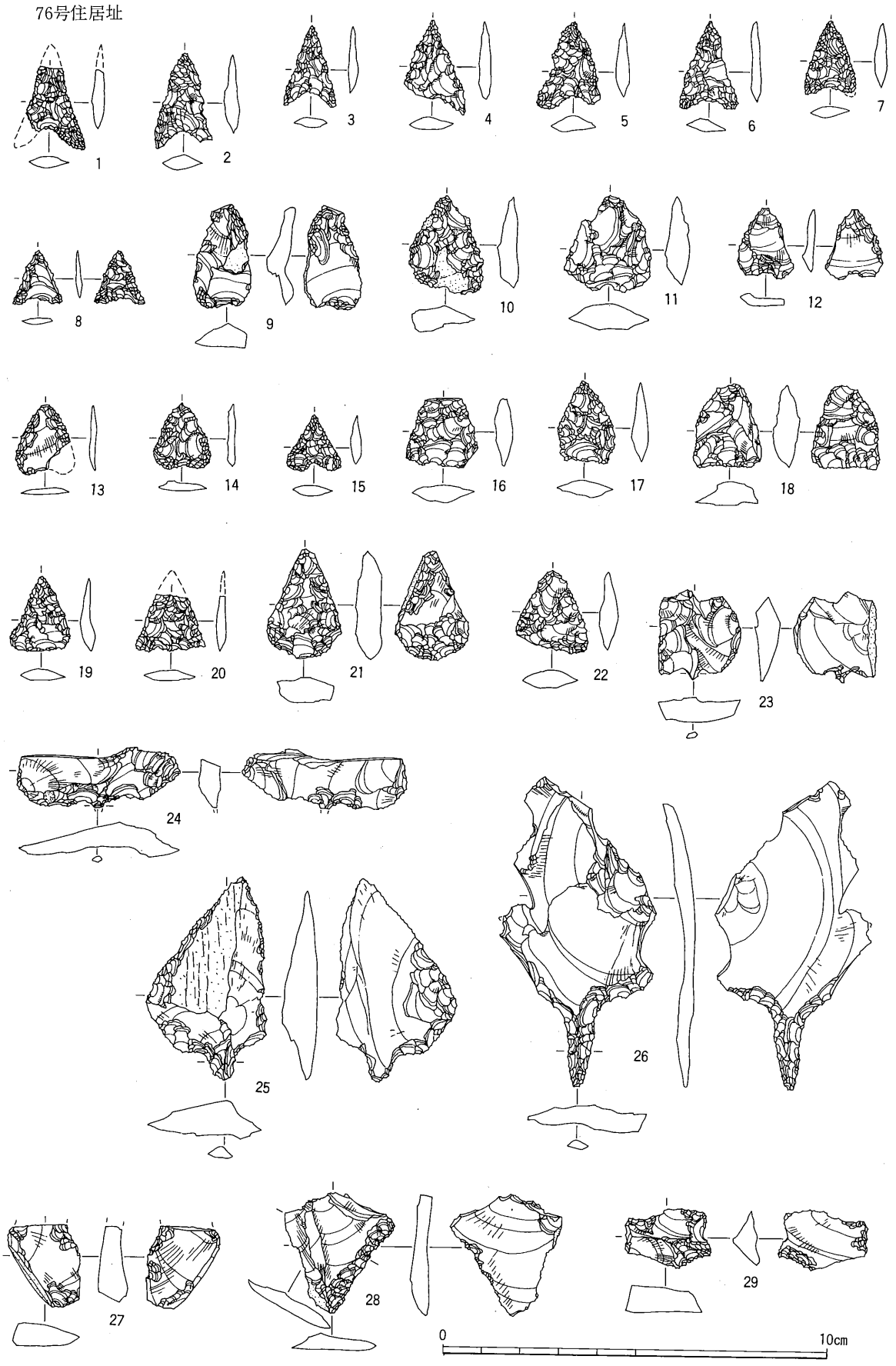


図305　76号住居址出土石器実測図

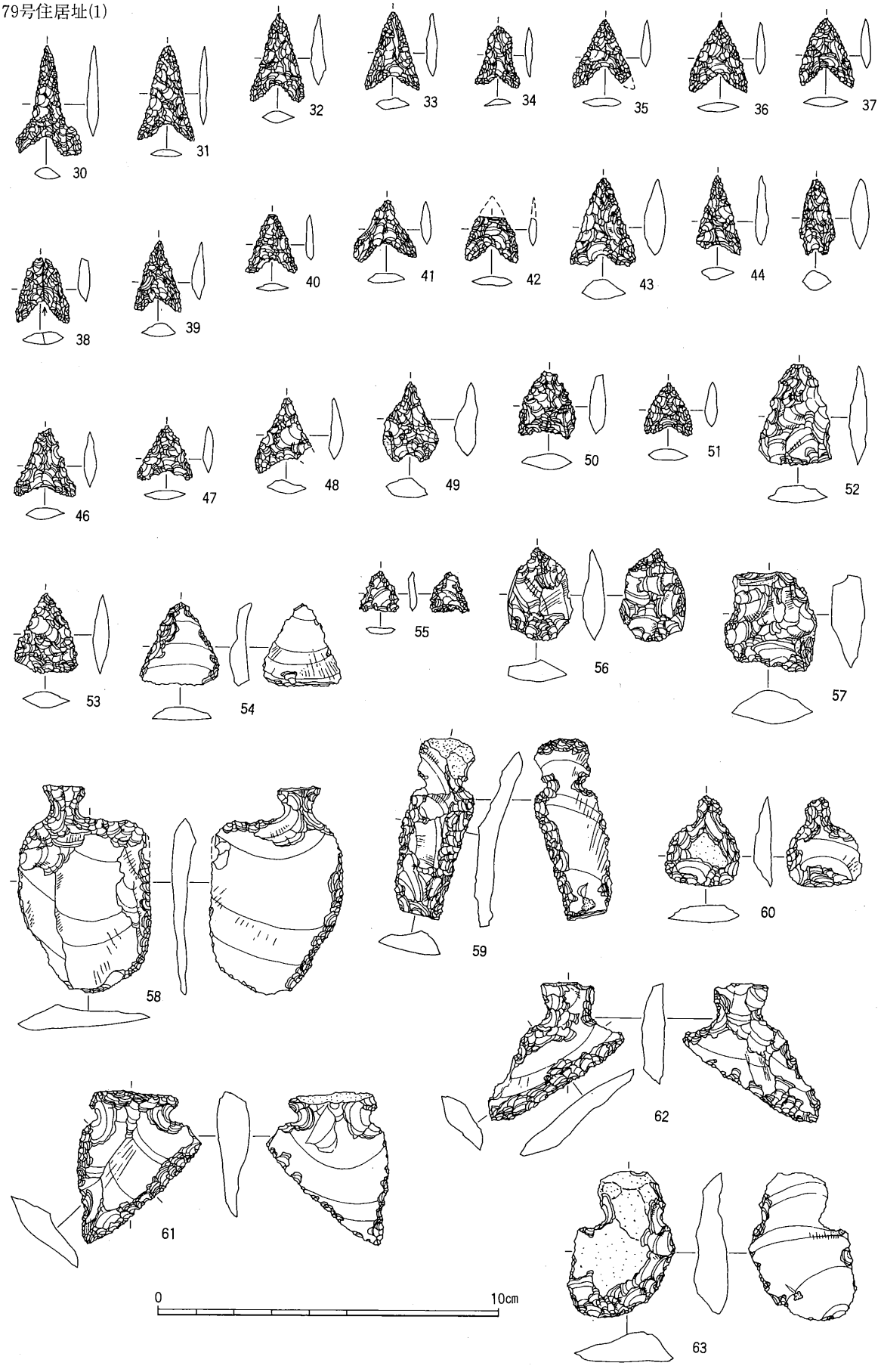


図306　79号住居址出土石器実測図

79号住居址(2)

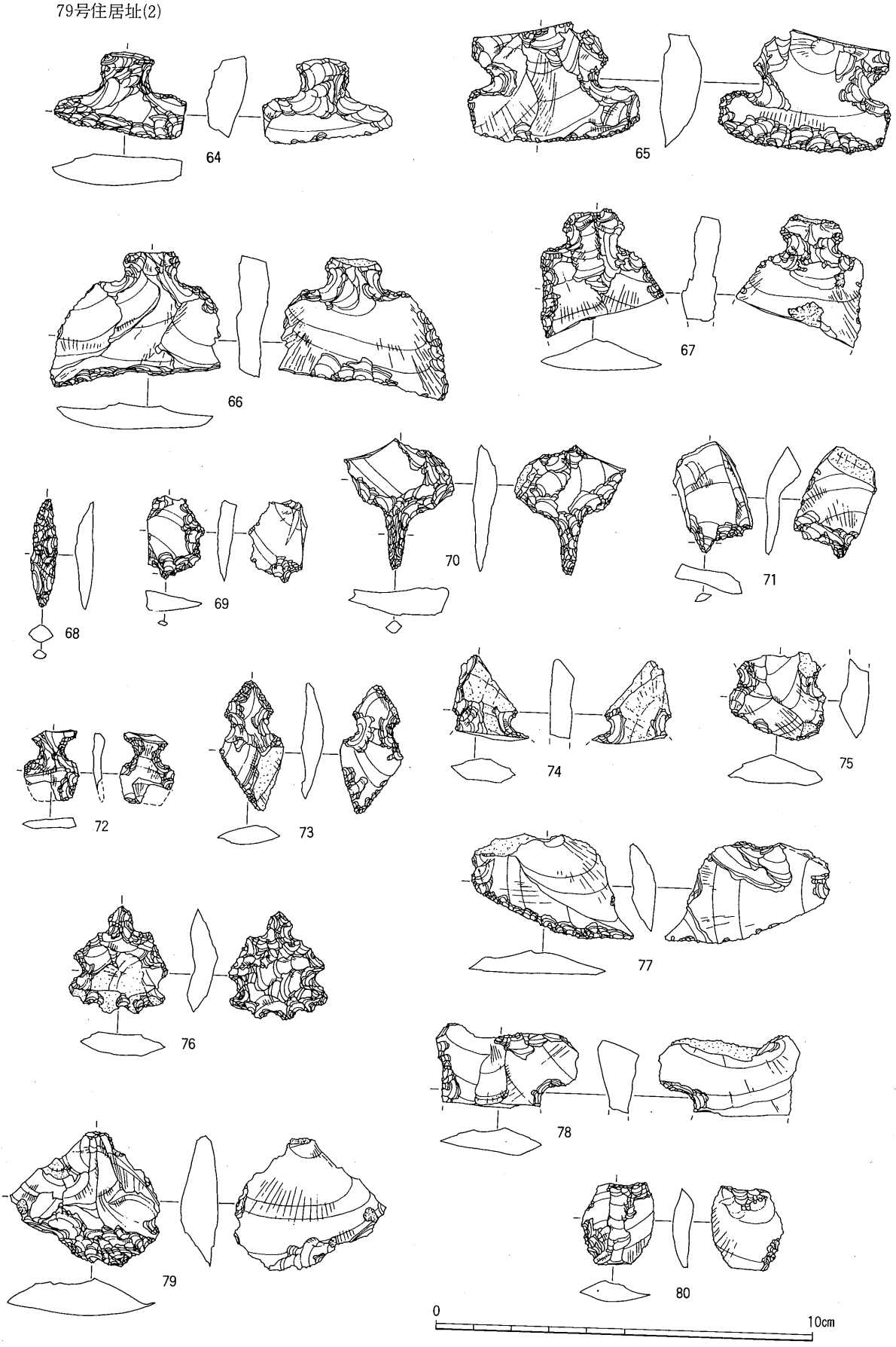


図307　79号住居址出土石器実測図

98号住居址(1)

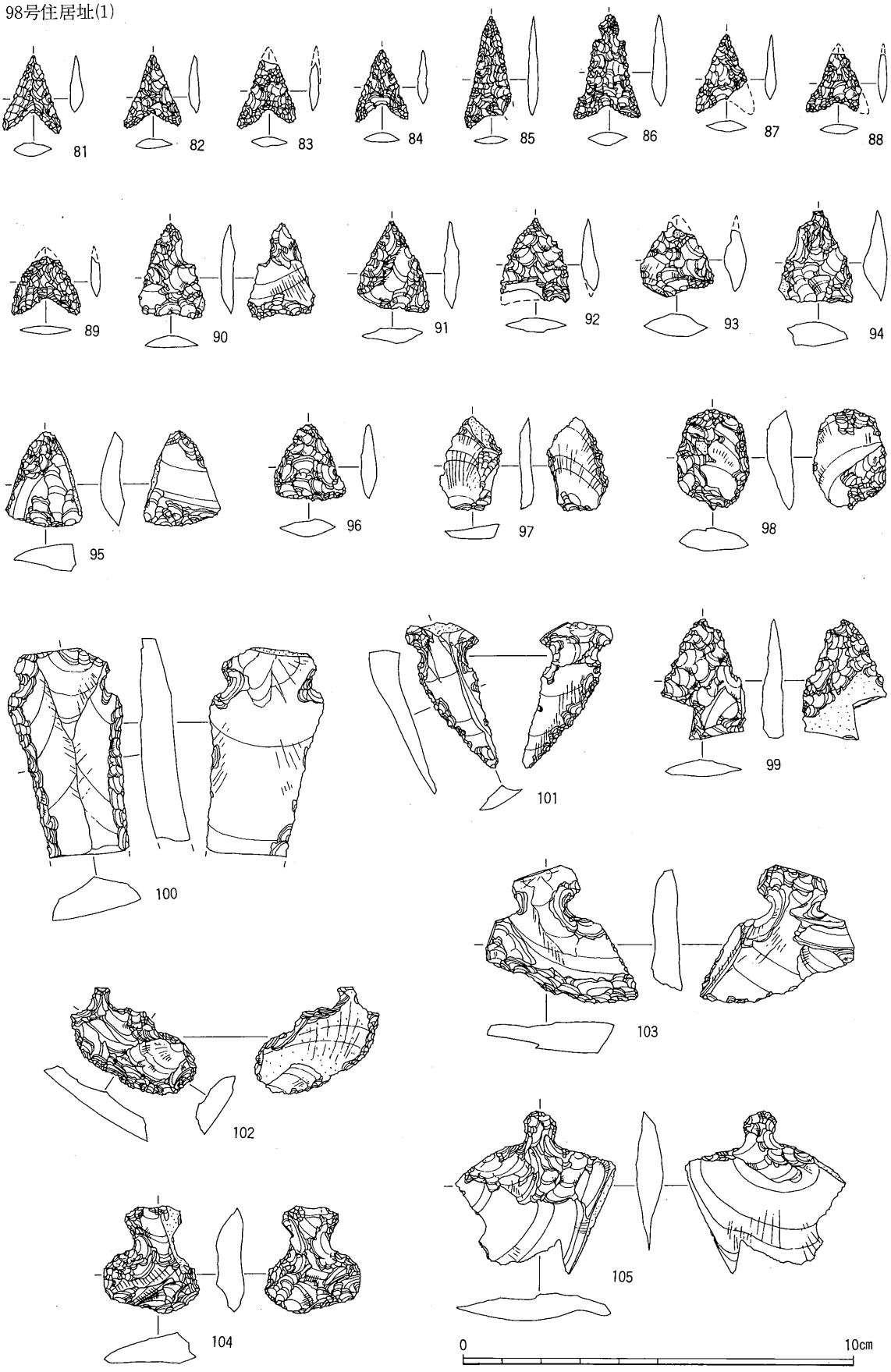


図308　98号住居址出土石器実測図

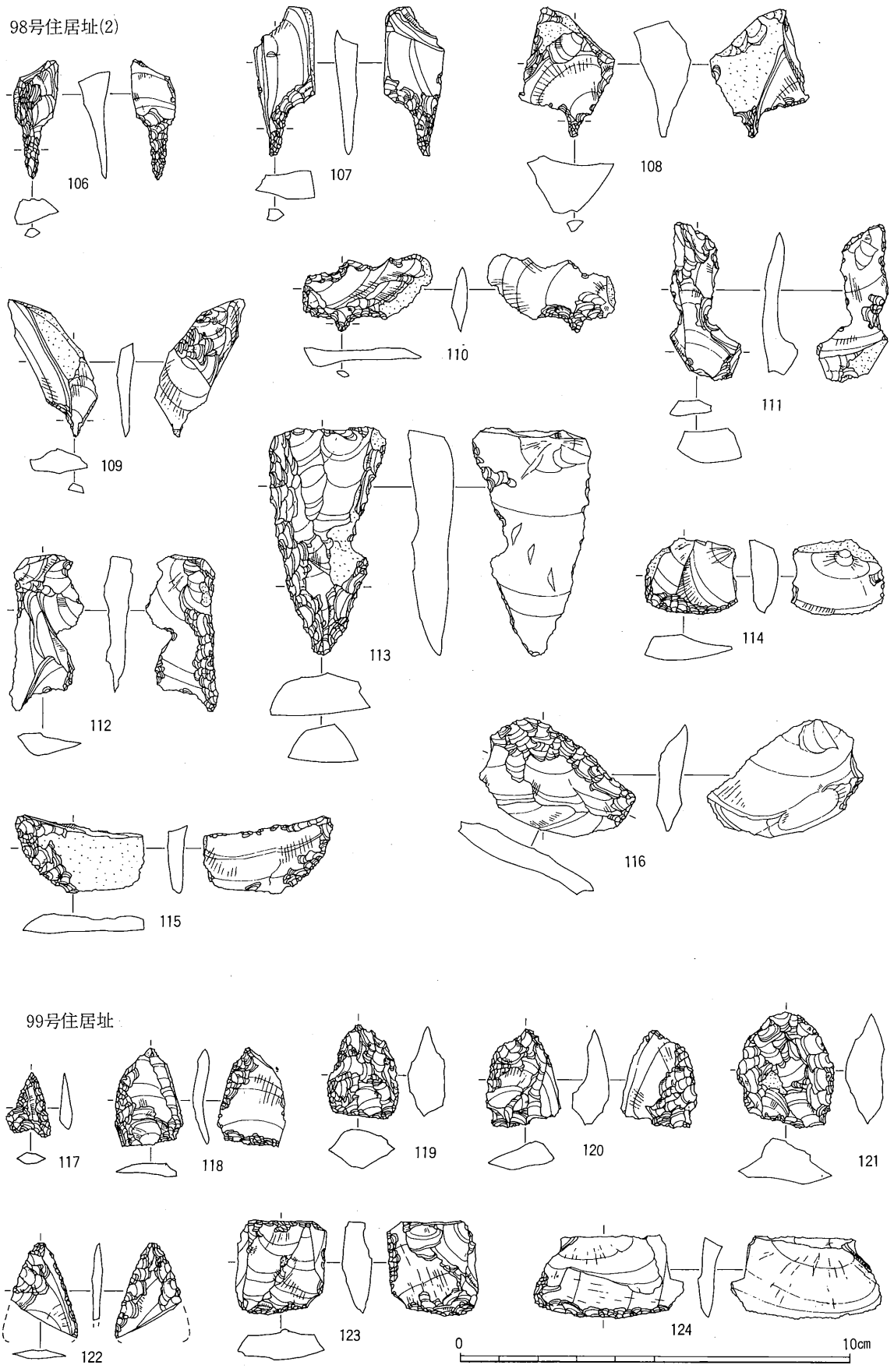


図309　98・99号住居址出土石器実測図

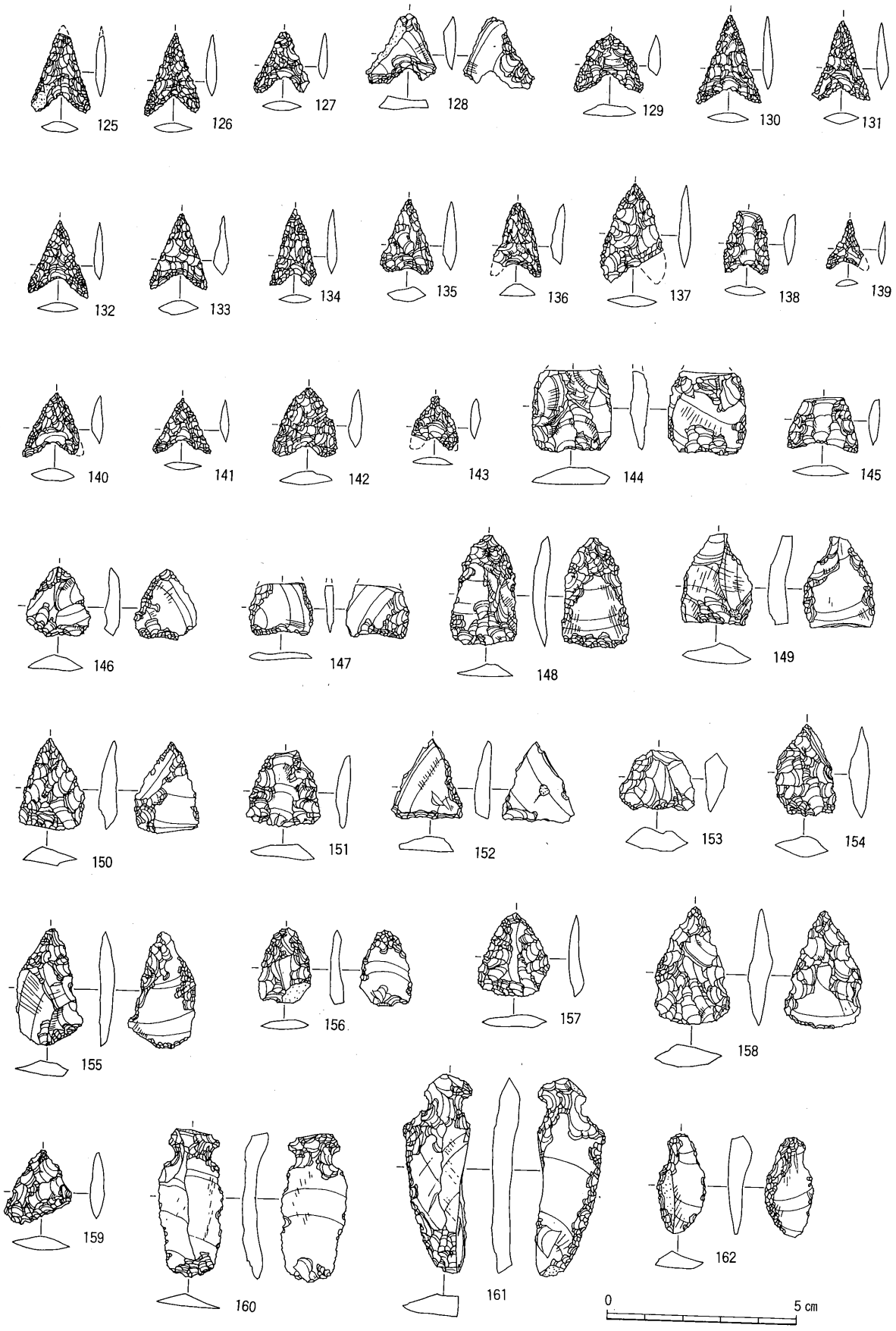


図310　100号住居址出土石器実測図

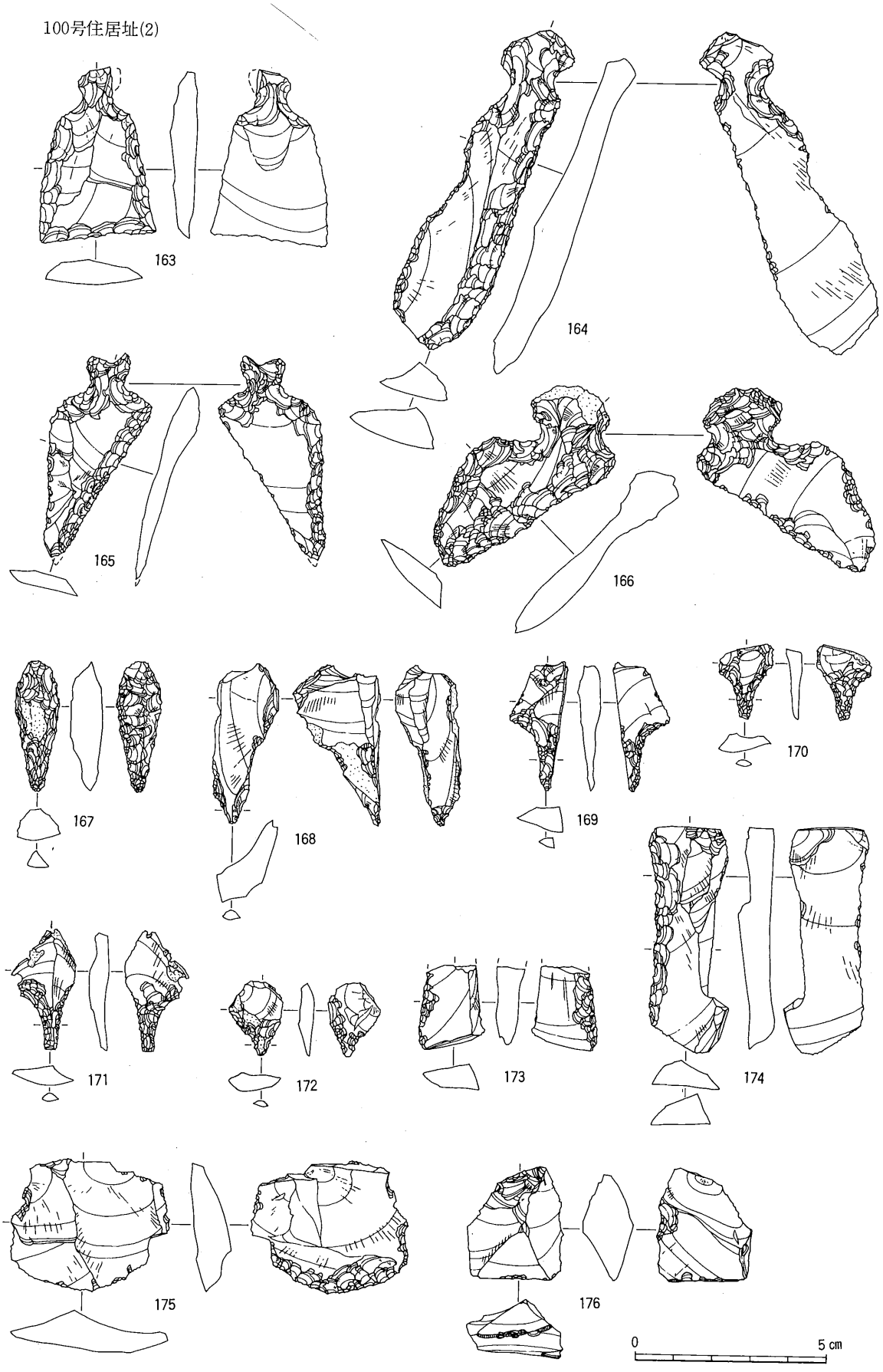


図311　100号住居址出土石器実測図

101号住居址

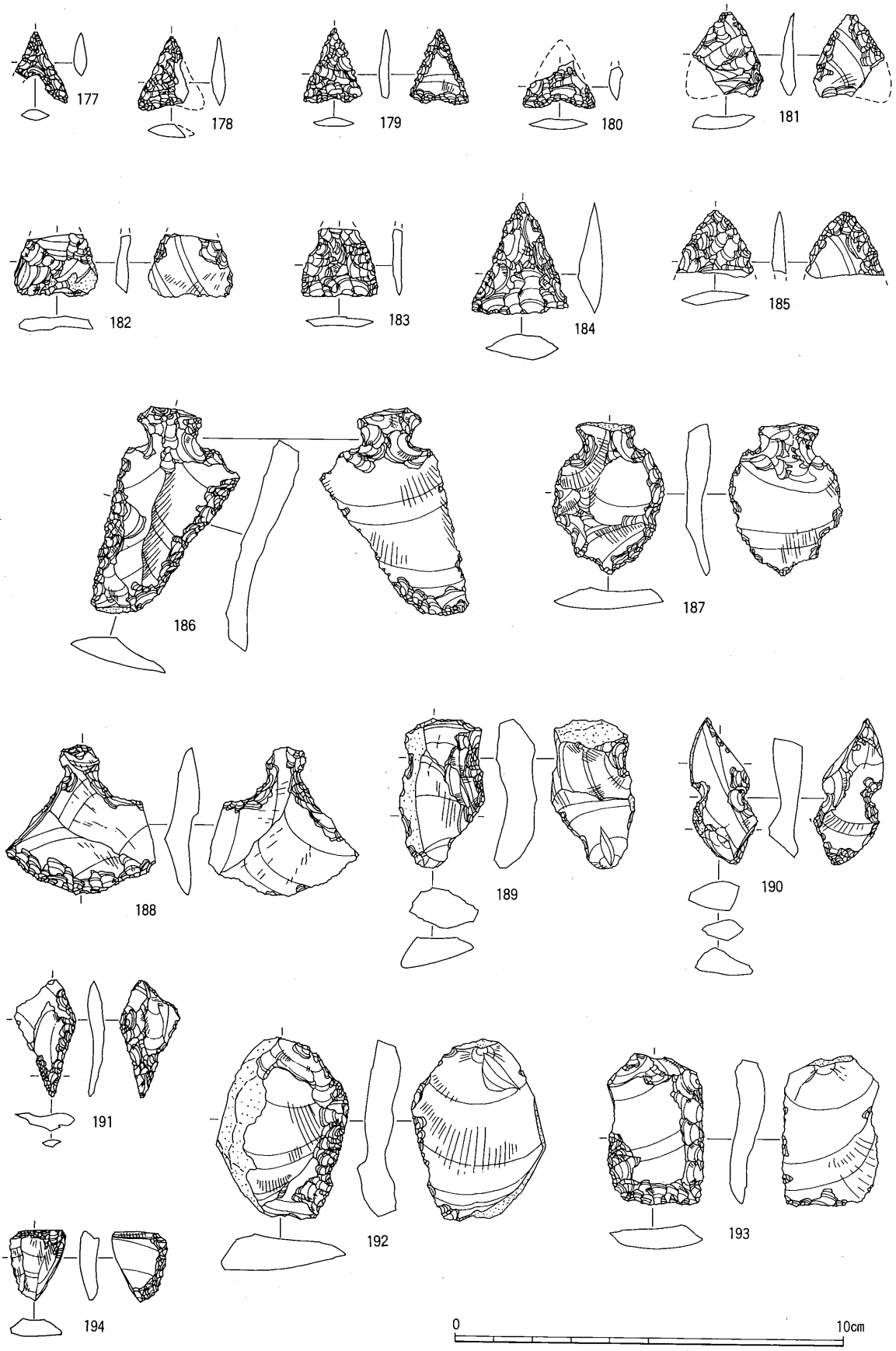


図312　101号住居址出土石器実測図

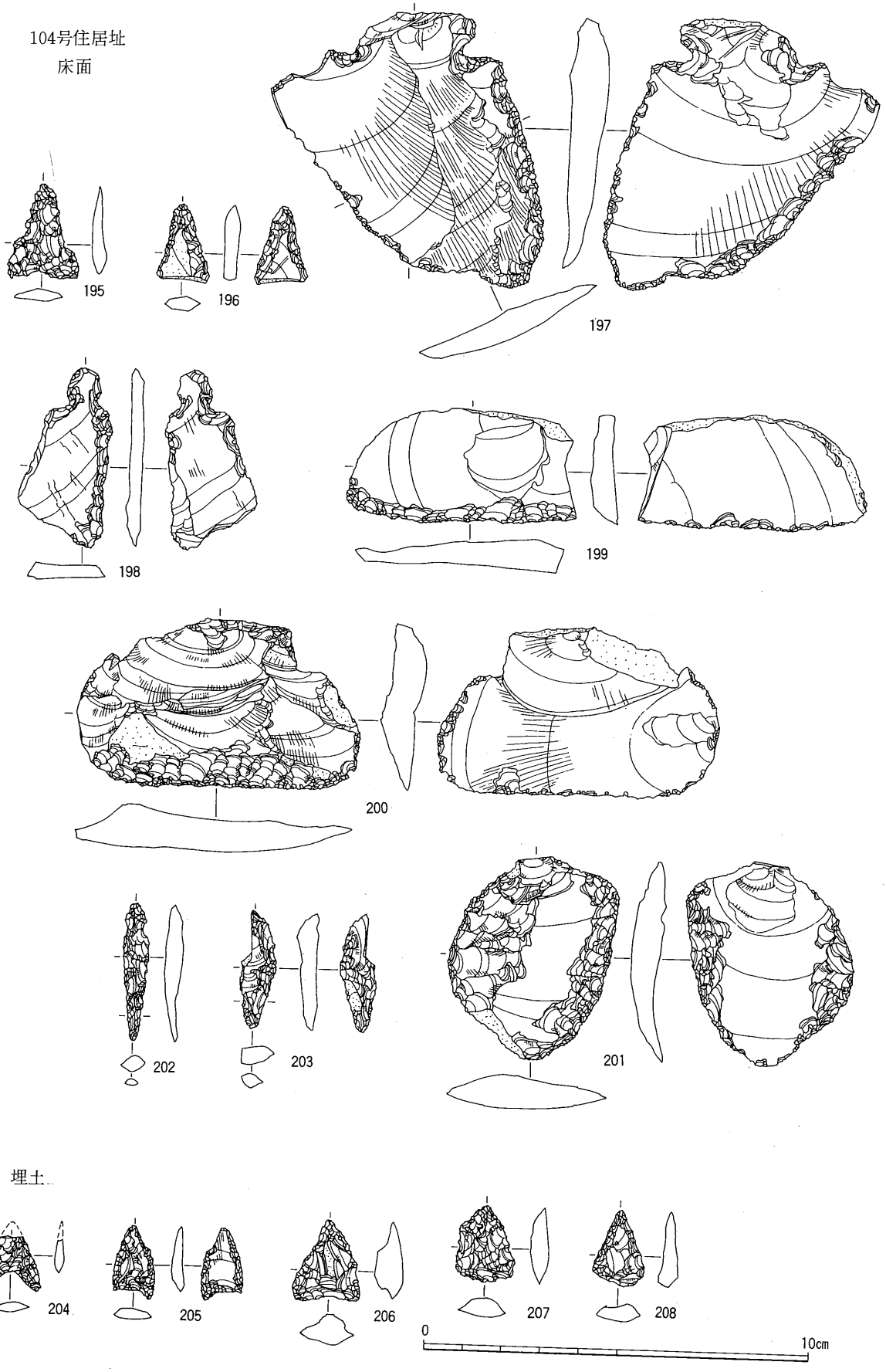


図313　104号住居址出土石器実測図

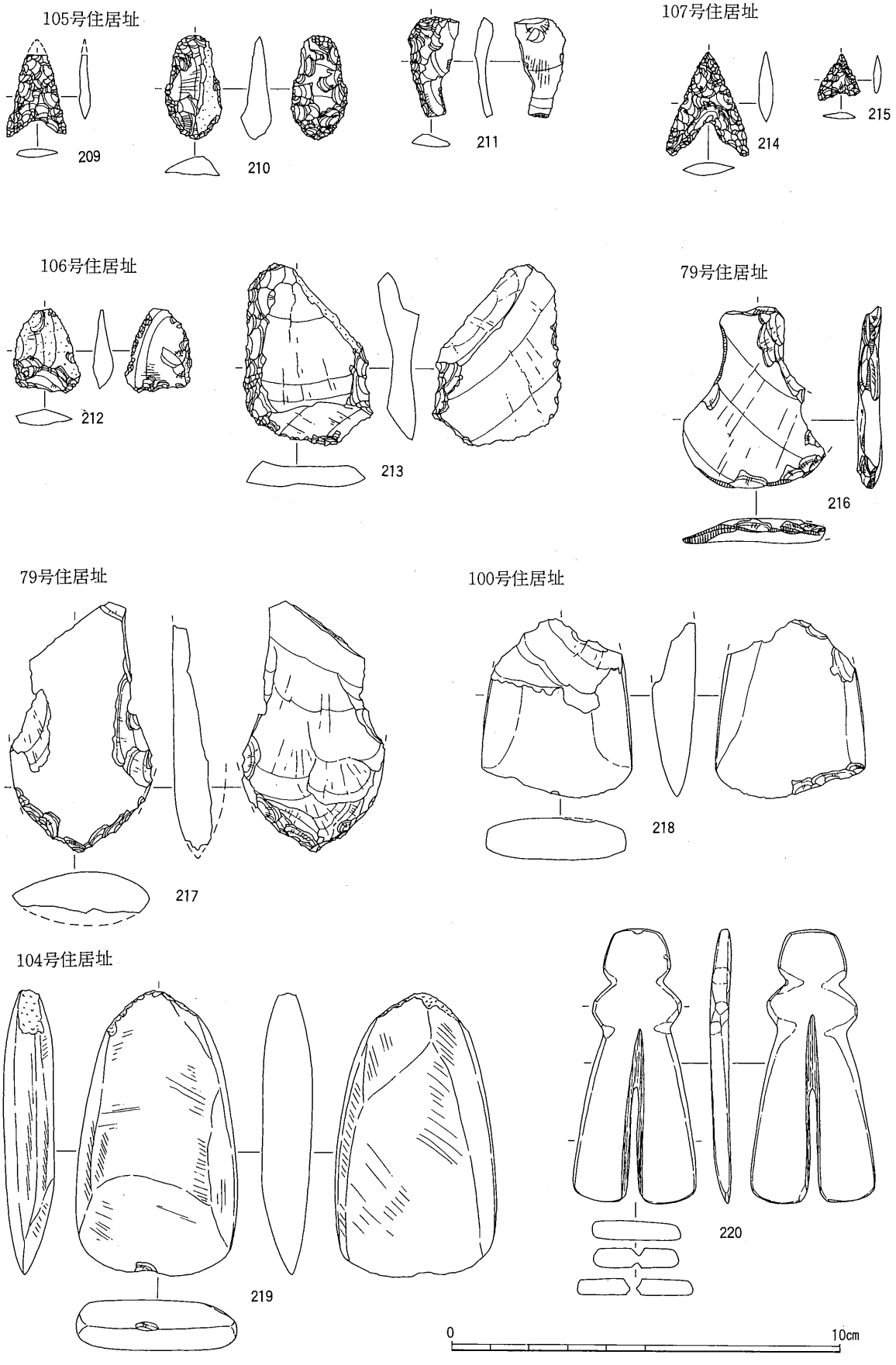
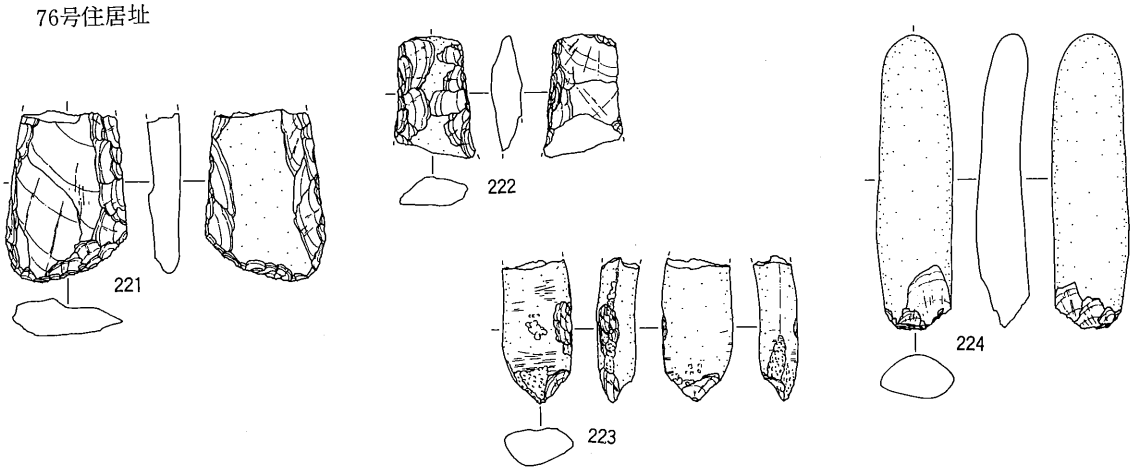


図314　79・100・104・105・106・107号住居址出土石器実測図

76号住居址



79号住居址(1)

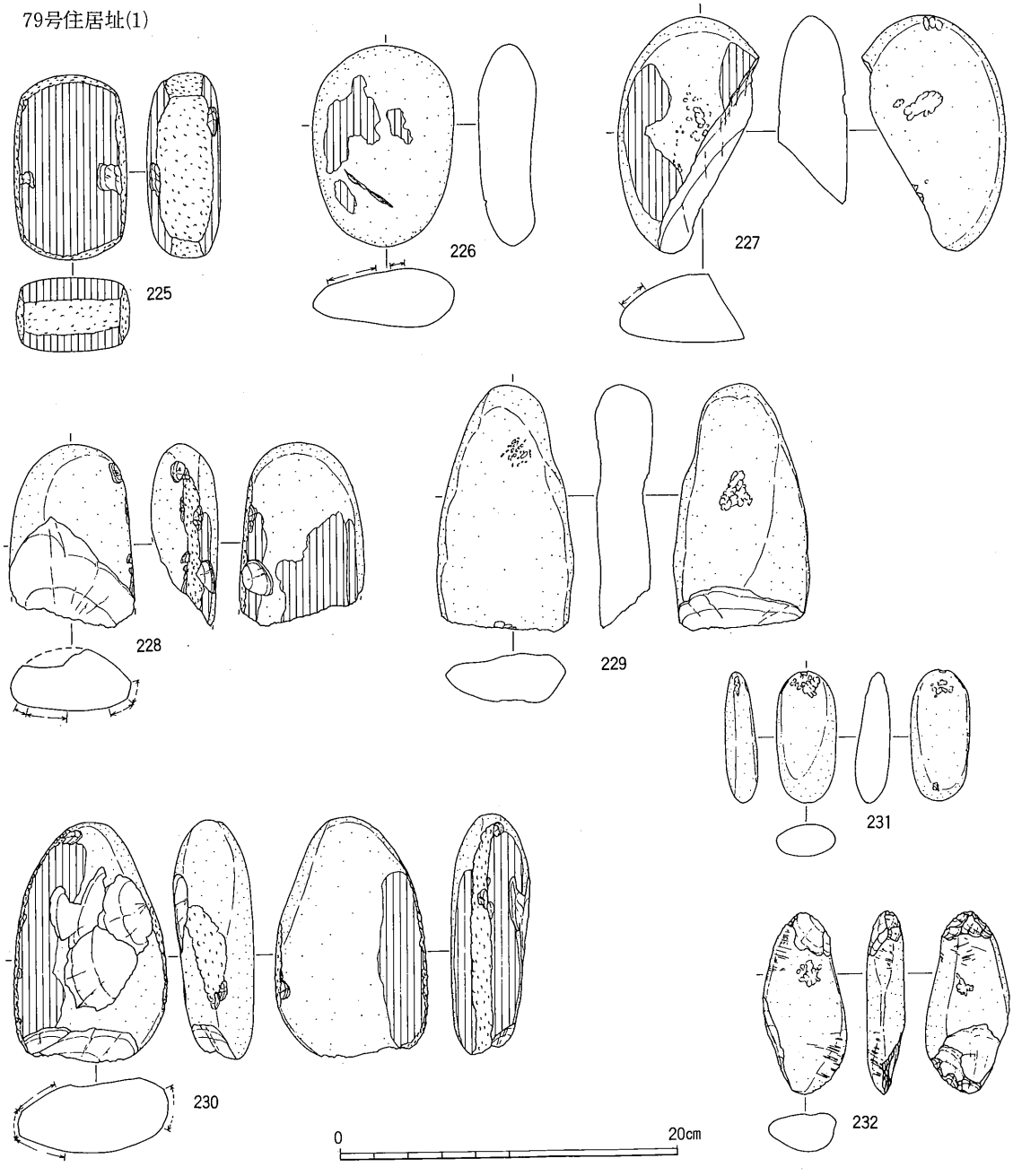


図315　76・79号住居址出土石器実測図